

金色夜叉

尾崎紅葉



目次

前編

中編

後編

続金色夜叉

続続金色夜叉

新続金色夜叉



## 前編

### 第一章

未だ宵ながら松立てる門は一樣に鎖籠めて、真直に長く東よ  
り西に横はれる大道は掃きたるやうに物の影を留めず、いと寂  
くも往来の絶えたるに、例ならず繁き車輪の輾は、或は忙かり  
し、或は飲過ぎし年賀の帰来なるべく、疎に寄する獅子太鼓の  
遠響は、はや今日に尽きぬる三箇日を惜むが如く、その哀切に  
小き腸は断れぬべし。

元日快晴、二日快晴、三日快晴と誌されたる日記を流して、こ

の黄昏たそがれより凧こがらしは戦出そよぎいでぬ。今は「風吹くな、なあ吹くな」と優  
 き声なだの宥なだむる者無なきより、憤いかりをも増いしたるやうに飾竹かざりだけを吹靡ふきなびけ  
 つつ、乾からびたる葉はを粗はしたなげに鳴なして、吼ほえては走行はしりゆき、狂くるひて  
 は引返ひきかえし、揉もみに揉もんで独ひとり散ち々に騒さわげり。微曇ほのぐもりし空そらはこれ  
 が為なに眠ねむりを覚さまされたる気色けしきにて、銀梨子地ぎんなしぢの如ごとく無な数の星ほしを顕あらは  
 して、鋭さく洩さえたる光ひかりは寒氣かんきを発はなつかと想おもはしむるまでに、そ  
 の薄明うすあかりに曝さらさるる夜よの街まちは殆ちまたど氷こおりらんとすなり。

人ひとこの裏うらちに立ちて寥々りようりよう冥々めいめいたる四望しぼうの間に、争いかでか那なの世間よこあ  
 り、社会しゃかいあり、都みやこあり、町まちあることを想得おもべき、九重きゆうちゆうの天あま、八際はつさい  
 の地ち、始めて混沌こんとんの境さかひを出いでたりといへども、万物いまま未だ尽ことごとく化生かせい  
 せず、風かぜは試こころみに吹き、星ほしは新あらたに輝かがやける一大荒原いちだくわげんの、何等いかんの旨意しやくい  
 も、秩序てつじも、趣味しゆみも無なくて、唯濫ただみだりに邈ひろく横よこたはれるに過かたぎさる哉かな。  
 日ひの中うちは宛然さながら沸わくが如ごとく楽たのしみ、謳うたひ、醉ゑひ、戯たはむれ、飲よろこび、笑わらひ、

語り、興ぜし人々よ、彼等は儂ほかなくも夏果ぼうふりてし子子の形をさを斂おさめて、  
 いまはたいづく今将何処いかに如何いかにして在るかを疑はざらんとするも難かたからずや。  
 しげうく多時静のちなりし後、遙はるかに拍子木の音は聞えぬ。その響の消ゆる頃  
 たちま忽ち一点の燈火ともしびは見え初そめしが、揺々ゆらゆらと町の尽頭はづれを横截よこぎりて失  
 せぬ。再び寒き風は寂さびしき星月夜ほしいままを擅おぼに吹くのみなりけり。唯有とあ  
 る小路の湯屋は仕舞を急ぎて、廂間ひあはひの下水口より噴出ふきいづる湯気  
 は一団の白き雲を舞立てて、心地悪ぬくもりき微温ぬくもりの四方あふに溢あふるとと  
 もに、垢臭あかくさき悪氣さかんの盛ほとほしに迸あへる綱引いとまなの車あり。勢かひで角かど  
 より曲り来にければ、避いとまなくべき違いとまな無なくてその中を駈かけぬ抜ぬけたり。

「うむ、臭い」

車の上に声して行過ぎし跡には、葉卷の吸殻の捨てたるが赤  
 く見えて煙れり。

「もう湯は抜けるのかな」

「へい、松の内は早仕舞でございます」

車夫のかく答へし後は語絶えて、車は驀直に走れり、紳士は二重外套の袖を犇と搔合せて、獺の衿皮の内に耳より深く面を埋めたり。灰色の毛皮の敷物の端を車の後に垂れて、横縞の華麗なる浮波織の蔽膝して、提灯の徽章はTの花文字を二個組合せたるなり。行き行きて車はこの小路の尽頭を北に折れ、稍広き街に出でしを、僅に走りて又西に入り、その南側の半程に箕輪と記したる軒燈を掲げて、剡竹を飾れる門構の内に挽入れたり。玄関の障子に燈影の映しながら、格子は鎖固めたるを、車夫は打叩きて、

「頼む、頼む」

奥の方なる響動の劇きに紛れて、取合はんともせざりければ、二人の車夫は声を合せて訪ひつつ、格子戸を連打にすれば、や

がて急足いそぎあしの音立ててて人は出いで来きぬ。

円鬚まるわけに結むすひたる四十ちひさばかりのや小く瘦やせて色白ちやみじんき女の、茶微塵ちやみじんの

糸織いとの小袖こそでに黒の奉書ほうしょ紬よつむぎの紋付もんづきの羽織はねおり着きたるは、この家の内儀ないぎ

なるべし。彼の忙せはしげに格子かぢを啓あるを待まちて、紳士は優然ゆうぜんと内

に入いらんとせしが、土間つちまの一面ひとへに充満みちみちたる履物はきものの杖つゑを立たつべき

地ぢさへあらざるに遅ためらへるを、彼は虚すかさず勤篤まめやかに下立おりたちて、この

敬けいふべき賓まらうどの為ために辛からくも一条いちじょうの道みちを開ひらけり。かくて紳士しんしの脱捨だつしや

てし駒下駄こまげたのみは独ひとり障子しょうじの内うちに取入とり入れられたり。

(一) の二

箕輪みのわの奥おくは十畳じゅうじやうの客間きやくまと八畳はちじやうの中なかの間まとを打うち抜ぬきて、広間ひろまの  
十個じゅうこ処ところに真鍮しんちゆうの燭台しよくだいを据すゑ、五十目掛めかけの蠟燭ろうそくは沖いさりびの漁火いさりびの如ごとく

燃えたるに、間毎の天井に白銅鍍の空気ラムプを点したれば、  
四辺は真昼より明に、人顔も眩きまでに耀き遍れり。三十人に  
余んぬる若き男女は二分に輪作りて、今を盛と歌留多遊を為る  
なりけり。蠟燭の焰と炭火の熱と多人数の熱蒸と混じたる一種  
の温気は殆ど凝りて動かざる一間の内を、苒の煙と燈火の油煙  
とは更に纏れて渦巻きつつ立迷へり。込合へる人々の面は皆赤  
うなりて、白粉の薄剥げたるあり、髪の解れたるあり、衣の乱次  
く着頰れたるあり。女は粧ひ飾りたれば、取乱したるが特に著  
るく見ゆるなり。男はシャツの腋の裂けたるも知らで胴衣ばかり  
りになれるあり、羽織を脱ぎて帯の解けたる尻を突出すもあり、  
十の指をば四まで紙にて結ひたるもあり。さしも息苦き温気も、  
咽ばさるる煙の渦も、皆狂して知らざる如く、寧ろ喜びて罵り  
喚く声、笑顔るる声、振合ひ、踏破く犇き、一斉に揚ぐる響動

など、絶間無き騒動の中に狼藉として戯れ遊ぶ為体は三綱五常も糸瓜の皮と地に塗れて、唯これ修羅道を打覆したるばかりなり。

海上風波の難に遭へる時、若干の油を取りて航路に澆げば、浪は奇くも忽ち鎮りて、船は九死を出づべしとよ。今この如何とも為べからざる乱脈の座中をば、その油の勢力をもて支配せる女王あり。猛びに猛ぶ男たちの心もその人の前には和ぎて、終に崇拜せざるはあらず。女たちは皆猜みつつも畏を懐けり。中間なる団欒の柱側に座を占めて、重げに戴ける夜会結に淡紫のりボン飾して、小豆鼠の縮緬の羽織を着たるが、人の打騒ぐを興あるやうに涼き目を瞪りて、躬は淑かに引繕へる娘あり。粧飾より相貌まで水際立ちて、凡ならず媚を含めるは、色を売るものの仮の姿したるにはあらずやと、始めて彼を見るものは皆

疑へり。一番の勝負の果てぬ間に、宮といふ名は普く知られぬ。  
 娘も数多居たり。醜きは、子守の借着したるか、茶番の姫君の  
 戸惑せるかと覚きもあれど、中には二十人並、五十人並優れたる  
 もありき。服装は宮より数等立派なるは数多あり。彼はその点  
 にては中の位に過ぎず。貴族院議員の愛娘とて、最も不器量を  
 極めて遺憾なしと見えたるが、最も綺羅を飾りて、その起肩に  
 もんおめしさんまいがさねかつ、帯は紫根の七糸に百合の折枝を鍍金  
 紋御召の三枚襲を被ぎて、最も紫根の七糸に百合の折枝を鍍金  
 の盛上にしたる、人々これが為に目も眩れ、心も消えて眉を皺  
 めぬ。この外種々色々の絢爛なる中に立交らひては、宮の装は  
 わづか纒に暁の星の光を保つに過ぎざれども、彼の色の白さは如何な  
 る美き染色をも奪ひて、彼の整へる面は如何なる麗き織物より  
 も文章ありて、醜き人たちは如何に着飾らんとその醜きを蔽  
 ふ能はざるが如く、彼は如何に飾らざるもその美きを害せざる

なり。

ふくらだな

袋棚と障子との片隅かたすみに手炉てあぶりを囲みて、蜜柑みかんを剥むきつつ語かたふ男

ひとり

の一個は、彼の横顔ほれぼれを恍惚はるかと遙はるかに見入みりたりしが、遂つひに思堪おもひたへ

ざらんやうに呻うめき出いだせり。

「好いい、好いい、全く好いい！ 馬士まじにも衣裳いしやうと謂いふけれど、美うつくしい

のは衣裳いしやうには及まばんね。物ものそれ自みづからが美うつくしいのだもの、着物きものなど

はどうでも可いい、実まことは何なにも着きてををらんでも可いい」

「裸体なはなら猶なほ結構けいこうだ！」

あひづちこの強あつき合あ槌づち撃うつは、美術びやう学校がくの学がく生せいなり。

つなひき綱つな曳ひにて駈かけ着つけし紳士しんしは姑しばらく休やす息みの後のち内儀うちぎに導いりかかれて入い来きたり

つ。その後のちには、今いままで居ゐ間まに潜ひそみたりし主あるじの箕輪みのわり亮やう輔すけも附つ添そ

ひたり。席上せきじやうは入い乱らんれて、ここを先途せんどと激はげき勝負しやうぶの最中さいちゆうなれば、

彼等かれらの来きたれるに心着こころきしは稀まれなりけれど、片隅かたすみに物語ものがたりれる二人

は逸早く目を側めて紳士の風采を視たり。

広間の燈影は入口に立てる三人の姿を鮮かに照せり。色白の  
 小き内儀の口は疳の為に引歪みて、その夫の額際より緒禿げたる  
 つむりなめらかに光れり。妻は尋常より小きに、夫は勝れたる大兵  
 頭顱は滑かに光れり。妻は尋常より小きに、夫は勝れたる大兵  
 肥満にて、彼の常に心遣ありげの面色なるに引替へて、生きな  
 がら布袋を見る如き福相したり。

紳士は年齒二十六七なるべく、長高く、好き程に肥えて、色

は玉のやうなるに頬の辺には薄紅を帯びて、額厚く、口大きく、  
 腮は左右に蔓りて、面積の広き顔は稍正方形を成せり。緩く波  
 打てる髪を左の小鬢より一文字に撫付けて、少しは油を塗りた  
 り。濃からぬ口髭を生して、小からぬ鼻に金縁の目鏡を挟み、  
 五紋の黒塩瀬の羽織に華紋織の小袖を裾長に着做したるが、六  
 寸の七糸帯に金鏈子を垂れつつ、大様に面を挙げて座中を詢し

たる容は、実に光を発つらんやうに四辺を払ひて見えぬ。この  
 団欒の中に彼の如く色白く、身奇麗に、しかも美々しく装ひた  
 るはあらざるなり。

「何だ、あれは？」

例の二人の一個はさも憎さげに呟けり。

「可厭な奴！」

唾吐くやうに言ひて学生はわざと面を背けつ。

「お俊や、一寸」と内儀は群集の中よりその娘を手招きぬ。

お俊は両親の紳士を伴へるを見るより、慌忙く起ちて来れる  
 が、顔好くはあらねど愛嬌深く、いと善く父に肖たり。高島田  
 に結ひて、肉色縮緬の羽織に撮みたるほどの肩揚したり。顔を  
 赧めつつ紳士の前に跪きて、慇懃に頭を低れば、彼は纔に小腰  
 を屈めしのみ。

「どうぞ此方へ」

娘は案内せんと待構へけれど、紳士はさして好ましからぬやうに頷けり。母は歪める口を怪しげに動して、

「あの、見事な、まあ、御年玉を御戴きだよ」

お俊は再び頭を低げぬ。紳士は笑を含みて目礼せり。

「さあ、まあ、いらつしやいまし」

主の勧むる傍より、妻はお俊を促して、お俊は紳士を案内し

て、客間の床柱の前なる火鉢在る方に伴れぬ。妻は其処まで介添

に附きたり。二人は家内の紳士を遇ふことの極めて鄭重なるを

訝りて、彼の行くより坐るまで一挙一動も見脱さざりけり。そ

の行く時彼の姿はあたかも左の半面を見せて、団欒の間を過ぎ

たりしが、無名指に輝ける物の凡ならず強き光は燈火に照添ひ

て、殆ど正く見る能はざるまでに眼を射られたるに呆れ惑へり。

天上の最も明なる星は我手に在りと言はまほしげに、紳士は彼等の未だ曾て見ざりし大さの金剛石を飾れる黄金の指環を穿めたるなり。

お俊は骨牌の席に復ると乍く、密に隣の娘の膝を衝きて口早に呶きぬ。彼は忙々顔を擡げて紳士の方を見たりしが、その人よりはその指に耀く物の異常なるに駭かされたる体にて、

「まあ、あの指環は！ 一寸、金剛石？」

「さうよ」

「大きいのねえ」

「三百円だつて」

お俊の説明を聞きて彼は漫に身毛の弥立つを覚えつつ、

「まあ！ 好いのねえ」

鱧の目ほどの真珠を附けたる指環をだに、この幾歳か念懸く

れども未だ容易に許されざる娘の胸は、忽ち或事を思ひ浮べて  
 攻鼓せめつづみの如く轟とどろけり。彼は惘然ぼうぜんとして殆ど我を失へる間に、電光  
 の如く隣より伸来のびきたれる猿臂えんびは鼻の前なきなる一枚の骨牌かるたを引攫ひきさらへば、  
 「あら、貴女あなたどうしたのよ」

お俊は苛立いらだちて彼の横膝よこひざを続けさまに拊はたきぬ。

「可よくつてよ、可よくつてよ、以来これからもう可よくつてよ」

彼は始めて空想の夢を覚さめて、及まびざる身みの分ぶんを諦あきらめたりけ  
 れども、一旦ダイアモンド金剛石の強き光に焼かれたる心は幾分の知覚を失  
 ひけんやうにて、さしも目覚めざましかりける手腕てなみの程も見る見る漸やうやく  
 四途乱しどろになりて、彼は敢無あへなくもこの時よりお俊の為に頼たみ難がたき  
 味方となれり。

かくしてかれよりこれに伝へ、甲より乙に通じて、

「金剛石！」

「うむ、金剛石だ」

「金剛石??」

「成程金剛石!」

「まあ、金剛石よ」

「あれが金剛石?」

「見給へ、金剛石」

「あら、まあ金剛石??」

「すばらし可感い金剛石」

「おそろし可恐い光るのね、金剛石」

「三百円の金剛石」

「またた瞬ひまく間に三十余人は相呼び相応じて紳士の富を謳うたへり。

彼は人々の更互かたみがほりにおのれの方かたを眺ながむるを見て、その手に形好

く葉卷シガアを持たせて、右手めを袖口そでぐちに差入れ、少し懈たゆげに床柱もたに靠

れて、目鏡の下より下界を見遍みわたすらんやうに目配めくばりしてゐたり。

かかる目印ある人の名は誰たれしも問はであるべきにあらず、洩もれしはお俊の口よりなるべし。彼は富山唯繼とみやまただつぐとて、一代分限ぶげんながら下谷区したやに聞ゆる資産家の家督なり。同じ区なる富山銀行はその父の私設する所にして、市会議員うちの中にも富山重平じゅうへいの名は見出みいださるべし。

宮の名の男かたの方に持囃もてはやさるる如く、富山と知れたる彼の名は直ただちに女の口々に誦ずんぜられぬ。あはれ一度ひとたびはこの紳士と組み、世めでに愛めたき宝石に咫尺しせきするの榮を得ばや、と彼等の心こころ々に冀ねがはざるは希まれなりき。人若もし彼に咫尺しせきするの榮を得ば、啻ただにその目の類たぐひな無く樂たのしまさるるのみならず、その鼻までも堇花ヴァイオレットの多く齟かぐべからざる異香いきように薰くんぜらるるの幸さいはひを受くべきなり。

男たちは自おのづから荒すさめられて、女の挙こそりて金剛石ダイヤモンドに心牽こころひかさるる

気色なるを、或は妬く、或は浅ましく、多少の興を冷さざるはあらざりけり。独り宮のみは騒げる体も無くて、その清き眼色はさしもの金剛石と光を争はんやうに、用意深く、心様も幽く振舞へるを、崇拜者は益々懼びて、我等の慕ひ参らする効はあるよ、偏にこの君を奉じて孤忠を全うし、美と富との勝負を唯一戦に決して、紳士の憎き面の皮を引剥かん、と手薬煉引いて待ちかけたり。されば宮と富山との勢はあたかも日月を並懸けたるやうなり。宮は誰と組み、富山は誰と組むらんとは、人々の最も懸念するところなりけるが、鬪の結果は驚くべき予想外にて、目指されし紳士と美人とは他の三人とともに一組になりぬ。始め二つに輪作りし人数はこの時合併して一の大なる団欒に成されたるなり。しかも富山と宮とは隣合に坐りければ、夜と昼との一時に来にけんやうに皆狼狽騒ぎて、忽ちその隣に自ら社

会党と称とふる一組を出いだせり。彼等の主義は不平にして、その目的は破壊なり。則すなはち彼等は専もつぱら腕力を用ゐて或組の果報と安寧あんねいとを妨害せんと為るなり。又その前むかひ面には一人の女に内を守らしめて、屈強の男四人左右に遠征軍を組織し、左翼を狼藉組ろうぜきぐみと称し、右翼を蹂躪隊じゆうりんたいと称するも、実は金剛石の鼻柱を挫くじかんと大童おほわらはになれるに外ほかならざるなり。果せる哉かな、件の組はこの勝負はなしろに蓬きたなき大敗を取りて、人も無げなる紳士もさすがに鼻白み、美かきは顔あかを赧あかめて、座にも堪たふべからざるばかりの面皮めんびを欠かされたり。この一番にて紳士の姿は不知見いつかえずなりぬ。男たちは万歳を唱へけれども、女の中には掌たなぞこの玉を失へる心地こころちしたるも多かりき。散々に破壊され、狼藉おそれされ、蹂躪おそれされし富山は、余りにこの文明的ならざる遊戯おそれに怖おそれをなして、密ひそかに主あるじの居間に逃に帰れるなりけり。

かつら  
鬘まげを被きたるやうに梳くしけたりし彼の髪は棕櫚しゆろぼう箒うきの如く乱れて、  
かん 環かたかたの隻も挽ひもげたる羽織の紐は、手長猿てながざるの月とらを捉とらへんとする状かたちし  
て揺曳ぶらぶらと垂さがれり。主は見るよりさも慌あわてたる顔して、

「どう遊あそばしました。おお、お手から血が出てをります」

彼はやにはに煙管きせるを捨てて、忽ゆるがせにすべからざらんやうに急遽とつかは  
と身を起たせり。

「ああ、酷ひどい目に遭あつた。どうもああ乱暴らんぼうぢや為な様が無い。火  
事装束さうそくでも出掛でけなくつちやとても立切たちきれないよ。馬鹿ばかにし  
てゐる！ 頭あたまを二つばかり撲ぶれた」

手の甲うでの血ちを吮すひつつ富山おももちは不快ふくまいなる面色まうけして設まうけの席まくらに着き  
きぬ。予かねて用意よういしたれば、海老茶えびちやの紋縮緬もんぢりめんの裊しとねの傍かたはらに七宝焼しちほうやきの  
小判形こばんがたの大手炉おほてあぶりを置おきて、蒔絵まきゑの吸物膳すひものぜんをさへ据たゑたるなり。  
主は手を打鳴うして婢をんなを呼よび、大急おほいそぎに銚子あつらと料理あつらとを誂あつらへて、

「それはどうも飛でもない事を。外ほかに何処どこもお怪我けがはございませんでしたか」

「そんなに有られて耐たまるものかね」

為せう事無なきに主ぬしも苦笑にがわらひせり。

「ただいまばんそうこう

唯今ただいま絆創膏ばんそうこうを差上げます。何しろ皆書生でございますから随

分乱暴でございませう。故々わざわざ御招申ごまねきしまして甚はなはだ恐入りました。

もう彼地あつちへは御出陣ごしゆじんにならんが宜よろうございます。何もございま

せんがここで何卒どうぞ御寛ごゆるり」

「ところがもう一遍行つて見やうかとも思ふの」

「へえ、又いらつしやいますか」

物は言ことはで打笑うちゑめる富山の腮あぎしは愈いよいよ展ひろれり。早くもその意を

得えてや破顔はがんせる主あるじの目は、薄すすきの切疵きりきずの如くほとほと有か無きか

になりぬ。

「では御意ぎよゐに召したのが、へえ？」

富山は益ますまするみ笑ただを湛ただへたり。

「ございましたらう、さうでございませうとも」

「何故なげな」

「何故も無いものでございます。十目じゅうもくの見るところぢやござい

ませんか」

富山は頷うなづきつつ、

「さうだらうね」

「あれは宜よろしうございませう」

「一寸ちよいと好いね」

「まづその御意おつもりでお熱いところをお一盞ひとつ。不むづかしや満家の貴方あなたが一寸

好いと有仰おつしやる位では、余程よつほどまれもの尤物と思はなければなりません。全

く寡すくなうございます」

倉皇あたふた入来いりきたれる内儀うちぎは思おもひも懸かけず富山とみやまを見て、

「おや、此方こちらにお在いであそばしたのでございますか」

彼は先の程ほどより台所だいしよに詰つめきりて、中入なかいりの食物しょくじの指図さしづなどして  
みたるなりき。

「酷ひどく負ひけて逃にげて来きました」

「それは好よく逃にげていらつしやいました」

例れいの歪ゆがめる口くちを窄すぼめて内儀うちぎは空々そらぞらしく笑わらひしが、忽たちまち彼の羽う

織ひもの紐ひもの偏断かたかたちぎれたるを見み尤とがめて、環かんの失うせたりと知るより、

慌あわて驚おどきて起おこしたんとせり、如何いかになればその環かんは純金じゆんきん製せいのものなればなり。富山とみやまは事ことも無なげに、

「なあに、宜よろしい」

「宜よろいではございませぬ。純金じゆんきんでは大變たいへんでございます」

「なあに、可いいと言いふのに」と聞ききも訖をはらで彼は広間ひろまの方かたへ出い

でて行けり。

「時にあれの身分はどうかね」

「さやう、悪い事はございませんが……」

「が、どうしたのさ」

「が、大した事はございません」

「それはさうだらう。然し凡そどんなものかね」

「旧は農商務省に勤めてをりましたが、唯今では地所や家作な

どで暮してゐるやうでございます。どうか小金も有るやうな話

で、鳴沢隆三と申して、直隣町に居りますが、極手堅く小体

に遣つてをるのでございます」

「はあ、知れたもんだね」

我は顔に頤を搔撫づれば、例の金剛石は燦然と光れり。

「それでも可いさ。然し嫁れやうか、嗣子ぢやないかい」

「さやう、一人娘のやうに思ひましたが」

「それぢや窮るぢやないか」

「わたくしは私わたしは悉い事は存じませんから、一つ聞いて見ませうで」

程無く内儀は環を搜得さがしえて帰来かへりきにけるが、誰たが悪戯いたづらとも知らで  
耳搔みみかきの如く引展ひきのばされたり。主は彼に向ひて宮の家内かないの様子を訊たづ  
ねけるに、知れる一遍ひととほりは語りけれど、娘は猶能なほよく知るらんを、後のち  
に招きて聴くべしとて、夫婦は頻しきりに觴さかづきを侑すすめけり。

富山唯繼きたの今宵きたここに来りしは、年賀かるとあそびにあらず、骨牌遊かるとあそびにあら  
ず、娘あつまの多く聚あつまれるを機よめえらみとして、嫁選よめえらみせんとしてなり。彼は一昨年をととし  
の冬英吉利イギリスより帰朝するや否や、八方てわけに手分てわけして嫁を求めけれ  
ども、器量望のぞみの太甚はなはだしければ、二十余件かなの縁談皆意かなに称なはで、  
今日あけが日までもなほその事に齷齪あくさくして已やまざるなり。当時取急とく  
ぎて普請しばせし芝しばの新宅しばは、未だ人いまの住着いまかざるに、はや日に黒くろ

み、或所は雨に朽ちて、薄暗き一間に留守居の老夫婦の額を鳩めては、寂しげに彼等の昔を語るのみ。

## 第二章

骨牌かるたの会は十二時に迫およびて終りぬ。十時頃より一人起ち、二人起ちて、見る間に人数にんずの三分の一強を失ひけれども、猶飽かなほで残れるものは景気好く勝負を続けたり。富山の姿を隠したりと知らざる者は、彼敗走もとして帰りしならんと想へり。宮は会の終まで居たり。彼若疾もしとく還りたらんには、恐おそく踏留るは三分の一弱に過ぎざりけんを、と我物顔よかけに富山は主と語合へり。彼に心を寄せし輩やからは皆彼が夜深よふけの帰途かへりの程を氣遣きづかひて、我願ねがはくは何処いづくまでも送らんと、絶したたか念おもひに念ひけれど、彼等の深切しんせつ

は無用にも、宮の帰る時一人の男附添ひたり。その人は高等中学の制服を着たる二十四五の学生なり。金剛石ダイヤモンドに亜ついでは彼の挙動の目指れしは、座中に宮と懇意に見えたるは彼一人なりければなり。この一事の外は人目を牽ひくべき点も無く、彼は多く語らず、又は躁さわがず、始終慎つつましくしてゐたり。終までこの両個ふたりの同伴つれなりとは露顯せざりき。さあらんには余所々々よそよそしさに過ぎたればなり。彼等の打連れて門かどを出いづるを見て、始めて失望せしもの寡すくなからず。

宮は鳩羽鼠はとばねずみの頭巾ずきんを被かぶりて、濃浅黄地こいあさぎぢに白ちゆうがたく中形模様ある毛織まのシオールを絡まとひ、学生は焦茶の外套オバコオトを着たるが、身を窄すぼめて吹来こがらしる風を遣過やりすこしつつ、遅れし宮の辿着たどりつくを待ちて言出せり。「宮みいさん、あの金剛石ダイヤモンドの指環ダイアモンドを穿はめてゐた奴はどうだい、可厭いやに気取つた奴ぢやないか」

「さうねえ、だけれど衆みんながあの人を目の敵かたきにして乱暴するので  
気の毒だつたわ。隣合つてゐたもんだから私まで酷ひどい目に遭あはさ  
れてよ」

「うむ、彼奴あいつが高慢な顔をしてゐるからさ。実は僕も横腹よこつばらを二  
つばかり突いて遣つた」

「まあ、酷ひどいのね」

「ああ云ふ奴は男の目から見ると反吐へどが出るやうだけれど、女  
にはどうだらうね、あんなのが女の気に入るのぢやないか」

「私は可厭いやだわ」

「芬々ふんふんと香水の匂におひがして、金剛石ダイヤモンドの金の指環を穿めて、殿様然  
たる服装なりをして、好いいいに違無ちがひないさ」

学生は嘲あざむが如く笑へり。

「私は可厭いやよ」

「可厭なものが組になるものか」

「組は鬪くじだから為方しかたが無いわ」

「鬪くじだけれど、組に成つて可厭さうな様子も見えなかつたもの」

「そんな無理な事を言つて！」

「三百円の金剛石ぢや到底僕等の及ぶところにあらずだ」

「知らない！」

宮はシオールを揺ゆりあ上げて鼻の半なかばまで掩おほひかく隠しつ。

「ああ寒い！」

男は肩そぼだを時ひたてて直と彼に寄添へり。宮は猶なほ黙して歩めり。

「ああ寒い!!」

宮はなほ答へず。

「ああ寒い!!!」

彼はこの時始めて男の方かたを見向きて、

「どうしたの」

「ああ寒い」

「あら可厭ね、どうしたの」

「寒くて耐らんからその中へ一処に入れ給へ」

「どの中へ」

「シオールの中へ」

「可笑い、可厭だわ」

男は逸早く彼の押へしシオールの片端を奪ひて、その中に身を容れたり。宮は歩み得ぬまでに笑ひて、

「あら貫一さん。これぢや切なくて歩けやしない。ああ、前面から人が来てよ」

かかる戯を作して憚らず、女も為すままに信せて咎めざる彼等の関係は抑も如何。事情ありて十年来鳴沢に寄寓せるこの

間はざまかんいち、此年の夏大学に入るを待ちて、宮が妻せらるべき人なり。

## 第三章

間貫一の十年来嶋沢の家に寄寓せるは、怙る所無くて養はるるなり。母は彼の幼かりし頃世を去りて、父は彼の尋常中学を卒業するを見るに及ばずして病死せしより、彼は哀嘆の中に父を葬るとともに、己が前途の望をさへ葬らざる可からざる不幸に遭へり。父在りし日さへ月謝の支出の血を絞るばかりに苦きに瘦世帯なりけるを、当時彼なほ十五歳ながら間の戸主は学ぶに先ちて食ふべき急に迫られぬ。幼き戸主の学ぶに先ちては食ふべきの急、食ふべきに先ちては葬すべき急、猶これに先ちては

看護医薬の急ありしにあらざや。自活すべくもあらぬ幼をさなき者の如何いかにしてこれ等の急を救得すくひえしか。固もとより貫一が力の能あたふべきにあらざ、鳴沢隆三の身一個ひとつに引承ひきうけて万端の世話せしに因よるなり。孤児みなしごの父は隆三の恩人にて、彼は聊ちよかその旧徳ちゆうとくに報ゆるが為に、啻ただにその病めりし時に扶助せしのみならず、常に心着こころづけては貫一の月謝うしろみをさへ間支まま弁したり。かくて貧うしなき父を亡うしなひし孤児みなしごは富める後見うしろみを得て鳴沢の家に引取られぬ。隆三は恩人に報ゆるにその短せいじき生時もつを以て慊あきたらず思ひければ、とかくはその忘形見あつぱれを天晴人あつぱれと成して、彼の一日も忘れざりし志を継がんとせるなり。

亡なき人常に言ひけるは、苟いやしくも侍の家あなごに生れながら、何の面目めんぼくありて我子貫一をも人に侮あなごらすべきや。彼は学士となして、願めんぼくくは再び四民しみんの上かみに立たしめん。貫一は不断にこの言ことばを以て警いまし

められ、隆三は会ふ毎にまたこの言を以て啣たれしなり。彼はものい言ふいとま違だに無くて暴にはかにみまか歿りけれども、その前常に口にせしところは明かに彼の遺言なるべきのみ。

されば貫一が鳴沢の家内に於ける境遇は、決して厄介者として陰ひそかに疎うとまるる如き憂目うきめに遭あふにはあらざりき。愁なまじひ継子ままこなどに生れたらんよりは、かくて在りなんこそ幾許いかにか幸さいはひは多からんよ、と知る人は噂うはさし合へり。隆三夫婦は実げに彼を恩人の忘形見として疎おろそかならず取扱ひけるなり。さばかり彼の愛せらるるを見て、彼等は貫一をば娘の婿にせむとすならんと想へる者もありしかど、当時彼等は構へてさる心ありしにはあらざりけるも、彼の篤学いなるを見るに及びて、漸やうやくその心は出いで来きて、彼の高等中学校いに入りし時、彼等の了簡は始めて定りぬ。

貫一は篤学のみならず、性質すぐも直おこなひに、行ただしも正ただしかりければ、この

人物を以つて学士の冠を戴かんには、誠に獲易からざる婿なるべし、と夫婦は私ひそかに喜びたり。この身代しんだいを譲られたりとして、他姓たせいを冒をかして得謂えいはれぬ屈辱を忍ばんは、彼の屑いさぎよしと為ざるところなれども、美き宮を妻に為るを得ば、この身代も屈辱も何か有らんと、彼はなかなか夫婦に増したる權よろこびを懷いだきて、益ますます學問を励ますめたり。宮も貫一をば憎からず思へり。されど恐くは貫一の思へる半なかばには過ぎざらん。彼は自らその色好いろよきを知ればなり。世間の女の誰たれか自らその色好を知らざるべき、憂ふるところは自ら知るに過すぐるに在り。謂いふ可くんば、宮は己おのれが美しさの幾何いかばかり値するかを当然に知れるなり。彼の美しさを以てして纔わづかに箇程かほどの資産を嗣つぎ、類多ふせいき学士風情を夫に有たんは、決して彼が所望のぞみの絶頂にはあらざりき。彼は貴人の奥方の微賤びせんより出いでし例ためしすくな寡かからざるを見たり。又は富人の醜いとき妻を厭いとひて、美めかけき妾めかけに親むを

見たり。才だにあらば男立身は思のままなる如く、女は色をも  
 て富貴ふうぎを得べしと信じたり。なほ彼は色を以て富貴を得たる人  
 たちの若干そくばくを見たりしに、その容かたちの己おのれに如かざるものの多きを  
 見出みいだせり。剩あまつさへ彼は行く所にその美しさを唱はれざるはあらざ  
 りき。なほ一件ひとつ最も彼の意を強うせし事あり。そは彼が十七の  
 歳としに起りし事なり。当時彼は明治音楽院に通ひたりしに、ヴァ  
 イオリンのプロフェツサアなる独逸人ドイツは彼の愛らしき袂たもとに艶書えんしよ  
 を投入いれぬ。これ素もとより仇あだなる恋にはあらで、女夫めをとの契ちぎりを望み  
 しなり。殆ど同時ほんんに、院長なながしの某は年四十を踰こえたるに、先年そ  
 の妻を喪うしなひしをもて再び彼を娶めとらんとて、密ひそかに一室に招きて切  
 なる心を打明かせし事あり。

この時彼のちひさのちひさ胸は破れんとするばかり轟とどろけり。半は曾なかばて覚  
 えざる可羞はづかしさの為に、半は遽にはかに大なる希望おほいの宿りたるが為に。彼

はここに始めて己おのれの美しさの寡すくなくとも奏任以上の地位ある名流をその夫つまに値あたひすべきを信じたるなり。彼を美しく見たるは彼の教師と院長とのみならず、牆かきを隣れる男子部だんじぶの諸生の常に彼を見んとて打騒ぐをも、宮は知らざりしにあらざり。

若もしかのプロフェツサアに添あはんか、或あるひは四十の院長に従はんか、彼の榮譽ある地位は、学士を婿にして鳴沢の後を嗣つぐの比にはあらざらんをと、一旦抱いだける希望のぞみは年と共に太りて、彼は

始終おのれ昼ながら夢みつつ、今にも貴かき人又は富める人又は名ある人の己おのれを見出みいだして、玉の輿こしを昇かかせて迎きたるべき天縁の、必ず

廻めぐり到いたらんことを信じて疑はざりき。彼のさままでに深く貫一を思

はざりしは全くこれが為のみ。されども決して彼を嫌きらへるには

あらず、彼と添あはばさすがに楽たのしからんとは念おもへるなり。如此かくのごとく

決定さだかにそれとは無けれど又有りとし見ゆる筈はず木の好運を望みつ

つも、彼は怠らず貫一を愛してゐたり。貫一は彼の己を愛する外にはその胸の中に何もあらじとのみ思へるなりけり。

## 第四章

漆の如き闇やみの中に貫一うちの書齋の枕時計は十時を打ちぬ。彼は午後四時より向島むこうじまの八百松やおまつに新年会ありとて未だ還いまらざるなり。

宮は奥より手ラムプをばを持ちて入来いりきにけるが、机の上なる書燈ともを点し了れる時、婢をんなは台十能をばちに火を盛りたるもちきたを持来れり。宮はこれを火鉢ひばちに移して、

「さうして奥のお鉄瓶てつも持つて来ておくれ。ああ、もう彼方あちらは御寝おやすみになるのだから」

久く人氣ひとけの絶えたりし一間いっけんの寒さむは、今俄にはかに人の温ぬき肉を得た

るを喜びて、直ちに咬まんとするが如く膚に薄れり。宮は慌忙  
 く火鉢に取付きつつ、目を挙げて書棚に飾れる時計を見たり。

夜の闇く静なるに、燈の光の独り美き顔を照したる、限無く  
 艶なり。松の内とて彼は常より着飾れるに、化粧をさへしたれ  
 ば、露を帯びたる花の梢に月のうつろへるが如く、背後の壁に  
 映れる黒き影さへ香滴るるやうなり。

ダイヤモンドと光を争ひし目は惜気も無く瞪りて時計の秒を刻むを  
 打目成れり。火に翳せる彼の手を見よ、玉の如くなり。さらば  
 友禅模様ある紫縮緬の半襟に韜まれたる彼の胸を想へ。その胸  
 の中に彼は今如何なる事を思へるかを想へ。彼は憎からぬ人の  
 帰来を待侘ぶるなりけり。

一時又寒の太甚きを覚えて、彼は時計より目を放つとともに  
 起ちて、火鉢の対面なる貫一が裯の上に座を移せり。こは彼の

手に縫ひしを貫一の常に敷くなり、貫一の敷くをば今夜彼の敷くなり。

若もしやと聞着けし車の音は漸やうやく近ちかづきて、益ますますとどろ轟とどろきて、竟つひに我門わがかどに停とどまりぬ。宮みやは疑無うたがひなしと思ひて起たんとする時、客きやくはいと酔よひたる声して物言へり。貫一は生下きげこ戸なれば嘗かつて酔よひて帰かへりし事あらざれば、宮は力無く又坐りつ。時計を見れば早や十一時に垂なんなんとす。

門かどの戸引啓ひきあけて、酔よひたる足音の土間に踏入りたるに、宮は何事とも分わからず唯慌ただあわててラムプを持ちて出いでぬ。台所をんなより婢めかけも、出合いであへり。

足の踏所ふみども覚束無おぼつかげに酔よひて、帽は落ちなんばかりに打傾うちかたむき、ハンカチハンカチイフイフに裏つみたる折さを左ひだりに拏とりて、山車だし人形にんぎやうのやうに揺ゆ々と立たてるは貫一なり。面おもては今にも破れぬべく紅くれなゐに熱あつして、舌の

乾かわくに堪たへかねて連しきりに空唾からつばを吐きつつ、

「遅おそかつたかね。さあ御土産おみやげです。還かへつてこれを細君おくに遣る。

何ぞ仁じんなるや」

「まあ、大變酔しよつて！ どうしたの」

「酔しよつて了しまつた」

「あら、貫一かんいつさん、こんな所に寐ねちや困るわ。さあ、早くお上

りなさいよ」

「かう見えても靴くつが脱ぬげない。ああ酔しよつた」

仰のげさまに倒たふれたる貫一かんいつの脚あしを搔かき抱いだきて、宮みやは辛からくもその靴くつを取

去いりぬ。

「起きる、ああ、今いま起きる。さあ、起きた。起きたけれど、手を牽ひいてくれなければ僕ぼくには歩ありませんよ」

宮みやは婢をんなに燈ともしを把とらせ、自みづからは貫一かんいつの手てを牽ひかんとせしに、彼

はよろめ跟きつつ肩すがに縋りて遂つひに放さざりければ、宮はその身一つさへ危あやふきに、やうやう扶たすけて書齋いに入りぬ。

裯しとねの上に昇かきおろ下されし貫一は頹くづるる体たいを机いに支へて、打うちあふ仰あふぎつつ微吟いせり。

「君きんに勸ころもむ、金縷きんるの衣ころもを惜むななかれ。君きんに勸むむ、須すべく少年からの時ときを惜むべし。花はな有り折たるに堪たへなば直ただちに折たる須べし。花はな無なきを待まちつて空むなしく枝えだを折たることななかれ」

「貫一くわんいちさん、どうしてそんなに酔よつたの？」

「酔よつてゐるでせう、僕ぼくは。ねえ、宮みやさん、非常ひじょうに酔よつてゐるでせう」

「酔よつてゐるわ。苦くるしいでせう」

「然しか矣り、苦くるいほど酔よつてゐる。こんなおほに酔よつてゐるに就ついては大おほいに訳わけが有あるのだ。さうして又また宮みやさんなるものが大おほいに介抱かいぼう

して可い訳が有るのだ。宮さん！」

「可厭いやよ、私は、そんなに酔つてゐちや。不断嫌きらひの癖なに何故ぜそんなに飲んだの。誰のまに飲されたの。端山はやまさんだの、荒尾さんだの、白瀬さんだのが附ついてゐながら、酷ひどいわね、こんなに酔して。十時にはきつと帰ると云ふから私は待つてゐたのに、もう十一時過よ」

「本当に待つてゐてくれたのかい、宮さん。謝みや、多謝たしや！ 若もしそれが事実であるならばだ、僕はこのまま死んでも恨みません。こんなに酔されたのも、実はそれなのだ」

彼は宮の手を取りて、情に堪へざる如く握にぎりし緊めつ。

「二人の事は荒尾より外に知る者は無いのだ。荒尾が又決して喋しゃべる男ぢやない。それがどうして知れたのか、衆みんなが知つてゐて……僕は実に驚いた。四方八方から祝盃しゅくはいだ祝盃だと、十も二十も一

度に猪口ちよくを差されたのだ。祝盃などを受ける覚おぼえは無ないと言つて、手ひつこを引籠めてゐたけれど、なかなか衆聴みんなかないぢやないか」

宮みやは窃ひそかに笑ゑみを帯びて余念なく聴きゐたり。

「それぢや祝盃の主意を變へて、仮初かりそめにもああ云ふ美人と一所いつしょに居て寢食を俱ともにすると云ふのが既に可羨うらやましい。そこを祝すのだ。

次には、君も男兒をとこなら、更に一步を進めて、妻君に為るやうに

十分運動したまへ。十年も一所に居てから、今更人に奪とられる

やうな事があつたら、独ひとり間貫一いつ個人ひとりの恥辱ばかりではない、

我々朋友全体ほうゆうの面目なまめにも関する事だ。我々朋友ばかりではない、

延ひいて高等中学の名折なをれにもなるのだから、是非あむすぶの美人を君が

妻君にするやうに、これは我々が心を一いつにして結むすぶの神いのに禱いのつた

酒だから、辞退するのは礼ではない。受けなかつたら却かへつて神

罰ばつが有ると、弄謔からかひとは知れてゐるけれど、言草いひぐさが面白かつたか

ら、片端かたっぱしから引受けて呷々ぐひぐひ遣付けた。

宮さんと夫婦に成れなかつたら、はははははは高等中学の名折になるのだと。恐入つたものだ。何分よろし宜く願ひます」

「可いや厭よ、もう貫一さんは」

「友達中にもさう知れて見ると、立派に夫婦にならなければ、弥いよいよよ僕の男が立たない義わけだ」

「もう極きまつてゐるものを、今更……」

「さうでないです。この頃をぢ翁さんや姨をばさんの様子を見るのに、どうも僕は……」

「そんな事は決けして無いわ、邪推だわ」

「実は翁さんや姨りようけんさんの了簡りようけんはどうでも可い、宮さんの心一つなのだ」

「私の心は極つてゐるわ」

「さうかしらん？」

「さうかしらんで、それぢや余りだわ」

貫一は酔を支へかねて宮が膝を枕に倒れぬ。宮は彼が火の如き頬に、額に、手を加へて、

「水を上げませう。あれ、又寐ちや……貫一さん、貫一さん」

寔に愛の潔き哉、この時は宮が胸の中にも例の汚れたる希望

は跡を絶ちて彼の美き目は他に見るべきもののあらざらんやう

に、その力を貫一の寐顔に錘めて、富も貴きも、乃至有ゆる利慾

の念は、その膝に覚ゆる一団の微温の為に溶かれて、彼は唯妙

に香き甘露の夢に酔ひて前後をも知らざるなりけり。

諸の可忌き妄想はこの夜の如く眼を閉ぢて、この一間に彼等

の二人よりは在らざる如く、彼は世間に別人の影を見ずして、

又この明なる燈火の光の如きものありて、特に彼等をのみ照す

やうに感ずるなり。

## 第五章

或日箕輪みのわの内儀は思も懸けず訪来とひきたりぬ。その娘のお俊と宮とは学校朋輩ほうばいにて常に往来ゆききしたりけれども、未だ家いまと家うちとの交際はあらざるなり。彼等の通学せし頃さへ親々は互に識しらで過ぎたりしに、今は二人の往来おうらいも漸く疎やうやくなりけるに及びて、俄にはかにその母の来きたれるは、如何いかなる故ゆゑにか、と宮も両親ふたおやも怪あやしき事に念おもへり。

およ 凡そ三時間の後彼は帰行かへりゆきぬ。

先に怪みし家内は彼の来りしよりもその用事の更おもひがに思懸けざるに驚けり。貫一は不在めづらしきやくらいなりしかばこの珍めづらしきやくらいき客来きやくらいのありしを知

らず、宮もまた敢て告げずして、二日と過ぎ、三日と過ぎぬ。その日より宮は少く食して、多く眠らずなりぬ。貫一は知らず、宮はいよいよ告げんとは為ざりき。この間に両親は幾度と無く談合しては、その事を決しかねてゐたり。

彼の陰に在りて起れる事、又は見るべからざる人の心に浮べる事どもは、貫一の知る因もあらねど、片時もその目の忘れざる宮の様子の変れるを見出さんは難き事にあらず。さも無かりし人の顔の色の遽に光を失ひたるやうにて、振舞など別けて力無く、笑ふさへいと打湿りたるを。

宮が居間と謂ふまでにはあらねど、彼の箏笛手道具等置きたる小座敷あり。ここには火燧の炉を切りて、用無き人の来ては送かたみに冬籠する所にも用ゐらる。彼は常にここに居て針仕事するなり。倦めば琴をも弾くなり。彼が手玩と見ゆる狗子柳のはや

根を弛み、真の打傾きたるが、鮫鯨切の水に埃を浮べて小机の傍に在り。庭に向へる肱懸窓の明きに敷紙を披げて、宮は膝の上に紅絹の引解を載せたれど、針は持たで、懶げに火燵に靠れたり。

彼は少く食して多く眠らずなりてよりは、好みてこの一間に入りて、深く物思ふなりけり。両親は仔細を知れるにや、この様子をば怪まんともせで、唯彼の為すままに委せたり。

この日貫一は授業始の式のみにて早く帰来にけるが、下座敷には誰も見えで、火燵の間に宮の咳く声して、後は静に、我が帰りしを知らざるよと思ひければ、忍足に窺寄りぬ。襖の僅に啓きたる隙より差覗けば、宮は火燵に倚りて硝子障子を眺めては俯目になり、又胸痛きやうに仰ぎては太息吐きて、忽ち物の音を聞澄すが如く、美き目を瞠るは、何をか思凝すなるべし。人

の窺うかがふと知らねば、彼は口もて訴ふるばかりに心の苦悶くもんをその  
 状かたちに顯あらはして憚はばからざるなり。

貫一あやしは異あやしみつつも息を潜めて、猶なほ彼の為せんやうを見んとした  
 り。宮みやは少時しばしありて火燵ひたひに入りけるが、遂つひに櫓やぐらに打俯うちふしぬ。

柱はしらに身を倚よせて、斜ななめに内を窺うかがひつつ貫一あやしは眉まゆを顰ひそめて思惑おもひまどへ  
 り。

彼は如何いかなる事ありてさばかり案わづらじ煩わづらふならん。さばかり案  
 じ煩わづらふべき事を如何いかなれば我われに明あきざるならん。その故ゆゑのある  
 べく覚えざるとともに、案わづらじ煩わづらふ事のあるべきをも彼は信まじ得  
 ざるなりけり。

かく又案わづらじ煩わづらへる彼の面おもても自ら俯うつむきぬ。問はずして知るべき  
 にあらずと思定おもひさだめて、再び内うちを差覗さしのぞきけるに、宮みやは猶打俯うちふして  
 ゐたり。何時いつか落ちけむ、蒔まきゑ絵ゑの櫛くしの零こぼれたるも知らで。

人の氣勢けはひに驚きて宮の振仰ぐ時、貫一は既にその傍かたはらに在り。彼は慌あわてて思頹おもひくづるる気色けしきを蔽おほはんとしたるが如し。

「ああ、吃驚びつくらした。何時いつ御帰かへんなすつて」

「今帰つたの」

「さう。些ちつとも知らなかつた」

宮はおのれの顔の頬しきりに眺めらるるを眩まばゆがりて、

「何をそんなに視みるの、可厭いや、私は」

されども彼は猶目を放たず、宮はわざと打背うちそむきて、裁片きれたたふ畳の

内かきさがを撈かきせり。

「宮みいさん、お前さんどうしたの。ええ、何処どこか不快わるいのかい」

「何ともないのよ。何故なぜ？」

かく言ひつつ益急ますますに撈かきせり。貫一は帽かぶを冠かぶりたるまま火燵かたに

片肱かたひぢか掛けて、斜ななめに彼の顔を見遣みりつつ、

「だから僕は始終水臭いと言ふんだ。さう言へば、直に疑深い  
の、神経質だのと言ふけれど、それに違無いぢやないか」

「だつて何ともありませんもの……」

「何ともないものが、惘然考へたり、太息を吐いたりして鬱  
であるものか。僕は先之から唐紙の外で立つて見てゐたんだよ。  
病氣かい、心配でもあるのかい。言つて聞かしたつて可いぢやな  
いか」

宮は言ふところを知らず、纔に膝の上なる紅絹を手弄るのみ。

「病氣なのかい」

彼は僅に頭を掉りぬ。

「それぢや心配でもあるのかい」

彼はなほ頭を掉れば、

「ぢやどうしたと云ふのさ」

宮は唯胸うちの中を車輪くるまなどの廻めぐるやうに覚ゆるのみにて、誠にいつはりことばも詐いつはりにも言ことばを出いだすべき術すべを知らざりき。彼は犯せる罪つひの終つひに秘つひむ能あたはざるを悟れる如おそれき恐怖こころをのの為こころをのに心慄おそれけるなり。如何いかに答へんとさへ惑へるに、傍かたはらには貫一なじの益詰なじらんと待つよと思へば、身しほは搾しほらるるやうに迫来せまりくる息ひまの隙ひまを、得いも謂いはれず冷ひやかなる汗ひやの流れ流れぬ。

「それぢやどうしたのだと言ふのに」

貫一こわねの声音やうやは漸いらだく苛立いらだちぬ。彼の得言いひいだはぬを怪しと思へばなり。宮は驚そぞろきて不覚いひいだに言出いひいだせり。

「どうしたのだか私にも解らないけれど、……私はこの二三日どうしたのだか……変いひに色々いひな事を考へて、何だか世の中がつまらなくなつて、唯悲いひくなつて来るのよ」

呆あきれたる貫一またたきは瞬またたきもせで耳かたふを傾かたふけぬ。

「人間と云ふものは今日かうして生きてゐても、何時死んで了ふか解らないのね。かうしてゐれば、可樂な事もある代に辛い事や、悲い事や、苦い事なんぞが有つて、二つ好い事は無し、考れば考るほど私は世の中が心細いわ。不図さう思出したら、毎日そんな事ばかり考へて、可厭な心地になつて、自分でもどうか為たのかしらんと思ふけれど、私病氣のやうに見えて？」

目を閉ぢて聴みし貫一は徐に眸を開くとともに眉を擡めて、

「それは病氣だ！」

宮は打萎れて頭を垂れぬ。

「然し心配する事は無いさ。氣に為ては可かんよ。可いかい」

「ええ、心配しはしません」

「異く沈みたるその声の寂しさを、如何に貫一は聴きたりしぞ。それは病氣の所為だ、脳でも不良のだよ。そんな事を考へた

日には、一日だつて笑つて暮せる日は有りはしない。固もとより世  
 の中と云ふものはさう面白い義わけのものぢやないので、又人の身  
 の上ほど解らないものは無い。それはそれに違無いのだけれど、  
 衆みんなが皆みんなそんな了りようけん簡かんを起して御覧な、世界中御寺ばかりになつて  
 了しまふ。儂はかないのが世の中と覚悟した上で、その儂はかない、つまらない  
 中で切せめては楽たのしみを求めやうとして、究竟つまり我々が働いてゐるのだ。  
 考へて鬱ふさいだところで、つまらない世の中に儂はかない人間と生れて  
 来た以上は、どうも今更なほ為方が無いぢやないか。だから、つま  
 らない世の中を幾いくら分ぶんか面白面白く暮さうと考へるより外ほかは無ないのさ。  
 面白面白く暮すには、何か楽たのしみが無なければならない。一事ひとつかうと云ふ  
 楽たのしみがあつたら決して世の中はつまらんものではないよ。宮みやさん  
 はそれでは楽と云ふものが無いのだね。この楽があればこそ生  
 きてゐると思ふ程の楽は無ないのだね」

宮は美き目を挙げて、求むるところあるが如く儷ひそかに男の顔を見たり。

「きつと無いのだね」

彼は笑ゑみを含みぬ。されども苦しげに見えたり。

「無い？」

宮の肩頭かたさきを捉とりて貫一は此方こなたに引向けんとすれば、為なすままに彼は緩ゆるく身を廻めぐらしたれど、顔のみは可羞はぢがましく背そむけてゐたり。

「さあ、無いのか、有るのかよ」

肩に懸けたる手をば放さで連しきりに揺ゆるるを、宮は鍔くろがねの槌つちもて撃懲うちこらさるるやうに覚えて、安ひややかき心もあらず。冷ひなる汗は又ひとしきり一時流出ながれいでぬ。

「これは怪けしからん！」

宮は危あやふみつつ彼の顔色うかがを候うひぬ。常の如く戯あそぶるるなるべし。

その面は和おもてぎて一やはら点の怒気だにあらず、寧むしろ唇頭くちもとには笑を包めるなり。

「僕などは一件ひとつ大きな大きな楽があるので、世の中が愉快で愉快で耐たまらんの。一日が経たつて行くのが惜たくて惜たくてね。僕は世の中がつまらない為こしらにその楽を拵こしらへたのではなくて、その楽の為にこの世の中に生きてゐるのだ。若もしこの世の中からその楽を取去つたら、世の中は無ない！ 貫一といふ者も無い！ 僕はその楽と生しょう死しを俱ともにするのだ。宮みやさん、可うらやま羨ましいだらう」

宮みやは忽たちまち全身の血の氷れるばかりの寒ささに堪たへかねて打顫うちふるひしが、この心の中を覚さとられじと思へば、弱る力を励うして、

「可うらやま羨ましいわ」

「可うらやま羨ましければ、お前さんの事だから分けてあげやう」

「何どうぞ卒ぞ」

「ええ、悉皆遣つて了へ！」

彼は外套オバコウトの衣兜かくしより一袋のボンボンを取り出して火燵こたつの上に置けば、余力はずみに袋の口は弛ゆるみて、紅白の玉は珊瑚さくらさくら々と乱出みだれいでぬ。こは宮の最も好める菓子なり。

## 第六章

その翌々日なりき、宮は貫一に勧められて行きて医の診察を受けしに、胃病なりとて一瓶の水薬いちびん すいやくを与へられぬ。貫一は信まことに胃病なるべしと思へり。患者は必ずさる事あらじと思ひつつもその薬を服したり。懊惱おうのうとして憂うきに堪たへざらんやうなる彼の容体ようたいに幾許いくばくの変も見えざりけれど、その心に水と火の如きものありて相剋あひこくする苦痛は、益募ますますりて止やまざるなり。

貫一は彼の憎からぬ人ならずや。怪むべし、彼はこの日頃さしも憎からぬ人を見ることを懼れぬ。見ねばさすがに見まほしく思ひながら、面を合すれば冷汗も出づべき恐怖を生ずるなり。彼の情有る言を聞けば、身をも斫らるるやうに覚ゆるなり。宮は彼の優き心根を見ることを恐れたり。宮が心地勝れずなりてより、彼に対する貫一の優しさはその平生に一層を加へたれば、彼は死を覓むれども得ず、生を求むれども得ざらんやうに、悩乱してほとほとその堪ふべからざる限に至りぬ。

遂に彼はこの苦を両親に訴へしにやあらん、一日母と娘とは遽に身支度して、忙々く車に乗りて出でぬ。彼等は小からぬ一個の旅鞆を携へたり。

あるじあるじ  
大風の凧ぎたる迹に孤屋の立てるが如く、侘しげに留守せる  
主の隆三は独り碁盤に向ひて碁経を披きむたり。齡はなほ六十

に遠けれど、頭は夥かたぢき白髪しらがにて、長く生ひたる髯ひげなども六分は白く、容かたちは瘦やせたれど未いまだ老おとろへの衰おとろへも見えず、眉まゆ目め温厚おんこうにして頗すこぶる古井波こせい無なきの風あり。

やがて帰来かへりきにける貫一は二人の在らざるを怪ありて主に訊たづねぬ。彼は徐しづかに長ながき髯ひげを撫なでて片笑かたわらみつつ、

「二人はの、今朝新聞を見ると急に思おもひついて、熱海へ出掛けたよ。何でも昨日きのふ医者いしやが湯治たうぢが良いと言いうて切きりに勧めたらしいのだ。いや、もう急おもひつきの思おもひで、脚あしもと下したから鳥たの起たつやうな騒さわをして、十二時三十分の瀛車きしやで。ああ、独ひとりで寂さびいところ、まあ茶ちやでも淹いれやう」

貫一は有る可あからざる事のやうに疑うへり。

「はあ、それは。何なにだか夢ゆめのやうですな」

「はあ、私わしもそんな塩梅あんばいで」



言遺いひおいて行きさうなものぢやないか。一寸其処ちよつとそこへ行つたのぢやなし、四五日でも旅だ。第一言遺いひおく、言遺いひおかないよりは、湯治に行くなら行くと、始はじめに話が有りさうなものだ。急に思着おもいた？急に思着おもいたつて、急に行かなければならん所ぢやあるまい。俺の帰るのを待つて、話をして、明日行くと云ふのが順序だらう。四五日ぐらゐの離別わかれには顔を見ずに行つても、あの人あの人は平気なのかしらん。

女と云ふ者は一体男よりは情が濃こまやかであるべきなのだ。それが濃でないとなれば、愛してをらんと考へるより外は無まい。豈まさかにあの人が愛してをらんとは考へられん。又万々ばんばんそんな事は無い。けれども十分に愛してをると云ふほど濃ではないな。

元來あの人あの人の性質は冷淡さ。それだから所謂いはゆる『娘らしい』ところところが余り無い。自分の思ふやうに情が濃でないのもその所為せゐ

か知らんて。子供の時分から成程さう云ふ傾向は有つてゐたけれど、今のやうに太甚はなはだしくはなかつたやうに考へるがな。子供の時分にさうであつたなら、今ぢや猶更なほさらでなければならんのだ。それを考へると疑ふよ、疑はざるを得ない！

それに引替へて自分だ、自分の愛してゐる度は実に非常なもの、殆どほとん……殆どではない、全くだ、全く溺おほれてゐるのだ。自分でもどうしてこんなだらうと思ふほど溺れてゐる！

これ程自分の思つてゐるのに対しても、もう少し情が篤あつくなければならんのだ。或時などは実に水臭い事がある。今日の事なども随分酷ひどい話だ。これが互に愛してゐる間の仕草だらうか。深く愛してゐるだけにかう云ふ事を為されると実に憎い。

小説的かも知れんけれど、八犬伝はつけんでんの浜路はまじだ、信乃しのが明朝あしたは立つて了ふと云ふので、親の目を忍んで夜更よふけに逢あひに来る、あの

情合じやうあひでなければならぬ。いや、妙だ！ 自分の身の上も信乃に似てゐる。幼少から親に別れてこの鴨沢の世話になつてゐて、其処そこの娘と許嫁いひなづけ……似てゐる、似てゐる。

然し内の浜路は困る、信乃にばかり気を揉もして、余り憎いな、そでない為しかただ。これから手紙を書いて思ふさま言つて遣やらうか。憎いは憎いけれど病氣ではあるし、病人に心配させるのも可哀かあいさうだ。

自分は又神経質に過るから、思過おもひすぎを為るところも大きにあるのだ。それにあの人からも不断言はれる、けれども自分が思過おもひすぎであるか、あの人じやうが情が薄いのかは一件ひとつの疑問だ。

時々さう思ふ事がある、あの人あなどの水臭い仕打の有るのは、多少いくらか自分を侮あなどつてゐるのではあるまいか。自分は此家ここの厄介者、あの人おのづかしゆうは家附の娘だ。そこで自ら主と家来と云ふやうな考が始

終有つて、……否、それもあの人に能く言れる事だ、それくらゐなら始から許しはしない、好いと思へばこそかう云ふ訳に、……さうだ、さうだ、それを言出すと太く慍おこられるのだ、一番それを慍おこるよ。勿論もちろんそんな様子すこしの些少でも見えた事は無い。自分の僻見ひがみに過ぎんのだけれども、気が済まないから愚痴も出るのだ。然し、若もあの人もしの心にそんな根性が爪あかの垢あかほどでも有つたらば、自分は潔くこの縁は切つて了ふ。立派に切つて見せる！ 自分は愛情とりにこの俘とりことはなつても、未だま奴隷になる気は無い。或はあるひこの縁を切つたなら自分こがれじにはあの人を忘れかねて焦死こがれじにに死ぬかも知れん。死なんまでも発狂するかも知れん。かまはん！ どうなうと切れて了ふ。切れずに措おくものか。

それは自分の僻見ひがみで、あの人に限つてはそんな心は微塵みじんも無いのだ。その点よは自分も能く知つてゐる。けれども情こまやかが濃かでな

いのは事実だ、冷淡なのは事実だ。だから、冷淡であるから情が濃でないのか。自分に対する愛情がその冷淡を打壊すほどに熱しないのか。或は熱し能はざるのが冷淡の人の愛情であるのか。これが、研究すべき問題だ」

彼は意に満たぬ事ある毎に、必ずこの問題を研究せざるなけれども、未だ曾て解釈し得ざるなりけり。今日はや如何に解釈せんとすらん。

(六) の二

翌日果して熱海より便はありけれど、僅に一枚の端書をもて途中の無事と宿とを通知せるに過ぎざりき。宛名は隆三と貫一とを並べて、宮の手蹟なり。貫一は読了ると齊しく片々に引裂

きて捨ててけり。宮の在らば如何にとも言解くなるべし。彼のしたし親いひとく言解かば、如何に打腹立ちたりとも貫一の心のと積とけざることはあらず。宮の前には常に彼はいかり慍をも、恨をも、憂うれひをも忘るるなり。今は可懐なつかしき顔を見る能はざる失望に加ふるに、この不平に遭あひて、しかも言解く者のあざれば、彼のいかり慍は野火の飽くこと知らで燎やくやうなり。

この夕隆ゆふべ三は彼に食後の茶を薦すすめぬ。一人佗わびしければ留とどめて物語ものがたはんとてなるべし。されども貫一の屈托くつたく顔がほして絶えず思おもひ非あらぬ方かたに馳はする気色けしきなるを、

「お前どうぞ為しなすつたか。うむ、元気が無いの」

「はあ、少し胸が痛みますので」

「それは好くない。劇ひどく痛みでもするかな」

「いえ、なに、もう宜よろしいのでございます」

「それぢや茶は可くまい」

「頂戴します」

かかる浅ましき愠いかりを人に移はなさんは、甚いはだ謂な無なき事なり、と自ら制して、書齋うさに帰りて懋なまじひ心を傷めんより、人に対して姑しばらく憂うさを忘るるに如しかじと思ひければ、彼は努めて寛くつろがんとしたれども、動やもすれば心は空そらになりて、主あるじの語ことばを聞逸ききそらさむとす。

今日ふみ文こまこまの来こまこまて細々と優かきつらき事など書聯あねたらば、如何いかに我われは嬉うれからん。なかなか同じ処かに居いて飽あかず顔かを見るに易かへて、その樂たのしみは深とほざかるべきを。さては出行いでゆきし恨いも忘わられて、二夜ふたよみよ三夜よは遠とほざかりて、せめてその文いを形見にに思ほ続いけんもをかしかるべきを。彼いはその身にの卒いはに出行いでゆきしを、如何いかに本意ほんい無なく我われの思ほふらんかは能よく知るべきに。それを知らば一筆ひとふで書かきて、など我われを慰なぐさめんとは為せざる。その一筆ひとふでを如何いかに我われの嬉うれく思ほふらんかは能よく

知るべきに。我を可憐いとしと思へる人の何故なにゆゑにさは為せざるにやあらん。かくまでに情篤なさけあつからぬ恋の世に在るべきか。疑ふべし、疑ふべし、と貫一の胸は又乱れぬ。主の声に驚かされて、彼はたちま忽ちその事を忘るべき吾われに復かへれり。

「ちと話したい事があるのだが、や、誠に妙な話で、なう」

笑ふにもあらず、顰ひそむにもあらず、稍やや自ら嘲あざむに似たる隆三の顔は、燈火ともしびに照されて、常には見ざる異あやしき相を顕あらはせるやうに、貫一は覚ゆるなりき。

「はあ、どういふ御話ですか」

彼は長ひげき髯せはしを忙もく揉もみては、又頤おとがひの辺あたりより徐しづかに撫なで下おろして、先まづ打出うちいださん語ことばを案あじたり。

「お前の一身上の事に就ついてだかの」

纔わづかにかく言いひしのみにて、彼は又遅ためらひぬ、その髯ひげは虻あぶに苦くるし

む馬の尾のやうに揮はれつつ、

「いよいよお前も今年の卒業だつたの」

貫一は遽にはかに敬はるる心地して自と膝おのづを正せり。

「で、私わしもまあ一安心したと云ふもので、幾分かこれでお前の

御父様おとつさんに対して恩返おんがへしも出来たやうな訳、就いてはお前も益ます勉強

してくれんでは困るなう。未だこの先大学を卒業して、それか

ら社会へ出て相応の地位を得るまでに仕上げなければ、私も鼻

は高くないのだ。どうか洋行の一つも為させて、指折の人物に為し

たいと考へてゐるくらゐ、未だ未だこれから両肌りようはだを脱いで世話

をしなければならんお前の体だ、なう」

これを聞きける貫一は鉄繩てつじょうをもて縛いましめられたるやうに、身の重

きに堪たへず、心の転うたた苦くるきを感じたり。その恩の余りに大いな

るが為に、彼はその中うちに在りてその中に在ることを忘れんと為

る平生へいぜいを省みたるなり。

「はい。非常な御恩に預りまして、考へて見ますると、口では御礼の申しやうもございませぬ。愚父おやぢがどれ程の事を致したか知りませんが、なかなかこんな御恩返を受けるほどの事が出来るものでは有りませぬ。愚父の事は措おきまして、私は私で、この御恩はどうか立派に御返し申したいと念おもつてをります。愚父の亡なくなりましたあの時に、此方こちらで引取つて戴いただかなかつたら、私は今頃何に成つてをりますか、それを思ひますと、世間に私ほど幸さいはひなもの恐おそく無いでございませう」

彼は十五の少年の驚くまでに大人びたる己おのれを見て、その着たる衣きぬを見て、その坐れる裯しとねを見て、やがて美き宮と共にこの家の主ぬしとなるべきその身を思ひて、漫そぞろに涙を催せり。実に七千円げの粧奩そうれんを随へて、百万金も購あがなふ可からざる恋女房を得べき学士

よ。彼は小買の米を風呂敷に提げて、その影の如く瘦せたる犬とともに月夜を走りし少年なるをや。

「お前がさう思うてくれれば私も張合がある。就いては改めてお前に頼たのみがあるのだが、聴きいてくれるか」

「どういふ事ですか、私で出来ます事ならば、何なりと致しま  
す」

彼はかく潔く答ふるに憚はばからざりけれど、心の底には危むところ無なきにしもあらざりき。人のかかる言ことばを出す時いだは、多く能あたはざる事を強しふる例ためしなればなり。

「外でも無いがの、宮の事だ、宮を嫁に遣やらうかと思つて」  
見るに堪たへざる貫一の驚愕おどろきをば、せめて乱さんと彼は慌忙あわただしく語ことばを次ぎぬ。

「これに就いては私も種々いろいろと考へたけれど、大きに思ふところ

もあるで、いつそあれは遣つて了うての、お前しまはも少しすこの事だから大学を卒業して、四五年も欧羅巴エウロッパへ留学して、全然すつかり仕上げたところで身を固めるとしたらどうかな」

汝なんぢの命いのちを与へよと逼せまらるる事あらば、その時の人の思は如何いかなるべき！ 可おそろし恐おそろしきまでに色を失へる貫一むなしは空おもとく隆三うちまもの面を打目成うちまもるのみ。彼は太いたく困こうじたる体ていにて、長ながき髯ひげをば揉もみみに揉もみみたり。

「お前に約束をして置いて、今更へんがへ変換へんがへを為るのは、何とも氣の毒だが、これに就いては私も大きに考へたところがあるので、必ずお前の為にも悪いやうには計はんから、可いいかい、宮は嫁に遣る事ことにしてくれ、なう」

待てども貫一の言ことばを出いさざれば、主あるじは寡すくなからず惑へり。

「なう、悪く取つてくれば困るよ、あれを嫁に遣るから、それで我家うちとお前との縁を切つて了ふと云ふのではない、可いいかい。

大した事は無いがこの家は全然お前に譲るのだ、お前は矢張り  
の家督よ、なう。で、洋行も為せやうと思ふのだ。必ず悪く取  
つては困るよ。

約束をした宮をの、余所へ遣ると云へば、何かお前に不足で  
もあるやうに聞えるけれど、決してさうした訳ではないのだから、  
其処はお前が能く承知してくれんければ困る、誤解されて  
は困る。又お前にしても、学問を仕上げて、なう、天晴の人物  
に成るのが第一の希望であらう。その志を遂げさへ為れば、宮  
と一所になる、ならんはどれ程の事でもないのだ。なう、さう  
だらう、然しこれは理窟で、お前も不服かも知れん。不服と思  
ふから私も頼むのだ。お前に頼が有ると言うたのはこの事だ。  
従来もお前を世話した、後来も益世話をせうからなう、其処  
に免じて、お前もこの頼は聴いてくれ」

貫一は戦く唇を咬緊めつつ、故ら緩舒に出せる声音は、怪くも常に変れり。

「それぢや翁様の御都合で、どうしても宮さんは私に下さる訳には参らんのですか」

「さあ、断つて遣れんと云ふ次第ではないが、お前の意はどうだ。私の頼は聴ずとも、又自分の修業の邪魔にならうとも、そんな貪着は無しに、何でもかでも宮が欲しいと云ふのかな」

「……………」  
「さうではあるまい」

「……………」

得言はぬ貫一が胸には、理に似たる彼の理不尽を憤りて、責むべき事、詰るべき事、罵るべき事、言破るべき事、辱むべき事の数々は沸くが如く充満したれど、彼は神にも勝れる恩人なり。

理非を問はずその言には逆ふべからずと思へば、血出づるまで舌を咬かみても、敢あへて言はじと覚悟せるなり。

彼は又思へり。恩人は恩を枷かせに如此かくのごとく逼せまれども、我はこの枷の為に屈せらるべきも、彼は如何いかなる斧をのを以てか宮の愛をば割かんとすらん。宮が情は我が思ふままに濃こまやかならずとも、我を棄つるが如きさばかり薄き情にはあらざるを。彼だに我を棄てざらんには、枷も理不尽も恐るべきかは。頼むべきは宮が心なり。頼まるるも宮が心也なりと、彼は可憐いとしき宮を思ひて、その父に対する愠いかりを和やはらげんと勉つとめたり。

我は常に宮が情の濃なまげならざるを疑へり。あだかも好しこの理不尽ぞ彼が愛の力を試むるに足るなる。善し善し、盤根錯節ばんこんさくせつに遇あはずんば。

「嫁に遣ると有仰おつしやるのは、何方どちらへ御遣おつかはしになるのですか」

「それは未だ確とは極らんの、下谷に富山銀行と云ふのがあ  
る、それ、富山重平な、あれの息子の嫁に欲いと云ふ話がある  
ので」

それぞ箕輪の骨牌会に三百円の金剛石を炫かせし男にあら  
ずやと、貫一は陰に嘲笑へり。されど又余りにその人の意外なる  
に駭きて、やがて又彼は自ら笑ひぬ。これ必ずしも意外ならず、  
苟くも吾が宮の如く美きを、目あり心あるものの誰かは恋ひざ  
らん。独り怪しとも怪きは隆三の意なる哉。我十年の約は軽々  
く破るべきにあらず、猶謂無きは、一人娘を出して嫁せしめん  
とするなり。戯るるにはあらずや、心狂へるにはあらずや。貫  
一は寧ろかく疑ふをば、事の彼の真意に出でしを疑はんより邇  
かるべしと信じたりき。

彼は競争者の金剛石なるを聞きて、一度は汚され、辱められ

たらんやうにも怒いかりを作なせしかど、既に勝負は分明ぶんめいにして、我は手つかを束つかねてこの弱敵じやくてきの自らたふ僵たふるるを看みんと思おもへば、心稍落やぬ。

「は、はあ、富山重平、聞いてをります、偉い財産家で」

この一言に隆三りゆうさんの面おもては熱あつくなりぬ。

「これに就ついては私わたしも大きおほきに考かんへたのだ、何なにに為なる、お前まへとの約束ちやくそくもあるものなり、又一人娘ひとりむすめの事ことでもあり、然しかし、お前まへの後こうらい来らいに就ついても、宮みやの一身いっしんに就ついてももの、又私わたしたちは段々だんだん取る年としであつて見れば、その老後らうごだの、それ等の事ことを考かんへて見ると、この鳴沢なるさわの家いへには、お前まへも知しつての通り、かうと云ふ親類しんるいも無いで、何かに就つけて誠まことに心細こころこまいわ、なう。私わたしたちは追々おそおそ年としを取るばかり、お前まへたちは若わかしと云ふもので、ここに可頼たのもしい親類しんるいが有あれば、どれ程いかに心丈夫こころぢゆうぶだか知しれんて、なう。そこで富山とみやまならば親類しんるいに持もつても可愧はづかしからん家格いへがらだ。氣きの毒どくな思おもをしてお前まへとの約束ちやくそく

を變易へんがへするのも、私たちが一人娘を他よそへ遣つて了ふのも、究竟つまりは銘々の為に行末好かれと思ふより外は無いのだ。

それに、富山からは切たつての懇望で、無理に一人娘を貰ふと云ふ事であれば、息子夫婦は鳴沢の子同様に、富山も鳴沢も一家いっけのつもりで、決して鳴沢家を疎おろそかには為せまい。娘が内に居なくなつて不都合があるならば、どの様にもその不都合の無いやうには計はうからと、なう、それは随分事を分けた話で。

決して慾ではないが、良い親類を持つと云ふものは、人で謂いへば取とりも直なほさず良い友達で、お前にしてもさうだらう、良い友達があれば、万事の話合手になる、何かの力になる、なう、謂いはば親類は一家いっかの友達だ。

お前がこれから世の中に出るにしても、大相たいそうな便宜になるといふもの。それやこれや考へて見ると、内に置かうよりは、遣

つた方が、誰たれの為彼の為ではない。四方八方が好いものだから、私わしも決心して、いつそ遣らうと思ふのだ。

私の了簡りようけんはかう云ふのだから、必ず悪く取つてくれては困るよ、なう。私だとして年効としがひも無く事を好んで、何為なにしに若いものふため不為ふためになれと思ふものかな。お前も能く其処そこを考へて見てくれ。

私もかうして頼むからは、お前の方の頼も聴かう。今年卒業したら直すぐに洋行でもしたいと思ふなら、又さう云ふ事に私わたしも一番奮発しやうではないか。明日にも宮と一処すこになつて、私たちを安心さしてくれるよりは、お前も私わたしも少しのところが辛抱して、いつその事博士はかせになつて喜ばしてくれんか」

彼はさも思ひのままに説完ときおほせたる面色おももちして、寛ゆたかに髻ひげを撫なでてゐたり。

貫一は彼の説進やうやむに従ひて、漸やうやくその心事の火を覩みるより明あきらか

なるを得たり。彼が千言万語の舌を弄ろうして倦うまざるは、畢竟利ひつきようの一字を掩おほはんが為のみ。貧する者の盗むは世の習ながら、貧せざるもなほ盗まんとするか。我も穢けがれたるこの世に生れたれば、穢おこなひれたりとは自ら知らで、或は穢あるひれたる念を起し、或は穢れたる行を為すことあらむ。されど自ら穢れたりと知りて自ら穢すべきや。妻を売りて博士を買ふ！ これ豈あに穢れたるの最も大なる者ならずや。

世は穢れ、人は穢れたれども、我は常に我恩人の独ひとり汚けがれに染そみざるを信じて疑はざりき。過ぐれば夢より淡き小恩をも忘れずして、貧みなしこき孤子を養へる志は、これを証あまして余あるを。人の浅ましきか、我の愚なるか、恩人は酷むごくも我を欺きぬ。今は世を挙げて皆穢れたるよ。悲めばとて既に穢れたる世をいかにせん。我はこの時この穢れたる世を喜ばんか。さしもこの穢れた

る世に唯一ただ一つ穢れざるものあり。喜ぶべきものあるにあらずや。貫一は可憐いとき宮が事を思へるなり。

私の愛か、死をもて脅おびすとも得て屈すべからず。宮が愛か、  
 某の帝の冠なにかしを飾みれると聞く世界無双ふそうの大金剛石だいこんごうせきをもて購あがはんと  
 すとも、争いでか動し得べき。我と彼との愛こそ淤泥おでいの中に輝うちく  
 玉の如きものなれ、我はこの一つの穢れざるを抱いだきて、この世  
 の渾すべて穢れたるを忘れん。

貫一はかく自ら慰めて、さすがに彼の巧言を憎し可恨うらめしとは  
 思ひつつも、枉まげてさあらぬ体ていに聴きゐたるなりけり。

「それで、この話は宮みさんも知つてゐるのですか」

「薄々うすうすは知つてゐる」

「では未だ宮まさんの意見は御聞にならんですか？」

「それは、何だ、一寸聞いたがの」

「宮さんはどう申してをりました」

「宮か、宮は別にどうといふ事は無いのだ。御父様おとつさんや御母様のおつかさんの宜よろしいやうにと云ふので、宮の方には異存いっせんは無ないのだ、あれにもすつかり訳を説いて聞かしたところが、さう云ふ次第ならばと、漸やうやく得心とくしんがいつたのだ」

断いっはりじて詐いつはりなるべしと思ひながらも、貫一の胸むねは跳をりぬ。

「はあ、宮さんは承知しょうちを為なしましたので？」

「さう、異存いっせんは無ないのだ。で、お前も承知しょうちしてくれ、なう。一寸聞きけば無理むりのやうではあるが、その実少じつしも無理むりではないのだ。私わしの今話いまわした訳はお前にも能よく解とつたらうが、なう」

「はい」

「その訳が解とつたら、お前も快こく承知しょうちしてくれ、なう。なう、貫一」

「はい」

「それではお前も承知をしてくれるな。それで私も多きに安心した。悉くはしい事は何れ又寛ゆつくり緩話を為やう。さうしてお前の頼も聴かうから、まあ能く種々考へて置くが可いいの」

「はい」

## 第七章

熱海は東京に比して温きこと十余度なれば、今日漸やうやく一月の半を過ぎぬるに、梅林ばいりんの花は二千本の梢こずえに咲乱れて、日に映うつろへる光は玲瓏れいろうとして人の面おもてを照し、路みちを埋うづむる幾斗いくとの清香せいこうは凝こりて掬むすぶに堪たへたり。梅の外ほかには一木いちぼく無く、処々ところどころの乱石の低く横よこたはるのみにて、地は坦たひらかに氈せんを鋪しきたるやうの芝生しばふの園うちの中を、

玉の碎けて迸り、練の裂けて飜る如き早瀬の流ありて横さまに貫けり。後に負へる松杉の緑は麗に霽れたる空を攢してその頂いただきに方りて懶げに懸れる雲は眠るに似たり。習との風もあらぬに花は頻しきりに散りぬ。散る時に軽く舞ふを鶯は争ひて歌へり。

宮は母親と連立ちて入来りぬ。彼等は橋を渡りて、船板の牀几ししょうぎを据ゑたる木の下を指して緩く歩めり。彼の病は未だ快からぬにや、薄仮粧うすげしやうしたる顔色も散りたる葩はなびらのやうに衰へて、足の運はこびも怠げに、動すれば頭の低るるを、思出しては努めて梢を眺むながるなりけり。彼の常として物案すれば必ず唇を咬むかなり。彼は今頻しきりに唇を咬みたりしが、

「御母さん、どうしませうねえ」

いと好く咲きたる枝を飽かず見上げし母の目は、この時漸く娘に転りぬ。

「どうせうたつて、お前の心一つぢやないか。初発はしめにお前が適いきたいといふから、かう云ふ話にしたのぢやないかね。それを今更……」

「それはさうだけれど、どうも貫かんいっ一さんの事が気になつて。御父おとつさんはもう貫一さんに話を為なすつたらうか、ねえ御母おつかさん」

「ああ、もう為すつたらうとも」

宮は又唇を咬みぬ。

「私は、御母さん、貫一さんに顔が合されないわね。だから若もし適ゆくのなら、もう逢あはずに直すつと行つて了しまひたいのだから、さう云ふ都合にして下さいな。私はもう逢あはずに行くわ」

声は低くなりて、美き目は湿うるほへり。彼は忘れざるべし、その涙を拭ぬぐへるハンカチーフは再び逢あはざらんとする人の形見なるを。

「お前がそれ程に思ふのなら、何で自分から適いきたいとお言ひなのだえ。さう何時いつまでも気が迷つてゐては困るぢやないか。一日経たてば一日だけ話が運ぶのだから、本当にどうとも確然しつかりき極めなくては可いけないよ。お前が可厭いやなもの無理にお出いでといふのぢやないのだから、断るものなら早く断らなければ、だけれど、今になつて断ると云つたつて……」

「可いいわ。私は適くことは適くのだけれど、貫一さんの事を考へると情無くなつて……」

貫一が事は母の寢覚にも苦むところなれば、娘のその名を言ふ度たびに、犯せる罪をも歌はるる心地して、この良縁の喜ぶべきを思ひつつも、さすがに胸を開きて喜ぶを得ざるなり。彼は強しひて宮を慰めんと試みつ。兼ねては自ら慰むるなるべし。

「お父とうさんからお話があつて、貫一さんもそれで得心がいけば、

済む事だし、又お前が彼方へ適つて、末々まで貫一さんの力に  
 なれば、お互の仕合と云ふものだから、其処を考へれば、貫一さ  
 んだつて……、それに男と云ふものは思切が好いから、お前が  
 心配してゐるやうなものではないよ。これなり遇はずに行くな  
 んて、それはお前却つて善くないから、矢張逢つて、丁と話を  
 して、さうして清く別れるのさ。この後とも末長く兄弟で往来  
 をしなければならぬものだもの。

いづれ今日か明日には御音信があつて、様子が解らうから、  
 さうしたら還つて、早く支度に掛らなければ」

宮は牀几に倚りて、半は聴き、半は思ひつつ、膝に散来る葩  
 を拾ひては、おのれの唇に代へて連に咬砕きぬ。鶯の声の絶間  
 を流の音は咽びて止まず。

宮は何心無く面を拳るとともに稍隔てたる木の間隠に男の漫行

する姿を認めたり。彼は忽ち眼を着けて、木立は垣の如く、花は幕の如くに遮る隙を縫ひつつ、姑くその影を逐ひたりしが、遂に誰をや見出しけん。慌忙く母親に叫けり。彼は急に牀几を離れて五六歩進行きしが、彼方よりも見付けて、逸早く呼びぬ。

「其処に御出でしたか」

その声は静なる林を動して響きぬ。宮は聞くと斉く、恐れたる風情にて牀几の端に竦りつ。

「はい、唯今し方参つたばかりでございます。好くお出掛でございましたこと」

母はかく挨拶しつつ彼を迎へて立てり。宮は其方を見向きもやらで、彼の急足に近く音を聞けり。

母子の前に顕れたる若き紳士は、その誰なるやを説かずもあらなん。目覚く大なる金剛石の指環を輝かせるよ。柄には緑色

の玉を獅子頭に彫みて、象牙の如く瑩潤に白き杖を携へたるが、その尾をもて低き梢の花を打落し打落し、

「今お留守へ行きまして、此処だといふのを聞いて追懸けて来た訳です。熱いぢやないですか」

宮はやうやう面を向けて、さて淑に立ちて、恭く礼するを、唯継は世にも嬉しげなる目して受けながら、なほ飽くまでも倨り高るを忘れざりき。その張りたる腮と、への字に結べる薄唇と、尤異き金縁の目鏡とは彼が尊大の風に尠からざる光彩を添ふるや疑無し。

「おや、さやうでございましたか、それはまあ。余り好い御天氣でございますから、ぶらぶらと出掛けて見ました。真に今日はお熱いくらゐでございます。まあこれへお掛遊ばして」

母は牀几を払へば、宮は路を開きて傍に佇めり。

「あなた貴方がたもお掛けなさいましな。今朝です、東京から手紙で、急用があるから早速帰るやうに——と云ふのは、今度私が一寸した会社を建てるのです。外国へ此方こちらの塗物を売込む会社。これは去年中からの計画で、いよいよこの三四月頃には立派に出来上る訳でありますから、私も今は随分せはし忙しい体、なにしろ社長ですからな。それで私が行かなければ解らん事があるので、呼びに来た。で、翌あすの朝立たなければならぬのであります」

「おや、それは急な事で」

「貴方がたも一所いっしょにお立ちなさらんか」

彼は宮の顔を偷視ぬすみつ。宮は物言はんけしき気色もなくて又母の答へぬ。

「はい、難有ありがたう存じます」

「それとも未だま御在おいでですか。宿屋に居るのも不自由で、面白くも

ないぢやありませんか。来年あたりは一つ別荘でも建てませう。何の難わかは無ない事です。地面を広く取つてその中に風流な田舎家あなやかやを造るです。食物などは東京から取寄せて、それでなくては実は保養には成らん。家が出来てから寛ゆつくり緩遊ゆるびに来るです」

「結構でございますね」

「お宮さんは、何ですか、かう云ふ田舎の静な所が御好なの？」

宮は笑あざを含みて言はざるを、母は傍かたはらより、

「これはもう遊ぶ事なら嫌きらひはございませんので」

「はははははは誰もさうです。それでは以後盛これからさかんにお遊あそびなさ

い。どうせ毎日用は無ないだから、田舎でも、東京でも西京さいきやうで

も、好きな所へ行つて遊ぶのです。船は御嫌おきらひですか、ははあ。

船が平気だと、支那しなから亜米利加アメリカの方を見物がてら今度旅行を

為なして来るのも面白いけれど。日本の内ぢや遊山ゆざんに行あるいたところ

で知れたもの。どんなに贅沢ぜいたくを為たからと云つて」

「御帰おかへりになつたら一日赤坂の別荘の方へ遊びにお出下いでください、ねえ。

梅が好いのであります。それは大きな梅林が有つて、一本々々種の違ふのを集めて二百本もあるが、皆老木ばかり。この梅などは全まるで為方しかたが無い！　こんな若い野梅のうめ、薪まきのやうなもので、庭に植ゑられる花ぢやない。これで熱海の梅林も凄すさまじい。是非内のお目に懸けたいでありますね、一日遊びに来て下さい。御馳走ごちそうを為ますよ。お宮さんは何が所好すきですか、ええ、一番所好なもののは？」

彼は陰ひそかに宮と語らんことを望めるなり、宮はなほ言はずして可羞はづかしげに打笑うちわらめり。

「で、何日御帰いつでありますか。明朝あした一所に御発足おたちにはなりませんか。此地こつちにさう長く居なければならんと云ふ次第ではないの

でせう、そんなら一所にお立ちなすつたらどうであります」

「はい、難有ありがたうございますが、少々宅の方の都合がございまして、二三日内うちには音信たよりがございませう、その音信を待ちまして、実は帰ることに致してございませうから、折角の仰せですが、はい」

「ははあ、それぢやどうもな」

唯継は例の倨おごりて天を睨にらむやうに打仰うちあふぎて、杖の獅子頭ししがしらを撫廻なでまはしつ、少時思案しばらくする体ていなりしが、やをら白羽しろはぶ二重のハンカチへイフを取とり出して、片手ひとに一揮ひ揮ふるよと見れば鼻はなを拭ぬぐへり。堇花ヴァイオレットの香かを咽むせばさるるばかりに薰くんじ遍わたりぬ。

宮も母もその鋭にほひき匂におひに驚おどけるなり。

「ああと、私これから少し散歩しやうと思ふのであります。これから出て、流つに沿ついて、田圃たんぼの方を。私未まだ知らんけれども、

余程景色が好いさう。御一所にと云ふのだが、大分跡程みちが有るから、貴方あなたは御迷惑ごめいわくであります。二時間ばかりお宮さんを御貸し下さいな。私一人で歩いてもつまらない。お宮さんは胃いが不良わるいのだから散歩は極めて薬き、これから行つて見ませう、ねえ」

彼は杖を取直してはや立たんとす。

「はい。難有ありがたうございます。お前お供をお為しかい」

宮の遅ためらふを見て、唯継ことさらは故に座たを起てり。

「さあ行つて見ませう、ええ、胃病の薬です。さう因循いんじゆんしてゐては可いけない」

つと寄りて軽く宮の肩を拊うちぬ。宮は忽たちまち面おもてを紅あかめて、如何いかにとも為せん術すべを知らざらんやうに立惑たちまじひてゐたり。母の前をも憚はばらぬ男の馴なれ々しさを、憎にくしとはあらねど、己おのれの忒はしたなきやうに慙はづるなりけり。

得も謂はれぬその仇無きの身に浸遍るに堪へざる思は、漫に唯継の目の中に踞れて異き独笑となりぬ。この仇無き媿しらしき、美き娘の柔き手を携へて、人無き野道の長閑なるを語ひつつ行かば、如何ばかり楽からんよと、彼ははや心も空になりて、「さあ、行つて見ませう。御母さんから御許が出たから可いではありませんか、ねえ、貴方、宜いでありませう」

母は宮の猶羞づるを見て、

「お前お出かい、どうお為だえ」

「貴方、お出かいなどと有仰つちや可けません。お出なさいと命令を為すつて下さい」

宮も母も思はず笑へり。唯継も後れじと笑へり。

又人の入来る氣勢なるを宮は心着きて窺ひしに、姿は見えずして靴の音のみを聞けり。梅見る人か、あらぬか、用ありげに

忙<sup>せはし</sup>く踏立つる足音なりき。

「ではお前<sup>まい</sup>お供をおしな」

「さあ、行きますせう。直<sup>ぢき</sup>其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>まででありますよ」

宮は小<sup>ちひ</sup>き声<sup>こゑ</sup>して、

「御<sup>おつ</sup>母<sup>か</sup>さんも一<sup>い</sup>処<sup>で</sup>に御<sup>おい</sup>出<sup>で</sup>なさいな」

「私<sup>わ</sup>かい、まあお前<sup>まい</sup>お供をおしな」

母親を伴ひては大いに風流ならず、頗<sup>すこ</sup>る妙<sup>まが</sup>ならずと思へば、

唯<sup>ただ</sup>繼<sup>ついで</sup>は飽くまでこれを防<sup>ま</sup>がんと、

「いや、御母さんには却<sup>かへ</sup>つて御迷惑です。道<sup>みち</sup>が良くないから御

母さんにはとても可<sup>あ</sup>けますまい。實際<sup>じつじやう</sup>貴<sup>た</sup>方<sup>た</sup>には切<sup>き</sup>つてお勧め申

されな<sup>い</sup>。御迷惑は知れてゐる。何も遠方へ行くのではないの

だから、御母さんが一<sup>い</sup>処<sup>で</sup>でなくても可<sup>あ</sup>いぢやありませんか、ね

え。私折角思立つたものでありますから、それでは一寸其<sup>その</sup>処<sup>ところ</sup>ま

でで可いから附合つて下さい。貴女が可厭だつたら直に帰りますよ、ねえ。それはなかなか好い景色だから、まあ私に騙されたいと思つて来て御覧なさいな、ねえ」

この時忙しげに聞えし靴音ははや止みたり。人は出取りしにあらで、七八間彼方なる木蔭に足を停めて、忍びやかに様子を窺ふなるを、此方の三人は誰も知らず。イめる人は高等中学の制服の上に焦茶の外套を着て、肩には古りたる象皮の学校鞆を掛けたり。彼は間貫一にあらずや。

再び靴音は高く響きぬ。その驟なると近きとに驚きて、三人は始めて音する方を見遣りつ。

花の散りかかる中を進来つつ学生は帽を取りて、

「姨さん、参りましたよ」

母子は動顛して殆ど人心地を失ひぬ。母親は物を見るべき力

もあらず呆れ果てたる目をば空く瞪りて、少時は石の如く動かず、宮は、あはれ生きてあらんより忽ち消えてこの土と成了らんことの、せめて心易さを思ひつつ、その淡白き唇を啖裂かんとすばかりに咬みて咬みて止まざりき。

想ふに彼等の驚愕と恐怖とはその殺せし人の計らずも今生きて来れるに会へるが如きものならん。氣も不覺なれば母は譫語のやうに言出せり。

「おや、お出なの」

宮は些少なりともおのれの姿の多く彼の目に触れざらんやうにと冀へる如く、木蔭に身を側めて、打過む呼吸を人に聞かれじとハンカチーフに口元を掩ひて、見るは苦けれども、見ざるも辛き貫一の顔を、俯したる額越に窺ひては、又唯繼の気色をも氣遣へり。

唯繼は彼等の心々にさばかりの大波瀾ありとは知らざれば、聞及びたる鴨沢の食客しよくかくの来れるよと、例の金剛石ダイヤモンドの手を見よがしに杖を立てて、誇りかに梢を仰ぐ腮あぎしを張れり。

貫一は今回こたびの事も知れり、彼の唯繼なる事も知れり、既にこの場の様子をも知らざるにはあらねど、言ふべき事は後にぞ犇ひしと言はん、今は姑しばらく色にも出さじと、裂けもしぬべき無念の胸をやうやう鎮しづめて、苦くるしき笑顔ゑがほを作りてゐたり。

「宮みやさんの病気はどうでございます」

宮は耐たまりかねて窃ひそかにハンカチーフを咬かみ緊しめたり。

「ああ、大きに良いので、もう二三日内うちには帰らうと思つてね。お前さん能よく来られましたね。学校の方は？」

「教場の普請やすみを為るところがあるので、今日半日と明日明後日と休課やすみになつたものですから」

「おや、さうかい」

唯繼と貫一とを左右に受けたる母親の絶体絶命は、あやま過ちて野  
 中の古井ふるゐに落ちたる人の、沈みも果てず、上りも得え為せず、命の  
 綱あやふと危くも取とり継りたる草の根を、鼠ねずみの来りて嚙かむに遭あふと云へ  
 る比たとへ喩いに最いとよ能く似たり。如何いかに為べきかと或あるひは懼おそれ、或は惑ひ  
 たりしが、終つひにその免まぬるまじきを知りて、彼はやうやう胸を定  
 めつ。

「丁度宅から人が参りましてございますから、甚はなはだ勝手がまし  
 うございますが、私等どもはこれから宿へ帰りますのでございますか  
 ら、いづれ後程伺ひに出ますのでございますが……」

「ははあ、それでは何でありますか、明朝あすは御一所に帰れるや  
 うな都合になりますな」

「はい、話の模様よに因りましては、さやう願はれるかも知れま

せんので、いづれ後程には是非伺ひまして、……」

「成程、それでは残念ですが、私も散歩は罷やめめます。散歩は罷めてこれから帰ります。帰つてお待申してゐますから、後には是非お出いで下くださいよ。宜よろしいですか、お宮さん、それでは後にきつとお出いでなさいよ。誠に今日は残念でありますな」

彼は行かんとして、更に宮の傍そば近く寄より来て、

「貴方あなた、きつと後のちにお出いでなさいよ、ええ」

貫一は瞬まばたきも為せで視みてゐたり。宮は窮して彼に会あひ積たまひへ為しかね

つ。娘氣はづかしさの可あはれさにかくあるとのみ思へる唯ただ繼つは、益ますます寄よ添そひつ

つ、舌した息たるきまでことばに語やを和やはらげて、

「宜よろしいですか、来きなくては可かけませんよ。私待まつてゐますから」

貫一まなこの眼まなこは燃もゆるが如ごとき色いろを作なして、宮の横よこ顔かほを睨ねめつたり。

彼は懼おそれて傍わきめ目めをも転ふらざりけれど、必かなずさあるべきを想おもひて

ひとり心を慄かせしが、猶唯繼の如何なることを言出でんも知られずと思へば、とにもかくにもその場を繕ひぬ。母子の為には幾許の幸なりけん。彼は貫一に就いて半点の疑ひをも容れず、唯賢くまでも悦き宮に心を遺して行けり。

その後影を透すばかりに目成れる貫一は我を忘れて姑く佇めり。両個はその心を測りかねて、言も出でず、息をさへ凝して、空く早瀬の音の聒きを聴くのみなりけり。

やがて此方を向きたる貫一は、尋常ならず激して血の色を失へる面上に、多からんとすれども能はずと見ゆる微少の笑を漏して、

「宮さん、今の奴はこの間の骨牌に来てゐた金剛石だね」

宮は俯きて唇を咬みぬ。母は聞かざる為して、折しも啼ける鶯の木の間に窺へり。貫一はこの体を見て更に嗤笑ひつ。

「夜見たらそれ程でもなかつたが、昼間見ると実に氣障きざな奴だね、さうしてどうだ、あの高慢つらちきの面は！」

「貫一さん」母は卒にはかに呼びかけたり。

「はい」

「お前まへさん翁おきなさんから話はお聞きでせうね、今度の話は」

「はい」

「ああ、そんなら可いけれど。不断のお前さんにも似合はない、そんな人の悪口あつこうなどを言ふものぢやありませんよ」

「はい」

「さあ、もう帰りませう。お前さんもお草臥くたびれだらうから、お湯にでも入つて、さうして未だまだ御午餐おひる前なのでせう」

「いえ、瀧車きしやの中で鮓すしを食べました」

三人みたりは俱ともに歩始あゆみはじめぬ。貫一は外套オバコウトの肩を払はれて、後うしろを捻向ねぢむ

けば宮と面おもてを合せたり。

「其処そこに花が粘ついてゐたから取つたのよ」

「それは難ありがた有うう!!!」

## 第八章

打霞うちかすみたる空ながら、月の色の匂滴にほひこぼるるやうにして、微白ほのしろき海は縹渺ひようびようとして限を知らず、譬たとへば無邪気なる夢を敷けるに似たり。寄せては返す波の音も眠ねむげに怠りて、吹来る風は人を酔はしめんとす。打連れてこの浜辺しんべんを逍遙しょうようせるは貫一と宮となりけり。

「僕は唯胸ただが一杯で、何も言ふことが出来ない」  
五歩いつあしむあし六歩行きし後宮はやうやう言出でつ。

「堪忍かんにんして下さい」

「何も今更謝あやまることは無いよ。一体今度の事は翁おぢさん姨おばさんの意から出たのか、又はお前さんも得心であるのか、それを聞けば可いいのだから」

「……………」

「此地こつちへ来るまでは、僕は十分信じてをつた、お前さんに限つてそんな了簡りようけんのあるべき筈はずは無いと。実は信じるも信じないも有りはしない、夫婦なつかの間で、知れきつた話だ。

昨夜翁ゆふべさんから悉くはしく話があつて、その上に頼むといふ御言おことばだ」  
差含さしぐむ涙に彼の声は顫ふるひぬ。

「大恩を受けてゐる翁さん姨さんの事だから、頼むと言はれた日には、僕の体からだは火水ひみづの中へでも飛込まなければならぬのだ。翁さん姨さんの頼なら、無論僕は火水の中へでも飛込む精神だ。

火水の中へなら飛込むがこの頼ばかりは僕も聴くことは出来な  
 いと思つた。火水の中へ飛込めと云ふよりは、もつと無理な、  
 余り無理な頼ではないかと、僕は濟まないけれど翁さんを恨ん  
 でゐる。

さうして、言ふ事も有らうに、この頼を聴いてくれれば洋行  
 さして遣やるとお言ひのだ。い……い……いかに貫一は乞食士族  
 の孤児みなしごでも、女房を売つた錢で洋行せうとは思はん！」

貫一は踏留ふみとどまりて海に向ひて泣けり。宮はこの時始めて彼に寄  
 添きひて、氣遣きづかしげにその顔を差覗さしのぞきぬ。

「堪忍して下さいよ、皆私みんなが……どうぞ堪忍して下さい」

貫一の手すがに縋すがりて、忽たちまちその肩おもてに面おしあを推当おしあつると見れば、彼  
 も泣音なくねを洩もらすなりけり。波は漾々ようようとして遠く烟けむり、月は朧おぼろに一  
 湾まぎの真砂まごしを照して、空も汀みぎはも淡白うすしろき中に、立尽せる二人の姿は

墨の滴りたるやうの影を作れり。

「それで僕は考へたのだ、これは一方には翁さんが僕を説いて、お前さんの方は姨さんが説得しやうと云ふので、無理に此処へ連出したに違無い。翁さん姨さんの頼と有つて見れば、僕は不承知を言ふことの出来ない身分だから、唯々と言つて聞いてゐたけれど、宮さんは幾多でも剛情を張つて差支無いのだ。どうあつても可厭だとお前さんさへ言通せば、この縁談はそれで破れて了ふのだ。僕が傍に居ると智慧を付けて邪魔を為ると思ふものだから、遠くへ連出して無理往生に納得させる計だなど考着くと、さあ心配で心配で僕は昨夜は一夜寐はしない、そんな事は万々有るまいけれど、種々言はれる為に可厭と言はれない義理になつて、若や承諾するやうな事があつては大変だと思つて、家は学校へ出る積で、僕はわざわざ様子を見に来たのだ。

馬鹿な、馬鹿な！ 貫一ほどの大馬鹿者が世界中を捜して何処どこに在る!! 僕はこれ程自分が大馬鹿とは、二十五歳の今日まで

知し……知……知らなかつた」

宮は可かな悲しきと可おそ懼ろしきに襲はれて少すこく声しさへ立てて泣きぬ。

憤いかりを抑おさふる貫一の呼吸は漸やうやく乱れたり。

「宮みいさん、お前は好くも僕を欺いたね」

宮は覚そのえず慄おそけり。

「病氣と云つてここへ来たのは、富山と逢ふ為だらう」

「まあ、そればかりは……」

「おおそればかりは？」

「余あんまり邪推が過ぎるわ、余り酷ひどいわ。何なんぼ何でも余り酷い事を」

泣入る宮を尻目に挂かけて、

「お前でも酷いと云ふ事を知つてゐるのかい、宮さん。これが酷

いと云つて泣く程なら、大馬鹿者にされた貫一は……貫一は……貫一は血の涙を流しても足りは為んよ。

お前が得心せんものなら、此地へ来るに就いて僕に一言も言はんと云ふ法は無からう。家を出るのが突然で、その暇が無かつたなら、後から手紙を寄来すが可いぢやないか。出抜いて家を出るばかりか、何の便も為んところを見れば、始から富山と出会ふ手筈になつてゐたのだ。或は一所に來たのか知れはしない。宮さん、お前は奸婦だよ。姦通したも同じだよ」

「そんな酷いことを、貫一さん、余りだわ、余りだわ」

彼は正体も無く泣顔れつつ、寄らんとするを貫一は突退けて、  
「操を破れば奸婦ぢやあるまいか」

「何時私が操を破つて？」

「幾許大馬鹿者の貫一でも、おのれの妻が操を破る傍に付いて

見てゐるものかい！ 貫一と云ふ歴れきとした夫を持ちながら、その夫を出抜いて、余所よその男と湯治に来てゐたら、姦通してゐないといふ証拠が何処どこに在る？」

「さう言はれて了しまふと、私は何とも言へないけれど、富山さんと逢ふの、約束してあつたのと云ふのは、それは全く貫一さんの邪推よ。私等わたしたちが此地こつちに来てゐるのを聞いて、富山さんが後から尋ねて来たのだわ」

「何で富山が後から尋ねて来たのだ」

宮はその唇くちびるに釘打くぎたれたるやうに再び言ことばは出でいざりき。貫一は、かく詰責あやまちせる間に彼の必ず過あやまちを悔い、罪を詫わびて、その身は未か命おろまでも己おのれの欲するままならんことを誓ふべしと信じたりしなり。よし信ぜざりけんも、心陰こころひそかに望のぞみたりしならん。如何いかにぞや、彼は露ばかりもさせる気色けしきは無くて、引けども朝顔の

垣を離るまじき一箇の心變を、貫一はなかなか信しからず覺ゆるまでに呆れたり。

宮は我を棄てたるよ。我は我妻を人に奪はれたるよ。我命にも換へて最愛みし人は芥の如く我を悪めるよ。恨は彼の骨に徹し、憤は彼の胸を劈きて、ほとほと身も世も忘れたる貫一は、あはれ奸婦の肉を啖ひて、この熱腸を冷さんとも思へり。忽ち彼は頭腦の裂けんとするを覚えて、苦痛に得堪へずして尻居に僵れたり。

宮は見るより驚く違もあらず、諸共に砂に塗れて搔抱けば、閉ぢたる眼より乱落つる涙に浸れる灰色の頬を、月の光は悲しげに彷徨ひて、迫れる息は凄く波打つ胸の響を伝ふ。宮は彼の背後より取縋り、抱緊め、撼動して、戦く声を励せば、励す声は更に戦きぬ。

「どうして、貫一さん、どうしたのよう！」

貫一は力無げに宮の手を執れり。宮は涙に汚れたる男の顔をいと懇ねんごろに拭ぬぐひたり。

「ああ、みい宮さんかうして二人が一処どこに居るのも今夜ぎりだ。お前が僕の介抱をしてくれるのも今夜ぎり、僕がお前に物を言ふのも今夜ぎりだよ。一月の十七日、宮さん、善く覚えてお置き。来年の今月今夜は、貫一は何処どこでこの月を見るのだか！ 再来年さらいねんの今月今夜……十年後のちの今月今夜……一生を通して僕は今月今夜を忘れん、忘れるものか、死んでも僕は忘れんよ！ 可いか、宮さん、一月の十七日だ。来年の今月今夜になつたならば、僕の涙で必ず月は曇らして見せるから、月が……月が……月が……曇つたらば、宮さん、貫一は何処かでお前を恨んで、今夜のやうに泣いてゐると思つてくれ」

宮は挫ぐばかりに貫一に取着きて、物狂う咽入りぬ。

「そんな悲い事をいはずに、ねえ貫一さん、私も考へた事があるのだから、それは腹も立たうけれど、どうぞ堪忍して、少し辛抱してゐて下さいな。私はお肚なかの中には言ひたい事が沢山あるのだけれど、余り言難い事ばかりだから、口へは出さないけれど、唯一たったひとこと言ひたいのは、私は貴方あなたの事は忘れはしないわ——私は生涯忘れはしないわ」

「聞きたくない！ 忘れんくらゐなら何故見棄てた」

「だから、私は決して見棄てはしないわ」

「何、見棄てない？ 見棄てないものが嫁に帰ゆくかい、馬鹿な！ 二人の夫が有てるかい」

「だから、私は考へてゐる事があるのだから、も少し辛抱すこしてそれを——私の心を見て下さいな。きつと貴方の事を忘れない

証拠を私は見せるわ」

「ええ、狼狽うろたへてくだらんことを言ふな。食ふに窮こまつて身を売らなければならんのぢやなし、何を苦んで嫁に帰ゆくのだ。内には七千円も財産が在つて、お前は其処そこの一人娘ぢやないか、さうして婿まで極きまつてゐるのぢやないか。その婿も四五年の後は学士になると、末の見込も着いてゐるのだ。しかもお前はその婿を生涯忘れないほどに思つてゐると云ふぢやないか。それに何の不足が有つて、無理にも嫁に帰ゆかなければならんのだ。天下にこれくらゐ理わけの解らん話が有らうか。どう考へても、嫁に帰ゆくべき必用の無いものが、無理に算段をして嫁に帰ゆかうと為るには、必ず何ぞ事情が無ければ成らない。

婿むこが不足なのか、金持と縁を組みたいのか、主意は決してこの二件ふたつの外にはあるまい。言つて聞かしてくれ。遠慮は要いらな

い。さあ、さあ、宮さん、遠慮することは無いよ。一旦夫に定めたものを振捨てるくらゐの無遠慮なものが、こんな事に遠慮も何も要るものか」

「私が悪いのだから堪忍して下さい」

「それぢや婿が不足なのだね」

「貫一さん、それは余りあんまだわ。そんなに疑ふのなら、私はどんな事でもして、さうして証拠を見せるわ」

「婿に不足は無い？ それぢや富山が財かねがあるからか、して見るとこの結婚は慾からだね、僕の離縁も慾からだね。で、この結婚はお前も承知をしたのだね、ええ？」

翁おぢさんをば姨あやさんに迫られて、余義無くお前も承知をしたのならば、僕の考で破談にする方は幾許いくばくもある。僕一人が悪者になれば、翁さん姨あやさんを始めお前の迷惑にもならずぶちこはに打壊ぶちこはして了ふ

ことは出来る、だからお前の心持を聞いた上で手段があるのだが、お前も適いつて見る気は有るのかい」

貫一まなこの眼はその全身の力を聚あつめて、思悩める宮が顔を鋭く打目成うちまもれり。五歩行き、七歩行き、十歩を行けども、彼の答はあらざりき。貫一は空を仰ぎて太息ためいきしたり。

「宜よろしい、もう宜い。お前の心は能く解つた」

今ははや言ふも益無ければ、重ねて口を開かざらんかと打按うちあんじつつも、彼は乱るる胸を寛ゆるうせんが為に、強しひて目を放ちて海かたの方を眺めたりしが、なほ得堪へずやありけん、又言はんとして願ねがれば、宮は傍かたはらに在らずして、六七間後あとなる波打際なみうちぎはに面おもてを掩おほひて泣けるなり。

可なやま悩しげなる姿の月に照され、風に吹れて、あはれ消えもしぬべく立ち迷へるに、森びようびよう々たる海はしの端はしの白く顔くづれて波と打寄せ

たる、艶えんに哀あはれを尽せる風情ふぜいに、貫一いかりは憤いかりをも恨いかりをも忘れて、少時しばしは画みを見る如き心地もしつ。更に、この美き人も今は我物ならずと思へば、なかなか夢かとも疑へり。

「夢だ夢だ、長い夢を見たのだ！」

彼は頭かしらを低たれて足の向ふままに汀みぎはの方かたへ進行しんぎしが、泣く泣く歩来あゆみきたれる宮と互あひに知らで行合あひあひたり。

「宮さん、何を泣くのだ。お前は些ちつとも泣くことは無いぢやないか。空涙くうなみ！」

「どうせさうよ」

殆ど聞得ほとんべからざるまでにその声は涙に乱れたり。

「宮さん、お前に限つてはさう云ふ了簡は無からうと、僕は自分を信じるほどに信じてゐたが、それぢややつぱりお前の心は慾かねだね、財かねなのだね。如何いかに何でも余り情無い、宮さん、お前

はそれで自分に愛相は尽きないかい。

好い出世をして、さぞ栄耀も出来て、お前はそれで可からうけれど、財に見換へられて棄てられた僕の身になつて見るが可い。無念と謂はうか、口惜いと謂はうか、宮さん、僕はお前を刺殺して——驚くことは無い！——いつそ死んで了ひたいのだ。それを恠へてお前を人に奪れるのを手出しも為ずに見てゐる僕の心地は、どんなだと思ふ、どんなだと思ふよ！ 自分さへ好ければ他はどうなうともお前はかまはんのかい。一体貫一はお前の何だよ。何だと思ふのだよ。嶋沢の家には厄介者の居候でも、お前の為には夫ぢやないかい。僕はお前の男妾になつた覚は無いよ、宮さん、お前は貫一を玩弄物にしたのだね。平生お前の仕打が水臭い水臭いと思つたも道理だ、始から僕を一時の玩弄物の意で、本当の愛情は無かつたのだ。さうとは知

らずに僕は自分の身よりもお前を愛してゐた。お前の外には何たのしみの楽も無いほどにお前の事を思つてゐた。それ程までに思つてゐる貫一を、宮さん、お前は どうしても棄てる氣かい。

それは無論金力の点では、僕と富山とは比較くらべものにはならない。彼方あつちは屈指の財産家、僕は固もとより一介の書生だ。けれども善く宮さん考へて御覽、ねえ、人間の幸福ばかりは決して財かねで買へるものぢやないよ。幸福と財とは全く別物だよ。人の幸福の第一は家内の平和だ、家内の平和は何か、夫婦が互に深く愛すると云ふ外は無い。お前を深く愛する点では、富山如きが百人寄つても到底僕の十分の一だけでも愛することは出来まい、富山が財産で誇るなら、僕は彼等の夢想することも出来んこの愛情で争つて見せる。夫婦の幸福は全くこの愛情の力、愛情が無ければ既に夫婦は無いのだ。

己おのれの身に換へてお前を思つてゐる程の愛情を有もつてゐる貫一を棄てて、夫婦間の幸福には何の益も無い、寧むしろ害になり易やすい、その財産を目的に結婚を為るのは、宮さん、どういふ心得なのだ。

然し財かねといふものは人の心を迷はすもので、智者の学者の豪傑のと、千万人に勝すぐれた立派な立派な男子さへ、財の為には随分ひど甚い事も為るのだ。それを考へれば、お前が偶ふつと然氣の変つたのも、或あるひは無理も無いのだらう。からして僕はそれは咎とがめない、但ただもう一遍、宮さん善く考へて御覽な、その財が——富山の財産がお前の夫婦間にどれ程の効力があるのかと謂いふことを。

雀すずめが米を食ふのは僅わづか十粒か二十粒だ、俵とつぶで置いてあつたつて、一度に一俵食へるものぢやない、僕は鳴沢の財産を譲つてもらはんでも、十粒か二十粒の米に事を欠いて、お前ひもじに餓い思

を為せるやうな、そんな意気地の無い男でもない。若し間違つて、その十粒か二十粒の工面が出来なかつたら、僕は自分は食はんでも、決してお前に不自由は為せん。宮さん、僕はこれ……これ程までにお前の事を思つてゐる！」

貫一は霏する涙を払ひて、

「お前が富山へ嫁く、それは立派な生活をして、栄耀も出来やうし、榮も出来やう、けれどもあれだけの財産は決して息子の嫁の為に費さうとて作られた財産ではない、と云ふ事をお前考へなければならんよ。愛情の無い夫婦の間に、立派な生活が何だ！ 榮耀が何だ！ 世間には、馬車に乗つて心配さうな青い顔をして、夜会へ招かれて行く人もあれば、自分の妻子を車に載せて、それを自分が挽いて花見に出掛ける車夫もある。富山へ嫁けば、家内も多ければ人出入も、劇しし、従つて気兼も苦勞

も一通の事ぢやなからう。その中へ入つて、氣を傷めながら愛してもをらん夫を持つて、それでお前は何を樂たのしみに生きてゐるのだ。さうして勤めてゐれば、末にはあの財産がお前の物になるのかい、富山の奥様と云へば立派かも知れんけれど、食ふところは今の雀の十粒か二十粒に過ぎんのぢやないか。よしんばあの財産がお前の自由になるとしたところで、女の身に何十万と云ふ金がどうなる、何十万の金を女の身で面白く費つかへるかい。雀に一俵の米を一度に食へと云ふやうなものぢやないか。男を持たなければ女の身は立てないものなら、一生の苦樂他人に頼よるで、女の宝とするのはその夫ではないか。何百万の財かねが有らうと、その夫が宝と為るに足らんものであつたら、女の心細さは、なかなか車に載せて花見に連れられる車夫の女房には及ばんぢやあるまいか。

聞けばあの富山の父と云ふものは、内に二人外おもてに三人も妾を置いてゐると云ふ話だ。財の有る者は大方そんな真似まねをして、妻は些ほんの床の置物にされて、謂いはば棄てられてゐるのだ。棄てられてゐながらその愛されてゐる妾よりは、責任も重く、苦勞も多く、苦くるばかりで樂たのしみは無いと謂つて可い。お前の嫁ゆく唯繼だつて、固もとより所望のぞみでお前を迎もらふのだから、当座は随分愛しも為るだらうが、それが長く続くものか、財かねが有るから好きな真似も出来る、他ほかの樂たのしみに氣が移つて、直ぢにお前の恋は冷さされて了ふのは判つてゐる。その時になつて、お前の心地こころもちを考へて御覽、あの富山の財産がその苦くるを拯すくふかい。家に沢山の財が在れば、夫に棄てられて床の置物になつてゐても、お前はそれで樂たのしみかい、満足かい。

僕が人にお前を奪とられる無念は謂いふまでも無いけれど、三年

の後のお前の後悔が目に見えて、心変をした憎いお前ぢやあるけれど、やつぱり可哀さうでならんから、僕は真実で言ふのだ。

僕に飽きて富山に惚れてお前が嫁くのなら、僕は未練らしく何も言はんけれど、宮さん、お前は唯立派なところへ嫁くといふそればかりに迷はされてゐるのだから、それは過つてゐる、それは実に過つてゐる、愛情の無い結婚は究竟自他の後悔だよ。今夜この場のお前の分別一つで、お前の一生の苦楽は定るのだから、宮さん、お前も自分の身が大事と思ふなら、又貫一が不便だと思つて、頼む！ 頼むから、もう一度分別を為直してくれないか。

七千円の財産と貫一が学士とは、二人の幸福を保つには十分だよ。今でさへも随分二人は幸福ではないか。男の僕でさへ、お前が在れば富山の財産などを可羨いとは更に思はんに、宮

さん、お前は どうしたのだ！ 僕を忘れたのかい、僕を可愛く  
 は思はんのかい」

彼は危きを拯はんとする如く犇と宮に取着きて匂滴るる頸元  
 に沸ゆる涙を濺ぎつつ、蘆の枯葉の風に揉るるやうに身を顫せ  
 り。宮も離れじと抱緊めて諸共に顫ひつつ、貫一が臂を咬みて  
 咽泣に泣けり。

「嗚呼、私は どうしたら可からう！ 若し私が彼方へ嫁つたら、  
 貫一さんは どうするの、それを聞かして下さいな」

木を裂く如く貫一は宮を突放して、

「それぢや断然お前は嫁く気だね！ これまでに僕が言つても  
 聴いてくれんのだね。ちええ、腸の腐つた女！ 姦婦!!」

その声とともに貫一は脚を挙げて宮の弱腰をはたと踢たり。  
 地響して横様に転びしが、なかなか声をも立てず苦痛を忍びて、

彼はそのまま砂の上に泣伏したり。貫一は猛獸などを撃ちたるやうに、彼の身動も得為えせず弱々よわよわと僵たふれたるを、なほ憎にくまげに見遣みやりつつ、

「宮、おのれ、おのれ姦婦、やい！ 貴様のな、心変をしたばかりに間貫一の男一匹いつびきはな、失望の極発狂して、大事の一生を誤あやつて了しまふのだ。学問も何ももう廃やめだ。この恨の為に貫一は生きながら悪魔になつて、貴様のやうな畜生の肉を啖くらつて遣る覚悟だ。富山の令……令夫……令夫人！ もう一生お目には掛らんから、その顔を挙げて、真人間で居る内の貫一の面つらを好く見て置かないかい。長々の御恩に預つた翁おぢさん姨おばさんには一目会つて段々の御礼を申上げなければ濟まんのでありますけれど、仔細しさいあつて貫一はこのまま長の御暇おいとまを致しますから、随分お達者ごぎげんで御機嫌よろしう……宮みやさん、お前から好くさう言つておく

れ、よ、若し貫一はどうしたとお訊ねなすつたら、あの大馬鹿者は一月十七日の晩に気が違つて、熱海の浜辺から行方知れずになつて了つたと……」

宮はやにはに蹶起きて、立たんと為れば脚の痛に脆くも倒れて効無きを、漸く這寄りて貫一の脚に縋付き、声と涙とを争ひて、

「貫一さん、ま……ま……待つて下さい。貴方これから何……何処へ行くのよ」

貫一はさすがに驚けり、宮が衣の披けて雪可羞く露せる膝頭は、夥く血に染みて顫ふなりき。

「や、怪我をしたか」

寄らんとするを宮は支へて、

「ええ、こんな事はかまはないから、貴方は何処へ行くのよ、話

があるから今夜は一所に帰つて下さい、よう、貫一さん、後生だから」

「話が有ればここで聞かう」

「ここぢや私は可厭よ」

「ええ、何の話が有るものか。さあここを放さないか」

「私は放さない」

「剛情張ると蹴飛ばすぞ」

「蹴られても可いわ」

貫一は力を極めて振断れば、宮は無残に伏転びぬ。

「貫一さん」

「貫一ははや幾間を急行きたり。宮は見るより必死と起上りて、脚の傷に幾度か仆れんとしつつも後を慕ひて、

「貫一さん、それぢやもう留めないから、もう一度、もう一度……」

私は言遺いひのこした事がある」

遂つひに倒れし宮は再び起たつべき力も失せて、唯ただ声を頼たのみに彼の名を呼ぶのみ。漸やうやく朧おぼろになれる貫一くわんいちの影が一散いちさんに岡を登るが見えぬ。宮は身悶みもたえして猶呼なほ続つけつ。やがてその黒き影の岡いただきの頂たかに立てるは、此方こなたを目成まもれるならんと、宮は声の限かぎに呼べば、男の聲こゑも遙はるかに來りぬ。

「宮みやさん！」

「あ、あ、あ、貫一くわんいちさん！」

首を延べて胸みまはせども、目を瞪みはりて眺むれども、声せし後のちは黒き影の搔消かきけす如く失うせて、それかと思ひし木立の寂しげに動かず、波は悲き音を寄せて、一月十七日の月は白く愁こひしひぬ。

宮は再び恋こひしき貫一くわんいちの名を呼びたりき。

## 中編

### 第一章

新橋停車場しんばしステーションの大時計は四時を過ること二分余、東海道行の列車は既に客車の扉を鎖して、機関車に烟を噴せつつ、三十余輛を聯ねて蜿蜒えんえんとして横はりたるが、真承の秋の日影に夕榮して、窓々の硝子は燃えんとすばかりに耀けり。馭夫は右往左往に奔走して、早く早くと喚くを余所に、大踏歩の寛々たる老歐羅巴人は麦酒樽を窃みたるやうに腹突出して、桃色の服着たる十七八の娘の日本の絵日傘の柄に橙色のリボンを飾りたるを小脇に

せると推おし並び、おのれが乗物の顔して急けぐ気色しきも無く過する後ごよ  
のみとりまなこり、蚤取眼のみとりまなこになりて遅れじと所しよ体たい類いして駈かけ来る女房にようばうの、嵩かさ高たかな  
 る風呂敷包ふうよふしを抱いだくが上に、四よ歳つほどの子こを背負せおひたるが、何ど処この  
 扉かども鎖かぎしたるに狼うろた狼たふるを、車掌しよに強しよ曳びかれて漸やうく安堵あんせる間まも  
 無く、青洩あをぼな垂たれる女をの子こを率あめて、五十あ余まりの老夫おやぢのこれこも戸惑とまどひ  
 して往ゆきつ復もどりつせし揚あげ句く、馱夫ひかに曳ひかれて室内しつ内に押入お入れられ、  
いか如何いかなる罪つみやあらげなく閉たてらるる扉かどに袂たもとを介はまされて、もしも  
すくひしと救すくひを呼よぶなど、未いまだ都みやこを離はなれざるにはや旅あはれの哀あはれを見るべし。  
 五人一隊ごにんいちたいの若わかき紳士しんし等は中等室ちゆうじゆうしつの片隅かたすみに円居まじりして、その中に  
 旅行りょらしき手荷物てにものを控かへたるは一人よりあらず、他ほかは皆横浜よこはまま  
 でとも見ゆる扮装いでたちにて、紋付もんぢの袷羽織あはせはおりを着きたるもあれば、精纏せル  
 の背広せなるもあり、袴はかま着きけたるが一人、大島紬おほしまつむぎの長羽織ながはねと差向さむかひ  
 へる人ひとのみぞフロックコートを着きて、待合所まちあひにて受けし餞別せんべつの

瓶びん、函はこなどを網棚あみだなの上に片付けて、その手を摩すり払はらひつつ窓まどより首いを出だして、停車場ステーションの方かたをば、求もとむるものありげに望見のぞみたりしが、やがて藍あゐの如ごとき晚霽ばんせいの空を仰あぎて、

「不思議に好すい天氣に成なつた、なあ。この分ぶんなら大丈夫だいじゆうじゃ」

「今晚雨こんばんのうになるのも又一興またひとしほだよ、ねえ、甘糟あまかす」

黒餅こくもちに立沢瀉たちおもだかの黒紬くろつむぎの羽織うゑ着きたるがかく言いひて示しすところあるが如ごとき微笑えいごを洩もらせり。甘糟あまかすと呼よべられたるは、茶柳条ちやじまの仙台平せんたいひらの袴はかまを着きけたる、この中ちゆうにて独ひとりり頬鬚ほほひげの巖いかめしかめしを蓄たくふる紳士しんしなり。

甘糟あまかすの答こたふるに先まちて、背広かざはやの風早かぜはやは若わかきに似合にあはぬ皺しわ嗶が声こゑを振ふりしほりて、

「甘糟あまかすは一興ひとしほで、君きみは望のぞむところなのだらう」

「馬鹿言ばかごへ。甘糟あまかすの痒かゆきに堪たへんことを僕わがは丁ちやんと洞察どうさつしてをるのだ」

「これは憚様はばかりさまです」

大島紬の紳士は黏着へばりついたるやうに靠もたれたりし身を遽にはかに起して、

「風早、君と僕はね、今日は實際犠牲に供されてゐるのだよ。

佐分利さぶりと甘糟かねは夙かねて横浜を主張してゐるのだ。何でもこの間

遊仙窟ゆうせんくつを見出して来たのだ。それで我々を引張つて行つて、大

いに気焰きえんを吐く意つもりなのさ」

「何じやい、何じやい！ 君達がこの二人に犠牲に供されたと

謂いふなら、僕は四人の為に売られたんじや。それには及ばんと

云ふのに、是非浜まで見送ると言うで、気の毒なと思つてをつ

たら、僕を送るのを名として君達は……怪けしからん事ことたぞ。学

生中からその方は勉強しをつた君達の事ぢやから、今後は実に

想遣おもひやらるるね。ええ、肩書を辱はづかしめん限は遣よるも可よからうけれど、

注意はしたまへよ、本当に」

この老実の言を作すは、今は四年の昔間貫一が兄事せし同窓  
あらおじようすけの荒尾讓介なりけり。彼は去年法学士を授けられ、次いで内務  
あ省試補に挙げられ、踰えて一年の今日愛知県こんいちの参事官に栄転し  
 て、赴任の途に上れるなり。その齡よはひと深慮と誠実との故を以つ  
 て、彼は他の同学の先輩として推服するところたり。  
 「これで僕は諸君へ意見の言納じや。願ねがくは君達も宜よろしく自重し  
 てくれたまへ」

面白はやく発りし一座たちまも忽ち白しらけて、頻しきりに燠くゆらす卷莨まぎたばこの煙けむりの、急駛きゆうし  
むかひかぜせる車の逆風あふに扇あふらるるが、飛雲とびぐもの如く窓のを逸のがれて六郷川ろくごうがわを掠かす  
 むあるのみ。

佐分利あまたたびうなづは幾数回頷うなづきて、

「いやさう言れると慄然ぞつとするよ、実は嚮停車場さつきステーションで例の『美人  
 クリイム』(こは美人の高利貸を戯称せるなり)を見掛けたの

だ。あの声で蜥蜴とかげくら啖ふかと思ふね、毎見いっても美しいには驚嘆する。  
 全まるで淑女レディの扮装いでたちだ。就中なかんづく今日は治めかしてをつたが、何処どこか旨うまい口  
 でもあると見える。那奴あいつに搾しばられちや克かなはん、あれが本当の真  
 綿わたで首くちだらう」

「見たかつたね、それは。夙かねて御高名は聞及きんでゐる」  
 と大島紬おほしまつむぎの猶なほ続つけんとするを遮さへぎりて、甘糟あまじの言へる。

「おお、宝井が退学を吃くつたのも、其奴そいつが債権者おもの重なる者だ  
 と云ふぢやないか。余程好い女ださうだね。黄金きんの腕環うでわなんぞ  
 箴はめてゐると云ふぢやないか。酷ひどい奴な！ 鬼神のお松だ。佐  
 分利はその劇なるを知りながら係かかつたのは、大いに冒険の目的  
 があつて存するのだらうけれど、木乃伊ミイラにならんやうに禪ふんどしを緊し  
 めて掛るが可よいぜ」

「誰たれか其奴そいつには尻押しりおしが有るのだらう。亭主あるひが有るのか、或いはは情夫いろ

か、何か有るのだらう」

皺しわがれごゑ噺声は卒然としてこの問を発せるなり。

「それに就いては小説的の閱歴ライフがあるのさ、情夫いろぢやない、亭主がある、此奴こいつが君、我々の一世紀前ぜんに鳴した高利貸アイスで、赤樫権三郎と云つては、いや無法な強慾で、加ふるに大々の姦物いんぶつと来てゐるのだ」

「成程！ 積極しやくきよくと消極と相触れたので爪つめに火が焔ともる訳だな」

大島紬が得意の謔浪まげかへしに、深沈なる荒尾も已やむを得ざらんやうに破顔しつ。

「その赤樫と云ふ奴は貸金の督促を利用しては女を弄もてあそぶのが道楽で、此奴こいつの為ために汚けがされた者は随分意外の辺へんにも在るさうな。そこで今の『美人びびクリイム』、これもその手に罹かかつたので、原もとは貧乏士族の娘で堅気であつたのだが、老猾おやぢこの娘を見ると食指

大いに動いた訳で、これを俘とりこにしたさに父親に少しばかりの金を貸したのだ。期限が来ても返せん、それを何とも言はずに、後から後からと三四度も貸して置いて、もう好い時分に、内に手が無くて困るから、半月ばかり仲働なかばたらきに貸してくれと言出した。これはよしんば奴の胸中が見え透いてゐたからとて、勢ひ辞ことわりかねる人情だらう。今から六年ばかり前の事で、娘が十九の年おやち老猶は六十ばかりの禿はげ顛あたまの事だから、まさかに色気とは想はんわね。そこで内へ引張つて来て口説いたのだ。女房といふ者は無いので、怪しげな鬘たきざはりぜん妾然たる女を置いてをつたのが、その内かたづにいつか娘は妾同様になつたのはどうだい！」

固唾かたづを嚙のみたりし荒尾は思ふところありげに打領うちうなづきて、

「女といふ者はそんなものじやて」

甘糟はその面おもてを振仰ぎつつ、

「驚いたね、君にしてこの言あるのは。荒尾が女を解釈せうとは想はなんだ」

「何故かい」

佐分利の話を進むる折から、きしや 漚車は遽にはかに速力を加へぬ。

佐「聞えん聞えん、もつと大きな声で」

甘「さあ、御順にお膝繰ひざぐりだ」

佐「荒尾、あの葡萄酒ぶどうしゆを抜かんか、喉のどが渴かわいた。これからが佳

境に入るのだからね」

甘「中銭なかせんがあるのは酷ひどい」

佐「蒲田かまだ、君は好い苮たばこを吃すつてゐるぢやないか、一本頂戴ちようだい」

甘「いや、図まに乗ること。僕は手廻てまはりの物を片付けやう」

佐「甘糟マツチ、焔マツチ児マツチを持つてゐるか」

甘「そら、お出いでだ。持参しあはせいたしてをりまする仕合しあはせで」

佐分利は居長高みたけだかになりて、

「些ちよつと点つけてくれ」

葡萄酒の紅くれなゐを啜すすり、ハヴァナの紫を吹きて、佐分利は徐おもむろに語ことば

を継ぐ、

「所謂いはゆる一朶いちだの梨花海棠りかかいどうを圧してからに、娘の満枝は自由にされ

て了しまつた訳だ。これは無論親父には内証だつたのだが、当座は

荐しきつて歸りたがつた娘が、後には親父の方から歸れ歸れ言つて

も、歸らんだらう。その内に段々様子が知れたもので、侍形かたぎ気

の親父は非常な立腹だ。子でない、親でないと云ふ騒になつた

ね。すると禿はげの方から、妾だから不承知なのだらう、籍を入れ

て本妻に直すからくれろといふ談判になつた。それで逢つて見

ると娘も、阿父おとつさん、どうか承知して下さいは、親父益ますす意外

の益す不服だ。けれども、天魔に魅入られたものと親父も愛相あいそ

を尽<sup>つか</sup>して、唯<sup>ただ</sup>一人の娘を阿父さん彼自身より十歳<sup>と</sup>ばかりも老漢<sup>おやぢ</sup>の高利貸にくれて了つたのだ。それから満枝は益す禿の寵<sup>ちやう</sup>を得て、内政を自由にするやうになつたから、定めて生家<sup>さと</sup>の方へ貢ぐと思の外、極<sup>きめ</sup>の給<sup>もの</sup>の外は塵葉<sup>ちりつば</sup>一本饋<sup>や</sup>らん。これが又禿の御意<sup>ぎよい</sup>に入つたところで、女め熟<sup>つらつ</sup>ら高利の塩梅<sup>あんばい</sup>を見てゐる内に、いつかこの商売が面白くなつて来て、この身代<sup>しんだい</sup>我物と考へて見ると、一人の親父よりは金錢<sup>かね</sup>の方が大事、といふ不敵<sup>りようけん</sup>な了簡<sup>りようけん</sup>が出た訳だね」

「驚くべきものぢやね」

荒尾は可忌<sup>いまは</sup>しげに眩<sup>つあや</sup>きて、稍<sup>やや</sup>不快の色を動<sup>うご</sup>せり。

「そこで、敏捷<sup>びんしよう</sup>な女には違<sup>ちが</sup>無い、自然<sup>じぜん</sup>と高利<sup>アイス</sup>の呼吸<sup>こそく</sup>を呑込んで、後には手の足りん時には禿の代理として、何処<sup>どこ</sup>へでも出掛けるやうになつたのは益す驚くべきものだらう。丁度<sup>あた</sup>一昨年<sup>あたり</sup>辺から

禿は中氣が出て未だに動けない。そいつを大小便の世話までして、女の手一つで盛に商売をしてゐるのだ。それでその前年かに親父は死んだのださうだが、板の間に薄縁を一板敷いて、その上で往生したと云ふくらゐの始末だ。病氣の出る前などはろくに寄せ付けなんださうだがな、残刻と云つても、どう云ふのだか余り気が知れんぢやないかな——然し事実だ。で、禿はその通の病人だから、今ではあの女が独で腕を揮つて益す盛に遣つてゐる。これ則ち『美人クリイム』の名ある所以さ。

年紀かい、二十五だと聞いたが、さう、漸う二三とよりは見えんね。あれで可愛い細い声をして物柔に、口数が寡くつて巧い言をいふこと、恐るべきものだよ。銀貨を見て何処の国の勲章だらうなどと言ひさうな、誠に上品な様子をしてゐて、書替だの、手形に願ふのと、急所を衝く手際の婉曲に巧妙な具合と

来たら、実に魔薬でも用ゐて人の心を痿なやすかと思ふばかりだ。僕も三度ほど痿なやされたが、柔能く剛を制すで、高利貸アイスには美人が妙！ 那彼あいつに一国を預ければ輒すなはちクレオパトラだね。那彼には滅されるよ」

風早は最も興を覚おぼえたる気色けしきにて、

「では、今はその禿はげ顛げは中風ちゆうふうで寐ねたきりなのだね、一昨年をととしから？ それでは何か虫があるだらう。有る、有る、それくらゐの女で神妙しんまうにしてゐるものか、無いと見せて有るところがクレオパトラよ。然し、壮さかんな女だな」

「余り壮さかんなのは恐れる」

佐分利は頭かしらを抑おさへて後様うしろさまに靠もたれつつ笑ひぬ。次いで一同も笑ひぬ。

佐分利は二年生たりしより既に高利の大火坑おに墮おちて、今は

しも連帯一判、取交ぜ五口の債務六百四十何円の呵責に膏を取る身の上にぞありける。次いでは甘糟の四百円、大島紬氏は卒業前にして百五十円、後に又二百円、無疵なるは風早と荒尾とのみ。

漚車は神奈川に着きぬ。彼等の物語をば笑しげに傍聴したりし横浜商人体の乗客は、幸に無聊を慰められしを謝すらんやうに、懇に一揖してここに下車せり。暫く話の絶えける間に荒尾は何をか打案ずる体にて、その目を空く見据ゑつつ漫語のやうに言出でたり。

「その後誰も間の事を聞かんかね」

「間貫一かい」と皺嗶声は問反せり。

「おお、誰やらぢやつたね、高利貸の才取とか、手代とかしてをると言うたのは」

蒲「さうさう、そんな話を聞いたつけね。然し、間には高利貸アイヌの才取は出来ない。あれは高利を貸すべく余り多くの涙を有つてゐるのだ」

我が意を得つと謂いはんやうに荒尾は領うなづきて、猶なほも思に沈みゐたり。佐分利と甘糟の二人はその頃一級先さきだちてありければ、間とは相識らざるなりき。

荒「高利貸アイヌと云ふのはどうも妄うそぢやらう。全く余り多くの涙を有つてをる。惜い事をした、得難い才子ぢやつたものね。あれが今居らうなら……」

彼は忍びやかに太息ためいきを泄もらせり。

「君達は今逢うても顔を見忘れはすまいな」

風「それは覚えてゐるとも。あれの峭然びんと外眥めじりの昂あがつた所が目標めじろし

蒲「さうして髪あたまの癖毛くせつけの具合がな、愛嬌あいぎょうが有つたぢやないか。デスクの上に頬杖ほほづえを拄ついて、かう下向くだむかひになつて何時いつでも真面目まじめに講義を聴いてゐたところは、何処どこかアルフレッド大王にに肖にてゐたさ」

荒尾は仰うやぎて笑へり。

「君は毎いっも妙な事を言ふ人ぢやね。アルフレッド大王とは奇想天外だ。僕の親友を古英雄に擬いつぱいしてくれた御礼ごれいに一盃いっぱいを献けんじやう」

蒲「成程、君は兄弟のやうにしてをつたから、始終おも憶おもひ出すだらうな」

「僕は實際死んだ弟おとこよりも間の居らなくなつたのを悲かなむ」

愁然しゅうぜんとして彼は頭かしらを俛たれぬ。大島紬は受けたる盃さかづきを把とりながら、更に佐分利が持てる猪口ちよくを借りて荒尾に差しつ。

「さあ、君を慰める為に一番間の健康を祝さう」

荒尾の喜は実に溢るるばかりなりき。

「おお、それは辱ない」

なみなみ

盈々と酒を容れたる二つの猪口は、彼等の目より高く挙げらるると齊く憂と相撃てば、紅の雫の漏るが如く流るるを、互に引くより早く一息に飲乾したり。これを見たる佐分利は甘糟の膝を揺して、

「蒲田は如才ないね。面は醜いがあの呼吸で行くから、往々拾ひ物を為るのだ。ああ言われて見ると誰でも些と憎くないからね」

甘「遺は交際官試補！」

佐「試補々々！」

風「試補々々立つて泣きに行く……」

荒「馬鹿な！」

「言を改めて荒尾は言出せり。」

「どうも僕は不思議でならんが、停車場で間を見たよ。間に違

無いのじや」

唯ただの今陰いまながらその健康を禱いのりし蒲田は拍子を抜して彼の面おもてを眺ながめたり。

「ふう、それは不思議。他むかふは気が着かなんだかい」

「始は待合所の入口いりぐちの所で些ちよつと顔が見えたのじや。余り意外ぢやつたから、僕は思はず長椅子ソオフワアを起つと、もう見えなくなつた。それから有間しばらくして又偶然ふつと見ると、又見えたのじや」

甘「探偵小説だ」

荒「その時も起ちかけると又見えなくなつて、それから切符を切つて歩場プラットフォームへ入るまで見えなかつたのじやが、入つて少し来てから、どうも気になるから振返つて見ると、傍そばの柱に僕を見

て黒い帽を揮つとる者がある、それは間よ。帽を揮つとつたから間に違無いぢやないか」

横浜！ 横浜！ と或は急に、或は緩く叫ぶ声の窓の外面を飛過るとともに、響は雑然として起り、迸り出づる、群集は玩具箱を覆したる如く、場内の彼方より轟く鐸の音はこの響と混雑との中を貫きて奔注せり。

☆昨七日イ便の葉書にて（飯田町局消印）美人クリイムの

語にフエアクリイム或はベルクリイムの傍訓有度との言を

貽られし読者あり。ここにその好意を謝するとともに、聊

か弁ずるところあらむとす。おのれも始め美人の英語を用

ゐむと思ひしかど、かかる造語は懋に理詰ならむよりは、出

まかせの可笑き響あらむこそ可かめれとバイスクリイムと

も思おも着ひつきしなり。意いしころは美アイスクリームなるを、ビ、アイ——バイの格きやくにて試しみしが、さては説明を要すべき炊くたくだ冗だしさを嫌きらひて、更に美人の二字にびじ、訓を付せしを、校合者きやうごうしやの思おも僻ひがめてん字じは添そへたるなり。陋いしげなるびじ、クリイムの響うちの中には嘲とうろう弄ろうの意いも籠こもらむとてなり。なほ高論こうろんを請こふ

(三〇・九・八附読売新聞より)

## 第二章

柵さくの柱むらの下もとに在ありて帽ぼうを揮ふりたりしは、荒尾あらいが言ことの如ごとく、四年しやうしの生う死しを詳つまびらかかに自みづの影からを晦くらまし、その消息くわをさへ知しらせざりしかど、陰かげながら荒尾あらいが動静どうじやうの概略がいりやくを伺あらまししことを怠たらざりき、こ回たびその参事官さんじくわんた

る事も、午後四時発の列車にて赴任する事をも知るを得しかば、  
 余所よそながら暇乞いとまごひもし、二つには栄誉にじきの錦を飾れる姿をも見んと  
 思ひて、群集くんじゆに紛れてここには来りきたしなりけり。

何なにの故ゆゑに間は四年の音信おとづれを絶ち、又何なにの故にさしも懐おもひに忘れ  
 ざる旧友と相見あひまて別べつを為さざりしか。彼が今の身の上を知らば、  
 この疑問おのづかは自ら解釈せらるべし。

柵の外に立ちて列車の行くを送りしは独ひとり間貫一まぬかのみにあら  
 ず、そこもとに聚つどひし老若貴賤ろうにやくきせんの男女なんによは皆個々の心をもて、愁  
 ふるもの、楽むもの、虞きづかふもの、或は何とも感ぜぬものなど、  
 品変れども目的いっは一なり。数分時の混雑の後車いの出づるととも  
 に、一人散り、二人散りて、彼の如く久ひさしう立尽せるはあらざり  
 き。やがて重き物など引くらんやうに彼の漸やうやく踵きびすを旋めぐらせし時に  
 は、推重おしかさなるまでに柵際さくぎはに聚つどひし衆ひとは殆ほとんど散果ちりて、駅夫えきうの三四

人が箒ほうきを執りて場内を掃除せるのみ。

貫一は差合さしぐまるる涙を払ひて、独り後おくれたるを驚きけん、遽にはかに急ぎて、蓬萊橋口より出いでんと、あだかも石段際に寄るところを、誰たれとも知らで中等待合の内より声を懸けぬ。

「間さん！」

慌あわてて彼の見向く途端に、

「些ちよつと」と戸口より半身を示して、黄金の腕環の気爽けざやかに耀かがやける手なる絹ハンカチーフに唇辺くちもとを掩おほいて束髪おほの婦人の小腰かがを屈かむるに会へり。艶えんなる面おもてに得も謂いはれず愛らしき笑あみをさへ浮べたり。

「や、赤檜あかがしさん！」

婦人の笑あみもて迎ふるには似ず、貫一は冷然として眉まゆだに動かさず。

「好い所でお目に懸りましたこと。急にお話を致したい事が出来ましたので、まあ、些と此方へ」

婦人は内に入れば、貫一も渋々跟いて入るに、長椅子に掛れば、止む無くその側に座を占めたり。

「実はあの保険建築会社の小車梅の件なのでございませうがね」  
彼は黒樗文絹の帯の間を搜りて金側時計を取出し、手早く収

めつつ、

「貴方どうせ御飯前でゐらつしやいませう。ここでは、御話も出来ませんですから、何方へかお供を致しませう」

紫紺塩瀬に消金の口金打ちたる手鞆を取直して、婦人はやをら起上りつ。迷惑は貫一が面に顕れたり。

「何方へ？」

「何方でも、私には解りませんですから貴方のお宜い所へ」

「私にも解りませんな」

「あら、そんな事を仰有らずに、私は何方でも宜いのでござい

ます」

あらめがは

荒布革の横長なる手鞆を膝の上に搔抱きつつ貫一の思案せる

は、その宜き方を択ぶにあらで、俱に行くをば躊躇せるなり。

「まあ、何にしても出ませう」

「さやう」

貫一も今は是非無く婦人に従ひて待合所の出会頭に、入来る

者ありて、その足尖を挫げよと踏付けられぬ。驚き見れば長高

き老紳士の目尻も異く、満枝の色香に惑ひて、これは失敬、意

外の麁相をせるなりけり。彼は猶懲りずまにこの目覚き美形の

同伴をさへ暫く目送せり。

二人は停車場を出でて、指す方も無く新橋に向へり。

「本当に、貴方、何方へ参りませう」

「私は、何方でも」

「貴方、何時までもそんな事を言つてゐらしつてはきりがございませんから、好い加減に極めやうでは御坐いませんか」

「さやう」

満枝は彼の心進まざるを曉れども、つと勉めて吾意に従はしめんと念へば、おもさばかりの無遇をも甘んじて、たあしらひ

「それでは、貴方、鰻鱺は上りますか」うなぎ あが

「鰻鱺？ 遣りますよ」

「鶏肉と何方が宜うございます」とり よろし

「何方でも」

「余り御挨拶ですね」ごあいさつ

「何為ですか」なぜ

この時貫一は始めて満枝の面に眼を移せり。百の媚を含みて  
 睨へし彼の眸は、未だ言はずして既にその言はんとせる半をば  
 語尽したるべし。彼の為人を知りて畜生と疎める貫一も、さす  
 がに艶なりと思ふ心を制し得ざりき。満枝は貝の如き前歯と隣  
 れる金歯とを露して片笑みつつ、  
 「まあ、何為でも宜うございますから、それでは鶏肉に致しま  
 せうか」

「それも可いでせう」

三十間堀に出でて、二町ばかり来たる角を西に折れて、唯有  
 る露地口に清らなる門構して、光沢消硝子の軒燈籠に鳥と標し  
 たる方に、人目にはさぞ解あるらしう二人は連立ちて入りぬ。  
 いと奥まりて、在りとも覚えぬ辺に六畳の隠座敷の板道伝に離  
 れたる一間に案内されしも宜なり。

懼おそれたるにもあらず、困こづじたるにもあらねど、又全くきにあ  
らざるにもあざらん気色けしきにて貫一かたちの容さへ可慎つつましげに黙ていたらくして  
控へたるは、かかる所にこの人と共にとは思懸おもひかけざる為て体を、  
さすがに胸の安からぬなるべし。通し物は逸早いちはやく満枝まんしが好きに  
計しひて、少頃しばしは言無ことばき二人が中に置れたる苺盆たばこぼんは子細こまらしう一  
炷ちゆうの百和香ひやつかこうを燻くゆらせぬ。

「間さん、貴方どうぞお楽に」

「はい、これが勝手に」

「まあ、そんな事を有仰おつしやらずに、よう、どうぞ」

「内に居つても私はこの通なのですから」

「嘘うそを有仰おつしやいまし」

かくても貫一ひざは膝ひざを崩くづさで、巻苺入まきたばこいれを取出とりいせしが、生憎あやにく一本  
の苺あやにくもあざりければ、手を鳴さんとするを、満枝まんしは先まじて、

「お間に合せにこれを召上りましな」

麻蝦夷あさえぞの御主殿持ごしゅでんもちとともに薦すすむる筒すずりの端はしより焼金やきぎんの吸口ほのかは仄

に耀かがやけり。齒はは黄金きん、帶留おびどめは黄金きん、指環ゆびわは黄金きん、腕環うでわは黄金きん、時

計ときは黄金きん、今又煙管きせるは黄金きんにあらずや。黄金きんなる哉かな、金きん、金きん！

知る可べし、その心こころも金きん！ と貫一くわんいちは独り可笑ひとをかしさに堪たへざりき。

「いや、私は日本葎にっぽんわづらは一向可いかんのので」

言をひも訖をはらぬ顔を満枝みつえは熟じつと視みて、

「決して穢きたないのでは御坐ごまいませんけれど、つい心こころ着ちきませんで

した」

懐紙ふところを出いだしてわぎとらしくその吸口ねぢぬぐを拭ぬぐ拭ぬぐへば、貫一くわんいちも少すこく

慌あわてて、

「決けしてさう云いふ訳わけぢやありません、私は日本葎にっぽんわづらは用もちゐるので

すから」

満枝は再び彼の顔を眺めつ。

「貴方、嘘をお吐きなさるなら、もう少し物覚を善く遊ばせよ」

「はあ？」

「先日鰐淵さんへ上つた節、貴方召上つてゐらしつたではござ

いませんか」

「はあ？」

「瓢箪のやうな恰好のお煙管で、さうして羅宇の本に些と紙の

巻いてございました」

「あ！」と叫びし口は頓に塞がざりき。満枝は仇無げに口を掩

ひて笑へり。この罰として貫一は直に三服の吸付莨を強ひられ

ぬ。

とかくする間に盃盤は陳ねられたれど、満枝も貫一も三盃を

過し得ぬ下戸なり。女は清めし猪口を出して、

「貴方、お一盞ひとつ」

「可かんのです」

「又そんな事を」

「今度は実際」

「それでは麦酒ビールに致しませうか」

「いや、酒は和洋とも可かんのですから、どうぞ御随意に」

酒には礼ありて、おのれ辞せんとならば、必ず他に侑すめて酌

せんとこそあるべきに、甚はなはだい哉、彼の手を束つかねて、御随意にと

会釈せるや、満枝は心憎しとよりはなかなかに可笑しと思へり。

「私も一向不調法なのでございますよ。折角差上げたものです

からお一盞ひとつお受け下さいましたな」

貫一は止む無くその一盞ひとつを受けたり。はやかく酒になりけれ

ども、満枝が至急と言ひし用談に及ばざれば、

「時に小車梅おぐるめの件と云ふのはどんな事が起りましたな」

「もうお一盞召上れ、それからお話を致しますから。まあ、お

見事！　もうお一盞」

彼は忽たちまち眉まゆを攢あつめて、

「いやそんなに」

「それでは私が戴いただきませう、恐入りますがお酌を」

「で、小車梅の件は？」

「その件の外ほかに未だお話があるのでございます」

「大相有りますな」

「酔はないと申上げ難にくい事なので、私少々酔ひますから

貴方はばかりさま、憚はばかりさま様ですが、もう一つお酌を」

「酔つちや困ります。用事は酔はん内にお話し下さい」

「今晚は私酔つもりふ意なのでございますもの」

その媚ある目の辺は漸く花桜の色に染みて、心楽しげに稍身を寛に取成したる風情は、実に匂など零れぬべく、熱しとて紺の絹精縷の被風を脱げば、羽織は無くて、粲然としたる紋御召の袷に黒樗文絹の全帯、華麗に紅の入りたる友禅の帯揚して、鬢の後れの被る耳際を搔上ぐる左の手首には、早蕨を二筋寄せて蝶の宿れる形したる例の腕環の爽に晃き遍りぬ。常に可忌しと思へる物をかく明々地に見せつけられたる貫一は、得堪ふまじく苦りたる眉状して密に目を翳しつ。彼は女の貴族的に装へるに反して、黒紬の紋付の羽織に藍千筋の秩父銘撰の袷着て、しろちりめんへこおびあたらず。

彼を識れりし者は定めて見咎むべし、彼の面影は尠からず変りぬ。愛らしかりしところは皆失せて、四年に余る悲酸と憂苦と相結びて常に解けざる色は、自ら暗き陰を成してその面を蔽

へり。撓むとも折るべからざる堅忍の気は、沈鬱せる顔色の表に動けども、嘗て宮を見しやうの優き光は再びその眼に輝かずなりぬ。見ることの冷に、言ふことの謹めるは、彼が近来の特質にして、人はこれが為に狎るるを憚れば、自もまた苟も親みを求めざるほどに、同業者は誰も誰も偏人として彼を遠けぬ。焉んぞ知らん、貫一が心には、さしもの恋を失ひし身のいかで狂人たらざりしかを怪むなりけり。

彼は色を正して、満枝が独り興に乗じて盃を重ねる体を打目成れり。

「もう一盞戴きませうか」

笑を漾ふる眸は微醺に彩られて、更に別様の媚を加へぬ。

「もう止したが可いでせう」

「貴方が止せと仰有るなら私は止します」

「敢て止せとは言ひません」

「それぢや私酔ひますよ」

答無かりければ、満枝は手酌してその半を傾けしが、見る見る頬の麗く紅くれなるになれるを、彼は手もて掩おほひつつ、

「ああ、酔ひましたこと」

貫一は聞かざる為まねして莨くゆを燻らしむたり。

「間さん、……」

「何ですか」

「私今晚は是非お話し申したいことがあるので御坐いますが、貴方お聴き下さいますか」

「それをお聞き申す為に御同道したのぢやありませんか」

満枝は嘲あざけらむが如く微笑ほほゑみて、

「私何だか酔つてをりますから、或は失礼なことを申上げるか

も知れませんが、お気に障へては困りますの。然し、御酒の上で申すのではございませんから、どうぞそのお意で、宜うございませるか」

「撞着してゐるぢやありませんか」

「まあそんなに有仰らずに、高が女の申すことでございませるか」

こは事難うなりぬべし。克はぬまでも多少は累を免れんと、貫一は手を拱きつつ俯目になりて、力めて関らざらんやうに持成すを、満枝は擦寄りて、

「これお一盞で後は決してお強ひ申しませんですから、これだけお受けなすつて下さいましな」

貫一は些の言も出さでその猪口を受けつ。

「これで私の願は届きましたの」

「易い願ですな」と、あはや出でんとせし唇を結びて、貫一は  
纒わづかに苦笑して止みぬ。

「間さん」

「はい」

「貴方失礼ながら、何でございますか、鰐淵さんの方に未だお  
長くゐらつしやるお意つもりのですか。然し、いづれ独立あそばす  
ので御坐いませう」

「勿論もちろんです」

「さうして、まづ何頃彼方と別にお成りあそばすお見込なので  
ございますの」

「資本のやうなものが少しでも出来たらと思つてゐます」

満枝たちまは忽ち声を斂をさめて、物思はしげに差俯さしうつむき、蓑盆ふちの縁ふちをば  
弄もてあそべるやうに煙管きせるもて刻きざみを打ちてゐたり。折しも電燈の光の遽にはか

に晦むくらに驚きて顔を挙げあぐれば、又旧もとの如く一間ひとまは明あかるうなりぬ。彼は煙管を捨てて猶なほしば暫し打案じたりしが、

「こんな事を申上げては甚はなはだ失礼なのでございますけれど、何時あちらまで彼方にゐらつしやるよりは、早く独立あそばした方が宜よろしいでは御坐いませんか。もし明日にもさうと云ふ御考でゐらつしやるならば、私……こんな事を申しては……烏滸をこがましいので御坐いますが、大した事は出来ませんけれど、都合の出来るだけは御用達申して上げたいのでございますが、さう遊ばしませんか」

意外に打れたる貫一は箸はしを叩ひかへて女の顔を屹きと視みたり。

「さう遊ばせよ」

「それはどう云ふ訳ですか」

実に貫一は答に窮せるなりき。

「訳ですか？」と満枝は口籠りたりしが、

「別に申上げなくてもお察し下さいませしな。私だつて何時までも赤檜あかがしに居たいことは無いぢやございませんか。さう云ふ訳なのでございます」

「全然解らんですな」

「貴方、可うございますよ」

可恨うらめしげに満枝は言を絶ちて、横膝よこひざに蓆ひねを拈りゐたり。

「失礼ですけれど、私はお先へ御飯を戴きます」

貫一めしつぎが飯桶を引寄せんとするを、はたと抑おさへて、

「お給仕なれば私致します」

「それは憚はばかりさま様です」

満枝は飯桶を我が側に取寄せしが、茶碗ちやわんをそれに伏せて、彼方あなたの壁際かべぎはに推遣おしやりたり。

「未だお早うございますよ。もうお一盞召上れ」

「もう頭が痛くて克かなはんですから赦ゆるして下さい。腹が空いてゐるのですから」

「お餒ひもいいところを御飯を上げませんでは、さぞお辛つらうございませう」

「知れた事ですわ」

「さうでございませう。それなら、此方こちらで思つてゐることが全まるで先方さきへ通らなかつたら、餒ひもいいのに御飯を食べないのよりか隻はるかに辛うございますよ。そんなにお餒ひもいじければ御飯をお付け申しますから、貴方も只今の御返事をなすつて下さいましな」

「返事と言はれたつて、有仰おっしゃることの主意が能よく解らんですもの」

「何故なぜお了解わかりになりませんの」

責むるが如く男の顔を見遣れば、彼もまた詰るなじが如く見返しつ。

「解らんぢやありませんか。親い御交際の間でもない私に資本を出して下さい。さうしてその訳はと云へば、貴方も彼処あすこを出る。解らんぢやありませんか。どうか飯を下さいな」

「解らないとは、貴方、お酷いぢやございませんか。ではお氣に召さないのをごぎいますか」

「氣に入らんと云ふ事は有りませんが、縁も無い貴方に金を出して戴く……」

「あれ、その事ではごぎいませんでば」

「どうも非常に腹すが空すいて来ました」

「それとも貴方外ほかにお約束でも遊ばした御方あんがお在あなさるのでごぎいますか」

彼終つひに鋒銳ほうぼうを露あらはし来きたれるよと思へば、貫一は猶解なほせざる体ていを作なして、

「妙な事を聞きますね」

と苦笑せしのみにて続く言ことばもあらざるに、満枝は図はづを外はづされ、やや心惑へるなりけり。

「さう云ふやうなお方がお在あんなさらなければ、……私貴方にお願があるのでございます」

貫一も今は屹きつと胸を据ゑて、

「うむ、解りました」

「ああ、お了解わかりになりました?!

嬉うれしと心を言へらんやうの気色けしきにて、彼の猪口ちよくに余あませし酒を一息ひといきに飲乾のみほして、その盃をつと貫一に差せり。

「又ですか」

「是非！」

発はずみに乗せられて貫一は思はず受うくると齋ひとしく盈なみなみそ々注そがれて、下にも置おれず一口附くるを見たる満枝が歡喜よろこび！

「その盃は清めてございませんよ」

一々底意ありて忽ゆるがせ諸しよにすべからざる女の言を、彼はいと可煩わづらはしくて持余もてあませるなり。

「お了解わかりになりましたら、どうぞ御返事を」

「その事なら、どうぞこれぎりにして下さい」

僅わづかにかく言ひ放ちて貫一は嚴おこかに沈黙しんもくしつ。満枝もさすがに酔よひを冷さまして、彼の気色けしきを候うかがひたりしに、例の言寡ことばすくななる男の次い

では言はずれば、

「私もこんな可耻はづかしい事を、一旦申上げたからには、このままでは済すされません」

貫一は緩かに頷けり。

「女の口からかう云ふ事を言出しますのは能々の事でございますから、それに対するだけの理由を有仰つて、どうぞ十分に私  
 が得心の参るやうにお話し下さいましな、私座興でこんな事を  
 申したのではございませんから」

「御尤です。私のやうな者でもそんなに言つて下さると思へば、  
 決して嬉くない事はありません。ですから、その御深切に対し  
 て裏まず自分の考量をお話し申します。けれど、私は御承知の  
 偏屈者でありますから、衆とは大きに考量が違つてをります。

第一、私は一生妻といふ者は決して持たん覚悟なので。御承  
 知か知りませんが、元、私は書生でありました。それが中途か  
 ら学問を罷めて、この商売を始めたのは、放蕩で遣損つたので  
 もなければ、敢て食窮めた訳でも有りませんので。書生が可厭

さに商売を遣らうと云ふのなら、未だ外ほかに幾多いくたも好い商売は有りますさ、何を苦くるんでこんな極悪非道な、白日盗はくじつとうを為なすと謂いはうか、病人の喉口のどぐちを干ほすと謂いはうか、命よりは大事な人の名譽を殺して、その金錢を奪取る高利貸などを扱えらむものですか」

聴居る満枝は益ますす酔よひを冷されぬ。

「不正な家業と謂ふよりは、もう悪事ですな。それを私が今日こんにち始めて知つたのではない、知つて身を墮おとしたのは、私は当時さき敵手を殺して自分も死にたかつたくらゐ無念極きはまる失望をした事があつたからです。その失望と云ふのは、私が人を頼たのみにしてをつた事があつて、その人達も頼れなければならん義理合になつてをつたのを、不図した慾に誘れて、約束は違へる、義理は捨てる、さうして私は見事に売られたのです」

火影ひかげを避けんとしたる彼の目の中に遽にはかに耀かがやけるは、なほ新あらたな

る痛恨の涙の浮べるなり。

「実に頼少たのみすくない世の中で、その義理も人情も忘れて、罪も無い私の売られたのも、原もとはと云へば、金銭かねからです。仮初かりそめにも一匹いっぴきの男子たる者が、金銭かねの為に見易みかへられたかと思へば、その無念といふものは、私いは一……一生忘れられんです。

軽薄でなければ詐いつはり、詐でなければ利慾、愛相あいその尽きた世の中です。それほど可厭いやな世の中なら、何為なぜ一思ひとおもひに死んで了はんか、と或は御不審かも知れん。私は死にたいにも、その無念むねが障さばりになつて死切れんです。売られた人達を苦めるやうなそんな復讐ふくしゅうなどは為たくはありません、唯自分だけで可いから、一旦受けた恨！ それだけは屹きつと霽はらさなければ措おかん精神。片時でもその恨を忘れることの出来ん胸中といふものは、我ながらさう思ひますが、全まるで発狂してゐるやうですな。それで、高利貸

のやうな殘刻の甚はなはだしい、殆ど人を殺す程の度胸を要する事を毎日  
 扱つて、さうして感情を暴あらしてゐなければとても堪へられん  
 で、発狂者には適當の商売です。そこで、金かね錢ねゆゑに売られも  
 すれば、辱はづかしめられもした、金かね錢ねの無いのも謂はば無念の一つで  
 す。その金かね錢ねが有つたら何とでも恨が霽はらされやうか、とそれを  
 樂たのしみに義理も人情も捨てて掛つて、今では名譽も色恋も無く、金  
 錢より外には何の望のぞみも持たんです。又考へて見ると、愁なまじひ人  
 などを信じるよりは金かね錢ねを信じた方が間違が無い。人間よりは  
 金かね錢ねの方が負はるか頼たのみになりますよ。頼たのみにならんのは人の心です！  
 先まづかう云ふ考でこの商売に入つたのでありますから、実を申  
 せば、貴方の貸して遣らうと有おっしや仰る資本は欲いが、人間の貴方  
 には用が無いのです」  
 彼は仰たかわらひぎて高笑たかしつつも、その面おもては痛く激したり。

満枝は、彼の言の決して譎いつはりならざるべきを信じたり。彼の偏屈へんくつなる、実にさるべき所見かんがへを懐けるも怪むには足らずと思へるなり。されども、彼は未だ恋の甘きを知らざるが故ゆゑに、心狭くもこの面白き世に偏屈へんくつの扉しびらを閉ぢて、詐いつはりと軽薄と利欲との外なる楽あるを曉さとらざるならん。やがて我そを教へんと、満枝は輒たやすく望を失はざるなりき。

「では何でございますか、私の心もやはり頼にならないとお疑ひ遊ばすのでございますか」

「疑ふ、疑はんと云ふのは二の次で、私はその失望以来この世の中きらいひが嫌で、総すべての人間を好まんですから」

「それでは誠も誠も——命懸けて貴方を思ふ者がございましても？」

「勿論！ 別して惚ほれたの、思ふのと云ふ事は大嫌です」

「あの、命を懸けて慕つてゐるといふのがお了解わかりになりましたも」

「高利貸の目には涙は無いですよ」

今は取付く島も無くて、満枝は暫しばし惘然ぼうぜんとしてゐたり。

「どうぞ御飯を頂戴」

打萎うちしよれつつ満枝は飯めしを盛りて出せりいだ。

「これは恐入ります」

彼は啖くらふこと傍かたはらに人無き若ごとし。満枝の面おもてうすくれなゐは薄紅うすくれなゐになほ酔よひは有

りながら、酔よへる体ていも無くて、唯打案じたり。

「貴方も上りませんか」

かく会釈して貫一は三盃さんばいめ目を易かへつ。やや有りて、

「間さん」と、呼れし時、彼は満口に飯を啣ふくみて遽にはかに応こたふる能あたはず、唯目を挙あげて女の顔を見たるのみ。

「私もこんな事を口に出しますまでには、もしや貴方が御承知の無い時には、とそれ等を考へまして、もう多時胸に畳んでをつたのでございます。それまで大事を取つてをりながら、かう一も二も無く奇麗にお謝絶ことわりを受けては、私実に面目無くて……余り悔あんまうございますわ」

あわただし

慌忙くハンカチーフを取りて、片手に恨泣の目元を掩おほへり。

「面目無くて私、この座たたが起れません。間さん、お察し下さいまし」

貫一は冷々ひややかに見返りて、

「貴方一人を嫌つたと云ふ訳なら、さうかも知れませんが、私は総すべての人間が嫌なのですから、どうぞ悪あしからず思つて下さい。貴方も御飯をお上んなさいな。おお！ さうして小車梅おぐるめの件に就いてのお話は？」

泣赤めたる目を拭ひて満枝は答へず。

「どう云ふお話ですか」

「そんな事はどうでも宜うございます。間さん、私、どうしても思切れませんから、さう思召して下さい。で、お可厭ならお可厭で宜うございますから、私がこんなに思つてゐることを、どうぞ何日までもお忘れなく……きつと覚えてゐらつしやいませよ」

「承知しました」

「もつと優しい言をお聞かせ下さいませ」

「私も覚えてゐます」

「もつと何とか有仰りやうが有りさうなものではございませんか」

「御志は決して忘れません。これなら宜いでせう」

満枝は物をも言はずつと起ちしが、ひらり 飜然と貫一の身近に寄添ひて、

「お忘れあそばすな」と言ふさへに力籠りて、その太股を絶かふともも撮れば、貫一は不意の痛に覆らんとするを支へつつ横様に振払よこさまふを、満枝は早くも身を開きて、知らず顔に手を打鳴して婢ををんな呼ぶなりけり。

### 第三章

赤坂氷川の辺に写真の御前と言へば知らぬ者無く、実にこのあかさかひかわ ほとり殿の出づるに写真機械を車に積みて随へごぜんぎることあらざれば、おのづか自ら人目を追れず、かかる異名は呼るるにぞありける。子細をのが明めずしては、「将某の殿様」の流かとも想はるべし。あらず！

才の敏、学の博、貴族院の椅子を占めて優に高かるべき器うつはを抱いだきながら、五年を独逸ドイツに薰染せし学者風を喜び、世事なげうを抛ちて愚なるが如く、累代の富を控へて、無勘定の雅量ほしいままを肆まかすれども、なほ歳としの入るものを計るに正まさに出づるに五倍すてふ、子爵中有数の内福と聞えたる田鶴見良春その人なり。

氷川なる邸内には、唐破風造からはふづくりの昔を摸うつせる館たちと相並びて、帰朝後起せし三層の煉瓦造れんがづくりの異あやしきまで目慣れぬ式なるは、この殿の数寄すきにて、独逸に名ある古城の面影おもかげを偲しのびてここかたどに象かたどれるなりとぞ。これを文庫と書齋と客間あとに充あてて、万足よろづたらざる無なき閑日月かんじつげつをば、書に耽ふけり、画たのしに楽み、彫刻を愛し、音楽うそおに嘯うそおき、近き頃もつぱよりは専もつぱら写真えんしに遊あそびて、齡よはひ三十四およに迫おべども頑がんとして未いまだ娶めとらず。その居るや、行くや、出づるや、入るや、常ひようぜんに飄然ひようぜんとして、絶えて貴族的容儀を修めざれど、自おのづからなる七万石の品

格は、面白う眉秀でて、鼻高く、眼爽に、形の清に揚れるは、  
 皎として玉樹の風前に臨めるとも謂ふべくや、御代々御美男に  
 わたらせらるるとは常に藩士の誇るところなり。

かかれば良縁の空からざること、蝶を捉へんとする蜘蛛の糸  
 より繁しといへども、反顧だに為ずして、例の飄然忍びては酔  
 の紛れの逸早き風流に慰み、内には無妻主義を主張して、人の  
 諫などふつに用ゐざるなりけり。さるは、かの地に留学の日、

陸軍中佐なる人の娘と相愛して、末の契も堅く、月下の小舟に  
 比翼の櫂を操り、スプレイの流を指して、この水の終に涸るる  
 日はあらんとも、我が恋の燄の消ゆる時あらせじ、と互の誓詞  
 に詐はあらざりけるを、帰りて母君に請ふことありしに、いと  
 太う驚かれて、こは由々しき家の大事ぞや。夷狄は□□よりも  
 賤むべきに、畏くも我が田鶴見の家をばなでう禽獣の檻と為す

べき。あな、可疎うとましの吾子あこが心やと、涙と共に搔口かきくど説きて、悲かなし  
 び歎きの余は病にさへ伏したまへりしかば、殿も所為せん無くて、  
 心苦う思ひつつも、猶行末なほをこそ頼めと文の便たよりを度々に慰めて、  
 彼方あなたも在るにあられぬ三年の月日を、憂うきは死ななんと味気あぢきな  
 く過せしに、一昨年をの秋物思ふ積りやありけん、心自から弱り  
 て、存ながらへかねし身の苦惱くるしみを、御神みかみの恵めぐみに助けられて、導かれし  
 天国ようの杳たうとして原ぬべからざるを、いとど可懐なつかしの殿の胸は破  
 れぬべく、ほとほと知覚ちかくの半をも失ひて、世と絶つますまの念益す深  
 く、今は無尽むじんの富も世襲あだの貴きも何にかはせんと、唯懐ただおもひを亡なき  
 人に寄せて、形見こそ仇あだならず書齋しよさいの壁に掛けたる半身像は、  
 彼女かのをんなが十九の春の色ねんごろを苦しゆしやに手写しゆしやして、嘗かつて貽おくりしものなりけり。  
 殿はこの失望ほうしの極放肆遊惰うちの裏いささに聊おもひか懐やを遣り、一具の写真機  
 に千金なげうを擲なげうちて、これに嬉戯しよぎすること少児しやうにの如く、身をも家をも

外ほかにして、遊ぶと費すに余念は無かりけれど、家令くろやなぎもとえに畔柳元衛ありて、その人迂うならず、善く財を理し、事を計るに由りて、かかる疎放の殿を戴いただける田鶴見家も、幸さいはひに此こゝの破綻はたんを生ずる無きを得てけり。

彼は貨殖の一端として密ひそかに高利の貸元を営みけるなり。千、二千、三千、五千、乃至ないし一万の巨額をも容易に支出する大資本主たるを以もて、高利貸の大口を引受くる輩はいのここに便たよらんとせざるはあらず。されども慧さかしき畔柳は事の密なるを策の上と為なして刃みだりに利の為に誘はれず、始よりその藩士なる鰐淵ただゆき直行の一手に貸出すのみにて、他は皆彼の名義を用ゐて、直接の取引を為さざれば、同業者は彼の那辺いづれにか金穴きんけつあるを疑はざれども、その果して誰なるやを知る者絶えてあらざるなりき。

鰐淵わにぶちの名が同業間に聞えて、威権をさをさ四天王の随一たる

べき勢あるは、この資本主の後楯ありて、運転神助の如きに由るのみ。彼は元田鶴見の藩士にて、身柄は謂ふにも足らぬ足輕頭に過ぎざりしが、才覚ある者なりければ、廃藩の後出でて小役人を勤め、転じて商社に事へ、一時或は地所家屋の売買を周旋し、万年青を手掛け、米屋町に出入し、何れにしても世渡の茶を濁さずといふこと無かりしかど、皆思はしからで巡査を志願せしに、上官の首尾好く、竟には警部にまで取立てられしを、中ごろにして金これ権と感ずるところありて、奉職中蓄得たりし三百余円を元に高利貸を始め、世間の未だこの種の悪手段に慣れざるに乗じて、或は欺き、或は嚇し、或は賺し、或は虐げ、纔に法網を潜り得て辛くも繩附たらざるの罪を犯し、積不善の五六千円に達せし比、あだかも好し、畔柳の後見を得たりしは、虎に翼を添へたる如く、現に彼の今運転せる金額は殆ど数万に

上るとぞ聞えし。

畔柳はこの手より穫るる利の半は、これを御殿の金庫に致し、半はこれを懐にして、鰐淵もこれに因りて利し、金は一にしてその利を三にせる家令が六臂の働は、主公が不生産的なるを補ひて猶余ありとも謂ふべくや。

鰐淵直行、この人ぞ間貫一が捨鉢の身を寄せて、牛頭馬頭の手代と頼まれ、五番町なるその家に四年の今日まで寄寓せるなり。貫一は鰐淵の裏二階なる八畳の一間を与へられて、名は雇人なれども客分に遇はれ、手代となり、顧問となりて、主の重宝大方ならざれば、四年の久きに弥れども主は彼を出すことを喜ばず、彼もまた家を構ふる必要無ければ、敢て留るを厭ふにもあらで、手代を勤むる傍若干の我が小額をも運転して、自ら営む便もあれば、今愁ひにここを出でて瘦臂を張らんよりは、

然るべき時節の到来を待つには如かじと分別せるなり。彼は啻ただに手代として能く働き、顧問として能く慮るのみをもて、鰐淵おもんばかが信用を得たるにあらず、彼の齡を以てして、色を近けず、酒に親まず、浪費せず、遊惰せず、勤むべきは必ず勤め、為すべきは必ず為して、己を衒はず、他を貶めず、恭謹にしてしかも氣節に乏からざるなど、世に難有き若者なり、と鰐淵は寧ろ心陰むしこころひそかに彼を畏れたり。

主は彼の為人を知りし後、如此き人の如何にして高利貸などや志せると疑ひしなり、貫一は己の履歴を詐りて、如何なる失望の極身をこれに墜せしかを告げざるなりき。されども彼が高等中学の学生たりしことは後に顕れにき。他の一事の秘に至りては、今もなほ主が疑問に存すれども、そのままに年経にければ、改めて穿鑿せんさくもせられで、やがては、暖簾のれんを分けて屹きつとしたる

後見は為てくれんと、鰐淵は常に疎ならず彼が身を念ひぬ。直  
 行は今年五十を一つ越えて、妻なるお峯は四十六なり。夫は心  
 猛く、人の憂を見ること、犬の嚏の如く、唯貪りて饜くを知ら  
 ざるに引易へて、氣立優しとまでにはあらねど、鬼の女房なが  
 らも尋常の人の心は有てるなり。彼も貫一の偏屈なれども律義  
 に、愛すべきところとは無けれど、憎ましきところとは猶更  
 にあらぬを愛して、何くれと心着けては、彼の為に計りて善か  
 れと祈るなりける。

いと幸ありける貫一が身の上哉。彼は世を恨むる余その執念  
 の駆るままに、人の生ける肉を啖ひ、以つて聊か逆境に暴され  
 たりし枯腸を癒さんが為に、三悪道に捨身の大願を發起せる心  
 中には、百の呵責も、千の苦艱も固より期したるを、なかなか  
 かかる寛なる信用と、かかる温き憐愍とを被らんは、羝羊の乳

を得んとよりも彼は望まざりしなり。憂の中の喜なる哉、彼はこの喜を如何に喜びけるか。今は呵責をも苦艱をも敢て悪まざるべき覚悟の貫一は、この信用の終には慾の為に剥がれ、この憐愍も利の為に吝まるる時の目前なるべきを固く信じたり。

(三) の二

毒は毒を以て制せらる。鰐淵が債務者中に高利借の名にしおふ某党の有志家某あり。彼は三年来生殺の關係にて、元利五百余円の責を負ひながら、奸智を弄し、雄弁を揮ひ、大胆不敵に構へて出没自在の計を出し、鰐淵が老巧の術といへども得て施すところ無かりければ、同業者のこれに係りては、逆振を吃ひて血反吐を噴されし者尠からざるを、鰐淵は弥よ憎しと思へ

ど、彼に對しては鍔桿かたてこも折れぬべきに持余しつるを、克かなはぬまでも棄措すておくは口惜くちをしければ、せめては令見みせしめの為にも折々釘くぎを刺して、再び那奴しやつの翅はがいを展べしめざらんのに如しかずと、昨日きのふは貫一ぬかの曠ぬからず嚴談せよと代理を命ぜられてその家に向ひしなり。

彼は散々に翻弄ほんろうせられけるを、劣らじと罵のしりて、前後四時間ばかりその座を起ちも遣やらで壮さかんに言争ひしが、病者に等き青二才あなごと侮あなごりし貫一の、陰忍しんねり強く立向ひて屈する気色けしきあらざるより、有合しこみつゑふ仕込杖しこみつゑを抜放し、おのれ還かへらずば生けては還さじと、二尺余あまりの白刃あやふを危あやふく突付けて脅おびやかせしを、その鼻頭はななききに待あしらひて愈いよいよよ動かをりからざりける折柄、来合せつる壮士三名の乱拳に困れて門外に突放され、少しは傷など受けて帰来かへりきにけるが、これが為に彼の感やすじ易やすき神経はなはだしは甚く激動して夜もすがら眠を成さず、今朝は心地うたの転すくた勝れねば、一日の休養を乞ひて、夜具をも収めぬ一間に

引籠ひきこもれるなりけり。かかることありし翌日おびただしは夥つかく腦のちの憊つかるるとともに、心乱れ動きて、その憤いりし後のちを憤いり、悲みし後のちを悲まざれば已やまず、為に必ず一日の勤を廃するは彼の病なりき。故ゆゑに彼は折に触れつつその体たいの弱く、その情の急なる、到底この業に不適當なるを感ぜざることを無し。彼がこの業に入りし最初の一年は働より休の多かりし由を言ひて、今も鰐淵やうやの笑ふことあり。次の年よりは漸やうやく慣れてけれど、彼の心は決けしてこの悪を作なすに慣れざりき。唯ただよ能く忍得るを学びたるなり。彼の学びてこれを忍得るの故は、爾来終天じらいの失望と恨いとの一日いちじつも忘るる能あたはざるが為に、その苦悶くもんの余勢を駆りて他の方面に注がしむるに過ぎず。彼はその失望と恨とを忘れんが為には、以外の堪たふまじき苦悶を辞せざるなり。されども彼は今もなほ往々自ら為せる殘刻を悔い、或あるは人の加ふる侮辱に堪たへずして、神經の過

度に亢奮せらるる為に、一日の調撰を求めざるべからざる微恙を得ることあり。

朗に秋の氣澄みて、空の色、雲の布置句はしう、金色の日影は豊に快晴を飾れる南受の縁障子を隙して、爽なる肌寒の蔭に長高く瘦せたる貫一は横はれり。蒼く濁れる頬の肉よ、醜へる横顔の輪廓よ、曇の懸れる眉の下に物思はしき眼色の凝りて動かざりしが、やがて崩るるやうに頬杖を倒して、枕囊に重き頭を落すとともに寝返りつつ搔卷引寄せて、拵げたりし新聞を取りけるが、見る間もあらず投遣りて仰向になりぬ。折しも誰ならん、階子を昇来る音す。貫一は凝然として目を塞ぎみたり。紙門を啓けて入来れるは主の妻なり。貫一の慌てて起上るを、そのままにと制して、机の傍に坐りつ。

「紅茶を淹れましたからお上んなさい。少しばかり栗を茹でま

したから」

手籃てかごに入れたる栗と盆なる茶器とを枕頭まくらもとに置いて、

「気分はどうです」

「いや、なあに、寝てゐるほどの事は無いので。これは色々

御馳走ごちそうさま様でございます」

「冷めない内にお上んなさい」

彼は会釈して珈琲茶碗カフヒイチヤワンを取上げしが、

「旦那だんなは何時頃いつお出懸でかけになりました」

「今朝けさは毎いつもより早くね、氷川ひかわへ行くと云つて」

言ふも可疎うとましげに聞えけれど、さして貫一こころは意も留めず、

「はあ、畔柳くろやなぎさんですか」

「それがどうだか知れないの」

お峯にがわらひは苦笑あきらかしつ。明なる障子ひびの日脚ひびはその面おもての小皺こじわの読まれ

ぬは無きまでに照しぬ。髪は薄けれど、櫛の齒通りて、一髪を乱さず円鬚まるわけに結ひて顔の色は赤き方かたなれど、いと好く磨みがきて清きよに滑なめなり。鼻の辺あたりに薄痘痕うすいもありて、口を引窄ひきすぼむる瘵しやあり。齒性悪ければとて常に涅くろめたるが、かかるをや烏羽玉ぬばたまとも謂いふべく殆ど耀ほくばかりに麗うるはし。茶柳条ちやじまのフネルの单衣ひとへに朝寒あささむの羽織着たるが、御召縮緬ちりめんの染直ちしなるべく見ゆ。貫一はさすがに聞きも流されず、

「何な為ぜですか」

お峯は羽織の紐ひもを解きつ結びつして、言はんか、言はざらんかを遅ためへる風情ふぜいなるを、強しひて問はまほしき事にはあらじと思へば、貫一は籃かごなる栗を取りて剥むきみたり。彼は姑しばらく打案うちあんせし後、

「あの赤檉あかがしの別品べつびんさんね、あの人は悪うはい噂うはさが有るぢやありません

んか、聞きませんか」

「悪い噂とは？」

「男を引掛けては食物くひものに為るとか云ふ……」

貫一は覚ええず首を傾けたり。曩さきの夜の事など思合すなるべし。

「さうでせう」

「一向聞きませんな。那奴男あいつを引掛けなくても金銭かねには窮こまらんでせうから、そんな事は無からうと思ひますが……」

「だから可いけない。お前さんなんぞもべ、いろしや、組の方ですよ。金銭かねが有るから為ないと限つたものです。さう云ふ噂が私の耳へ入つてゐるのですもの」

「はて、な」

「あれ、そんな剥きやうをしちや食べるところは無い、此方こつちへお貸しなさい」

「これは憚様はばかりさまです」

お峯はその言はんとするところを言はんとには、墨々まじまじと手を束つかねて在らんより、事に紛まらしつつ語るの便たよりあるを思へるなり。彼は更に栗の大きいなるを扱えらみて、その頂いただきよりナイフを加へつ。  
 「些ちよひと見たつてそんな事を為さうな風ぢやありませんか。お前さんなんぞは堅人かたじんだから可いけれど、本当にあんな者に係合かかりあひでもしたら大変ですよ」

「さう云ふ事が有りますかな」

「だつて、私の耳へさへ入る位なのに、お前さんが万更知らない事は無からうと思ひますがね。あの別品さんがそれを遣やると云ふのは評判ですよ。金窪かなくぼさん、鷺爪わしづめさん、それから芥原あくたはらさん、皆みんなその話をしてゐましたよ」

「或あるひはそんな評判があるのかも知れませんが、私は一向聞きま

せん。成程、ああ云ふ風ですから、それはさうかも知れません」  
「外の人にはこんな話は出来ません。長年気心も知り合つて家内うちの人も同じのお前さんの事だから、私もお話を為るのですけれどね、困つた事が出来て了つたの——どうしたら可からうかと思つてね」

お峯がナイフを執れる手は漸く鈍くなりぬ。

「おや、これは大変な虫だ。こら、御覧なさい。この虫はどうでせう」

「非常ですな」

「虫が付いちや可けません！ 栗には限らず」

「さうです」

お峯は又一つ取りて剥むき始めけるが、心進まざらんやうにナイフの運はこびは愈いよよ等閑なほざりなりき。

「これは本当にお前さんだから私は信仰して話を為るのですけれど、此処ここきりの話ですからね」

「承知しました」

貫一は食はんとせし栗を持ち直して、屹きとお峯に打向ひたり。聞く耳もあらずと知れど、秘密を語らんとする彼の声は自おのづから潜ひそまりぬ。

「どうも私はこの間をかしから異いわいと思つてゐたのですが、どうも様子がね、内の夫ひとがあかの別品かりあひさんに係合かを付けてゐやしないかと思ふの——どうもそれに違無いの！」

彼ははや栗など剥かずなりぬ。貫一は揺笑ゆすりわらひして、

「そんな馬鹿な事が、貴方あなた……」

「外の人ならいざ知らず、附いてゐる女房にようぼの私が……それはもう間違無しよ！」

貫一は熟じつと思ひ入りて、

「旦那はお幾いくつ歳さいでしたな」

「五十一、もう爺ぢぢいですわね」

彼は又思案して、

「何ぞ証拠しやうこが有りますか」

「証拠と云つて、別に寄越した文を見た訳でもないのですけれど、そんな念を推さなくたつて、もう違無ちがひないの!!」

息巻くお峯の前に彼は面おもてを俯ふして言はず、静おもしめぐに思廻おもひめぐらすなるべし。お峯は心着きて栗を剥き始めつ。その一つを終ふるまで言ことばを継つがざりしが、さて徐おもむろに、

「それはもう男の働とか云ふのだから、妾めかけも楽たのしみも可ううございませす。これが芸者かこひものだとか、困者あかがしだとか云ふのなら、私は何も言ひはしませんけれど第一は、赤檉あかがしさんといふ者があるのぢやあり

ませんか、ねえ。その上にあの女だ！ 凡ただの代物しろものぢやありはし

ませんわね。それだから私は実に心配で、心火ちんちんなら可いけれど、

なかなか心火どころの洒落しやれた沙汰さたぢやありはしません。あんな

者に係合かかりあつてゐた日には、末始終どんな事になるか知れやしな

い、それが私は苦勞でね。内の夫ひともあのくらゐ利巧で居ながら

どうしたと云ふのでせう。今朝出掛けたのもどうも異をかしいの、確

に氷川へ行つたんぢやないらしい。だから御覽なさい。この頃

は何となく治しやれてゐますわね、さうして今朝なんぞは羽織から

帯まで仕立したて下し渾成づくめで、その奇麗事と謂いつたら、何いつが日ひにも氷

川へ行くのにあんなに靚めかした事はありはしません。もうそれは

氷川でない事は知れきつてゐるの」

「それが事実なら困りましたな」

「あれ、お前さんは未だそんな気楽なことを言つてゐるよ。事

実ならつて、事實に違無いと云ふのに」

貫一の氣乗せぬをお峯はいと齒痒くて心苛つなるべし。

「はあ、事實とすれば弥よ善くない。あの女に係合つちや全く妙でない。御心配でせう」

「私は愒氣りんぎで言ふ訳ぢやない、本当に旦那の身を思つて心配を為るのですよ、敵手あひてが悪いからねえ」

思ひ直せども貫一が腑ふには落ちざるなりけり。

「さうして、それは何頃いつごろからの事でございます」

「ついこの頃ですよ、何でも」

「然しかし、何なにしる御心配でせう」

「それに就いて是非お頼があるんですがね、折を見て私も篤とつくり言はうと思ふのです。就いてはこれといふ証拠が無くちや口が  
出ませんから、何とか其処そこを突止めたいのだけれど、私の体からだぢ

や戸外おもての様子が全然解さつらないのですものね」

「御尤ごもつとも」

「で、お前さんと見立ててお頼があるんです。どうか内々様子を探つて見て下さいな。お前さんが寝てお在いででないと、実は今日早速お頼があるのだけれど、折が悪いのね」

行けよと命ぜられたるとなんぞ扱あばん、これ有る哉かな、紅茶と栗と、と貫一はその余あまりに安く売られたるが独ひとり可笑をかかりき。

「いえ、一向差支さしつかへございません。どういふ事ですか」

「さう？ 余あんまりお気の毒ね」

彼の赤き顔の色は耀かがやくばかりに懼よろこびぬ。

「御遠慮無おつしやく有仰おつしやつて下さい」

「さう？ 本ほん当とうに可いいのですか」

お峯は彼ぜんが然だ諾だくの爽さはなるに遇あひて、紅茶と栗とのこれに酬あゆ

るの薄儀に過ぎたるを、今更に可愧はづかしく覚ゆるなり。

「それではね、本当に御苦勞で済まないけれど、氷川まで行つて見て来て下されば、それで可いのですよ。畔柳さんへ行つて、旦那が行つたか、行かないか、若もし行つたのなら、何頃行つて何頃帰つたか、なあに、十とをに九ここまではきつと行きはしませんから。その様子だけ解れば、それで可いのです。それだけ知れば、それで探偵が一つ出来たのですから」

「では行つて参りませう」

彼は起ちて寝衣帯ねまきおびを解かんとすれば、

「お待ちなさいよ、今俵くるまを呼びに遣やるから」

かく言捨ててお峯は忙せはしく階子はしごを下行おりゆけり。

迹あとに貫一は繰返し繰返しこの事の真偽を案じ煩わづらひけるが、服を改めて居間を出でんとしつつ、

「女房に振られて、学士に成損つて、後が高利貸の手代で、お  
 上さんの秘密探偵か！」

と端無く思ひ浮べては漫に独り打笑れつ。

## 第四章

貫一は直に俵を飛して氷川なる畔柳のもとに赴けり。その居  
 宅は田鶴見子爵の邸内に在りて、裏門より出入すべく、館の側  
 面を負ひて、横長に三百坪ばかりを木槿垣に取廻して、昔形氣  
 の内に幽しげに造成したる二階建なり。構の可愼う目立たぬに  
 ひきか引易へて、木口の撰択の至れるは、館の改築ありし折その旧材  
 を拝領して用ゐたるなりとぞ。

貫一も彼の主もこの家に公然の出入を憚る身なれば、玄関側

なる格子口こうしぐちより訪おとづるるを常とせり。彼は戸口に立寄りけるに、  
 鰐淵はきものの履物は在らず。はや帰りしか、来こざりしか、或あるひは未いまだ見  
 えざるにや、とにもかくにもお峯が言ことばにも符号すれども、直ただちに  
 これを以て疑を容いるべきにあらずなど思ひつつ音なへば、応ず  
 る者無くて、再びする時間慣れたる主の妻の声して、連しきりに婢をんなの  
 名を呼びたりしに、答へざりければやがて自ら出いで来て、  
 「おや、さあ、お上なさい。丁度好いところへお出いででした」  
まなこ 眼のみにと大くて、病勝やまひがちに瘦衰やせおとろへたる五体は燈心とうしんの如く、見  
 るだに惨々いたいたしながら、声の明あきらかにして張ある、何処いづこより出いづる音  
 ならんと、一たびは目を驚かし、一たびは耳を驚かすてふ、貫  
 一が一種の化物と謂いへるその人なり。年は五十路いそぢばかりにて頭かしら  
 の霜しも繁しげく夫よりは姉なりとぞ。  
 貫一は屋敷風の恭うやうやしき礼なを作して、

「はい、今日こんにちは急ぎまするので、これで失礼を致します。主人は今朝ほど此方様へ伺ひましたでございませうか」

「いいえ、お出いではありませんよ。実はね、ちとお話が有るので、お目に懸かかりたいと申してをりましたところ。唯今ただいま御殿へ出てを

りますので、些ちよつと呼びに遣りませうから、暫しばらくお上んなすつて」

言はるるままに客間きやくまに通とほりて、端近はしちかう控ふれば、彼は井いの端はた

なりし婢をんなを呼立てて、速々そくそく主の方かたへ走らせつ。蓆たばこぼん盆いを出し、番

茶いを出せしだのみにて、納戸なんどに入りける妻は再び出いで来きたらず。こ

の間は貫一いは如何いかにこの探偵たんてい一件を処置しよせんかと工夫くわふしてゐた

り。やや有りて婢いの息促いきせき還来かへりきにける氣勢けはひせしが、やがて妻の

出でて例の声を振ひぬ。

「さあ唯今ちよつ些と手が放せませんので、御殿の方に居りますから、

どうか彼方あちらへお出なすつて。直ぢき其そ処こですよ。婢めかけに案内を為せま

す。あの豊とよや！」

暇いとま乞こひして戸口を出づれば、勝手元の垣きの側はに二十歳たちかと思ゆる物馴ものなれ顔がの婢まの待まちてりしが、後うしろさまに帯おび尻かひつつろに沿よひて曲まれば、玉川砂礫ざりを敷ぬきたる径こみちありて、出外ではずるれば子爵家の構内かまへうちにて、三棟みむね並ならべる塗籠ぬりごめの背後うしろに、桐きりの木高うゑく植列つらねたる下道したみちの清きく掃はいたるを行窮ゆきつむれば、板塀いたべい繞めぐらせる下屋造げやつくりの煙突せはより忙せしげなる煙立昇けふりりて、折をしも御前籠ごぜんかご昇あるるは通用門くわんようもんなり。貫一くわんいちもこれを入いりて、余所よそながら過す来きし厨くりやに、酒さけの香か、物煮ものひる匂にお頻ひりて、奥おくよりは絶たえず人ひとの通とほふ乱響ひしめきしたる、来客きやくなどやと覚しえつつ、畔柳はななが詰所ひとまなるべき一ひと間に導ひかれぬ。

畔柳元衛の娘静緒は館の腰元に通勤せるなれば、今日は特に  
くろやなぎもとえ しずお やかた  
 女客の執持に召れて、高髻、変裏に粧を改め、お傍不去に鹿略あ  
とりもち たかわげ かはりうら よそひ そばさらず そりやく  
 らせじと冊くなりけり。かくて邸内遊覧の所望ありければ、先  
かしづ まはりばしご なかば のぼりゆ うしろすがた  
 づ西洋館の三階に案内すとて、迂廻階子の半を昇行く後姿に、そ  
うかが かつら  
 の客の如何に貴婦人なるかを窺ふべし。鬘ならではと見ゆるま  
ゆひな まるわけ ろくぶだま うしろざし  
 でに結做したる円髻の漆の如きに、珊瑚の六分玉の後挿を点じ  
しろうえり れいえん たぐ さんご ろくぶだま うしろざし  
 たれば、更に白襟の冷豔物の類ふべき無く、貴族鼠の縞高縮緬  
いつつもん ひとへ ひ れいえん たぐ さぞくねずみ しぼたかりめん  
 の五紋なる単衣を曳きて、帯は海松色地に装束切摸の色紙散  
しちん ときいろもんろ ながじゆばん すそ うはぐつ あゆみ  
 の七糸を高く負ひたり。淡紅色紋紹の長襦袢の裾は上履の歩に  
ゆる にほひこぼ きぬたび たわわ さざんか  
 緩く匂零して、絹足袋の雪に嫋々なる山茶花の開く心地す。  
うるはし かたち  
 この麗き容をば見返り勝に静緒は壁側に寄りて二三段づつ先  
うつむ のぼ くし まきゑ  
 立ちけるが、彼の俯きて昇れるに、櫛の蒔絵のいと能く見えけ  
よ  
 れば、ふとそれに目を奪はれつつ一段踏み失ねて、凄き響の中  
そこ すまじ

にあなや僵たふれんと為したり。幸さいはひに怪我けがは無なかりけれど、彼はなかおのれなか己おのれの怪我おのれなどより貴客きかくを駭おどろかせし狼藉ろうぜきをば、得も忍しのばれず満面はに慚はぢて、

「どうも飛そんだ麁相そそうを致しまして……」

「いいえ。貴方あなた本ほん当とうに何処どこもお傷いためなさりはしませんか」

「いいえ。さぞ吃驚びっくり遊あそばしたでございませう、御免ごめんあそばしまして」

こ度たびは薄氷はくひようを踏ふむ想おもして一段いちだんを昇のぼる時とき、貴婦人きふじんはその帯おびの解とけたるを見て、

「些ちよつとお待ちなさい」

進寄しんきりて結むすばんとするを、心着こころきし静緒しずこは慌あわて驚おどきて、

「あれ、恐おそれ入いります」

「可ようございますよ。さあ、熟じつとして」

「あれ、それでは本当に恐入りますから」

争ひ得ずして竟つひに貴婦人の手を勞わづらはせし彼の心は、溢あふるるばかり

感謝の情を起して、次いではこの優しさを桜の花の薫かをりあらん

やうにも覚ゆるなり。彼は女四書じよししよの内訓ないくんに出でたりとて屢しばしばば父

に聴きざるる「五綵服ごさいふくを盛さかんにするも、以つて身の華かと為すに足ら

ず、貞順道ていじゆんみちに率したがへば、乃すなはち以つて婦徳を進むべし」の本文ほんもんに合かな

ひて、かくてこそ始めて色に矜ほこらず、その徳とくに爽そむかずとも謂いふ

べきなれ。愛めでたき人にも遇あへるかなと絶したたかに思入りぬ。

三階さんがいに着くより静緒しやうじよは西北にしきたの窓まどに寄り行きて、効かひがひ々しく緑色

の帷とばりを絞ガラストビり硝子戸しょうすいどを繰くりあげ、

「どうぞ此方こちらへお出いであそばしまして。ここが一番見晴みはらしが宜よろしいの

でございます」

「まあ、好よい景色ですことね！ 富士が好く晴れて。おや、大

相木犀もくせいが匂におひますね、お邸内やしきうちに在りますの？」

貴婦人おともちはこの秋霽しゅうせいの朗ほがらに潤ひろくして心往こころむくばかりなるに、夢など見るらん面色おももちして佇たたずめり。窓を争あざむひて射入さしる日影ひなめは斜ななめにその姿を照あして、襟留えりどめなる真珠まゆは焚もゆる如ごとく輝あきぬ。塵ちりをだに容ゆるさず澄あみに澄あみたる添景うちの中に立たてる彼の容華かほばせは清あざやかく鮮みまさに見勝みりて、玉壺ぎよくこに白しろき花はなを挿さしたらん風情ふぜいあり。静緒しずおは女おんなながらも見惚みとれて、不束ふつつかに眺入ながめいりつ。

その目の爽さわやかにして滴したたるばかり情なさけの籠こもれる、その眉まゆの思おもへるままに画えがき成なせる如ごとき、その口元くちばみの苔つぼみながら香かに立たつと見みゆる、その鼻はなの似にるものも無なくいと好こく整ととのひたる、肌理きめこまやか濃こに光ひかりをさへ帯おびたる、色いろの透とほるばかりに白しろき、難むづかしを求もとめなば、髪かみは濃こくて瑩つややか沢あに、頭かしらも重おもげに束つかねられたれど、髪際はへぎはの少すこく打乱うちごれたると、立たてる容かたちこそ風かぜにも堪たふまじく纖弱なややかなれど、面おもての瘦やせの過あぎたる

為に、自ら愁う底寂きと、頸の細きが折れやしぬべく可傷きとなり。

されどかく揃ひて好き容量は未だ見ずと、静緒は心に驚きつ  
つ、踏外せし麴忽ははや忘れて、見据うる流盼はその物を奪は  
んと覘ふが如く、吾を失へる顔は間抜けて、常は顧らるる貌あ  
りながら、草の花の匂無きやうに、この貴婦人の傍には見劣せ  
らるること夥かり。彼は己の間抜けたりとも知らで、返す返す  
も人の上を思ひて止まざりき。実にこの奥方なれば、金時計持  
てるも、真珠の襟留せるも、指環を五つまで穿せるも、よし馬  
車に乗りて行かんとも、何をか愧づべき。婦の徳をさへ虧か  
この嬋娟に生れ得て、しかもこの富めるに遇へる、天の恵と世  
の幸とを併せ享けて、残る方無き果報のかくも痛き人もあるも  
のか。美きは貧くて、売らざるを得ず、富めるは醜くて、買は

ざるを得ず、二者は慳はぬ世の習なるに、女ながらもかう生れたらんには、その幸は男にも過ぎぬべしなど、若き女は物羨の念強けれど、妬しとは及び難くて、静緒は心に畏るるなるべし。彼は貴婦人の貌に耽りて、その欸待にとて携へ来つる双眼鏡を参らするをば氣着かであたり。こは殿の仏蘭西より持ち帰られし名器なるを、漸く取出して薦めたり。形は一握の中に隠るばかりなれど、能く遠くを望み得る力はほとほと神助と疑ふべく、筒は乳白色の玉もて造られ、僅に黄金細工の金具を施したるのみ。

やがて双眼鏡は貴婦人の手に在りて、措くを忘らるるまでに愛でられけるが、目の及ばぬ遠き限は南に北に眺尽されて、彼はこの鏡の凡ならず精巧なるに驚ける状なり。

「那処に遠く些の小楊枝ほどの棒が見えませう、あれが旗なの

で、浅黄あさぎに赤い柳条しよまの模様まで昭然はつきり見えて、さうして旗竿はたさの頭さきに鳶とびが宿とまつてゐるが手に取るやう」

「おや、さやうでございませうか。何でもこの位の眼鏡は西洋にも多度たんと御座いませんさうで、招魂社しやうこんしやのお祭の時などは、狼煙のろしの人形よが能く見えるのでございませう。私はこれを見まする度たびにさやう思ひますのでございませうが、かう云う風に話が聞えましたらさぞ宜よろしうございませう。余あんまり近くに見えますので、音や声なんぞが致すかと想ふやうでございませう」

「音が聞えたら、彼方あちこち此方こちの音が一所に成つて粉雑ごちやごちやになつて了しまひませう」

かく言ひて齊ひとしく笑へり。静緒きやくあしらひは客遇きやくぐうに慣れたれば、可羞はづかしげに見えながらも話を求むるには拙つたなからざりき。

「私は始めてこれを見せて戴いただきました折、殿様すつかりだまに全然騙だまされま

したのでございます。鼻のさき前に見えるだらうと仰せられますから、さやうにおつございますと申上げますと、見えたら直すぐにその眼鏡を耳に推付けて見ろ、早くさへ耳に推付けおつければ、音でも声でも聞えると仰せられますので……」

淀よどみ無く語出かたづる静緒の顔を見入りつつ貴婦人は笑ゑましげに聴きみたり。

「私は急いで推付けましたのでございます」

「まあ！」

「なに、ちつとも聞えは致しませんのでございますから、さやう申上げますと、推付けやうが悪いと仰せられまして、御自身に遊ばして御覧なさるのでございますよ。何遍致して見ましたか知れませぬのでございますけれど、何も聞えは致しませんので。さやう致しますると、お前では可かんと仰せられまして、

御供を致してをりました御家来から、御親類方も御在おいででゐらつしやいましたみななすが、皆為みななすつて御覽遊みんあそびばしましたし」

貴婦人は怵こらへかねて失笑せり。

「あら、本当なのでございますよ。それで、未だ推付けやうが悪わるい、もつと早く早くと仰せられるものでございませうから、御殿ごてんに居ります速水はやみと申す者は余り急あんなまぎましたので、耳みみの此こ処こを酷ひどく打ぶちまして、血を出したのでございませう」

彼の飲よろこべるを見るより静緒は椅子いすを持もち来きたりて薦すすめし後、さて語りかたつてくるやう。

「それで誰たれにも聞えないのでございませう。さやう致いたしますると、殿様は御自身ごみづかに遊あそばして御覽みんあそで、なるほど聞えない。どうしたのか知らんなんて、それは、もう実まにお真面まじめ目めなお顔かほで、わざと御考ごこうへあそばして、仏蘭西フランスに居ゐた時ときには能よく聞きえたのだが、

日本は氣候が違ふから、空氣の具合が眼鏡の度に合はない、それで聞えないのだらうと仰せられましたのを、皆本當に致して、一年ばかり釣られてをりましたのでございます」

その名器を手にし、その耳にせし人を前にせる貴婦人の興を覚ゆることは、殿の悪作劇あくさげきを親く睹みたらんにも劣らざりき。

「殿様はお面白い方おもしろでゐらつしやいますから、随分そんな事を遊ばしませうね」

「それでもこの二三年はどうも御氣分がお勝すぐれ遊ばしませんので、お陰むづかしいお顔をしてゐらつしやるのでございます」

書齋に掛けたる半身の画像こそその病根なるべきを知れる貴婦人は、卒にはかに空目遣そらめづかひして物の思はしげに、例そこさびしの底寂うちしめう打湿りて見えぬ。

やや有りて彼は徐しづかに立ち上りけるが、今回は更たびに邇ちかきを眺め

んとて双眼鏡を取り直してけり。彼方此方に差向くる筒の当所あてども無かりければ、偶たまたま唐櫛葉のいと近きが鏡面レンズに入り来きて一面はびこに蔓りぬ。粒々の実も珍く、何の木かとそのまま子細に視たりしに、葉蔭を透きて人顔の見ゆるを、心とも無く眺めけるに、自おのづから得忘れぬ面影に肖にたるところあり。

貴婦人は差し向けたる手を緊しかと据ゑて、目を拭ぬぐふ間も忙せはしく、なほ心を留めて望みけるに、枝葉の遮りてとかくに思ふままならず。漸やうやくその顔の明あきらに見ゆる隙ひまを求めけるが、別に相対さしむかへる人ありて、髪は黒けれども真額まつかうの瑩々てらてら禿はげたるは、先に挨拶あいさつに出いでし家扶の畔柳にて、今一人なるその人こそ、眉濃まゆこく、外眦まなじりの昂あがれる三十前後の男なりけれ。得忘れぬ面影に肖にたりとは未おろかや、得忘れぬその面影なりと、ゆくりなくも認めたる貴婦人の鏡持グラスてる手は兢々わなわなと打顛うちふるひぬ。

行く水に数画かずかくよりも儂はかなき恋しきと可懐なつかしきとの朝夕あすけに、な  
 ほ夜昼わかちの別も無く、絶えぬ思はその外ほかならざりし四年よとせの久きを、  
 熱海おぼろの月は朧おぼろなりしかど、一期いちごの涙に宿りし面影は、なかなか  
 消えもやらで身に添ふ幻を形見にして、又何日いつかは必ずと念懸おもひかけ  
 つつ、雨にも風にも君が無事を祈りて、心は毫つゆも昔かに渝かはらねど、  
 君が恨を重ぬる宮はここに在り。思ひに思ふのみにて別れて後  
 の事は知らず、如何いかなる勞わづらひをやさままでは積みけん、齡よほひよりは面瘁おもやつれ  
 して、異あやしうも物々ふんべつしき分別わか顔かほに老いにけるよ。幸薄さいはひく暮ひうすさるる  
 か、着たるもの見好みよげにもあらで、なほ書生しよせいなるべき姿すがたなる  
 は何にか身を寄せらるるならんなど、思は置所おきどころ無く湧出わきいでて、  
 胸も裂けぬべく覚ゆる時、男の何語りてや打笑あざやかむ顔の鮮あざやかに映れ  
 ば、貴婦人の目よりは涙すずろに玉の糸の如く流れぬ。今は堪た  
 へ難たがくて声も立ちぬべきに、始めて人目ひとめあるを暁さとりて失しなしたり

と思ひたれど、所為せいな無くハンカチーフをきびし緊く目に掩あてたり。静緒おどろぎの驚駭は謂ふばかり無く、

「あれ、如何いかが遊あそびました」

「いえ、なに、私は脳わるいが不良わるいものですから、余あんまり物をみつ賸あめてをると、どうかすると眩暈めまいがして涙の出ることがあるので」

「お腰をお掛け遊あそびしまし、少すこしお頭くしをお摩さすり申ま上げませう」

「いえ、かうしてをると、今いまに直ぢきに癒なほります。憚はばかりですがお冷ひやを一つ下くださいましな」

静緒は驀地まじぐらに行かんとす。

「あの、貴方あなた、誰たれにも有おつしや仰おほらずにね、心配することは無いのですから、本ほん当とうに有あ仰おほらずに、唯私ただわがが嗽うがひをうると言いつて、持もつて来こて下くださいましよ」

「はい、畏かしこまりました」

彼の階子はしごを下り行くと齊ひとしく貴婦人は再び鏡グラスを取りて、葉越はごしの面影を望みしが、一目見るより漸さしぐ含む涙に曇らされて、忽たちまち文色あいろも分かずなりぬ。彼は静しどな無く椅子に崩折くづをれて、縦ほしいままに泣乱なみだしたり。

(四) の三

この貴婦人こそ富山宮子にて、今日夫なる唯繼ただつぐと俱ともに田鶴見子爵に招れて、男同士のシャンペンなど酌交くみかはす間まを、請うて庭内を遊覧せんとて出でしにぞありける。

子爵と富山との交際は近き頃よりにて、彼等の孰いづれも日本写真会々員たるに因よれり。自ら宮おのづかの除物のけものになりて二人の興いに入れるは、想ふにその物語なるべし。富山はこの殿と親友たらんこと

を切望して、ひたすらその意を獲んと力めけるより、子爵も好みて交るべき人とも思はざれど、勢ひ疎じ難くして、今は会員中善く識れるものの最たるなり。爾来富山は益す傾慕して措かず、家にツイシ안의模写と伝へて所蔵せる古画の鑒定を乞ふを名として、曩に芝西久保なる居宅に請じて疎ならず饗す事ありければ、その返として今日は夫婦を招待せるなり。

会員等は富山が頻に子爵に取入るを見て、皆その心を測りかねて、大方は彼為にするところあらんなど言ひて陋み合へりけれど、その実敢て為にせんとにもあらざるべし。彼は常にその友を扱べり。富山が交るところは、その地位に於て、その名声に於て、その家柄に於て、或はその資産に於て、孰の一つか取るべき者ならざれば決して取らざりき。されば彼の友とするところは、それらの一つを以て優に彼以上に価する人士にあらざ

るは無し。実に彼は美き友を有てるなり。さりとして彼は未だ曾てその友を利用せし事などあらざれば、こたびも強あながちに有福なる華族を利用せんとはあらで、友として美き人なれば、かく勉めて交まじはりは求むるならん。故に彼はその名簿の中に一箇いつかの憂うれひを同おなじうすべき友をだに見出みいださざるを知れり。抑そもそも友とは楽たのしみを共にせんが為の友にして、若もし憂を同おなじうせんとは、別に金銭マネイありて、人の助を用ゐず、又決して用ゐるに足らずと信じたり。彼の美き友を択ぶは固もとよりこの理に外ならず、寔まことに彼の択べる友は皆美けれども、尽ことごとくこれ酒肉の兄弟けいていたるのみ。知らず、彼はこれを以てその友に満足すとも、なほこれをその妻に於けるも然しかりと為すの勇あるか。彼が最愛の妻は、その一人を守るべき夫の目を眊かすめて、陋いやしみても猶余なほある高利貸の手代に片思の涙を灑そそぐにあらずや。

宮は傍かたはらに人無しと思へば、限知られぬ涙なみだに搔昏かきくれて、熱海の

浜うらちふに打俯うちふしたりし悲歎なげきの足らざるをここに続つがんとすなるべし。

階下したより仄ほのかに足音の響きければ、やうやう泣顔隠して、わざと

頭かしらを支へつつ室しつの中央まなかなる卓子テエブルの周圍めぐりを歩みりたり。やがて静

緒もちぎたの持来りし水くちこそに漱かいちゆうくすりぎ、懷中藥かいちゆうくすりなど服して後、心地復をさまりぬとて

又窓よに倚よりて外方とのがたを眺めたりしが、

「ちよいと、那処あすこに、それ、男の方の話をしてお在いでの所も御殿

の続きなのですか」

「何方どちからでございます。へ、へい、あれは父の詰所で、誰か客と

見えまする」

「お宅は？ 御近所なのですか」

「はい、お邸内やしきうちでございます。これから直ぢきに見えまする、あの、

倉ぐらの左手ひだりに高い樅もみの木きがございませう、あの陰かげに見えまする二階

家が宅なのでございます」

「おや、さうで。それではこの下から直とお宅の方へ行かれま  
すのね」

「さやうでございませう。お邸の裏門の側でございませう」

「ああさうですか。では些とお庭の方からお邸内を見せて下さ  
いませう」

「お邸内と申しても裏門の方は誠に穢うございませう、御覽あ  
そばすやうな所はございませう」

宮はここを去らんとして又葉越の面影を窺へり。

「付かない事をお聞き申すやうですが、那処にお父様とお話を  
してゐらつしやるのは何地の方ですか」

彼の親達は常に出入せる鰐淵の高利貸なるを明さざれば、静  
緒は教へられし通りを告るなり。

「他あれは番町の方の鰐淵と申す、地面や家作などの売買うりかひを致してをります者の手代で、間はまとか申しました」

「はあ、それでは違ふか知らん」

宮は聞えよがしに独語ひとりごちて、その違たがへるを訝いぶかるやうに擬もてなしつ又其方そなたを打目成うちまもれり。

「番町はどの辺で？」

「五番町だとか申しました」

「お宅へは始終見えるのでございますか」

「はい、折々参りますのでございます」

この物語に因よりて宮は彼の五番町なる鰐淵といふに身を寄するを知り得たれば、この上は如何いかにとも逢たふべき便たよりはあらんと、獲難えがたき宝を獲たるにも勝まされる心地せるなり。されどもこの後相見いんことは何日いっをも計られざるに、願うては神の力も及ぶまじ

き今日の奇遇を仇に、余所ながら見て別れんは本意無からずや。  
 若し彼の眼に睨まれんとも、互の面を合せて、言は交さずとも  
 切ては相見て相知らばやと、四年を恋に饑ゑたる彼の心は熬る  
 如く動きぬ。

さすがに彼の氣遣へるは、事の危きに過ぎたるなり。附添さ  
 へある賓の身にして、賤きものに遇はるる手代風情と、しかも  
 その邸内の徑に相見て、万一不慮の事などあらば、我等夫婦は  
 抑や幾許り恥辱を受くるならん。人にも知られず、我身一つの  
 恥辱ならんには、この面に唾吐るるも厭はじの覚悟なれど奇遇  
 は棄つるに惜き奇遇ながら、逢瀬は今日の一日に限らぬものを、  
 事の破を目に見て愚に躁るべきや。ゆめゆめ今日は逢ふべき機  
 ならず、辛くとも思止まんと胸は据ゑつつも、彼は静緒を賺し  
 て、邸内を一周せんと、西洋館の後より通用門の側に出でて、

外塀際そとべいぎはなる礫道ざりみちを行けば、静緒しずこは斜ななめに見ゆる父が詰所きつばの軒端のきばを指さして、

「あすこ那処なそこが唯今の客の参つてをります所でございます」

實げに唐櫟葉からゆづりはは高く立ちて、折しく一羽の小鳥来鳴きなけり。宮が

胸あやしは異うつと塞ふたがりぬ。

楼たかどのを下りてここに來たるは僅少わづかの間ひまなれば、よもかの人いまは未

だ帰らざるべし、若しここに出きたで來らば如何いかにすべきなど、さ

すがに可恐おそろしきやうにも覚えて、歩あゆみは運べど地を踏める心地も無

く、静緒の語るも耳には入いらで、さて行くほどに裏門かたはらの傍かたはらに到

りぬ。

遊覽せんとありしには似で、貴婦人の目を拳あぐれども何処いづこを眺

むるにもあらず、俯うつむき勝うかつに物思はしき風情ふげいなるを、静緒は怪く

も氣遣きづかはし

く、

「まだ御気分がお悪うゐらつしやいますか」

「いいえ、もう大概良いのですけれど、未だ何だか胸が少し悪いので」

「それはお宜うございませぬ。ではお座敷へお帰りあそばしました方がお宜うございませう」

「家の中よりは戸外の方が未だ可いので、もう少しと歩いてゐる中には復りますよ。ああ、此方がお宅ですか」

「はい、誠に見苦い所でございます」

「まあ、奇麗な！ 木槿が盛ですこと。白ばかりも淡泊して好いぢやありませんか」

畔柳の住居を限として、それより前は道あれども、賓の足を

容るべくもあらず、納屋、物干場、井戸端などの透きて見ゆる

疎垣の此方に、檜の実の夥く零れて、片側に下水を流せる細路

を鶏の遊び、犬の睡ねむれるなど見るも恨うらみに、静緒は急ぎ返さんとせるなり。貴婦人もはや返さんとするとともに恐懼おそれは忽たちまちその心を襲へり。

この一筋道を行くなれば、もしかの人の出来いできたるに会はば、遁のがれんやうはあらで明々地あからさまに面おもてを合すべし。さるは望まざるにもあらねど、静緒の見る目あるを如何いかにせん。仮令たとひ此方こなたにては知らぬ顔してあるべきも、争いでかの人の見付けて驚かざらん。固もとより恨を負へる我が身なれば、言ことばなど懸けらるべしとは想はねど、さりとしてなかなか道行く人のやうには見過されざるべし。ここに宮を見たるその驚駭おどろきは如何ならん。仇あだに遇あへるその憤懣いきどほりは如何ならん。必ずかの人の凄すさまじう激せるを見れば、静緒は幾許いかに我を怪むらん。かく思ひ浮ぶると斉ひとしく身内は熱して冷き汗つめたを出いだし、足は地に吸るるかとはすくかり竦すくみて、宮はこれを想ふにだに堪たへざ

るなりけり。脇道わきみちもあらば避けんと、静緒しずこに問へば有らずと言ふ。知りつつもこの死地に陥りたるを悔いて、遣やる方も無く惑へる宮が面色おももちの穏やすからぬを見尤みとがめて、静緒しずこは窃ひそかに目を側そばめたり。彼はいとどその目を懼おそるるなるべし。今は心も漫そぞろに足を疾はやむれば、土蔵かどの角も間近まぢかになりて其処そこをだに無事に過ぎなば、と切しきりに急いそがるる折ましも、人の影は突とつとしてその角より頭あはれつ。宮は眩めくるめめきぬ。

これより帰りてともかくもお峯が前は好きよやうに言譎ごひしりへ、さて篤あつと実否たを糺ただせし上ひそかにて私せに為なんやうも有あらんなど貫一ぬきは思案しあんしつつ、黒の中折帽ぬりこめを稍目深ややまぶかに引側ひきそばめ、通学ならに馴なされし疾足はやあしを駆りて、塗籠ぬりこめの角より斜ななめに桐の並木あひの間を出でて、礫道ざりみちの端はを歩あみ来きたれり。

あたりあたりに往來ゆききのあるにあらねば、二人の姿は忽たちまち彼の目に入り

ぬ。一人は畔柳の娘なりとは疾く知られけれど、顔打背けたる貴婦人の眩まぼゆく着飾りたるは、子爵家の客なるべしと纔わづかに察せらるるのみ。互に歩み寄りて一間ばかりに近けば、貫一は静緒に向ひて慇懃いんぎんに礼するを、宮は傍かたはらに能ふ限は身を窄すぼめて密ひそかに流盼ながしめを凝したり。その面の色は惨として夕顔の花に宵月の映へる如く、その冷ひややかなるべきもほとほと、相似たりと見えぬ。脚あしは打顫うちふるひ打顫ひ、胸は今にも裂けぬべく轟とどろくを、覚さとられじとすれば猶打顫ひ猶轟きて、貫一が面影の目に沁しむばかり見ゆる外は、生きたりとも死にたりとも自ら分かぬ心地してき。貫一は帽を打着て行過ぎんとする際きはに、ふと目鞘めざやの走りて、館の賓まろうどなる貴婦人を一瞥べつせり。端無はしなくも相互たがひの面おもては合へり。宮なるよ！ 姦婦かんぶなるよ！ 銅臭にくぶとんの肉蒲団にくぶとんなるよ！ とかつは驚き、かつは憤り、はたと睨ねめて動かざる眼まなこには見る見る涙を湛たたへて、唯一攫ひとつかみにも

せまほしく肉の躍るを推泳へつつ、窃に齒咬をなしたり。可懐しさと可恐しさと可耻しさとを収集めたる宮が胸の内は何に喩へんやうも無く、あはれ、人目だにあらざば抱付きても思ふまに苛まれんと、心のみは憧れながら身を如何とも為難ければ、せめてこの誠は通ぜよかすと、見る目に思を籠むるより外はあらず。

貫一はつと踏出して始の如く足疾に過行けり。宮は附人に面を背けて、唇を咬みつつ歩めり。驚きに驚かされし静緒は何事とも弁へねど、推すべきほどには推して、事の秘密なるを思へば、賓の顔色のさしも常ならず変りて可惱しげなるを、問出でんも可や否やを料りかねて、唯可慎う引添ひて行くのみなりしが、漸く庭口に来にける時、

「大相お顔色がお悪くてみらつしやいますが、お座敷へお出あ

そばして、お休み遊ばしましては如何いかがでございますか」

「そんなに顔色が悪うございますか」

「はい、真蒼まつさをであらうございます」

「ああさうですか、困りましたね。それでは彼方あちらへ参つて、又皆さんに御心配を懸けると可いけませんから、お庭を一周ひとまはりしまして、その内には気分が復なほりますから、さうしてお座敷へ参りませう。然し今日は大変貴方あなたのお世話になりました、お蔭様で私も……」

「あれ、飛んでもない事を有おつしや仰います」

貴婦人はその無名指むめいしより繡眼めじろの押競おしくらを片截かたきりにせる黄金きんの指環ゆびわを抜取りて、懐紙ふところかみに包みたるを、

「失礼ですが、これはお礼のお証しるしに」

静緒は驚き怖おそれたるなり。

「はい……かう云ふ物を……」

「可ようございますから取つて置いて下さい。その代り誰にもお見せなさらないやうに、阿父様にも阿母様にも誰にも有仰おつしやらないやうに、ねえ」

受けじと為るを手籠てじめに取せて、互に何も知らぬ顔して、木の間伝ひに泉水の麓そたばし近く寄る時、書院の静なるに夫の高笑たかわらひするが聞えぬ。

宮はこの散歩の間に勉つとめて気を平たひらげ、色を斂をさめて、ともかくも人目を追のがれんと計れるなり。されどもこは酒を窃ぬすみて酔はざらんと欲するに同おなじかるべし。

彼は先に遭あひし事の胸に鏤ゑられたらんやうに忘るる能あたはざるさへあるに、なかなか朽ちも果てざりし恋の更に萌出もえいでて、募りに募らんとする心の乱みだれは、堪たふるに難かたき痛苦くるしみを齎もたらして、一步

は一步より、胸の逼ること急に、身内の血は尽くその心頭に注ぎて余さず熬らるるかと思ゆるばかりなるに、かかる折は打寛ぎて意任せの我が家に独り居たらんぞ可き。人に接して強ひて語り、強ひて笑ひ、強ひて楽まんなど、あな可煩しと、例の劇く唇を咬みて止まず。

築山陰の野路を写せる径を行けば、踏処無く地を這ふ葛の乱れ生ひて、草藤、金線草、紫茉莉の色々、茅萱、穂薄の露滋く、泉水の末を引きて粼々水を卑きに落せる汀なる胡麻竹の一叢茂れるに隠顕して苔蒸す石組の小高きに四阿の立てるを、やうやう辿り着きて貴婦人は艱しげに憩へり。

彼は静緒の柱際に立ちて控ふるを、

「貴方もお草臥でせう、あれへお掛けなさいな。未だ私の顔色は悪うございますか」

その色の前にも劣らず蒼白めたるのみならで、下唇の何に傷きずきてや、少く血すこしの流れたるに、彼は太く驚いたきて、

「あれ、お唇から血が出てをります。如何いかがあそばしました」

ハンカチイフもて抑へければ、絹の白きに柘榴ざくろの花弁はなびらの如く

附きたるに、貴婦人は懐鏡ふところかがみとりいだ取出して、咬かむことの過ぎし故ゆゑぞ

と知りぬ。実に顔の色は躬みづからも凄すこしと見るまでに変わるを、庭の

内いをば幾周いくめぐりして我はこの色を隠さんと為すらんと、彼は心陰こころひそかに己おのれ

を嘲あざけるなりき。

たちま

忽ち女の声して築山の彼方あなたより、

「静緒さん、静緒さん！」

彼は走り行き、手を鳴して応こたへけるが、やがて木隠こがくれに語かたふ気勢けはひ

して、返り来ると齊ひとしく賓まろうどの前に会釈して、

「先程からお座敷ではお待兼でゐらつしやいますさうで御座い

ますから、直すぐに彼方あちらへお出いであそびしますやうに」

「おや、さうでしたか。随分先から長い間道草を食べましたか  
ら」

道を転じて静緒は雲帯橋うんたいきょうの在かたる方へ導なけり。橋に出づれば正面の書院を望むべく、はや所狭ところせまきまで盃盤はいばんを陳つらねたるも見えて、夫は席に着きゐたり。

此方こなたの姿を見るより子爵は縁先に出でて磨さしまねきつつ、

「そこをお渡りになつて、此方こちらに燈籠とうろうがございませう、あの傍そばへ些ちよつとお出で下さいませんか。一枚像とらして戴かきたい」

写真機は既に好き処おほひに据ひきかゑられたるなり。子爵は庭おりに下立おりたちて、早くもカメラの覆おほひを引被ひきかぎ、かれこれ位置を取りなどして、

「さあ、光線の具合が妙だ！」

いでや、事ことの様ようを見んとて、慢々ゆらゆらと出来いけるは富山唯繼いなり。

片手には葉卷シガアの半燻なかばくゆりしを撮つまみ、片臂かたひぢを五紋ひとへはおりの单羽織そでの袖の内  
に張りて、鼻の下の延びて見ゆるやうの笑ゑみを浮べつつ、

「ああ、おまへ其処そこに居らんければ可かんよ、何なげ為歩いて来る  
のかね」

子爵の慌あわてたる顔はこの時毛繻子けじゆすの覆の内よりついと頭あらはれた  
り。

「可あすこけない！ 那処あすこに居て下さらなければ可あすこけませんな。何、御  
免かうむを蒙かる？ —— 可あすこけない！ お手間は取あせませんから、どう  
ぞ」

「いや、貴方あなたは巧ことい言をお覚えですな。お手間は取あせませんは  
余程好あい」

「この位に言つて願はんとね、近頃は写してもらふ人よりは写  
したがる者の方が多あいですからね。さあ、奥さん、まあ、彼方あちら

へ。静緒、お前奥さんを那処へお連れ申して」

唯継は目もて示して、

「お前、早く行かんけりや可かんよ、折角かうして御支度をなすつて下すつたのに、是非願ひな。ええ。あの燈籠の傍へ立つのだ。この機械は非常に結構なのだから是非願ひな。何も羞含むことは無いぢやないか、何羞含む訳ぢやない？ さうとも羞含むことは無いとも、始終内で遣つてをるのに、あれで可いのだ。姿勢は私が見て遣るから早くおいで。燈籠へ倚掛つて頬杖でも挂いて、空を眺めてゐる状なども可いよ。ねえ、如何でせう」

「結構。結構」と子爵は頷けり。

心は進まねど強ひて否むべくもあらねば、宮は行きて指定の位置に立てるを、唯継は望み見て、

「さう棒立ちになつてををつちや可かんぢやないか。何ぞ持つてをる方が可いか知らんて」

かく<sup>つぶや</sup>呟きつつ庭下駄を引<sup>ひきか</sup>掛け、急ぎ行きて、その想へるやうに燈籠に倚<sup>よら</sup>しめ、頬杖を拄<sup>つか</sup>しめ、空を眺めよと教へて、袂<sup>たもと</sup>の皺<sup>しわ</sup>めるを展<sup>の</sup>べ、裾<sup>すそ</sup>の纏<sup>もつれ</sup>を引直し、さて好しと、少<sup>すこし</sup>く退きて姿勢を見る<sup>の</sup>るとともに、彼はその面<sup>おもて</sup>の可<sup>なやまし</sup>惱げに太<sup>いた</sup>くも色を変へたるを発見して、直<sup>ただち</sup>に寄り来つ、

「どうしたのだい、おまへ、その顔色は？ 何<sup>どこ</sup>処<sup>わるい</sup>か不快のか、ええ。非常な血色だよ。どうした」

「少しばかり頭痛がいたすので」

「頭痛？ それぢやかうして立つてをるのは苦いだらう」

「いいえ、それ程ではないので」

「苦いやうなら我慢をせんとも、私<sup>わし</sup>が訳<sup>ことわり</sup>を言つてお謝絶<sup>ことわり</sup>をする

から」

「いいえ、宜よろうございますよ」

「可いいかい、本当に可いいかね。我慢をせんとも可いいから」

「宜よろうございますよ」

「さうか、然し非常に可い厭やな色だ」

彼は眷けん々として去る能あたはざるなり。待ちかねたる子爵は呼べ

り。

「如何いがですか」

唯繼は慌あ忙わく身を開きて、

「一つこれで御覽下さい」

鏡面レンズに照して二三の改むべきを注意せし後、子爵は種板たねいたを挿入さしい

るれば、唯繼は心得てその邇ちかきを避けたり。

空を眺むる宮が目の中うちには焚もゆらんやうに一種の表情力充満みちみ

ちて、物憂さの支へかねたる姿もわざとならず。色ある衣は唐松からまつの翠みどりの下蔭したかげに章あやを成して、秋高き清遠あたりの空はその後に舗しき、四脚よつあしの雪見燈籠を小楯こたてに裾の辺は寒咲躑躅かんざきつづじの茂しげみに隠れて、近きに二羽の鶯がの汀みぎはに糞あさるなど、寧ろ画むしにこそ写さまほしきを、子爵は心に喜びつつ写真機の前に進み出で、今や鏡面レンズを開かんと構ふる時、貴婦人の頬杖たぢまは忽ち頰くづれて、その身は燈籠の笠の上に折重がなりて岸破がぼと伏しぬ。

## 第五章

遊佐良橘ゆさりようきつは郷里かへに在りし日も、出京の遊学中も、頗すこぶる謹直こんちちを以て聞えしに、却りて、日本周航会社に出勤せる今日、三百円なやまの高利の為に艱なやまさると知れる彼の友は皆驚けるなり。或もの

は結婚費なるべしと言ひ、或ものは外を張らざるべからざる為の遺繰やりくりなるべしと言ひ、或ものは隠遊かくれあそびの風流債ならんと説くもありて、この不思議の負債とその美き妻とは、遊佐に過ぎたる物が二つに数へらるるなりき。されどもこは謂いふべからざる事情の下に連帯の印いんを仮かせしが、形かたの如く腐れ込みて、義理の余毒の苦を受うると知りて、彼の不幸を悲むものは、交際官試補なる法学士蒲田鉄弥かまたと、同会社の貨物課なる法学士風早庫之助かざはやくらの助けあるのみ。

およ凡そ高利の術たるや、渴者かつしやに水を売るなり。渴かはの甚はなはだく堪たへ難き者に至りては、決してその肉を割ききてこれを換ふるを辞せざるべし。この急に乗じてこれを売る、一杯の水もその値あたひぎ玉漿よくしよを盛るに異る無し。故ゆゑに前後不覚に渴する者能くこれを買ふべし、その渴いゆの癒いるに及びては、玉漿ぎつなりとして喜び吃きつせしもの

は、素と下水の上澄に過ぎざるを悟りて、痛恨、痛悔すといへども、彼は約の如く下水の倍量をばその鮮血に搾りその活肉に割きて以て返さざるべからず。噫、世間の最も不敵なる者高利を貸して、これを借るは更に最も不敵なる者と為さざらんや。ここを以て、高利は借るべき人これを借りて始めて用ゐるべし。さらばこれを借るの覚悟あるべきを要す。これ風早法学士の高利貸に対する意見の概要なり。遊佐は実にこの人にあらず、又この覚悟とても有らざるを、奇禍に罹れる哉と、彼は人の為ながら常にこの憂を解く能はざりき。

近きに郷友会の秋季大会あらんとて、今日委員会のありし歸さを彼等は三人打連れて、遊佐が家へ向へるなり。

「別に御馳走と云つては無いけれど、松茸の極新しいのと、製造元から貰つた黒麦酒が有るからね、鶏でも買つて、寛り話さう

ぢやないか」

遊佐まさぐが弄まさぐれる半月形の熏豚ハムの罐詰かんづめも、この設まうけにとて途みちに求め  
しなり。

蒲田の声は朗々として聴くに快く、

蒲「それは結構だ。さう泊とまりが知れて見ると急ぐにも当らんから、  
どうだね、一ゲエム。君はこの頃風早と対たいに成つたさうだが、  
長足の進歩ぢやないか。然しかし、どうもその長足のちやうはてう、  
(貂) 足らず、続つぐにフロックを以つて為るのぢやないかい。こ  
の頃は全然すつかりフロックが止とまつた？ ははははは、それはお目出度めでた  
いやうな御愁傷のやうな妙な次第だね。然し、フロックが止つ  
たのは明あきらに一段の進境を示すものだ。まあ、それで大分話せる  
やうになりました」

風早は例の皺しわ噺かれごゑして大たい笑しやうを発はせり。

風「更に一段の進境を示すには、たてキユウ 豎杖をして二寸三分クロオスを裂やぶかなければ可けません」

蒲「三たびひだり臂を折つて良医となるさ。あれから僕はたてキユウ 豎杖の極意を悟つたのだ」

風「へへへ、この頃の僕の後曳あとびきの手際てぎはも知らんで」

これを聞きて、こたびは遊佐が笑へり。

遊「君の後曳も口ほどではないよ。この間あすこ那おやぢ処の主翁がさう言つてゐた、風早さんが後曳を三度なさると新しいチヨオクが半分なくな失る……」

蒲「うがちえ 穿得て妙だ」

風「チヨオクの多少は業わざの巧拙わづらには関せんよ。遊佐が無闇むやみに杖キユウを取易とりかへるのだつて、決して見みとも好くはない」

蒲田は手もてにはか 遽に制しつ。

「もう、それで可い。他の非を挙げるやうな者に業の出来た例が無い。悲い哉君達の球も蒲田に八十で底止だね」

風「八十の事があるものか」

蒲「それでは幾箇で来るのだ」

「八十五よ」

「五とは情無い！ 心の程も知られける哉だ」

「何でも可いから一ゲエム行かう」

「行かうとは何だ！ 願ひますと言ふものだ」

語も訖らざるに彼は傍腹に不意の肱突を吃ひぬ。

「あ、痛！ さう強く撞くから毎々球が滾げ出すのだ。風早の球は

暴いから癩癩玉と謂ふのだし、遊佐のは馬鹿に柔いから蒟蒻玉。

それで、二人の撞くところは電公と蚊帳が捫扱してゐるやうな

ものだ」

風「ええ、自分がどれほど撞けるのだ」

蒲「さう、多度たんとも行かんが、天狗てんぐの風早に二十遣るのさ」

二人は劣らじと諍あらがひし末、直ただちに一番の勝負をいざいざと手薬煉てぐすね引きかくるを、遊佐は引分けて、

「それは飲んでからに為やう。夜が長いから後で寛ゆつくり出来るさ。帰つて風呂にでも入いつて、それから徐々そろそろ始めやうよ」

往来ゆききしげ繁まじき町を湯屋の角より入いれば、道幅その二分の一ばかりなる横町の物売る店も雑まじりながら閑静に、家並整へる中程に店蔵みせぐらの質店しちやと軒ランプの並びて、格子木戸こうしきどの内を庭がかりにしたる門かどに楪葉ゆづりはの立てるぞ遊佐が居住すまひなる。

彼は二人を導きて内格子を開きける時、彼の美き妻は出いで来きたりて、伴へる客あるを見て稍打惑ややへる気色けしきなりしが、遽にはかに笑あみを含みて常の如く迎へたり。

「さあ、どうぞお二階へ」

「座敷は？」と夫に尤とがめられて、彼はいよいよ困こうじたるなり。

「唯今ただいまちよい些ふさがと塞ふさつてをりますから」

「ぢや、君、二階へどうぞ」

勝手を知れる客なれば従々づかづかと長四畳を通りて行く跡に、妻は  
小聲こゑになりて、

「鰐淵わにぶちから参つてをりますよ」

「来たか！」

「是非お目に懸りたいと言つて、何と言つても帰りませんから、  
座敷へ上げて置きました、些ちよいとお会ひなすつて、早く還かへしてお  
了しまひなさいました」

「松茸まつだけはどうした」

妻はこの暢気のんきなる問に驚かされぬ。

「貴方、まあ松茸なんぞよりは早く……」

「待てよ。それからこの間の黒麦酒な……」

「麦酒も松茸もございますから早くあれを還してお了ひなさいましよ。私は那奴が居ると思ふと不快な心持で」

遊佐も差当りて当惑の眉を顰めつ。二階にては例の玉戯の争なるべし、さも気楽に高笑するを妻はいと心憎く。

少間ありて遊佐は二階に昇り来れり。

蒲「浴に一つ行かうよ。手拭を貸してくれ給へな」

遊「ま、待ち給へ、今一処に行くから。時に弱つて了つた」  
実げに言ふが如く彼は心穏かならず見ゆるなり。

風「まあ、坐りたまへ。どうしたのかい」

遊「坐つてもをられんのだ、下に高利貸が来てをるのだよ」

蒲「那物が来たのか」

遊「先から座敷で帰来を待つてをつたのだ。困つたね！」

彼は立ちながら頭かしらを抑へて緩ゆるく柱はしらに倚よれり。

蒲「何とか言つて逐返おつかへして了ひ給へ」

遊「なかなか逐返おつかへらんのだよ。陰忍ひねくねした皮肉な奴でね、那奴あいつに

捉つかまつたら耐たらん」

蒲「二三円も叩たたき付けて遣るさ」

遊「もうそれも度々たびたびなのでね、他むかふは書替かを為させやうと掛つてゐ

るのだから、延期料を握つたのぢや今日は帰らん」

風早は聴きゐるだに心苦くて、

「蒲田、君一つ談判してやり給へ、ええ、何とか君の弁ふを揮ふるつ

て」

「これは外の談判と違つて唯金銭かねづくなのだから、素手すで飛込ふむのぢや弁ふの奮ふるひやうが無いよ。それで忽ま諸ますると飛んで火に

入る夏の虫となるのだから、まあ君が行つて何とか話をして見たまへ。僕は様子を立聞して、臨機応変の助太刀すけだちを為るから」と  
いと難むづかしと思ひながらも、かくては果てじと、遊佐は氣を取直して下り行くなりけり。

風「氣の毒な、萎しをれてゐる。あれの事だから心配してゐるのだ。君、何とかして拯すくつて遣り給へな」

蒲「一つ行つて様子を見て来やう。なあに、そんなに心配するほどの事は無いのだよ。遊佐は氣が小いから可いかない。ああ云ふ風だから益ますす脚下あしもとを見られて好い事を為れるのだ。高が金銭かねの貸借かしかりだ、命に別条は有りはしないさ」

「命に別条は無くても、名誉に別条が有るから、紳士たるものは懼おそれるだらうぢやないか」

「ところが懼れない！ 紳士たるものが高利アイスを貸したら、名誉に

関らうけれど、高い利を払つて借りるのだから、安利あんりや無利息なんぞを借りるから見れば、復はるかに以つて栄とするに足れりき。紳士たりといへども金銭かねに窮こまらんと云ふ限は無ない、窮つたから借りるのだ。借りて返さんと云ひは為すまいし、名譽めいよに於きて傷きずつところは少しも無い」

「恐入りました、高利アイスを借りやうと云ふ紳士の心掛は又別の物ですな」

「で、仮に一步を譲るさ、譲つて、高利アイスを借りるなどは、紳士たるもののいと慚はづべき行おこなひと為るよ。さほど慚はづべきならば始いまから借りんが可いぢやないか。既に借りた以上は仕方が無い、未だ借りざる先の慚はづべき心を以つてこれに対せんとするも能あたはざるなりだらう。宋そうの時代であつたかね、何か乱おこが興つた。すると上奏に及んだものがある、これは師いを動くかさるるまでも

ない、一人の将を河上へ遣して、賊の方に向つて孝経を読せられた事ならば、賊は自から消滅せん、は好いぢやないか。これを笑ふけれど、遊佐の如きは真面目で孝経を読んでゐるのだよ、既に借りてき、天引四割と吃つて一月隔に血を吮れる。そんな無法な目に遭ひながら、未だ借りざる先の紳士たる徳義や、良心を持つてゐて耐るものか。孝経が解るくらゐなら高利は貸しません、彼等は錢勘定の出来る毛族さ」

得意の快弁流るる如く、彼は息をも継せず説来りぬ。

「濡れぬ内こそ露をもだ。遊佐も借りんのなら可いさ、既に借りて、無法な目に遭ひながら、なほ未だ借りざる先の良心を持つてゐるのは大きな悞だ。それは勿論借りた後といへども良心を持たなければならんけれど、借りざる先の良心と、借りたる後の良心とは、一物にして一物ならずだよ。武士の魂と商人根

性とは元是これ一物なのだ。それが境遇に依じて魂ともなれば根性ともなるのさ。で、商人根性といへども決して不義不徳を容ゆるさんことは、武士の魂と敢あへて異るところは無ない。武士にあつては武士魂なるものが、商人あきんどにあつては商人根性なのだもの。そこで、紳士も高利アイスなどを借りん内は武士の魂よ、既すでに對高利たいアイスとなつたら、商人根性にならんければ身が立たない。究竟つまりは敵に應ずる手段なのだ」

「それは固より御同感さ。けれども、紳士が高利アイスを借りて、榮と為るに足れりと謂いふに至いたつては……」

蒲田は恐縮さませる状なを作なして、

「それは少し白馬は馬あらに非あらずだつたよ」

「時に、もう下へ行つて見て遣り給へ」

「どれ、一いつつび深く探たる蛟鱔こうかくの淵えんと出掛でけやうか」

「空拳くうけんを奈いかんだらう」

一笑して蒲田は二階を下りけり。風早は独ひとり臥ねつ起きつ安否の氣遣きづかはれて苦ぶりようき無聊に堪へざる折から、主あるじの妻は漸やうやく茶を持ち来りぬ。

「どうも甚はなはだ失礼を致しました」

「蒲田は座敷へ参りましたか」

彼はその美あかき顔を少く赧あかめて、

「はい、あの居間へお出いでで、紙門越ふすまごしに様子を聴いてゐらつしやいます。どうもこんなところを皆様のお目に掛けまして、實にお可恥はづかしくてなりません」

「なあに、他人ぢやなし、皆様子を知つてゐる者ばかりですから構ふ事はありません」

「私わたくしはもう彼奴あいつが参りますと、惣毛そうけだ豎つて頭痛が致すのでござ

います。あんな強慾な事を致すものは全く人相が別でござい  
ます。それは可厭いやに陰気な軻々ねらねちした、底意地の悪さうな、本当に  
探偵小説にでも在りさうな奴でございますよ」

急足いそぎあしに階子はしごを鳴して昇り来りし蒲田は、

「おいおい風早、不思議、不思議」

と上端あがりはなに坐れる妻の背後うしろを過るとて絶かしたたその足を踏付ふんづけたり。

「これは失礼を。お痛うございましたらう。どうも失礼を」

骨身に沁しみて痛かりけるを妻は赤くなりて推忭おしこらへつつ、さり

気無く挨拶あいさつせるを、風早は見かねたりけん、

「不相変あひかはらず麁相そそつかしいね、蒲田は」

「どうぞ御免を。つい慌あわてたものだから……」

「何をそんなに慌てるのさ」

「落付おちつかれる訳のものではないよ。下に来てる高利貸アイヌと云ふの

は、誰だと思ふ」

「君のと同じ奴かい」

「人様の居る前で君のとは怪しからんぢやないか」

「これは失礼」

「僕は妻君の足を踏んだのだが、君は僕の面を踏んだ」

「でも仕合と皮の厚いところで」

「怪しからん！」

妻の足の痛は忽ち下腹に転りて、彼は得堪へず笑ふなりけり。

風「常談どころぢやない、下では苦しんでゐる人があるのだ」

蒲「その苦しめてゐる奴だ、不思議ぢやないか、間だよ、あの

間貫一だよ」

敵寄すると聞きけんやうに風早は身構へて、

「間貫一、学校に居た?!」

「さう！ 驚いたらう」

彼は長き鼻息を出して、空く眼を瞪りしが、

「本當かい」

「まあ、見て来たまへ」

別して呆れたるは主の妻なり。彼は鈍ましからず胸の跳るを  
覚えぬ。同じ思は二人が面にも顯るるを見るべし。

「下に参つてゐるのは御朋友なのでございますか」

蒲田は忙しげに頷きて、

「さうです。我々と高等中学の同級に居つた男なのですよ」

「まあ！」

「夙て学校を罷めてから高利貸を遣つてゐると云ふ話は聞いて  
りましたけれど、極温和い男で、高利貸などの出来る気ぢやな  
いのですから、そんな事は虚だらうと誰も想つてをつたのです。」

ところが、下に来てゐるのがその間貫一ですから驚くぢやありませんか」

「まあ！ 高等中学にも居た人が何だつて高利貸などに成つたのでございませう」

「さあ、そこで誰も虚うそと想ふのです」

「本ほんにさうでございますね」

少すこき前に起ちて行きし風早うたがひは疑はらを霽はらして帰きたり来れり。

「どうだ、どうだ」

「驚いたね、確に間貫一！」

「アルフレッド大王の面影おもかげがあるだらう」

「エツセクスを逐おっぼら払はれた時の面影だ。然し彼奴あいつが高利貸を遣らうとは想はなかつたが、どうしたのだらう」

「さあ、あれで因業いんごうな事が出来るだらうか」

「因業どころではございませんよ」

あるじ 主の妻はその美き顔をしむ皺めたるなり。

蒲「随分ひど酷うございますか」

妻「酷うございますわ」

こたびは泣顔せるなり。風早は決するところ有るが如くに余せし茶をばにはか遽に取りて飲干し、

「然し間であるのがさいはひ幸だ、押掛けて行つて、昔の顔で一つ談判せうぢやないか。我々が口を利くのだ、奴もさう阿漕あこぎなことは言ひもすまい。次手ついでに何とか話を着けて、元金もとぎんだけか何かに負けさして遣らうよ。那奴あいつなら恐れることは無い」

彼の起ちて帯締直すを蒲田は見て、

「まるで喧嘩けんかに行くやうだ」

「そんな事を言はずに自分も些ちつと気凛きりつとするが可い、帯の下へ

時計の垂下ぶらさがつてゐるなどは威厳を損じるぢやないか」

「うむ、成程」と蒲田も立上りて帯を解けば、主あるじの妻は傍かたはらより、

「お羽織をお取りなさいましな」

「これは憚はばかりさま様です。些ちよつと身支度に婦人の心添こころぞへを受けるところは

堀部安兵衛といふ役だ。然し芝居でも、人数にんずが多くて、支度を

する方は大概取つて投げられるやうだから、お互に氣を着ける

事だよ」

「馬鹿な！ 間はま如ごときに」

「急に強くなつたから可笑をかい。さあ。用意は好いいよ」

「此方こつちも可いい」

二人は膝を正して屹きと差向へり。

妻「お茶を一つ差上げませう」

蒲「どうしても敵討かたきうちの門出かどでだ。互ちに交あす茶盃さかずきか」

## 第六章

座敷には窘める遊佐と沈着きたる貫一と相對して、苘盆の火の消えんとすれど呼ばず、彼の傍に茶托の上に伏せたる茶碗は、嘗て肺病患者と知らで出せしを恐れて除物にしたりしをば、妻の取出してわざと用ゐたるなり。

遊佐は憤を忍べる声音にて、

「それは出来んよ。勿論朋友は幾多も有るけれど、書替の連帯を頼むやうな者は無いのだから。考へて見給へ、何ぼ朋友の中だと云つても外の事と違つて、借金の連帯は頼めないよ。さう無理を言つて困らせんでも可いぢやないか」

貫一の声は重きを曳くが如く底強く沈みたり。

「敢て困らせるの、何のと云ふ訳ではありません。利は下さらず、書替は出来んと、それでは私の方が立ちません。何方とも今日は是非願はんければならのでございます。連帯と云つたところで、固より貴方がお引受けなさる精神なれば、外の迷惑にはならんのですから、些の名義を借りるだけの話、それくらゐの事は朋友の誼として、何方でも承諾なさりさうなものです。究竟名義だけあれば宜いので、私の方では十分貴方を信用してをるのですから、決してその連帯者に掛らうなどとは思はんのです。ここで何とか一つ廉が付きませんか、私も主人に對して言訳がありません。利を受取る訳に行かなかつたから、書替をして来たと言へば、それで一先句切が付くのでありますから、どうぞ一つさう願ひます」

遊佐は答ふるところを知らざるなり。

「何方でも可うございます、御親友の内で一名」

「可かんよ、それは到底可かんのだよ」

「到底可かんでは私の方が済みません。さう致すと、自然御名譽かかはに関するやうな手段も取らんければなりません」

「どうせうと言ふのかね」

「無論差押おしおきです」

遊佐は強しひて微笑を含みけれど、胸には犇ひしと応こたへて、はや八分の怯おし気付きたるなり。彼は悶もたえて振断ねぢきるばかりにその髭ひげを拈ひねり拈りて止まず。

「三百円やそこらの端金はしたがねで貴方あなたの御名譽きずつを傷けて、後來御出世このましの妨碍さまたげにもなるやうな事を為るのは、私の方でも決けして可好このましくはないのです。けれども、此方こちらの請求こちらを容いれて下さらなければ、已やむを得ないので、実は事は穩便こちらの方が双方の利益なので、

更に御一考を願ひます」

「それは、まあ、品に由つたら書替も為んではないけれど、君の要求は、元金もとぎんの上に借用当時から今日こんにちまでの制規の利子が一ヶ年分と、今度払ふべき九十円の一月分を加へて三百九十円かね、それに対する三月分の天引が百十七円強なながし、それと合がっして五百円の証書面に書替へると云ふのだらう。又それが連帯債務と言ふだらうけれど、一文だつて自分が費つかつたのでもないのに、この間九十円といふものを取られた上に、又改めて五百円の証書をかか書される！ 余あんまり馬鹿々々しくて話にならん。此方こつちの身にも成つて少しは斟酌しんしやくするが可いぢやないか。一文も費ひもせんで五百円の証書が書けると想ふかい」

空嘯そらうせきて貫一は笑へり。

「今更そんな事を！」

遊佐は陰ひそかに切齒はがみをなしてその横顔よこがおを睨ねめ付つけたり。

彼のも追おれ難がき義理ぎりに迫おりて連帯れんたいの印捺いんぱつきしより、不測わざはひの禍わざはひは起おりてかかる憂うれき目めを見るよと、太いたく己おのれに懲おりてければ、この際さいに連帯れんたいを頼たのみて、同様どうがうの迷惑めいわくを懸かくることもやと、断つじて貫くわん一の請求せいきうを容いれざりき。さりとして今いま一つの請求せいきうなる利子りしを即すなはち座ざに払はふべき道みちもあらざれば、彼の進退しんたいはこここゝに谷きはまるとともに貫くわん一いつもこの場いっすんは一寸いっすんも去いらじと構かまへたれば、遊佐あそは縋わなに係かれる獲物えくぶつの如ごとく一分時毎いっぴんじごとに窮きうする外ほかは無なくて、今は唯身ただみに受うくべき謂いはれなき責苦せいきを受けて、かくまでに悩なやまざるる不幸ふこうを恨うらみ、翻ひるがへりて一点いっぴんの人情にんじやう無なき賤奴せんどの虐待げつたいを憤いる胸むねの内うちは、前後ぜんごも覚おぼえず暴あれ乱みだれてほとほと引裂ひきちぎけんとするなり。

「第一だい今日は未いまだ催促せいきに来きる約束やくそくぢやないのではないか」

「先月せんげつの二十日にじゅうにちにお払はひ下くださるべきのを、未いまだにお渡わたが無ないの

ですから、何日でも御催促は出来るのです」

遊佐は拳を握りて顫ひぬ。

「さう云ふ怪しからん事を！ 何の為に延期料を取つた」

「別に延期料と云つては受取りません。期限の日に参つたのにお払が無い、そこで空く帰るその日当及び俵代として下すつたから戴きました。ですから、若しあれに延期料と云ふ名を附けたらば、その日の取立を延期する料とも謂ふべきでせう」

「貴、貴様は！ 最初十円だけ渡さうと言つたら、十円では受取らん、利子の内金でなしに二三日間の延期料としてなら受取る、と言つて持つて行つたぢやないか。それからついこの間又十円……」

「それは確に受取りました。が、今申す通り、無駄足を踏みました日当でありますから、その日が経過すれば、翌日から催促に参つても宜い訳なのです。まあ、過去つた事は措きまして……」

「措けんよ。過去りは為んのだ」

「今日こんにちはその事で上つたのではないのですから、今日こんにちの始末をお付け下さいまし。ではどうあつても書替は出来んと仰有るのですな」

「出来ん！」

「で、金きんも下さらない？」

「無いから遣れん！」

貫一は目を側めて遊佐が面おもてを熟じと候うかがへり。その冷ひややかに鋭まなこき眼の光あやしは異あやしく彼を襲おそひて、坐そぞろに熱あやふする怒氣をを忘れしめぬ。遊佐は忽たちまち吾かへに復かへれるやうに覺あやふえて、身の危あやふきに処をるを省あやふみたり。一時あやふを快あやふくする暴言つひも竟ひかに曳ひかれ者の小唄こうたに過あやふぎざるを曉さとりて、手持てもち無沙汰ふさたに鳴なりを鎮なめつ。

「では、何いっごろ御都合ごごうごが出来るのですか」

機を制して彼も劣らず和ぎぬ。

「さあ、十六日まで待つてくれたまへ」

「しか眩と相違ございませんか」

「十六日なら相違ない」

「それでは十六日まで待ちますから……」

「延期料かい」

「まあ、お聞きなさいまし、約束手形を一枚お書き下さい。それならよろし宜うございませう」

「宜い事も無い……」

「不承を有仰るところは少しも有りはしません、その代り何分なんぶんか今日お遣おんし下さい」

かく言ひつつ手鞆てかばんを開きて、約束手形の用紙を取出とりだせり。

「銭は有りはせんよ」

「僅少わづかで宜よろいので、手数料として」

「又手数料か！ ぢや一円も出さう」

「日当、俵代なども入つてゐるのですから五円ばかり」

「五円なんと云ふ金かね円は有りはせん」

「それぢや、どうも」

彼は遽にはかに躊躇ちゆうちゆうして、手形用紙を惜めるやうに拈ひねるなりけり。

「ええ、では三円ばかり出さう」

折ふすまから紙門を開きけるを弗ふと貫一みむかの睨めふる目前めさきに、二人の紳

士しづしづは徐々いりきたと入来りぬ。案内も無くかかる内証の席に立入りて、

彼等おのおのの各心得顔おのおのなるは、必ず子細あるべしと思ひつつ、彼は少すこし

く座ゆるを動かぎて容かたちを改めたり。紳士は上下かみしもに分れて二人が間に坐

りければ、貫一は敬なひて礼を作せり。

蒲よもぎ「どうも曩なから見たやうだ、見たやうだと思つてゐたら、間

君ぢやないか」

風「余り様子が變つたから別人かと思つた。久く会ひませんな」  
 貫一は愕然がくぜんとして二人の面おもてを眺めたりしが、忽ち身たちまの熱する  
 を覚えて、その誰なるやを憶出おもひいだせるなり。

「これはお珍めづらしい。何方どなたかと思ひましたら、蒲田君に風早君。久  
 くお目に掛りませんでした。いつもお變無く」

蒲「その後はどうですか、何か当時は變つた商売をお始めです  
 な——儲まうかりませう」

貫一は打笑うちゑみて、

「儲りもしませんが、間違つてこんな事になつて了ひました」  
 彼の毫いささかも愧はづる色無きを見て、二人は心陰こころひそかに呆あきれぬ。悔あなどりし  
 風早もかくては与くみし易やすからず思へるなるべし。

蒲「儲けづくであるから何でも可いけれど、然しかし思切つた事を

始めましたね。君の性質で能くこの家業が出来ると思つて感服しましたよ」

「真人間に出来る業ぢやありませんな」

これ実に真人間にあらざる人の言なり。二人はこの破廉耻の老面皮を憎しと思へり。

蒲「酷いね、それぢや君は真人間でないやうだ」

「私のやうな者が懋ひ人間の道を守つてをたら、とてもこの世の中は渡れんと悟りましたから、学校を罷めるとともに人間も罷めて了つて、この商売を始めましたので」

風「然し真人間時分の朋友であつた僕等にかうして会つてゐる間だけは、依旧真人間で居てもらひたいね」

風早は親しげに放笑せり。

蒲「さうさう、それ、あの時分浮名の聒かつた、何とか云つた

けね、それ、君の所に居つた美人さ」

貫一は知らざる為まねしてゐたり。

風「おおおあれ？ さあ、何とか云つたつけ」

蒲「ねえ、間君、何とか云つた」

よしその旧友の前に人間の面おもてを赧あかめざる貫一も、ここに到りて多少の心を動かさざるを得ざりき。

「そんなつまらん事を」

蒲「この頃はあの美人と一所ですか、可うらやまし羨い」

「もう昔話は御免下さい。それでは遊佐さん、これに御印ごいんを願ひます」

彼は矢立やたての筆を抽ぬきて、手形用紙に金額を書入れんとするを、

風「あちよつ些と、その手形はどう云ふのですね」

貫一の簡単にその始末を述ぶるを聴きて、

「成程御尤、そこで少しお話を為したい」

蒲田は姑く助太刀の口を噤みて、皺嗶声の如何に弁ずるかを聴かんと、吃余の葉巻を火入に挿して、威長高に腕組して控へたり。

「遊佐君の借財の件ですがね、あれはどうか特別の扱をして戴きたいのだ。君の方も営業なのだから、御迷惑は掛けませんさ、然し旧友の頼と思つて、少し勘弁をしてもらひたい」

彼も答へず、これも少時は言はざりしが、

「どうかね、君」

「勘弁と申しますと？」

「究竟君の方に損の掛らん限は減けてもらひたいのだ。知つての通り、元金の借金は遊佐君が連帯であつて、實際頼れて印を貸しただけの話であるのが、測らず倒れて来たといふ訳なので、

それは貸主の目から見れば、そんな事はどうでも可いのだが、取立てるものは取立てる、其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>は能<sup>よ</sup>く解<sup>と</sup>つてゐる、からして今更その愚痴を言ふのぢやない。然し朋友の側から遊佐君を見ると、飛んだ災難に罹<sup>かか</sup>つたので、如何<sup>いか</sup>にも氣の毒な次第。ところで、<sup>はか</sup>ら<sup>は</sup>ずも貸主が君と云ふので、<sup>てつお</sup>轍<sup>お</sup>鮒<sup>ひ</sup>の水を得たる想<sup>おも</sup>で我々が中へ入つたのは、営業者の鰐淵として話を為るのではなくて、旧友の間<sup>はざま</sup>として、実は無理な頼も聴いてもらひたいのさ。夙<sup>かね</sup>て話は聞いてゐるが、あの三百円に対しては、借主の遠林<sup>とのおばやし</sup>が従来<sup>これまで</sup>三回に二百七十円の利を払つて在<sup>あ</sup>る。それから遊佐君の手で九十円、合計三百六十円と云ふものが既に入つてゐるのでせう。して見ると、君の方には既に損は無いのだ、であるから、この三百円の元金<sup>もとぎん</sup>だけを遊佐君の手で返せば可いといふ事にしても「らひたいのだ」

貫一は冷笑せり。

「さうすれば遊佐君は三百九十円払ふ訳だが、これが一文も費はずに空に出るのだから随分辛い話、君の方は未だ未だ利益になるのをここで見切るのだからこれも辛い。そこで辛さ競を為るのだが、君の方は三百円の物が六百六十円になつてゐるのだから、立前にはなつてゐる、此方は三百九十円の全損だから、こを一つ酌量してもらひたい、ねえ、特別の扱で」

「全でお話にならない」

秋の日は短しと謂はんやうに、貫一は手形用紙を取上げて、用捨無く約束の金額を書入れたり。一斉に彼の面を注視せし風早と蒲田との眼は、更に相合うて瞋れるを、再び彼方に差向けて、いとど厳く打目成れり。

風「どうかさう云ふ事にしてくれたまへ」

貫「それでは遊佐さん、これに御印を願ひませう。日限は十六日、宜うございますか」

この傍若無人の振舞に蒲田の怵へかねたる気色なるを、風早は目授して、

「間君、まあ少し待つてくれたまへよ。恥を言はんければ解らんけれど、この借金は遊佐君には荷が勝過ぎてゐるので、利を入れるだけでも方が付かんのだから、長くこれを背負つてゐた日には、体も一所に沈没して了ふばかり、実に一身の浮沈に關する大事なので、僕等も非常に心配してゐるやうなもの、力が足らんで如何とも手の着けやうが無い。対手が君であつたのが運の尽きざるところなのだ。旧友の僕等の難を拯ふと思つて、一つ頼を聴いてくれ給へ。全然損を掛けやうと云ふのぢやないのだから、決してさう無理な頼ぢやなからうと思ふのだが、ど

うかね、君」

「私わたくしは鰐淵の手代なのですから、さう云ふお話は解りかねます。

遊佐さん、では、今日こんにちはまあ三円頂戴してこれに御印をどうぞ  
お早く」

遊佐はその独ひとりに計ひかねて覚束おぼつかなげに頷うなづくのみ。言はで忍び  
たりし蒲田の怒いかりはこの時衝つくが如く、

「待ち給へと言ふに！ 先から風早が口を酸すくして頼んでゐる  
のぢやないか、錢貫ぜにもらひが門かどに立つたのぢやない、人に対するには  
礼と云ふものがある、可然しかるべき挨拶あいさつを為たまへ」

「お話がお話だから可然しかるべき御挨拶の為やうが無い」

「黙はれ、間ま！ 貴様の頭脳あたまは錢勘定ばかりしてゐるので、人の言

ふ事が解らんと見えるな。誰がその話しに可然しかるべき挨拶を為ろと言つ  
た。友人に対する挙動が無礼だから節たしなめと言つたのだ。高利貸

なら高利貸のやうに、身の程を省みて神妙にしてをれ。盗人の  
ぬすつと  
 兄弟分のやうな不正な営業をしてゐながら、かうして旧友に会  
あか  
 ったらば赧い顔の一つも為ることか、世界漫遊でもして来たや  
 うな見識で、貴様は高利を貸すのをあつぱれ名誉と心得てゐる  
 のか。恥を恥とも思はんのみか、一枚の証文を鼻に懸けて我々  
ぶべつ  
 を侮蔑したこの有様を、荒尾讓介に見せて遣りたい！ 貴様の  
あらおじようすけ  
 やうな畜生に生れ變つた奴を、荒尾はやはり昔の間貫一だと思  
 つて、この間も我々と話して、貴様の安否を苦にしてな、実の  
おとと  
 弟を殺したより、貴様を失つた方が悲いと言つて鬱ふさいでゐたぞ。  
いちじん  
 その一言に対しても少しは良心の眠ねむりを覚せ！ 真人間の風早庫  
 之助と蒲田鉄弥が中に入るからは決して迷惑を掛けるやうな事  
 は為んから、今日はおとなし順く帰れ、帰れ」  
 「受取るものを受取らなくては帰れもしません。貴あなたがた下方がそれ

まで遊佐さんの件に就いて御心配下さいますなら、かう為すつて下さいませんか、ともかくもこの約束手形は遊佐さんから戴きました、この方の形はそれで一先附くのですから、改めて三百円の証書をお書き下さいまし、風早君と蒲田君の連帯にして」

蒲田はこの手段を知るの経験あるなり。

「うん、宜い」  
よろし

「ではさう為つて下さるか」  
なす

「うん、宜い」

「さう致せば又お話の付けやうもあります」

「然し気の毒だな、無利息、十個年賦は」  
じつかねんぶ

「ええ？ 常談ぢやありません」

さすがに彼の一本参りしを、蒲田は誇りかに嘲笑しつ。  
せせらわらひ

風「常談は措いて、いづれ四五日以内に篤と話を付けるから、今

日のところは、久しぶりで会つた僕等の顔を立てて、何も言はずに帰つてくれ給へな」

「さう云ふ無理を有仰るで、私の方も然るべき御挨拶が出来なくなるのです。既に遊佐さんも御承諾なのですから、この手形はお貰ひ申して帰ります。未だ外へ廻るで急ぎますから、お話は後日寛り伺ひませう。遊佐さん、御印を願ひますよ。貴方御承諾なすつて置きながら今になつて遅々なすつては困ります」

蒲「疫病神が戸惑したやうに手形々と煩い奴だ。俺が始末をして遣らうよ」

彼は遊佐が前なる用紙を取りて、

蒲「金壹百拾七円……何だ、百拾七円とは」

遊「百十七円？ 九十円だよ」

蒲「金壹百拾七円とこの通り書いてある」

かかる事は能く知りながら彼はわざと怪しむなりき。

遊「そんな筈は無い」

貫一は彼等の騒ぐを尻目に掛けて、

「九十円が元金、これに加へた二十七円は天引の三割、これが

高利の定法です」

音もせざれど遊佐が胆は潰れぬ。

「お……ど……ろ……いたね！」

蒲田は物をも言はず件の手形を二つに引裂き、遊佐も風早も

これとは見る間に、猶も引裂き引裂き、引振りて間が目先に投遣

りたり。彼は騒げる色も無く、

「何を為るのです」

「始末をして遣つたのだ」

「遊佐さん、それでは手形もお出し下さるのですな」

彼は間が非常手段を取らんとするよ、と心陰こころひそかに懼おそれを作なして、

「いやさう云ふ訳ぢやない……」

蒲田は乞きつと膝ひざを前すすめて、

「いや、さう云ふ訳だ！」

彼の鬼臉こほもてなるをいと稚をさなしと輕かろしめたるやうに、間はわざと色やはらを和やげて、

「手形の始末はそれで付いたか知りませんが、貴方あなたも折角中へ入つて下さるなら、もう少し男らしい扱あつかをなさいました。私わたくし如き畜生とは違つて、貴方は立派な法学士」

「おお俺が法学士ならどうした」

「名実あひそが相副あひそはんと謂ふのです」

「生意気なもう一遍言つて見ろ」

「何遍でも言ひます。学士なら学士のやうな所業なを為なさい」

蒲田が腕かひなは電光の如く躍りて、猶言はんとせし貫一が胸先を  
もろつかみもろつかみに無むず図と捉りたり。

「間、貴様は……」

振向けたる彼の面を打目成りて、

「取つて投げてくれやうと思ふほど憎い奴でも、かうして顔を  
見合せると、白い二本筋の帽子を冠かぶつて煖炉ストオプの前に膝を並べた  
時分の姿が目めに附いて、嗚呼ああ、願おとなしい間を、と力ちから抜ぬけがして了ふ。貴  
様これが人情だぞ」

鷹たかに遭あへる小鳥の如く身動みうごぎし得えせ為で押付けられたる貫一を、  
風早はさすがに憫然あはれと見遣りて、

「蒲田の言ふ通りだ。僕等も中学に居た頃の間はざまと思つて、それ  
は誓つて迷惑を掛けるやうな事は為んから、君も友人の誼よしみを思  
つて、二人の頼を聴いてくれ給へ」

「さあ、間、どうだ」

「友人の誼は友人の誼、貸した金は貸した金で自おのづから別問題……」

彼は忽ち吭のどつま迫りて言ふを得ず、蒲田は稍やや強く緊しめたるなり。

「さあ、もつと言へ、言つて見る。言つたら貴様の呼い吸きが止るぞ」

貫一は苦しさに堪たへで振ふり積ほどかんと挽もがけども、嘉納流かのうりゆうの覚ある

蒲田が力に敵しかねて、なかなかその為まかすに信まかせたる幾分の安やすきを頼むのみなりけり。遊佐は驚き、風早も心ならず、

「おい蒲田、可いかい、死にはしないか」

「余あり、暴あらくするなよ」

蒲田は哄こうぜん然ぜんとして大たい笑しせり。

「かうなると金力よりは腕力だな。ねえ、どうしてもこれは水滸すいこでん伝にある凶だらう。惟おもふに、凡おそ国利こくよを護まもり、国権を保つ

には、國際公法などは実は糸瓜へちまの皮、要は兵力よ。万国の上には立法の君主が無ければ、国と国との曲直あらしひの争そもそは抑たれも誰の手で公明正大に遺憾いかな無く決せらるるのだ。ここに唯一つ審判の機関がある、曰いはく戦たたかひ！」

風「もう釈ゆるしてやれ、大分苦だいぶしさうだ」

蒲「強国にして辱はづかしめられた例ためしを聞かん、故ゆゑに僕は外交の術も嘉納流よ」

遊「余ひとり酷ひどい目に遭せると、僕の方へ報むくつて来るから、もう舎よしてくれたまへな」

他ひとの言ことばに手は弛ゆるめたれど、蒲田は未いまだ放ちも遣らず、

「さあ、間、返事はどうだ」

「吭のどを緊められても出す音ねは変りませんよ。間は金力には屈つらしても、腕力などに屈するものか。憎いと思ふならこの面つらを五百

円の紙幣東でお撲きなさい」

「金貨ぢや可かんか」

「金貨、結構です」

「ぢや金貨だぞ！」

油断せる貫一が左の高頬を平手打に絶か吃すれば、呀と両手に痛を抑へて、少時は顔も得拳げざりき。蒲田はやうやう座に復りて、

「急には此奴帰らんね。いつそここで酒を始めやうぢやないか、さうして飲みかつ談ずると為う」

「さあ、それも可からう」

「独り可からぬは遊佐なり。」

「ここで飲んぢや旨くないね。さうして形が付かなければ、何時までだつて帰りはせんよ。酒が仕舞になつてこればかり遺られ



にして、好きな栄耀えいようがして見たいと云ふ、唯それだけの目的より外に無いのだと謂ふが、さうなのかね。我々から考へると、人情の忍ぶ可からざるを忍んで、経営慘憺さんたんと努めるところは、何ぞ非常の目的があつて貨を殖かねこしらへるやうだがな、譬たとへば、軍用金を聚あつめるとか、お家の宝を質請しちうけするとか。単に己おのれの慾を充さうばかりで、あんな思切つて殘刻な仕事が出来るものではないと想ふのだ。許多おほくのガリガリ亡者もうじやは論外として、間貫一おひに於ては何ぞ目的が有るのだらう。こんな非常手段を遣るくらゐだから、必ず非常の目的が有つて存ぞんするのだらう」

秋の日は忽たちまち黄昏たそがれて、稍やや早けれど燈ともしを入るとともに、用意の酒肴さけ肴かなは順を逐おひて運び出いだされぬ。

「おつと、麦酒ビールかい、頂戴ちやうだい。鍋なべは風早の方へ、煮方は宜よろしくお頼み申しますよ。うう、好い松茸まつだけだ。京でなくてはかうは行かん

よ——中が真白で、庖丁が軋むやうでなくては。今年は不作だね、瘠せてゐて、虫が多い、あの雨が障つたのさ。間、どうだい、君の目的は」

「唯貨が欲しいのです」

「で、その貨をどうする」

「つまらん事を！ 貨はどうでもなるぢやありませんか。どうでもなる貨だから欲しい、その欲しい貨だから、かうして催促もするのです。さあ、遊佐さん、本当にどうして下さるのです」

風「まあ、これを一盃飲んで、今日は機嫌好く帰つてくれ給へ」  
蒲「そら、お取次だ」

「私わたくしは酒は不可いかんのです」

蒲「折角差したものだ」

「全く不可のですから」

差付けらるるを推除おしのくる機はずみに、コップは脆もろくも蒲田の手を脱すべれば、葺盆たばこぼんの火入ひいれに抵あたりて発矢はつしと割れたり。

「何を為る！」

貫一も今は怵こらへかねて、

「どうしたと！」

やをら起おこたと為るところを、蒲田が力ちからに胸板むないたを衝つかれて、一耐ひとたまり

もせず仰様のけさまに打僵うちこけたり。蒲田はこの隙ひまに彼の手鞆てかばんを奪うばひて、

中なる書類てまかせを手信つかみだに拵つかみだ出せば、狂気の如かけよく駈かけよ寄る貫一、

「身分さばに障さばるぞ！」と組み付くを、利腕ききうでと捉とつて、

「黙ねぢふれ！」と振伏ねぢふせ、

「さあ、遊佐、その中に君の証書が在るに違ちが無いから、早く其奴そいつ

を取つて了しまひ給へ」

これを聞きたる遊佐は色を変へぬ。風早も事の余あまりに暴あやなるを

快しと為こころよざるなりき。貫一は駭おどろきて、撥返はねかへさんと右に左に身を揉むを、蹈跨ふんまたがりて振揚ねぢあげ振揚ねぢあげ、蒲田は声を励して、  
 「この期ごに及んで！ 躊躇ちゆうちゆうするところでないよ。早く、早く、早く！ 風早、何を考へとる。さあ、遊佐、ええ、何事も僕が引受けたから、かまはず遣り給へ。証書を取つて了へば、後は細工はりうりう僕が心得てゐるから、早く探したまへと言ふに」  
 手を出しかねたる二人を睨ねめまは廻して、蒲田はなかなか下に貫一の悶もだゆるにも劣らず、独ひとり業ごうを沸にやして、効無かひなき地韃ぢただらを踏みてぞゐたる。

風「それは余り遣過ぎる、善よくない、善よくない」

「善いいも悪いもあるものか、僕が引受けたからかまはんよ。遊佐、君の事ぢやないか、何を憎然ほんやりしてゐるのだ」

彼はほとほと慄そのきて、寧むしろ蒲田が腕立うでだての紳士にあるまじきを

諫めんとも思へるなり。腰弱き彼等の与するに足らざるを憤れる蒲田は、宝の山に入りながら手を空うする無念さに、貫一が手も折れよとばかり振上れば、

「ああ、待つた待つた。蒲田君、待つてくれ、何とか話を付けるから」

「ええ聒い。君等のやうな意気地無しはもう頼まん。僕が独で遣つて見せるから、後学の為<sup>おのれ</sup>に能く見て置き給へ」

かく言捨てて蒲田は片手して己の帯を解かんとすれば、時計の紐の生憎に絡るを、躁りに躁りて引放さんとす。

風「独でどうするのだよ」

彼はさすがに見かねて手を仮さんと寄り進みつ。

蒲「どうするものか、此奴を蹈縛つて置いて、僕が証書を探すわ」

「まあ、余り穩おだやかでないから、それだけは思ひ止とまり給へ。今間も話を付けると言つたから」

「何か此奴こいつの言ふ事が！」

間は苦くるしき声を擽しぼりて、

「きつと話を付けるから、この手を釈ゆるしてくれ給へ」

風「きつと話を付けるな——此方こつちの要求を容いれるか」

間「容れる」

詐いつはりとは知れど、二人の同意せざるを見て、蒲田もさまではと

力ちからくじ挫くじけて、竟つひに貫一を放ちてけり。

身を起すとともに貫一は落散りたる書類を搔聚かきあつめ、鞆かばんを拾ひ

てその中に振ねぢこ込み、さて慌忙あわたしく座かへに復りて、

「それでは今日こんにちはこれでお暇いとまをします」

蒲田が思切りたる無法にこの長居あやふは危しと見たれば、心に恨

は含みながら、陽おもてには克かなはじと閉口して、重ねて難題の出いでざる先にとかくは引取らんと為るを、

「待て待て」と蒲田は下司げすあつかひ扱あつかひに呼掛けて、

「話を付けると言つたでないか。さあ、約束通り要求を容いれん内うちは、今度は此方こつちが還かへさんぞ」

膝ひざ推向おしむけて迫寄つめよる気色けしきは、飽あくまで喧嘩けんかを買かはんとするなり。

「きつと要求は容れますけれど、嚮むきから散々の目めに遭あはされて、何だか酷く心持が悪くてなりませんから、今日はこれで還かへして下さいまし。これは長座ちやうざをいたしてお邪魔でございました。それでは遊佐さん、いづれ二三日の内に又上つてお話を願ひます」

忽たちまち打うちつて変りし貫一くわんいちの様子ようすに蒲田は冷笑れいせうして、

「間、貴様は犬の糞くそで仇かたきを取らうと思つてゐるな。遣いつて見ろ、そんな場合には自今これからいつ毎ごとでも蒲田が現れて取控とりひしいで遣いるから」

「間も男なら犬の糞ぢや仇は取らない」

「利いた風なことを言ふな」

風「これさ、もう好加減にしないかい。間も帰り給へ。近日是非篤と話をしたいから、何事もその節だ。さあ、僕が其処まで送らう」

遊佐と風早とは起ちて彼を送出せり。主の妻は縁側より入り来りぬ。

「まあ、貴方、お蔭様で難有う存じました。もうもうどんなに好い心持でございましたらう」

「や、これは。些と壮士芝居といふところを」

「大相宜い幕でございましたこと。お酌を致しませう」

件の騒動にて四辺の狼藉たるを、彼は効々しく取形付けてゐたりしが、二人はやがて入来るを見て、

「風早さん、どうもお蔭様で助りました、然し飛んだ御迷惑様で。さあ、何も御坐いませんけれど、どうぞ貴下方御寛り召上つて下さいまし」

妻の喜は溢るるばかりなるに引易へて、遊佐は青息响きて思案に昏れたり。

「弱つた！ 君がああして取緊めてくれたのは可いが、この返報に那奴どんな事を為るか知れん。明日あたり突然と差押などを吃せられたら耐らん」

「余り蒲田が手酷い事を為るから、僕も、さあ、それを案じて、惴々してゐたぢやないか。嘉納流も可いけれど、後前を考へて遣つてくれなくては他迷惑だらうぢやないか」

「まあ、待ち給へと言ふことさ」

蒲田は袂の中を撈りて、揉皺みたる二通の書類を取出しつ。

風「それは何だ」

遊「どうしたのさ」

何ならんと主の妻も鼻の下を延べて窺へり。

風「何だか僕も始めてお目に掛るのだ」

彼は先づその一通を取りて披見るに、鰐淵直行に対する債務

者は聞きも知らざる百円の公正証書謄本なり。

二人は蒲田が案外の物持てるに驚かれて、各息を凝して瞪れ

る眼を動かさず。蒲田も無言の間に他の一通を取りて披けば、妻

はいよいよ近きて差覗きつ。四箇の頭顱はラムプの周辺に麩に

寄る池の鯉の如く犇と聚れり。

「これは三百円の証書だな」

一枚二枚と繰り行けば、債務者の中に鼻の前なる遊佐良橘の

名をも署したり、蒲田は弾機仕掛のやうに躍り上りて、

「占めた！ これだこれだ」

驚喜の余り身を支へ得ざる遊佐の片手は鶴の鉢の中にすつぱと落入り、乗出す膝頭に銚子を薙倒して、

「僕のかい、僕のかい」

「どう、どう、どう」と証書を取らんとする風早が手は、筋の活動を失へるやうにて幾度も捉へ得ざるなりき。

「まあ！」と叫びし妻は忽ち胸塞りて、その後を言ふ能はざるなり。蒲田は手の舞ひ、膝の蹈むところを知らず、

「占めたぞ！ 占めたぞ!! 難有い!!!」

証書は風早の手に移りて、遊佐とその妻と彼と六の目を以て子細にこれを点検して、その夢ならざるを明めたり。

「君はどうしたのだ」

風早の面はかつ呆れ、かつ喜び、かつ懼るるに似たり。やが

て証書は遊佐夫婦の手に渡りて、打拵げたる二人が膝の上に、これぞ比翼読なるべき。更に麦酒ビールの満まんを引きし蒲田は「血は大刀したたに滴りて拭ぬぐふに違いとまあらざる」意気を昂あげて、「何と凄すじからう。奴ねぢふを振伏ねぢふせてゐる中に脚あしで搔寄かきよせて袂たもとへ忍しのばせたのだ——早業はやわざさね」

「やはり嘉納流にあるのかい」

「常談言つちや可かん。然しこれも嘉納流の教外きやうげべつでん別伝べつでんさ」

「遊佐の証書といふのはどうして知つたのだ」

「それは知らん。何でも可いから一つ二つ奪つて置けば、奴を退治たいじる材料になると考へたから、早業をして置いたのだが、思おもひきやこれが覘ねらふ敵かたきの証書ならんとは、全く天の善くみに与よするところだ」

風「余り善でもない。さうしてあれを此方こつちへ取つて了しまへば、三

百円は踏めるのかね」

蒲「大踏め！ 少し悪党になれば踏める」

風「然し、公正証書であつて見ると……」

蒲「あつても差支無い。それは公証人役場には証書の原本が備

付けてあるから、いざと云ふ日にはそれが物を言ふけれど、この

正本せいほんさへ引揚げてあれば、間貫まぬき一いつくら地動波動じたばたしたつて『河童

の皿わに水の乾かわいた』同然、かうなれば無証拠だから、矢でも鉄砲

でも持つて来いだ。然し、全然まるまる踏むのもさすがに不便ふびんとの思召おぼしめし

を以つて、そこは何とか又色を着けて遣らうさ。まあまあ君達

は安心してゐたまへ。蒲田弁理公使よろしが宜よろしく樽俎そんその間に折衝かして、

遊佐家を泰山たいざんの安やすきに置いて見せる。嗚呼ああ、実に近来の一大快

事だ！」

人々の呆あきるるには目も掛かけず、蒲田は証書を推戴おしいただき推戴おしいただきて、

「さあ、遊佐君の為に万歳を唱へやう。奥さん、貴方が音頭をお取んなさいましよ——いいえ、本当に」

小心なる遊佐はこの非常手段を極悪大罪と心安からず覚ゆるなれど、蒲田が一切を引受けて見事に埒開けんといふに励され、さては一生の怨敵退散の賀と、各漫に前む膝を聚めて、長夜の宴を催さんとぞ犇いたる。

## 第七章

茫茫たる世間に放れて、蚤く骨肉の親むべき無く、況や愛情の温むるに会はざりし貫一が身は、一鳥も過ぎざる枯野の広きに塊然として横はる石の如きものなるべし。彼が鳴沢の家に在りける日宮を恋ひて、その優き声と、柔き手と、温き心とを得

たりし彼の満足は、何等たのしみの樂をも以外あきたに求むる事を忘れしめき。彼はこの恋人をもて妻とし、生命として慊あきらず、母の一部分となし、妹いもの一部分となし、或は父の、兄の一部分とも為なして宮の一身は彼に於ける愉快なる家族の団まと欒どひに値せしなり、故ゆゑに彼の恋は青年を樂いちじようむ一場の風流うるはしの麗き夢に似たる類たぐひならで、質はその文ぶんに勝てるものなりけり。彼の宮おに於けるは都すべての人の妻となすべき以上を妻として、寧むしろその望むところ多きに過ぎずやと思はしむるまでに心に懸けて、自みづからはその至当なるを固く信ずるなりき。彼はこの世に一人の宮を得たるが為に、万木一時いちじに花を着くる心地して、曩さきの枯野に夕暮れし石も今は將はた水ぬくに温み、霞かすみに酔よひて、長閑のどかなる日影ひかげに眠る如く覚えけんよ。その恋のいよいよ急に、いよいよ濃こまやかになり勝まされる時、人の最も憎める競争者の為に、しかも輒たやすく宮を奪はれし貫一が心は如何いかなりけ

ん。身をも心をも打委うちまかせて詐いつはることを知らざりし恋人の、忽ち敵の如く己おのれに反そむきて、空むなしく他人に嫁するを見たる貫一が心は更に如何いかなりけん。彼はここに於いて曩さきに半箇の骨肉の親むべきなく、一点の愛情の温むるに会はざりし凄寥せいらゆうを感ずるのみにて止とどまらず、失望を添へ、恨を累かさねて、かの塊然たる野末のずゑの石は、霜置く上に凧こがらしの吹誘ひて、皮肉を穿うがち来きたる人生の酸味の到頭骨に徹する一種の痛苦を悩みて已やまざるなりき。実に彼の宮を奪れしは、その嘗かつて与へられし物を取去られし上に、与へられざりし物をも併あはせて取去られしなり。

彼は或あるひはその恨を抛なげつべし、なんぞその失望をも忘れざらん。されども彼は永くその痛苦を去らしむる能はざるべし、一旦ひとたびたくその心を傷きずつけられたるかの痛苦は、永くその心の存在ともと俱ともに存在すべければなり。その業務として行はざるべからざる残忍

刻薄を自ら強ふる痛苦は、能く彼の痛苦と相剋して、その間聊か思を遣るべき余地を窃み得るに慣れて、彼は漸く忍ぶべからざるを忍びて為し、恥づべきをも恥ぢずして行ひけるほどに、勁敵に遇ひ、悪徒に罹りて、或は弄ばれ、或は欺かれ、或は脅され、勢毒を以つて制し、暴を以つて易ふるの已むを得ざるより、一はその道の習に薰染して、彼は益す懼れず貪るに至れるなり。同時に例の不断の痛苦は彼を撻つやうに募ることありて、心も消々に悩まざる毎に、齷齪利を趁ふ力も失せて、彼はなかなか死の安きを懷はざるにあらず。唯その一旦にして易く、又今との空き死を遂げ了らんをば、いと効為しと思返して、よし遠くとも心に期するところは、なでう一度前の失望と恨とを霽し得て、胸裡の涼きこと、氷を砕いて明鏡を磨ぐが如く為ざらん、その夕ぞ我は正に死ぬべきと私に慰むるなりき。

貫一は一はかの痛苦を忘るる手段として、一はその妄執を散  
 ずべき快心の事を買はんの目的をもて、かくは高利を貪れるな  
 り。知らず彼がその夕にして瞑せんとする快心の事とは何ぞ。  
 彼は尋常復讐の小術を成して、宮に富山に鳴沢に人身的攻撃を  
 加へて快を取らんとにはあらず、今少く事の大きく男らしくあ  
 らんをば企図せるなり。然れども、痛苦の劇く、懐旧の恨に堪  
 へざる折々、彼は熱き涙を握りて祈るが如く嘆ちぬ。

「唉、こんな思を為るくらゐなら、いつそ潔く死んだ方が隻に  
 勝だ。死んでさへ了へば万慮空くこの苦艱は無いだ。それを  
 命が惜くもないのに死にもせず……死ぬのは易いが、死ぬこと  
 の出来んのは、どう考へても余り無念で、この無念をこのまま  
 に胸に納めて死ぬことは出来んだ。貨が有つたら何が面白い  
 のだ。人に言はせたら、今俺の貯へた貨は、高が一人の女の宮

に換へる価はあると謂ふだらう。俺には無い！ 第一貨などを  
 持つてゐるやうな氣持さへ為んどぢやないか。失望した身にはそ  
 の望を取復すほどの宝は無いのだ。唉、その宝は到底取復され  
 ん。宮が今罪を詫びて夫婦になりたいと泣き付いて来たとして  
 も、一旦心を変じて、身まで流された宮は、決して旧の宮では  
 なければ、もう間の宝ではない。間の宝は五年前の宮だ。その  
 宮は宮の自身さへ取復す事は出来んのだ。返す返す恋いのは宮  
 だ。かうしてゐる間も宮の事は忘れかねる、けれど、それは富  
 山の妻になつてゐる今の宮ではない、噫、鳴沢の宮！ 五年前  
 の宮が恋い。俺が百万円を積んだところで、昔の宮は獲られん  
 のだ！ 思へば貨もつまらん。少いながらも今の貨が熱海へ追  
 つて行つた時の鞆の中に在つたなら……ええ!!」

頭も打割るるやうに覚えて、この以上を想ふ能はざる貫一は、

ここに到りて自失し了るを常とす。かかる折よ、熱海の浜に泣  
 倒れし鳴沢の娘と、田鶴見たずみの底に逍遙しょうようせし富山が妻との姿は、  
 双々貫一そうそうが身边を彷徨ほうこうして去らざるなり。彼はこの痛苦の堪ふ  
 べからざるに任せて、ほとほと前後を顧ずして他の一方に事を  
 為すより、往々その性の為す能はざるをも為して、仮かさざるこ  
 と仇敵きゆうてうてきの如く、債務せまを逼りて酷きはを極きはむるなり。退しりぞいてはこれを  
 悔くゆるも、又折に触れて激すれば、忽たちまち勢に駆られて断行する  
 を憚はばからざるなり。かくして彼の心に拘かかつらふ事あれば、自おのづから念頭を  
 去らざる痛苦をもその間に忘るるを得べく、素もとより彼は正せいを知  
 らずして邪を為し、是ぜを喜ばずして非ひを為すものにあらざれば、  
 己おのれを枉まげてこれを行ふ心苦しきは俯ふして愧はぢ、仰おそぎて懼おそれ、天  
 地の間に身を置くところは、纔わづかにその容いるる空間くわんだに猶なほ濶ひろきを  
 覚ゆるなれど、かの痛苦に較べては、復はるかに忍ぶの易く、体たいのま

た<sup>ゆたか</sup>胖なるをさへ感ずるなりけり。

一向<sup>ひたぶる</sup>に神<sup>しん</sup>を勞し、思<sup>し</sup>を費<sup>ひ</sup>して、日夜<sup>にちや</sup>これを暢<sup>のぶ</sup>るに違<sup>いとま</sup>あらぬ貫

一は、肉<sup>にく</sup>瘦<sup>や</sup>せ、骨<sup>こつ</sup>立<sup>ち</sup>ち、色<sup>いろ</sup>疲<sup>れ</sup>れて、宛<sup>さながら</sup>然<sup>ら</sup>死<sup>し</sup>水<sup>すい</sup>などのやうに沈<sup>しん</sup>鬱<sup>ふ</sup>し

了<sup>は</sup>んぬ。その攢<sup>あつ</sup>めたる眉<sup>まゆ</sup>と空<sup>むなし</sup>く凝<sup>こら</sup>せる目<sup>め</sup>とは、体<sup>てい</sup>力<sup>りき</sup>の漸<sup>やうや</sup>く衰<sup>ふ</sup>

るに反<sup>さか</sup>して、精<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>の愈<sup>いよ</sup>よ興<sup>きよう</sup>奮<sup>ふん</sup>するとともに、思<sup>し</sup>の益<sup>ます</sup>す繁<sup>しげ</sup>く、益

す乱<sup>らん</sup>るるを、従<sup>したが</sup>ひて芟<sup>か</sup>り、従<sup>したが</sup>ひて解<sup>か</sup>かんとすれば、なほも繁<sup>しげ</sup>り、

なほも乱<sup>らん</sup>るるを、竟<sup>つひ</sup>に如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>に為<sup>せ</sup>ばや、と心<sup>こころ</sup>も碎<sup>くだ</sup>けつつ打<sup>う</sup>悩<sup>なや</sup>める

を示<sup>し</sup>せり。更<sup>さら</sup>に見<sup>み</sup>よ、漆<sup>しつ</sup>のやうに鮮<sup>つや</sup>潤<sup>やか</sup>なりし髪<sup>かみ</sup>は、後<sup>あ</sup>脳<sup>のう</sup>の辺<sup>あたり</sup>に

若<sup>そく</sup>干<sup>ぼく</sup>の白<sup>しろ</sup>きを交<sup>まじ</sup>へて、額<sup>かぶ</sup>に催<sup>もよほ</sup>せし皺<sup>しわ</sup>の一<sup>ひと</sup>筋<sup>すぢ</sup>長<sup>なが</sup>く横<sup>よこ</sup>はれるぞ、そ

の心<sup>こころ</sup>の窄<sup>せま</sup>れる褻<sup>ひだ</sup>ならざるべき、況<sup>いは</sup>んや彼<sup>か</sup>の面<sup>おもて</sup>を蔽<sup>おほ</sup>へる蔭<sup>かげ</sup>は益<sup>ます</sup>す

暗<sup>くら</sup>きにあらずや。

吁<sup>ああ</sup>、彼<sup>か</sup>はその初<sup>はつ</sup>一<sup>いつ</sup>念<sup>ねん</sup>を遂<sup>と</sup>げて、外<sup>げ</sup>面<sup>めん</sup>に、内<sup>ない</sup>心<sup>しん</sup>に、今<sup>いま</sup>は全<sup>ぜん</sup>くこ

の世<sup>よ</sup>からなる魔<sup>ま</sup>道<sup>だう</sup>に墜<sup>お</sup>つるを得<sup>え</sup>たりけるなり。貪<sup>どん</sup>欲<sup>よく</sup>界<sup>かい</sup>の雲<sup>うん</sup>は凝<sup>こ</sup>

りて歩ほ々に厚ほく護まもり、離恨天りこんてんの雨は随所直ただちに灑そそぐ、一飛いつび一躍出  
 でては人の肉くを啖くらひ、半生半死い入りては我はらと腸わたを劈つんぎく。居をる所  
 は陰風常めぐに廻めぐりて白日を見ず、行けども行けども無明むみょうの長夜今  
 に到まるまで一千四百六十日、逢あへども可懐なつかしき友おもての面おもてを知らず、  
まじは交れども曾かつて情なさけの蜜みつより甘あまきを知らず、花咲けども春日はるびの麗うらな  
 るを知らず、樂たのしみ来きたれども打背うちそむきて歡よろこぶを知らず、道みちあれども履ふ  
 むを知らず、善よあれども与くみするを知らず、福さいはひあれども招まくを知  
 らず、恵あまあれども享うくるを知らず、空むなしく利欲ふけに耽ふけりて志うしなを喪なひ、  
ひとへ偏もてあそに迷執もてあそに弄もてあそばれて思つかを勞つからす、吁ああ、彼あは終つひに何なにをか成なさんと  
 すらん。間貫一やうやの名は漸やうやく同業者間どうぎやうかに聞きえて、恐おそるべき彼の未  
 来しよくもくを属目しよくもくせざるはあらずなりぬ。

かの堪たふべからざる痛苦しきりと、この死しをも快おのづくせんとする目的こころ  
 とあるが為ために、貫一くわんいつの漸しきりく頻しきりなる嚴談酷促げんだんこくそくは自おのづから此処こころに彼処かしこ

に債務者の怨うらみを買ひて、彼の為に泣き、彼の為に憤うらるもの寡すくなか  
 らず、同業者といへども時としては彼の余あまりに用捨無きを咎とがむる  
 さへありけり。独ひとり鰐淵いだはこれを喜びて、強將いの下弱卒いを出さ  
 ざるを誇れるなり。彼は己おのれの今日こんにちあるを致せし辛抱と苦勞とは、  
いま かくのごと未だ如此かくのごとくにして足るものならずとて、屢しばしばばその例を挙げては  
 貫一そそのかを嗾つかし、飽くまで彼の意を強うせんと勉つとめき。これが為に  
 慰めらるるにはあらねど、その行へる残忍酷薄の人の道に欠  
 けたるを知らざるにあらぬ貫一は、職業の性質既に不法なれば  
 これを営むの非道なるは必然ことわりの理にて、己おのれの為なすところは都すべて  
 の同業者の為すところにて、己おのれいちにん一人の殘刻なるにあらず、高利  
 貸なる者は、世間一様かくのごとに如此かくのごとく殘刻ならざるべからずと念おもへる  
 なり。故ゆゑに彼は決して己の所業のみ独ひとり怨うらみを買ふべきにあらず  
 と信じたり。

実に彼の頼める鰐淵直行の如きは、彼の辛うじてその半を想  
ひ得る殘刻と、終に学ぶ能はざる譎詐とを左右にして、始めて  
今日の富を得てしなり。この点に於ては彼は一も二も無く貫一  
の師表たるべしといへども、その実さばかりの殘刻と譎詐とを  
擅ほしいままにして、なほ天に畏れず、人に憚はばからざる不敵の傲骨あるにあ  
らず。彼は密ひそかに警いましめて多く夜出いでず、内には神を敬して、得知  
れぬ教会の大信者となりて、奉納寄進に財を吝をしまず、唯これ身  
の無事を祈るに汲きゆう々として、自ら安はかりごとずる計をなせり。彼は年来  
非道を行ひて、なほこの家栄え、身の全きを得るは、正まことにこの  
信心の致すところと仕へ奉る御神おんかみの冥護みようごを辱かたじけなみて措おかざるな  
りき。貫一は彼の如く殘刻と譎詐きつざとに勇はならざりけれど、又彼  
の如く敬神と閉居きよとに怯きよならず、身は人と生れて人がましく行  
ひ、一も曾かつて犯かせる事のあらざりしに、天は却かへりて己を罰し人

は却りて己を詐り、終生の失望と遺恨とは濫に断腸の斧を揮ひて、死苦の若かざる絶痛を与ふるを思ひては、彼はよし天に人に憤るところあるも、懼るべき無しと為るならん。貫一の最も懼れ、最も憚るところは自の心のみなりけり。

第八章

用談果つるを俟ちて貫一の魚膠無く暇乞するを、満枝は暫しと留置きて、用有りげに奥の間にぞ入りたる。その言の如く暫し待てども出で来ざれば、又巻苘を取出しけるに、手炉の炭は狼の糞のやうになりて、いつか火の気の絶えたるに、檀座に糸の敷物したる石笠のラムプの燄を仮りて、貫一は為う事無しに煙を吹きつつ、この赤檜の客間を夜目ながら眺しつ。

袋棚ふくろだななる置時計は十時十分前を指せり。違棚には箱入の人形を大小二つ並べて、その下は七宝焼擬の一輪挿しつぼうやきまがひ いちりんざし、蠟石ろうせきの飾玉をみづいろちりめんみつがさねの三重の褥しとねに載せて、床柱なる水牛の角の懸花入かけはないれは松水色縮緬はやぶさの三重の褥まきゑきんきんに載せて、花を見ず。鑄物の香炉いものの悪古びに隼くすの勸工場まきゑきんきん蒔絵金々として、花を見ず。鑄物の香炉いものの悪古びに玄ませたると、羽二重細工の花筐はぶたへ はなかたみとを床に飾りて、雨中の富士をば引攪旋ひきかきまはしたるやうに落墨して、金泥精描のぼりりゆう めぬきの騰竜は目貫を打つたるかとばかり雲間くもまに耀ける横物かがやの一幅よこもの。頭かしらを回めぐらせば、楣間びかんに黄海大海戦こうかいの一間程なる水彩画を掲げて座敷すみの隅ふたばちには二鉢の菊を据ゑたり。

やや有りて出来いできたれる満枝は服を改めたるなり。糸織えりかの衿懸えりかけたる小袖こそでに納戸なんど小紋の縮緬の羽織着て、七糸しちちんと黒縹くろじゆす子との昼夜帯なでつして、華美はでなるシオウルを携へ、髪など撫付けしと覚おぼしく、面おもても見違ふやうに軽く粧よそほひて、

「大変失礼を致しました。些ちよつと私も其処わたくしまで買物に出ますので、  
実は御一緒に願はうと存じまして」

無礼なりとは思ひけれど、口説れし誼よしみに貫一は今更腹も立て  
難くて、

「ああさうですか」

満枝はつと寄りて声を低くし、

「御迷惑でみらつしやいませうけれど」

聴き飽きたりと謂いはんやうに彼は取合はで、

「それぢや参りませう。貴方あなたは何方どちらまでお出いでなのですか」

「わたくし、おおよこちよう  
私は大横町まで」

二人は打連れて四谷左門町なる赤檜の家を出いでぬ。伝馬町通てんまちようどおり

は両側の店に燈ともしを列つらねて、未まだ宵なる景気なれど、秋としも覚

えず夜寒はなはだしの甚はなはだしければ、往ゆき来きも稀まれに、空は星あれどいと暗し。

「何といふお寒いのでございませう」

「さやう」

「貴方、間さん、貴方そんなに離れてお歩き遊ばさなくても宜いぢやございませんか。それではお話が達きませんわ」

彼は町の左側をこたびは貫一に擦寄りて歩めり。

「これぢや私が歩き難いです」

「貴方お寒うございませう。私お鞆を持ちませう」

「いいや、どういたして」

「貴方恐入りますが、もう少し御緩りお歩きなすつて下さいましな、私呼吸が切れて……」

「已む無く彼は加減して歩めり。満枝は着重るシオウルを揺上げ、

「疾から是非お話致したいと思ふ事があるのでございますけれ

ど、その後些<sup>ちよつ</sup>ともお目に掛らないものですから。間さん、貴方、本当に偶<sup>たま</sup>にはお遊びにいらしつて下さいました。私もう決して先達<sup>せんだつて</sup>而のやうな事は再び申上げませんから。些<sup>ち</sup>といらしつて下さいました

「は、難有<sup>ありがた</sup>う」

「お手紙を上げましても宜うございますか」

「何の手紙ですか」

「御機嫌伺<sup>ごきげんうかがひ</sup>の」

「貴方から機嫌を伺はれる訳が無いぢやありませんか」

「では、恋<sup>こひし</sup>い時に」

「貴方が何も私を……」

「恋いのは私の勝手にでございますよ」

「然し、手紙は人にでも見られると面倒ですから、お辞<sup>ことわり</sup>をしま

す」

「でも近日に私お話を致したい事があるのでございますから、鰐淵わにぶちさんの事に就きましてね、私はこれ程困つた事はございませんの。で、是非貴方に御相談を願はうと存じまして、……」

唯見とれば伝馬町三丁目と二丁目との角なり。貫一はここにて満枝を撒まかんと思ひ設けたるなれば、彼の語り続けるをも会釈せせずして立住たちどまりつ。

「それぢや私はここで失礼します」

その不意に出いでて貫一の闇くらき横町に入るを、

「あれ、貴方あなた、其方そちらからいらつしやるのですか。この通をいらつしやいましたね、わざわざ、そんな寂さびしい道をお出いでなさらなくても、此方こつちの方が順ではございませんか」

満枝は離れ難なく二三間追ひ行きたり。

「なあに、此方が余程近いのですから」

「幾多も違ひは致しませんのに、賑かな方をいらつしやいませよ。私その代り四谷見附の所までお送り申しますから」

「貴方に送つて戴いたつて為やうが無い。夜が更けますから、貴方も早く買物を為すつてお帰りなさいまし」

「そんなお為転を有仰らなくても宜うございます」

かく言争ひつつ、行くにもあらねど留るにもあらぬ貫一に引添ひて、不知不識其方に歩ませられし満枝は、やにはに立竦みて声を揚げつ。

「ああ！ 間さん些と」

「どうしました」

「路悪へ入つて了つて、履物が取れないのでございますよ」

「それだから貴方はこんな方へお出でなさらんが可いのに」

彼は渋々寄り来れり。

「はばかりさま  
憚様ですが、この手を引張つて下さいました。ああ、早く、私  
転びますよ」

シオウルの外に援を求むる彼の手を取りて引寄せれば、女は  
よろめ  
躓きつつ泥濘を出でたりしが、力や余りけん、身を支へかねて  
どう  
撞と貫一に靠れたり。

「ああ、危い」

「転びましたら貴方の所為でございますよ」

「馬鹿なことを」

彼はこの時扶けし手を放たんとせしに、釘付などにしたらん  
やうに曳けども振れども得離れざるを、怪しと女の面を窺へる  
なり。満枝は打背けたる顔の半をシオウルの端に包みて、握れ  
る手をば弥よ固く緊めたり。

「さあ、もう放して下さい」

益ますす緊めて袖そでの中へさへ曳入れんとすれば、

「貴方、馬鹿な事をしては可けません」

女は一語ひとことも言はず、面も背けたるままに、その手は益ます放たで

男の行く方かたに歩めり。

「常談しちや可かんですよ。さあ、後うしろから人が来る」

「宜よろうございますよ」

独語ひとりごとつやうに言ひて、満枝いよいよは弥寄添ひつひつ。貫一こらは怵へかねて

力任せうんに咩ぬ。と曳けば、手は離れずして、女の体のみ倒れかかり

「あ、痛いた！ そんな酷ひどい事をなさらなくても、其処そこの角まで参

ればお放し申しますから、もう少しの間どうぞ……」

「好い加減になさい」

と暴かに引払ひて、寄らんとする隙もあらせず摩脱くるより  
あらら ひつばら  
 足を疾めて津守坂を驀直に下りたり。  
はや つのかみざか ましぐら

やうやう昇れる利鎌の月は乱雲を芟りて、迥き梢の頂に姑く  
とかま らんうん か はるけ こずゑいただき しばら  
 掛れり。一抹の闇を透きて士官学校の森と、その中なる兵営と、  
いちまつ やみ  
 その隣なる町の片割とは、懶く寢覚めたるやうに覚束なき形を  
かたわれ ものう  
 顕しぬ。坂上なる巡查派出所の燈は空く血紅の光を射て、下り  
あらは  
 行きし男の影も、取残されし女の姿も終に見えず。  
つひ

(八) の二

片側町なる坂町は軒並に鎖して、何処に隙洩る火影も見えず、  
かたかはまち さかまち のきなみ とどぎ いづこ すきも ひかげ  
 旧砲兵營の外柵に生茂る群松は颯々の響を作して、その下道の  
がいさく おひしげ むらまつ さつさつ な  
 小暗き空に五位鷲の魂切る声消えて、夜色愁ふるが如く、正に  
をぐら ごいざぎ たまき  
まさ

十一時に垂なんなんとす。

たちま

あた

忽ち兵營の門前に方あたりて人の叫ぶが聞えぬ、間貫一は二人の

くせもの

いちにん

つば

まぶか

ひきおろ

曲者に困れたるなり。一人は黒の中折帽の鐺つばを目深まぶかに引下し、

ねずみいろ

えりまき

つつ

鼠色の毛糸の衿卷えりまきに半面を裏つつみ、黒キヤリコの紋付の羽織の下

したばき

しりからげ

くろたび

せつた

は

に紀州ネルの下穿高々と尻褰しりからげして、黒足袋くろたびに木裏の雪踏せつたを履はき、

ろくぶつよ

いろき

をれ

めくらしま

ももひきはらがけ

六分強なる色木の弓の折をれを杖つゑにしたり。他は盲縞めくらしまの股引腹掛ももひきはらがけに、

とうざん

はんでん

ふかぐつ

うが

ほほかぶり

とりうちぼうし

唐棧とうざんの半纏はんでん着て、茶ヅツクの深靴ふかぐつを穿ち、衿卷えりまきの頬冠ほほかぶりに鳥撃帽子とりうちぼうし

けずりな

びんろうじ

ひんだ

を頂かぶきて、六角むすむすに削成けずりなしたる檳榔子びんろうじの逞たくまきステッキすてっきを引抱ひんだき、い

みのたけ

づれも身材貫一みのたけよりは低ひけれど、血氣腕力兼備けつきわんりきけんぱいと見えたる壮俊わかももの

どもなり。

「物取か。恨を受ける覚しるは無ないぞ！」

「黙れ！」と弓の折をれの寄よるを貫一かんいちは片手かたてに障さかへて、

「僕は間貫一かんいちといふ者だ。恨があらば尋常じんじょうに敵手あひてにならう。物

取ならば財はくれる、訳も言はずに無法千万な、待たんか！」

答は無くて揮下したる弓の折は貫一が高頬を発矢と打つ。眩

きつつも逃行くを、猛然と追迫れる檳榔子は、件の杖もて片手

突に肩の辺を曳と突いたり。踏み耐へんとせし貫一は水道工事

の鉄道に跌きて仆るるを、得たりと附入る曲者は、余に躁りて

貫一の仆れたるに又跌き、一間ばかりの彼方に反跳を打ちて投

飛されぬ。入替りて一番手の弓の折は貫一の背を袈裟掛に打据

ゑければ、起きも得せで、崩折るるを、畳みかけんとする隙に、

手元に脱捨てたりし駒下駄を取るより早く、彼の面を望みて投

げたるが、丁と中りて痿むその時、貫一は蹶起きて三歩ばかりも

追れしを打転けし檳榔子の躍り蒐りて、拜打に下せる杖は小鬢

を掠り、肩を迂りて、鞆持つ手を断れんとすばかりに撲ちける

を、辛くも忍びてつと退きながら身構しが、目潰吃ひし一番手

の怒いかりを作なして奮進きたし来るを見るより今は危あやふしと鞆の中なる小刀こがたな撈かいさぐりつつ馳出はせいづるを、輒たやすく肉薄せせる二人が筈しもとは雨の如く、所嫌ところきらはぬ滅多打めつたうちに、彼は敢無あへなくも昏倒こんとうせるなり。

檣「どうです、もう可いに為ませうか」

弓「此奴こいつおれの鼻面はなづらへ下駄を打着うけよつた、ああ、痛いた」

衿卷搔除かきのけて彼の撫なでたる鼻は朱あけに染みて、西洋蕃椒たうがらしの熟つえたるに異ちがらず。

檣「おお、大変な衄はなぢですぜ」

貫一は息も絶々ながら緊しかと鞆を搔抱かきいだき、右の逆手さかてに小刀を隠し持ちて、この上にも狼藉ろうぜきに及せば為なんやう有りと、油断を計りてわざと為す無ないき体を装よそほひ、直呻ひたうめきにぞ呻うきみたる。

弓「憎い奴じや。然し、随分撲うつたの」

檣「ええ、手が痛くなつて了しまりました」

弓「もう引揚げやう」

かくて曲者は間近の横町に入りぬ。辛からうじて面おもてを擡あげ得たりし貫一は、一時に発せる全身の疼いた通たみに、精神漸やうやく乱れて、屢しばしば前後を覚えざらんとす。

## 後編

### 第一章

翌々日の諸新聞は坂町さかまちに於ける高利貸アイス遭難の一件を報道せり。  
中うちに間貫一はざまを誤りて鰐淵わにぶち直行ただゆきと為せるもありしが、負傷者は翌日  
大学第二医院に入院したりとのみは、一樣に事実の真を伝ふる  
なりけり。されどその人を誤れる報道は決して何等の不都合を  
も生ぜざるべし。彼等を識しらざる読者は湯屋の喧嘩けんかも同じく、  
三ノ面記事じょうとうの常套みすじとして看過みすじすべく、何の違いとまかその敵手あひての誰々たれたれ  
なるを問はん。識れる者は恐くは、貫一も鰐淵も一つに足腰の

利きかずなるまで撃うち踏めされざりしを本意ほんい無く思おもへるなるべし。又  
 或者は彼の即死せざりしをも物足らず覚ゆるなるべし。下手人  
 は不明なれども、察するに貸借上の遺趣なより為なせる業わざならんと  
 は、諸新聞の記しるせる如く、人も皆思ふところなりけり。

直行は今朝病院へ見舞に行きて、妻は患者の容体を案じつつ  
 留守せるなり。夫婦は心を協あはせて貫一の災難を悲かなし、何程の費つひえ  
 をも吝をしまず手宛てあての限を加へて、少小すこしの癥さずをも遺のこさざらんと祈  
 なりき。

股肱ここうと恃たのみ、我子とも思へる貫一の遭難を、主人はなかなか  
 その身に受けし闇打やみうちのやうに覚えて、無念の止み難く、かばか  
 りの事に屈する鰐淵みせしめならぬ令見の為に、彼が入院中を目覚めざましくも  
 厚まかなく賄まかひて、再び手出しもならざらんやう、陰かげながら卑怯者ひきようものの  
 息の根を遏とめんと、氣くるはしも狂くるはしく力を竭つくせり。

彼の妻は又、やがてはかかる不慮の事の夫の身にも出で来るべきを思過して、若しさるべからんには如何にか為べき、この悲しき、この口惜しき、この心細きにては止まじと思ふに就けて、空可恐く胸の打騒ぐを禁め得ず。奉公大事ゆるゑに怨を結びて、憂き目に遭ひし貫一は、夫の禍を転じて身の仇とせし可憫さを、日頃の手柄に増して浸々難有く、かれを念ひ、これを思ひて、絶に心弱くのみ成行くほどに、裏に愧づること、懼るること、疚きことなどの常に抑へたるが、忽ち涌立ち、跳出でて、その身を責むる痛苦に堪へざるなりき。

年久く飼るる老猫の凡そ子狗ほどなるが、棄てたる雪の塊のやうに長火鉢の猫板の上に蹲りて、前足の隻落して爪頭の灰に埋るるをも知らず、齧をさへ搔きて熟睡したり。妻はその夜の騷擾、次の日の気労に、血の道を悩める心地にて、憎々となりて

は驚かされつつありける耳元に、格子の鐸の轟きければ、はや夫の帰来かと疑ひも果てぬに、紙門を開きて顕せる姿は、年紀二十六七と見えて、身材は高からず、色やや蒼き瘦顔の険しげに口髭逞く、髪を生ひ乱れたるに深々と紺ネルトンの二重外套の襟を立てて、黒の中折帽を脱ぎて手にしつ。高き鼻に鼈甲縁の眼鏡を挿みて、稜ある眼色は見る物毎に恨あるが如し。

妻は思設けぬ面色の中に喜を漾へて、

「まあ直道かい、好くお出だね」

片隅に外套を脱捨つれば、彼は黒綾のモオニングの新からぬに、濃納戸地に黒縞の穿袴の寛なるを着けて、清ならぬ護謨のカラ、カフ、鼠色の紋縺子の頸飾したり。妻は得々起ちて、その外套を柱の折釘に懸けつ。

「どうも取んだ事で、阿父さんの様子はどんな？ 今朝新聞を

見ると愕おどろいて飛んで来たのです。容体ようたいはどうです」

彼は時儀ときぎを叙のぶるに迫およばずして忙せはしげにかく問出とひいでぬ。

「ああ新聞で、さうだつたかい。なあに阿父おとうさんはどうも作りはしないわね」

「はあ？ 坂町さかまちで大怪我おほげがを為なすつて、病院へ入つたと云ふのは？」

「あれは間はざまさ。阿父おとうさんだと思ひなの？ 可厭いやだね、どうしたと云ふのだらう」

「いや、さうですか。でも、新聞には歴然ちやんとさう出てみましたよ」

「それぢやその新聞が違つてゐるのだよ。阿父おとうさんは先之さつき病院へ見舞いにお出掛いでだから、間も無くお帰来かへりだらう。まあ寛々ゆつくりしてお在いな」

かくと聞ける直道あまは余あまりの不意に拍子あ抜して、喜びも得え為せず唾然あぜん

たるのみ。

「ああ、さうですか、間が遣やられたのですか」

「ああ、間が可哀かあいさうにねえ、取んだ災難で、大怪我をしたのだよ」

「どんなです、新聞には余程劇ひどいやうに出てゐましたが」

「新聞に在る通だけけれど、不具かたはになるやうな事も無いさうだが、

全然快すつかりよくなるには三月みつきぐらゐはどんな事をしても要かかるといふ話

だよ。誠に気の毒な、それで、阿父おとつさんも大抵な心配ぢやない

の。まあ、ね、病院も上等へ入れて手宛てあては十分にしてあるのだから、

決して気遣きづかひは無いやうなものだけれど、何しろ大怪我だからね。

左の肩の骨が少し摧くだけたとかで、手が緩縦ゆるぶらになつて了しまつたの、

その外紫色の痣あざだの、蚯蚓腫めめずばれだの、打切ぶつきれたり、擦毀すりこはしたやうな負傷きずは、お前、体一面なのさ。

それに気絶するほど頭部あたま

を撲ぶたれたのだから、脳病でも出なければ可いつて、お医者様もさう言つてお在いでなさうだけれど、今のところではそんな塩梅あんばいも無いさうだよ。何しろその晩内かつぎこへ昇あり込んだ時は半死半生で、些ほんの虫の息が通つてゐるばかり、私わたしは一目見ると、これはとても助るまいと想つたけれど、割合に人間といふものは丈夫なものだね」

「それは災難な、気の毒な事をしましたな。まあ十分に手宛をして遣るが可いです。さうして阿父あふちさんは何と言つてゐました」

「何ととは？」

「間やみうちが闇打やみうちにされた事を」

「いづれ敵手あひては貸金かきぎんの事から遺趣を持つて、その悔まし紛まぎれに無法まな真似まねをしたのだらうつて、大相腹おとなしを立ててお在いでなのだよ。全まくね、間まはああ云ふ不断の大人おとなしい人だから、つまらない喧嘩けんかな

ぞを為る氣遣はなし、何でもそれに違は無いのさ。それだから猶更なほさら氣の毒で、何とも謂いひやうが無い」

「間は若いから、それでも助るのです、阿父おとつさんであつたら命は有りませんよ、阿母おつかさん」

「まあ可厭いやなことをお言ひでないな！」

浸々しみじみ思入りたりし直道しづかは徐うらめしにその恨き目を挙げて、

「阿母さん、阿父さんは未まだこの家業をお廃やめなさる様子は無いのですかね」

母は苦しげに鈍り鈍りて、

「さうねえ……別に何とも……私わたしには能く解らないね……」

「もう今に応報むくいは阿父さんにも……。阿母さん、間があんな目に遭あつたのは、決して人事ぢやありませんよ」

「お前又阿父さんの前でそんな事をお言ひでないよ」

「言ひます！ 今日是非言はなければならぬ」

「それは言ふも可いけれど、従来も随分お言ひだけけれど、あの気性だから阿父さんは些もお聴きではないぢやないか。とても他の言ふことなんぞは聴かない人なのだから、まあ、もう少しお前も目を瞑つてお在よ、よ」

「私だつて親に向つて言ひたくはありません。大概の事なら目を瞑つてゐたいのだけれど、実にこればかりは目を瞑つてゐられないのですから。始終さう思ひます。私は外に何も苦勞といふものは無い、唯これだけが苦勞で、考出すと夜も寝られないのです。外にどんな苦勞が在つても可いから、どうかこの苦勞だけは没して了ひたいと熟く思ふのです。噫、こんな事なら未だ親子で乞食をした方が復に可い」

彼は涙を浮べて働きぬ。母はその身も俱に責めらるる想して、

或は可慚く、或は可忌く、この苦き位置に在るに堪へかねつつ、  
言解かん術さへ無けれど、とにもかくにも言はで已むべき折な  
らねば、辛じて打出しつ。  
「それはもうお前の言ふのは尤だけれど、お前と阿父さんとは  
全で気合が違ふのだから、万事考量が別々で、お前の言ふ事は  
阿父さんの肚には入らず、ね、又阿父さんの為る事はお前には  
不承知と謂ふので、その中へ入つて私も困るわね。内も今では  
相應にお財も出来たのだから、かう云ふ家業は廃めて、楽隠居  
になつて、お前に嫁を貰つて、孫の顔でも見たい、とさう思ふ  
のだけれど、ああ云ふ気の阿父さんだから、そんなことを言出  
さうものなら、どんなに慍られるだらうと、それが見え透いて  
ゐるから、漫然した事は言はれずさ、お前の心を察して見れば  
可哀さうではあり、さうかと云つて何方をどうすることも出来

ず、陰で心配するばかりで、何の役にも立たないながら、これ  
でなかなか苦いのは私の身だよ。

さぞお前は気も済まなからうけれど、とても今のところでは  
何と言つたところが、応と承知をしさうな様子は無いのだから、  
懋なまじひ言合つてお互に心持を悪くするのが果おちだから、……それは、  
お前、何と云つたつて親一人子一人の中だもの、阿父さんだつ  
て心ぢやどんなにお前たよりが便たよりだか知れやしないのだから、究つまり竟は  
お前の言ふ事も聴くのは知れてゐるのだし、阿父さんだつて現  
在の子のそんなにまで思つてゐるのを、決して心に掛けないの  
ではないけれども、又阿父おとつさんの方にも其そこ処りには了り簡ようけんがあつて、  
一概にお前の言ふ通にも成りかねるのだらう。

それに今日あたりは、間の事で大変気が立つてゐるところだ  
から、お前が何か言ふと却かへつて善くないから、今日は窃そつとして

措おいておくれ、よ、本当に私が頼むから、ねえ直道」

実げに母は自ら言へりし如く、板挟いたばさみの難局さとしに立てるなれば、ひたすら事あらせじと、誠の一閃に直道を諭さとすなりき。彼は涙の催たすに堪たへずして、鼻目鏡はなめがねを取捨てて目を推拭おしぬぐひつつ猶咽むせびるたりしが、

「阿母おつかさんにさう言れるから、私は不断は怵こらへてゐるのです。今日ばかり存分に言はして下さい。今日言はなかつたら言ふ時は有りませんよ。間のそんな目に遭あつたのは天罰です、この天罰は阿父さんも今に免れんことは知れてゐるから、言ふのなら今、今言はんくらゐなら私はもう一生言ひません」

母はその一念おびやかに脅おびされけんやうにて漫寒そぞろきを覚えたり。洩打はなうちか去かみて直道は語ことばを継つぎぬ。

「然わたくしし私の仕打も善くはありません、阿父さんの方にも言分は

有らうと、それは自分で思つてゐます。阿父さんの家業が氣に入らん、意見をしても用ゐない、こんな汚れた家業を為るのを見てゐるのが可厭だ、と親を棄てて別居してゐると云ふのは、如何にも情合の無い話で、実に私も心苦いのです。決して人の子たる道ではない、さぞ不孝者と阿父さん始阿母さんもさう思つてお在でせう」

「さうは思ひはしないよ。お前の方にも理はあるのだから、さうは思ひはしないけれど、一処いっしょに居たらさぞ好からうとは……」

「それは、私は猶なほの事です。こんな内に居るのは可厭だ、別居して独ひとりで遣る、と我儘わがままを言つて、どうなりかうなり自分で暮して行けるのも、それまでに教育して貰つたのは誰たれのお陰かと謂へば、皆親みんなの恩。それもこれも知つてゐながら、阿父おとつさんを踏付にしたやうな行おこなひを為るのは、阿母おつかさん能々よくよくの事だと思つて下

さい。私は親に悖さかふのぢやない、阿父さんと一処いっしょに居るのを嫌きらふのぢやないが、私は金貸などと云ふ賤いやしい家業が大嫌だいきらひなのです。人を悩なやめて己おのれを肥こやす——浅ましい家業です！」

身を顫ふるはして彼は涙に搔かきく昏れたり。母は居いたままに惑へるなり。

「親を過すこすほどの芸も無くて、生意気な事ばかり言つて実は面目めんぼくも無いのです。然し不自由を辛抱してさへ下されば、両親ぐらゐに乾ひもじい思はきつと為させませんから、破屋あぼらやでも可いから親子三人一所に暮して、人に後指を差されず、罪も作らず、怨うらみも受けずに、清く暮したいぢやありませんか。世の中は貨かねが有つたから、それで可い訳のものぢやありませんよ。まして非道をして拵こしらへた貨かね、そんな貨かねが何の頼たのみになるものですか、必ず悪銭身に附かずです。無理に仕上げた身上しんじょうは一代持たずに滅びます。因果の

報たましう例は恐るべきものだから、一日でも早くこんな家業は廃やめるに越した事はありません。噫ああ、末が見えてゐるのに、情無い事ですなあ！」

積悪の応報てきめん觀面の末を憂うれひて措おかざる直道が心の眼は、無残まなしにも怨うらみの刃やいばつんざかに劈きれて、路上おうちに横死の恥さげを暴さらせる父が死顔の、犬いぬに蹋けられ、泥まみに塗ぬれて、古席ふるむしろの陰まくらに枕まくらせるを、怪あやまくも歴々まひまひと見て、恐おそくは我が至誠しかんの鑑かがみは父が未然さながらを宛然いだ映あやまし出して謬あやまらざるにあらざるかと、事まのあたりの目前まのあたりの真まことにあらざるを知りつつも、余りの浅ましさに我を忘れてつと迸ほとばしる哭声なきごゑは、咬緊くひしむる齒くはをさへ漏こぼれて出づるを、母は驚おどき、途方ついでに昏くれたる折しも、門かどに俥くるまの駐とどまりて、格子くわだの鐸ベルの鳴るは夫かへりの帰来かへりか、次手ついで悪しと胸むねを轟とどろかして、直道の肩を揺り動うごしつつ、声こゑを潜ひそめて口早くちばに、

「直道、阿父あふちさんのお帰来かへりだから、泣ないてゐちや可かけないよ、早

く彼方へ行つて、……よ、今日は後生だから何も言はずに……」  
 はや足音は次の間に来りぬ。母は慌てて出迎に起てば、一足  
 遅れに紙門は外より開れて主直行の高く幅たき軀は岸然とお峯  
 の肩越に顕れぬ。

(一) の二

「おお、直道か珍しいの。何時来たのか」

かく言ひつつ彼は艶々と赭みたる鉢割の広き額の陰に小く点  
 せる金壺眼を心快げに瞪きて、妻が例の如く外套を脱するまま  
 に立てり。お峯は直道が言に稜あらんことを慮りて、さり気無  
 く自ら代りて答へつ。

「もう少し先でした。貴君は大相お早かつたぢやありませんか、

丁度好よごございましたこと。さうして間の容体はどんなですね」

「いや、仕合しあはせと想うたよりは軽くての、まあ、ま、あの分なら

心配は無いて」

黒一楽くろいちらく

の三紋みつもん

付けたる綿入羽織わたいればおり

の衣紋えもん

を直して、彼は機嫌好きげん

く火鉢ひばち

の傍そば

に歩み寄る時、

直道は漸やうや

く面おもて

を抗あ

げて礼な

を作せり。

「お前、どうした、ああ、妙な顔をしてをるでないか」

梭欄しゆろ

の毛を植う

えたりやとも見ゆる口髭くちひげ

を搔拈かいひね

りて、太短ふとみじか

なる

眉まゆ

を顰ひそ

むれば、聞き

る妻は呀はっ

とばかり、刃やいば

を踏ふ

める心地こころ

も為な

め

り。直道は屹きと振仰おもてぐとともに両手を胸むねに組合あせて、居長高ゐたけだかに

なりけるが、父おとつの面おもてを見し目を伏しづせて、さて徐しづかに口を開ひらきぬ。

「今朝新聞を見ましたところが、阿父おとつさんが、大怪我なすを為なつた

と出てをったので、早速お見舞みまひに参まゐつたのです」

白髪しらがを交まじへたる茶褐色ちやかつしよくの髪かの頭かしらに置余あるばかりなるを撫なでて、

直行は、

「何新聞か知らんけれど、それは間の間違ぢやが。俺おれならそんな場合に出会うたて、唯々おもおも打れちやをりやせん。何の先は二人でないかい、五人までは敵手あひてにしてくれるが」

直道の隣に居たる母は密ひそかに彼のコオトの裾すそを引ききて、言を返させじと心着づくるなり。これが為ために彼は少しく遅ためらひぬ。

「本ほんにお前まへどうした、顔色かほつきが良ようないが」

「さうですか。余あなり貴方あなたの事が心配しんぱいになるからです」

「何なにじや？」

「阿父あふさん、度々たびたび言ふ事ですが、もう金貸かひは廃やめて下さいな」

「又また！ もう言ふな。言ふな。廃やめる時分ときには廃やめるわ」

「廃やめなければならんやうになつて廃やめるのは見みともない。今朝あした貴方あなたが半死半生の怪我けがをしたといふ新聞を見た時、私わたしはどん

なにしても早くこの家業をお廃めなさるやうに為せなかつたの  
 を熟く後悔したのです。幸に貴方は無事であつた、から猶更今  
 日は私の意見を用ゐて貫はなければならぬのです。今に阿父さ  
 んも間のやうな災難を必ず受けるですよ。それが可恐いから廃  
 めると謂ふのぢやありません、正しい事で争つて殞す命ならば、  
 決して辞することは無いけれど、金錢づくの事で怨を受けて、  
 それ故に無法な目に遭ふのは、如何にも恥曝しではないですか。  
 一つ間違へば命も失はなければならぬ、不具にも為れなければ  
 ならぬ、阿父さんの身の上を考へると、私は夜も寝られんので  
 すよ。

こんな家業を為んでは生活が出来んのではなし、阿父さん阿  
 母さん二人なら、一生安楽に過せるほどの資産は既に有るので  
 せう、それに何を苦んで人には怨まれ、世間からは指弾をされ

て、無理な財を拵へんければならんですか。何でそんなに金  
 が要るのですか。誰にしても自身に足りる以外の財は、子孫に  
 遺さうと謂ふより外は無いのでせう。貴方には私が一人子、そ  
 の私は一銭たりとも貴方の財は譲られません！ 欲くないので  
 す。さうすれば、貴方は今日無用の財を貯へる為に、人の怨を  
 受けたり、世に誚られたり、さうして現在の親子が讐のやうに  
 なつて、貴方にしてもこんな家業を決して名誉と思つて楽しんで  
 為つてゐるのではないでせう。

私のやうなものでも可愛いと思つて下さるなら、財産を遺し  
 て下さる代に私の意見を聴いて下さい。意見とは言ひませんが、  
 私の願です。一生の願ですからどうぞ聴いて下さい」

父が前に頭を低れて、輒く抗げぬ彼の面は熱き涙に蔽るるな  
 りき。

些<sup>さ</sup>も動ずる色無き直行は却<sup>かへ</sup>つて微笑を帯びて、語<sup>ことば</sup>をさへ和<sup>やはら</sup>げつ。

「俺の身を思うてそんなに言うてくれるのは嬉しいけど、お前のはそれは杞憂<sup>きゆう</sup>と謂ふんじや。俺と違<sup>ちが</sup>うてお前は神経家ぢやからそんなに思ふんぢやけど、世間と謂ふものは、お前の考へとるやうなものではない。学問の好きな頭脳<sup>あたま</sup>で実業を遣る者の仕事を責むるのは、それは可かん。人の怨の、世の諂<sup>そしり</sup>のと言ふけど、我々同業者に対する人の怨などと云ふのは、面々の手前勝手の愚痴に過ぎんのじや。世の諂<sup>そしり</sup>と云ふのは、多くは嫉<sup>そねみ</sup>、その証拠は、働の無い奴が貧乏しとれば愍<sup>あはれ</sup>まるるじや。何家業に限らず、財<sup>かね</sup>を拵<sup>こしら</sup>へる奴は必ず世間から何とか攻撃を受くる、さうぢやらう。財<sup>かね</sup>の有る奴で評判の好<sup>え</sup>えものは一人も無い、その通じやが。お前は学者ぢやから自<sup>おのづか</sup>ら心持も違<sup>ちが</sup>うて、財<sup>かね</sup>などをさう

貴いものに思つてをらん。学者はさうなけりやならんけど、世間は皆学者ではないぞ、可<sup>え</sup>か。実業家の精神は唯財<sup>ただかね</sup>じや、世の中の奴の慾も財より外には無い。それほどに、のう、人の欲<sup>ほし</sup>がる財じや、何ぞ好<sup>え</sup>えところが無くてはならんぢやらう。何処<sup>どこ</sup>が好<sup>え</sup>えのか、何でそんなに好<sup>え</sup>えのかは学者には解らん。

お前は自身に供給するに足るほどの財<sup>かね</sup>があつたら、その上に望む必要は無いと言ふのぢやな、それが学者の考量<sup>かんがへ</sup>じやと謂ふんじやが。自身に足るほどの物があつたら、それで可<sup>え</sup>えと満足して了うてからに手を退<sup>ひ</sup>くやうな了簡<sup>りようけん</sup>であつたら、国<sup>たちま</sup>は忽<sup>ま</sup>ち亡<sup>ほろぶ</sup>るじや——社会の事業は發達せんじや。さうして国中<sup>こくちゆう</sup>若隱居<sup>わくいんこ</sup>ばかりになつて了うたと為れば、お前どうするか、あ。慾にきりの無いのが国民の生命<sup>かみ</sup>なんじや。

俺にそんなに財<sup>かね</sup>を拵<sup>こしら</sup>へてどうするか、とお前は不審<sup>ふしん</sup>するじや

ね。俺はどうも為<sup>せ</sup>ん、財は余計にあるだけ愉快なんじや。究竟<sup>つまり</sup>財を拵<sup>き</sup>へるが極<sup>きま</sup>めて面白いんじや。お前の学問するのが面白い如く、俺は財の出来るが面白いんじや。お前に本を読むのを好<sup>え</sup>え加減に為<sup>せ</sup>い、一人前の学問が有つたらその上望む必要は有るまいと言うたら、お前何と答へる、あ。

お前は能<sup>よ</sup>うこの家業を不正ぢやの、汚<sup>けがらはし</sup>いと言ふけど、財を儲<sup>まう</sup>くるに君子の道を行うてゆく商売が何処<sup>どこ</sup>に在るか。我々が高利の金を貸す、如何<sup>いか</sup>にも高利じや、何<sup>なぜ</sup>為高利か、可<sup>え</sup>えか、無抵当じや、そりや。借る方に無抵当といふ便利を与ふるから、その便利に対する報酬として利が高いのぢやらう。それで我々は決して利の高い金を安いと詐<sup>いつは</sup>つて貸しはせんぞ。無抵当で貸すぢやから利が高い、それを承知で皆借るんじや。それが何で不正か、何<sup>けがらはし</sup>で汚いか。利が高うて不当と思ふなら、始から借らん

が可え、そんな高利を借りても急を拯すくはにや措おかれんくらゐの困難が様々にある今の社会じや、高利貸を不正と謂ふなら、その不正の高利貸を作つた社会が不正なんじや。必要の上から借る者があるで、貸す者がある。なんぼ貸したうても借る者が無けりや、我々の家業は成立ちは為ん。その必要を見込んで仕事を為るが則すなはち営業の魂たましひなんじや。

財かねといふものは誰でも愛して、皆獲やうと念おもうとる、獲たら離はなすまいと為しとる、のう。その財を人より多く持たうと云ふぢやもの、尋常一様の手段で行くものではない。合意の上で貸借して、それで儲くるのが不正なら、総すべての商業は皆不正でないか。学者の目からは、金儲かねまうけする者は皆不正な事をしとるんじや」  
太いたくもこの弁論に感じたる彼の妻は、屢しばしばば直道の顔を偷ぬす視て、あはれ彼が理窟りくつもこれが為くじに挫くじけて、氣遣きづかひたりし口論も無く

て止みぬべきを想ひて私ひそかに懼よろこべり。

直道は先まづ嚴おごそかに頭かしらを掉ふりて、

「学者でも商業家でも同じ人間です。人間である以上は人間たる道は誰にしても守らんければなりません。私わたしは決して金儲を為るのを悪いと言ふのではない、いくら儲けても可いから、正当に儲けるのです。人の弱みに付つけ入いつて高利を貸すのは、断じて正当でない。そんな事が営業の魂などとは……！ 譬たとへば間

が災難に遭あつた。あれは先は二人で、しかも不意打を吃くしたのでせう、貴方はあの所業を何とお考へなさる。男らしい遺趣返いしゆがへしの為方とお思ひなさるか。卑劣極きはまる奴等だと、さぞ無念にお思ひでせう？」

彼は声を昂あげて逼せまれり。されども父は他を顧て何等の答をも与へざりければ、再び声を鎮しづめて、

「どうですか」

「勿論もちろん」

「勿論？ 勿論ですとも！ 何奴なにやつか知らんけれど、実に陋きたない根

性けち、劣けちな奴等です。然し、怨を返すといふ点から謂いつたら、奴等やつらは立派に目的を達したのですね。さうでせう、設たひその手段たは如何いかにあらうとも」

父は騒さわがず、笑あはれを含こみて赤あかき髭ひげを弄もりたり。

「卑劣ひれつと言いれやうが、陋きたないと言いれやうが、思おもふさま遺趣返いしゆへんをした奴等やつらは目的を達たしてさぞ満足まんじつしてをるでせう。それを搦殺つかみころしても遣つかりたいほど悔くやしいのは此方こちばかり。

阿父おとつさんの営業えいぎやうの主意しゆいも、彼等かれらの為方ためかたと少しも違ちがはんぢやありませんか。間の事に就ついて無念むねんだと貴方あなたがお思おもひなさるなら、貴方あなたから金を借りて苦くるめられる者は、やはり貴方あなたを恨にくまずには

「りませんよ」

又しても感じ入りたるは彼の母なり。かくては如何なる言をことばもて夫はこれに答へんとすらん、我はこの理のことわり靦面てきめん当然なるに口を開かんやうも無きにと、心慌あわてつつ夫の気色を密ひそかに窺うかがひたり。彼は自若として、却かへつてその子の善く論ずるを心に愛めづらんやうの面色おももちにて、転うたた微笑を弄ろうするのみ。されども妻は能よく知れり、彼の微笑を弄するは、必ずしも、人のこれを弄するにあらざる時に於おいて屢しばしばするを。彼は今それか非あらぬかを疑へるなり。

蒼あをく羸やつれたる直道が顔は可いまはし忌はくも白しろき色いろにあらわじ、声は甲高かんだかに細こりて、膝ひざに置おける手頭てびきは連しきりに震ふるひぬ。

「いくら論じたところで、解とりきつた理窟りくつなので、もう言いひますまい。言いへば唯阿父あふちさんの心持こころもちを悪わるくするに過あぎぎんで

す。然し、従来これまでも度々たびたび言ひましたし、又今日こんな言ふのも、皆阿父おとつさんの身を案じるからで、これに就いては陰でどれほど私が始終苦心してゐるか知つてお在いでは無からうけれど、考出かんがへだすと勉強するのも何も可厭いやになつて、吁ああ、いつそ山の中へでも引籠ひっこんで了はうかと思ひます。阿父さんはこの家業を不正でないとお言ひなさるが、実に世間でも地獄の獄卒のやうに憎み賤いやしんで、附合はぢふのも耻はぢにしてゐるのですよ。世間なんぞはかまふものか、と貴方はお言ひでせうが、子としてそれを聞きかされる心苦しさを察して下さい。貴方はかまはんと謂ふその世間も、やはり我々が渡つて行かなければならん世間です。その世間に肩身が狭くなつて終つひには容いれられなくなるのは、男の面目ではありませんよ。私はそれが何より悲い。此方こつちに大見識があつて、それが世間と衝突して、その為に憎まれるとか、棄てられるとか謂ふな

ら、世間は私を棄てんでも、私は喜んで阿父さんと一処に世間に棄てられます。親子棄てられて路<sup>みち</sup>邊<sup>ばた</sup>に餓<sup>かつ</sup>死<sup>えじ</sup>するのを、私は親子の名誉、家の名誉と思ふのです。今我々親子の世間から疎<sup>うと</sup>れてゐるのは、自業自得の致すところで、不名誉の極です！」

眼<sup>まなこ</sup>は痛恨の涙を湧<sup>わか</sup>して、彼は覚え<sup>おもて</sup>ず父の面<sup>ら</sup>を睨<sup>にら</sup>みたり。直行は例<sup>うたがひ</sup>の嘯<sup>うそ</sup>けり。

直道は今日を限と思入りたるやうに飽<sup>こ</sup>くまで言<sup>ことば</sup>を止<sup>や</sup>めず。

「今度の事を見ても、如何<sup>いか</sup>に間<sup>ま</sup>が恨<sup>い</sup>まれてゐるかが解<sup>と</sup>りませう。貴<sup>あなた</sup>方の手代でさへあの通ではありませんか、して見れば貴方の受<sup>う</sup>けてゐる恨<sup>にくみ</sup>、憎<sup>にくみ</sup>はどんなであるか言<sup>い</sup>ふに忍<sup>しの</sup>びない」

父<sup>ちち</sup>は忽<sup>たち</sup>ち遮<sup>さへ</sup>りて、

「善<sup>よ</sup>し、解<sup>と</sup>つた。能<sup>よ</sup>う解<sup>と</sup>つた」

「では私<sup>こし</sup>の言<sup>ことば</sup>を用<sup>もち</sup>ゐて下<sup>くだ</sup>さるか」

「まあ可<sup>え</sup>え。解つた、解つたから……」

「解つたとお言ひなさるからはきつと用ゐて下さるのでせうな」  
 「お前の言ふ事は能う解つたさ。然<sup>しか</sup>し、爾<sup>なんぢ</sup>は爾たり、吾は吾たりじや」

直道は怵<sup>こら</sup>へかねて犇<sup>ひし</sup>と拳<sup>こぶし</sup>を握れり。

「まだ若い、若い。書物ばかり見とるぢや可かん、少しは世間も  
 見<sup>あ</sup>い。なるほど子の情として親の身を案じてくれる、その点は  
 空<sup>あだ</sup>には思はん。お前の心中も察する、意見も解つた。然し、俺  
 は俺で又自ら信ずるところあつて遣るんぢやから、折角の忠告  
 ぢやからと謂うて、枉<sup>ま</sup>げて従ふ訳にはいかんで、のう。今度間  
 がああ云ふ目に遭うたから、俺は猶<sup>なほ</sup>更<sup>さら</sup>劇<sup>えら</sup>い目に遭はうと謂うて、  
 心配してくれるんか、あ？」

はや言ふも益無しと観念して直道は口を開かず。

「そりや辱かたじけないが、ま、当分俺の軀からだは俺に委まかして置いてくれ」

彼は徐しづかに立上りて、

「些ちよつとこれから行いて来にやならん処があるで、寛ゆつくりして行くが

可ええ」

忽そそくさ忙と二重外套を打被うちかぎて出いづる後より、帽子を持ちおく

る妻は密ひそかに出先を問へるなり。彼は大いなる鼻を齧しわめて、

「俺が居ると面倒かへぢやから、些ちよつと出て来る。可ええやうに言うて

の、還かへしてくれい」

「へえ？ そりや困りますよ。貴方あなた、私わたしだつてそれは困るぢや

ありませんか」

「まあ可ええが」

「可よくはありません、私は困りますよ」

お峯は足摩あしずりして迷惑を訴ふるなりけり。

「お前なら居ても可え。さうして、もう還るぢやらうから」

「それぢや貴方還るまでゐらしつて下さいな」

「俺が居ては還らんからじやが。早う行けよ」

さすがに争ひかねてお峯の渋々<sup>たたく</sup>佇めるを、見も返らで夫は驀地<sup>まつしぐら</sup>に門<sup>かど</sup>を出でぬ。母は直道の勢に怖<sup>おそ</sup>れて先にも増してさぞや苛<sup>さい</sup>まるるならんと想へば、虎<sup>とら</sup>の尾をも履<sup>ふ</sup>むらんやうに覚えつつ帰りに来にけり。唯<sup>と</sup>見れば、直道は手を拱<sup>こまぬ</sup>き、頭<sup>かしら</sup>を低<sup>た</sup>れて、在りけるままだに凝然と坐したり。

「もうお中<sup>ひる</sup>食だが、お前何をお上りだ」

彼は身<sup>み</sup>転<sup>ころ</sup>も為<sup>せ</sup>ざるなり。重ねて、

「直道」と呼べば、始めて覚<sup>おぼ</sup>束<sup>つか</sup>なげに顔<sup>あ</sup>を挙<sup>あ</sup>げて、

「阿母<sup>おつか</sup>さん！」

その術<sup>じゆつ</sup>無<sup>な</sup>き声<sup>こゑ</sup>は謂<sup>い</sup>知<sup>ひ</sup>らず母の胸<sup>むね</sup>を刺<sup>さ</sup>せり。彼はこの子の幼<sup>こ</sup>く

て善く病める枕頭まくらもとに居たりし心地をそのままに覚えて、ほとほとつと寄りんとしたり。

「それぢや私はもう帰ります」

「あれ何だね、未だ可いよ」

あやしあやしにはかにはかなごりなごりをしまをしま  
異くも遽なごりに名残の惜れて、今は得も放たじと心牽こころひかるるなり。

「もうお中食ひるだから、久しぶりで御膳ごぜんを食べて……」

「御膳のども吭へは通りませんから……」

## 第二章

主人公なる間貫一が大学第二医院の病室にありて、昼夜を重傷ほかに悩める外、身边いさまに事あらざる暇いとまに乗じて、富山に嫁ぎたる宮がその後の消息を伝ふべし。

一月十七日をもて彼は熱海の月下に貫一に別れ、その三月三日を扱えらびて富山の家に興入こし入れしたりき。その場より貫一の失踪しつそうせしは、鳴沢一家の為しぎさわいつけに物化もつけの邪魔じやまぼろひ払ひたりしには疑無うたがひなかりけれど、家内かないは挙こそりてさすがに騒動さわどうしき。その父よりも母よりも宮は更に切なる誠を籠こめて心痛せり。彼はただに棄てざる恋を棄てにし悔あはに泣くのみならず、寄辺よるべあらぬ貫一が身の安否おもしはかを慮おりて措おく能あたはざりしなり。

氣強あだくは別れにけれど、やがて帰り来こんと頼めし心待も、終つひに空あだなるを暁ささりし後、さりとも今一度は仮初かりそめにも相見あひまんことを願ねがひ、又その心の奥には、必ずさばかりの逢瀬あふせは有るべきを、おのれと契りけるに、彼の行方ゆくへは知られずして、その身の家をい出いづべき日は潮うしほの如く迫れるに、遣方やるかたも無く漫惑そぞろひては、常に鈍おぞましう思しひ下せる卜者ぼくしやにも問ひて、後には廻合めぐりあふべきも、今はな

かなか文ふみに便たよりもあらじと教へられしを、筆持まめつは篤たなごころなる人なれば、長うらみき長うらみき怨言うらみなどは告来つげこさんと、それのみは掌たなごころを指すばかりに待うらみちたりしも、疑うらみひし卜者うらみの言ことばは不幸あやまにも過あやまたで、宮は彼の怨言うらみをだに聞うらみくを得うらみざりしなり。

とにもかくにも今おも一目見おもずば動おもかじと始おもに念おもひ、それは慚かなはずなりてより、せめて一筆ひとふでの便聞たよりかずばと更おもに念おもひしに、事ことは心こころと渾すべて違たがひて、さしも願ねがはぬ一事いちじのみは玉たまを転ころずらんやうに何等さはりの障さわりも無なく抄取はかどりて、彼むなしが空むなしく貫一たよりの便たよりを望むみし一日いちにちにも似にず、三月三日たちまは忽かち頭かしらの上うへに跳をどり来きたれるなりき。彼つひは終つひに心を許ほだし肌身はだみを許ほだせし初恋はつこひを擲なげうちて、絶痛つとく絶苦つとくの悶々もんもんの中うちに一生いっせい最たのしも楽たのしかるべき大礼たいらいを挙あげ畢をはんぬ。

宮は実まことに貫一くわんいつに別わかれてより、始おのれめて己おのれの如何いかばかり彼かれに恋こせしかを知しりけるなり。

彼の出でて帰らざる恋しさに堪へかねたる夕、宮はその机に  
 寄りて思ひ、その衣の人香を嗅ぎて悶え、その写真に頬摩して  
 憧れ、彼若し己を容れて、ここに優き便をだに聞せなば、親を  
 も家をも振捨てて、直に彼に奔るべきものと念へり。結納の  
 交されし日も宮は富山唯継を夫と定めたる心はつゆ起らざりき。  
 されど、己は終にその家に適くべき身たるを忘れざりしなり。  
 ほとほと自らその緒を索むる能はざるまでに宮は心を乱しぬ。  
 彼は別れし後の貫一をばさばかり慕ひて止まざりしかど、過を  
 改め、操を守り、覚悟してその恋を全うせんとは計らざりける  
 よ。真に彼の胸に恃める覚悟とはあらざりき。恋侘びつつも  
 心を貫かんとにはあらず、由無き縁を組まんとしたるよと思ひ  
 つつも、強ひて今更否まんとするにもあらず、彼方の恋きを思  
 ひ、こなたの富めるを愛み、自ら決するところ無く、為すところ

る無くして空き迷に弄むなしばれつつ、終に移すべからざる三月三日の来きたるに会へるなり。

この日よ、この夕よ、更ゆふべけて床盃とこさかづきのその期じに迫およびても、怪あやしむべし、宮は決して富山唯繼つまを夫つまと定めたる心は起らざるにぞありける、止ただこの人を夫つまと定めざるべからざる我身なるを忘れざりしかど。彼は自ら謂おもへり、この心は始より貫一おもに許したるを、縁ありて身は唯繼まかに委ゆゑすなり。故ゆゑに身は唯繼まかに委ゆゑすとも、心は長く貫一おもを忘れずと、かく謂おもへる宮はこの心事の不徳なるを知れり、されどこの不徳のその身に免まぬかる能あたはざる約束なるべきを信じて、寧むしろ深く怪むにもあらざりき。如此かくのごとくにして宮は唯繼の妻となりぬ。

はなむじぎみ

花聶君は彼を愛するに二念無く、彼を遇するに全力を挙げたり。宮はその身の上の日毎輝き勝まさるままに、いよいよ意中の人

と私わたくしすべき陰いん無なくなりゆくを見て、愈いよいよよ楽たのしみまざる心こころは、夫つまの愛あい  
 を承うけたまぐるに慵もつろくて、唯ただ機械かたの如ごとく事つかふるに過あやまざるしも、唯ただ繼ついで  
 は彼の言ことふ花はなの姿すがた、温ぬるき玉たまの容かたちを一向いっぺんに愛めで悦よろこぶ余あつに、冷ひやかに  
 空むなしき器うつはを抱いだくに異ちがらざる妻つまを擁かかして、殆ほとんど憎にくむべきまでに得意とくい  
 の頤おとがひを撫なづるなりき。彼かれが一段いちだんの得意とくいは、二箇に月げつの後のち最愛さいあいの妻つま  
 は妊みこりて、翌あした年の春はる美みき男子なんしを挙あげぬ。宮みやは我われとも覚おぼえず浅あま  
 しがりて、産う後ごを三さん月げつばかり重おもく病いみけるが、その癒いゆる日ひを  
 竣またで、初う子ひごはいと弱よわくて肺炎びんえんの為ために歿みまりにけり。  
 子こを生うみし後ごも宮みやが色いろ香かはつゆ移うつはずして、自おのづから可な惱やましき風ふ情ぜい  
そはの添そりたるに、夫つまが愛あい護ごの念ねんは益ます深すすく、寵ちやうは人ひと目めの見み苦くるきしばか  
いよいより弥くよ加くるのみ。彼かれはその妻つまの常たのしに楽たのまざる故ゆゑを毫つゆも曉さとらず、  
 始はじめより唯ただその色いろを見て、打うち沈しづみたる生う得まれと独ひとり合が点てんして多おほく問とは  
 ざるなりけり。

かくいと怜まれつつも宮が初一念は動かんともせで、難ありがた有き人の情なさけに負そむきて、ここに嫁とつぎし罪をさへ歎なげきて止まざりしに、思はぬ子まで成せし過あやまちは如何いかにすべきと、躬みづからその容ゆるし難きを慙はぢて、悲むこと太はなはだ甚かりしが、実げに親の所憎にくしみにや堪たへざりけん。その子の失うせし後、彼は再び唯継の子をば生まじ、と固く心に誓ちかひしなり。二年ふたとせの後、三年みとせの後、四年よとせの後まで異あやしくも宮はこの誓を全うせり。

次第に彼の心は楽たのまずなりて、今は何の故にその嫁よめぎたるかを自ら知るに苦くるめるなりき。機械の如く夫を守り置物のやうに内に据たられ、絶たえて人の妻たる効かひも思出もあらで、空むなしく籠ろうちよう鳥の雲を望める身には、そのみの願ねがひなりし裕ゆたかなる生活も、富める家計も、土の如く顧かへるに足らず、却かへりてこの四年よとせが間思まひに思ふばかりにて、熱海あつみより行方ゆくへ知れざりし人の姿を田鶴たづみ見の邸内

に見てしまで、彼は全く音沙汰をも聞かざりしなり。生家なるしぎさわ鳴沢にては薄々知らざるにもあらざりしかど、さる由無き事をおろか告ぐるが如き愚なる親にもあらねば、宮のこれを知るべき便はたより絶れたりしなり。

計らずもその夢寐に忘れざる姿を見たりし彼が思は幾計なりいかげかりけんよ。饑ゑたる者の貪り食ふらんやうに、彼はその一目にして四年の求むるところを求めんとしたり。饜かず、饜かず、彼の慾はこの日より益急になりて、既に自ら心事の不徳を以つて許せる身を投じて、唯快く万事を一事に換へて已まん、と深くも念じたり。

五番町なる鰐淵といふ方に住める由は、静緒より聞きつれど、むぎとは文も通はせ難く、道は遠からねど、独り出でて彷徨ふべき身にもあらぬなど、克はぬ事のみなるに苦かりけれど、安

否を分わかざりし幾年いくとせの思に較くらぶれば、はや囊ふくろの物を搜さがるに等し  
 かるをと、その一筋ひとすぢに慰なぐさめられつつも彼は日毎つれづれの徒然つれづれを憂うれきに  
 堪あへざる余あまり、我心のこを遺かたる方かた無く明あすべき長ながき長ながき文ぶんを書かかんと  
 思おも立ちぬ。そは折ひを得えて送おくらんとにもあらず、又逢あうては言いふ  
 能あたはざるを言いはしめんとにもあらず、止ただかくも儂はかなき身みの上うへと  
 切きなき胸むねの内うちとを独ひとり自じら戀うつつへんとてなり。

(二) の二

宮みやは貫つら一いつが事ことを忘わすれざるとともに、又長ながく熱海ねつかいの悲かなき別わかれを忘  
 るる能あたはざるなり。更さらに見みよ。歳としどしめぐりく々々廻めぐり来くる一月いちげつ十七じゅうしち日にちなる日は、  
 その悲かなき別わかれを忘わすれざる胸むねに烙やきがねして、彼かれの悔くを新あらたにするにあらず  
 や。

「十年後の今月今夜も、僕の涙で月は曇らして見せるから、月が曇つたらば、貫一は何処かでお前を恨んで、今夜のやうに泣いてゐると想ふが可い」

おほ  
掩へども宮が耳は常にこの声を聞かざるなし。彼はその日のその夜に会ふ毎に、果して月の曇るか、あらぬかを試しに、曾てその人の余所に泣ける徴もあらざりければ、さすがに恨は忘れしかと、それには心安きにつけて、諸共に今は我をも思はでや、さては何処に如何にしてなど、更に打歎かるるなりき。

例のその日は四たび廻りて今日しも来りぬ。晴れたりし空は午後より曇りて少く吹出でたる風のいと寒く、凡ならず冷ゆる日なり。宮は毎よりも心煩きこの日なれば、かの筆採りて書続けんと為たりしが、余に思乱るればさるべき力も無くて、いとどしく紛れかねてゐたり。

益ますす寒威さむいの募まするに堪たへざりければ、遽にはかに煖炉だんろを調たぜしめて、彼は西洋間せいやうかんに徙うつりぬ。尽ことごとく窓帷カアテンを引きたる十畳じふじやうの間まは寸隙すんげきもあらず裏つまれて、火氣やうやの漸やうやく春はるを蒸たすところに、宮みやは体たいを胖ゆたかに友禅ゆうぜん縮緬ちりめんの長襦袢ながじゆばんの褌つまを踏ふみ披ひらきて、緋ひの紋もん緞どん子張すの楽らく椅子いすに凭よりて、心の影そこの其処そこに映ながるを眺ながむらんやうに、その美うき目めをば唯ただ白しろく坦たひらなる天井てんじやうに注つぎたり。

夫おとこの留守くわうしゆにはこの家あへの主ぬしとして、彼かれは事つかふべき舅姑きゆうこを戴いたかず、氣き兼かねすべき小姑こじやうとを抱かかへず、足手絡あしてまとひの幼おときも未まだ有あらずして、一箇ひとりの仲働なかばたらきと両箇ふたりの下婢かひとに万般よろづの煩わづらはしきを委まかせ、一日いちにち何なにの為ためすべき事ことも無なくて、出いづるに車くるまあり、膳ぜんには肉にくあり、しかも言いふことは皆みな聴きれ、為ためすことは皆みな悦よろこばるる夫おとこを持もてるなど、彼かれは今いま若わかき妻つまの黄金時代くわんごんじだいをば夢ゆめむる如ごとく楽たのめるなり。実げに世間よの娘むすめの想おもひに想おもひ、望のぞみに望のぞめる絶頂たつぎは正ただに己おのれのこの身みの上うへなる哉かな、と宮

は不覺胸そぞろに浮べたるなり。

嗟乎ああ、おのれもこの身の上を願ひに願ひし余あまりに、再び得難き

恋人を棄てにしよ。されども、この身の上に窮きはめし樂かなしみも、五年

の昔なりける今日の日に窮きはめし悲かなしみに易かふべきものはあらざりし

を、と彼は苦しげに太息ためいきしたり。今にして彼は始めて悟りぬ。

おのれのこの身の上を願ひしは、その恋人と俱ともに同じき樂たのしみを享

けんと願ひしに外ならざるを。若もし身の樂たのしみと心の樂たのしみとを併享あはせうく

べき幸さちな無くて、必ずその一つを拵えらぶべきものならば、孰いづれを取る

べきかを知ることの晩おそかりしを、遣方やるかたも無く悔ゆるなりけり。

この寒き日をこの煖あたたかき室しつに、この焦るる身をこの意中の人に

並べて、この誠をもてこの恋しさを語らば如何いかに、と思到れる

時、宮ほんは殆ど裂けぬべく胸を苦く覚えて、今の待つ身は待たざ

る人を待つ身なる、その口惜くちをしさを悶もだえては、在るにも在られ

ぬ椅子を離れて、歩み寄りたる窓の外面（とても）を何心無く打見遣（うちみや）れば、

いつしか雪の降出でて、薄白く庭に敷けるなり。一月十七日な

る感（はげし）はいと劇く動きて、宮は降頻（ふりしき）る雪に或言（あることば）を聴くが如く佇（たたず）め

り。折から唯繼（かへりきた）は還来りぬ。静（あ）に啓（あ）けたる闥（ドア）の響（したたか）は絶（したたか）に物思（したたか）へ

る宮の耳には入（い）らざりき。氷の如く冷徹（ひえわた）りたる手をわりなく懐（ふところ）

に差入れらるるに驚（あなや）き、咄嗟（あなや）と見向（あなや）かんとすれば、後（しか）より緊（しか）と

抱（か）へられたれど、夫（かへり）の常（たしな）に飭（たしな）める香水（かをり）の薫（かをり）は隠（かをり）るべくもあらず。

「おや、お帰来（かへり）でございましたか」

「寒かつたよ」

「大相降つて参りました、さぞお困りでしたらう」

「何だか知らんが、むちやくちやに寒かつた」

宮は楽椅子を夫（みづから）に勧めて、躬（みづから）は煖炉（ストーブ）の薪（たきぎ）を煖（く）べたり。今の今

まで貫一（おもひつ）が事を思窮（おもひつ）めたりし心には、夫なる唯繼（おもひつ）にかく事（つか）ふる

も、なかなか道ならぬやうにて屑いさぎよからず覚ゆるなり。窓の外に降る雪、風に乱るる雪、梢しすゑに宿れる雪、庭に布しく雪、見ゆる限の白妙しらたへは、我身に積める人の怨うらみの丈たけかとも思ふに、かくてあることの疚やましき、切なさは、脂あぶらを搾しぼらるるやうにも忍び難かり。されども、この美人の前にこの雪を得たる夫の得意は限無くて、その脚あしを八文字に踏展ふみはだけ、漸やうやく暖まれる頤おとがひを突反つきそらして、「ああ、降る降る、面白い。かう云ふ日は寄鍋よせなべで飲むんだね。寄鍋を取つて貰もらはう、寄鍋が好い。それから珈琲カフヒイを一つ拵こしらへてくれ、コニヤックを些ちと余計に入れて」

宮の行かんとするを、

「お前、行かんでも可いぢやないか、要いる物を取寄せてここで拵こしらへなさい」

彼の電鈴でんれいを鳴して、火の傍そばに寄来ると齊ひとしく、唯繼はその手を

取りて小脇こわきに挟はさみつ。宮みやは憚よろこべる気色も無く、彼の為ために任まかすのみ。

「おまへどうした、何を鬱ふさいでゐるのかね」

引寄せられし宮はほとほとたふと仆たふれんとして椅子いすに支たへられたるを、唯ただ繼ついでは鼻はなも摩するばかりにその顔かほを差さ覗のぞきて余念よねんも無く見入みいりつつ、

「顔かほの色いろが甚はなだ悪いよ。雪ゆきで寒ひやいんで、胸むねでも痛いたむんか、頭痛ずつうでもするんか、さうも無い？ どうしたんだな。それぢや、もつと爽はつきり然りしてくれんぢや困こまるぢやないか。さう陰かげ気きだと情じやう合あひが薄うすいやうに想おもはれるよ。一体いったいお前は夫婦ふうふの情じやうが薄うすいんぢやあるまいかと疑うたがふよ。ええ？ そんなことは無いかね」

忽たちまち闔ドアの啓あくと見れば、仲なか働ばたらぎの命いのちぜし物ものを持もち来きたれるなり。人ひと目を憚はげらずその妻つまを愛あいするは唯ただ繼ついでが常じやうなるを、見み苦くるしと思おもふ宮

はその傍そばを退のかんとすれど、放たざるを例の事として仲働は見ぬ風ふりしつつ、器具ポトルと壇ポトルとをテーブルに置きて、直ちきに退まかり出いでぬ。かく執念しゅうねく愛せらるるを、宮はなかなか憂うくも浅あましくも思ふなりけり。

雪は風を添かきみだへて搔乱かきみだし搔乱かきみだし降頻ふりしきりつつ、はや日暮れなんとするに、楽やうやき夜の漸きたく来れるが最辱いとかたじけなき唯繼いの目尻めじりなり。

「近頃はお前別して鬱おれいでをるやうぢやないか、俺おれにはさう見えるがね。さうして内うちにばかり引籠ひっこんでをるのが宜よろしくないよ。この頃は些ちよつとも出掛いんじゆんけんぢやないか。さう因循いんじゆんしてをるから、益ますます陰気いんきになつて了ふのだ。この間も鳥柴としぼの奥おくさんに会つたら、さう言つてゐたよ。何な為ぜ近頃は奥おくさんは些ちよつともお見えなさらんのだらう。芝居まゐぐらゐにはお出掛いんじゆんになつても可まささうなものだまゐが、全然まゐ影かげも形かたちもお見みせなさらん。なんぼお大事だいじになさるつて、

そんなに仕舞しまひ込んでお置きなさるものぢやございませぬ。慈善の為に少しは衆ひとにも見せてお遣やんなさい、なんぞと非常に遣られたぢやないか。それからね、知つてをる通り、今度の選挙には実業家として福積ふくづみが当選したらう。俺も大おほいに与あづかつて尽力したんさ。それで近日当選祝があつて、それが済す次第しだい別に慰勞会と云ふやうな名で、格別尽力した連中れんじゆうを招待するんだ。その席へは令夫人携帯といふ訳なんだから、是非お前も出なければならぬ。驚くよ。俺の社会では富山の細君と来たら評判なもんだ。会つたことの無い奴まで、お前の事は知つてをるんさ。そこで、俺は実は自慢でね、さう評判になつて見ると、軽々であるしく出行かれるのも面白くない、余り顔を見せん方が見識よが好いけれど、然し、近頃のやうに籠こもつてばかり居をるのは、第一衛生におまへ良くない。実は俺は日曜毎にお前を連れて出たいんさ。おまへ

の来た当座はさうであつたぢやないかね。子供を産んでから、さう、あれから半年ほんとしばかり経つてからだよ。余り出なくなつたのは。それでも随分彼地あちこち此地出たぢやないかね。

善し、珈琲カフヒイ出来たか。うう熱い、旨いうま。お前もお飲み、これを半分以上やうか。沢山だ？ それだからお前は冷淡で可かんと謂ふんさ。ぢや、酒の入らんのを飲むと可い。寄鍋は未かまだ。うむ、彼方あつちに支度がしてあるから、来たと言ひに来る？ それは善い、西洋室の寄鍋なんかは風流でない、あれは長火鉢ながひばちの相對さしむかひに限るんさ。

可いかね、福積の招待しょうだいには吃驚びつくりさせるほど美しくうつくしして出て貰はなけりやならん。それで、着物だ、何か欲ければ早速こしら拵へやう。おまへが、これならば十分と思ふ服装なりで、隆りゆうとして推出すんだね。さうしてお前この頃は余り服装なりにかまはんぢやないか、可

かんよ。いつでもこの小紋の羽織の寐恍けたのばかりは恐れるね。何為あの被風を着ないのかね、あれは好く似合ふにな。

明後日は日曜だ、何処かへ行かうよ。その着物を見に三井へ

でも行かうか。いや、さうさう、柏原の奥さんが、お前の写真を

是非欲いと言つて、会ふ度に聒く催促するんで克はんよ。明日

は用が有つて行かなければならんのだから、持つて行かんと拙

いて。未だ有つたね、無い？ そりや可かん。一枚も無いんか、

そりや可かん。それぢや、明後日写しに行かう。直と若返つて

二人で写すなんぞも可いぢやないか。

善し、寄鍋が来た？ さあ行かう」

夫に引添ひて宮はこの室を出でんとして、思ふところありげ

に姑く窓の外面を窺ひたりしが、

「どうしてこんなに降るのでせう」

「何を下らんことを言ふんだ。さあ、行かう行かう」

### 第三章

宮は既に富むと裕なるとに鑿きぬ。抑も彼がこの家に嫁ぎしは、惑深き娘氣の一凶に、榮耀榮華の欲するままなる身分を願ふを旨とするなりければ、始より夫の愛情の如きは、有るも善し、有らざるも更に善しと、殆ど無用の物のやうに軽めたりき。今やその願足りて、しかも遂に鑿きたる彼は弥よ夤らるる愛情の煩きに堪へずして、寧ろ影を追ふよりも儂き昔の恋を思ひて、私に樂むの味あるを覚ゆるなり。

かくなりてより彼は自ら唯繼の面前を厭ひて、寂く垂籠めては、随意に物思ふを憚びたりしが、凶らずも田鶴見の邸内に貫

一を見しより、彼のさして昔に変わらぬ一介の書生風なるを見しより、一度は絶えし恋ながら、なほ冥々に行末望あるが如く、さるは、彼が昔のままの容なるを、今もその独を守りて、時の到るを待つらんやうに思做さるるなりけり。

その時は果して到るべきものなるか。宮は躬の心の底を叩きて、答を得るに沮みつつも、さすがに又己にも知れざる秘密の潜める心地して、一面には覚束なくも、又一面にはとにもかくにも信ぜらるるなり。

便ち宮の夫の愛を受くるを難堪く苦しと思知りたるは、彼の写真の鏡面の前に悶絶せし日よりにて、その恋しさに取迫めては、いでや、この富めるに贅き、裕なるに倦める家を棄つべきか、棄てよとならば遅はじと思へるも屢々なりき。唯敢てこれを為ざるは、窃に望は繫けながらも、行くべき方の怨を解かざ

るを虞おそるる故ゆゑのみ。

素もとより宮は唯繼を愛せざりしかど、決してこれを憎むとは  
 あらざりき。されど今はしも正にその念は起れるなり。自ら謂おも  
 へらく、吾夫わがをつとこそ当時恋と富との値あたひを知らざりし己を欺むなしき、空  
 く輝ける富を示して、售うるべくもあらざりし恋を奪ひけるよ、  
 と悔の余はかかる恨をも他ひとに被きせて、彼は己おやまを過あやまりしをば、全  
 く夫の罪と為なせり。

この心なる宮はこの一月十七日に会ひて、この一月十七日の  
 雪に会ひて、いとどしく貫一が事の忍しのばるるに就つけて転うたた悪人  
 の夫を厭ふこと甚はなはだしかり。無辜むこの唯繼はかかる今宵の楽たのしみを授さづく  
 の美き妻を拜するばかりに、有程あるほどの誠を捧げて、蜜みつよりも甘き  
 言ことばの数々を呶わやきて止まざれど、宮が耳には人の声は聞えずして、  
 雪の音のみぞいと能よく響きたる。

その雪は明方になりて歇みぬ。乾坤の白きに漂ひて華麗に差  
 出でたる日影は、漲るばかりに暖き光を鋪きて終日輝きければ、  
 七分の雪はその日に解けて、はや翌日は往来の妨碍もあらず、  
 ところどころぬかるみ  
 処々の泥濘は打続く快晴の天に曝されて、刻々に乾き行くなり。  
 この雪の為に外出を封ぜられし人は、この日和とこの道とを  
 見て、皆怵へかねて昨日より出でしも多かるべし。まして今日  
 となりては、手置の宜からぬ横町、不性なる裏通、屋敷町の小路  
 などの氷れる雪の九十九折、或は捏返せし汁粉の海の、差掛り  
 て難儀を極むるとは知らず、見渡す町通の乾々干に固れるに唆  
 かされて、控へたりし人の出でざるはあらざらんやうに、往来  
 の常より頻なる午前十一時といふ頃、屈み勝に疲れたる車夫は、  
 泥の粉衣掛けたる車輪を可惱しげに転して、黒綾の吾妻コオト  
 着て、鉄色縮緬の頭巾を領に巻きたる五十路に近き賤からぬ婦

人を載せたるが、南の方かたより芝飯倉通しばいいぐらとおりに来かかりぬ。

唯とあ有る横町のぼを西に切れて、某なにがしの神社の石の玉垣たまがきに沿ひて、だら

だらと上る道狭く、繁しげき木立じろまじりに南を塞ふさがれて、残れる雪の夥多おびただし

きが泥交どべいに踏散ゆゆされたるを、件くだんの車は曳えい々と挽ひき上げて、取と着つきに

土塀どべいを由々ゆゆしく構かどへて、門かどには電燈かどを掲かたげたる方かたにぞ入いりける。

こは富山唯繼すまひが住居すまひにて、その女客あるじは宮とくが母とくなり。主あるじは疾とくに

会社かへりゆに出勤きたせし後かへりゆにて、例刻きたに来れる髮結かへりゆの今方かへりゆ帰行かへりゆきて、まだ

その跡おほまるわけも掃おほまるわけかぬ程おほまるわけなり。紋羽もんはぶたへ二重にくいろがのこの肉色にくいろがのこ鹿子おほまるわけを掛おほまるわけけたる大円おほまるわけ髻おほまるわけ

より水たは滴たるばかりに、玉たまの如ごとき喉のどを白絹しろきぬのハンカチハンカチイフに巻ま

きて、風邪かぜ気けなどにや、連しきりに打咳うちしほきつつ、宮みやは奥おくより出迎でむかに見み

えぬ。その故ゆゑとも覚あまえず余あまに著しるき面羸おもやつれは、唯ただ一目ひとめに母おどろかが心こころを驚おどろか

せり。

閑ひまある身みなれば、宮みやは月々つきと生家なまなる両親ふたごころを見舞みまひ、母ははも同じおなじ

ほど訪とひ音づるるをば、此上こよ無なき隠居の保養と為るなり。信まことに  
 女親の心は、娘の身の定りて、その家栄え、その身安泰に、し  
 かもいみじう出世したる姿を見るに増して樂まさるる事はあら  
 ざらん。彼は宮を見る毎おほいに大なる手柄をも成したらんやうに吾  
 が識しれるほどの親といふ親は、皆才覚無く、仕合しあはせ薄くて、有様ありよう  
 は氣の毒なる人達哉かな、と漫そぞろに己の誇らるるなりけり。されば月  
 毎に彼が富山の門かどを入るは、正まさに人の母たる成功の凱旋門がいせんもんを過す  
 る心地もすなるべし。

可なつかし懐なつかしきと、嬉なほきと、猶今一つとにて、母は得々いそいそと奥おくに導れぬ。  
 久たれこく垂籠めて友欲すくひき宮は、拯すくひを得たるやうに覚えて、有るまじ  
 き事ながら、或は密ひそかに貫一ひそかの報むらを齎もたらせるにはあらずやなど、枉ま  
 げても念じつつ、せめては愁うれひに閉ぢたる胸むねを姑しばらくも寛ゆるうせんと  
 するなり。

母は語るべき事の日頃蓄へたる数々を措きて、先づ宮が血色きつつかはしの氣遣く衰へたる故を詰りぬ。同じ事を夫にさへ問れしを思合せて、彼はさまでに己の羸やつれたるを懼れつつも、

「さう？　でも、何処どこも悪い所なんぞ有りはしません。余り体あんなまを動かさないから、その所為せゐかも知れません。けれども、この頃は時々氣が鬱ふさいで鬱ふさいで耐たまらない事があるの。あれは血の道と謂いふんでせうね」

「ああ、それは血の道さ。私なんぞも持病にあるのだから、やつぱりさうだらうよ。それでも、それで痩せるやうぢや良くないのだから、お医者に診みてもらふ方が可よいよ、放おつて措おくから畢竟持病にもなるのさ」

宮は唯頷うなづきぬ。

母は不図思起してや、さも慌忙あわただしげに、

「後が出来たのぢやないかい」

宮は打笑うちゑみつ。されども例の可羞はづかしとはあらで傍痛かたはらいたき余を

微見ほのみせしやうなり。

「そんな事はありはしませんわ」

「さう何日いっまでも沙汰さたが無くちや困るぢやないか。本当に未だまそんな様子は無いのかえ」

「有りはしませんよ」

「無いのを手柄にでもしてゐるやうに、何だね、一人はもう無くてどうするのだらう、先へ寄つて御覧、後悔を為るから。本当なら二人ぐらゐ有つて好い時分なのに、あれきり後が出来ないところを見ると、やつぱり体が弱いのだね。今の内養生して、丈夫にならなくちや可けないよ。お前はさうして平気で、いつまでも若くて居る気なのだらうけれど、本宅の方なんぞでも後

が後がつて、どんなに待兼ねてお在だか知れはしないのだよ。内ぢや又阿父おとつさんは、あれはどうしたと謂ふんだらう、情無い奴だ。子を生み得ないのは女の恥だつて、慍おこりきつてゐなざるくらゐだのに、当人のお前と云つたら、可厭いやに落着いてゐるから、憎らしくてなりはしない。さうして、お前は先せんの内は子供が所好すきだつた癖に、自分の子は欲くないのかね」

宮もさすがに当惑しつつ、

「欲くない事はありはしませんけれど、出来ないものは為方が無いわ」

「だから、何でも養生して、体を丈夫にするのが専せんだよ」

「体が弱いとお言ひだけれど、自分には別段ここが悪いと思ふところも無いから、診みてもらふのも変だし……けれどもね、阿母おつかさん、私は疾とつから言はう言はうと思つてゐたのですけれど、実

は氣に懸る事があつてね、それで始終何だか心持が快くないの。その所為で自然と体も良くないのかしらんと思ふのよ」

母のその目は瞪り、その膝は前み、その胸は潰れたり。

「どうしたのさ！」

宮は俯きたりし顔を寂しげに起して、

「私ね、去年の秋、貫一さんに逢つてね……」

「さうかい！」

己だに聞くを憚る秘密の如く、母はその応ふる声をも潜めて、まして四辺には油断もあらぬ氣勢なり。

「何処で」

「内の方へも全然爾來の様子<sup>まるきりあれから</sup>は知れないの？」

「ああ」

「些も？」

「ああ」

「どうしてゐると云ふやうな話も？」

「ああ」

かく纒わづかに応ふるのみにて、母は自ら湧わかせる万感の渦うちの裏うちに陥りてぞゐたる。

「さう？ 阿父おとつさんは内証で知つてお在いでぢやなくて？」

「いいえ、そんな事は無いよ。何処で逢つたのだえ」

宮はその梗概あらましを語れり。聴きる母は、彼の事無くその場を遁のがれ得てし始末つまびらを詳つかにするを俟まちちて、始めて重荷あふらあせを下ししたるやうに哮ほと息を咆つきぬ。實げに彼は熱海の梅園あふらあせにて膩汗あふらあせを搾しぼられし次手ついで悪さを思合せて、憂うれき目を重ねし宮が不幸ふびんを、不愆ふびんとも、惨いぢぢらしとも、今更に親心を傷いたむるなりけり。されども過ぎしその事よりは、為に宮が前途しやうげに一大障礙あるひの或きたは来るべきを案じて、母

はなかなかこころおだやか心穏ならず、

「さうして貫一はどうしたえ」

「お互に知らん顔をして別れて了つたけれど……」

「ああそれから？」

「それきりなのだけれど、私は気になつてね。それも出世して立派なりになつてゐるのなら、さうも思はないけれど、つまらない風采なりをして、何だか大變やぶ羸やぶれて、私も極きまりが悪かつたから、能くは見なかつたけれど、氣の毒のやうに身窄みすぼらしい様子だつたわ。それに、聞けばね、番町の方の鰐淵わにぶちとかいふ、地面や家作なんぞの世話をしてゐる内に使はれて、やつぱり其処そこに居るらしいのだから、好い事は無いのでせう、ああして子供の内から一処いっしょに居た人が、あんなになつてゐるかと思ふと、昔の事を考へ出して、私は何だか情無くなつて……」

彼は襦袢じゆばんの袖そでの端はしに窃そと眚まぶたを拏すりて、

「好い心持はしないわ、ねえ」

「へええ、そんなになつてゐるのかね」

母の顔色あやしも異あやしき寒あやしさにや襲あやしはるると見えぬ。

「それまでだつて、憶出おもひださない事は無いけれど、去年逢あつてか

らは、毎日のやうに氣になつて、可厭いやな夢あやしなんぞを度々たびたび見るの。

阿父おとつさんや、阿母おつかさんに会あふ度に、今度は話さう、今度は話さ

うと思おもひながら、私の口からは何と無く話はなし難にくいやうで、実は

今まで言はずにゐたのだけれど、その事が初中終しよつちゆう苦くになる所せ為み

で氣いたを傷いためるから体たいにも障さるのぢやないかと、さう想おもふのです」

思凝おもひこらせるやうに母は或方あを見据みゑつつ、言ことばは無なくて頷うなづきゐた

り。

「それで、私は阿母あはさんに相談さうだんして、貫一くわんいちさんをどうかして上げ

たいの——あの時にそんな話も有つたのでせう。さうして依旧やしほり 鴨沢しぎさわの跡は貫一とらさんに取とりて下くださいよ、それでなくては私の氣が済まないから。今までは行方ゆきがたが知れなかつたから為方ながないけれど、聞合こつちせれば直ちきに分わかるのだから、それを抛なつて措おいぢや此方こつちが悪いから、阿父おやさんにでも会あつて貰もらつて、何とか話を付けるやうにして下くださいな。さうして従来通これまでどほりに内うちで世話世話をして、どんなにもあの人の目的を達たしきして、立派りつぱに吾家うちの跡を取とりて下ください。私はさうしたら兄弟さかづきの盃さかづきをして、何処どこまでも生家さとの兄あにさんで、未始終力こゝろになつて欲ほいわ」

宮みやがこの言ことばは決して内うちに自ら欺あざむき、又敢またて外ひとに他ひとを欺あざむくにはあらざりき。影かげとも儂はかなく隔へだての関かんの遠とほき恋人こゝろとして余所よそに朽くさんより、近ちかき他人たにんの前に己おのれを殺ころさんぞ、同おなく受うくべき苦痛くるしみならば、その忍しのび易やすきに就つかんと冀こひねがへるなり。

「それはさうでもあらうけれど、随分考へ物だよ。あのひとの事なら、内でも時々話が出て、何処にどうしてゐるかしらんつて、案じないぢやないけれど、阿父さんも能くお言ひのさ、如何に何だつて、余り貫一の仕打が憎いつて。成程それは、お前との約束ね、それを反古にしたと云ふので、齡の若いもの事だから腹も立たう、立たうけれど、お前自分の身の上も些は考へて見るが可いわね。子供の内からあして世話になつて、全く内のお蔭でともかくもあれだけにもなつたのぢやないか、その恩も有れば、義理も有るのだらう。そこ所を些と考へたら、あれぎり家出をしてふなんて、あんなまあ面抵がましい仕打振をするつてが有るものかね。

それぢやあの約束を反古にして、もうお前には用は無いからどうでも独ひとりで勝手に為るが可い、と云ふやうな不人情なことを

仮初かりそめにも為たのぢやなし、鳴沢の家は譲らうし、所望のぞみなら洋行も為させやうとまで言ふのぢやないか。それは一時は腹も立たうけれど、好く了簡して前後を考へて見たら、万更訳の解らない話をしてゐるのぢやないのなもの、私達の顔を立ててくれたつて、そんなに罰ばちも当りはしまいと思ふのさ。さうしてお剩まけに、阿父さんから十分に訳を言つて、頭を低さげないばかりにして頼んだのぢやないかね。だから此方こつちには少しも無理は無はずい筈だのに、貫一あんまが余り身の程を知らな過すぎるよ。

それはね、阿父さんが昔あの人おんがへしの親の世話になつた事があるさうさ、その恩返ゆきどこなら、行処ゆきどこの無い軀からだを十五の時から引取つて、高等学校を卒業するまでに仕上げたから、それで十分だらうぢやないか。

全く、お前、貫一の為方しかたは増長してゐるのだよ。それだから、

阿父さんだつて、私だつて、ああされて見ると決して可愛くはないのだからね、今更此方から捜出して、とやかう言ふほどの事はありはしないよ。それぢや何ぼ何でも不見識とやらぢやないか」

その不見識とやらを嫌ふよりは、別に嫌ふべく、懼るべく、警むべき事あらずや、と母は私に慮れるなり。

「阿父さんや阿母さんの身になつたら、さう思ふのは無理も無けれど、どうもこのままぢや私が気が済まないんですもの。

今になつて考へて見ると、貫一さんが悪いのでなし、阿父さん阿母さんが悪いのでなし、全く私一人が悪かつたばかりに、貫一さんには阿父さん阿母さんを恨ませるし、阿父さん阿母さんには貫一さんを悪く思はせたのだから、やつぱり私が仲へ入つて、元々通に為なければ済まないと思ふんですから、貫一さん

の悪いのは、どうぞ私に免じて、今までの事は水に流して了つて、改めて貫一さんを内の養子にして下さいな。若しさうなれば、私もそれで苦勞が滅なくなるのだから、きつと体も丈夫になるに違無いから、是非さう云ふ事に阿父さんにも頼んで下さいな、ねえ、阿母さん。さうして下さらないと、私は段々体を悪くするわ」

かく言出でし宮が胸は、ここに尽ことごとくその罪を懺悔ざんげしたらんやうに、多少の涼きを覚ゆるなりき。

「そんなに言ふのなら、還かへつて阿父さんに話をして見やうけれど、何もその所せ為みで体が弱くなると云ふ訳も無かりさうなものぢやないか」

「いいえ、全くその所為よ。始終そればかり苦になつて、時々考たま込むと、実に耐たまらない心持になることがあるんですもの、この間

逢ふ前まではそんなでもなかつたのだけれど、あれから急に——  
 さうね、何と謂いつたら可いのだらう——私があんなに不仕合ふしあはせな  
 身分にして了しまつたとさう思つて、さぞ恨んでゐるだらうと、気  
 の毒のやうな、可恐おそろしいやうな、さうして、何と無く私は悲くて  
 ね。外ほかには何も望は無いから、どうかあの人だけは元のやうに  
 して、あの優しい気立で、末始終阿父さんや阿母さんの世話をし  
 て貰つたら、どんなに嬉うれしからうと、そんな事ばかり考へては鬱ふさ  
 いであるのです。いづれ私からも阿父さんに話をしますけれど、  
 差当さしあたり阿母さんから好くこの訳をさう言つて、本当に頼んで下さ  
 いな。私二三日の内にいきますから」

されども母は投首なげくびして、

「私の考かん量がへぢや、どうも今更ねえ……」

「阿母さんは！ 何もそんなに貫一さんを悪く思はなくたつて

可いわ。折角話をして貰はうと思ふ阿母さんがさう云ふ気ぢや、とても阿父さんだつて承知をしては下さるまいから……」

「お前がそれまでに言ふものだから、私は不承知とは言はないけれど……」

「可いの、不承知なのよ。阿父さんもやつぱり貫一さんが憎くて、大方不承知なんでせうから、私は憑<sup>あ</sup>扱<sup>て</sup>にはしないから、不承知なら不承知でも可いの」

涙<sup>なみだぐ</sup>含<sup>こ</sup>みつつ宮<sup>みや</sup>が焦<sup>せき</sup>心<sup>しころ</sup>になれるを、母は打惑<sup>うたご</sup>ひて、

「まあ、お聞きよ。それは、ね、……」

「阿母さん、可いわ——私、可いの」

「可<sup>よ</sup>かないよ」

「可<sup>よ</sup>かなくつても可いわ」

「あれ、まあ、……何だね」

「どうせ可いわ。私の事はかまつてはおくれでないのだから……」  
我にもあらでほとぼし迸る泣声を、つと袖におさ抑へても、宮は急来せきくる涙を止めかねたり。

「何もお前、泣くことは無いぢやないか。可笑をかな人だよ、だからお前の言ふことは解つてゐるから、内へ帰つて、善く話をした上で……」

「可いわ。そんなら、さうで私にもりようけん了簡があるから、どうとも私は自分で為るわ」

「自分でそんな事を為るなんて、それは可くないよ。かう云ふ事は決してお前が自分で為ることぢやないのだから、それは可けませんよ」

「……………」

「帰つたら阿父おとつさんに善く話を為やうから、……泣くほどの事

は無いちやないかね」

「だから、阿母おつかさんは私の心を知らないのだから、頼効たのみがひが無い、と謂いふのよ」

「多度たんとお言ひな」

「言ふわ」

真顔作れる母は火鉢ひばちの縁ふちに丁とんと煙管きせるを撃はたけば、他行持よそゆきもちの暫しばらく乾からされて弛ゆるみし雁首がんくびはほつくり脱けて灰の中に舞込みぬ。

#### 第四章

頭部に受けし貫一くわんいちが挫傷ざしやうは、危あやふくも脳膜炎のうまくえんを続発せしむべかりしを、肢体したいに数個所すかしよの傷部きずぶとともに、その免るべからざる若干そくばくの疾患しんげんを得たりしのみにて、今や日増に康復かうふくの歩を趁おひて、可艱なやま

しげにも自ら起居を扶け得る身となりければ、一日一夜を為す事も無く、ベッドの上に静養を勉めざるべからざる病院の無聊をば、殆ど生きながら葬られたらんやうに倦み困じつつ、彼は更にこの病と相関する如く、関せざる如く併発したる別様の苦悩の為に侵さるるなりき。

主治医も、助手も、看護婦も、附添婆も、受附も、小使も、乃至患者の幾人も、皆目を側めて彼と最も密なる関係あるべきを疑はざるまでに、満枝の頻繁病を訪ひ来るなり。三月にわたる久きをかの美き姿の絶えず出入するなれば、噂は自から院内に播りて、博士の某さへ終に唆されて、垣間見の歩をここに枉げられしとぞ伝へ侍る。始の程は何者の美形とも得知れざりしを、医員の中に例の困められしがありて、名著の美人クリイムと洩せしより、いとど人の耳を驚かし、目を悦す種とはなりて、

貫一が浮名もこれに伴ひて唱はれけり。

さりとは彼の暁るべき由無けれど、何の廉もあらむに足近く訪はるるを心憂く思ふ余に、一度ならず満枝に向ひて言ひし事もありけれど、見舞といふを陽にして訪ひ来るなれば、理として好意を拒絶すべきにあらず。さは謂へ、こは情の掛※と知れば、又甘んじて受くべきにもあらず、しかのみならで、彼は素より満枝の為人を悪みて、その貌の美きを見ず、その思切なるを汲まんともせざるに、猶かつ主ある身の謬りて仇名もや立たばなど氣遣はるるに就けて、貫一は彼の入来るに会へば、冷き汗の湧出づるとともに、創所の遽に疼き立ちて、唯異くも己なる者の全く痺らさるるに似たるを、吾ながら心弱しと尤むれども効無かりけり。実に彼は日頃この煩を逃れん為に、努めてこの

敵を避けてぞ過せし。今彼の身は第二医院の一室に密封せられて、しかも隠るる所無きベッドの上に横はれれば、宛然俎板上れる魚の如く、空く他の為すに委するのみなる仕合を、搔撈らんとばかりに悶ゆるなり。

かかる苦き枕頭に彼は又驚くべき事実を見出しつつ、翻へつて己を顧れば、測らざる累の既に逮べる迷惑は、その藁蒲団の内に針の包れたる心地して、今なほ彼の病むと謂はば、恐くは外に三分を患ひて、内に却つて七分を憂ふるにあらざらんや。貫一もそれをこそ懸念せしが、果して鰐淵は彼と満枝との間を疑ひ初めき。彼は又鰐淵の疑へるに由りて、その人と満枝との間をも略推し得たるなり。

例の煩き人は今日も訪ひ来つ、しかも仇ならず意を籠めたりと覚き見舞物など持ちて。はや一時間余を過せども、彼は枕頭

に起ちつ、居つして、なかなか帰り行くべくも見えず。貫一は  
 よせつ 寄付けじとやうに彼方あなたを向きて、覚めながら目を塞ふさぎていと静  
 に臥ふしたり。附添つきそひ婆の折ひから出行いできしを候うかひて、満枝は椅子を  
 躡にじり寄せつつ、

「間はまさん、間はまさん。貴方あなた、貴方あなた」

と枕はしの端を指もて音なへど、眠れるにもあらぬ貫一は何の答  
 をも与へず、満枝は起ちてベッドの彼方あなたへ廻り行きて、彼の寐顔ねがほ  
 を差覗さしのぞきつ。

「間まさん」

猶答へざりけるを、軽く肩あたりの辺うじかを撼ゆせば、貫一はさるをも知  
 らざる為まねはしかねて、始めて目を開きぬ。彼はかく覚めたれど、  
 満枝はなほ覚めざりし先の可懐なつかしげに差寄りたる態かたちを改めずし  
 て、その手を彼の肩に置き、その顔を彼の枕に近けたるまま、

「わたくし私貴方に此とお話をして置かなければならない事があるのでございますから、お聞き下さいまし」

「あ、まだ在しつたのですか」

「いつも長居を致して、さぞ御迷惑でございませう」

「……………」

「外でもございませませんが……………」

彼の隔無く身近に狎るるを可忌しと思へば、貫一はわざと寐返りて、椅子を置きたる方に向直り、

「どうぞ此方へ」

この心を曉れる満枝は、飽くまで憎き事為るよと、持てるハシカチイフにベッドを打ちて、かくまでに遇はれながら、なほこの人を慕はでは已まぬ我身かと、効無くも余に軽く弄ばるるを可愧うて佇みたり。されども貫一は直に席を移さざる満枝の

為に、再び言を費さんとも為ざりけり。

氣嵩きがさなる彼は胸に余して、聞えよがしに、

「ああ、貴方には軽蔑けいべつされてゐる事を知りながら、何為私腹なげわたくしを立てることが出来ないのでせう。実に貴方は！」

満枝は彼の枕を捉とらへて顫ふるひしが、貫一の寂然せきぜんとして眼まなこを閉ぢたるに益ますます苛いらだちて、

「あんま、酷ひどうございますよ。間さん、何とか有仰おつしやつて下さいましな」

彼は堪へざらんやうに苦にがりたる口元を引歪ひきゆがめて、

「別に言ふ事はありません。第一貴方のお見舞下さるのは難有ありがた

迷惑めいわくで……」

「何と有仰おつしやいます！」

「以来はお見舞にお出で下さるのを御辞退します」

「貴方、何と……!!」

満枝は眉を昂あげて詰寄せたり。貫一は仰まなこぎて眼を塞ふたぎぬ。

素もとより彼の無愛相なるを満枝は知れり。彼の無愛相の己おのれに對

しては更に甚はなはだしきを加ふるをも善く知れり。満枝が手管てくだは、今そ

の外おもてに顯あらはせるやうに決けして内に怵こらへかねたるにはあらず、かく

してその人と諍いさかふも、また慚かなはざる恋の内に聊いさか楽おのむ道なるを

思おもへるなり。涙微紅ほのあかめたる眸まぶたに耀かがやきて、いつか宿せる暁あかつきの葩はなびらに

露しとどの津とど々なる。

「お内にも御病人の在るのに、早く帰つて上げたが可いぢやあ

りませんか。私わたくしも貴方に度々たびたび来て戴おんくのは甚はなはだ迷惑まどなのですか

ら」

「御迷惑は始から存じてをります」

「いいや、未だ外にこの頃があるのです」

「ああ！ 鰐淵さんの事ではございませんか」

「まあ、さうです」

「それだから、私お話が有ると申したのではございませんか。それを貴方は、私と謂ふと何でも鬱陶うつとしがつて、如何いかに何でもそんなに作るものぢやございませんよ。その事ならば、貴方が御迷惑遊ばしてゐらつしやるばかりぢやございません。私だつてどんなに窮こまつてをるか知れば致しません。この間も鰐淵さんが可厭いやなことを有仰おつしやつたのです。私些ちつともかまひは致しませんけれど、さうでもない、貴方がこの先御迷惑あそばすやうな事があつてはと存じて、私それを心配致してをるくらゐなのでございます」

聴みざるにはあらねど、貫一は絶えて応答うけこたへだに為せざるなり。

「実は疾とつからお話を申さうとは存じたのでございますけれど、

そんな可厭いやな事を自分の口から吹聴らしく、却かへつて何も御存じ  
 ない方が可いからうと存じて、何も申上げずにをつたのでござい  
 ますが、鰐淵さん様のかれこれ有おつしや仰るのは今に始つた事ではないの  
 で、もう私実こまに窮こまつてをるのでございます。始終好い加減なこ  
 とを申しては遁にげてをるのですけれど、鰐淵さんは私が貴方を  
 こんなに……と云ふ事は御存じなかつたのですから、それで済  
 んでをりましたけれど、貴方が御入院あそばしてから、私かう  
 して始終お訪ね申しますし、鰐淵さんも頻しげしげ繁しげいらつしやるので、  
 度々たびたびお目に懸るところから、何とかお想ひなすつたのでござい  
 ませう。それで、この間は到頭それを有おつしや仰つて、訳が有るなら  
 有るで、隠さずに話をしろと有仰おつしやるのぢやございませんか。私  
 為方ありませんから、お約束をしたと申してしま了しまひました」  
 「え！」と貫一は繃ほうたい帯たいしたる頭を擡もたげて、彼の有したりがほ為ほ顔を赦ゆるし難

く打目<sup>うちまも</sup>戍<sup>し</sup>れり。満枝<sup>みんぎ</sup>はさすが過<sup>あやまち</sup>を悔<sup>あやま</sup>いたる風情<sup>ふうせい</sup>にて、やをら左<sup>ひだり</sup>の袂<sup>たもと</sup>を膝<sup>ひざ</sup>に搔<sup>かき</sup>載<sup>の</sup>せ、牡丹<sup>ぼたん</sup>の荅<sup>つぼみ</sup>の如<sup>ごと</sup>く揃<sup>そろ</sup>へる紅絹<sup>もみうら</sup>裏<sup>うら</sup>の振<sup>ふり</sup>を弄<sup>まさぐ</sup>りつ、彼の咎<sup>とがめ</sup>を懼<sup>おそ</sup>るる目遣<sup>めづかひ</sup>してゐたり。

「実に怪<sup>け</sup>しからん！ ※<sup>ばか</sup>なことを有<sup>おつしや</sup>仰<sup>おつしや</sup>つたものです」  
萎<sup>しを</sup>るる満枝<sup>みんぎ</sup>を尻目<sup>しりめ</sup>に掛<sup>か</sup>けて、

「もう可<sup>か</sup>いから、早<sup>はや</sup>くお還<sup>かへ</sup>り下<sup>くだ</sup>さい」

彼<sup>か</sup>を喝<sup>かつ</sup>せし怒<sup>いかり</sup>に任<sup>まか</sup>せて、半起<sup>なかば</sup>したりし体<sup>たい</sup>を投倒<sup>なげお</sup>せば、腰部<sup>ようぶ</sup>の創所<sup>きずしよ</sup>を強<sup>つよ</sup>く抵<sup>あ</sup>てて、得堪<sup>えた</sup>へず呻<sup>うめ</sup>き苦<sup>くる</sup>むを、不意<sup>ふい</sup>なりければ満枝<sup>みんぎ</sup>は殊<sup>こと</sup>に惑<sup>まど</sup>ひて、

「どう遊<sup>あそ</sup>ばして？ 何処<sup>どこ</sup>ぞお痛<sup>いた</sup>みですか」

手早<sup>てはや</sup>く夜着<sup>よぎ</sup>を揚<sup>あ</sup>げんとすれば、払退<sup>はらひの</sup>けて、

「もうお還<sup>かへ</sup>り下<sup>くだ</sup>さい」

言放ちて貫一は例の背を差向けて、そひら遽にはかに打鎮うちしづまりゐたり。

「わたくし私還りません！ 貴方がさう酷く有仰おつしやれば、以上還りません。

いつまでも居られる軀からだではないのでございますから、おとなし順く還る

やうにして還して下さいまし」

いとほしたなくて立てる満枝は闔ドアの啓あくに驚かされぬ。入来いりきた

れるは、つきそひばほ附添婆か、あらず。看護婦か、あらず。国手ドクトルの回診か、

あらず。小使か、あらず。あらず！

胡麻塩羅紗ごましほらしやの地厚にじゆうまわしなる二重外套まとを絡かへる魁肥かいひの老紳士ゆうぜんは悠然

として入来いりきたりしが、内の光景ありさまを見ると齊ひとしく胸悪むねわるき色はつとその

面おもてに出いでぬ。満枝は心こころに少すこく慌あわてたれど、さしも頭あたまさで、雍しとやか

に小腰こしやを屈かがめて、

「おや、お出いであそばしまし」

「ほほ、これは、毎度お見舞下みまひさつて」

同く慇懃いんぎんに会釈くわいせきはすれど、疑も無く反対の意を示せる金壺眼かなつぼまなこ  
 は光たかましを逞たくまう女の横顔を瞥見べつけんせり。静に臥ふしたる貫一は発作パロキシマの来きた  
 れる如き苦悩を感じつつ、身を起して直行ただゆきを迎ふれば、

「どうぢやな。好ええ方がお見舞に來てをつて下さるで、可ええの」

うちつけ

打付うちつけに過ぎし言ことばを二人ともに快からず思へば、頓とみに答いらへは無く

て、その場の白しろけたるを、さこそと謂いはんやうに直行ひとの独り笑

ふなりき。如何いかに答ふべきか。如何に言いひ釈とくべきか、如何に処

すべきかを思煩おもひわづらへる貫一は艱むづかしげなる顔を稍内やや向けたるに、今

はなかなか悪わる怖びれもせで満枝は椅子の前なる手炉てあぶりに寄りぬ。

「然しお宅の御都合もあるぢやらうし、又お忙せはしいところを度々

お見舞下されては痛いた入みります。それにこれの病氣も最早よ快ような

るばかりじやで御心配には及ばんで、以来お出いで下さるのは何

分お断り申しまする」

言黒めたる邪魔立を満枝は面憎がりて、

「いいえ、もうどう致しまして、この御近辺まで毎々次手があ  
りますのでございますから、その御心配には及びません」

直行の眼は再び輝けり。貫一は懋に彼を窘めじと、傍より言  
を添へぬ。

「毎度お訪ね下さるので、却つて私は迷惑致すのですから、ど  
うか貴方から可然御断り下さるやうに」

「当人もお気の毒に思うてあの様に申すで、折角ではあります  
けど、決して御心配下さらんやうに、のう」

「お見舞に上りましてはお邪魔になります事ならば、私差控  
へませう」

満枝は色を作して直行を打見遣りつつ、その面を引廻して、  
やがて非ぬ方を目成りたり。

「いや、いや、な、決して、そんな訳ぢや……」

「余あんなりな御挨拶で！ 女おぼしめだと思召おつしやして有仰おつしやるのかは存じませんが、それまでのお指図さしづは受けませんで宜よろしうございます」

「いや、そんなに悪はなはう取られては甚はなはだ困る、畢竟ひつきよう貴方あんなの為を思おもひますじやに困よつて……」

「何と有仰おつしやいます。お見舞みまわに出いますのが、何なで私わたしの不ふ為ためになるのでございませう」

「それにお心着こころづきが無い？」

その能く用もちゐる微笑わらわを弄ろうして、直行たたくは巧くみに温顔ぬくもを作つくれるなり。  
満枝みづえは稍急ややせきた立ちぬ。

「ございませぬ」

「それは、お若いでさう有あらう。甚ただ失敬しつげながら、すいぢや申まをして見みやう。な。貴方あなたもお若いや間まも若い。若い男おとこの所ところへ若わか

い女子をなじが度々出入でいりしたら、そんな事は無うても、人がかれこれ言やすひ易い、可ええですか、そしたら、間はとにかくじや、赤檉あかがしさん様と云ふ者のある貴方の軀からだに疵きずが付く。そりや、不為ぢやありませんまいか、ああ」

陰おのれには己自ら更はなはだしに甚しき不為しを強しひながら、人の口といふものかくまでに重宝おのれなるが可笑をかし、と満枝は思ひつつも、

「それは御深切ありがたに難有ありがたう存あじます。私はとにかく、間さんはこれからうつくしお美しい御妻君をお持ち遊あそばす大事のお軀からだでゐらつしやるのを、私のやうな者の為に御迷惑遊あそばすやうな事が御座あいましては何とも濟あみませんですから、私これから自今慎つつしみますでございませう」

「これは太えらい失敬なことを申しましたに、早速お用うそひななさつて難有あい。然し、間も貴方のやうな方と嘘うそにもかれこれいは言いはるるんぢやから、どんなにも嬉うれしいぢやらう、私われのやうな老人ぢやつた

ら、死ぬほどの病氣したて、赤檜さんは訪ねても下さりや為すま  
いにな

貫一は苦々しさに聞かざる為まねしてゐたり。

「そんな事が有るものでございますか、お見舞に上りますとも」

「さやうかな。然し、こんなに度々来ては下さりやすまい」

「それこそ、御妻君が在みらつしやるのですから、余り頻しげしげ繁上りま  
すと……」

後は得言はで打笑める目元の媚こび、ハンカチーフを口蔽くちおほひにした  
る羞はぢがま含しきなど、直行はふと目を奪はれて、飽かず覚ゆるなり  
き。

「はッ、はッ、はッ、すぢや細君が無いで、ここへは安心して  
お出いでかな。私わしは赤檜さんの処へ行つて言ひますぞ」

「はい、有仰おつしやつて下さいまし。私わたくし此方こなたへ度々お見舞に出ます

ことは、宅でも存じてをるのでございますから、唯今も貴方あなたから御注意を受けたのでございますが、私も用を抱へてをる体でかうして上りますのは、お見舞に出なければ濟まないと考へまする訳がございますからで、その実、上りますれば、間かへさんは却つて私の伺ふのを懊惱うるさく思召おぼしめしてゐらつしやるのですから、それは私のやうな者が余り参つてはお目障めざはりか知れませぬけれど、外の事ではなし、お見舞に上るのでございますから、そんなに作ならなくても宜よろいではございませんか。

然し、それでも私氣わがに懸つて、かうして上るのは、でござい  
ます、宅たくへお出いでになつた御帰途おかへりみちにこの御怪我おけがなんぞございませ  
う。それに、未まだ私濟みません事は、あの時大通の方をお帰り  
あそばすと有仰つたのを、津守坂つのかみざかへお出いでなさる方がお近いとさ  
う申してお勧め申すと、その途みちでこの御災難でございませう。

で私考へるほど申訳が無くて、宅でも大相氣に致して、勉めてお見舞に出なければ濟まないと申すので、その心持で毎度上るのでございますから、唯今のやうな御忠告を伺ひますと、私実に心外なのでございます。そんなにして上れば、間さんは間さんでお喜よろこびが無いのでございませう」

彼はいと辛つらしとやうに、恨うらめしとやうに、さては悲しとやうにも直行を視みるなりけり。直行は又その辛し、恨し、悲しとやうの情に堪へざらんとする満枝が顔をば、窃ひそかに金壺眼かなつばまなこの一角とろろかを溶しながめいつつ眺入るながめいにぞありける。

「さやうかな。如何いかさま、それで善う解りましたじや。太えらい御深切な事で、間もさぞ満足ぢやらうと思ひます。又私わしからも、そりや厚うお礼を申しまするじや、で、な、お礼はお礼、今の御忠告は御忠告じや、悪う取つて下さつては困る。貴方がそん

なに念うて、毎々お訪ね下さると思や、私も実に嬉しいで、折角の御好意をな、どうか卻るやうな、失敬なことは決して言ひたうはないんじや、言ふのはお為を念ふからで、これもやつぱり年寄役なんぢやから、捨てて措けんで。年寄と云ふ者は、これとかく嫌はるるじや。貴方もやつぱり年寄はお嫌ひぢやらう。ああ、どうですか、ああ」

赤髭あかひげを拵ひねり拵りて、直行は女の気色けしきを偷視ぬすみみつ。

「さやうでございます。お年寄は勿論結構もちろんでございますけれども、どう致しても若いものは若い同士の方が気が合ひまして宜いやうでございますね」

「すぢやて、お宅の赤檜さんも年寄でせうが」

「それでございますから、もうもう口喧くちやかましくてなりませんのです」

「ぢや、口喧くちやかましうも、気難きむづかしうもなうたら、どうありますか」

「それでも私好きませんでございますね」

「それでも好かん？ 太う嫌うたもんですな」

「尤も年寄だから嫌ふ、若いから一概に好くと申す訳には参りませんでございます。いくら此方から好きましても、他で嫌はれましては、何の効もございませんわ」

「さやう、な。けど、貴方のやうな方が此方から好いたと言うたら、どんな者でも可厭言ふ者は、そりや無い」

「あんな事を有仰つて！ 如何でございますか、私そんな覺はございませんから、一向存じませんでございます」

「さやうかな。はッはッ。さやうかな。はッはッはッ」

椅子も傾くばかりに身を反して、彼はわざとらしく揺上げ揺上げて笑ひたりしが、

「間、どうぢやらう。赤檉さんはああ言うてをらるるが、さう

かの」

「如何いかがですか、さう云ふ事は」

誰たれか烏からすの雌雄しゆうを知らんとやうに、貫一は冷然として嘯うそいけり。

「お前も知らんかな、はッはッはッはッ」

「私が自分にさへ存じませんものを、間さんが御承知有らう筈はずはございませぬわ。ほほほほほほほほ」

そのわざとらしさは彼にも遜ゆづらじとばかり、満枝は笑ひ囃はやせり。

直行が眼まなこは誰を見るときも無くて独り耀かがやけり。

「それでは私もうお暇いとまを致します」

「ほう、もう、お帰去かへりかな。私わしもはや行かん成らんで、其所そこまで御一処ごいちよに」

「いえ、私わし些ちよつと、あの、西黒門町にしくろもんちよへ寄りますでございませぬから、

甚だ失礼でございますが……」

「まあ、宜い。其処まで」

「いえ、本当に今日は……」

「まあ、宜いが、実は、何じや、あの旭座の株式一件な、あれがつい纏りさうぢやで、この際お打合をして置かんと、『琴吹』の収債が面白うない。お目に掛つたのが幸ぢやから、些とそのお話を」

「では、明日にでも又、今日は些と急ぎますでございませうから」

「そんなに急にお急ぎにならんでも宜いがな。商売上には年寄も若い者も無い、さう嫌はれてはどうもならん」

「姑く推問答の末彼は終に満枝を拉し去れり。迹に貫一は悪夢の覚めたる如く連に太息呟いたりしが、やがて為ん方無げに枕に就きてよりは、見るべき物もあらぬ方に、止だ果無く目を奪

れるたり。

## 第五章

檜葉ひば、椈もみなどの古葉貧しげなるを望むべき窓の外に、庭とも  
あらず打荒れたる広場は、唯麗うららかなる日影のみぞ饒ゆたかに置余おきあまして、  
そこらの梅の点々ぼちぼちと咲初めたるも、自ら怠り勝おのづかに風情ふぜい作らずと  
見ゆれど、春の色香いろかに出でたるは憐あはれむべく、打霞うちかすめる空に來馴きな  
るる鶉ひよのいとどしく鳴頻なきしきりて、午後二時を過ぎぬる院内の寂々せきせき  
たるに、たまたま響くは患者の廊下を緩ゆるう行くなり。  
枕の上の徒然つれづれは、この時人を圧おさして殆ど重きを覚えしめんと  
す。書見せると見えし貫一からは辛うじて夢を結びゐたり。彼は実げ  
に夢ならでは有得べからざる怪あやしき夢もてあそに弄みづからばれて、躬も夢と知り、

夢と覚さんとしつつ、なほ睡の中に囚れしを、端無く人の呼ぶ  
おどろかに駭されて、漸く慵き枕を欹てつ。  
がくぜん

愕然として彼は瞳を凝せり。ベッドの傍に立てるは、その怪  
ひとみ

き夢の中に顕れて、終始相離れざりし主人公その人ならずや。  
あらは

打返し打返し視れども訪来れる満枝に紛あらざりき。とは謂へ、  
み  
とひきた  
まぎれ

彼は夢か、あらぬかを疑ひて止まず。さるはその真ならんより  
うち

なほ夢の中なるべきを信ずるの当れるを思へるなり、美しさも  
あたり

常に増して、夢に見るべき姿などのやうに四辺も可輝く、五六歳  
かがやかし

ばかりも若ぎて、その人の妹なりやとも見えぬ。まして、六十路  
むそぢ

に余れる夫有てる身と誰かは想ふべき。  
つまも  
たれ

髪を台湾銀杏といふに結びて、飾としてはわざと本甲蒔絵の櫛の  
たいわんいちよう  
かざり  
ほんこうまきゑ  
くし

みを挿したり。黒縮緬の羽織に夢想裏に光琳風の春の野を色入  
くろぢりめん  
むそうらら  
こうりんふう  
いろいり

に染めて、納戸縞の御召の下に濃小豆の更紗縮緬、紫根七糸に  
なんどじま  
こいあづき  
さらさぢりめん  
しこんしちん

楽器<sup>がつきつくし</sup>尽<sup>つ</sup>の昼夜帯<sup>ちゆうやたい</sup>して、半襟<sup>はんえり</sup>は色系<sup>しきゑい</sup>の縫<sup>ぬい</sup>ある肉色<sup>にくしき</sup>なるが、頸<sup>えり</sup>の白<sup>しろ</sup>きを匂<sup>にお</sup>はすやうにて、化粧<sup>けしょう</sup>などもやや濃<sup>の</sup>く、例<sup>れい</sup>の腕環<sup>わんわん</sup>のみは燦爛<sup>ざんざん</sup>と煩<sup>うるさ</sup>し。今日<sup>けふ</sup>は殊<sup>こと</sup>に推<sup>お</sup>して来<sup>き</sup>にけるを、得堪<sup>えた</sup>へず心<sup>こころ</sup>の尤<sup>とが</sup>むらん風情<sup>ふうせい</sup>にて佇<sup>たたず</sup>める姿<sup>すがた</sup>限<sup>かぎ</sup>無<sup>な</sup>く嬌<sup>なまめ</sup>きて見<sup>み</sup>ゆ。

「お寝<sup>やすみ</sup>のところを飛<sup>と</sup>んだ失礼<sup>しつれい</sup>を致<sup>いた</sup>しました。私<sup>わたくし</sup>上<sup>あ</sup>る筈<sup>はず</sup>ではないのでございますけれど、是非<sup>ぜひ</sup>申<sup>ま</sup>上げなければなりません事<sup>こと</sup>がございますので、些<sup>ちよつ</sup>と伺<sup>うかが</sup>ひましたのでございますから、今日<sup>こんにち</sup>のところはどうか御堪<sup>ごかん</sup>忍<sup>にん</sup>あそばして」

彼の許<sup>ゆるし</sup>を得<sup>え</sup>んまでは席<sup>せき</sup>に着<sup>き</sup>くをだに憚<sup>はばか</sup>る如<sup>ごと</sup>く、満枝<sup>まんぢ</sup>は漂<sup>ただよ</sup>しげになほ立<sup>た</sup>てるなり。

「はあ、さやうですか。一昨<sup>いちさく</sup>々<sup>さ</sup>日<sup>にち</sup>あれ程<sup>ほど</sup>申<sup>ま</sup>上げたのに……」  
内に燃<sup>も</sup>ゆる憤<sup>いかり</sup>を抑<sup>おさ</sup>ふるとともに貫<sup>くわん</sup>一<sup>いつ</sup>の言<sup>ことば</sup>は絶<sup>た</sup>えぬ。

「鰐淵<sup>わいえん</sup>さんの事<sup>こと</sup>なのでございますの。私<sup>わたくし</sup>困<sup>こ</sup>りましたして、どういた

したら宜いのでございませう……間さん、かうなのでございませよ」

「いや、その事なら伺ふ必要は無いのです」

「あら、そんなことを有仰らずに……」

「失礼します。今日は腰の傷部が又痛みますので」

「おや、それは、お劇いことはお在なさらないのでございませか」

「いえ、なに」

「どうぞお楽に在しつて」

貫一は無雑作に郡内縞の搔卷引被けて臥しけるを、疎略あら

せじと満枝は勤篤に冊きて、やがて己も始めて椅子に倚れり。

「貴方の前でこんな事は私申上げ難いのでございませけれど、

実は、あの一昨々日でございますね、ああ云ふ訳で鰐淵さんと

御一処おっしやに参りましたところが、御飯を食べるから何でも附合へと有仰おっしやるので、湯島ゆしまの天神の茶屋へ寄りましたのでございます。さう致すと、案の定可厭いやらしい事をもうもう執濃しつこく有仰るのでございます。さうして飽くまで貴方の事を疑うたぐつて、始終それを有仰るので、私一番それには困りました。あの方もお年効としがひの無い、物の道理がお解りにならないにも程の有つたもので、一体私を何と思召おぼしめしてゐらつしやるのか存じませんが、客商売でもしてをる者に戯たはむれるやうな事を、それも一度や二度ではないのでございませすから、私残念で、一昨々日なども泣いたのでございませす。で、この後二度とそんな事の有仰れないやうに、私その場で十分に申したことは申しましたけれど、変とに氣を廻やつあたりしてゐらつしやる方の事でございますから、取とんだ八当やつあたりで貴方へ御迷惑が懸りますやうでは、何とも私申訳がございませすから、どう

ぞそれだけお含み置き下さいまして、悪あしからず……。

今度お会ひあそばしたら、鰐淵さんが何とか有仰るかも知れません。さぞ御迷惑ごめいわくでゐらつしやいませうけれど、そこは宜よろしいやうに有仰つて置いて下さいまし。それも貴方が何とか些ちよつとでも思召してゐらつしやる方とならば、そんな事を有仰られるのもまた何でございませうけれど、嫌きら抜ひぬいてお在いであそばす私わたくしのやうな者と訳でもあるやうに有仰おつしやられるのは、さぞお辛ごくてゐらつしやいませうけれど、私のやうな者に見込れたのが因果とお諦あきらめ遊あそばしまし。

貴方も因果なれば、私も……私は猶なほ因果なのでございませすよ。かう云ふのが実に因果と謂いふのでございませうね」

金煙管きんぎせるの莨たばこの独ひとり杳眇ほのぼのと燻くゆるを手にせるまま、満枝はかなは儂なまさの遣方やるかた無なげに萎しをれるたり。さるをも見向みむかかず、答こたへず、頑がんとして

石の如く横よこたはれる貫一。

「貴方もお諦め下さいまし、全く因果なのでございますから、切せめてさうと諦めてでもゐて下されば、それだけでも私幾分か思が透とほつたやうな気が致すのでございます。

間さん。貴方は過日いつぞや私がこんなに思つてゐることを何日いつまでもお忘れないやうにと申上げたら、お志は決して忘れんと有仰いましたね。お覚えあそばしてゐらつしやいませう。ねえ、貴方、よもやお忘れは無いでせう。如何いかがなのでございますよ」

勢ひて問詰むれば、極きはめて事も無げに、

「忘れません」

満枝は彼の面おもてを絶したたかに怨視うらみみて瞬またたきも為せず、その時人声して鬨ドアは徐しづかに啓あきぬ。

案内せる附添ばばの婆は戸口の外に立ちて請じ入れんとすれば、

客はその老に似気なく、今更内の様子をこころまどひ心惑せらるる体にて、  
彼にさへ可つつまし慎う小声に言付けつつ名刺を渡せり。

満枝は如何なる人かと瞥ちらと見るに、白髪交りの髻ひげは長く胸の  
辺に垂れて、篤実おもぎしやの面貌瘦せたれども賤いやしからず、長たけは高しとに  
あらねど、素もとより腴ゆたかにもあらざりし肉おのづかの自ら齡よほひの衰おとろへに削れたれ  
ば、冬枯の峰ねに抽ぬけるやうに聳そびえても見ゆ。衣服おろそかなどさる可く、  
程を守りたるが奥おく幽ゆかしくて、誰とも知らねどさすがに疎おろそかならず覚  
えて、彼は早くもこの賓まらうどの席せきを設けて待てるなりき。

貫一は婆の示せる名刺を取りて、何心無く打見れば、鳴沢隆三しぎさわりゆうぞう  
と誌しるしたり。色いろを失へる貫一はその堪へかぬる驚愕おどろきに駆れて、  
忽たちまち身を翻ひるがへして其方そなたを見向かんとせしが、幾ほとんど同時に又枕して、  
終つひに動かず。狂まなこひ出でんずる息いきを厳きびしく閉ぢて、燃もゆるばかりに瞋いか  
れる眼まなこは放たず名刺を見入りたりしが、さしも内なる千万無量

の思を裏める一点の涙は不覺に滾び出でぬ。こは怪しと思ひつ  
つも婆は、

「此方へお通し申しませうで……」

「知らん！」

「はい？」

「こんな人は知らん」

人目あらずば引裂き棄つべき名刺よ、流しと投返せば床の上  
に落ちぬ。彼は強ひて目を塞ぎ、身の顫ふをば吾と吾手に抱窶  
めて、恨は忘れずとも憤は忍ぶべしと、撻たんやうにも己を制  
すれば、髪は逆立ち蠢きて、頭腦の裏に沸騰る血はその欲する  
ままに注ぐところを求めて、心も狂へと乱螫すなり。彼はこれ  
と争ひて猶も抑へぬ。面色は漸く變じて灰の如し。婆は懼れた  
る目色めざしを客の方へ忍ばせて、

「御存じないお方なので？」

「一向知らん。人違だらうから、断つて返すが可い」

「さやうでございますか。それでも、貴方様のお名前を有仰つてお尋ね……」

「ああ、何でも可いから早く断つて」

「さやうでございますか、それではお断り申しませうかね」

(五) の二

婆は鳴沢しぎさわの前にその趣を述べて、投棄てられし名刺を返さんとすれば、手を後様うしろさまに束ねたるままに受取らで、強ひて面おもてを和やはらぐるも苦しげに見えぬ。

「ああ、さやうかね、御承知の無い訳は無いのだ。ははは、大分だいぶん

久い前の事だから、お忘れになつたのか知れん、それでは宜い。  
 私が直にお目に掛らう。この部屋は間貫一さんだね、ああ、そ  
 れでは間違無い」

屹と思案せる鳴沢の椅子ある方に進み寄れば、満枝は座を起  
 ち、会釈して、席を薦めぬ。

「貫一さん、私だよ。久う会はんので忘れられたかのう」

室の隅に婆が茶の支度せんとするを、満枝は自ら行きて手を  
 下し、或は指図もし、又自ら持来りて薦むるなど尋常の見舞客  
 にはあらじと、鳴沢は始めてこの女に注目せるなり。貫一は知  
 らざる如く、彼方を向きて答へず。仔細こそあれとは覚ゆれど、  
 例のこの人の無愛想よ、と満枝は傍に見つつも憫に可笑かりき。  
 「貫一さんや、私だ。疾にも訪ねたいのであつたが、何にしる  
 居所が全然知れんので。一昨日ふと聞出したから不取敢かうし

て出向いたのだが、病気はどうかのう。何か、大怪我<sup>おほけが</sup>ださうではないか」

猶<sup>なほ</sup>も答のあらざるを腹立<sup>はらだたし</sup>くは思へど、満枝の居るを幸<sup>さいはひ</sup>に、

「睡<sup>ね</sup>てをりますですか」

「はい、如何<sup>いかが</sup>でございますか」

彼はこの長者の窘<sup>くるし</sup>めるを傍<sup>よそ</sup>に見かねて、貫一が枕に近く差寄りて窺<sup>うかが</sup>へば、涙の顔を褥<sup>しとね</sup>に擦<sup>すりつ</sup>付けて、急上<sup>せきあ</sup>げ急上<sup>かたいき</sup>げ肩息<sup>かたいき</sup>してゐたり。何事とも覚え<sup>おぼ</sup>えず驚<sup>おどろ</sup>されしを、色にも見せず、怪<sup>あや</sup>まるるをも言<sup>ことば</sup>に出<sup>いだ</sup>さず、些<sup>ちと</sup>の心着<sup>こころ</sup>さへあらぬやうに擬<sup>もてな</sup>して、

「お客様がいらつしやいましたよ」

「今も言ひました通り、一向識<sup>し</sup>らん方なのですから、お還し申して下さい」

彼は面<sup>おもて</sup>を伏せて又言はず、満枝は早くもその意<sup>い</sup>を推<sup>すい</sup>して、ま

た多くは問はず席に復りて、

「お人違ではございませんでせうか、どうも御覚が無いと有仰るのでございます」

長き髯を推揉みつつ鳴沢は為方無さに苦笑して、

「人違とは如何なことで！ 五年や七年会はんでも私は未だそれほど老耄はせんのだ。然し覚が無いと言へばそれまでの話、覚もあらうし、人違でもなからうと思へばこそ、かうして折角会ひにも来たらうと謂ふもの。老人の私がわざわざかうして出向いて来たのでのう、そこに免じて、些とでも会うて貰ひませう」

挨拶如何にと待てども、貫一は音だに立てざるなり。

「それぢや、何かい、こんなに言うても不承してはくれんのかの。ああ、さやうか、是非が無い。」

然し、貫一さん、能<sup>よ</sup>う考へて御覽、まあ、私たちの事をどう思  
うてゐらるか知らんが、お前さんの爾<sup>これまで</sup>來の爲<sup>しかた</sup>方、又今日のこの  
始末は、ちと妥<sup>おだやか</sup>当ならんではあるまいか。とにかく鳴沢の翁<sup>おぢ</sup>に  
対してかう爲たものではなからうと思ふがどうであらうの。成  
程お前さんの方にも言分はあらう、それも聞きに來た。私の方  
にも少<sup>すこし</sup>く言分の無いではない。それも聞かせたい。然し、かう  
してわざわざ尋ねて來たものであるから、此<sup>こちら</sup>方では既に折れて  
出てゐるのだ。さうしてお前さんに會うて話と謂ふは、決<sup>けつ</sup>して  
身勝手な事を言ひに來たぢやない、やはり其<sup>そちら</sup>方の身の上<sup>みの上</sup>に就  
て善かれと計ひたい老<sup>ろう</sup>婆<sup>ぼ</sup>心切<sup>しんせつ</sup>。私の方ではその当時<sup>こんじ</sup>に在つても  
お前さんを棄てた覚は無し、又今日も五<sup>ご</sup>年前も同<sup>かん</sup>じ考<sup>かん</sup>量<sup>りやう</sup>で居る  
のだ。それを、まあ、若い人の血氣と謂ふのであらう。唯一<sup>い</sup>凶<sup>けう</sup>に  
思ひ込んで誤解されたのか、私は如何にも残念でならん。今日<sup>こんにち</sup>

までも誤解されてゐるのは愈よ心外だで、お前さんの住所の知れ次第早速出掛けて来たのだ。凡そ此方の了簡を誤解されてゐるほど心苦い事は無い。人の為に謀つて、さうして僅の行違か  
ら恨まれる、恩に被せうとて謀つたではないが、恨まれやうとは誰にしても思はん。で、ああして睦う一家族で居つて、私たちも死水を取つて貰ふ意であつたものを、僅の行違から音信不通の間になつて了ふと謂ふは、何ともはや浅ましい次第で、私も誠に寢覚が悪からうと謂ふもの、実に姨とも言暮してゐるのだ。私の方では何処までも旧通りになつて貰うて、早く隠居でもしたいのだ。それも然しお前さんの了簡が釈けんでは話が出来ん。その話は二の次としても、差当り誤解されてゐる一条だ。会うて篤と話をしたら直に訳は分らうと思ふで、是非一通りは聞いて貰ひたい。その上でも心が釈けん事なら、どうもそれまで。

私はお前さんの親御の墓へ詣つて、のう、抑もお前さんを引取つてから今日までの来歴を在様陳べて、鳴沢はこれこれの事を為、かうかう思ひまする、けれども成行でかう云ふ始末になりましたのは、残念ながら致方が無い、と丁とお分疏を言うて、そして私は私の一分を立ててから立派に縁を切りたいのだ。のう。はや五年も便を為んのだから、お前さんは縁を切つた気であらうが、私の方では未だ縁は切らんだ。

私は考へる、たとへばこの鳴沢の翁の為た事が不都合であらうか知れん、けれども間貫一たる者は唯一度の不都合ぐらゐは如何にも我慢をしてくれんければ成るまいかと思ふのだ。又その我慢が成らんならば、も少し妥当に事を為てもらひたかつた。私の方に言分のあると謂ふのは其処だ。言はせればその通り私にも言分はある。然し、そんな事を言ひに来たではない、私の

方にも如何様いかさま手落があつたで、その詫わびも言はうし、又昔も今も此方こちらには心持こころに異変かはりは無ないのだから、それが第一だいいちに知らせたい。翁が久しぶりくわいぶりで来たのだ、のう、貫一さん、今日こんにちは何も言はずに清う会あうてくれ」

曾かつて聞かざりし恋人が身の上の秘密よ、と満枝あやしは奇あやしき興きようを覺おぼえて耳を傾けぬ。

我がづよ強がづよくも貫一くわんいつのなほ言ものいはんとはせざるに、漸やうやく怵こらへかねたる鳴沢の翁はやはに椅子を起ちて、強しひてもその顔見んと歩み寄れり。事の由は知るべきやう無けれど、この客の言ことばを尽せるにも理聞ことわりえて、無下むげに打うちも棄すてられず、されども貫一が唯涙を流して一語を出いださず、いと善く識しるらん人をば覺無おぼしと言へる、これにもなかなか所謂いはれはあらんと推測おしはからるれば、一も二も無く満枝は恋人くみに与くみしてこの場の急すくを拯すくはんと思へるなり。

まくらもと　うかが  
枕頭を窺ひつつ危む如く眉を攢めて、鳴沢の未だ言出でざる時、

「わたくし私看病に参つてをります者でございませうが、何方様でゐらつしやいますか存じませんが、この一兩日病人は熱の気味で始終昏々いたして、時々譫語のやうな事を申して、泣いたり、慍つたり致すのでございませうが、……」

頭を捻向けて満枝に対せる鳴沢の顔の色は、この時故に解きたりと見えぬ。

「はあ、は、さやうですかな」

「先程から伺ひますれば、年来御懇意でゐらつしやるのを人違だとか申して、大相失礼を致してをるやうでございませうが、やつぱり熱の加減で前後が解りませぬのでございませうから、どうぞお気にお懸け遊ばしませんやうに。この熱も直に除れまするさ

うでございますから、又改めてお出いでを願ひたう存じます。今日こんにちは私御名刺いただを戴いたいて置きまして、お軽快こころよくなり次第私から悉くはくお話を致しますでございます」

「はあ、それはそれは」

「実は、何でございました。昨日もお見舞にお出で下すつたお方に變な事を申掛けまして、何も病氣の事で為方しかたもございませんけれど、私弱りきりましたのでございます。今日こんにちは又如何いかが致したのでございますか、昨日とは全まるて反対である通り黙りきつてをりますのですが、却むやつて無闇むやみなことを申されるよりは始末よろしが宜よろいでございます」

かくても始末は善しと謂ふかと、翁おぢは打蹙うちひそむべきを強しひて易かへたるやうの笑ゑみを洩もらせば、満枝はその言いひ了をはせしを喜べるやうに笑ひぬ。彼は婆を呼びて湯を易へ、更に熱き茶を薦すすめて、再び

客を席に着かしめぬ。

「さう云ふ訳では話も解りかねる。では又上る事に致しませう。手前は鳴沢隆三と申して——名刺を差上げて置きまする、これに住所も誌しるしてあります——貴方は失礼ながらやはり鰐淵わにぶちさんの御親戚でも？」

「はい、親戚ではございませんが、鰐淵さんとは父が極御懇意に致してをりますので、それに宅がこの近所でございますもので、ちよくちよくお見舞に上つてはお手伝を致してをります」

「はは、さやうで。手前は五年ほど掛違ちがうて間とは会ひませぬので、どうか去年あたり嫁を娶もらうたと聞きましたが、如何いかいたしましたな」

彼はこの美き看病人の素性知らまほしさに、あらぬ問をも設けたるなり。

「さやうな事はついに存じませんですが」

「はて、さうとばかり思うてをりましたに」

容儀人かたちの娘とは見ええず、妻とも見ええず、しかも絢粲きらきらしう装飾よそほひかざ

れる様は色を売る儁たぐひにやと疑はれざるにはあらねど、言辞行儀ものごし

の端々はしはしおのづか自らさにもあらざる、畢竟ひつきようこれ何者と、鳴沢は容易に

その一斑いっぽんをも推し得すいざるなりけり。されども、懇意と謂ふも、

手伝と謂ふも、皆詐いつはりならんとは想ひぬ。正ただしき筋の知辺しるべにはあら

で、人の娘にもあらず、又貫一が妻と謂ふにもあらずして、深き

訳ある内証者なるべし。若もしきもあらば、貫一はその身の境遇

とともに墮落して性根しやうねも腐れ、身持も頽くづれたるを想ふべし、と

かくは好みて昔の縁を繋つなぐべきものにあらず。如此かくのごとき輩やからを出入でいり

せしむる鳴沢の家は、終つひに不慮むだほひの禍を招ひくに至らんも知るべか

らざるを、と彼は心中遽にはかに懼おそれを生じて、さては彼の恨深く言ことばを

容れざるを幸に、今日は一先立還りて、尚ほ一層の探索と一番の熟考とを遂げて後、来る可くは再び来らんも晩からず、と失望の裏別に幾分の得るところあるを私に喜べり。

「いや、これはどうも図らずお世話様に成りました。いづれ又近日改めてお目に掛りますので、失礼ながらお名前を伺つて置きたうござりまするが」

「はい、私は」と紫根塩瀬の手提の中より小形の名刺を取出だして、

「甚だ失礼でございますが」

「はい、これは。赤檜満枝さまと有仰いますか」

この女の素性に於ける彼の疑は益暗くなりぬ。夫有てる身の私は顔に名刺を用意せるも似気無し、まして裏面に横文字を入れたるは、猶可慎からず。応対の雍にして人馴れたる、服装な

どの当世風に貴族的なる、或は欧羅巴的あるひ ヨウロッパ女子職業に自営せる人などならずや。但しその余あまりに色美いろよきが、又さる際きはには相応ふさはしからずも覚えて、こは終つひに一題うらはしの麗なぞき謎を彼に与ふるに過ぎざりき。鳴沢の翁は貫一の冷遇ぶあしらひに慍いきどほるをも忘れて、この謎なぞの為に苦められつつ病院を辞し去れり。

客を送り出でて満枝の内いりきたに入来れば、ベッドの上に貫一みただかの居丈高やせすがに起直りて、瘦尽こがしれたる拳を握りつつ、咄々とつとつ、言はで忍ひとびし無念に堪へずして、独ひとり疾視しつしの瞳ひとみを凝こらすに会へり。

## 第六章

数日すじつげん前より鰐淵わにぶちが家あかしともは燈点あかしともる頃を期して、何処いづこより来るとも知らぬ一人の老女ろうによに訪とはるるが例となりぬ。その人は齡よはひむ六十路そぢ余

に傾かたふきて、顔は皺しわみたれど膚はだ清へきよく、切きり髪がみの容かたちなどなかなかなよし由よしありげにて、風俗も見苦みくからず、唯ただ異い様さまなるは茶ちや微みじん塵じんの御おめ召し縮ちりめん緋ひの被ひ風ふをも着はながら、更さら紗さの小風呂敷包こふうりふしに油紙あぶらの上掛うはがけしたるを矢やは筈はずに負おひて、薄うす穢きたなき護ご謨も底ぞこの運動靴うすきたなを履はいたり。

所用あつじは折入あつて主あるじに会あひたしとなり。生憎あいにくにも来たる度たび他出中たなりけれど、本意ほんい無なげにも見みえで急いそぎ帰かり、飽あきもせずして通とひ来きるなりけり。お峯やうやは漸やうやく怪あやしと思おも初はじめぬ。

彼のあだかも三日さん続つけて来きたる日ひ、その拳動けんどうの常じょうならず、殊ことには眼色まなざし凄すこく、憚はばりも無なく人ひとを目成まもりては、時ときならぬに独ひとり打笑うちわらむ顔かほの坐寒すざろさむきまでおそろしに可お恐そきは、狂人きやうじんなるべし、しかも夜いに入いるを候うかがひ、時ときをも差たがへず訪おとひ来きるなど、我家わたがに祟たたりを作なすにはあらずや、とお峯たかは遽にはかに懼おそれを抱いだきて、とても一度いちどは会あひて、又またと足踏あしふせざらんやう、ひたすら直行ちうぎやうにその始末しじまつを頼たのみければ、今日けふ

は用意して、四時頃にはや還り来にけるなり。

「どうも貴方あなた、あれは氣違ですよ。それでも品の良いことは、些ちよとまあ旗本か何かの隠居さんと謂つたやうな、然し一体、鼻の高い、目の大きい、瘦せた面長な、怖い顔なんです。戸外へ来て案内する時のその声といふものが、実に無いんですよ。毎度も極きまつて、『頼みます、はい頼みます』とかう雍しとやかに、緩り二声言ふんで。もうもうその声を聞くと悚然ぞつとして、ああ可厭いやだ。何だつて又あんな氣違なんぞが来出したんでせう。本当に縁起でもない！」

お峯は柱なる時計を仰ぎぬ。燈あかしの点るには未だ間ありと見るなるべし。直行は可難むづかしげに眉まゆを寄せ、唇くちびるを引結びて、

「何者か知らんて、一向心当こころあたりと謂うては無い。名は言はんで？」  
「聞きましたけれど言ひませぬ。あの様子ぢや名なんかも解

りは為ますまい」

「さうして今晚来るのか」

「来られては困りますけれど、きつと来ますよ。あんなのが毎晩々々来られては耐りたまませんから、貴方本当に来ましたら、篤とつぐり説諭して、もう来ないやうに作つて下さいよ」

「そりや受合へん。他おひきが氣違ぢやもの」

「氣違だから私も氣味が悪いからお頼申すのぢやありませんか」

「幾多いくら頼まれたてて、氣違ぢやもの、俺おれも為やうは無い」

頼める夫つまのさしも思はで頼無たのみなき言ことばに、お峯は力落してかつはすくな慚あわつからず心慌るなり。

「貴方でも可けないやうだつたらば、巡查にさう言つて引渡し遣りませう」

直行は打笑うちわらへり。

「まあ、そんなに騒がんとも可ええ」

「騒ぎはしませんけれど、私は可厭えですもの」

「誰も気違の好ええものは無い」

「それ、御覧なさいな」

「何じや」

知らず、その老女ろうによは何者、狂か、あらざるか、合力じうりよくか、物売

か、将主はたあるじの知人しりびとか、正体の顯あらはるべき時はかかる裏うちにも一分時毎

に近ちかづくなりき。

終日ひねもす灰色に打曇りて、薄日をだに吝をしみて洩もらさざりし空は漸やうやく

暮れんとして、弥増いやます寒さは怪けしからず人に逼せまれば、幾分の凌しのぎ

にもと家々の戸は例よりも早く鎖さされて、なほ稍明ややあかくその色厚氷あつこほり

を懸けたる如き西の空より、隠々いんいんとして寂さびき余光の遠く来きたれる

が、遽にはかに去るに忍びざらんやうに彷徨さまよへる巷ちまたの此処ここ彼処かしこに、軒

ラムプは既に点じ了りて、新に白き焰ほのほを放てり。

一陣の風は砂を捲まきて起りぬ。怪しの老女ろうじよはこの風に吹出ふきいされたるが如く姿を頭たまはせり。切髪は乱れ逆さか立ちて、披はたは払たと飄ひるる裾すそ袂たもとに靡なびかれつつ漂ただよしげに行きつ留りつ、町の南側を辿たどり辿りて、鰐淵いが住へる横町に入りぬ。銃槍じゆうそうの忍返しのびを打ちたる石塀いしべを溢あふれて一本ひとの梅の咲誇なれるを、斜ななめに軒ラムプの照せるがその門かどなり。

彼は殆ほとんど我家に帰きたり来れると見ゆる態度にて、従つ々かつと寄りて戸あを啓あけんとしたれど、啓かざりければ、かの雍しとやかに緩ゆるすと謂いふ声して、

「頼みます、はい、頼みます」

風は颯々ひようひようと鳴りて過ぎぬ。この声を聞きしお峯すくは竦すくみて立たず。

「貴方、来ましたよ」

「うん、あれか」

實に直行も気味好からぬ声とは思へり。小鍋立せる火鉢の角に猪口を措き、燈を持って来よと婢に命じて、玄関に出でけるが、先づ戸の内より、

「はい何方ですな」

「旦那はお宅でございませうか」

「居りますが、何方で」

答はあらで、呟くか、呷くか、小声ながら頬に物言ふが聞ゆるのみ。

「何方ですか、お名前は何と有仰るな」

「お目に掛れば解ります。何に致せ、おおお、まあ、梅が好く咲きましたちやございせんか。当日の挿花はやつぱりこの梅

が宜よろしからうと存じます。さあ、どうぞ此方こちらへお入り下さいまし、御遠慮無しに、さあ」

啓あけんとせしに啓かざれば、彼は戸を打叩うちたたきて劇はげく案内あないす。さては狂人なるよと直行も迷惑したれど、このままにては逐おふとも立去るまじきに、一度は会うてにもかくにも為せんと、心ならずも戸を開けば、聞ききしに差たがはぬ老女ろうじよは入来いりきたれり。

「鰐淵わしは私わしじやが、何ぞ用かな」

「おお、おまへが鰐淵か！」

つと乗出のりいしてその面おもてに瞳ひとみを据おもゑられたる直行は、鬼氣まなこに襲はれて忽たちまち寒さく戦いくさけるなり。熟つくづくと見入る眼まなこを放つと共に、老女おほはしわでこ鰐手こらに顔かほを掩おほひて潜々さめさめと泣出なせり。呆あきれ果はてたる直行は金壺眼かなつぼまなこを凝こらしてその泣なくを眺ながむる外ほかはあらざりけり。

彼は泣きて泣きて止まず。

「解らんない！ 一体どう云ふんか、ああ、私わしに用と云ふのは？」  
 朽木おのづかの自らくづ頰くわれ行くらんやうにも打うち萎しれて見みえし老女らうにょは、猛もう然ねん  
 として振しん仰ぼぎ、血ち声こゑを搾しぼりて、

「この大おほ騙かため！」

「何なにぢやと！」

「大、大悪人！ おのれのやうな奴やつが懲ちやう役やくに行いかず、内うちの……  
 内うちの……雅まさ之ゆきのやうな孝かう行ぎやう者しやが……先せん祖そを尋たずぬれば、甲かい斐ひ国こくにの  
 住人たけだ武だ田い大げん膳だ太ゆう夫しん信げん玄に入ゆう道どう、田でん夫ぶ野や人じんの為ために欺あざかされて、このま  
 ま断た絶だつする家いへへ誰たれが嫁よめに来きる。柏かし井わいの鈴すうちやんがお嫁よめに來きてく  
 れれば、私わたしの仕し合あは言いふまでもない、雅まさ之ゆきもどんなにか嬉うれから  
 う。子こを捨すてる藪やぶは有あつても、懲ちやう役やくに遣やる親おやは無ないぞ。二十七  
 にはなつても世よ間ま不み見ずのああの雅まさ之ゆき、能ようも能ようもおのれは瞞だまし  
 たな！ さあ、さあさかた讐ぎを討うつから立た合あひなさい」

直行は舌を吐きて独語ちぬ。ひとりごと

「あ、いよいよ氣違じやわい」

見る見る老女の怒いかりは激して、形相漸くおどろおどろしく、物怪もののけ

などの憑ついたるやうに、一挙一動も全くその人ならず、足を踏

鳴し踏鳴し、白齒の疎まぼろなるを牙きばの如く露あらはして、一念の凝これる眸まなじり

は直行の外ほかを見ず、

「歿なくなられた良人つれあひから懇々くれぐれも頼まれた秘藏ひとりつこの秘藏ひとりつこの一人子ひとりご、それ

を瞞まかしておのれが懲役なぎなたに遣つたのだ。此方このほうを女あなごと侮あなどつてさやう

な不埒ふらちを致したか。長刀の一手も心得てゐるぞよ。恐入おそつたか」

彼は忽たちまちさも心地快こちよげに笑へり。

「さうあらうとも、赦ゆるします。内には鈴すずちやんが今日を曠はれと着

飾つて、その美しさと謂ふものは！ ほんにまああんな縹致きりようと

云ひ、氣立と云ひ、諸芸も出来れば、読よみ、書かき、針仕事はりしごと、そんな

ことは言つてゐるところではない。頸くびを長くして待つてお在いでだのに、早く歸つて来ないと云ふ法が有るものですか。大きにまあお世話様でございましたね、さあさ、馬車を待たして置いたから、履物はきものはここに在るよ。なあに、おまへ私はね、瀟車きしやで行くから訳は無ないともし」

かく言ふ間も忙せはしげに我が靴を脱ぎて、其処そこに直すと見れば、背負ひし風呂敷包の中結なかゆひを釈ひきて、直行が前に上掛うはかけの油紙ひろを披ひげたり。

「さあさ、お前の首をこの中へ入れるのだ。ころつと落して。直ちきに落ちるから、早く落してお了あひなさい」

さすがに持扱もてあつかひて直行の途方に暮れたるを、老女は目を織ほそめて、何処いづこより出づらんやとばかり世にも奇あやしき声を発はなちて緩ゆるく笑ひぬ。彼は謂いひし知らぬ凄せいき気に打れて、覺えず肩そびやを聳こかせり。

懲役と言ひ、雅之と言ふに因りて、彼は始めてこの狂女の身元を思合せぬ。彼の債務者なる飽浦雅之は、私書偽造罪を以つて彼の被告としてこの十数日前、罰金十円、重禁錮一箇年に処せられしなり。実にその母なり。その母はこれが為に乱心せしか。

爾思へりしのみにて直行はその他に猶も思ふべき事あるを思ふを欲せざりき。雅之の私書偽造罪をもて刑せられしは事實の表にして、その罪は裏面に彼の謀りて陥れたるなり。

彼等の用ゐる悪手段の中に、人の借るを求めて連帯者を得るに窮するあれば、その一判にても話合の上は貸さんと称へて先づ誘ひ、然る後、但し証書の体を成さしめんが為、例の如く連帯者の記名調印を要すればとて、仮に可然き親族知己などの名義を私用して、在合ふ印章を捺さしめ、固より懇意上の内約な

ればその偽いつはりなるを咎とがめず、と手輕に持掛けて、実は法律上有効の証書を造らしむるなり。借方もかかる所業の不義なるを知るといへども、一いつは焦眉しょうびの急に迫り、一いつは期限内にだに返弁せば何事もあらじと姑息こそくして、この術中には陥るなりけり。

期およに迫およびて還さざらんか、彼は忽たちまち爪牙そうがを露あらはし、陰に告訴の意を示してこれを脅おびやかし、散々に不当の利を貪むさりて、その肉尽き、骨枯るるの後、猶なほ鑿あく無き慾は、更に件くだんの連帶者に対して寢耳に水の強制執行を加ふるなり。これを表沙汰おもてぎたにせば債務者は論無う刑法の罪人たらざるべからず、ここに於おいて誰たれか恐慌し、狼狽ろうばいし、悩乱し、号泣し、死力を竭つくして七所借ななところがりの調達ちようだつを計らざらん。この時魔の如き力は喉のんどを扼やくしてその背を拊うつ、人の死と生とは渾すべて彼が手中に在りて緊握せらる、欲するところとして得られざるは無し。

雅之もこの※に繋りて学友の父の名を仮りて連印者に私用したりき。事の破綻に及びて、不幸にも相識れる学友は折から海外に遊学して在らず、しかも父なる人は彼を識らざりしより、その間の調停成らずして、彼の行為は終に第二百十条の間ふところとなりぬ。

法律は鉄腕の如く雅之を拉し去りて、剩さへ杖に離れ、涙に踰ふ老母をば道の傍に踢返して顧ざりけり。噫、母は幾許この子に思を繋けたりけるよ。親に仕へて、此上無う優かりしを、柏井の鈴とて美き娘をも見立てて、この秋には妻すべかりしを、又この歳暮には援く方有りて、新に興るべき鉄道会社に好地位を得んと頼めしを、事は皆休みぬ、彼は人の齒せざる国法の罪

人となり了れり。をば 耻辱、憤恨、悲歎、憂愁、心を置惑ひてこの母は終に発狂せるなり。

無益むやくに言ことばを用ゐんより、唯手柔ただてやはらかに撮み出すに如かじと、直行は少しも逆さからはずして、

「ああ宜よろしいが。この首が欲いか、遣らうとも遣らうとも、ここでは可かんから外おもてへ行かう。さあ一処いっしょに来た」

狂女は苦々しげに頭かしらを掉ふりて、

「お前さんの云ふことは皆妄うそだ。その手で雅之を瞞だましたのでらう。それ、それ見なさい、親孝行の、正直者の雅之を瞞だまくらか

散々金を取つた上に懲役に遣つたに相違無いと云ふ一札いっさつをこの通り入れたぢやないか、これでも未だ晶ましい顔しらじらをしてゐるのか」

打披うちひろげたりし油紙を取りて直行の目先へ突付くれば、何を包みし移香うつりがにや、胸悪き一種の腥氣せいきありて夥おびただしく鼻を撲うちぬ。直

行は猶も逆はで已む無く面を背けたるを、狂女は目を瞪りつつ  
こをどり  
 雀躍して、

「おおおお、あれあれ！　これは嬉しい、自然とお前さんの首が  
 段々細くなつて来る。ああ、それぞれ、今にもう落ちる」

地には落さじとやうに慌て悼き、油紙もて承けんと為る、そ  
ききうつで  
 の利腕をやにはに捉へて直行は格子の外へ攫さんと為たり。彼  
おさ  
 は推れながら格子に縋りて差理無理争ひ、

「ええ、おのれは他をこの崖から突落す気だな。この老婦を騙討  
ひと  
 に為るのだな」

喚きつつ身を捻返して、突掛けし力の怪き強さに、直行は踏  
わめ  
 らして尻居に倒るれば、彼は嘸し立てて笑ふなり。忽ち起上り  
ねぢかへ  
 し直行は彼の衿上を搔掴みて、力まかせに外方へ突遣り、手早  
えりがみ  
 く雨戸を引かんとせしに、軋みて動かざる間に又駈戻りて、狂  
かいつか  
このかた  
つきや  
ひま  
かけもど  
ふみすべ

女はその凄き顔を戸口に顕はせり。余りの可恐しさに直行は吾を忘れてその顔をはたと撲ち、痿むところを得たりと鎖せば、外より割るるばかりに戸を叩きて、

「さあ、首を渡せ。大事な証文も取上げて了つたな、大事な靴も取つたな。靴盗坊、大騙！ 首を寄来せ」

直行は佇みて様子を候ひるたり。拔足差足忍び来れる妻は、後より小声に呼びて、

「貴方、どうしました」

夫は戸の外を指してなほ去らざるを示せり。お峯は土間に護謨靴と油紙との遺散れるを見付けて、由無き質を取りけるよと思ひ煩へる折しも、

「頼みます、はい、頼みますよ」

と例の声は聞えぬ。お峯は胴顛して、長くここに留るに堪へ

ず、夫を勧めて奥に入りいりにけり。

戸叩く音は後のちも撓たむまず響なきたりしが、直行の裏口より出でて窺うかがひける時は、風吹荒ぶ門かどの梅うめの飛雪ひせつの如く乱点して、燈火の微ほのかに照す処その影は見えざるなりき。

次の日も例刻になれば狂女は又訪とひ来れり。主あるじは不在なりとて、婢をんなをして彼の遺のこせし二品ふたしなを返さしめけるに、前夜の暴あれに暴れし気色けしきはなくて、殊勝しゆせうに聞分けて帰り行きぬ。

お峯はその翌日も必ず来きたるべきを懼おそれて夫の在宅を請ひけるが、果して来にけり。又試をんなに婢いを出して不在よしの由を言はしめしに、こたびは直ぢに立去らで、

「それぢやお帰かへり来までここでお待ち申しませう。実はね、是非お受取申す品があるので、それを持つて帰りませんと都合が悪いですから、幾日でもお待ち申しますよ」

彼は戸口かどぐちに蹲りうづくまて動かず。婢は様々に言作いひこしらへて賺すかしけれど、一声も耳には入いらざらんやうに、石仏いしほとけの如く応ぜざるなり。彼は已やむ無くこれを奥へ告げぬ。直行も為せん術すべあらねば棄措すておきたりしに、やや二時間も居て見えずなりぬ。

お峯は心苦こころぐるしがりて、この上は唯警察の手を借らんなど噪さわぐを、直行は人を煩わづらはすべき事にはあらずとて聴かず。さらば又と来ざらんやうに逐おひほら払ふべき手立てだてのありやと責むるに、害を為なすにもあらねば、宿無やどなし犬いぬの寝たると想ひて意こころに介かるなとのみ。意こころに介かくまじき如きを故ことゆかりに夫には学ばじ、と彼は腹立はらだたしく思へり。この一事いちじのみにあらず、お峯は常に夫の共に謀はかると謂ふこと無く、て、女をんな童わらわと侮あなごれるやうに取合はぬ風あるを、口惜くちをしくも可恨うらめしくも、又或時は心細さの便無たよりなき余に、神を信ずる念は出でて、夫の頼むに足らざるところをば神明しんめいの冥護みょうごに抛よらんと、八百万やほよろづの神とい

ふ神は差別しやべつ無く敬神せるが中にも、ここに数年前ぜんより新に神道の一派を開きて、天尊教と称ふるあり。神体あがと崇めたるは、その光紫の一大明星みょうじょうにて、御名おんなを大御明尊おおみあかりのみことと申す。天地渾沌てんちこんとんとして日月じつげつも未だ成らざりし先高天原たかまがはらに出現あましませしに因よりて、天上天下万物つかさの司と仰ぎ、諸もろもろの足らざるを補ひ、総すべて欠けたるを完まつたうせしめんの大御誓おほみちかひをもて国土百姓やすらけを寧く恵ませ給ふとなり。彼は夙つとに起信して、この尊つとをば一身一家いつけの守護神まもりがみと敬ひ奉り、事と有れば祈念こらを凝して偏ひとへに頼み聞ゆるにぞありける。

この夜は別して身を浄きよめ、御燈みあかしの数を献ささげて、災難即滅あか、怨敵退散おんてきたいさんの祈願こを籠めたりしが、翌日あくるひの点燈頃ひともしじころともなれば、又来きにけり。夫は出でて未だ帰いまらざれば、今日けふ若し罵ののり罵ののり騒さわぎて、内に躍入をどりいることもやあらば如何いかにせん、前後わかれの別知らぬばかりに動顛どうてんして、取次とには婢いを出し遣やり、躬みづからは神棚かみだの前に駈かけつ着つけ、

顛ふるひじゑ声を打揚うちあげ、丹精ぬきんを抽ひでて祝詞のりとを宣のりゐたり。狂女は不在と  
 聞あへきて敢あへて争あはず、昨日きのふの如ごとく、ここにて帰来かへりを待まちたんとて、  
おなじ同おき処じに同おき形かたちして蹲うづくまれり。婢めかけは格子かきを鎖さし固かめて内うちに入りけ  
 るが、暫しばらくは音ねも為なざりしに、遽にはかに物語ものごとる如ごとき、或あるひは罵ののし  
 声こゑの頻しきりに聞きゆるより主あるじの知しらで帰来かへりきて、捉とらへられたるにはあら  
 ずや、と台所だいしよの小窓せうまどより差覗さしのぞけば、彼の外そとには人も在あらぬに、  
 在あるが如ごとく語かたるなり。その語かたるところは婢めかけの耳みみに聞き分けかねた  
 れど、我子わがこがこここゝの主あるじに欺あかれて無実むじつの罪つみに陥おされし段々だんだんを、  
あしきなきふぞろひ前後ぜんご不揃ふぞろひに泣ないなつ怒いかりなつ訴こふるなり。

第七章

子この鬢かたきなる直行ちかが首くびを獲えんとして夕々ゆふべゆふべに狂女きやうにょの訪まひ来きること

八日に迫およべり。浅ましとは思へど、逐おひて去らしむべきにあらず、又門口かどぐちに居たりとて人を騒がすにもあらねば、とにもかくにも手を着けかねて棄措すておかるるなりき。直行が言へりし如く、畢竟ひつきょう彼は何等の害をも加ふるにあらざれば、犬の寝たると太だ扱えらばざるべけれど、縮緬ちりめんの被風着ひふたる人の形の黄昏たそがるる門の薄寒はなはきに踞つくばひて、灰色の剪髪きりがみを搔乱かきみだし、妖星ようせいの光にも似たる眼まなこを睨反ねめそらして、笑ふかと思れば泣き、泣くかと思れば憤いり、己おのれの胸のやうに際そこひも知らず黒く濁れる夕暮の空に向ひてその悲かなしみと恨とを訴へ、腥なまぐさき油紙ひねを拈ひねりては人の首を獲とつる狂女きやうにょ！ よし今は何等の害を加へずとも、終つひにはこの家に祟たたりを作なすべき望ぞらを繋かくるにあらずや。人の執着しやくしやくの一念いっはふは水をも火と成し、山をも海と成し、鉄てつを劈つんざき、巖いはほを砕くためしの例、ましてや家を滅めつし、人を塵ちりにすなど、塵ちりを吹くよりも易やすかるべきに、可恐おそろしや事無くて

あれかしと、お峯は独り謂知らず心を傷むるなり。

夫は決して雅之の私書偽造を己の陥れし巧なりとは彼に告げ

ざれば、悪は正く狂女の子に在りて、此方に恨を受くべき筋は無

く、自らかかる事も出来るは家業の上の勝負にて、又一方には

貸倒の損耗あるを思へば、所詮<sup>しよせんたふ</sup>、<sup>あきなひ</sup>商の習と、お峯

は自ら意を強うして、この老女の狂を発せしを、夫の為せる業

とは毫も思ひ寄るにあらざりき。さは謂へ、人の親の切なる情

を思へば、実にさぞと肝に徹ふる節無きにもあらざるめり。大

方かかる筋より人は恨まれて、奇き殃にも遭ふなればと唯思過

されては窮無き恐怖の募るのみ。

日に日に狂女の忘れず通ひ来るは、陰ながら我等の命を絶た

んが為にて、多時門に居て動かざるは、その妄執の念力を籠め

て夫婦を呪ふにあらざや、とほとほと信ぜらるるまでにお峯が

夕暮の心地は譬へん方無く悩されぬ。されば狂女の門に在る間  
 は、大御明尊の御前に打頻り祝詞を唱ふるにあらざれば凌ぐ能  
 はず。かかる中にも心に些の弛あれば、煌々と耀き遍れる御燈  
 の影遽に晦み行きて、天尊の御像も臙に消失せなんと吾目に見  
 ゆるは、納受の恵に泄れ、擁護の綱も切れ果つるやと、彼は身も  
 世も忘るるばかりに念を籠め、烟を立て、汗を流して神慮を驚  
 かすにぞありける。槍は降りても必ず来べし、と震摺れながら  
 待たれし九日目の例刻になりぬれど、如何にしたりけん狂女は  
 見えず。鋭く返返りたるこの日の寒気は鍼もて膚に霜を種うら  
 んやうに覚えしめぬ。外には烈風怒り号びて、樹を鳴し、屋  
 を撼し、砂を捲き、磔を飛して、曇れる空ならねど吹揚げらる  
 る埃に蔽れて、一天晦く乱れ、日色黄に濁りて、殊に物可恐き  
 夕暮の氣勢なり。

鰐淵が門の燈は硝子を二面まで吹落されて、火は消え、ラムくつがへプは覆りたり。内の燈火は常より鮮あざやかに主が晚酌あるじの喫台ちやふだいを照し、ひぼち火鉢かに架けたる鍋なべの物は沸々ふつふつと薫くんじて、はや一銚子ひとちようしか更へたるに、いま未だ狂女の音容おとづれはあらず。お峯なかばは半危なみつつも幾分の安堵あんどの思もてあそを弄ふぜいび喜ぶ風情ふぜいにて、

「氣違いさんもこの風には弱つたと見えますね。もう毎いつもきつと来るのに来ませんから、今夜は来やしますまい、何なにぼ何でもこの風かぜぢや吹飛ふされて了しまひませうから。ああ、真ほんに天尊てんそん様の御利益ごりやくがあつたのだ」

夫ちよくが差せる猪口ちよくを受けて、

「お相あひをしませうかね。何は無くともこんな好い心持こころもちの時に戴いたくとお美いいものですね。いいえ、さう続けてはとても……まあ、あなた貴方あなた。おやおやもう七時廻いよつたんですよ。そんなら断然いよ今晚いよは

来ないと極きまりましたね。ぢや、戸締とじまりを為さして了しませうか、真ほんに今晚のやうな氣の霽せいせい々した、心しんの底から好い心持の事はありませんよ。あの氣違さんぢやどんなに寿いのちを短ちぢめたか知れはしません。もうこれきり来なくなるやうに天尊様へお願い申しませう。はい、戴ごしゆきませう。御酒もお美いじいものです。なあにあの婆さんが唯怖ただこはいのぢやありませんよ。それは氣味きびは悪うございまずけれどもさ、怖いより、氣味が悪いより、何と無く凄すじくて耐たまらないのです。あれが来ると、悚然ぞつと、惣毛そうけだ豎たてつて体からだが竦すくむのですもの、唯の怖いと違ちがひますわね。それが、何だか、かう執着とつつかれでもするやうな氣がして、あの、それ、能く夢で可恐おそろしい奴なんぞに追懸おつかけられると、逃にげるには逃にげられず、声を出さうとしても出ないので、どうなる事かと思ふ事がありませう、とんとあんなやうな心持なんで。ああ、もうそんな話は止しま

せう。私は少し酔ひました」

銚子を更へて婢の持来れば、

「金や、今晚は到頭来ないね、氣違さんさ」

「好い塩梅でございます」

「お前には後でお菓子を御褒美に出すからね。貴方、これはあの氣違さんとこの頃懇意になつて了ひましてね。氣違の取次は

金に限るのです」

「あら可厭なことを有仰いまし」

吹来り、吹去る風は大浪の寄せては返す如く絶間無く轟きて、

その劇きは柱などをひちひちと鳴揺がし、物打倒す犇き、引断

る音、圧折る響は此処彼処に聞えて、唯居るさへに胆は冷され

ぬ。長火鉢には怠らず炭を加へ加へ、鉄瓶の湯気は雲を噴くこ

と頻なれど、更に背面を圧する寒は鉄板などや負はさるるかど、

飲めども多く酔よひ成さざるに、直行は後を牽ひきて已やまず、お峯も心祝こころいはひの数を過して、その地顔あかの赭あかきをば仮漆布ニスしきたるやうに照り耀かがやかして陶然たり。

狂女は果して来こざりけり。歡よろこび酔よへるお峯も唯酔よへる夫も、褒美もら貰もらひし婢も、十時近ころほひき比ひには皆寐ねしづま鎮りぬ。

風は猶なほも邪よこしまに吹募ふきおりて、高こき梢すずは箒ははきの掃はくが如ごとく撓たわめられ、疎まばらに散れる星の数は終つひに吹下ふきおされぬべく、層々凝これる寒さむさは殆ほとんど有

らん限の生気を吸尽して、さらぬだに陰森たる夜色は益ますす冥くらく、益すす凄すさまじからんとす。忽たちちこの黒暗くろ々を劈つんざきて、鰐淵えんが裏木戸うらの

辺あたりに一道いちどうの光は揚りぬ。低ひく発おこりて物に遮さへぎられたれば、何の火とも弁わかまへ難まくて、その迸ほとばし発りの朱あかく烟けむれる中に、母家もやと土蔵どぞうとの

影おぼろは朧あらはに顕あるるともなく奪うばはれて、瞬またたくばかりに消失せしは、風の強つよきに吹敷ふれたるなり。やや有りて、同じほどの火影かげの又

うつろ  
映ふと見れば、早くも薄れ行きて、こたびは燃えも揚らず、消  
えも遣らで、少時明を保ちたりしが、風の僅の絶間を偷みて、  
閃々と納屋の板戸を伝ひ、始めて騰れる焰は炳然として四辺を  
照せり。塀際に添ひて人の形動くと見えしが、なほ暗くて了然  
ならず。

数息の間にして火の手は縦横に蔓りつつ、納屋の内に乱入れ  
ば、噴出づる黒烟の渦は或は頹れ、或は畳みて、その外を引韁む  
とともに、見え遍りし家も土蔵も堆き黯黈の底に没して、闇は  
焰に破られ、焰は烟に揉立てられ、烟は更に風の為に碎かれつ  
つも、蒸出す勢の夥ければ、猶ほ所狭く漲りて、文目も分かず  
攪乱れたる中より爆然と鳴りて、天も焦げよと納屋は一面の猛  
火と変じてけり。かの了然ならざりし形はこの時明に輝かされ  
ぬ。宵に来べかりし狂女の佇めるなり。躍り狂ふ烟の下に自若

として、面おもても爛ただれんとすばかりに照あされたる姿は、この災を司  
 る鬼女などの現れ出でにけるかと疑うはしむ。実げに彼は火の如何いか  
 に焚もえ、如何いかに燬やくや、と嚴おごそかに監みるが如ごとく皆みなを裂ひきて、その立  
 てる処を一步も移うつさず、風と烟ほのほと焰あひまじはとの相あひ雑あり、相あひ争あひ、相あひ勢きほ  
 ひて、力の限を互たがに奮ふるふをば、妙いみじくも為したりとや、漫そぞろ笑ゑみを洩もせ  
 る顔色がんしよくはこの世に匹たぐふべきものありとも知らず。

風の暴頻あれしきる響動どよみに紛まれて、寝耳ねみみにこれを聞き着きる者も無なかりけ  
 れば、誰一人出いでて噪さわがざる間に、火は烈々めらめらと下屋げやに延しきて、厨くりや  
 の燃立もつ底より一声叫喚きようかんせるは誰たれ、狂女は嘻き々として高たかく笑わひ  
 ぬ。

人々出合ひて打騒うちさわぐ比ころほひには、火元の建物の大半は烈火となりて、土蔵の窓々より焰ほのほを出しいだ、はや如何いかにとも為んやうあらざるなり。さしもの強風ごうふうなりしかど、消防力つとめたりしに抛よりて、三十幾戸を焼きしのみにて、午前二時に迫およびて鎮火するを得たり。雑踏うちの裏うらより怪き奴は早くも拘引せられしと伝へぬ。かの狂女の去りも遣やらざりしが捕とられしなり。

火元と認定せらるる鰐淵わにぶち方は塵一筋ちりひとすぢだに持出もちいさずして、憐あはむべき一片の焦土を遺のこしたるのみ。家族の消息は直ただちに警察の訊問じんもんするところとなりぬ。婢をんなは命辛から々逃にげ了おほせけれども、目覚むるとひとし、ままくらもと齊あく頭面は一面の火なるに仰天し、二声三声奥を呼捨よびすてにして走り出いでければ、主あるじたちは如何いかになりけん、知らずと言ふ。夜明けぬれど夫婦の出で来あざりけるは、過あやまちなど有りしにはあらずやと、警官は出張して搜索に及べり。

熱灰ねつかいの下より一体いったいの屍かばねの半焦爛なかばこげたたれたるが見出みいだされぬ。目も当  
 てられず、浅おもかげましう悞いふせき限を尽したれど、主あるじの妻と輒たやすく弁たぜら  
 るべき面影おもかげは焚残やけのこれり。さてはとその邇ちかくを隈くまな無く搔起かきおこしけれ  
 ど、他に見当るものは無く、倉前くらまへと覚おぼしき辺あたりより始めて焦壞こげくづれた  
 る人骨ほりいだを掘出せり。酔よひて遁惑にげまどひし故ゆゑか、貪むさぼりて身を忘れし故  
 か、とにもかくにも主夫婦あるじふうふはこの火の為に落命らくめいせしなり。家屋  
 も土蔵どざうも一夜いっやの烟けふりとなりて、鰐淵ちようえんたんえんの跡あととしては赤土と灰との外ひとに  
 覓もとむべきものもあらず、風吹迷ちまふ長烟短焰ちようえんたんえんの紛糾まぎれあする処ところに、独  
 り無事の形を留めたるは、主が居間いまに備かへへ付つけたりし金庫きんぐらのみ。  
 別居べつこせる直道ただみちは旅行中りょこうちゆうにて未だ還かへらず、貫一くわんいちはあだかもお峯  
 の死体したいの出ででし時病院じびやういんより駈着かけつけたり。彼は三日さんじつの後のちには退院  
 すべき手筈てはずなりければ、今は全く癒いえて務を執とるをも妨さげざれ  
 ど、事ことの極きはめて不慮ふりょなると、急激きゅうげきなると、瑣小さしょうならざるとに心惑こころまどひ

のみせられて、病後の身を以てこれに当らんはいと苦かりけるを、尽瘁して万端を処理しつつ、ひたすら直道の帰京を待てり。枕をも得挙げざりし病人の今かく健に起きて、常に来ては親く慰められし人の頑にも強かりしを、空く燼余の断骨に相見て、弔ふ言だにあらざらんとは、貫一の遽にその真をば真とし能はざるところなりき。人は皆死ぬべきものと人は皆知れるなり。されどもその常に相見る人の死ぬべきを思ふ能はず。貫一はこの五年間の家族を迫めての一人も余さず、家倉と共に焚尽され一夜の中に儂くなり了れるに会ひては、おのれが懐裡の物の故無く消失せにけんやうにも頼み難く覚えて、かくては我身の上の今宵如何に成りなんをも料られざるをと、無常の愁は頻に腸に沁むなりけり。

住むべき家の痕跡も無く焼失せたりと謂ふだに、見果てぬ夢

の如し、まして併せて頼めし主夫婦を喪へるをや、音容幻を  
 去らずして、ほとほと幽明の界を弁ぜず、剩へ久く病院の乾燥  
 せる生活に困じて、この家を懐ふこと切なりければ、追慕の情  
 は極りて迷執し、迫めては得るところもありやと、夜の晩きに  
 貫一は市ヶ谷なる立退所を出でて、杖に扶けられつつ程遠から  
 ぬ焼跡を弔へり。

連日風立ち、寒かりしに、この夜は遽に緩みて、朧の月の色  
 も暖に、曇るともなく打霞める町筋は静に眠れり。燻臭き悪気  
 は四辺に充滿ちて、踏荒されし道は水に繋り、燼に埋れ、焼杭  
 やけがはら  
 焼瓦など所狭く積重ねたる空地を、火元とて板囲も得為ず、そ  
 れとも分かぬ焼原の狼藉として、鰐淵が家居は全く形を失へるな  
 り。黒焦に削れたる幹のみ短く残れる一列の立木の傍に、塊  
 堆く盛りたるは土蔵の名残と踏み行けば、灰燼の熱気は未だ

冷めずして、微ほのかに面おもてを撲うつ。貫一まへづゑつは前杖ちようぜん拄たいて悵然たたずとして佇ためり。その立てる二三歩の前は直行おこが遺骨おこを発おこせし所ところなり。恨あかむと見ゆる死顔しの月は、肉きの片きれの棄すてられたるやうに朱あかく敷しける満地りようりようの瓦わを照てして、目めに入いるものは皆みな伏ふし、四望しよぼうの空くうく寥々りようりようたるに、黒く点てんせる人の影かげを、彼かのつかは自ら物凄ものすごく顧からるるなりき。

立た尽あかせる貫一まへづゑつが胸むねには、在ありし家居かみの状さまの明あかに映あじて、赭あかく光あれるお峯たかねが顔かほも、苦にがき口くち付けせる主あるじが面おもても眼まなこに浮うびて、歴々まざまざと相さしむか対たいへる心地こころもするに、姑しよばらくはその境さかいに己おのれを忘われたりしが、やがて徐しよかに仰あがぎ、徐しよかに俯ふして、さて徐しよかに一歩いっぽを行いきては一歩いっぽを返かへしつゝ、いとど思おもひに沈しづみては、折々おしぬぐ涙なみだをも推お拭ぬひつ。彼かのは転うたた人生じんせいの凄涼せいらいようを感じかんじて禁かざる能あたはざりき。苟いやしくもその親おやめる者ものの半かたにして離わかれ乖そむかざるはあらず。見みよ或あるはかの棄すてられし恨あかを遺のこし、或あるはこの奪かはれし悲かなしみに遭あひ、前まへの恨あかの消きえざるに又また新あらた

なる悲を添ふ。棄つる者は去り、棄てざる者は逝き、犛然として吾独り在り。在るが故に慶ぶべきか、亡きが故に悼むべきか、在る者は積憂の中に活き、亡き者は非命の下に殞る。抑もこの活とこの死とは孰を哀み、孰を悲まん。

吾が煩悶の活を見るに、彼等が惨憺の死と相同からざるなし、但殊にするところは去ると留るとのみ。彼等の死ありて聊か吾が活の苦きをも慰むべきか、吾が活ありて、始めて彼等が死の傷きを弔ふに足らんか。吾が腸は断たれ、吾が心は壊れたり、彼等が肉は爛れ、彼等が骨は砕けたり。活きて爾苦める身をも、なほさすがに魂も消ぬべく打駭かしつる彼等が死状なるよ。産を失ひ、家を失ひ、猶も身を失ふに尋常の終を得ずして、極悪の重罪の者といへども未だ曾て如此き虐刑の辱を受けず、犬畜生の末までも箇様の業は曝さざるに、天か、命か、或は応報か、

然れども独り吾が直行をもて世間に善を作さざる者と為すな  
れ。人情は暗中に刃を揮ひ、世路は到る処に陥穽を設け、陰に  
陽に悪を行ひ、不善を作さざるはなし。若し吾が直行の行ふと  
ころをもて咎むべしと為さば、誰か有りて咎められざらん、し  
かも猶甚きを為して天も憎まず、命も薄んぜず、応報もこれ  
を避るもの有るを見るにあらずや。彼等の惨死を辱むるなかれ、  
適ま奇禍を免れ得ざりしのみ。

かく念へる貫一は生前の誼深かりし夫婦の死を歎きて、この  
永き別を遣方も無く悲み惜むなりき。さて何時までかここに在  
らんと、主の遺骨を出せし辺を拝し、又妻の屍の横はりし処を拝  
して、心侘く立去らんとしたりしに、彼は怪くも遽に胸の内の  
搔乱るる心地するとともに、失せし夫婦の弔ふ者もあらで闇路  
の奥に打棄てられたるを悲く、あはれ猶少時留らずやと、いと

迫めて乞ひ縊ると覺ゆるに、行くにも忍びず、又立還りて積みたる土に息へり。

実に彼も家の内に居て、遺骸の前に限知られず思ひ乱れんよ  
り、ここには亡き人の傍にも近く、遺言に似たる或る消息をも  
得るらん想して、立てたる杖に重き頭を支へて、夫婦が地下に  
齎せし念々を冥搜したり。やがて彼は何の得るところや有りけ  
ん、繁き涙は滂沱と頬を伝ひて零れぬ。

夜陰に轟く車ありて、一散に飛し来りけるが、焼場の際に止  
りて、翩と下立ちし人は、直ちに鰐淵が跡の前に尋ね行きて歩  
を住めたり。

焼瓦の踏破かるる音に面を擡げたる貫一は、件の人影の近く  
進来るをば、誰ならんと認むる間も無く、

「間さんですか」

「おお、貴方は！ お帰来かへりでしたか」

その人は待ちに待たれし直道なり。貫一は忙いそがく出迎へぬ。向むかひて立てる両箇ふたりは月明つきあかりに面を見合ひけるが、各口吃おのおのくちきつして卒にはかに言ふ能はざるなりき。

「何とも不慮な事で、申上げやうもございませぬ」

「はい。この度は留守中と云ひ、別してお世話になりました」

「私わたくしは事の起りました晩は未だ病院に居りまして、かう云ふ事

とは一向存じませんで、夜明になつて漸やうやく駈着かけつけたやうな始末、

今更申したところが愚痴に過ぎんですけれど、私が居りまし

たらまさかこんな事にはお為せ申さんかつたと、実に残念でな

りません。又お二人にしても余り不覚な、それしきの事に狼狽ろうばい

される方ではなかつたに、これまでの御寿命であつたか、残多のこりおほ

い事を致しました」

直道は塞ふさぎし眼まなこを怠たゆげに開きて、

「何もかも皆焼けましたらうな」

「唯一品ひとしな、金庫が助りました外には、すつかり焼いて了ひまし

た」

「金庫が残りしました？ 何が入つてゐるのですか」

「貨かねも少しは在りませうが、帳簿、証書の類おもが主でございます」

「貸金に關した？」

「さやうで」

「ええ、それが焼きたかつたのに！」

口惜くちをしとの色は絶したたかその面おもてに上のぼれり。貫一は彼が意見の父と

相容あひいれずして、年としごろ来別居せる内情を詳つまびらかに知れば、迫せめてその

喜あはぶべきをも、却かへつてかく憂うれひと為なす故ゆゑを曉さとれるなり。

「家の焼けたの、土蔵の落ちたのは差支さしつかへ無いのです。寧むしろ焼い

て了はんければ成らんのでしたから、それは結構です。両親の  
 歿なくつたのも、私わたくしであれ、貴方であれ、かうして泣いて悲む者は、  
 ここに居る二人きりで、世間に誰一人……さぞ衆みんなが喜んでゐる  
 だらうと思ふと、唯親を喪なくしたのが情無なさけいばかりではないので  
 すよ」

されども堰敢せきあへず流るるは恩愛の涙なり。彼を憚はばりし父と彼  
 を畏おそれし母とは、決して共に子として彼を慈いつくむを忘れざりけり。

その憚はばられ、畏おそれられし点を除きては、彼は他の憚はばられ、畏おそれ  
 られざる子よりも多く愛を被かうむりき。生きてこそ争まひし父よ。亡  
 くての今は、その聴きかれざりし恨より、親として事つかへざりし不孝  
 の悔は直道の心を責むるなり。

生暖なまあたたかき風は急きたに來りてその外套がいとうの翼を吹捲ふきまくりぬ。こはここに  
 失せし母の賜たまひしを、と端無はしなく彼は憶起おもひおこして、さばかりは有ありの

すさびに徳とも為ざりけるが、世間に量り知られぬ人の数の中に、誰か故無くして一紙いっしを与ふる者ぞ、我は今聘へいせられし測量地かへりきたより帰来れるなり。この學術とこの位置とを与へて恩と為ざりしは誰なるべき。外にこれを求むる能はず、重ねてこれを得べからざる父と母とは、相携へて杳はるかに迢はるかに隔つる世の人となりぬ。

炎々たる猛火の裏うちに、その父と母とは苦くるしみ悶もたえて援たすけを呼びけんは幾許いかばかりぞ。彼等は果して誰をか呼びつらん。思ここに到りて、直道あいえつが哀咽こんしんは渾身をばをして涙に化し了らしめんとするなり。

「喜ぶなら世間の奴は喜んだが可いです。貴方あなた一箇ひとりのお心持で御両親は御満足なさるのですから。こんな事を申上げては実に失礼ですけれども、貴方が今日こんにちまで御両親をお持ちになつてゐられたのは、私わたくしなどの身から見ると何よりうらやましお可羨いので、この

世の中に親子の情愛ぐらゐる詐いつはりの無いものは決して御座いませんな、私は十五の歳としから孤児みなしごになりましたのですが、それは、親が附ついてをらんと見縊みくびられます。余り見縊みくびられたのが自棄やけの本もとで、遂つひに私も真人間なりそこなに成損なりつて了つたやうな訳で。固もとより己おのれの至らん罪ではありますけれど、抑そもそも親の附ついてをらんかつたのが非常な不仕合ふしあはせで、そんな薄命な者もかうして在るのですから、それはもう幾歳いくつになつたから親に別れて可いと謂いふ理窟りくつはありませんけれど、聊ちやうどか慰むるに足ると、まあ、思召おぼしめさなければなりません」

貫一のこの人に向ひて親く物言ふ今夜の如き例ためしはあらず、彼の物言はずとよりは、この人の悪にくみ遠とほざけたりしなり。故は、彼こそ父が不善の助手なれと、始より畜生視して、得うべくば撲うつて殺さんとも念ずるなりければ、今彼が言の端々ことばに人がましき

響あるを聞きて、いと異あやしと思へり。

「それでは、貴方真人間に成損なりそこなつたとお言ひのですな」

「さうでございます」

「さうすると、今は真人間ではないと謂ふ訳ですか」

「勿論もちろんでございます」

直道は俯うつむきて言はざりき。

「いや貴方のやうな方に向つてこんな太腐ふてくされた事を申しては済みません。さあ、参りませうか」

彼はなほ俯うつむき、なほ言はずして、頷うなづくのみ。

夜は太いたく更ふけにければ、さらでだに音を絶たてる寂静しづかさはここに澄徹すみわたりて、深くも物を思入る苦しさに直道が蹂躪ふみにじる靴の下に、瓦わらの脆もろく割わるるが鋭く響きぬ。地は荒れ、物は毀こぼたれたる中に一箇ひとりは立ち、一箇ひとりは偃いこひて、言ことばあらぬ姿の佻わびしげなるに照すとも無

き月影の隠々と映添さしそひたる、既に彷彿ほうふつとして悲かなしみの図ゑがきを描成せり。  
かくて暫しばらく有りし後、直道は卒然言ことばを出せり。

「貴方、真人間に成つてくれませんか」

その声音こわねの可愁うれはしき底には情なさけも籠こもれりと聞えぬ。貫一は粗ほぼ彼の  
意さとを曉さとれり。

「はい、難ありがた有うございます」

「どうですか」

「折角ことばのお言ことばではございますが、私わたくしはどうぞこのままにお措おき  
下さいまし」

「それは何なぜ為なですか」

「今更真人間に復かへる必要も無いのです」

「さあ、必要は有りますまい。私も必要から貴方にお勧めする  
のではない。もう一度考へてから挨拶あいさつをして下さいな」

「いや、お氣に障さりましたらお赦ゆるし下さいまし。貴方とは従来これまで浸々しみじみお話を致した事もございませんで私といふ者はどんな人物であるか、御承知はございますまい。私の方では毎々お噂うはさを伺つて、能く貴方を存じてをります。極潔ごくきよいお方なので、精神的きざつに傷いたところの無い御人物、さう云ふ方に対して我々などの心事を申上げるのは、實際恥入る次第で、言ふ事は一々曲つてゐるのですから、正ただしい、直すぐなお耳へは入らんとくころではない。逆ふのでございませう。で、潔い貴方と、拗ねぢけた私とでは、始からお話は合はんですから、それでお話を為る以上は、どうぞ何事もお聞流ききながしに願ひます」

「ああ、善く解りました」

「真人間になつてくれんかと有仰おつしやつて下すつたのが、私は非常に嬉うれしいのでございます。こんな商売は真人間の為る事ではない、

と知つてゐながらかうして致してゐる私の心中、辛つらいのでござ  
 います。そんな思をしつつ何な為ぜしてゐるか！ 曰いはく言難いひがたして、  
 精神的に酷ひどく傷きずつけられた反動と、先まづ思召おぼしめして下さいまし。私  
 が酒が飲めたら自暴酒やげざけでも吃くらつて、体からだを毀こはして、それきりに成  
 つたのかも知れませんが、酒は可いかず、腹を切る勇氣は無  
 し、究つまり竟は意気地の無いところから、こんな者に成つて了つた  
 のであらうと考へられます」

彼の潔きよしと謂いふなる直道ちかみちが潔きよき心の同情は、彼の微見ほのめかしたる  
 述懐じゆわいの為ために稍動ややされぬ。

「お話を聞いて見ると、貴方が今日こんにちの境遇きんぎよになられたに就いて  
 は、余程深い御様子ごようすが有るやう、どう云ふのですか、悉くはく聞きし  
 て下さいませんか」

「極愚ごくぐな話で、到底お聞せ申されるやうな者ではないのです。

又自分もこの事は他には語るまい、と堅く誓つてゐるのでありますから、どうも申上げられません。究竟或事に就いて或者に欺かれたのでございます」

「はあ、それではお話はそれで措きませう。で、貴方もあんな家業は真人間の為べき事ではない、と十分承知してゐらるる、父などは決して愧はづべき事ではない、と謂つて剛情を張り通した。実に浅ましい事だと思ふから、或時は不如父の前で死んで見せて、最後の意見を為るより外は無い、と決心したことも有つたのです。父は飽くまで聴かん、私も飽くまで棄てては措おかん精神、どんな事をしても是非改心させる覚悟で居つたところ、今度の災難で父を失つた、残念なのは、改心せずに死んでくれたのだ、これが一生の遺憾いで。一時に両親ふたおやに別れて、死目にも逢あはず、その臨終と謂へば、気の毒とも何とも謂ひやうの無い……

凡<sup>およ</sup>そ人の子としてこれより上の悲<sup>かなしみ</sup>が有らうか、察し給へ。それに就けても、改心せず<sup>いよいよ</sup>に死なしたのが、愈<sup>いよいよ</sup>よ残念で、早く改心さへしてくれたらば、この災難は免<sup>のが</sup>れたに違<sup>い</sup>ない。いや私はさう信じてゐる。然し、過ぎた事は今更<sup>も</sup>為方が無いから、父<sup>かはり</sup>の代に是非貴方に改心して貰<sup>もら</sup>ひたい。今貴方が改心して下さいれば、私は父が改心したと同じと思つて、それで満足するのです。さうすれば、必ず父の罪も滅びる、私の念も霽<sup>は</sup>れる、貴方も正しい道を行けば、心安く、楽く世に送られる。

成程、お話の様子では、こんな家業に身を墜<sup>おと</sup>されたのも、已<sup>や</sup>むを得ざる事情の為とは承知してをりますが、父への追善、又その遺族の路頭に迷つてゐるのを救ふのと思つて、金を貸すのは罷<sup>や</sup>めて下さい。父に關した財産は一切貴方へお譲り申しますからそれを資本に何ぞ人をも益するやうな商売をして下されば、

この上の喜よろこびは有りません。父は非常に貴方を愛してをつた、貴方も父を愛して下さるでせう。愛して下さるなら、父に代つて非あらたを憐めて下さい」

聴あしたみる貫一は露の晨の草の如く仰ぎ視みず。語り訖をはれども猶仰ぎ視みず、如何いかにと問るるにも仰ぎ視みざるなりけり。

忽たちまち一閃いつせんの光ありて焼跡を貫く道の畔ほとりを照しけるが、その燈ともしびの此方こなたに向ひて近くは、巡查の見み尤とがめて寄来よりくるなり。両箇ふたりは一様に睨みむかへて、待つとしもなく動かずるたりければ、その前に到れる角燈の光は隈くま無く彼等を曝さらしぬ。巡查は如何いかに驚おどきけんよ、かれもこれも各惨おのおのとして蒼あをき面おもてに涙垂れたり——しかもここは人の泣くべき処なるか、時は正まに午前二時半。

続金色夜叉

与紅葉山人書

学海居士

紅葉山人足下。僕幼嗜讀稗史小説。當時行於世者。京伝三馬  
一九。及曲亭柳亭春水数輩。雖有文辭之巧麗。構思之妙絶。  
多是舐古人之糟粕。拾兔園之殘簡。聊以加己意焉耳。独曲亭  
柳亭二子較之余子。学問該博。熟慣典故。所謂換骨奪胎。頗  
有可觀者。如八犬弓張俠客伝。及田舎源氏諸国物語類是也。

然在當時。讀此等書者。不過閭巷少年。畧識文字。間有涉獵史伝者。識見淺薄。不足以判其巧拙良否焉。而文學之士斥為鄙猥。為害風紊俗。禁子弟不得縱讀。其風習可以見矣。一年二十一二。稍讀水滸西遊金瓶三国紅樓諸書。兼及我源語竹取宇津保俊蔭等書。乃知稗史小說。亦文學之一途。不必止游戲也。而所最喜。在水滸金瓶紅樓。及源語。能尽人情之隱微。世態之曲折。用筆周到。渾思巧緻。而源氏之能描性情。文雅而思深。金瓶之能写人品。筆密而心細。蓋千古無比也。近時小說大行。少好文辭者。莫不爭先攘臂其間。然率不過陋巷之談。鄙夫之事。至大手筆如金瓶源氏等者。寥乎無聞何也。僕及讀足下所著諸書。所謂細心邃思者。知不使古人專美於上矣。多情多恨金色夜叉類。殆与金瓶源語相似。僕反覆熟讀不能置也。惜範圍狹。而事跡微。地位卑而思想偏。未足以展布足下

之大才矣。盍借一大幻境。以運思馳筆。必有大可觀者。僕老矣。若得足下之一大著述。快讀之。是一生之願也。足下以何如。

## 第一章

時を錢ぜになりとしてこれを換算せば、一秒を一毛に見積りて、  
 壹人前いちにんまへの睡量ねぶりだかおよ凡そ八時間を除きたる一日の正味十六時間は、実  
 に金五円七拾六錢に相当す。これを三百六十五日の一年に合計  
 すれば、金貳千壹百〇貳円四拾錢の巨額に上るにあらずや。さ  
 ればここに二十七日と推薄おしつまりたる歳末の市中は物情恟々きょうきょうとし  
 て、世界絶滅の期の終つひに宣告せられたらんもかくやとばかりに、  
 坐りし人は出でて歩み、歩みし人は走りて過ぎ、走りし人は足

も空に、合ふさ離るさの氣立く、肩相摩しては傷き、轂相撃ちては碎けぬべきをも覺えざるは、心々に今を限と慌て騒ぐ事ありて、不狂人も狂せるなり。彼等は皆過去の十一箇月を虚に送りて、一秒の塵の積める式千余円の大金を何処にか振落し、後悔の尾しりに立ちて今更に血眼ちまなこを瞪みひらき、草を分け、瓦おこを揆おこしても、その行方ゆくへを尋ねんと為るにあらざるなし。かかる間ひまにも常は止一毛ただに値する一秒の壹錢ないし乃至拾錢とびすぐにも暴騰せる貴々重々の時は、速射砲つるべうちを連発にするが如く飛過るにぞ、彼等の恐慌は更に意言こころことばも及ばざるなる。

その平生へいぜいに怠無かりし天は、又今日おこたりなに何の変易へんえきもあらず、悠悠ゆうゆうとして蒼あをく、昭々ひろとして闊ひろく、浩浩こうこうとして静ひねもすに、しかも確然としてその覆おほふべきを覆おほひ、終日ひねもす北の風おろを下おろし、夕ゆふづ付く日の影みわたを耀かがやかして、師走しはすの塵ちりの表おもてに高く澄めり。見遍みわたせば両行かどかざりの門飾かどかざりは一

様に枝葉の末広く寿山の翠を交し、十町の軒端に続く注連繩は、  
 福海の霞揺曳して、繁華を添ふる春待つ景色は、転た旧り行く  
 歳の魂を驚かす。

かの人々の式千余円を失ひて馳違ふ中を、梅提げて通るは誰が  
 子、獵銃担げ行くは誰が子、妓と車を同うするは誰が子、啣楊枝  
 して好き衣着たるは誰が子、或は二頭立の馬車を駆る者、結納  
 の品々担する者、雑誌など読みもて行く者、五人の子を数珠繫  
 にして勸工場に入る者、彼等は各若干の得たるところ有りて、  
 如かく自ら足れりと為るにかあらん。これ等の少く失へる者は  
 喜び、彼等の多く失へる輩は憂ひ、又稀には全く失はざりし人の  
 樂めるも、皆内には齷齪として、盈てるは虧けじ、虧けるは盈た  
 んと、孰かその求むるところに急ならざるはあらず。人の世は  
 三の朝より花の昼、月の夕にもその思の外はあらざれど、勇怯

は死地に入りて始て明なる年の関を、物の数とも為ざらんほど  
 を目にも見よとや、空臚の酔を踏み、鉄鞭を曳き、一卷のブック  
 ふところを懐にして、嘉平治平の袴の焼海苔を綴れる如きを穿ち、フラ  
 ネルの浴衣の洗ひ曬して垢染にしたるに、文目も分かぬ木綿縞  
ぬのこの布子を襲ねて、ジオンソン帽の瓦色に化けたるを頂き、焦茶  
しまらしや地の縞羅紗の二重外套は何の冬誰が不用をや譲られけん、尋常  
 よりは寸の薄りたるを、身材の人より豊なるに絡ひたれば、例  
ふぎちぎの袴は風にや吹断れんと危くも閃きつつ、その人は齡三十六七  
 と見えて、形癩せたりとにはあらねど、寒樹の夕空に倚りて孤  
ふぜいなる風情、独り負ふ氣無く麗くも富める髭髯は、下には乳の辺  
さんさんまで毳々と垂れて、左右に拈りたるは八字の蔓を巻きて耳の根  
およにも迨びぬ。打見れば面目爽めんもくさはやかに、稍傲れる色有れど峻くはあ  
 らず、しかも今陶々然として酒興を発し、春の日長の野辺を辿

るらんやうに、西筋の横町をこの大路に出で来らんとす。

「瓢ひょう空くうく夜よは静しづかにして高樓のぼに上り、酒さけを買かひ、簾れんを巻まき、月つきを邀むかへて酔よひ、酔中劍すいちゆうけんを払はらへば光月ひかりつきを射やる」

彼は節ふしをかしく微吟わいごを放はなちて、行く行くかつ楽らくむに似にたり。

打晴うちはれたる空そらは瑠璃色るりいろに夕榮ゆふばえて、俄にはかに冴さえ勝まさる颯さの目口こがらしに沁し

みて磨鍼とぎはりを打うつらんやうなるに、烈火れつゑの如ごとき酔顔よゐを差さ付けては

太息ふといきふ嘘うそいて、右みぎに一歩いっ左ひだりに一歩いっと躡よろめきつつ、

「おうおうひかひとりり流涕りゆうていす、君山くんざんを剗き却きやくして湘水平しやうすいに桂樹けいじゆを砍しやく却きやく

して月更さらに明あきらならんを、丈夫志じやうふこころざし有ありて……」

と唱うたひ出いづる時とき、一隊いったいの近衛騎兵このえきへいは南頭みなみがしらに馬ばを疾はやめて、真ま一文字いちもんじ

に行手いを横断たするに会あひければ、彼は鉄鞭てつべんを植たてて、舞立まつ砂煙すなけむり

の中に魁さきがけの花はなを装よそほへる健児けんざいの参差さんさとして推行おしゆく後影うしろかげをば、壮さかんな

哉かなと謂いはまほしげに看送みおくりて、

「我四方に遊びて意を得ず、陽狂して葉を施す成都の市」

と漫にその詩の首をばはじめ小声朗こゝろほがらかに吟じりたり。さては往来の

違き目も皆牽れて、この節季の修羅場を独天下に吃ひ酔へる

は、何者の暢気か、自棄か、豪傑か、悟か、酔生児か、と異き

姿を見て過る有れば、面を識らんと窺ふ有り、又はその身の上

など思ひつつ行くも有り。彼は太く酔へれば総て知らず、町の

殷賑を眺め遣りて、何方を指して行かんと心定らず姑く立て

るなりけり。

さばかり人に怪まるれど、彼は今日のみこの町に姿を顕した

るにあらず、折々散歩すらんやうに出来ることあれど、箇様の

酔態を認むるは、兼て注目せる派出所の巡査も希しと思へるな

り。

やがて彼は鉄鞭を曳鳴して大路を右に出でしが、二町ばかり

も行きて、乾いぬみの方かたより狭き坂道の開きたる角かどに來にける途端とたんに、  
 風を帯びて馳はせくだ下りたる俚くるまは、生憎あいにくそなた其方よろめに躑すいかくける醉客よわごしの賺あたりの辺を  
 ひとあてあ  
 一衝撞ひとしてたりければ、彼は卻はずみ含みを打つて二間も彼方そなたへ撥飛はねとばさる  
 ると齊ひとしく、大地よこづらすに横面擦たふつて僵たふれたり。不思議にも無難ふみとどまに踏留  
 りし車夫は、この鹿忽そこつに氣を奪れて立ちたりしが、面倒なる相手  
 と見たりけん、そのまま轆かぢを回して逃れんとするを、俚くるまの上なる  
 黒綾くろあやの吾妻あづまコオト着て、素鼠縮緬すねずみちりめんの頭巾づぎんかぶ被れる婦人は樺色無地  
きぬらつこの絹臘虎ひざかけの膝掛おしのを推除けて、駐とめよ、返せと悶もたゆるを、猶なほ聴きか  
 で曳えい々と挽ひき行く後うしろより、

「待て、こら！」と喝かつする声に、行く人の始て事有りと覚さとれる  
 も多く、はや車夫の不情を尤とがむる語ことばも聞ゆるに、耐たまりかねたる  
 夫人しひは強しひて其処そこに下車して返り來きたりぬ。  
 例の物見高き町中なりければ、この忙せはしき際きはをも忘れて、寄來よりくる

人数は蟻の甘きを探りたるやうに、一面には遭難者の土に踞へる  
にんずあり  
 周辺を擁し、一面には婦人の左右に傍ひて、目に物見んと揉立て  
めぐり  
 たり。婦人は途を来つつ被物を取りぬ。紋羽二重の小豆鹿子の  
みち  
 手絡したる円鬘に、鼈甲脚の金七宝の玉の後簪を斜に、高蒔絵  
てがら  
 の政子櫛を翳して、粧は実に塵をも怯れぬべき人の謂ひ知らず  
まさこぐし  
 思惑へるを、可痛しの嵐に堪へぬ花の顔や、と群集は自ら声を  
おもひまじ  
 歛めて肝に徹ふるなりき。  
をさ  
こた

いと更に面の裏まほしきこの場を、頭巾脱ぎたる彼の可羞し  
おもて  
 さと切なきとは幾許なりけん、打赧めたる顔は措き所あらぬや  
いかばかり  
 うに、人堵の内を急足に辿りたり。帽子も鉄鞭も、懐にせしブツ  
ひとがき  
 クも、薩摩下駄の隻も投散されたる中に、酔客は半ば身を擡げ  
さつまげた  
 て血を流せる右の高頬を平手に掩ひつつ寄来る婦人を打見遣り  
たかほ  
 つ。彼はその前に先づ懦れず会釈して、  
ま  
わるび  
よりく  
うちみや  
もた

「どうも取んだ麁相そそうを致しまして、何とも相済みませんでござい  
ます。おや、お顔を！ お目を打ちましたか、まあどうも……」

「いや太たいした事は無いのです」

「さやうでございませうか。何処どこぞお痛め遊ばしましたでござい  
ませう」

腰を得立てずゐるを、婦人はなほ氣遣きづかへるなり。

車夫は数次あまたたびこし腰を屈かがめて主人の後方うしろより進出すすみいでけるが、

「どうも、旦那だんな、誠に申訳もございませぬ、どうか、まあ平ひらに  
御勘弁を願ひます」

眼まなこを其方そなたに転じたる酔客いかには恚いかれるとしもなければど声肅こゑおどいそかに、

「貴様は善くないぞ。麁相そそうを為たと思つたら何なぜ為車を駐とめん。  
逃げやうとするから呼止めたんじや。貴様の不心得から主人に  
も恥かかを搔かする」

「へい恐入りました」

「どうぞ御勘弁あそばしまして」

俣くるまの主の身をくだ下して辞を添ことばふれば、彼も打領うちうなづきて、

「以来氣を着けい、よ」

「へい……へい」

「早う行け、行け」

やをら彼は起たんとすなり。さては望外なる主従よろこびの喜ひきかに引易へて、見物の飽氣あつけな無さは更に望外なりき。彼等は幕の開かぬ芝居に会へる想して、余あまりに落着の蛇尾だび振はざるを悔みて、はや忙々いそがはしき踵きびすを回かへすも多かりけれど、又見栄みばえあるこの場の模様なごりに名残を惜みつつ去り敢あへぬもありけり。

車夫は起ち悩める酔客たすを扶たすけて、履物はきものを拾ひ、鞭むちを拾ひて宛行あてがへば、主人は帽を清め、ブックを取上げて彼に返し、頭巾を車

夫に与へて、懇ねんごろに外套がいとう、袴はかまの泥を払はしめぬ。免ゆるされし罪は消えぬべきも、歴々まざまざと挫傷すりきずのその面おもてに残れるを見れば、疚やましきに堪へぬ心は、なほ為なすべき事あるを吝をしみて私わたくしせるにあらざるやと省られて、彼はさすがに見捨てかねたる人の顔を始いたまは可傷なしと眺めたりしに、その眼色まなざしは漸やうやく鋭く、かつは疑ひかつは怪むらんやうに、忍びては矚まもりつつ便無びんなげに佇たたずみけるに、いでや長居は無益むやくとばかり、彼は蹠踉よろよろと踏出ふみいだせり。

婦人はとにもかくにも遣過やりすじせしが、又何おもひなほとか思直おもひなほしけん、遽にはかに追行きて呼止めたり。頭かしらを捻向ねぢむけたる酔客くもは眊まなこれる眼を屹きと見据みゑて、自われか他ひとかと訝いぶかしさに言ことばも出いださず。

「もしお人違ひとちがひでございましたら御免あそばしまして。貴方あなたは、あの、もしや荒尾さんではゐらつしやいませんですか」  
 「は？」彼は覚えず身を回かへして、丁ちようと立てたる鉄鞭てつべんに仗より、こ

は是これ白日の夢か、空華くわげの形か、正体見んと為れど、酔眼むなしの空く張るのみにて、益ますます霽はれざるは疑うたがひなり。

「荒尾さんでゐらつしやいましたか！」

「はあ？ 荒尾です、私わたくし荒尾です」

「あの間貫はまぐま一を御承知の？」

「おお、間貫一、旧友でした」

「わたくししきさわ私わたくしは鳴沢の宮でございます」

「何、鳴沢……鳴沢の……宮と有仰おつしやる……？」

「はい、間の居りました宅の鳴沢」

「おお、宮さん！」

奇遇に驚かされたる彼の酔ゑひは頓とみに半なかばは消えて、せめて昔おもかげの倂おもかげを認むるや、とその人を打眺うちながむるより外はあらず。

「お久しぶりで御座いました」

宮はよろこび勇みてひしと寄りぬ。

今はうつくしくくるま美き俤の主ならず、路傍の酔客ならず名なのりあ宣合へるかれと

これとの思はいかに如何。間貫一が鳴沢の家に在りし日は、彼の兄の

如く友として善かりし人、彼の身の如く契りていと怜かりし人にあ

らずや。その日の彼等は又はらから同胞にも得べからざるしたしみも親を以て、膝

をも交まじへ心をも語りしにあらずや。その日の彼等は多少の転変

を覚悟せし一生の中に、今日の奇遇を算かぞへざりしなり。よしさ

りとも、一ひとたびはらから同胞と睦合むつみあへりし身の、弊衣へいゐをひるがへ飄して道に酔よひ、

流車を駆りて富におご驕れる高下こうげの差別しやべつの自おのづから種有りて作なせるに似

たる如此かくのごときを、彼等は更に更に夢ゆめざりしなり。その算かぞへざりし

奇遇と夢ゆめざりし差別しやべつとは、咄々とつとつ、相携へて二人の身上しんじように逼せまれる

なり。女気をんなぎの脆もろき涙ははや宮の目にうるほ湿ひぬ。

「まあ大相お変り遊ばしたこと！」

「貴方あなたも変りましたな！」

さしも見えざりし面おもての傷おそろしの可おそろし恐おそろしきまでに益ますます血いを出いだすに、宮は持もたりしハンカチーフを与よへて拭ぬぐはしめつつ、心も心ならず様子うかがを窺うかがひて、

「お痛みあそばすでせう。少しお待ちあそばしまし」

彼は何やらん吩咐いひつけて車夫を遣りぬ。

「直ちぢきこの近くに懇意の医者が居りますから、其そこ処こまでいらしつて下さいまし。唯今俵を申附けました」

「何の、そんなに騒ぐほどの事は無いです」

「あれ、お殆あぢみなうございますよ。さうして大相召上つてゐらつしやるやうですから、ともかくもお俵いでお出いであそばしまし」

「いんや、宜よろしい、大丈夫。時に間はその後どうしましたか」

宮は胸先むなさきを刃やいばの透とほるやうに覚おぼゆるなりき。

「その事に就きまして色々お話も致したいので御座います」

「然し、どうしてもありますか、無事ですか」

「はい……」

「決して、無事ぢやない筈です」

生きたる心地もせずして宮の慙ぢは慄をのける傍かたはらに、車夫は見苦みぐるしからぬ一台の辻車つじぐるまを伴きたひ来れり。漸やうやく面おもてを拳あぐれば、いつ又寄りしとも知らぬ人立ひとたちを、可忌いまはしくも巡査の怪ちかづみて近くなり。

## 第二章

ひげふかよこづら 鬚深き横面はりくすりに貼薬あらおじようすけしたる荒尾讓介あをは既ゑひさに蒼こうこうく酔醒せいめて、煌々せつたいたぼこたる空気ラムプひだの前に襞積おごそかもあらぬ袴はかまの膝ひざを丈六じようろくに組ななめみて、接待せつたいたぼこ苳ななめの葉卷くゆを燻おごそかしつつ意気うちしを肅うちしをに、打菱うちしをれたる宮と熊の敷皮ななめを斜ななめに差

向ひたり。こはこれ、彼の識しれると謂いひし医師の奥二階にて、  
 畳敷にしたる西洋造の十畳間なり。物語ははや緒いとぐちを解きしなる  
 べし。

「間まが影かげを隠す時、僕わがに遺のこした手紙が有る、それで悉くはい様子を  
 知つてをるです。その手紙を見た時には、僕も顫ふるへて腹が立つ  
 た。直すぐに貴方あなたに会あうて、是非これは思返すやうに飽くまで忠告  
 して、それで聴かずば、もう人間の取扱は為ちやをられん、腹の  
 癒いゆるほど打踏うちのめして、一生結婚の成らんやう立派な不具かたはにして  
 くれやう、と既にその時は立上つたですよ。然し、間まが言ことばを尽  
 しても貴方が聴かんと云ふ、僕の言ことばを容ゆるれやう道理が無い。又  
 間まを嫌きらうた以上は、貴方は富山への売物じや。他ひとの売物うりものに疵きずを  
 附つけちや済まん、ときさう思うて、そりや実に矢も楯たても耐たらん胸  
 を拏さつて了しまうたんです」

宮が顔を推当おしあてたる片袖かたそでの端はしより、連しきりに眉まゆの顰ひそむが見えぬ。

「宮さん、僕は貴方はさう云ふ人ではないと思うた。あれ程互に愛してをつた間はざまさへが欺かれたんぢやから、僕の欺れたのは無理も無いぢやらう。僕は僕として貴方を怨うらむばかりでは慊あきたらん、間に代つて貴方を怨うらむですよ、いんや、怨うらむ、七生しちしようまで怨うらむ、きつと怨うらむ！」

終つひに宮が得堪えたへぬ泣音なくねは洩もれぬ。

「間の一身を誤つたのは貴方が誤つたのぢや。それは又間にしても、高たかが一婦女子いつぶじよしに棄てられたが為に志こじを挫くじいて、命なげうを抛なげつたも同然の墮落に果てる彼の不心得は、別に間として大いに責めんけりやならん。然し、間が如何いかに不心得であらうと、貴方の罪は依然として貴方の罪ぢや、のみならず、貴方が間を棄てた故ゆゑに、彼かれが今日こんにちの有様に墮落したのであつて見れば、貴方は

女の操を破つたのみでない。併せて夫を刺殺したも……」

宮は慄然として振仰ぎしが、荒尾の鋭き皆は貫一が怨も憑りたりやと、その見る前に身の措所無く打竦みたり。

「同じですよ。さうは思ひませんか。で、貴方の悔悟されたのは善い、これは人として悔悟せんけりやならん事。けれども残念ながら今日に及んでの悔悟は業に晚い。間の墮落は間その人の死んだも同然、貴方は夫を持つて六年、なあ、水は覆つた。盆は破れて了うたんじや。かう成つた上は最早神の力も逮ぶことではない。お気の毒じやと言ひたいが、やはり貴方が自ら作せる罪の報で、固よりかく有るべき事ぢやらうと思ふ」

宮は俯きてよよと泣くのみ。

呵、吾が罪！ さりとも知らで犯せし一旦の吾が罪！ その

吾が罪の深さは、あの人ならぬ人さへかくまで憎み、かくまで

怨むか。さもあらば、必ず思知る時有らんと言ひしその人の、  
 争いいで争いで吾が罪を容ゆるすべき。吁あ、吾が罪は終つひに容ゆるされず、吾が  
 恋人は終つひに再び見る能はざるか。

宮は胸潰むねつぶれて、涙の中に人心地ひとしこちをも失はんとすなり。

おのれ、利を見て愛無かりし匹婦ひつぽ、憎しとも憎しと思はざる  
 にあらぬ荒尾も、当面に彼の悔悟の切なるを見ては、さすがに  
 情じやうは動くなりき。宮は際無はてしなく顔を得え挙げあげずみたり。

「然し、好う悔悟を作なつた。間が容さんでも、又僕が容さんで  
 も、貴方はその悔悟に因よつて自ら容ゆるされたんじや」

由無よしなき慰藉なぐさめは聞かじとやうに宮は俯ふしながら頭かしらを掉ふりて更に  
 泣入りぬ。

「自みづからにても容ゆるされたのは、誰たれにも容ゆるされんものには勝まさつてをる。  
 又自ら容ゆるさるるのは、終つひには人に容ゆるさるるそれが始はじちやらうと

謂いふもの。僕は未まだ未まだ容し難く貴方を怨む、怨みは為るけれど、今日こんにちの貴方の胸中は十分察するのです。貴方のも察するからには、他の者の間まの胸中もまた察せにやならん、可いですか。さうして孰いづれが多く憐あはれむべきであるかと謂へば、間の無念そもそもは抑おさえんなぢやらうか、なあ、僕はそれを思ふんです。それを思うて見ると、貴方の苦痛を傍観するより外は無ない。

かうして今日こんにち図らずお目に掛つた。僕は婦人として生涯の友にせうと思うた人は、後にも先にも貴方ばかりじや。いや、それは段々お世話にもなつた、忝かたじけないと思うた事も幾度いくたびか知れん、その媛友レディフレンドに何年ぶりかで逢うたのぢやから、僕も実まに可な懐なう思おもひました」

宮なくねは泣音ほとぼしの迸くひしらんとするを咬くひし緊ひめて、濡ぬれ浸ひたれる袖そでに犇ひし々と面おもてを擦すり付つけたり。

「けれど又、円鬚まるわけに結うて、立派たてにしてゐらるるのを見りや、決して可愛かはゆうはなかつた。幸ひ貴方が話したい事が有ると言いはる、善し、あの様に間を詐いつはつた貴方じや、又僕を幾何どれほど詐ることぢやらう、それを聞いた上で、今日こそは打踏うちのめしてくれやうと待つてをつた。然るに、貴方の悔悟、僕は陰ひそかに喜んで聴いたのです。今日の貴方はやはり僕の友フレンドの宮さんぢやつた。好う貴方悔悟なすつた！ さも無かつたら、貴方の顔にこの十倍の疵きずを附けにや還かへさんぢやつたのです。なあ、自ら容されたのは人に赦さるる始——解りましたか。

で、間に取成してくれい、詫わびを言うてくれい、とのお囑たまひぢやけれど、それは僕は為せん。為んのは、間に対してどうも出来んのぢやから。又貴方に罪有りと知つてをりながらその人から頼まるる僕でない。又僕が間であつたらば、断じて貴方の罪は容

さんのぢやから。

かうして親友の敵かたきに逢うてからに、指も差さずに別るる、これが荒尾の貴方に対する寸志と思つて下さい。いや、久しぶりで折角お目に掛りながら、可厭いやな言ことばかり聞せました。それぢや、まあ、御機嫌ごきげん好う、これでお暇いとまします」

会釈して荒尾の身を起さんとする時、  
「暫しばらく、どうぞ」宮は取乱したる泣顔を振挙ふりあげて、重まき瞼まぶたの露を払へり。

「それではこの上どんなにお願い申しましても、貴方はお詫を為なすつては下さらないので御座いますか。さうして貴方もやはり私わたくしを容ゆるさんと有仰おつしやるので御座いますか」

「さうです」

忙せはしげに荒尾は片膝かたひざ立ててゐたり。

「どうぞもう暫くみらしつて下さいまし、唯今直に御飯が参りますですから」

「や、飯めしなら欲うありませんよ」

「私は未だ申上げたい事が有るのでございますから、荒尾さんどうかお坐り下さいまし」

「いくら貴方が言うたつて、返らん事ぢやありませんか」

「そんなにまで有仰らなくても、……少しは、もう堪忍かんにんなすつて下さいまし」

火鉢ひばちの縁ふちに片手を翳かざして、何をか打案さまずる様なる目を翥そらしつつ荒尾は答へず。

「荒尾さん、それでは、とてもお聴入ききいれはあるまいと私は諦あきらめましたから、貫一かんいつさんへお詫の事はもう申しますまい、又貴方に容して戴く事も願ひますまい」

咄嗟とつさに荒尾の視線は転じて、猶かたりつづく語続つづる宮が面おもてを掠かすめ去さりぬ。「唯一目私は貫一さんに逢あひまして、その前でもつて、私の如何いかにも悪かつた事を思ふ存分謝あやまりたいので御座います。唯あの人目の前で謝りさへ為たら、それで私は本望なのでございます。素もとより容してもらはうとは思ひません。貫一さんが又容してくれやうとも、ええ、どうせ私は思ひは致しません。容されなくても私はかまひません。私はもう覚悟を致し……」

宮は苦しげに涙を呑みて、

「ですから、どうぞ御一所にお伴れなすつて下さいまし。貴方がお伴れなすつて下されば、貫一さんはきつと逢あつてくれます。逢つてさへくれましたら、私は殺されましても可よいので御座います。貴方と二人で私を責めて責めて責め抜いた上で、貫一さんに殺さして下さいまし。私は貫一さんに殺してもらひたいの

で御座います」

感に打れて霜置く松の如く動かざりし荒尾は、たちま忽ちその長き髯ひげを振りて頷うなづけり。

「うむ、面白い！ 逢うて間に殺されたいとは、宮さん好いう言はれた。さうなけりやならんじや。然し、なあ、然しじや、貴方は今は富山の奥さん、唯ただ継つぐと云ふ夫の有る身じや、滅多な事は出来んですよ」

「私がかまひません！」

「可かん、そりや可かん。間に殺されても辞せんと云ふその悔悟は可いが、それぢや貴方は間有るを知つて夫有るの知らんのじや。夫はどうなさるなあ、夫に道が立たん事になりはせまいか、そこも考へて貰はにやならん。」

して見りや、始には富山が為に間を欺き、今又間の為あなたに貴方

は富山を欺くんじや。一人ならず二人欺くんじや！ 一方には悔悟して、それが為に又一方に罪を犯したら、折角の悔悟の効なくなは没つて了ふ」

「そんな事はかまひません！」

無慙むざんに唇を咬くちびるみて、宮は抑へ難くも激せるなり。

「かまはんぢや可かん」

「いいえ、かまひません！」

「そりや可かん！」

わたくし「私はもうそんな事はかまひませんのです。私の体はどんなに

なりませうとも、疾とから棄ててをるので御座いますから、唯も

う一度貫一さんにお目に掛つて、この気の済むほど謝りさへ致

したら、その場でもつて私は死にましても本望なのですから、

富山の事などは……不いっそ如さうして死んで了ひたいので御座いま

す」

「それそれさう云ふ無考な、訳の解らん人に僕は与することは出来んと謂ふんじや。一体さうした貴方は了簡ぢやからして、始に間をも棄てたんじや。不埒です！ 人の妻たる身で夫を欺いて、それでかまはんとは何事ですか。そんな貴方が了簡であつて見りや、僕は寧ろ富山を不憫に思ふです、貴方のやうな不貞不義の妻を有つた富山その人の不幸を慫まんけりやならん、いや、慫む、貴方よりは富山に僕は同情を表する、愈よ憎むべきは貴方じや」

四途乱しどろに湿うるほへる宮の目は焚もゆらんやうに耀かがやけり。

「さう有仰おつしやつたら、私はどうして悔悟したら宜よろしいので御座いませう。荒尾さん、どうぞ助けると思召おぼしめしてお誨をしへなすつて下さいます」

「僕には誨へられんで、貴方がまあ能う考へて御覧なさい」

「三年も四年も前から一日でもその事を考へません日と云つたら無いのでございます。それが為に始終怏々と全で疾つてをるやうな気分で、噫もうこんななら、いつそ死んで了はう、と熟くさうは思ひながら、唯もう一目、一目で可うございますから貫一さんに逢ひませんでは、どうも死ぬにも死なれないので御座います」

「まあ能う考へて御覧なさい」

「荒尾さん、貴方それでは余りでございますわ」

独ひとりに余る心細さに、宮は男の袂たもとを執りて泣きぬ。理切ことわりせめて荒尾もその手を払ひかねつつ、吾ならぬ愁むねふさがに胸塞むねふさがれて、実げにもと覚ゆる宮が衰容やつれすがたまなこに眼こころを凝しむたり。

「荒尾さん、こんなな思つて私は悔悟してをるのぢやございま

せんか、昔の宮だと思召して頼たのみに成つて下さいまし。どうぞ、荒尾さん、どうぞ、さあ、お誨をしへなすつて下さいまし」  
 涙なみだに昏くれてその語ことばは能くも聞えず、階はしご子下の物音は膳ぜん運び出いづるなるべし。

果して人の入いり来て、夕ゆふ餉けの設まうけすとして少しば時まじ紛ざられし後、二人は謂いふべからざる佗わびし無言むごんの中に相あひ対たいするのみなりしを、荒尾は始はじて高たかく咳せききつ。

「貴方の言いるる事は能よう解とつてをる、決して無理とは思はんです。如何いかにも貴方に誨しへて上げたい、誨しへて貴方の身の立つやうな処置しよで有るなら、誨しへて上げんぢやないです。けれどもじや、それが誨しへて上げられんのは、僕が貴方であつたらかう為ると云ふ考かん量りやうに止とどまるので……いや、いや、そりや言いれん。言いうて善よい事ことなら言いひます、人ひとに對たいして言いふべき事ことでない、況いはんや誨し

ふべき事ではない、止ただ僕一箇の了簡として肚はらの中に思うたま  
 での事、究竟つまり荒尾的空想に過ぎんのぢやから、空想を誨へて人  
 を誤つてはどうもならんから、僕は何も言はんので、言はんぢ  
 やない、實際言得んのじや、然し猶能なほよう考へて見て、貴方に誨  
 へらるる方法を見出みいだしたら、更にお目に掛つて申上げやう。折  
 が有つたら又お目に掛ります。は、僕の居住すまひは、まあ  
 言はん方が可い、蚤あまが子こなれば宿も定めずじや。言うても差支さしつかへ  
 は無いけれど、貴方に押掛けらるると困るから、まあ言はん。  
 は、如何いかにも、こんな態なりをしてをるので、貴方は吃驚びっくりなすつた  
 か、さうでせう。自分にも驚いてをるのでやけれどどうも為方  
 が無い。僕の身の上に就ては段々子細が有るですとも、それも  
 お話したいけれど、又この次に。

酒は余り飲むな？ はあ、今日のやうに酔うた事は希まれです。

忝い、折角の御忠告ぢやから今後は宜い、氣を着くるです。

力に成つてくれと言つたとて、義として僕は貴方の力には成れんぢやないですか。貴方の胸中も聴いた事ぢやから、敵にはなるまい、けれど力には成られんですよ。

間にもその後逢はんのですとも。一遍逢うて聞きたい事も言ひたい事も頗る有るのぢやけれども。訪ねもせんので。それによ一向意味は無いですとも。はあ、一遍訪ねませう。明日訪ねてくれい？ さうは可かん、僕もこれでなかなか用が有るのぢやから。ああ、貴方も浮世が可厭か、僕も御同様じや。世の中と云ふものは、一つ間違ふと誠に面倒なもので、僕なども今日の有様では生効の無い方じやけれど、このままで空く死ぬるも残念でな、さう思うて生きてはをるけれど、苦しみつつ生きてをるなら、死んだ方が無論勝です。何故命が惜いのか、考へ

て見ると頗る解すこぶなくわからなる」

語りつつ彼は食をを了りぬ。

「嗚呼ああ、貴方に給仕して貰ふのは何年ぶりと謂ふのかしらん。間も善う食うた」

宮は差含さしぐむ涙なみだを啜すすれり。尽きせぬ悲かなしみを何時までか見んとやうに荒尾は俄にはかに身支度して、

「こりや然し却かへつてお世話になりました。それぢや宮さん、お暇いとま」

「あれ、荒尾さん、まあ、貴方……」

はや彼は起てるなり。宮はその前に塞ふさがりて立ちながら泣きぬ。

「私はどうしたら可いのでせう」

「覚悟一つです」

始をて誨をしふるが如く言放ちて荒尾の排かきのけ行かんとするを、彼は

猶も縋りて、

「覚悟とは？」

「読んで字の如し」

驚破すはや、彼の座敷を出づるを、送りも行かず、坐りも遣やらぬ宮が姿は、寂さびしくも壁に向ひて動かざりけり。

### 第三章

門かど々の松は除かれて七八日も過ぎぬれど、なほ正月機嫌きげんの失せぬ富山唯繼は、今日も明日もと行処ゆきどころを求めては、夜を晷ひに継ぎて打廻うちめぐるなりけり。宮は毫いささかもこれも咎とがめず、出づるも入いるも唯彼の為なすに任せて、あだかも旅館あるじの主すの為らんやうに、形かたばかりの送迎を怠らざると謂いふのみ。

この夫に對する仕向しむけは両三年來の平生へいぜいを貫きて、彼の性質と  
 も病身の故ゆゑとも許さるるまでに目慣めならされて又彼方あなたよりも咎めら  
 れざるなり。それと共に唯繼おこなひの行も曩日さきのひとは漸やうやく變りて、出遊であそび  
 に耽ふけらんとする傾かたむきも出いで来きしを、浅瀬あさせの浪なみと見みし間まも無く近おき  
 頃にはかより俄ふかに深ふか陥はまりして浮うかると知れたるを、宮なほは猶なほしも措おきて咎  
 めず。他ひとは如何いかにとも為せよ、吾身わがみは如何いかにとも成らば成れと互  
 に咎めざる心易こころやすさを偷ぬすみて、異あやしき女夫めをとの契つなを繋つなぐにぞありける。  
 かかれども唯繼おこなひはなほその妻を忘れんとはせず。始終うきの憂うれひに  
 瘁やつれたる宮みやは決して美うつくしき色を減くぜざりしよ。彼かがその美うつくししさを  
 變へざる限は夫の愛は虧かくべきにあらざりき。抑そもそもここに嫁とつぎ  
 しより一点の愛だに無なかりし宮みやの、今いまに到いたりては啻ただに愛無なきに  
 止とどまらずして、陰ひそかに厭いとひ憎にくめるにあらざりしや。その故ゆゑに彼は漸やうやく家  
 庭ていの樂たのしみからざるをも感あはれずるにあらざりしや。その故ゆゑに彼は外ほかに出で

て憂うさを霽はらすに忙いそぎにあらずや。されども彼の忘れずねぐら時ときに帰り  
 来きたるは、又この妻の美うつくしき顔を見んが為のみ。既にその顔を見みた  
 れば、何ばかりの楽たのしみのあらぬ家庭は、彼をして火無ストーブき煖かたはら炉ろの傍  
 に処をらしむるなり。彼の凍こえて出いでざること無し。出いづれば幸さいひ  
 にその金力よに頼たりて勢いきほを得、媚こびを買かひて、一時の慾ほしいまを肆まにし、  
 其そこ処こには楽たのしみむとも知らず楽たのしみみ、苦くるしみむとも知らず苦くるしみみつつ宮みやが空むなし  
 き色いろ香かに溺おぼれて、内うちにはかかる美うつくしきものを手活ていけの花はなと眺ながめ、外  
 には到いたるところに当世はぶしの鬪たたかひを鳴なして推廻おしますが、此上こよな無なう紳士しんしの  
 願ねがひ足たりれりと心得こころえたるなり。

いで、その妻は見るも厭いとき夫おとこの傍そばに在ある苦くるしみを片時ひとときも軽かろくせん  
 とて、彼の繁しげき外そと出でを見みゆること赦ゆるして、十度とたびに一度ひとたびも色いろを作なさざるを  
 風引かぜひかぬやうに召よしませ猪牙ちよぎとやらの難ありがた有あき賢女けんじよの志いとも戴いたき  
 喜よろこびて、いと堅かたき家いへの守まもりとかつは等閑なほざりならず念おもひにけり。さる

は独り夫のみならず、本家の両親を始親属知辺に至るまで一般に  
 彼の病身を憫みて、おとなしき嫁よと賞め揚さぬはあらず。実  
 に彼は某の妻のやうに出行かず、くれがしの夫人のやうに氣儘  
 ならず、又は誰々の如く華美を好まず、強請事せず、しかもそ  
 れ等の人々より才も容も立勝りて在りながら、常に内に居て夫  
 に事ふるより外を為ざるが、最伶しと見ゆるなるべし。宮が裏  
 める秘密は知る者もあらず、躬も絶えて異まるべき穂を露さざ  
 りければ、その夫に事へて撻々しからぬ偽も偽とは為られず、  
 却りて人に憫まるるなんと、その身には量無き幸を享くる心の  
 内に、独り遣方無く苦める不幸は又量無しと為ざらんや。  
 十九にして恋人を棄てにし宮は、昨日を夢み、今日を嘆ちつ  
 つ、過せば過ぎるる月日を累ねて、ここに二十あまり五の春を  
 迎へぬ。この春の齎せしものは痛悔と失望と憂悶と、別に空く

その身を老しむる齡なるのみ。彼は積れざる囚にも同かる思を  
 悩みて、元日の明るよりいとど懊惱の遣る方無かりけるも、年  
 の始といふに臥すべき病ならねば、起きるままに本意ならぬ  
 粧も、色を好める夫に勧められて、例の美しと見らるる浅まし  
 きより、猶甚き浅ましさをその人の陰に陽に恨み悲むめり。  
 宮は今外出せんとする夫の寒凌ぎに葡萄酒飲む間を暫く長火鉢  
 の前に冊くなり。木振賤からぬ二鉢の梅の影を帯びて南縁の障  
 子に上り尽せる日脚は、袋棚に据ゑたる福寿草の五六輪咲揃へ  
 はなびらる葩に輝きつつ、更に唯繼の身よりは光も出づらんやうに、彼  
 は昼眩き新調の三枚襲を着飾りてその最も珍と為る里昂製の白  
 の透織の絹領巻を右手に引摺ひ、左に宮の酌を受けながら、  
 「あ、拙い手付……ああ零れる、零れる！これは恐入つた。こ  
 れだからつい余所で飲む気にもなりませんと謂つて可い位のもの

だ」

「ですから多度上つていらつしやいまし」

「よろし  
宜いかい。宜いね。宜い。今夜は遅いよ」

「何時頃お帰来かへりになります」

「遅いよ」

「でも大約時間おほよそを極めて置いて下さいませんか、お待ち申して  
をる者は困ります」

「遅いよ」

「それぢや十時には皆寝みんなみますから」

「遅いよ」

又言ふも煩わづらはしくて宮は口を閉ぢぬ。

「遅いよ」

「……………」

「驚くほど遅いよ」

「……………」

「おい、些と」

ちよつ

「……………」

「おや。お前<sup>おこ</sup>慍つたのか」

「……………」

「慍らんでも可いぢやないか、おい」

彼は続け様に宮の袖<sup>そで</sup>を曳けば、

「何<sup>な</sup>を作るのよ」

「返事を為んからさ」

「お遅<sup>おそ</sup>いのは解りましたよ」

「遅くはないよ、実は。だからして、まあ機嫌<sup>きげん</sup>を直すべし」

「お遅いなら、お遅いで宜<sup>よろ</sup>うございますから……………」

「遅くはないと言ふに、お前は近来直ちぎに慍るよ、どう云ふのかね」

「一つは病氣の所為せゐかも知れませんがね」

「一つは俺の浮氣の所為かい。恐入つたね」

「……………」

「お前一つ飲まんかい」

わたくし  
「私沢山」

「ぢや俺が半分助すけて遣るから」

「いいえ、沢山なのですから」

「まあさう言はんで、少し、注つぐ真似まね」

「欲くもないものを、貴方は」

「まあ可いさ。お酌は、それかう云ふ塩梅あんばいに、愛子流かね」

妓ぎの名を聞ける宮の如何いかに言ふらん、と唯繼ひそかは陰に楽み待つ

なる流眇ながしめを彼の面おもてに送れるなり。

宮は知らず貌がほに一口の酒を啣ふくみて、眉まゆを顰ひそめたるのみ。

「もう飲めんのか。ぢや此方こつちにお寄来よこし」

「失礼ですけれど」

「この上へもう一盃いっぱい注いで貰はう」

「貴方、十時過ぎましたよ、早くいらつしやいませんか」

「可いよ、この二三日は別に俺の為る用は無いのだが。それで実はね今日は少し遅くなるのだ」

「さうでございますか」

「遅いと云つたつて怪いのぢやない。この二十八日に伝々会おほざらひの大温習おほざらひが有るといふ訳だらう、そこで今日五時から糸川いとがわの処へ集つて下温習したざらひを為るのさ。俺は、それお特得はこの、「親々おやおやに誘いざなはれ、難波なにわの浦うらを船出ふなでして、身を尽したる、憂きおもひ、泣いて

チチチチあかしのチントン風待かぜまちにテチンチンツン……」

厭いとほしげに宮の余所見よそみせるに、乗地のりぢの唯継いよいよは愈よ声を作りて、

「たまたま逢あひはア——ア逢あひイ——ながらチツンチツンチツンつれなき嵐あらしに吹分ふきわけられエエエエエエ、ツンツンツンテツテツトン、テツトン国へ帰ればアアアア父ちちイイイイ母ははのチチチンチンチンチンチン「思おもひも寄よらぬ夫定つまさだめ……」

「貴方あなたもう好加減いいかげんになさいましよ」

「もう少し聴きいてくれ、「立たつる操みさをを破やぶら……」

「又また寛ゆつり伺うかがひますから、早くいらつしやいまし」

「然しかし、巧たくくなつたらう、ねえ、些ちよつと聞きけるだらう」

「私わたしには解とりませんです」

「これは恐おそ入いつた、解とらないのは情なさ無ないね。少すこし解とるやうに成なつて貫もろはうか」

「解らなくても宜うございます」

「何、宜いものか、浄瑠璃じようるりの解らんやうな頭脳あたまぢや為方しかたが無い。

お前は一体冷淡な頭脳あたまを有つてゐるから、それで浄瑠璃などを好まんのに違無い。どうもさうだ」

「そんな事はございません」

「何、さうだ。お前は一体冷淡さ」

「愛子はどうでございます」

「愛子か、あれはあれで冷淡でないさ」

「それで能く解りました」

「何が解つたのか」

「解りました」

「些ちつとも解らんよ」

「まあ可ようございますから、早くいらつしやいまし、さうして

早くお帰りなさいまし」

「うう、これは恐入つた、冷淡でない。ぢや早く帰る、お前待  
つてゐるか」

「私は何時でも待つてをりますぢや御座いませんか」

「これは冷淡でない！」

漸く唯繼やうやの立起たちあがれば、宮は外套がいとうを着せ掛けて、不取敢とりあへず彼に握

手を求めぬ。こは決して宮の冷淡ならざるを証するに足らざる  
なり、故ゆゑは、この女夫めをとの出入しゆつにゆうに握手するは、夫の始より命じて  
習しつけせし躰しつけなるをや。

(三) の二

夫を玄関に送り出でし宮は、やがて氷の窖あなぐらなどに入るらん想おもひ

しつづ、是非無き歩あゆみを運びて居間に還かへりぬ。彼はその夫と偕ともに在るを謂いはんやう無き累わづらひと為すなれど、又その独ひとりを守りてこの家おかに処おかるるをも堪たへ難いく愠いぶきものに思おぼへるなり。必かならずしも力つとむるとにはあらねど、夫の前には自おのづから氣の張ありて、とにかくにさるべくは振舞ほしへど恣まなる身み一箇ひとつとなれば、遽にはかに慵ものうく打うち勞ちかれて、心は整すべへん術すべも知らず紊みだれに乱みるるが常つねなり。

火鉢ひばちに倚よりて宮は、我を喪うしなへる体ていなりしが、如何いかに思おもひ入り、

おもひまは おもひつ

思回おもひまはし思窮おもひつむればとて、解とくべきにあらぬ胸の内の、終つひに明け

ぬ闇やみに彷徨さまよへる可かな悲なしさは、在るにもあられず身を起して彼は

障子の外なる縁いに出でたり。

うるはし

麗うるはしく互さえたる空は遠みく三四よつの風いの影を転じて、見遍みわたす庭なごりの名残なごり

無く冬枯ふゆかれたれば、浅露あからさまなる日の光の眩まばゆきのみにて、啼狂なきくるひし

こずゑ

梢こずゑの鴨ひよの去りし後は、隔かてる隣かより憂な々と羽子は突ねく音して、な

かなかここにはその寒さを忍ぶ値あらぬを、彼はされども少時  
 居て、又空を眺め、又冬枯を見遣り、同き日の光を仰ぎ、同き  
 羽子の音を聞きて、抑へんとはしたりけれども抑へ難さの竟に  
 苦く、再び居間に入ると見れば、其処にも留らで書斎の次なる  
 寝間に入るより、身を抛ちてベットに伏したり。

厚き蓐の積れる雪と真白き上に、乱畳める幾重の衣の彩を争  
 ひつつ、妖なる姿を意も介かず横はれるを、窓の日の帷を透し  
 て隠々照したる、実に匂も零るるやうにして彼は浪に漂ひし人  
 の今打揚げられたるも現ならず、ほとほと力竭きて絶入らんと  
 するが如く、止だ手枕に横顔を支へて、力無き眼を瞪れり。竟  
 には溜息响きてその目を閉づれば、片寝に倦める面を内向けて、  
 裾の寒さを佗しげに身動したりしが、猶も底止無き思の淵は彼  
 を沈めて追さざるなり。

隅棚すみだなの枕時計は突はたと秒刻チクタクを忘れぬ。益ますす静まに、益ますす明あかなる  
 閨ねやの内には、空むなしとも空むなしき時の移るともなく移るのみなりしが、  
 忽たちまち差入る鳥影の軒端のきばに近く、俯ふしたる宮が肩頭かたさきに打連りうちつらなて翻ひらめ  
 きつ。

やや有りて彼は嬾しどなくベツトの上に起直りけるが、鬢びんの纏ほつれし  
 頭かしらを傾かたぶけて、帷カアテンの隙ひまより僅わづかに眺めらるる庭の面おもに見るとしもな  
 き目を遣りて、当所あてどな無く心の彷徨さまよふ蹤あとを追ふなりき。

久からずして彼はここをも出でて又居間に還れば、直ぢきに筆筒たんす  
 の中より友禅ゆうぜん縮緬ちりめんの帯揚おびあげを取出とりいだし、心に籠こめたりし一通の文ふみと  
 も見ゆるものを抜きて、こたびは主あるじの書斎あに持ち行きて机に向  
 へり。その巻紙は貫一が遺のこせし筆の跡などにはあらで、いつか  
 は宮の彼に送らんとて、別れし後の思の丈たけを窃ひそかに書聯かきつらねたるも  
 のなりかし。

往年宮は田鶴見の邸内に彼を見しより、いとど忍びかねたる  
胸の内の訴へん方もあらぬ切なきに、唯心寛の仮初に援りける  
筆ながら、なかなか口には打出し難き事を最好く書きて陳けも  
為しを、あはれかのひとの許に送りて、思ひ知りたる今の悲し  
さを告げばやと、一凶の意をも定めしが、又案ずれば、その文  
は果して貫一の手に触れ、目にも入るべきか。よしさればとて、  
憎み怨める怒の余に投返されて、人目に曝さるる事などあらば、  
徒に身を滅す疵を求めて終りなんをと、遣れば火に入る虫の危  
く、捨つるは惜くも、やがて好き首尾の有らんやうに抛無き頼  
を繋けつつ、彼は懊悩に堪へざる毎に取出ては写し易ふる傍  
ら、或は書添へ、或は改めなどして、この文に向へば自らその  
人に向ふが如く、その人に向ひてはほとほと言尽して心残のあ  
らざる如く、止これに因りて欲するままの夢をも結ぶに似たる

快きを覚ゆるなりき。かくして得送らぬ文は写せしも灰となり、  
 反古ほごとなりて、彼の帶揚に籠こめられては、いつまで草の可哀あはれや  
 用らるる果も知らず、宮が手習は実げに久ひさうなりぬ。

些かごと箇に慰められて過せる身の荒尾に邂逅めぐりあひし嬉しきは、何に  
 似たりと謂いはんも愚おろかにて、この人をこそ仲立ちて、積る思を遂と  
 げんと頼みしを、仇あだの如く与くみせられざりし悲しきに、さらでも  
 切なき宮が胸は搔かき乱れて、今は漸やうやく危きを懼おそれざる覚悟も出いで  
 来て、いつまで草のいつまでかくてあらんや、文は送らんと、こ  
 の日頃思ひ立ちてけり。

紙の良きを扱えらび、筆の良きを扱えらび、墨の良きを扱えらび、彼は意  
 してその字の良きを殊ことに扱えらびて、今日の今ぞ始めて仮初かりそめならず  
 写さんと為すなる。打顛うちふるふ手に十行余あまり認めしたた、つと裂きて火  
 鉢さしくに差さ熱あつければ、焰ほのほの急に炎々と騰のぼるを、可疎うとましと眺のぞめたる

折しも、紙門を啓けてその光に惧えし婢は、覚えぬ主の気色を  
 異みつつ、

「あの、御本家の奥様がお出で遊ばしました」

#### 第四章

主夫婦を併せて焼亡せし鱈淵が居宅は、さるほど貫一の手  
 頼りてその跡に改築せられぬ、有形よりは小体に、質素を旨と  
 したれど専ら旧の構造を摸して差はざらんと勉めしに似たり。

間貫一と陶札を掲げて、彼はこの新宅の主になれるなり。家  
 督たるべき直道は如何にせし。彼は始よりこの不義の遺産に手  
 をも触れざらんと誓ひ、かつこれを貫一に与へて、その物は正  
 業の資たれ。その人は改善の人たれと冀しを、貫一は今この家

の主ぬしとなれるに、なほ先代の志をひるがへ翻さずして、益ますます盛さかんに例むさばりの貪むさばりを営つとむなりき。然しかれば彼と貫一との今日こんにちの関かん繋けいは如何いかなるものならん。絶たえてこれを知る者あらず。凡およそ人生こ箇こ々の裏面うらには必ずかくのごと如此ごとき内情もし若わかくは秘密ひみつとも謂いふべき者ありながら、幸さいに他ひの穿せん鑿さくを免まれて、曖あい昧まいの裏うちに葬はなられ畢はんぬる例たと尠すくならず。二代の鰐淵えいなる間まの家いへのこの一件いっけんもまた貫一と彼との外ほかに洩もれざるを得えたり。

かくして今は鰐淵の手代ならぬ三番町の間は、その向むかひに有数いうすうの名なを成なして、外ほかには善よく貸かし、善よく斂をさむれども、内うちには事足ことたりる老婢らうひを役つかひて、僅わずかに自炊じならざる男世帯をとこせたいを張はりて、なほも奢おごらず、樂たのまず、心こころは昔日きのふの手代てうだいにして、趣おもむきは失意しつゐの書生しよせいの如ごとく依然いぜんたる変物へんぶつの名なを失うはでゐたり。

出いでてはさすがに勞つかれて日暮ひぐりに歸かへり来きにける貫一は、彼の常じょう

として、吾家わがいえながら人氣無き居間の内を、旅の木蔭にも休やすらへる想しつ、稍興やや冷めて坐りも遣やらず、物の悲ゆふべき夕を特に独ひとりの感じれば、老婢はラムプを持ち来きたりて、

「今日こんにち三時頃でございました、お客様が見えまして、明日又今頃来るから、是非内に居てくれるやうにと有仰おつしやつて、お名前を伺つても、学校の友達だと言へば可い、とさう有仰おつしやつてお帰りになりました」

「学校の友達？」

おしあて臆測にも知る能あたはざるはこの藪やぶから棒ぬしの主なり。

「どんな風の人かね」

「さやうでございますよ、年としごろ紀四十ばかりの蒙茸むしやくしやと髭髯ひげの生はえ、身せい材いの高い、剛こはい顔の、全まるで壮士みたやうな風体ふうていをしてお在いででした」

「……………」  
些さの憶起おもひおこす節ふしもありや、と貫一は打案じつつも半なかばは怪むに過

ぎざりき。

「さうして、まあ大相横柄な方なのでございます」

「明日あした三時頃に又来ると？」

「さやうでございますよ」

「誰たれか知らんな」

「何だか誠に風の悪さうな人体にんていで御座いましたが、明日みょうんち参りま

したら通しませうで御座いますか」

「ぢや用向は言つては行かんのだね」

「さやうでございますよ」

「宜よろしい、会つて見やう」

「さやうでございますか」

起ち行かんとせし老婢は又居直りて、

「それから何でございました、間もなく赤檜あかがしさんがいらつしや

いますして」

貫一は憚よろこばざる色を作なしてこれに応こたへたり。

「神戸の蒲鉾かまぼこを三枚、見事なのでございます。それに藤村ふじむらの

蒸羊羹むしようかんを下さいまして、私わたくしまで毎度又頂戴物ちようだいものを致いたしましたので

御座います」

彼は益す不快を禁じ得ざる面色おももちして、応答うけこたへも為せで聴きみたり。

「さうして明日みょうちち、五時頃ごとき些ちよひとお目に掛かりたいから、さう申上まげ

て置いてくれと有仰おつしやつてで御座まいました」

可よしとも彼は口には出いだきで、寧むしろ止やめよとやうに忙せはしく領うなづけり。

学校友達と名宣りし客はその言の如く重ねて訪ひ来ぬ。不思議の対面に駭き惑へる貫一は、迅雷の耳を掩ふに違あらざらんやうに劇く吾を失ひて、頓にはその惘然たるより覚むるを得ざるなりき。荒尾讓介は席の温る間の手弄に放ちも遣らぬ下髯の、長く忘れたりし友の今を如何にと観るに忙かり。

「殆ど一昔と謂うても可い程になるのぢやから話は沢山ある、けれどもこれより先に聞きたいのは、君は今日でも僕をじや、この荒尾を親友と申うてをるか、どうかと謂ふのじや」

答ふべき人の胸はなほ自在に語るべくもあらず乱れたるなり。

「考へるまではなからう。親友と思つてをるなら、さうなけりや、ないと言ふまでで是か否かの一つじや」  
 「そりや昔は親友であつた」

彼は覺東無げに言出せり。

「さう」

「今はさうぢやあるまい」

「何な為ぜにな」

「その後五六年も全く逢はずにゐたのだから、今では親友と謂ふことは出来まい」

「なに五六年ぜん前も一向親友ではありやせんぢやつたではないか」  
貫一は目を側そばめて彼を訝いぶかりつ。

「さうぢやらう、学士になるか、高利貸になるかと云ふ一身の浮沈の場合に、何等の相談も為せんののみか、それなり失蹤しつそしてうたのは何処どこが親友なのか」

その常に慙はぢかつ悔くゆる一事を責められては、癒いえざる瘕きずをも割さかるる心地して、彼は苦くしげに容かたちを斂をさめ、声こゑをも出いさでゐたり。

「君の情人いろは君に負そむいたぢやらうが、君の友フレンドは決して君に負か  
ん筈はずぢや。その友フレンドを何なぜ為に君は棄てたか。その通り棄てられた  
僕ぢやけれど、かうして又訪ねて来たのは、未まだ君を実は棄て  
んのじやと思ひ給へ」

学生たりし荒尾！ 参事官たりし荒尾！！ 尾羽打枯をせる今はうちからの  
荒尾の姿は変りたれど、猶なほ一片の変らぬ物ありと知れる貫一は、  
夢とも消えて、去りし、去りし昔の跡無き跡を悲しと悞しのぶなり  
けり。

「然し、僕が棄てても棄てんでも、そんな事に君は痛痒つうようを感ずる  
ぢやなからうけれど、僕は僕で、友フレンドの徳義としてとにかく一旦  
は棄てんで訪ねて来た。で、断然棄つるも、又棄てんのも、唯  
今日こんにちにある意つもりぢや。

今では荒尾を親友とは謂へん、と君の言うたところを以つて

見ると、又今更親友であることを君は望んではをらんやうじや。さうであるならば僕の方でも敢て望まん、立派に名宣つて僕も間貫一を棄つる！」

貫一は頭を低れて敢て言はず。

「然し、今日まで親友と申うてをつた君を棄つるからには、これが一生の別になるのぢやから、その賤行として一言云はんけりやならん。」

間、君は何の為に貨を殖ゆるのぢや。かの大いなる樂とする者を奪れた為に、それに易へる者として金銭といふ考を起したのか。それも可からう、可いとして措く。けれどもじや、それを獲る為に不義不正の事を働く必要が有るか。君も現在他から苦められてゐる軀ではないのか。さうなれば己が又他を苦むるのは尤も用捨すべき事ぢやらうと思ふ。それが他を苦むると謂

うても、難儀に附入つて、さうしてその血を搾るのが君の営業、殆ど強奪に等しい手段を以つて金を殖えつつ、君はそれで今日慰められてをるのか。如何に金銭が総ての力であるか知らんけれど、人たる者は悪事を行つてをつて、一刻でも安楽に居らるるものではないのじや。それとも、君は怡然として楽しんでをるか。長閑な日に花の盛を眺むるやうな気持で催促に行つたり、差押を為したりしてをるか。どうかい、間」

彼は愈よ口を閉ぢたり。

「恐くじや。さう云ふ気持の事は、この幾年間に一日でも有りはせんのだぢやらう。君の顔色を見い！ 全で罪人じやぞ。獄中に居る者の面じや」

別人と見るまでに彼の浅ましく瘁れたる面を矚りて、讓介は涙の落つるを覚えぬ。

「間、何で僕が泣くか、君は知つてをるか。今の間ぢや知らんぢやらう。幾多貨いくらかねを殖こしらへたところで、君はその分では到底慰めらるる事はありません。病なほが有るからと謂うて毒を飲んで、その病なほが痊なほるぢやらうか。君はあたかも薬を飲む事を知らんやうなものぢやぞ。僕の友フレンドであつた間はそんな痴漢たはけぢやなかつた、して見りや発狂したのぢや。発狂してからに馬鹿な事を為し居る奴とがは尤とがむるに足らんけれど、一婦人いつぶじんの為に発狂したその根性を、彼の友フレンドとして僕が慙はぢざるを得んのぢや。間、君は盗人ぬすとと言れたぞ。罪人いはと言れたぞ、狂人と言れたぞ。少しは腹を立てい！腹を立てて僕を打つとも蹴けるとも為て見い！」

彼は自ら言いはひ、自ら憤り、尚なほ自ら打ちも蹴けりも為せんずる色なを作なして速そくそく々答を貫一せまに逼せまれり。

「腹は立たん！」

「腹は立たん？ それぢや君は自身に盗人<sup>ぬすと</sup>とも、罪人とも……」  
「狂人とも思つてゐる。一婦人の為に発狂したのは、君に対して実に面目<sup>めんぼく</sup>無いけれど、既に発狂して了<sup>しま</sup>つたのだから、どうも今更為やうが無い。折角ぢやあるけれど、このまま棄置いてくれ給へ」

貫一は纔<sup>わづか</sup>にかく言ひて已<sup>や</sup>みぬ。

「さうか。それぢや君は不正な金銭<sup>マネエ</sup>で慰められてをるのか」

「未だ慰められてはをらん」

「何日<sup>いっ</sup>慰めらるるのか」

「解らん」

「さうして君は妻君<sup>もら</sup>を娶うたか」

「娶はん」

「何故<sup>なぜ</sup>娶はんのか、かうして家を構へてをるのに独身ぢや不都

合ぢやらうに」

「さうでもないさ」

「君は今では彼の事をどう思つてをるな」

「彼とは宮の事かね。あれは畜生さ！」

「然し、君も今日では畜生ぢやが、高利貸などは人の心は有つ

ちやをらん、人の心が無けりや畜生じや」

「さう云ふけれど、世間は大方畜生ぢやないか」

「僕も畜生かな」

「……………」

「間、君は彼が畜生であるのに激してやはり畜生になつたのぢやな。若し彼が畜生であつたのを改心して人間に成つたと為たら、同時に君も畜生を罷めにやならんじやな」

「彼が人間に成る？ 能はざる事だ！ 僕は高利を貪る畜生だ

けれど、人を欺く事は為んだ。詐つて人の誠を受けて、さうしてそれを売るやうな残忍な事は決して為んだ。始から高利と名宣つて貸すのだから、否な者は借りんが可いので、借りん者を欺いて貸すのぢやない。宮の如き畜生が何で再び人間に成り得るものか」

「何為成り得んのか」

「何為成り得るのか」

「さうなら君は彼の人間に成り得んのを望むのか」

「望むも望まんも、あんな者に用は無い！」

寧ろその面に唾せんとも思へる貫一の気色なり。

「そりや彼には用は無いちやらうけれど、君の為に言ふべきことぢやと思ふから話すのぢやが、彼は今では大いに悔悟してをるぞ。君に対して罪を悔いてをるぞ！」

貫一は吾を忘れて嗤笑あざわらひぬ。彼はその如何いかに賤いやしむべきか、謂はんやうもあらぬを念おもひて、更に嗤笑あざわらひ猶嗤笑あざわらひ、遏やめんとして又嗤笑あざわらひぬ。

「彼もさうして悔悟してをるのぢやから、君も悔悟するが可からう、悔悟する時ぢやらうと思ふ」

「彼の悔悟は彼の悔悟で、僕の与あづかる事は無い。畜生も少しは思知つたと見える、それも可からう」

「先頃計らず彼に逢うたのじや、すると、僕に向うて涙を流して、そりや真実悔悟してをるのじや。さうして僕に詫わびを為てくれ、それが成らずば、君に一遍逢せてくれ、と絶すがつて頼むのじやな、けれど僕も思ふところが有るから拒絶はした。又君に對しても、彼がその様に悔悟してゐるから容ゆるして遣れと勧めは為せん、それは別問題じや。但僕ただとして君に言ふところは、彼は悔

悟して独り苦んでをる。即ち彼は自ら罰せられてをるのぢやから、君は君として怨を積うらみいて可からうと思ふ。君がその怨を積いたなら、昔の間に復かへるべきぢやらうと考へるのぢや。

君は今のところ慰められてをらん、それで又、何日慰めらるるとも解らんと言うたな、然しじや、彼が悔悟してからにその様に思うてをると聞いたら、君はそれを以つて大いに慰められはせんかな。君がこの幾年間に得た金銭マネエ、それは幾多いくらか知らんけれど、その寡すくなからん金銭マネエよりは、彼が終つひに悔悟したと聞いた一言いちごんの方が、遙はるかに大いなる力を以つて君の心を慰むるであらうと思ふのぢやが、どうか」

「それは僕が慰められるよりは、宮が苦まなければならん為の悔悟だらう。宮が前非を悟つた為に、僕が失つた者を再び得られる訳ぢやない、さうして見れば、僕の今日こんにちはそれに因よつて少すこし

も慰められるところは無いのだ。憎いことは彼は飽くまで憎い、  
 が、その憎さに僕が慰められずにゐるのではないからして、宮  
 その者の一身に向つて、僕は棄てられた怨を報いやうなどは  
 決して思つてをらん、畜生に讐あだを復かへす価は無いさ。

今日こんにちになつて彼が悔悟した、それでも好く悔悟したと謂ひた  
 いけれど、これは固もとよりさう有るべき事なのだ。始にあんな不  
 心得を為なかつたら、悔悟する事は無かつたらうに——不心得  
 であつた、非常な不心得であつた！」

彼は黯然あんぜんとして空むなしく懐おもへるなり。

「僕は彼の事は言はんのじや。又彼が悔悟した為に君の失うた  
 者が再び得らるる訳でないから、それぢや慰められんと謂ふの  
 なら、それで可よいのじや。要するに、君はその失うた者が取返  
 されたら可いのぢやらう、さうしてその目的を以つて君は貨かねを

殖へてをるのぢやらう、なあ、さうすりやその貨さへ得られたら、好んで不正な營業を為る必要は有るまいが。君が失うた者が有る事は知つてをる。それが為に常に樂まんのも、同情を表してゐる、そこで金銭マネエの力に頼よつて慰められやうとしてゐる、に就いては異議も有るけれど、それは君の考まかに委する。貨かねを殖こしらゆるも可い、可いとする以上は大いに富むべしじや。けれど、富むと云ふのは貪むさぼつて聚あつむるのではない、又貪むさぼつて聚あつめんけりや貨は得られんのではない、不正な手段もちゐを用もんでも、富む道は幾多いくちも有るぢやらう。君に言ふのも、な、その目的たかねを変へよではない、止ただ手段を改めよじや。路みちは違へても同じ高嶺たかねの月を見るのじやが」

「かたじけ辱ないけれど、僕いつせつの迷は未だ覚めんのだから、間は発狂してゐる者と想つて、一切かまひ付けずに措いいてくれ給へ」

「さうか。どうあつても僕の言は用られんのじやな」  
ことばもちる

「容ゆるしてくれ給へ」

「何を容すのじや！ 貴様は俺を棄てたのではないか、俺も貴様を棄てたのじやぞ、容すも容さんも有るものか」

「今日限互こんにちかぎりに棄てて別れるに就いては、僕も一箇聞きたい事がある。それは君の今の身の上だが、どうしたのかね」

「見たら解るぢやらう」

「見たばかりで解るものか」

「貧乏してをるのよ」

「それは解つてゐるぢやないか」

「それだけじや」

「それだけの事が有るものか。何で官途を罷やめて、さうしてそんなに貧乏してゐるのか、様子が有りさうぢやないか」

「話したところで狂人きちがひには解らんのよ」

荒尾は空嘯そらうそぶきて起たんと為すなり。

「解つても解らんでも可いから、まあ話すだけは話してくれ給へ」

「それを聞いてどう為る。ああ貴様は何か、金でも貸さうと云ふのか。NO Thankじや、赤貧洗ふが如く窮してをつても、心は怡然いぜんとして楽しんでをるのじや」

「それだから猶なほ、どう為てさう窮して、それを又楽しんでゐるのか、それには何か事情が有るのだらう、から、それを聞せてくれ給へと言ふのだ」

荒尾は故こらに哈こ々として笑へり。

「貴様如き無血虫むけつちゆうがそんな事を聞いたとて何が解るもので。人間らしい事を言ふな」

「さうまで辱められても辞を返すことの出来ん程、僕の軀は腐つて了つたのだ」

「固よりじや」

「かう腐つて了つた僕の軀は今更為方が無い。けれども、君は立派に学位も取つて、参事官の椅子にも居た人、国家の為に有用の器であることは、決して僕の疑はんところだ。で、僕は常に君の出世を予想し、又陰にそれを痔つてををつたのだ。君は僕を畜生と言ひ、狂人と言ひ、賊と言ふけれど、君を懐ふ念の僕の胸中を去つた事はありませんよ。今日まで君の外には一人の友も無いのだ。一昨年であつた、君が静岡へ赴任すると聞いた時は、嬉くもあり、可懐くもあり、又考へて見れば、自分の身が悲くもなつて、僕は一日飯も食はんでゐた。それに就けても、久し振で君に逢つて慶賀も言ひたいと念つたけれど、どうも逢

れん僕の軀からだだから、切せめて陰ながらでも君の出世の姿が見たいと、新橋の停車場ステーションへ行つて、君の立派に成つたのを見た時は、何もかも忘れて僕は唯嬉こころひそかうなづくて涙が出た」

さてはと荒尾も心陰こころひそかうなづに頷うなづきぬ。

「君の出世を見て、それほど嬉こんかつた僕が、今日君のそんなに零落してゐるのを見る心持はどんなであるか、察し給へ。自分の身を顧おのれずにかう云ふ事を君に向つて言ふべきではないけれど、僕はもう己おのれを棄あきらめてゐるのだ。一婦女子いっふじよしの詐いつはりごと如ごときに憤いつて、それが為ために一身を過つたと知りながら、自身の覚悟を以もつて匡正きやうせいすることの出来んと謂ふのは、全く天性愚劣の致すところと、自ら恨むよりは無いので、僕は生きながら腐れて、これで果てるのだ。君の親友であつた間貫一は既に亡き者に成つたのだ、とさう想つてくれ給へ。であるから、これは間が言ふのではない。

君の親友の或者が君の身を愛をしんで忠告するのだとして聴をしいてくれ給へ。どう云ふ事情か、君が話してくれんから知れんけれど、君の軀は十分自重して、社会に立つて壮さかんなる働はたらきを作なして欲しいのだ。君はさうして窮迫してゐるやうだけれど、決して世間から棄てられるやうな君でない事を僕は信しずるのだから、一箇いっごじん人として己の為に身を愛をしみたまへと謂ふのではなく、国家の為に自重し給へと願ふのだ。君の親友の或者は君がその才を用る為に社会に出やうと為るならば、及ぶ限の助力を為る精神であるのだ」

貫一おもての面は病などの忽たちまち癒いえけんやうに輝きつつ、如此かくのごとく潔うるはしきことばことばくも麗うるはき辞を語れるなり。

「うう、それぢや君は何か、僕のかうして落魄らくはくしてをるのを見きのどくどくて気毒と思ふのか」

「君が謂ふほどの畜生でもない！」

「其<sup>そ</sup>処<sup>こ</sup>じや、間。世間に貴様のやうな高利貸が在る為に、あつぱれ用<sup>もち</sup>らるべき人才の多くがじや、名を傷<sup>きず</sup>つ、身を誤<sup>まち</sup>られて、社会の外<sup>ほか</sup>に放逐<sup>はうしゆく</sup>されて空<sup>むな</sup>く朽<sup>く</sup>つるのじやぞ。国家の為に自重<sup>じゆうじやう</sup>せいで、僕の如き者にでもさう言うてくるのは忝<sup>かたじけ</sup>ないが、同じ筆法を以つて、君も社会の公益の為にその不正の業を罷<sup>や</sup>めてくれ、と僕は又頼むのじや。今日<sup>こんにち</sup>の人才を滅<sup>ほろ</sup>す者は、曰<sup>いは</sup>く色、曰<sup>いは</sup>く高利貸ぢやらう。この通り零落<sup>おちぶ</sup>れてをる僕が気毒と思ふなら、君の為に艱<sup>なや</sup>まれてをる人才の多くを一層不敏<sup>ふびん</sup>と思つて遣れ。

君が愛<sup>ラヴ</sup>に失敗して苦むのもじや、或人が金錢<sup>マネエ</sup>の為に苦むのも、苦むと云ふ点に於ては差<sup>か</sup>異<sup>はり</sup>は無<sup>な</sup>いぞ。で、僕もかうして窮迫<sup>きゆうぱく</sup>してをる際ぢやから、憂<sup>ウレンド</sup>を分つ親友の一人は誠欲<sup>まこと</sup>いのじや、昔の間貫<sup>マツミ</sup>一のやうな友<sup>フレンド</sup>が有つたらばと思はん事は無い。その友<sup>フレンド</sup>が僕

の身を念おもうてくれて、社会へ打つて出て壮さかんに働け、一臂いつびの力を  
 仮かさうと言うのであつたら、僕は如何いかに嬉うれからう！ 世間よこに最  
 も喜よろこぶべき者は友フレンド、最も悪にくむべき者は高利貸たかぢや。如何いかに高利  
 貸たかの悪わるむべきかを知つてをるだけ、僕は益ますます友フレンドを懐おもふのじや。  
 その昔フレンドの友フレンドが今日こんにちの高利貸——その悪わるむべき高利貸！ 吾又何  
 をか言いはんじや」

彼は口を閉ぢて、貫一くわんいちを疾視しつせり。

「段々の君の忠告、僕は難あた有りい。猶自分にも篤あつと考へて、この  
 腐くされた軀からだが元の通潔白とんけつぱくな者に成り得られるなら、それに越した  
 幸さいは無ないのだ。君もまた自愛じあいしてくれ給へ。僕は君には棄すてら  
 れても、君の大いに用られるのを見たいのだ。又必ず大いに用  
 られなければならんその人が、さうして不遇ふぐで居るのは、残念  
 であるよりは僕は悲かなしい。そんなおもに念おもつてもゐるのだから一遍君

の処を訪ねさしてくれ給へ。何処どこに今居るかね」

「まあ、高利貸などは来て貰もらはん方が可い」

「その日は友フレンドとして訪ねるのだ」

「高利貸フレンドに友は持たんものな」

雍しとやかに紙門ふすまを押啓おしひらきて出来いできたれるを、誰たれかと見れば満枝みづからなり。

彼如何いかなれば不躰ぶしつけにもこの席あはには顕あらはれけん、と打駭うちおどろける主あるじより

も、荒尾が心の中こそ更に匹たぐふべくもあらざるなりけれ。いで

や、彼は窺くろしみてその長き髯ひげをば痛したたかに拈ひねりつ。されど狼狽うろたへたり

と見られんは口惜くちをしとやうに、遽にはかにその手を胸高むなたかに拱こまぬきて、動

かざること山の如しと打控うちひかへたる様さまも、自らおのづかわざとらしくて、

また見好みよげにはあらざりき。

満枝みづからは先まづ主あるじに挨拶あいさつして、さて荒尾に向ひては一際ひときは礼を重く、

しかも躬みづからは手の動き、目の視みるまで、専もつぱら貴婦人の如く振舞ひ

つつ、笑むゑともあらず面おもてを和やはらげて姑しばらく辞ことばを出いださず。荒尾はこの際まなかなか黙もくするに堪たへずして、

「これは不思議な所で！ 成程間とは御懇意かな」

「君はどうして此方こちらを識しつてゐるのだ」

左瞻とみかうみ右視して貫一は呆あきるのみなり。

「そりや少し識つてをる。然し、長居はお邪魔ぢやらう、大きに失敬した」

「荒尾さん」

満枝は追のがさじと呼留めて、

「かう云ふ処で申上げますのも如何いかがで御座いますけれど」

「ああ、そりや此ここで聞くべき事ぢやない」

「けれど毎いっも御不在ばかりで、お話が付きかねると申して弱り切つてをりますで御座いますから」

「いや、会うたところだからに話の付けやうもないのじや。遁にげも隠れも為んから、まあ、時節を待つて貰はうさ」

「それはどんなにもお待ち申上げますけれど、貴方の御都合の宜よろしいやうにばかり致してはをられませんで御座います。そこはお察しあそばしませな」

「うう、随分酷ひどい事を察しさせられるのじやね」

「近日に是非わたくしお願い申しに伺ひますで御座いますから、どうぞ宜く」

「そりや一向宜くないかも知れん」

「ああ、さう、この前でございましたか、あの者が伺ひました節、何か御無礼な事を申上げましたとかで、大相な御立腹で、お刀をお抜き遊ばして、斬きつて了しまふとか云ふ事が御座いましたさうで」

「有つた」

「あれ、本当にさやうな事を遊ばしましたので？」

満枝は彼に耻ぢよとばかり嗤笑あざわらひぬ。さ知つたる荒尾は飽くまで真顔を作りて、

「本当とも！ 実際那奴砍却あやつたたぎきつて了はうと思つた」

「然しお考へ遊ばしたで御座いませう」

「まあその辺ぢや。あれでも犬猫ぢやなし、斬捨てにもなるまい」

「まあ、怖こはい事ぢや御座いませんか。私わたくしなぞは滅多めったに伺ふ訳には参りませんで御座いますね」

そは誰たが事を言ふならんとやうに、荒尾は頂うなじを反そらして噪ののめき笑ひぬ。

「僕が美人を斬るか、その目で僕が殺さるるか。どれ帰つて、刀

でも拭ふいて置かう」

「荒尾君、夕飯ゆふめしの支度が出来たさうだから、食べて行つてくれ給へ」

「それは折角ぢやが、盗泉の水は飲まんで」

「まあ貴方、私お給仕を勤めます。さあ、まあお下にゐらしつて」

満枝は荒尾の立てる脚下あしもとに褥しとねを推付けて、実げに還あさじと主あるじにも劣くらず最惜いとをしむ様なり。

「全つで御夫婦のやうじやね。これは好一對じや」

「そのお意つで、どうぞお席せきにゐらしつて」

固もより留とどらざるべき荒尾は終つひに行かんとしつ、

「間、貴様は……」

「……………」

「……………」  
 彼は唇くちびるの寒かるべきを思ひて、空むなしく鬱抑うつよくして帰り去れり。その言はざりし語ことばは直ただちに貫一が胸に響きて、彼は人の去いにける迹あとも、なほ聴くるしくに苦おもてき面えあを得えあ挙げざりけり。

(四) の三

程も有ともらずラムプは点ともされて、止ただ在りけるままに竦すくみゐたる彼の傍かたはらに置るとともに、その光に照さるる満枝の姿は、更よそほひに粧よそほひをも加へけんやうに怪けしからず妖艶あでやかに、宛然さながら色香いろかほしいを擅ままにせる牡丹ぼたんの枝えだを咲さき撓たわめたる風情ふぜいにて、彼は親おしげに座を進めつ。  
 「間まさん、貴方あなたどうあそばして、非常ふつうにお鬱ふさぎ遊あそばしてゐらつしやるぢや御座ごいませんか」

貫一は怠くも纒たゆに目を移して、

「一体貴方はどうして荒尾を御存じなのですか」

「私よりは、貴方があの方の御朋友ごほうゆうでゐらつしやるとは、実に

私意外で御座いますわ」

「貴方はどうして御存じなのです」

「まあ債務者のやうな者なので御座います」

「債務者？ 荒尾が？ 貴方の？」

「私が直接に関係した訳ぢや御座いませんのですけれど」

「はあ、さうして額たかは若干どれほどのですか」

「三千円ばかりでございますの」

「三千円？ それでその直接の貸主かしぬしと謂いふのは何処どこの誰ですか」

満枝は彼の遽にはかに振向ねむきて膝ひざの前すすむをさへ覚えざらんとするを

見て、歪ゆがむる口角くちもとに笑ゑみを忍しのびつ、

「貴方は実に現金でゐらつしやるのね。御自分のお聴になりた  
い事は熱心にお成りで、平生私がお話でも致すと、全まるで取合つ  
ても下さいますねのものです」

「まあ可いです」

「些ちよつとも可い事はございません」

「うう、さうすると直接の貸主と謂ふのが有るのですね」

「存じません」

「お話し下さいな、様子に由つてはその金は私から弁償しやう  
とも思ふのですから」

「私貴方からは戴きません」

「上げるのではない、弁償するのです」

「いいえ、貴方とは御相談になりません。又貴方が是非弁償な  
さると云ふ事ならば、私あの債権を棄てて了ひます」

「それは何な為ぜですか」

「何なに為ためでも宜よろう御座いますわ。ですから、貴方が弁償べんしょうなさらうと思召おぼしめすなら、私に債権せけんを棄すてて了しまへと有仰おつしやつて下さいまし、さう致せば私喜んで棄すてます」

「どう云ふ訳ですか」

「どう云ふ訳で御座いますか」

「甚はなはだ解とらんぢやありませんか」

「勿論もちろん解とらんので御座いますとも。私自分で自分が解とらんくらゐで御座いますもの。然し貴方も間さん、随分お解とりに成なりませんのね」

「いいや、僕は解とつてゐます」

「ええ、解とつてゐらつしやりながら些ちよつともお解とりにならないのですから、私も益ますす解とらなくりますですから、さう思おもつてゐ

らつしやいまし」

満枝は金煙管きんぎせるに手炉てあぶりの縁ふちを丁ちようと拍うちて、男の顔ながしめに流うら眇みの怨うらを注つぐなり。

「まあさう云ふ事を言はずに、ともかくもお話をなすつて下さい」

「御勝手ねえ、貴方は」

「さあ、お話し下さいな」

「唯今お話致しますよ」

満枝は遽にはかに煙管きせるを索もとめて、さて傍かたはらに人無ごき若ゆるく緩やかに煙けを吹けきぬ。

「貴方の債務者であらうとは実に意外だ」

「……………」

「どうも事実として信ずる事は出来んくらゐだ」

「……………」

「三千円！ 荒尾が三千円の負債を何で為たのか、殆ど有得べき事でないのだけれど、……」

「……………」

唯見れば、満枝はなほも煙管を放たざるなり。

「さあ、お話し下さいな」

「こんなに遅々してをりましたら、さぞ貴方憤つたくてみらつしやいませう」

「憤つたいのは知れてゐるぢやありませんか」

「憤つたいと云ふものは、決して好い心持ぢやございませんのね」

「貴方は何を言つてお在なのです！」

「はいはい恐入りました。それぢや早速お話を致しませう」

「どうぞ」

「蓋か御承知でゐらつしやいましたらう。前に宅に居りました向坂と申すの、あれが静岡へ参つて、今では些と盛に遣つてをるので御座います。それで、あの方は静岡の参事官でお在なのでした。さやうで御座いましたらう。その頃向坂の手から何したので御座います。究竟あの方もその件から論旨免官のやうな事にお成なすつて、又東京へお還りにならなければ為方が無いので、彼方を引払ふのに就いて、向坂から話が御座いまして、宅の方へ始は委任して参つたので御座いましたけれど、丁度去年の秋頃から全然此方へ引継いで了ふやうな都合に致しましたの。然し、それは取立に骨が折れるので御座いましてね、ああして止と遊んでお在も同様で、翻訳か何か少ばかり為さる御様子なのですから、今のところではどうにも手の着けやうが無いの

で御座いますわ」

「はあ成程。然し、あれが何で三千円と云ふ金を借りたかしらん」

「それはあの方は連帯者なので御座います」

「はあ！ さうして借主は何者ですか」

おおだちさくろう

「大館朔郎と云ふ岐阜の民主党員で、選挙に失敗したものですから、その運動費の後肚あとばらだとか云ふ話でございました」

「うむ、如何いかにも！ 大館朔郎……それぢや事実でせう」

「御承知でゐらつしやいますか」

「それは荒尾に学資を給した人で、あれが始終恩人と言つてをつたその人だ」

ことば

うち

いた

おのれ

「はやその言の中に彼の心は急に傷みぬ。己の敬愛せる荒尾讓介の窮して戚々せきせきたらず、天命を楽むと言ひしは、真に義の為に

功名を擲ち、恩の為に富貴を顧ざりし故にあらずや。彼の貧きは万々人の富めるに優れり。君子なる吾友よ。さしも潔き志を抱ける者にして、その酬らるる薄倖の彼の如く甚く酷なるを念ひて、貫一は漫ろ涙の沸く目を閉ぢたり。

## 第五章

遽に千葉に行く事有りて、貫一は午後五時の本所発を期して車を飛せしに、咄嗟、一步の時を遅れて、二時間後の次回を待つべき倒懸の難に遭へるなり。彼は悄悄々停車場前の休憩処に入りて奥の間なる縞毛布の上に温茶を啜りたりしが、門を出づる折受取りし三通の郵書の鞆に打込みしままなるを、この時取出せば、中に一通の M. Shigis —— と裏書せるが在り。

「ええ、又寄来した！」

彼はこれのみ開封せずして、やがて他の読売と一つに投入れし鞆はたを礮たと閉づるや、枕ねむりに引寄せて仰臥あふぎふすと見れば、はや目を塞ふさぎて睡ねむりを促さんと為るなりき。されども、彼は能く睡ねむるを得べきか。さすがにその人の筆の蹟あとを見ては、今更に憎しとも恋しとも、絶えて念おもひには懸けざるべしと誓へる彼の心も、睡らるるまでに安かる能はざるなり。

いで、この文こそは宮が送りし再度うつつたへの愬うにて、その始て貫一を驚かせし一札いっさつは、約およそ二週間前に彼の手に入りて、一字も漏れずその目に触れしかど、彼は曩さきに荒尾に答へしと同様の意を以てその自筆の悔悟を読みぬ。こたびとてもまた同き繰言くりごとなるべきを、何の未練有りて、徒いたづらに目を汚けがし、懐おもひを傷きずけんやと、氣強くも右より左に搔遣かきやりけるなり。

宮は如何いかに悲しからん！ この両度の消息は、その苦き胸を  
 剖さき、その切なる誠を吐きて、世をも身をも忘れし自白なるを。  
 事若し誤らば、この手証は生ながら葬らるべき罪を獲うるに余有  
 るものならずや。さしも覚悟の文ながら、彼はその一通の力を  
 以て直ただちに貫一の心を解かんとは思設けざりき。

故ゆゑに幾日の後に待ちて又かく聞えしを、この文にもなほ驗しるしあ  
 らずば、彼は弥増いやます悲かなしみの中に定めて三度みたびの筆を援とるなるべし。  
 知らずや、貫一は再度の封をだに切らざりしを——三度みたび、五度いつたび、  
ななたび七度重ね重ねて十百通に及ばんとも、貫一は断じてこの愚なる  
 悔悟を聴かじと意こころを決せるを。

静ふに臥ふしたりし貫一は忽ち起きて鞆を開き、先づかの文を出いだ  
マツチし、焔さかを搜さぐりて、封のままなるその端はしに火を移しつつ、火鉢ひばち  
 の上に差翳さしかざせり。一片の焔ほのほは烈々れつれつとして、白く颯あがるものは宮の

思の何か、黒く壞落くづれおつるものは宮が心の何か、彼は幾年いくとせの悲かなしみと悔とは嬉うれくも今その人の手に在りながら、すげなき烟けふりと消えて跡無くなりぬ。

貫一は再び鞆を枕にして始の如く仰臥あふぎふせり。

間ま有ありて婢めいどもの口々に呼邀よびむかふる声して、入来いりきし客の、障子しょうじ越こなる隣室に案内されたる氣勢けはひに、貫一はその男女なんによの二人連づれなるを知れり。

彼等は若き人のやうにもあらず頗すこる沈寂しめやかに座に着きたり。

「まだ沢山時間が有るから寛ゆつくり出来る。さあ、鈴すずさん、お茶をお上あんなさい」

こは男の声なり。

「貴方あなた本当にこの夏にはお帰かえんなさいますのですか」

「益過ほんすぎには是非一度帰ります。然しね、お話をした通り尊父をぢさ

んや尊母をばさんの気が變つて了つてお在いでなのだから、鈴さんばかりそんなに思つてゐておくれでも、これがどうして、円く納るものぢやない。この上はもう唯諦ただあきらめるのだ。私は男わたしらしく諦め  
た！」

「雅まささんは男だからさうでせうけれど、私は諦わたしめません。さうぢやないとお言ひなさるけれど、雅さんは阿父おとつさんや阿母おつかさんの為方しかたを慍おこつてお在いでなのに違ちがひない。それだから私までが憎いので、いいえ、さうよ、私は何でも可いから、若し雅さんが引取つて下さらなければ、一生何処どこへも適あきはしませんから」

女は処々ところどころ聞き得ぬまでの涙声になりぬ。

「だつて、尊父さんや尊母さんが不承知であつて見れば、幾許いくば私の方で引取りたくつても引取る訳に行かないぢやありませんか。それも、誰たれを怨うらむ訳も無い、全く自分が悪いからで、こん

な軀からだに疵きずの付いた者に大事の娘をくれる親は無ない、くれないのが尤もつともだと、それは私は自分ながら思つてゐる」

「阿父さんや阿母さんがくれなくても、雅さんさへ貰もらつて下されば可よいのぢやありませんか」

「そんな解らない事を言つて！ 私だつてどんなに悔くやしいか知れはしない。それは自分の不心得からあんな罪にも陥おちちたのだけれど、実を謂いへば、高利貸わなまの※に罹かかつたばかりで、自分の軀からだには生涯せいぜいの疵きずを付つけ、隻ひとりの母親は……殺してしひ、又その上に……許婚いひなづけは破談やぶにされ、……こんな情無い思しを為なる位なら、不如私いっそは牢ろうの中で死んで了つた……方が可よかつた！」

「あれ、雅さん、そんな事を……」

両箇ふたりは一度に哭なき出いせり。

「阿母さんがあん畜生ちつきしやうの家を焼いて、夫婦とも焼死んだのは好い肚癒はらいせぢやあるけれど、一旦私の軀みに附いたこの疵は消えない。

阿母さんも来月は鈴さんすうが来てくれると言つて、朝晩にそればかり楽たのしみにして在あすつた……のだし」

女をんなはつと出でし泣音なくねの後を怵こらへ怵こらへて啜すすりあ上げぬ。

「私も破談わたしに為する気は少も無いけれど、これは私の方から断るのが道だから、必ず悪く思つて下さるな」

「いいえ……いいえ……私は……何も……断られる訳はありません」

「私に添へば、鈴さんの肩身も狭くなつて、生涯何のかのところに言れなけりやならない。それがお気毒あきらだから、私は自分から身を退ひいて、これまでの縁あきらと諦めてゐるので、然し、鈴さん、私は貴方の志は決して忘れませんよ」

女は唯愈いよいよよ咽むせびみたり。音も立てず臥ふしたりし貫一はこの時忍しのび起きて、障子の其処そこ此処ここより男を隙見すきみせんと為たりけれど、竟つひに意こころの如くならで止みぬ。然しかれども彼は正まさしくその声音こわねに聞き覚おぼあるを思合せぬ。かの男は鰐淵あくらまさゆきの家に放火せし狂女の子にて、私書偽造罪を以て一年の苦役を受けし飽浦雅之ならずと為せんや。さなり、女の名を呼べるにても知らるるを、と独ひとり頷うなづきつづ貫一は又潜ひそまりて聴耳立てたり。

「嘘うそにもさうして志は忘れないなんて言つて下さる程なら、やつぱり約束通り私を引取つて下さいな。雅さんがああ云ふ災難にお遭あひなので、それが為に縁を切る意つもりなら、私は、雅さん、……一年が間……塩断しほだちなんぞ為はしませんわ」  
彼は自らその苦節を憶おもひて泣きぬ。

「雅さんが自分に悪い事を為てあんな訳に成つたのぢやなし、

高利貸の奴に瞞だまされて無実の罪に陥ちたのは、雅さんの災難だと、私は俱共ともどもに悔くやし……悔くやし……悔くやいとほ思つてゐても、それで雅さんの軀いに疵いが附いたから、一処いになるのは迷惑だなんと何時いつ私が思つて！ 雅さん、私はそんな女ぢやありません、そんな女ぢや……ない！」

この心を知らずや、と情極じようきはまりて彼の悶もだえ慨なげくが手に取る如き隣りには、貫一うつむしが内俯かしらに頭すりつを擦すり付けて、卷ま葛きたの消さえしを撃さげたるまよまに横よこはれるなり。

「雅さんは私をそんな女だと思ひのは、貴方あなたがお留守中の私の事を御存ごぞんじないからですよ。私は三月みつぎの余よも疾わづらつて……そんな事も雅さんは知つてお在いでぢやないのでせう。それは、阿父おとつさんや阿母おつかさんは雅さんのところへ上げる気は無ないにしても、私は私の了簡りょうかんで、若しああ云ふ事が有つたので雅さんの肩身かたみが狭

くなるやうなら、私は猶更雅さんのところへ適ゆかずにはゐられない。さうして私も雅さんと一処に肩身が狭くなりたいたいのですから。さうでなけりや、子供の内からあんなに可愛かはいがつて下すつた雅さんの尊母おつかさんに私は濟まない。

親が不承知なのを私が自分の了簡通りようけんどほりに為るのは、そりや不孝かも知れませんが、私はどうしても雅さんのところへ適ゆきたいのですから、お可厭いやでなくば引取つて下さいましな。私の事はかまひませんから雅さんが貰つて下さるお心持あんがお有あなさるのか、どうだか唯それを聞いて下さいな」

貫一は身を回めぐらして臂枕ひでまくらに打仰うちあふぎぬ。彼は己おのれが与へし男の不幸よりも、添そはれぬ女の悲かなしみよりも、先まづその娘が意氣さかんの壮さかんなるに感じて、あはれ、世にはかかる切なる恋もゆの焚もゆる如き誠まこともあるよ、と頭かしらは熱ねつし胸むねは轟とどろくなり。

さて男の声は聞ゆ。

「それは、鈴さん、言ふまでもありはしない。私もこんな目  
さへ遭あはなかつたら、今頃は家内三人で睦むつまじく、笑つて暮してゐ  
られるものを、と思へば猶の事、私は今日の別が何とも謂いはれな  
いほど情無い。かうして今では人に顔向かほむけも出来ないやうな身に  
成つてゐる者をそんなに言つてくれるのは、この世の中に鈴さ  
ん一人だと私は思ふ。その優い鈴さんと一処いっしょに成れるものなら、  
こんな結構な事は無いのだけれど、尊父をぢさん、尊母をばさんの心  
もなつて見たら、今の私には添そはされないのは、決して無理の無  
いところで、子を念ふ親の情じやうは、何処どこの親でも差違かはりは無ない。そ  
こを考へればこそ、私は鈴さんの事は諦あきらめると云ふので、子と  
して親に苦勞を懸けるのは、不孝どころではない、悪事だ、立  
派な罪だ！ 私は自分の不心得から親に苦勞を懸けて、それが

為に阿母さんもああ云ふ事に成つて了つたのだから、実は私が  
 手に掛けて殺したも同然。その上に又私ゆゑに鈴さんの親達に  
 苦勞を懸けては、それぢや人の親まで殺すと謂つたやうな者だ  
 から、私も諦められないところを諦めて、これから一働して世  
 に出られるやうに成るのを樂たのしみに、やつぱり暗い処に入つてゐる  
 氣で精一杯勉強するより外は無い、と私は覚悟してゐるのです」  
 「それぢや、雅さんは内の阿父おとつさんや阿母おつかさんの事はそんなに  
 思つて下すつても、私の事は些ちつとも思つては下さらないのですね。  
 私の軀なんぞはどうならうと、雅さんはかまつては下さらない  
 のね」

「そんな事が有るものぢやない！ 私だつて……」

「いいえ、可うございます。もう可いの、雅さんの心は解りま  
 したから」

「鈴さん、それは違つてゐるよ。それぢや鈴さんは全<sup>まる</sup>で私の心を酌んではおくれでないのだ」

「それは雅さんの事よ。阿父さんや阿母さんの事をさうして思つて下さる程なら、本人の私の事だつて思つて下さりさうな者ぢやありませんか。雅さんのところへ適<sup>ゆ</sup>くと極<sup>きま</sup>つて、その為に御嫁入道具まで丁<sup>ちゃん</sup>と調<sup>こしら</sup>へて置きながら、今更外へ適<sup>ゆか</sup>れますか、雅さんも考へて見て下さいいな。阿父さんや阿母さんが不承知だと謂つても、そりや余<sup>あんま</sup>り酷<sup>ひど</sup>いわ、余り勝手だわ！ 私は死んでも他<sup>よそ</sup>へは適<sup>あ</sup>きはしませんから、可いわ、可いわ、私は可いわ！」  
女は身を顫<sup>ふるは</sup>して泣沈めるなるべし。

「そんな事をお言ひだつて、それぢやどう為<sup>せ</sup>うと云ふのです」  
「どう為ても可う御座います、私は自分の心で極<sup>き</sup>めてゐますから」

亜いで男の声は為ざりしが、間有りて孰より語り出でしとも  
 分かず、又一時密々と話声の洩れけれど、調子の低かりければ  
こなた 此方には聞知られざりき。彼等は久くこの細語を息めずして、  
ことば その間一たびも高く言を出さざりしは、互にその意に逆ふとこ  
 ろ無かりしなるべし。

「きつと？ きつとですか」

始て又明かに聞えしは女の声なり。

「さうすれば私もその気で居るから」

かくて彼等の声は又低うなりぬ。されど益す絮々として飽か  
こころひそか ず語れるなり。貫一は心陰に女の成效を祝し、かつ雅之たる者  
 のこれが為に如何に幸ならんかを想ひて、あたかも妙なる楽の  
ね 音の計らず洩聞えけんやうに、憂かる己をも忘れんとしつ。

今かの娘の宮ならば如何ならん、吾かの雅之ならば如何なら

ん。吾は今日の吾たるを扱えらぶ可べきか、将はたかの雅之たるを希こひねがはんや。貫一は空むなしうかく想へり。

宮も嘗かつて己に對して、かの娘に遜ゆづるまじき誠を抱いだかざるにしもあらざりき。彼にして若もし金剛石ダイアモンドの光を見ざりしならば、また吾をも刑余に慕おびやかひて、その誠を全まつたうしたらんや。唯繼ただつぐの金力を以て彼女を脅おびやかしたらんには、またかの雅之を入獄の先に棄すたりけんや。耀かがやける金剛石ダイアモンドと汚けがれたる罪名とは、孰いづれか愛を割さくの力多かる。

彼は更にかく思へり。

唯その人を命として、己おのれも有らず、家も有らず、何処いづこの野末のずゑにも相従あひしたがはんと誓へるかの娘の、竟つひに利の為に志を移さざるを得べきか。又は一旦その人に与へたる愛を吝をしみて、再び価高く他に売らんと為るなきを得べきか。利と争ひて打勝れたると、

他の愛と争ひて敗れたると、吾等の恨は孰に深からん。

彼は又かくも思へるなり。

それ愛の最も篤あつからんには、利にも惑はず、他に又易かふる者もあらざる可きを、仮初かりそめもこれの移るは、その最も篤きにあらざるを明あかせるなり。凡およそ異性の愛は吾愛の如く篤かるを得ざる者なるか、或あるは己の信ずらんやうに、宮の愛の特ことに己にのみ篤からざりしなるか。吾は彼の不義不貞を憤るが故ゆゑに世上の恋なる者を疑ひ、かつ渾すべてこれを斥しりぞけぬ。されどもその一旦の憤いきどほりは、これを斥けしが為に消ゆるにもあらずして、その必ず得べかりし物を失へるに似たる快々おうおうは、吾心を食尽はみつくし、終つひに吾身を斃たふすにあらざれば、得やは去るまじき悪霊あくりようの如く執念しゆうねく吾を苦むるなり。かかれば何事にも樂むを知らざりし心の今日偶たまたま人の相悦あひよろこぶを見て、又躬みづからも怡よろこびつつ、樂たのしの影を追ふらんやうなり

しは何の故ならん。よし吾は宮の愛ならずとも、これに易ふる者を得て、とかくはこの心を慰めしむ可きや。

彼はいよいよ思廻せり。

宮はこの日頃吾に篤からざりしを悔いて、その悔を表せんには、何等の事を成さんも唯吾命のままならんとぞ言来したる。

吾はその悔の為にはかの憤を忘るべきか、任他吾恋の旧に復りて再び完かるを得るにあらず、彼の悔は彼の悔のみ、吾が失意の恨は終に吾が失意の恨なるのみ。この恨は富山に数倍せる富に因りて始て償はるべきか、或はその富を獲んとする貪欲はこの恨を移すに足るか。

彼は苦き息を嘘きぬ。

吾恋を壊りし唯繼！ 彼等の恋を壊らんと為しは誰そ、その

吾の今千葉に赴くも、又或は壊り、或は壊らんと為るにあらざ

る無きか。しかもその貪欲は吾に何をか与へんとすらん。富か、富は吾が狂疾を医すべき特效劑なりや。かの妨げられし恋は、破鏡の再び合ふを得て樂み、吾が割れし愛は落花の復る無くして畢らんのみ！ いで、吾はかくて空く埋るべきか、風に因りて飛ぶべきか、水に落ちて流るべきか。

貫一は船橋を過る燈暗き汽車の中に在り。

## 第六章

千葉より歸りて五日の後 M. Shigis —— の書信は又來りぬ。

貫一は例に因りて封のまま火中してけり。その筆の跡を見れば、たちま忽ち浮ぶその人の面影は、おもかげ唯繼と並び立てる梅園の密会にあらざる無きに、彼は殆ど同時に同き憤を發して、先の二度なるよ

りはこの三度みたびに及べるを、をこがまし徑廷をこがましくも廻らぬ筆の力などを以て、も  
むかし旧むかしに返し得べき未練の吾むかしに在りとや想へる、愚なる精衛きたの来り  
だいかいて大海うづを填めんとするやと、却りかへて頑かたくなに自ら守らんとも為なり。  
 さりとも知らぬ宮ありは蟻ありの思を運ぶに似たる片便かたよりも、行くべき  
 方には音づるるを、さてかの人の如何いかに見るらん、書綴かきつづれる吾誠わがまこと  
 の千に一つも通ずる事あらば、掛けても願へる一筋ひとすぢの緒いとぐちともな  
 りなんと、人目あらぬ折毎には必ず筆採ふでとりて、その限無おもひき思を  
 写してぞ止まざりし。

唯継もつぱは近頃彼の専もつぱら手習すと聞きて、その善おこなひき行おこなひを感ずる余あまり  
 に、良すずりき墨、良すずりき筆、良すずりき硯、良すずりき手本まで自ら求め来ては、  
 この難ありがた有ありがたき心掛おくの妻おくに遣りぬ。宮はそれ等を汚けがらはしとて一切用  
 ること無く、後には夫の机にだに向はずなりけり。かく怠よたびらず  
つづ綴つづられし文は、又むゆか六日むゆかを経て貫一もとの許もとに送られぬ。彼は四度よたびの

文をも例の灰と棄てて顧ざりしに、日を経ると思ふ程も無く、  
 五度の文は来にけり。よし送り送りて千束にも余れ、手に取る  
 からの烟ぞと侮れる貫一も、曾て宮には無かりし執着のかばか  
 りなるを謂知らず異みつつ、今日のみは直にも焚かざりしその  
 文を、一度は披き見んと為たり。

「然し……」

彼は輒く手を下さざりき。

「赦してくれと謂ふのだらう。その外には、見なければ成らん  
 用事の有る訳は無い。若し有ると為れば、それは見る可からざ  
 る用事なのだ。赦してくれなら赦して遣る、又赦さんでも既に  
 赦れてゐるのではないか。悔悟したなら、悔悟したで、それで  
 可い。悔悟したから、赦したからと云つて、それがどうなるの  
 だ。それが今日の貫一と宮との間に如何なる影響を与へるのだ。

悔悟したからあれの操みさをの疵きずが愈いえて、又赦したから、富山の事が無い昔に成るのか。その点に於おては、貫一は飽くまでも十年前の貫一だ。宮！ 貴様は一生汚けがれた宮ではないか。ことの破れて了しまつた今日こんにちになつて悔悟も赦してくれも要いつたものか、無益な事だ！ 少すこも汚けがれん宮であるから愛してをつたのだ、それを貴様は汚して了つたから怨おこんだのだ。さうして一遍汚れた以上は、それに対する十倍の徳おこなを行つても、その汚れたのを汚れざる者に改めることは到底出来んのだ。

であるから何と言つた！ 熱海で別れる時も、お前の外ほかに妻と思ふ者は無い、一命に換へてもこの縁は切られんから、俺おれのこの胸の中を可憐あはれと思つて、十分決心してくれ、と実に男を捨てて頼んだではないか。その貫一に負そむいて……何の面目めんぼく有つて今更悔悟……晚おそい！」

彼はその文を再三柱に鞭ちて、終に繩の如く引振りぬ。

打続きて宮が音信の必ず一週に一通来ずと謂ふこと無く、  
 披れざるに送り、送らるるに披かざりしも、はや算ふれば十通  
 に上れり。さすがに今は貫一が見る度の憤も弱りて、待つとに  
 はあらねど、その定りて来る文の繁きに、自ら他の悔い悲める  
 宮在るを忘るる能はずなりぬ。されど、その忘るる能はざるも、  
 遽に彼を可懐むにはあらず、又その憤の弱れるも、彼を赦し、  
 彼を容れんと為るにあらずして、始に恋ひしをば棄てられ、後  
 には棄てしを悔らるる身の、その古き恋はなほ己に存し、彼の  
 新なる悔は切に齎るも、徒に凍えて水を得たるに同かるこの両  
 の者の、相對して相拯ふ能はざる苦艱を添ふるに過ぎざるをや。  
 ここに於て貫一は披かぬ宮が文に向へば、その幾倍の悲きもの  
 を吾と心に読み、かの恨ならぬ恨も生じ、かの憤ならぬ憤も

発して、憂身独の儂うきみひとりき世をば如何はかなにせんやうも知らで、唯安か  
 らぬ昼夜を送りつつ、出づるに入るに茫々ぼうぼうとして、彼は屢しばしばばそ  
 の貪むさぼるをさへ忘るる事ありけり。劇はげしく物思ひて寝ねざりし夜の  
 明方近く疲睡を催せし貫一は、新緑の雨に暗き七時の閨ねやに覽おそはる  
 る夢の苦しきりく頻うめに呻うめきしを、老婢ろうひに喚よほれて、覚めたりと知りつつ  
 現うつならず又睡りけるを、再び彼ゆりおこさに揺起れて驚けば、  
 「お客様でございます」

「お客？ 誰だ」

「荒尾さんと有仰おつしやいました」

「何、荒尾？ ああ、さうか」

主あるじの急あぎ起あきんとすれば、

「お通し申しますで御座いますか」

「おお、早くお通し申して。さうしてな、唯今起きましたとこ

ろで御座いますから、暫く失礼致しますときさう申して」

貫一はかの一別の後三度まで彼の隠家を訪ひしかど、毎に不

在に会ひて、二度に及べる消息の返書さへあらざりければ、安

否の如何を満枝に糺せしに、変る事無く其処に住めりと言ふに、

さては真に交を絶たんとすならんを、姑く強て追はじと、一月

余も打絶えたりしに、彼方より好くこそ来つれ、吾がこの苦を

語るべきは唯彼在るのみなるを、朋の来れるも、実にかくばか

り楽きはあらざらん。今日は酒を出して一日彼を還さじなど、

心忙きまでに歎ばれぬ。

絶交せるやうに疏音なりし荒尾の、何の意ありて卒に訪来れる

ならん。貫一はその何の意なりやを念はず、又その突然の来叩

をも怪まずして、畢竟彼の疏音なりしはその飄然主義の拘らざ

る故、交を絶つとは言ひしかど、誼の吾を棄つるに忍びざる故

と、彼はこの人のなほ己を友として来れるを、有得べからざる事とは信ぜざりき。

手水場を出来し貫一は腫眶の赤きを連踏きつつ、羽織の紐を

結びも敢へず、つと客間の紙門を排けば、荒尾は居らず、かの荒

尾讓介は居らで、美う装へる婦人の独り羞含う控へたる。打惑

ひて入りかねたる彼の目前に、可疑き女客も未だ背けたる面を

回さず、細雨静に庭樹を撲ちて滴る翠は内を照せり。

「荒尾さんと有仰るのは貴方で」

彼は先づかく会釈して席に着きけるに、婦人は猶も面を示さ

ざらんやうに頭を下げて礼を作せり。しかも彼は輒くその下げ

たる頭と拄へたる手とを挙げざるなりき。始に何者なりやと驚

されし貫一は、今又何事なりやと弥よ呆れて、彼の様子を打矚

れり。乍ち有りて貫一の眼は慌忙く覓むらん色を作して、婦人

の俯けるを乞と窺ひたりしが、

「何ぞ御用でございますか」

「……………」

彼は益す急に左瞻右視して窺ひつ。

「どう云ふ御用向でございますか。伺ひませう」

「……………」

露置く百合の花などの仄に風を迎へたる如く、その可疑き婦人の面は術無げに拳らんとして、又慙ぢ懼れたるやうに遲疑ふ時、

「宮!?」と貫一の声は筒抜けて走りぬ。

宮は嬉し悲しの心味みて、身も世もあらず泣伏したり。

「何用有つて来た!」

怒るべきか、この時。恨むべきか、この時。辱むべきか、悲

むべきか、号ぶべきか、罵るべきか、責むべきか、彼は一時に  
万感の相乱れて急なるが為に、吾を吾としも覚ゆる能はずして  
打顫ひるたり。

「貫一さん！ どうぞ堪忍して下さいまし」

宮は漸う顔を振挙げしも、凄く色を変へたる貫一の面に向ふ  
べくもあらで萎れ俯しぬ。

「早く帰れ！」

「……………」

「宮！」

幾年間かざりしその声ならん。宮は危みつつも可懐しと見る  
目を覚えず其方に転せば、鋭く睨ふる貫一の眼の湿へるは、既  
に如何なる涙の催せしならん。

「今更お互に逢ふ必要は無い。又お前もどの顔で逢ふ意か。」

先達せんだつて而しきりから頻しきりに手紙を寄来よこすが、あれは一通でも開封したのは無い、来れば直すぐに焼棄すくて了ふのだから、以来は断じて寄来さんやうに。私わたしは今病中で、かうしてゐるのも太儀たいぎでならんのだから、早く帰つて貰もらひたい」

彼は老婢を召して、

「お客様のお立たちだ、お供にさう申して」

取附く島もあらず思惱おもひなやめる宮を委おきて、貫一は早くも独り座を起たたんとす。

「貫一さん、私わたしは今日けふは死んでも可いい意つもりでお目に掛りに来たのですから、貴方あなたの存分ぞんぶんにどんな目にも遭あせて、さうしてそれでもかくも今日は勘弁して、お願いですから私の話を聞いて下さいまし」

「何の為に！」

「私は全く後悔しました！ 貫一さん、私は今になつて後悔しました!! 悪い事くはしはこの間からの手紙に段々書いて上げたのですけれど、全まるで見ても下さらないので、後悔してゐる私のどんな切ない思をしてゐるか、お解りにはならないでせうが、お目に掛つて口では言ふに言れない事ばかり、設たどひ書けない私の筆でも、あれをすつかり見て下すつたら、些ちつとはお腹立も直らうかと、自分では思ふのです。色々お詫わびは為る意つもりでも、かうしてお目に掛つて見ると、面目めんぼくが無いやら、悲いやらで、何一語ひとことも言へないのですけれど、貫一さん、とても私は来られる筈はずでない処へかうして来たのには、死ぬほどの覚悟をしたのと思つて下さいまし」

「それがどう為たのだ」

「さうまで覚悟をして、是非お話を為たい事が有るのですから、

御迷惑でもどうぞ、どうぞ、貫一さん、ともかくも聞いて下さ  
いまし」

涙ながらに手を拄へて、吾が足下に額叩く宮を、何為らんと  
やうに打見遣りたる貫一は、

「六年前の一月十七日、あの時を覚えてゐるか」

「……………」

「さあ、どうか」

「私は忘れは為ません」

「うむ、あの時の貫一の心持を今日お前が思知るのだ」

「堪忍して下さい」

唯見る間いとに出行いでゆく貫一、咄嗟あなや、紙門ふすまは鉄壁よりも堅く閉てら

れたり。宮はその心に張充めし望を失ひてはたと領伏しぬ。

「豊、豊！」と老婢を呼ぶ声劇く縁続の子亭より聞ゆれば、直に

走り行く足音の響きしが、やがて返し来れる老婢は客間に顕れぬ。宮は未だ頭を挙げずゐたり。可憐き束髪えりもとふかの頸元深く、黄蘗染おうぼくぞめの半衿はんえりに紋御召もんおめしの二枚衿にまいあはせを重ねたる衣紋えもんの綾先あやまづ謂はんやう無く、肩状優かたつきやさしう内俯うつふしたる脊そびらに金茶地きんちやぢの東綴あづまつづれの帯高く、勝色裏かついろうらの敷乱しきみだれつつ、白羽二重しろはぶたへのハンカチリングイフに涙を掩おほへる指かがやかに赤く、白く指環リングの玉かがやかを耀ほとんしたる、殆ど物語の画みをも看るらん心地して、この美き人の身の上に何事の起りけると、豊おそろしは可恐おそろしきやうにも覚ゆるぞかし。

「あの、申上げますが、主人は病中の事でございませぬもので、唯あいにく今生憎あいにくと急に気分が悪くなりましたので、相済みませんで御座いますこんにちが中座を致しました。恐入りますで御座いますおたちかへりが、どうぞ今日はこれで御立帰おたちかへりを願ひますで御座いますおもち」

面おもてを抑へたるままに宮は涙を啜すすりて、

「ああ、さやうで御座いますか」

「折角お出いでのところを誠にどうもお気毒さまで御座います」

「唯今些ちよつと支度を致しますから、もう少々置いて戴いたきますよ」

「さあさあ、貴方あなた御遠慮無く御寛ごゆるりと遊ばしまし。又何だか降出

して参りました、今日こんにちはいつそお寒過ぎますで御座います」

彼の起あちし迹あとに宮は身支度を為るにもあらで、始よて甦みがりたる人

の唯在るが如くに打沈みてぞゐたる。やや久ひさかるに客の起たん

とする模様あらねば、老婢は又出来いれり。宮はその時邊にはかに身みづん

して、

「それではお暇いとまを致します。些ちよつと御挨拶だけ致して参りたいの

ですから、何方どちらにお寝よつてお在いでですか……」

「はい、あの何でございます、どうぞもうおかまひ無く……」

「いいえ、御挨拶だけ些ちよつと」

「さやうで御座いますか。では此方へ」

あるじ 主の本意ならじとは念ひながら、老婢は止むを得ず彼を子亭  
 案内せり。昨夜の収めざる蓐の内に貫一は着のまま打仆れて、  
 よぎ 夜着も掻卷も裾の方に蹴放し、枕に辛うじてその端に幾度か置易  
 られし頭を載せたり。

思ひも懸けず宮の入来るを見て、起回らんとせし彼の膝下に、  
 早くも女の転び来て、立たんと為れば袂を執り、猶も犇と寄添  
 ひて、物をも言はず泣伏したり。

「ええ、何の真似だ！」

突返さんとする男の手を、宮は両手に抱き緊めて、

「貫一さん！」

「何を為る、この恥不知！」

「私が悪かつたのですから、堪忍して下さいまし」

「ええ、やかまし 聒たい！　ここを放さんか」

「貫一さん」

「放さんかと言ふに、ええ、もう！」

その身を楯たてに宮は放さじと争ひて益ますます放さず、両箇ふたりが顔は互に息の通はんとすばかり近く合ひぬ。一生又相見あひみじと誓へるその人の顔の、おのれ眺ながめたりし色は疾とく失せて、誰たれゆるゑ今の別べつに豔えんなるも、なほ形のみは変らずして、実げにかの宮にして宮ならぬ宮と、吾は如何いかにしてここに逢へる！　貫一はその胸の夢むる間ひまに現うつつともなく彼を矚まもれり。宮は殆ほとんど情極きはまりて、纔わづかに狂せざるを得たるのみ。

彼は人の頭かしらより大いなるダイヤモンドを乞ふが為に、この貫一の手を把とる手をば釈とかざらん。大いなるダイヤモンドか、幾許いかにばかり大いなるダイヤモンドも、宮は人の心の最も小き誠に値せざる

を既に知りぬ。彼の持たるダイヤモンドはさせる大いなる者ならざれど、その棄去りし人の誠は量無きものなりしが、嗟乎、今何処に在りや。その嘗て誠を恵みし手は冷かに残れり。空くその手を抱きて泣かんが為に来れる宮が悔は、実に幾許大いなる者ならん。

「さあ、早く帰れ！」

「もう二度と私はお目には掛りませんから、今日のところはどうとも堪忍して、打つなり、殴くなり貫一さんの勝手にして、さうして少小でも機嫌を直して、私のお詫に來た訳を聞いて下さい」

「ええ、煩い！」

「それぢや打つとも殴くともして……」  
身悶して宮の縫るを、

「そんな事で俺の胸が霽れると思つてゐるか、殺しても慊らんのだ」

「ええ、殺れても可い！ 殺して下さい。私は、貫一さん、殺して貰ひたい、さあ、殺して下さい、死んで了つた方が可いのですから」

「自分で死ね！」

彼は自ら手を下して、この身を殺すさへ屑からずとまでに己を鄙むなるか、余に辛しと宮は唇を咬みぬ。

「死ね、死ね。お前も一旦棄てた男なら、今更見とも無い態を為ずに何為死ぬまで立派に棄て通さんのだ」

「私は始から貴方を棄てる気などは有りはしません。それだから篤りとお話を為たいのです。死んで了へとお言ひでなくても、私はもう疾から自分ぢや生きてゐるとは思つてゐません」

「そんな事聞きたくはない。さあ、もう帰れと言つたら帰らんか！」

「帰りません！ 私はどんな事してもこのままぢや……帰れませんか」

宮は男の手をば益す弛めず、益す激する心の中には、夫もあらず、世間もあらずなりて、唯この命を易ふる者を失はじと一向に思入るなり。

折から縁に足音するは、老婢の来るならんと、貫一は取られたる手を引放たんとすれど、こは如何、宮は些も弛めざるのみか、その容をだに改めんと為ず。果して足音は紙門の外に逼れり。

「これ、人が来る」

「……………」

宮は唯力を極めぬ。

不意にこの体を見たる老婢は、半啓けたる紙門の陰に顔引入れつつ、

「赤檜さんがお出になりまして御座います」

窮厄の色はつと貫一の面に上れり。

「ああ、今其方へ行くから。——さあ、客が有るのだ、好加減に帰らんか。ええ、放せ。客が有ると云ふのにどうするのか」

「ぢや私はここに待つてゐますから」

「知らん！ もう放せと言つたら」

用捨もあらず宮は捻倒されて、落花の狼藉と起き敢へぬ間に貫一は出行く。

座敷外に脱ぎたる紫裏むらさきうらの吾妻あづまコオトに目留めし満枝は、嘗て知らざりしその内曲うちわの客を問はで止む能あたはざりき。又常に厚く恵めぐまるる老婢は、彼の為に始終の様子を告つぐるの勞を吝をしまざりしなり。さてはと推せし胸の内は瞋恚しんいに燃えて、可憎にくき人の疾とく出で来こよかし、如何いかなる貌かほして我を見んと為すらん、と焦心せきしころに待つ間のいとどしう久ひさしかりしに、貫一はなかなか出いで来ずして、しかも子亭はなれのほとほと人氣ひとけもあらざらんやうに打鎮うちしづまれるは、我に忍ぶかと、弥いよちよ満枝は怵こらへかねて、

「お豊さん、もう一遍だんな旦那様にさう申して来て下さいな、私わたし今日は急ぎますから、些ちよつとお目に懸りたいと」

「でも、私わたしは誠まことに参り難にくいので御座いますよ、何だかお話が大変込入いつてお在いのやうで御座いますから」

「かまはんぢやありませんか、私がさう申したと言つて行くの  
ですもの」

「ではさう申上げて参りますです」

「はあ」

老婢は行きて、紙門ふすまの外より、

「旦那さま、旦那さま」

「此方こちらにお在いでは御座いませんよ」

かく答へしは客の声なり。豊は紙門ふすまを開きて、

「おや、さやうなので御座いますか」

實げに主あるじは在あらずして、在あるが如くその枕頭まくらもとに坐れる客の、猶悲なほかなしみ

の残れる面おもてに髪をば少し打乱うちみだし、左の格わきあけの二寸ばかりも裂けた

るままに姿も整はずみたりしを、遽にはかに引ひきつつくろ

「今いまし方そちら其方そちらへお出いでなすつたのですが……」

「おや、さやうなので御座いますか」

「那裡あちらのお客様の方へお出いでなすつたのでは御座いませんか」

「いいえ、貴方、那裡あちらのお客様が急ぐと有仰おつしやつてで御座います

ものですから、さう申上げに参つたので御座いますが、それぢ

やまあ、那边どちらへいらつしやいましたらう！」

「那裡あちらにもゐらつしやいませんの！」

「さやうなので御座いますよ」

老婢はここを倉皇とっかは起ちて、満枝が前に、

「此方こちらへもいらつしやいませんで御座いますか」

「何が」

「あの、那裡あちらにもゐらつしやいませんで御座いますが」

「旦那様が？ どうして」

「今し方這裡こちらへ出てお在いでになつたのださうで御座います」

「嘘、嘘ですよ」

「いいえ、那裡にはお客様がお一人でゐらつしやるばかり……」

「嘘ですよ」

「いいえ、どういたして貴方、決して嘘ぢや御座いません」

「だつて、此方へお出なさは為ないぢやありませんか」

「ですから、まあ、何方へいらつしやつたのかと思ひまして……」

「那裡にきつと隠れてでもお在なのですよ」

「貴方、そんな事が御座いますものですか」

「どうか知れはしません」

「はてね、まあ。お手水ですかしらん」

「随処尋ねんとて彼は又倉皇起ちぬ。」

「有効無きこの侵辱に遭へる吾身は如何にせん、と満枝は無念

の遣る方無さに色を変へながら、此も騒ぎ惑はずして、知りつつ

食<sup>は</sup>みし毒<sup>しるし</sup>の験<sup>しるし</sup>を耐<sup>た</sup>へ忍<sup>しの</sup>びみたらんやうに、得<sup>い</sup>も謂<sup>い</sup>れず窃<sup>ひそ</sup>に苦<sup>く</sup>めり。宮<sup>みや</sup>はその人<sup>の</sup>の遁<sup>のが</sup>れ去<sup>さ</sup>りしこそ頼<sup>たの</sup>みの綱<sup>なま</sup>は切<sup>き</sup>られしなれと、はや留<sup>とど</sup>るべき望<sup>のぞ</sup>も無<sup>な</sup>く、まして立<sup>た</sup>帰<sup>か</sup>るべき力<sup>ちから</sup>は有<sup>あ</sup>らで、罪<sup>つみ</sup>の報<sup>むく</sup>いは悲<sup>かな</sup>くも何時<sup>いつ</sup>まで儂<sup>はかな</sup>きこの身<sup>み</sup>ならんと、打<sup>うち</sup>俯<sup>ふ</sup>し、打<sup>うち</sup>仰<sup>あ</sup>ぎて、太<sup>た</sup>息<sup>めいき</sup>呻<sup>う</sup>くの<sup>み</sup>み。

颯<sup>さ</sup>と空<sup>くら</sup>の昏<sup>くら</sup>み行<sup>い</sup>く時<sup>とき</sup>、軒<sup>のき</sup>打<sup>うち</sup>つ雨<sup>あめ</sup>は漸<sup>やう</sup>く密<sup>ひそ</sup>なり。

戸<sup>と</sup>棚<sup>だな</sup>、押<sup>お</sup>し入<sup>し</sup>れの外<sup>ほか</sup>搜<sup>た</sup>さざる処<sup>ところ</sup>もあらざりしに、終<sup>つひ</sup>に主<sup>あるじ</sup>を見<sup>み</sup>出<sup>いだ</sup>さざる老<sup>お</sup>婢<sup>めかけ</sup>は希<sup>け</sup>有<sup>う</sup>なる貌<sup>かほ</sup>して又<sup>また</sup>子<sup>こ</sup>亭<sup>てい</sup>に入<sup>い</sup>来<sup>き</sup>れり。

「何方<sup>ど</sup>ち<sup>ちら</sup>にもゐらつしやいませんで御<sup>ご</sup>座<sup>ざ</sup>いますか……」

「あら、さやうですか。ではお出<sup>で</sup>掛<sup>か</sup>にでも成<sup>な</sup>つたのでは御<sup>ご</sup>座<sup>ざ</sup>いませんか」

「さやうで御<sup>ご</sup>座<sup>ざ</sup>いますね。一<sup>い</sup>体<sup>たい</sup>まあどうなすつたと云<sup>い</sup>ふので御<sup>ご</sup>座<sup>ざ</sup>いませう、那<sup>あ</sup>裡<sup>ち</sup>にも這<sup>こ</sup>ち<sup>ら</sup>裡<sup>ら</sup>にもお客<sup>お</sup>様<sup>さま</sup>を置<sup>お</sup>去<sup>き</sup>に作<sup>な</sup>つてからに。

はてね、まあ、どうもお出掛になる訳は無いので御座いますけれど、家中には何処どっこにもゐらつしやらないところを見ますと、お出掛になつたので御座いますかしらん。それにしても……まあ御免あそばしまして」

彼は又満枝の許もとに急ぎ行きて、事の由よしを告げぬ。

「いいえ、貴方あなた、私は見て参りましたので御座いますよ。子亭はなれにゐらつしやりは致しません、それは大丈夫で御座います」

彼は遽にはかに心着きて履物はきものを検め来んとて起ちけるに、踵ついで起てる満枝の庭前にはさきの縁に出づると見れば、従々つつかつかと行きて子亭はなれの入口あはに蹶おれたり。

宮は何人なにびとの何の為ために入来いりきたれるとも知らず、先づ愕おどろきつつも彼を迎へて容かたちを改めぬ。吾が恋人の恋人を拝まんとてここに来にける満枝の、意外にも敵おのれの己わがより少く、己より美しく、己より可憐しをらし

く、己より貴きを見たる妬<sup>ねた</sup>き、憎きは、唯この者有りて可<sup>いと</sup>怜<sup>つるぎ</sup>しき故に、他<sup>ひと</sup>の情<sup>なさけ</sup>も誠も彼は打忘るるよとあはれ、一念の力を劍<sup>つるぎ</sup>とも成して、この場を去らず刺殺<sup>さしころ</sup>さまほしう、心は躍<sup>をど</sup>り襲<sup>かか</sup>り、躍り襲<sup>かか</sup>らんと為るなりけり。

宮は稍<sup>やや</sup>羞<sup>はぢら</sup>ひて、葉<sup>は</sup>隠<sup>かく</sup>れに咲<sup>は</sup>遅<sup>遅</sup>れたる花の如く、夕月の涼<sup>すずし</sup>う棟<sup>むね</sup>を離れたるやうに満枝は彼の前に進<sup>すす</sup>出<sup>み</sup>でて、互に対面の礼せし後、  
「始めましてお目に掛りますで御座いますが、間様の……御親戚？ でゐらつしやいますで御座いますか」

憎き人をば一番苦めんの満枝が底意なり。

「はい親類筋の者で御座います」

「おや、さやうでゐらつしやいますか。手前は赤檜満枝と申しまして、間様とは年来の御懇意で、もう御親戚同様に御交際を致して、毎々お世話になつたり、又及ばずながらお世話も致し

たり、始終お心易く致してをりますで御座いますが、ついで、まあ従来これまでお見上げ申しませんで御座いました」

「はい、つい先日まで長らく遠方に参つてをりましたもので御座いますから」

「まあ、さやうで。余程何でございますか、御遠方です？」

「はい……広島の方に居りまして御座います」

「はあ、さやうで。唯今は何方どちらに」

「池端いけのはたに居ります」

「へえ、池端、お宜よろしい処で御座いますね。然し、夙かねて間様のお話

では、御自分は身寄も何も無いから、どうぞ親戚同様に末の末

まで交際おつしやしたいと有仰るもので御座いますから、全くさうとば

かり私信わたくしじてをりましたので御座いますよ。それに唯今かうし

て伺ひますれば、御立派な御親戚がお有り遊ばすのに、どう云

ふお意つもりであんな事を有仰つたので御座いませう。何も親戚のお有りあそばす事をお隠しになるには当らんぢや御座いませんか。

あの方は時々さう云ふ水臭い事を一体なま作るの御座いますよ」

疑うたがひの雲は始て宮が胸かかに懸りぬ。父が嘗かつて病院にて見し女の必ずいつはり誤有るべしと指させしはこれならん。さては客来きやくらいと言ひしも詐いつはりにて、或あるひは内縁の妻と定れる身の、吾わがを咎とがめて邪魔立せんとか、但ただしは彼人のこれ見よとてここに引出ひきいだせしかと、今更に差たがはざりし父ちちが言ことばを思ひて、宮は仇あだの為に病めるを咎むちうたるるやうにも覺ゆるなり。いよいよ長く居るべきにあらぬ今日のこの場ばはこれまでと潔く座を起たんとしたりけれど、何処いづくにか潜ひそめある彼人かのひとの吾わがが還るを待ち待ちまて忽たちまち出で来て、この者と手を把とり、面おもてを並ならべて、可哀あはれなる吾わがをば笑わらひ罵ののしりもやせんと想おもへば、得堪えたへず口惜くちをしくて、如何いかにせば可よきと心苦こころくるしく遅ためらひひたり。

「お久しぶりで折角お出いでのところを、生憎あいにくと余義無い用向の使が見えましたもので、お出掛かへりになつたので御座いますが、些ちよつと遠方ちよつでございますから、お帰来かへりの程は夜にお成りいで御座いませう、近日ちようぎどうぞ又御寛ごゆつくりとお出いで遊あそばしまして」

「大相長座ちようぎを致いたしまして、貴方の御用のお有り遊あそばしたところを、心無いお邪魔を致いたしまして、相済あひまみませんで御座いました」「いいえ、もう、私共は始終上つてをるので御座いますから、些ちよつとも御遠慮には及びませんで御座います。貴方こそさぞ御残念ごぜん念ねんでゐらつしやいませう」

「はい、誠に残念でございます」

「さやうで御座いませうとも」

「四五年ぶりで逢あひましたので御座いますから、色々昔話むかしでも致いたして今日こんにちは一日遊あそんで参まらうと楽たのしみに致いたしてをりましたのを、

実に残念で御座います」

「大きに」

「さやうなら私はお暇を致しませう」

「お帰来で御座いますか。丁度唯今小降で御座いますね」

「いいえ、幾多降りましたところが俣で御座いますから」

互に憎し、口惜しと鑄を削る心の刃を控へて、彼等は又相見ざるべしと念じつつ別れにけり。

## 第七章

家の内を隈無く尋ねれども在らず、さては今にも何処よりか  
帰来んと待てど暮せど、姿を晦せし貫一は、我家ながらも身を  
容るる所無き苦紛れに、裏庭の木戸より傘も撃さで忍び出でけ

るなり。

されど唯一目散に脱れんとのみにて、卒に志す方もあらぬに、  
 生憎降頻る雨をば、辛くも人の軒などに凌ぎつつ、足に任せて  
 行くほどに、近頃思立ちて折節通へる暮会所の前に出でければ、  
 ともかくも成らんとて、其処に躍入りけり。

客は三組ばかり、各静に窓前の竹の清韻を聴きて相對せる座  
 敷の間奥に、主は乾魚の如き親仁の黄なる髯を長く生したる  
 が、兀然として独り盤を磨きみる傍に通りにて、彼は先づ濡れた  
 る衣を炙らんと火鉢に寄りたり。

異み問はるるには能くも答へずして、貫一は余りに不思議な  
 る今日の始末を、その余波は今も轟く胸の内に痛か思回して、  
 又空く神は傷み、魂は驚くといへども、我や怒る可き、事や哀  
 むべき、或は悲む可きか、恨む可きか、抑も喜ぶ可きか、慰む

可きか、彼は全く自ら弁ぜず。五内渾て燃え、四肢直に氷らんと覺えて、名状すべからざる感情と煩悶とは新に來りて彼を襲へるなり。

主は貫一が全濡の姿よりも、更に可訝きその気色に目留めて、問はでも椿事の有りしを疑はざりき。ここまで身は遁れ來にけれど、なかなか心安からで、兩人を置去に為し跡は如何、又我が為んやうは如何など、彼は打惑へり。沸くが如きその心の騒しきには似で、小暗き空に満てる雨声を破りて、三面の盤の鳴る石は断続して甚だ幽なり。主はこの時窓際の手合觀に呼れたれば、貫一は独り残りて、未だ乾ぬ袂を翳しつつ、愈よ限無く惑ひるたり。遽に人の騒立つるに愕きて顔を挙げば、座中尽く頸を延べて己が方を眺め、声々に臭しと喚はるに、見れば、吾が羽織の端は火中に落ちて黒煙を起つるなり。直に揉消せば人

は静しづまるとともに、彼もまた前さきの如し。

少頃しばし有りて、門かどに入来いりきし女の訪おとふ声こゝろして、

「宅だんなの旦那様なはもしや這裡こちへいらつしやりは致ししませんで為ならうか」

主たちまは忽ひげち髯おとがひめぐらの頤いを回まわして、

「ああ、奥おくにお在いで御座ごいますよ」

豊とよかと差さ覗しのぞきたる貫ぬき一いちは、

「おお、傘かさを持つて来きたのか」

「はい。此方こちらにお在いなので御座ごいましたか、もう方々お捜たし申ましました」

「さうか。客きやくは帰かへつたか」

「はい、疾とにお帰かへになりましたして御座ごいます」

「四谷よつたにのも帰かへつたか」

「いいえ、是非お目に掛りたいと有仰おつしやいまして」

「居る？」

「はい」

「それぢや見付からんと言つて措おけ」

「ではお帰りに成りませぬので？」

「も少し経たつたら帰る」

「直ぢきにもうお中食ひるで御座いますか」

「可いいから早く行けよ」

「未まだ旦那様は朝御飯も」

「可いいと言ふに！」

老婢は傘と足駄あしだとを置きて悄悄すじすじ還りぬ。

程無く貫一も焦あせげたる袂たもとを垂たれて出行いでゆけり。

彼はこの情緒はげしの劇はげしく紛乱まがせるに際して、可煩わづらはしき満枝まんえに齎まつはらる

る苦惱に堪へざるを思へば、その帰去らん後までは決して還ら  
 じと心を定めて、既に所在ありかを知られたる碁会所を立出たちいでしが、  
 いよいよ指して行くべき方かたは有らず。はや正午と云ふに未だ朝  
 の物さへ口に入れず、又半錢をも帯びずして、如何いかに為せんとす  
 るにか有らん、猶降りおちに降る雨の中を茫々然ぼうぼうぜんとして彷徨さまよへり。

初夏ほとんの日は長かりけれど、纔わづかに幾局の勝負を決せし盤の上  
 は、殆ど惜き夢の間に昏くれて、折から雨も霽はれたれば、好者すきものど  
 もも終つひに碁子きしを斂をさめて、惣立そうだちに帰るをあたかも送らんとする主  
 の忙々いそがはしく燈ひともす比ころなり、貫一くわんいちの姿は始て我家の門かどに踰あはれぬ。

彼は内いに入るより、

「飯を、飯を！」と婢をんなを叱しつして、颯さと奥の間の紙門ふすまを排ひらけば、何  
 ぞ凶ともしびらん燈火ともしびの前に人の影在り。

彼は立てるままに目を瞪みはりつ。されど、その影は後向うしろむきに居て

動かんとも為せず。満枝は未だ往かざるか、と貫一は覺えず高く  
 舌打したり。女は尚なほも殊更ことさらに見向かぬを、此方こなたもわざと言ことばを掛  
 けずして子亭はなれに入り、豊を呼びて衣を更かへ、膳ぜんをも其処そこに取寄  
 せしが、何とか為なけん、必ず入来いりくべき満枝の食事を了をはるまでも  
 来ざるなりき。却かへりて仕合好しあはせよしと、貫一は打勞うちつかれたる身を暢のびやか  
 に、障子の月影に肱枕ひぢまくらして、姑しばらく喫烟きつえんに耽ふけりたり。

敢あへて恋しとにはあらねど、苦しげに羸やつれたる宮が面影おもかげの幻は、  
かしら頭めぐを回ひれる一蚊ひとつかの声の去らざらんやうに襲かひ来て、彼が切なる  
 哀訴おもひいも従おひて憶出おもひいでらるれば、なほ行きかねて那辺そこらに忍しのばずや  
 と、風の音にも幾度いくたびか頭かしらを挙げし貫一は、婆娑ばさとして障子に揺  
 るる竹の影を疑へり。

宮は何時いつまでここに在らん、我は例の孤ひとりなり。思ふに、彼の  
 悔くいたるとは誠ならん、我の死を以もて容ゆるさざるも誠なり。彼は

悔いたり、我より容さば容さるべきを、さは容さずして堅く隔つる思も、又怪きまでに貫一は佗くて、その釈き難き怨に加ふるに、或種の哀に似たる者有るを感ずるなりき。いと淡き今宵の月の色こそ、その哀にも似たるやうに打眺めて、他の憎しとよりは転た自を悲しと思続けぬ。彼は竟に堪へかねたる気色にて障子を推啓れば、涼き空に懸れる片割月は真向に彼の面に照りて、彼の愁ふる眼は又痛かにその光を望めり。

「間さん」

居たるを忘れし人の可疎き声に見返れば、はや背後に坐れる満枝の、常は人を見るに必ず笑を帯びざる無き目の秋波も乾き、顔色などは殊に槁れて、などかくは浅ましきと、心陰に怪む貫一。

「ああ、未だ御在でしたか」

「はい、居りました。お午前ひるまへから私わたくしお待ち申してをりました」  
 「ああ、さうでしたか、それは大きに失礼しました。さうして何ぞ急な用でも」

「急な用が無ければ、お待ち申してをつては悪いので御座いますか」

語氣ごごの卒にはかに厲はげしきを駭おどろける貫一は、空むなしく女の顔を見遣みやるのみ。

「お悪いで御座いませう。お悪いのは私能く存じてをります。

第一お待ち申してをりましたのよりは、今朝ほど私の参りましたのが、一層お悪いので御座いませう。飛とんだ御おたのしみ娯のお邪魔を致

しまして、間さん、誠に私相済みませんで御座いました」

その眼色まなざしは怨うらみの銚きつさきを露あらはして、男の面上を貫かんとやうきびしに緊く

見据みまもたり。

貫一は苦笑して、

「貴方は何を※な事を言つてゐるのですか」

「今更お庖かくしなさるには及びませんさ。若い男と女が一間ひとまに入つて、取付き引付きして泣いたり笑つたりしてをれば、訳は大概知れてをるぢや御座いませんか。私あれに控へてをりまして、様子は大方存じてをります。七歳ななつや八歳やっの子供ぢや御座いません、それ位の事は誰にだつて直ちきに解りませうでは御座いませんか。

爾後それから貴方がお出掛になりますと私直ちきにここのお座敷へ推掛おしかけて参つて、あの御婦人にお目に掛りましたので御座います」  
絮くどしと聞流せし貫一も、ここに到りて耳そぼだを欷そぼだてぬ。

「さうして色々お話を伺ひまして、お二人の中も私能く承知致

しました。あの方も又有仰らなくても可ささうな事までお話を  
 作なさいますので、それは随分聞難ききにい事まで私伺ひました」  
 為しな失したりと貫一は密ひそかに術無じゆつなき拳こぶしを握り。満枝は猶なほも言足  
 らで、

「然し、間さん、追さすがに貴方で御座いますのね、私敬服して、了  
 ひました。失礼ながら貴方のお腕前に驚きましたので御座いま  
 す。ああ云つた美婦人を御おたのしみ娯ごにお持ち遊ばしてゐながら、世間  
 へは偏人だ事の、一いつくも国者だ事のと、その方へ掛けては実に奇麗  
 なお顔を遊ばして、今日の今朝まで何年が間と云ふもの秘ひしかくし隠いんに  
 隠し通してゐらしたお手て際ぎはには私実ひそに驚入つて一言いちげんも御座い  
 ません。能く凄すこいと何とか申しますが、貴方のやうなお方の  
 事をさう申すので御座いませう」  
 「もうつまらん事を……、貴方何ですか」

「お口ぢやさう有仰つても、実はお嬉しいので御座いませう。あれ、ああしちや考へてゐらつしやる！ そんなにも恋こひくてゐらつしやるのですかね」

されば我が出行いでゆきし迹あとをこそ案ぜしに、果してかかる孽わざはひは出来にけり。由無よしなき者の目には触れけるよ、と貫一はいと苦く心踊こころぐまりつつ、物言ものごとふも憂うれき唇を閉ぢて、唯月に打向へるを、女こなたは此方こなたより熟つくづく々と見透みすかして目も放たず。

「間さん、貴方さう黙つてゐらつしやらんでも宜よろしいでは御座いませんか。ああ云ふお美うつくしいのを御覽ごらんに成つた後では、私如わがごとき者には口をお利ききに成るのもお可い厭やなのでゐらつしやいませう。私お察し申してをります。ですから私決くだして絮くどい事は申上げません。少し聞いて戴おんきたい事が御座ございますのですから、庶どうかそれだけ言いはして下さいまし」

貫一は冷ひややかに目を転うつして、

「何おっしやなりと有仰い」

「私もう貴方を殺して、了うひたい！」

「何おっしやです?!

「貴方を殺して、あれも殺して、さうして自分も死んで了うひたく思ふのです」

「それも可おつしやいでせう。可おつしやいけれど何で私が貴方に殺されるのですか」

「間さん、貴方はその訳ごぞんじなを御存無おつしやいと有仰るのですか、どの口で有仰るのですか」

「これは怪けしからん！ 何おつしやですと」

「怪あんなまからんとは、貴方も余あんなまりな事を有仰るでは御座おつしやいませんか」  
既に恨いみ、既に瞋いりし満枝まなこの眼は、ここに到りて始おつしやて泣きぬ。

いと有るまじく思掛けざりし貫一は寧ろ可恐しと念へり。

「貴方はそんなにも私が憎くてゐらつしやるのですか。何で又さうお憎みなさるのですか。その訳をお聞せ下さいまし。私それが伺ひたい、是非伺はなければ措きません」

「貴方を何日私が憎みました。そんな事は有りません」

「では、何で怪からんなどと有仰います」

「怪からんぢやありませんか、貴方に殺される訳が有るとは。

私は決して貴方に殺される覚は無い」

満枝は口惜しげに頭を掉りて、

「有ります！ 立派に有ると私信じてをります」

「貴方が独で信じても……」

「いいえ、独で有らうが何で有らうが、自分の心に信じた以上は、私それを貫きます」

「私を殺すと云ふのですか」

「随分殺しかねませんから、覚悟をなすつてゐらつしやいまし」

「はあ、承知しました」

いよいよ昇れる月に木草の影もをかしく、庭の風情は添りけ  
れど、軒端のきばなる芭蕉葉ばしようばの露夥つゆおびただしく夜氣の侵すに堪たへで、やをら内  
に入りたる貫一は、障子を閉たてて燈ひを明あかうし、故ことに床のらの間の置  
時計を見遣りて、

「貴方、もうお帰りに成つたが可いでせう、余り晩おそくなるです  
から。ええ？」

「憚はばり様で御座います」

「いや、御注意を申すのです」

「その御注意が憚り様で御座いますと申上げるので」

「ああ、さうですか」

「今朝のあの方なら、そんな御注意なんぞは遊ばさんで御座いませう。如何いかがですか」

憎さげに言放ちて、彼は吾矢の立つを看みんとやうに、姑しばらく男の顔色を候うかがひしが、

「一体あれは何者なので御座います！」

犬にも非あらず、猫にも非あらず、汝なんぢに似たる者よと思ひけれど、言争いひあらそはんは愚なりと勘弁して、彼は才わづかに不快の色を作なせしのみ。満枝は益す独り憤じれて、

「旧ふるいお馴染なじみださうで御座いますが、あの恰好かつこうは、商売人ではなし、万更よろうとの素人でもないやうな、貴方も余程よつほど不思議な物をお好み遊ばすでは御座いませんか。然し、間さん、あれは主有ぬしある花で御座いませう」

妄みだりに言へるならんと念おもへど、如何いかにせん貫一が胸ひそかは陰とどろに轟け

るを。

「どうですか、なあ」

「さう云ふ者を対手に遊ばすと、別してお楽が深いとか申しませんが、その代に罪も深いので御座いますよ。貴方が今日まで巧に隠し抜いてゐらした訳も、それで私能く解りました。こればかりは余り公に御自慢は出来ん事で御座いますもの、秘密に遊ばしますのは実に御尤で御座います。

その大事の秘密を、人も有らうに、貴方の嫌ひの嫌ひの大御嫌ひの私に知られたのは、どんなにかお心苦くゐらつしやいませう。私十分お察し申してをります。然し私に取りましては、これ程幸な事は無いので御座います。貴方が余り片意地に他を苦めてばかりゐらしたから、今度は私から思ふ様これで苦めて上げるのです。さう思召してゐらつしやい！」

聞きをは  
聞訖りたる貫一は吃々として窃笑せり。

「貴方は気でも違ひは為んですか」

「少しは違つてもをりませう。誰がこんな気違には作すつたのです。私気が違つてゐるなら、今朝から変に成つたので御座いますよ。お宅に詣つて気が違つたのですから、元の正気に復してお還し下さいまし」

彼は擦寄り、擦寄りて貫一の身近に逼れり。浅ましく心苦かりけれど逃ぐべくもあらねば、臭き物に鼻を掩へる心地しつつ、貫一は身を側め側め居たり。満枝は猶も寄添はまほしき風情にて、

「就きましては、私一言貴方に伺ひたい事が有るので御座います、これはどうぞ御遠慮無く貴方の思召す通を丁と有仰つてお聞せ下さいまし、宜う御座いますか」

「何ですか」

「なんですかでは可厭いやです、宜よろしいと截然きつぱり有仰おつしやつて下さい。さあ、さあ、貴方」

「けれども……」

「けれどもぢや御座いませぬ。私の申す事だと、貴方は毎いづも氣の無い返事ばかり遊ばすのですけれど、何も御迷惑に成る事では御座いませぬのです、私の申す事に就て貴方が思召す通を答へて下されば、それで宜よろしいのですから」

「勿論もちろん答へます。それは当然あたりまへの事ぢやないですか」

「それが当然あたりまへでなく、極打明けて少しも裏つづまずに言つて戴きたいのですから」

善よしと貫一うなづは頷うなづきつ。

「では、きつと有仰おつしやつて下さいまし。間さん、貴方あなたは私うるさを憊うるさい

奴だと思召してゐらつしやるで御座いませう。私始終さう思ひ  
 ながら、貴方の御迷惑もかまはずにやつぱりかうして附纏つきまとつて  
 ゐるのは、自分の口から箇様かような事を申すのも、甚はなはだ可笑をかいので  
 御座いますけれど、私、実に貴方の事は片時でも忘れは致しま  
 せんのです。それは如何いかに思つてをりましたところが、元来私  
 と云ふ者を嫌きらひ抜いて御在おいでなのですから、あの歌が御座います  
 ね、行く水に数画かずかくよりも儂はかなきは、思はぬ人を思ふなりけりと  
 か申す、実にその通り、行く水に数を画くやうな者で、私の願  
 の愜かなふ事は到底無いので御座いませう。もうさうと知りながら、  
 それでも、間さん、私こればかりは諦あきらめられんで御座います。  
 こんな者に見込れて、さぞ御迷惑ではゐらつしやいませうけ  
 れども私がこれ程までに思つてゐると云ふ事は、貴方も御存ごぞんじで  
 ゐらつしやいませう。私が熱心に貴方の事を思つてゐると云ふ

事で御座います、それはお了解わかりに成つてゐるで御座いませう」

「さうですな……そりや或あるひはさうかも知れませんけれど……」

「何を言つてゐらつしやるのですね、貴方は、或あるひはもさうかもないでは御座いませんか！ さも無ければ、私何も貴方うるさに慇うるさがられる訳は御座いませんさ、貴方も私を慇うるさいと思召すのが、現に何よりの証拠で。漆膠しつこくて困ると御迷惑してゐらつしやるほど、承知を遊ばしてお在いでのでは御座いませんか」

「それはさう謂へばそんなものです」

「貴方から嫌はれ抜いてゐるにも関かからず、こんなに私が思つてゐると云ふ事は、十分御承知なので御座いませう」

「やう」

「で、私従来これまでに色々申上げた事が御座いましたけれど、些ちよつとで

もお聴き遊ばしては下さいませんでした。それは表面の理窟りくつか

ら申せば、無理なお願かも知れませんが、私は又私で別に考へるところが有つて、決して貴方の有仰るやうな道に外れた事とは思ひませんのです。よしんばさうでありましても、こればかりは外の事とは別で、お互にかうと思つた日には、其処に理窟も何も有るのでは御座いませぬ。究竟貴方がそれを口実にして遁げてゐらつしやるのは、始から解り切つてゐるので。然し、貴方も人から偏屈だとか、一国だとか謂れてゐらつしやるのですから、成程儀剛な片意地なところもお有なすつて、色恋の事なんぞには貪着を遊ばさん方で、それで私の心も汲分けては下さらんのかと、さうも又思つたり致して、実は貴方の頑固なのを私齒痒いやうに存じてをつたので御座います……ところが！

と言ひも敢へず煙管を取りて、彼は貫一の横膝をば或る念力

強く痛か推したり。

「何を作るのです！」

払へば取直すその煙管にて、手とも云はず、膝とも云はず、当るを幸に満枝は又打ち被る。

こは何事と駭ける貫一は、身を避る暇もあらず三つ四つ撃れしが、遂に取つて抑へて両手を働かせじと為れば、内俯に引据ゑられたる満枝は、物をも言はで彼の股の辺に咬付いたり。怪からぬ女哉、と怒の余に手暴く振放せば、なほ辛くも縫れるままに面を擦付けて咽泣に泣くなりき。

貫一は唯不思議の為体に呆れ惑ひて言も出でず、漸く泣るる彼を推斥けんとなたれど、膠の附きたるやうに取縫りつつ、益す泣いて泣いて止まず。涙の湿は単衣を透して、この難面き人の膚に沁みぬ。

捨置かば如何いかに募もらんも知らずと、貫一は用捨無く※放もぎはなして、起おたんと為なるを、彼は虚すかさず齎まつりて、又泣顔なみかほを擦すり付つくれば、怵こらへかねたる声を励こほす貫一、

「貴方は何を為なるのですか！ 好こい加減かへんになさい」

「……………」

「さうして早くお帰かへりなさい」

「帰かへりません！」

「帰かへらん？ 帰かへらんけりや宜よろい。もう明日あすからは貴方あなたのここへ足踏あしづみの出来できんやうに為なて了しまふから、さうお思おもひなさい」

「私死わたしんでも参まゐります！」

「今まで我慢まんまんをしてゐたですけれど、もう抛はなつて置おかれんから、

私は赤檜さんに会つて、貴方の事をすつかり話して了ひます」  
満枝は始て涙に沾うるほへる目を挙げたり。

「はあ、お話し下さい」

「……………」

「赤檜に聞えましたら、どう致すので御座います」

貫一は齒を鳴して急せきあ上げたり。

「貴方は……………実に……………驚おどろきい入つた根性ですな！ 赤檜は貴方の何

ですか」

「間さん、貴方は又赤檜を私の何だと思召してゐらつしやるの

ですか」

「怪けしからん！」

彼は憎き女の頬ほほをば撃つて撃つて打割うちわる能あたはざるを憾うらみと為すなるべし。

「定さだめてあれは私の夫だと思召すので御座いませうが、決けしてさやうでは御座いませんです」

「そんなら何なんですか」

「往いっぞや日もお話致しましたが、金力で無理に私を奪つて、遂にこんな体にして了つた、謂はば私の讐かたきも同然なので。成程人は夫婦とも申しませうが私の気では何とも思つてをりは致しません。さうですから、自分の好いた方かたに惚ほれて騒ぐ分は、一向差支さしつかへの無い独身ひとりみも同じので御座います。」

間さん、どうぞ赤檜にお会ひ遊あそばしたら、満枝の奴が惚ほれてゐて為方が無いから、内の御膳炊ごぜんたきに貰つて遣るから、さう思へと、貴方が有仰おっしやつて下さいまし。私豊とよの手伝でも致して、此方こなたに一生奉公を致します。

貴方は大方赤檜に言ふと有仰おっしやつたら、震へ上つて私が怖こはがり

でも為ると思召すのでせうが、私驚きも恐れも致しません、寧ろ勝手なのですけれど、赤檜がそれは途方に味れるで御座いませう」

貫一はほとほと答ふるところを知らず。満枝も然こそは呆れつらんと思へば、

「それは實際で御座いますの。若し話が一つ間違つて、面倒な事でも生じましたら、私が困りますよりは余程赤檜の方が困るのは知れてゐるのですから、私を遠げやう為に、お話をなさるのなら、徒爾な事で御座います。赤檜は私を恐れてをりませうとも、私些ともあの人を恐れてはをりませんです。けれども、折角さう思召すものなら、物は試で御座いますから、間さん、貴方、赤檜にお話し遊ばして御覧なさいましな。

私も貴方の事を吹聴致します。ああ云ふ主有る婦人と関係遊

ばして、始終人目を忍んで逢引あひびきしてゐらつしやる事を触散ふれちらし  
すから、それで何方どちらが余計迷惑するか、比較くらべ事を致つしませう。  
如何いかにで御座います」

「男勝をとこまりの機敏な貴方にも似合はん、さすがは女だ」

「何で御座います？」

「お聞きなさい。男と女が話をしてゐれば、それが直ただちに逢引あひびきで  
すか。又妙齡としごろの女でさへあれば、必ず主有きまるに極きまつてゐるので  
すか。浅膚あさはかな邪推よこしまとは言ひながら、人を誣しふるも太甚はなはだしい！ 失  
敬しやう千萬せんな、氣を着けて口をお利ききなさい」

「間さん、貴方、些ちよつと此方こちらをお向むかきなさい」

手を取りて引けば、振ふり積ほき、

「ええ、もう貴方は」

「お慥しつるいでせう」

「もちろん  
勿論」

これから

「私向後もつと、もつともつと愠くして上げるのです。さあ、  
貴方、今何と有仰つたので御座います、浅膚な邪推ですつて？  
貴方こそ少し気を着けてお口をお利き遊ばせな、貴方も男子  
でゐらつしやるなら、何為立派に、その通だ。情婦が有るのが  
どうしたと、かう打付けて有仰らんです。間さん、私貴方に  
向つてそんな事をかれこれ申す権利は無い女なので御座います  
よ。幾多さう云ふ権利を有ちたくても、有つ事が出来ずにゐる  
ので御座います。それに、何も私の前を憚つて、さう向に成つ  
てお隠し遊ばすには当らんです御座いませんか。

私実を申しませうか、箇様なので御座います。貴方が余所外  
に未だ何百人愛してゐらつしやる方が有りませうとも、それで  
愛相を尽して、貴方の事を思切るやうな、私そんな浮気な了簡

ではないのです。又貴方の御迷惑に成る秘密を洩もらしましたところ、慍かなはない願が慍かなふ訳ではないので御座いませう。どう思召してゐらつしやるか存じませんが、私それ程卑怯ひきような女ではない積つもりで御座います。

世間へ吹聴して貴方を困らせるなどと申したのは、あれは些ほんのその場の憎まれ口で、私決けしてそんな心は微塵みじんも無いので御座いますから、どうかそのお積で、お心持を悪く遊ばしませんやうに。つい口が過ぎましたのですから、御勘弁遊ばしまして。私この通お詫わびを致します」

満枝は惜まず身をくだ下して、彼の前に頭かしらを低さぐる可憐しをらしきよ。貫一は如何いかにも為する能はずして、窃ひそかに首かうべを搔かいたり。

「就つきましては、私今から改めて折入これまでつた御願が有るので御座います。貴方も従来これまでの貴方ではなしに、十分人情を解してゐら

つしやる間さんとして宣告を下して戴きたいので御座います。そのお辞次第ことばで、私も断然何方どちらに致しても了簡を極めて了ひますですから、間さん、貴方も庶どうか齒きぬに衣きぬを着せずに、お心に在る通りをそのまま有仰つて下さいまし。宜よろしう御座いますか。

今更新く申上げませんが、私の心は奥底まで見通しに貴方は御存ごぞんじでゐらつしやるのです。従来これまでも随分絮くどく申上げましたけれど、貴方は一匁に私をお嫌きらひ遊ばして、些ちよつとでも私の申す事は取上げては下さらんです——さやうで御座いませう。貴方からそんなに嫌きらはれてゐるのですから、私もさう何時まで好い耻はぢを搔かかざとも、早く立派に断念して了へば宜よいのです。私さう申すと何で御座いますけれど、これでも女子をんなにしては極未練の無い方で、手短てみじかに一か八ばちか決して了ふ側がはなので御座います。それがこの事ばかりは実に我ながら何な為ぜかう意気地が無からうと

思ふ程、……これが迷つたと申すので御座いませう。自分では物に迷つた事と云ふは無積の私、それが貴方の事ばかりには全く迷ひました。

ですから、唯その胸の中うちだけを貴方に汲んで戴けば、私それで本望なので御座います。これ程に執心致してをる者を、徹頭徹尾貴方がお嫌ひ遊ばすと云ふのは、能く能くの因果で、究竟つまり貴方と私とは性が合はるので御座いませうから、それはもう致方いたしかたも有りませんが、そんなに為されてまでもやつぱりかうして慕つてゐるとは、如何いかにも不敏ふびんな者だと、設たひその当人はお気に召しませんでも、その心情はお察し遊ばしても宜いでは御座いませんか。決してそれをお察し遊ばす事の出来ない貴方ではないと云ふ事は、私今朝の事実で十分確めてをります。

御自分が恋こひしく思召すのも、人が恋こひいのも、恋こひいに差かはりは無いで

御座いませう。増まして、貴方、片思かたおもひに思つてゐる者の心の中は  
 どんなに切ないでせうか、間さん、私貴方を殺して了ひたいと  
 申したのは無理で御座いますか。こんな不束ふつつかな者でも、同じに  
 生れた人間いちにん一人が、貴方の為には全まるで奴隸どれいのやうに成つて、し  
 かも今貴方のお辞ことばを一言聞ひとこときさへ致せば、それで死んでも惜く  
 ないとまでも思込んでゐるので御座います。其処そこをお考へ遊ば  
 したら、如何いかに好かん奴であらうとも、零しづぐらゐの情なさけは懸けて  
 遣やらう、と御不承が出来さうな者では御座いませんか。

私もさう御迷惑ごめいわくに成る事は望みませんです、せめて満足致さ  
 れるほどのお辞ことばを、唯一言ひとことで宜いのですから、今までのお馴染なじみ効  
 にどうぞ間さん、それだけお聞きせ下さいまし」

終つひに近く益あきす顫ふるへる声は、竟つひに平生へいぜいの調ちやうをさへ失うひて聞えぬ。  
 彼は正ただしくその一言いちごんの為には幾千円の公正証書を挙げて反古ほんこに為

んも、なかなか吝をしからぬ気色を帯びて逼せまれり。息は凝こり、面おもては打蒼うちあをみて、その袖そでよりは劔つるぎを出いださんか、その心こゝろよりは笑ゑみを出いださんか、と胸跳むねをどらせて片時へんじも苦く待つなりき。

切なりと謂いははば実げに極きはめて切なる、可憐しをらしと謂いははば又極めて可憐し彼の心の程は、貫一つらひもいと善く知れれど、他たの己おのれを愛するの故ゆゑを以もて直ただちに蛇蝎だかつに親かへまんや、と却かへりてその執念しやくねんをば難堪たへがたく浅あはましと思へるなり。

されど又情なさけとして厲はげしく言ふを得ざるこの場の仕儀なり。貫一つらひは打惱うちなやめる眉まゆを強しひて披ひらかせつつ、

「さうして貴方が満足するやうな一言いちげん?……どう云ふ事を言つたら可いのですか」

「貴方もまあ何を有おつしや仰おほつてゐらつしやるのでせう。御自分の有ひと仰る事を他ひとにお聞き遊あそばしたつて、誰が存ぞんじてをりますもので

すか」

「それはさうですけれど、私にも解らんから」

「解るも解らんも無いでは御座いませんか。それが貴方は何か  
巧い遁口上にげこうじょうを有仰おつしやらうとなさるから、急に御考も無いので、貴  
方に対する私、その私が満足致すやうな一言と申したら、間さ  
ん、外には有りは致しませんわ」

「いや、それなら解つてゐます……」

「解つてゐらつしやるなら些ちよつと有仰おつしやつて下さいましな」

「それは解つてゐますけれど、貴方の言れるのはかうでせう。

段々お話の有つたやうな訳であるから、とにかくその心情は察  
しても可からう、それを察してゐるのが善く解るやうな挨拶あいさつを  
為てくれと云ふのぢやありませんか。実際それは余程むづかし難い、別  
にどうも外に言ひ様も無いですわ」

「まあ何でも宜よろう御座いますから、私の満足致よしますやうな御挨拶をなすつて下さいまし」

「だから、何と言つたら貴方が満足なさるのですか」

「私のこの心を汲んでさへ下されば、それで満足致すので御座います」

「貴方の思召おぼしめしは実に難有ありがたいと思つてゐます。私は永く記憶して

これは忘れません」

「間さん、きつとで御座いますか、貴方」

「勿論です」

「きつとで御座いますね」

「相違ありません！」

「きつと？」

「ええ！」

「その証拠をお見せ下さいまし」

「証拠を？」

「はあ。口頭くちうぎばかりでは私い可厭やで御座います。貴方もあれ程確たしかに有仰おつしやつたのですから、万更心まんげしんに無い事をお言ひ遊あそばしたのでは御座いますまい。さやうならそれだけの証拠が有る訳です。その証拠を見せて下さいますか」

「みせられる者なら見せますけれど」

「見せて下さいますか」

「見せられる者なら。然し……」

「いいえ、貴方が見せて下さる思召しめぞならば……」

驚破すはや、障子あらはを推開おしひらきて、貫一あつは露あけき庭にわに躍をどり下りぬ。つと  
その迹あとにおもて顕あらはれたる満枝みんしの面おもては、斜ななめに葉越はじしの月つきの冷つめたき影かげを帯おびな  
がらなほ火あの如ごとく燃もえに燃もえたり。

## 第八章

家の内には己おのれと老婢ろうひとの外ほかに、今客も在らざるに、女の泣く声ののし、詬ののしる声の聞ゆるは甚はなはだ謂無いはれなし、我われあるひ或は夢むるにあらざやと疑なげひつつ、貫一まぐらは枕かしろせる頭もたを擡もちげて耳を澄せり。

その声は急さわがしに噪あひあらせく、相争けはひふ氣勢けはひさへして、はたはたと紙門ふすまを犇ひしめかすは、愈いよいよ上怪あやしと夜着よぎ排却はねのけて起たち行かんとする時、ばつさり紙門の倒ひとしると齊ひとしく、二人の女の姿は貫一まぐらが目前めさきに転まろび出いでぬ。

苛さいなまれしと見ゆる方かたの髪は浮藻うきもの如く乱れて、着きたるコートは雫しづくするばかり雨あめに濡ぬれたり。その人は起上さり様さまに男の顔を見みて、嬉うれしや、可懐なつかしやと心こころも空そらなる気色けしき。

「貫一さん」と匍はひ寄りうしろすがたにとするを、薄色魚子の羽織うすいろななこを着て、夜会結やかいむすびに為したる後姿うしろすがたの女は躍をどり被かかつて引据ひきすうれば、

「あれ、貫、貫一さん！」

拯すくひを求むるその声に、貫一は身も消入るやうに覺えたり。彼は念頭しんとうを去らざりし宮ならずや。七生しちしょうまでその願は聴かじと卻しりぞけたる満枝まんじの、我わがの辛つらさを彼に移して、先の程より打ちも詬こらりもしたりけんを、猶なほ慊あきたらで我が前に責むるか、貫一は怵こらへかねて顫ふるひみたり。満枝まんじは縦ほしまに宮みやを据とらへて些ちとも動かせず、徐しづかに貫一を見返りて、

「貫一さん、貴方あなたのお大事の恋人と云ふのはこれで御座いませう」  
 頸髪えりがみ取とつて宮みやが面おもてを引立てて、

「この女で御座いませう」

「貫一さん、私わたしは悔くやしう御座んす。この人は貴方の奥さんですか」

「わたくし私奥さんならどうしたのですか」

「貫一さん！」

彼は足擦あしずりして叫びぬ。満枝は直ただちに推伏おしふせて、

「ええ、聒やかましい！ 貫一かんいちさんは其處そこに一人居たら沢山ではありま

せんか。貴方より私が間さんには言ふ事が有るのですから、少し静にして聴いてお在いでなさい。

間さん、私想ふのですね、究竟つまりかう云ふ女が貴方に腐れ付い

てゐればこそ、どんなに申しても私の言ことは取上げては下さらん

ので御座いませう。貴方はそんなに未練がお有り遊ばしても、

元この女は貴方を棄てて、余所よそへ嫁に入つて了しまつたやうな、実

に畜生にも劣つた薄情者なのでは御座いませんか。——私善く

存じてゐますわ。貴方も余あんまり男らしくなくてお在いでなさる。それ

は如何いかにお可か愛あいいのか存じませんけれど、一旦あいそ愛相を尽つかして逃に

げて行つた女を、いつまでも思込んで遅々してゐらつしやるとは、まあ何たる不見識な事でせう！ 貴方はそれでも男子ですか。私ならこんな女は一息に刺殺して了ふのです」

宮は跣返はねかへさんと為せしが、又抑おさへられて声も立てず。

「間さん、貴方、私の申上げた事をば、やあ道ならぬの、不義のと、実に立派な口上を有仰おつしやいましたでは御座いませんか、それ程義のお堅い貴方なら、何為なげこんな淫乱いんらんの人非人にんびにんを阿容活おめおめいけてお置き遊ばすのですか。それでは私への口上に対しても、貴方男子の一分いちぶんが立たんで御座います。何為なげ成敗は遊ばしません。さあ、私決けしてもう二度と貴方には何も申しませんから、貴方もこの女を見事に成敗遊ばしまし。さもなければ、私も立ちませんです。

間さん、どう遊ばしたので御座いますね、早く何とか遊ばし

て、貴方も男子の一分をお立てなさらんければ濟まんとくろでは御座いませんか。私ここで拝見致してをりますから、立派に遣つて御覧あそばせ。卒いざと云ふ場で貴方の腕が鈍つても、決してしそん為損じの無いやうに、私好い刃物きれものをお貸し申ませう。さあ、間さん、これをお持ち遊ばせ」

彼の懐ふところを出でたるは蠟塗ろうぬりの晃きらめく一口いつこうの短刀なり。貫一はその殺氣うたに撲うたれて一指をも得動かさず、空むなしく眼まなこを輝かがして満枝おもちの面おもてを睨にらみたり。宮ははや氣死せるか、推伏おしふせられたるままに声も無し。

「さあ、私かうして抑へてをりますから、吭のどなり胸なり、ぐつと一突ひとつきに遣つてお了しまひ遊ばせ。ええ、もう貴方は何を遅々ぐづぐづしてゐらつしやるのです。刀の持様もちやうさへ御存じ無いのですか、かうして抜いて！」

と片手ながらに一揮揮れば、鞘は発矢と飛散つて、電光袂を廻る白刃の影は、忽ち翻つて貫一が面上三寸の処に落来れり。

「これで突けば可いのです」

「……………」

「さては貴方はこんな女に未だ未練が有つて、息の根を止めるのが惜くてゐらつしやるので御座いますね。殺して了はうと思ひながら、手を下す事が出来んですね。私代つて殺して上げませう。何の雑作も無い事。些と御覧あそばせな」

言下に勿焉と消えし刃の光は、早くも宮が乱鬢を掠めて顕れぬ。啊呀と貫一の号ぶ時、妙くも彼は跂起きざまに突来る鎧を危く外して、

「あれ、貫一さん！」

と満枝の手首に縋れるまま、一心不乱の力を極めて捩伏せ捩伏

せ、仰のけざま様に推おしかさな重りて仆たふしたり。

「貫、貫一さん、早く、早くこの刀を取つて下さい。さうして私を殺して下さい——貴方の手に掛けて殺して下さい。私は貴方の手に掛つて死ぬのは本望です。さあ、早く殺して、私は早く死にたい。貴方の手に掛つて死にたいのですから、後生だから一思ひとおもひに殺して下さい！」

この恐るべき危機ひんに瀕ひんして、貫一は謂いひし知らず自ら異あやしくも、敢あへて拯すくひの手を藉かさんと為るにもあらで、しかも見るには堪へずして、空むなしく悶もたえに悶もたえゐたり。必死と争へる両箇ふたりが手中やいばの刃は、或あるひは高く、或は低く、右に左に閃々せんせんとして、あたかも一鉤いっこうの新あへ月あへ白く風の柳を縫ぬふに似たり。

「貫一さん、貴方は私を見殺みころしになさるのですか。どうでもこの女の手に掛けて殺すのですか！ 私は命は惜くはないが、この

女に殺されるのは悔い！ 悔い!! 私は悔い!!

彼は乱せる髪を夜叉やしやの如く打振り打振り、五体ごたいを揉もみて、唇くちびるの血を嘔めきぬ。彼も殺さじ、これも傷きずけじと、貫一が胸は車輪くるまわの廻めぐるが若ごとくなれど、如何いかにせん、その身は内より不思議の力ちからに緊縛きんばくせられたるやうにて、逸はれど、躁あせれど、寸分の微揺ゆるぎを得ず、せめては声を立てんと為れば、吭のんどは又塞ふさりて、鍊丸てつがんを啣ふくめる想おもひ。

力も今は絶々に、はや危あやしと宮は血声を揚げて、

「貴方が殺して下さらなければ、私は自害して死にますから、貫一さん、この刀を取つて、私の手に持せて下さい。さ、早く、貫一さん、後生です、さ、さ、さあ取つて下さい」

又激ねく振合ねふ卻はずみみに、短刀は戛然からりと落ちて、貫一が前なる畳たたみに突立つつたり。宮は虚すかさかず躍をり被かりて、我物得つと手に為れば、

遣らじと満枝の組付くを、推隔おしへだつる腋わきの下より後突うしろづきに、欄つかも透とほれと刺したる急所、一声号さけびて仰反のけぞる満枝。鮮血！ 兇器！ 殺傷！ 死体！ 乱心！ 重罪！ 貫一は目も眩くられ、心も消ゆるばかりなり。宮は犇ひしと寄添ひて、

「もうこの上はどうで私は無い命です。お願いですから、貫一さん、貴方の手に掛けて殺して下さい。私はそれで貴方に赦ゆるされた積で喜んで死にますから。貴方もどうぞそれでも堪忍かんにんして、今までの恨は霽はらして下さいまし、よう、貫一さん。私がこんなに思つて死んだ後までも、貴方が堪忍して下さいさなければ、私は生替いきかはり死替しにかはりして七生しちしょうまで貫一さんを怨うらみますよ。さあ、それだから私の迷はないやうに、貴方の口からお念仏となを唱へて、これで一思ひに、さあ貫一さん、殺して下さい」

朱あけに染みたる白刃しらばをば貫一が手に持添へつつ、宮はその可懐なつかし

き拳こぶしに頻回あまたたび頬擦ほほずりしたり。

「私はこれで死んで了へば、もう二度とこの世でお目に掛ることは無いのですから、せめて一遍えんぱんの回向えこうをして下さると思つて、今はの際きはで唯一ただひとこと言赦おつしやして遣ると有仰おつしやつて下さい。生きてゐる内こそどんなにも憎くお思ひでせうけれど、死んで了へばそれつきり、罪も恨も残らず消えて土に成つて了ふのです。私はかうして前非を後悔して、貴方の前で潔く命を捨てるのも、その御詫おわびが為たいばかりなのですから、貫一さん、既往これまでの事は水に流して、もう好い加減に堪忍して下さいまし。よう、貫一さん、貫一さん！

今思へばあの時の不心得が実に悔くやしくて悔くて、私は何とも謂ひやうが無い！ 貴方が涙を零こぼして言つて下すつた事も覚えてゐます。後のちのち来きつと思中おもひあたるから、今夜の事を忘れるなどお言ひ

の声も、今だに耳に付いてゐるわ。私の一凶の迷とは謂ひながら何な為ぜあの時に些すこ少しでも気が着かなかつたか。愚おろかな自分かを責めるより外は無ないけれど、死んでもこんな回復とりかへしの付かない事を何で私は為なしましたらう！ 貫一さん、貴方の罰ばちが中あたつたわ！ 私わたしは生きてゐる空そらが無い程、貴方の罰ばちが中あたつたのだわ！ だから、もうこれで堪忍こらして下さい。よ、貫一さん。

さうしてとてもこの罰の中なかつた軀からだでは、今更いまどうかうと思つても、願ねがなんぞの愜かなふと云ふのは愚おろかな事、未まだ未まだ憂目うれを見た上おもひじにに思死おもひじにに死しにでも為ななければ、私の業ごうは滅めつしないのでせうから、この世に未練みれんは沢山たくさん有あるけれど、私は早く死しんで、この苦く難げんを埋うめて了しまつて、さうして早く元もとの淨きよい軀からだに生なれ替かつて来こたいのです。さう為なたら、私は今度の世よには、どんな艱難かんなん辛しん苦くを為なしても、きつと貴方あなたに添そひひと添そひひつて、この胸むねに一杯いっぱい思おもつてゐる事こともす

つかり善く聴いて戴いたき、又この世で為遺しのこした事もその時は十分  
為てお目に掛けて、必ず貴方にも悦よろこばれ、自分も嬉うれしい思を為て、  
この上も無い楽しい一生を送る気です。今度の世には、貫一さん、  
私は決してあんな不心得は為ませんから、貴方も私の事を忘れ  
ずにあて下さい。可ようござんすか！ きつと忘れずにあて下さ  
いよ。

人は最期さいごの一念しんで生しょうを引くと云ふから、私はこの事ばかり思窮おもひつ  
めて死にます。貫一さん、この通だから堪忍して！

声震こえふるはせて縋すがると見れば、宮は男の膝ひざの上なる錠かぎ目掛けて  
岸破がと伏したり。

「や、行やつたな！」

貫一が胸は劈つけて始はてこの声を出いせるなり。

「貫一さん！」

無残やな、振仰ぐ宮が喉は血に塗れて、刃の半を貫けるなり。彼はその手を放たで苦き眼を睜きつつ、男の顔を視んと為るを、貫一は氣も漫そぞろに引抱へて、

「これ宮、貴様は、まあこれは何事だ！」

大事の刃を抜取らんと為れど、一念凝りて些も弛めぬ女の力。これを放せ、よ、これを放さんか。さあ、放せと言ふに、え、何な為放さんのだ」

「貫、貫一さん」

「おお、何だ」

「私は嬉しい。もう……もう思遺おもひのこす事は無い。堪忍して下すつたのですね」

「まあ、この手を放せ」

「放さない！ 私はこれで安心して死ぬのです。貫一さん、あ

あ、もう気が遠く成つて来たから、早く、早く、赦すと云つて聞せて下さい。赦すと、赦すと云つて！」

血は滾々と益す流れて、末期の影は次第に黯く逼れる気色。

貫一は見るにも堪へず心乱れて、

「これ、宮、確乎しろよ」

「あい」

「赦したぞ！ もう赦した、もう堪……堪……堪忍……した！」

「貫一さん！」

「宮！」

「嬉しい！ 私は嬉しい！」

貫一は唯胸も張裂けぬ可く覚えて、言は出でず、抱き緊めたる宮が顔をば紛り下つる熱湯の涙に浸して、その冷たき唇を貪り吮ひぬ。宮は男の唾を口移に辛くも喉を潤して、



得ず、身を竦めて呻きながらも、

「宮、待て！ 言ふことが有るから待て！ 豊、豊！ 豊は居ないか。早く追掛けて宮を留めろ！」

呼べど号べど、宮は返らず、老婢は居らず、貫一は阿修羅の如く憤りて起ちしが、又仆れぬ。仆れしを漸く起回りて、忙々く四下を眊せど、はや宮の影は在らず。その歩々に委せし血は芋環の糸を曳きたるやうに長く連りて、畳より縁に、縁より庭に、庭より外に何処まで、彼は重傷を負ひて行くならん。

磐石を曳くより苦く貫一は膝の疼痛を恠へ恠へて、とにもかくにも塀外に踞ひ出づれば、宮は未だ遠くも行かず、有明の月冷かに夜は水の若く白みて、ほのぼのと狭霧罩めたる大路の寂として物の影無き辺を、唯独り覚束無げに走れるなり。

「宮！ 待て！」

呼べばこだまは返せども、雲は幽ゆうにして彼は応こたへず。齒咬はがみを作し  
て貫一は後を追ひぬ。

固もとより間あはひは幾許いくばくも有らざるに、急所の血を出いだせる女の足取、  
引ひつとら捉とらふるに何程の事有らんと、侮あなどりしに相違して、彼は始の如  
く走るに引易ひきかへ、此方こなたは漸く息疲いきつかるるに及べども、距離は竟つひに  
依然として近ちかづく能はず。こは口惜くちをし、と貫一は満身の力を励し、  
僵たふるるならば僵れよと無二無三に走りたり。宮は猶脱なほのがるるほど  
に、帯は忽たちまち颯さと积とけて脚あしに絡まとふを、右に左に踢けはら払はらひつつ、跌つまづ  
きては進み、行きては跟よろめき、彼もはや力は竭つきたりと見えなが  
ら、如何いかに為せん、其処そこに伏して復また起きざる時、躬みづからも終つひに及ばず  
して此処ここに絶入ぜつにゆうせんと思へば、貫一は今に当りて纔わづかに声を揚ぐ  
るの術じゆつを余すのみ。

「宮！」と奮ふるつて呼びしかど、憫あはれむべし、その声は苦あへぎき喘あへぎの如

き者なりき。我と吾肉を啖はんと想ふばかりに躁れども、貫一は既に声を立つべき力をさへ失へるなり。さては効無き己に憤を作して、益す休まず狂呼すれば、彼の吭は終に破れて、汨然として一涌の鮮紅を嘔出せり。心晦みて覚えず倒れんとする耳元に、松風驀然と吹起りて、吾に復れば、眼前の御壕端。只看る、宮は行き行きて生茂る柳の暗きに分入りたる、入水の覚悟に極れりと、貫一は必死の声を搾りて連に呼べば、咳入り咳入り数口の咯血、斑爛として地に委ちたり。何思ひけん、宮は千条の緑の陰より、その色よりは稍白き面を露して、追来る人を熟と見たりしが、竟に疲れて起きも得ざる貫一の、唯手を抗げて遙に留むるを、免し給へと伏拝みて、つと茂の中に隠れたり。彼は己の死ぬべきを忘れて又起り。駈寄る岸の柳を潜りて、水は深きか、宮は何処に、と葎の露に踏滑る身を危くも淵に臨

めば、鞆どうとうと瀉そそぐ早瀬の水は、駭おどろく浪なみの体たいを尽つくし、乱らんるる流りゅうの文ぶんを捲まいて、眼下がんげに幾個いくほひの怪あつき大石たいせき、かの鰲背ごうはいを聚あつめて丘かの如ごとく、その勢いきほひを拒ふせがんと為なれど、触ふるれば払はひ、当あれば翻ひるがへり、長波ながなみの邁ゆくところ滔とう々とうとして破やぶらざる為なき奮ふん迅じんの力ちからは、両岸りやうがんも為なりに震ふるひ、坤軸こんじくも為なりに轟とどろき、蹈居ふみゐる土つちも今いまにや崩くづれなんと疑うたふところ、衣袂いべいの雨濃あめこまやかに灑そそぎ、鬢びんぼうの風かぜ転うたた急いそなり。

あな凄すさまじ、と貫み一いつは身毛みのけも弥よ堅だちて、縫すがれる枝えだを放はなちかねつ、看みれば、叢くさむらの底そこに秋蛇しゅうだの行いくに似にたる径こみち有ありて、ほとほと逆落さかおとしに懸崖けんがいを下くだるべし。危あやふき哉かなと差さ覗しのぞけば、茅葛かやかつらの頻しきりに動うごきて、小笹棘せうささげに見みえつ隠かくれつ段々だんだんと迂すべり行いくは、求もとむる宮みやなり。

その死しを止とどめんの一念いっしんより他たあらぬ貫つら一いつなれば、かくと見みるより心こころも空そらに、足あしは地ちを踏ふむ違ちがひもあらず、唯ただ遅おそれじと思おもふばかりよ、壑間たにまの嵐あらしの誘まかふに委まかせて、驀まじ直ぢに身みを墮おせり。

或はあるひ摧くだけて死ぬべかりしを、恙つつがな無なきこそ天たすけの佑たすけと、彼は数歩の内に宮を追ひしが、流ひたに浸いれる巖いはほを涉わたりて、既に渦巻く滝津瀬たきつせに生憎あやにく！ 花は散りかかるを、

「宮！」

と後うしろに呼よぶ声残りて、前には人の影も在らず。

咄嗟とつさの遅おくれを天あめに叫こゑび、地ちに号わめき、流ながに悶もだえ、巖いわに狂くるへる貫一くわんいちは、血走まなこる眼まなこに水みづを射やて、此こゝ処こゝや彼か処こゝと恋こひき水屑みくづを覓もとむれば、正まさしく浮木芥うきぎあくたの類るいとも見えざる物の、十間じっけんばかり彼方あなを揉もみに揉もんで、波間なまがくれ隠おしながに推流おしながさるるは、人ひとならず哉や、宮みやなるかと瞳ひとみを定さだむる折よしもあれ、水勢みづ其そ処こゝに一段急いそなり、在ありける影かげは弦つるを放はなれし箭飛やとびを作なして、行方ゆくへも知らずと胸潰むねつぶるれば、忽たちまち遠とほく浮うき出いでたり。

嬉うれしやと貫一くわんいちは、道無みちき道みちの木きを攀よぢ、崖がけを伝たづひ、或あるひは下くだりて

水を躪え、石を躪み、巖を廻り、心地死ぬべく踉蹌として近き見れば、緑樹蔭愁ひ、潺湲声咽びて、浅瀬に繋れる宮が骸よ！

貫一は唯その上に泣伏したり。

呵、宮は生前に於て纔に一刻の前なる生前に於て、この情の

熱き一滴を幾許かは忝なみけん。今や千行垂るといへども効無

き涙は、徒に無心の死顔に濺ぎて宮の魂は知らざるなり。

貫一の悲は窮りぬ。

「宮、貴様は死……死……死んだのか。自殺を為るさへ可哀な

のに、この浅ましい姿はどうだ。

刃に貫き、水に溺れ、貴様はこれで苦くはなかつたか。可愛

い奴め、思迫めたなあ！

宮、貴様は自殺を為た上身を投げたのは、一つの死では慊ら

ずに、二つ命を捨てた気か。さう思つて俺は不敏だ！

どんな事が有らうとも、貴様に対するあの恨は決して忘れんと誓つたのだ。誓つたけれども、この無残な死状を見ては、罪も恨も皆消えた！ 赦したぞ、宮！ 俺は心の底から赦したぞ！  
 今はこの際に赦したと、俺が一言云つたらば、あの苦い息の下から嬉しいと言つたが、宮、貴様は俺に赦されるのがそんなに嬉しいのか。好く後悔した！ 立派な悔悟だぞ！！

余り立派で、貫一は恥入つた！ 宮、俺は面目無い！ これまでの精神とは知らずに見殺に為たのは残念だつた！ 俺が過だ！ 宮、赦してくれよ！ 可いか、宮、可いか。

嗚呼死んで了つたのだ!!!」

貫一は彼の死の余りに酷く、余りに潔きを見て、不貞の血は既に尽く沃がれ、旧悪の膚は全く洗れて、残れる者は、悔の為に、誠の為に、己の為に捨てたる亡骸の、実に憐みても憐むべ

く、悲みても猶なほ及およばざる思の、今は唯き極きはめて切なる有るのみ。

かの烈れつ々れつたる怨おん念ねんの跡無く消ゆるとともに、一旦いつ洒かれにし愛慕の情は又泉の涌わくらんやうに起りて、その胸に漲みなりぬ。苦くならず哉や、人亡なき後の愛慕は、何の思かこれに似る者あらん。彼はなかなか生ける人にこそ如何いかなる恨をも繋かくるの忍やすび易やすきを今ぞ知るなる。

貫一は腸断ちようたち涙連なみだりて、我を我とも覚ゆる能はず。

「宮、貴様に手向たむけるのは、俺のこの胸うちの中だ。これで成仏してくれ、よ。この世の事はこれまでだ、その代り今度の世には、貴様の言つた通り、必ず夫婦に成つて、百歳ひやくまでも添そひ、添そひ遂とげるぞ！ 忘れるな、宮。俺も忘れん！ 貴様もきつと覚えてるよ！」

氷の如き宮が手を取り、犇ひしと握りて、永く眠れる面おもてを覗のぞかん

と為れば、涙急にして文色あいろも分かず、推重おしかさなりて、怜しいとやと身を悶もだえつつ少時しばし泣いたり。

「然し、宮、貴様は立派な者だ。一ひとたび罪を犯しても、かうして悔悟して自殺を為したのは、実に見上げた精神だ。さうなけりや成らん、天晴あつぱれだぞ。それでこそ始て人間たるの面目めんもくが立つのだ。

然るに、この貫一はどうか！ 一端男いつぱしと生れながら、高がいっぶ一婦の愛を失つたが為に、志を挫くぢいて一生を誤り、餓鬼がきの如き振舞ふるまひを為て恥とも思はず、非道を働いて暴利むさぼを貪るの外は何も知らん。その財かねは何に成るのか、何の為にそんな事を為るのか。

凡およそ人と謂いふ者には、人として必ず尽すべき道が有る。己おのれと云ふ者の外に人の道と云ふ者が有るのだ。俺はその道を尽してゐるか、尽さうと為てゐるか、思つた女と添ふ事が出来ん。唯それだけの事に失望して了つて、その失望の為に、苟いやしくも男と

生れた一生を抛たうと云ふのだ。人たるの効は何処に在る、人たる道はどうしたのか。

噫、誤つた！

宮、貴様が俺に対して悔悟するならば、俺は人たるの道に對して悔悟しなけりや濟まん軀だ。貴様がかうして立派に悔悟したのを見て、俺は実に愧入りも為りや、可羨くもある。当初貴様に棄てられた為に、かう云ふ墮落をした貫一ならば、貴様の悔悟と共に俺も速かに心を懊めて、人たるの道に負ふところのこの罪を贖はなけりや成らん訳だ。

嗟乎、然し、何に就けても苦い世の中だ！

人間の道は道、義務は義務、樂は又樂で、それも無けりや立たん。俺も鴨沢に居て宮を對手に勉強してをつた時分は、この人世と云ふ者は唯面白い夢のやうに考へてゐた。

あれが浮世なのか、これが浮世なのか。

爾来あれから、今日こんにちまでの六年間、人らしい思を為た日は唯の一日でも無かつた。それで何が頼たのみで俺は生きてゐたのか。死を決する勇気が無いので生きてゐたやうなものだ！ 生きてゐたのではない、死損しにぞくなつてゐたのだ！！

鰐淵わにぶちは焚死やけしに、宮は自殺した、俺はどう為するのか。俺のこの感情の強いのでは、又向來これから宮のこの死顔が始終目に着いて、一生悲い思を為なければ成らんのだらう。して見りや、今までよりは一層くるしみ苦を受けるのは知れてゐる。その中で俺は生きてゐて何を為るのか。

人たるの道を尽す？ 人たるの行おこなひを為る？ ああ、懲うるせい、懲い！ 人としてをればこそそんな義務も有る、人でなくさへあれば、何も要らんのだ。自殺して命を捨てるのは、一いっの罪惡だ

と謂ふ。或は罪惡かも知れん。けれども、茫々然と呼吸してゐるばかりで、世間に対しては何等の益するところも無く、自身に取つてはそれが苦痛であるとしたら、自殺も一種の身始末だ。増して、俺が今死ねば、忽ち何十人の人が助り、何百人の人が懽ぶか知れん。

俺も一箇の女故に身を誤つたその余が、盗人家業の高利貸とまで墮落してこれでやみやみ死んで了ふのは、余り無念とは思ふけれど、当初に出損つたのが一生の不覚、あれが抑も不運の貫一の軀は、もう一遍鍛直して出て来るより外為方が無い。この世の無念はその時霽す！」

さしも遣る方無く悲めりし貫一は、その悲を立ろに抜くべき術を今覚れり。看々涙の頬の乾ける辺に、異く昂れる氣有りて青く耀きぬ。

「宮、待つてゐろ、俺も死ぬぞ！ 貴様の死んでくれたのが余り嬉しいから、さあ、貫一の命も貴様に遣る！ 来世で二人が夫婦に成る、これが結納だと思つて、幾久く受けてくれ。貴様も定めて本望だらう、俺も不足は少しも無いぞ」

さらば往きて汝の陥りし淵に沈まん。沈まば諸共と、彼は宮が屍を引起して背に負へば、その軽きこと一片の紙に等し。怪しと見返れば、更に怪し！ 芳芬鼻を撲ちて、一朵の白百合大さ人面の若きが、満開の葩を垂れて肩に懸れり。

不思議に愕くと為れば目覚めぬ。覚むれば暁の夢なり。

# 続続金色夜叉

## 第一章

貫一が胸は益ますますくるし苦く成り愈りぬ。彼を念おもひ、これを思ふに、生きて在るべき心地はせで、寧ろかの怪あやしき夢の如く成りなんを、快からずやと疑へるなり。

彼は空むなしく万事を抛なげうちて、懊おうのう懐の間うつつたに三日ばかりを過すびしぬ。

これを語らんに人無く、愬うつつたへんには友無く、しかも自ら拯すくふべき道は有りや。有りとほしいまも覚えほしいまず、無しとは知れど、煩わづらふ者の煩わづらひ、悩ほしいまむ者の悩ほしいまみて縦ほしいままなるを如何いかにせん。彼は実こんめいらんじようにこの昏迷こんめいらんじよう乱擾

せる一根の悪障を袂去りて、猛火に燬かんことを冀へり。その時彼は死ぬべきなり。生か、死か。貫一の苦悶は漸く急にして、終にこの問題の前に首を垂るるに至れり。

値無き吾が生存は、又同く値無き死亡を以つて畢へしむべき者か。悔に堪へざる吾が生の値無かりしを結ばんには、これを償ふに足る可き死を以て為ざる可からざるか、或は、ここに過多き半生の最期を遂げて、新に他の値ある後半の復活を明日に計るべきか。

彼は強ちに死を避けず、又生を厭ふにもあらざれど、両ながらその値無きを、私に屑しと為ざるなり。当面の苦は彼に死を勧め、半生の悔は耻を責めて仮さず。苦を抜かんが為に、我は値無き死を辞せざるべきか、過を償はんが為に、我は樂まざる生を忍ぶべきか。碌々の生は易し、死は即ち難し。碌々の死は

易し、生は則ち難し。我は悔いて人と成るべきか、死してその愚を完うすべきか。

貫一は活を求めて得ず、死を覓めて得ず、居れば立つを念ひ、立てば臥すを想ひ、臥せば行くを懐ひ、寐ぬれば覚め、覚むれば思ひて、夜もあらず、日もあらず、人もあらず、世もあらず、唯憂ひ惑へる己一個の措所無く可煩きに悩乱せり。

あだかもこの際抛ち去るべからざる一件の要事は起りぬ。先におほぐちの言込有りし貸付の緩々急に取引迫りて、彼は些の猶予も無く、自ら野州塩原なる畑下と云へる温泉場に出向き、其処に清琴楼と呼べる湯宿に就きて、密に云々の探知すべき必要を生じたるなり。

謂知らず慙しと腹立たれけれど、行懸の是非無く、かつは難得き奇景の地と聞及べば、少時の憂を忘るる事も有らんと、自ら

努めて結束し、かの日より約一週間の後、彼はほとほと進まぬ  
 足を曳ひきて家を出でぬ。その晨横雲白く明方の空に半輪の残  
 月を懸けたり。一番列車を取らんと上野に向ふ俾くるまの上なる貫一  
 は、この暁の眺ながめの眺ながめに撲うたれて、覚えず悚然しょうぜんたる者ありき。

(一) の二

車は駛はせ、景は移り、境は転じ、客は改まれど、貫一は易かはら  
 ざる他の悒鬱ゆううつを抱いだきて、遣やる方無き五時間の独ひとりに倦うみ憊つかれつつ、  
 始ただて西那須野の駅に下車せり。

直ただちに西北に向ひて、今尚茫々たる古の那須野原に入れば、天  
 は潤ひろく、地は遐ほるかに、唯平蕪の迷ひ、断雲の飛ぶのみにして、三  
 里の坦途たんと、一帯の重巒ちようらん、塩原は其処そこぞと見えて、行くほどに跡みち

きはまは窮らず、漸く千本松を過ぎ、進みて関谷村に到れば、人家の  
 尽る処に淙々の響有りて、これに架れるを入勝橋と為す。

すなは 輒ち橋を渡りて僅に行けば、日光冥く、山厚く畳み、嵐気冷

に壑深く陥りて、幾廻せる葛折の、後には密樹に声々の鳥呼び、

前には幽草歩々の花を発き、いよいよ躋れば、遙に木隠の音のみ

聞えし流の水上は浅く露れて、驚破や、ここに空山の雷白光を

放ちて頹れ落ちたるかと凄じかり。道の右は山を剷りて長壁と

成し、石幽に蘚碧うして、幾条とも白糸を乱し懸けたる細瀑小瀑

の珊々として濺げるは、嶺上の松の調も、定てこの緒よりやと

見捨て難し。

俣を駆りて白羽坂を躓えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑を躓

みて、山中の景は始て奇なり。これより行きて道有れば、水有

り、水有れば、必ず橋有り、全溪にして三十橋、山有れば巖有

り、巖有れば必ず瀑たき有り、全嶺ぜんれいにして七十瀑。地有れば泉有り、泉有れば必ず熱有り、全村にして四十五湯。猶なほ数ふれば十二勝、十六名所、七不思議、誰たれか一々探り得べき。

そもそ

抑も塩原の地形たる、塩谷郡しおやごおりの南より群峰の間を分けて深く

西北に入り、綿々として箒川の流に沂はきはがわる片岨さかのぼの、四里に岐わかれ、十

一里に互わたりて、到る処巉巖ざんがんの水を夾はさまざる無きは、宛然さながら青銅の

葉研やげんに瑠璃末るりまつを砕くだくに似たり。先づ大網おほあみの湯を過すくれば、根本山ねもとやま、

魚止滝うおどめのたき、児ヶ淵ちご、左鞆ふちひだりうつぼの険は古ふるりて、白雲洞はくうんどうは朗ほがらかに、布滝ぬのたき、竜ヶ

鼻はな、材木石ざいもくいし、五色石ごしきせき、船岩ふないわなどと眺行ながめゆけば、鳥井戸とりいど、前山まえやまの

翠衣みどりころもに染みて、福渡ふくわたの里いに入るなり。

途みちすがら前面むかひの崖がけの処々ところどころに躑躅つつじの残り、山藤あたりことの懸れるが、甚はなは

だ興有りと目留むかひまれば、又この辺あた殊ことに谿たに浅あさく、水澄みみて、大い

なる古鏡こきょうの沈おほめる如く、深く蔽おほへる岸樹がんじゆは陰々として眠るに似

たり。貫一は覚えず踏止りぬ。

かの逆巻く波に分け入りし宮が、息絶えて浮び出でたりし其処の景色に、似たりとも酷だ似たる岸の布置、茂の状況、乃至は漾ふる水の文も、透徹る底の岩面も、広さの程も、位置も、趣も、子細に看来ればいよいよ差はず。

彼は眦を決きて寒慄せり。

怪むべき哉、曾て経たりし場をそのままに夢むる例は有れ、所抛も無く夢みし跡を、歴々とかく目前に見ると云ふも有る事か。宮の骸の横はりし処も、又は己の追来し筋も、彼処よ、此処よと、陰に一々指しては、限無く駭けるなり。

車夫を顧みて、処の名を問へば、不動沢と言ふ。

物可恐しげなる沢の名なるよ。げに思へば、人も死ぬべき処の名なり。我も既に死なんとせしがと、さすが現の身にも沁む

時、宮にはあらで山百合の花なりし怪異を又懐ひて、彼は肩頭かたさき寒く顛ふるひぬ。

卒にはかきびすに踵を回して急げば、行路の雲間に塞りて、咄々とつとつ、何等の

物か、と先驚かさるる異形の屏風巖、地を抜く何百丈と見挙る

絶頂には、はらはら松も危く立竦み、幹竹割に割放したる断面

は、半空より一文字に垂下して、岌々たるその勢、幾ど眺むる

眼も留らず。

貫一は惘然として佇めり。

彼が宮を追ひて転び落ちたりし谷間の深さは、正にこの天辺

の高きより投じたらんやうに、冉冉として虚空を舞下る危惧の

堪難かりしを想へるなり。

我未だ嘗て見ざりつる絶壁！ 危しとも、可恐しとも、夢な

らずして争か飛下り得べき。又この人並ならぬ雲雀骨の粉微塵

に散つて失せざりしこそ、洵に夢なりけれど、身柱冷かに瞳を  
 凝す彼の傍より、これこそ名にし負ふ天狗巖、と為たり貌にも  
 車夫は案内す。

貫一はかの夢の奇なりしより、更に更に奇なるこの塩原の実  
 覺をば疑ひ懼れつつ立尽せり。

既に如此くなれば、怪は愈よ怪に、或は夢中に見たりし踪の  
 猶着々活現し来りて、飽くまで我を脅さざれば休まざらんと為

るにあらずや、と彼は胸安からずも足に信せて、かの巖の頭上  
 に聳ゆる辺に到れば、谿急に激折して、水これが為に鼓怒し、

咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の乱れ競ふが如し。この乱流の間  
 に横はりて高さ二丈に余り、その頂は平に濶りて、寛に百人を

立たしむべき大磐石、風雨に歳経る膚は死灰の色を成して、鱗  
 も添はず、毛も生ひざれど、状可恐しげに蹲りて、老木の蔭を

負ひ、急湍きゆうたんの浪なみに漬りひたて、夜な夜な天狗巖まふうの魔風まふうに誘はれて吼ほえもしぬべき怪しなの物なり。

その古蒲生飛驒守氏郷いにしへがもうひだのかみうじさとこの処のだちに野立のだちせし事有るに因りよて、野立石のだちいしとは申す、と例ときいだのが説出とすを、貫一うなづは領うなづきつつ、目を放うちながたず打眺うちながめて、独り窃ひそかに舌を巻くのみ。

彼は実げに壑間たにまの宮を尋ぬる時、この大石たいせきを眼下がんげに窺うかがひ見たりしを忘れわざるなり。

又は流るる宮を追ひて、道無くろしきに困くるしめる折、左右には水深みづかく、崖高たかく、前まへには攀よづべからざる石いしの塞ふさがりたるを、攀よぢて半なかばに到りて進退きま谷やまりつる、その石もこれなりけん、と肩おのづは自そびと聳そびえて、久しほく留とどまるに堪たへず。

数歩すほを行けば、宮が命を沈めしその淵ふちと見るべき処も、彼が積とけたる帯ひを曳ひきしその巖いはほも、歴然れきぜんとして皆在あらざるは無なし！ 貫

一が髪毛かみのけは針はりの如くた堅たちて戦そよげり。彼の思は前夜の悪夢を反復くりかへすに等ひとしき苦惱くなんを辞する能はざればなり。

夢ながら可おそろし恐おそろしくも、浅あましくも、悲かなくも、可いたまし傷ましくも、分わく方

無なくて唯一いち図ずに切きなかりしを、事こともし一場いちじょうの夢ゆめにして止とどまらざら

んには、抑おさも如何いかに！ 今いまや塩原しほのの実景じつけいは一々いちいち夢中ゆめちゆうの見みるところ、

然しからばこの景既けいに夢ゆめならず！ 思おも掛ひかけずもこここゝに来きにける吾身われみ

もまた夢ゆめならず！ 但ただ夢ゆめに欠かく者ものとては宮みや一箇ひとのみ。纔わづかに彼の

こここゝに来きたらざるのみ!!

貫一くわんいちはかく思おも到いたりて、我われ又また夢ゆめに入いりたるにあらざるかと疑うたは

んとも為なつ。夢ゆめならずと為なせば、我われは由よし無なき処ところに来きにけるよ。幸さいはひ

に夢ゆめに似にる事こと無なくてあれかし。異あやしとも甚はなだ異ちがひし！ 疾とく往むかひ

て、疾とく還かへらんと、遽はにかに率ひきし俾くるまに乘のりて、白倉山しらくらやまの麓ふもと、塩釜しおがまの

湯ゆ、高尾塚たかおづか、離室はなれむろ、甘湯沢あまゆざわ、兄あに弟おと滝たき、玉簾瀬たまだれのせ、小太郎淵こたろうがぶち、路みちの

頭ほとりに高きは寺山てらやま、低きに人家の在る処、即ち畑下戸はたおり。

## 第二章

一村十二戸、温泉は五箇所に湧わきて、五軒の宿あり。ここに清琴楼と呼べるは、南あたに方りて箒川の緩く廻れる磧かはらに臨み、俯ふしては、水石すいせきの粼々たるを弄もてあそび、仰げば西に、富士、喜十六きじゅうろくの翠巒すいらんと対して、清風座に満ち、袖そでの沢を落来る流は、二十丈の絶壁に懸りて、素縑ねりぎぬを垂れたる如き吉井滝あり。東北は山又山を重ねて、琅玕ろうかんの玉簾深く夏日おその畏るべきを遮りたれば、四面よこへぎ遊目ゆうもくに足りて丘壑きゆうかくの富を擅ほしいままにし、林泉の奢おごりを窮きはめ、又有るまじき清福自在の別境なり。

貫一はこの絵を看みる如き清穩せいおんの風景に値あひて、かの途上みちすがら険けはしき

いはほ さかし  
 巖と峻き流との為に幾度か魂飛び肉銷して、理むる方無く搔乱  
 されし胸の内は靄然として頓に和ぎ、恍然として総て忘れたり。  
 彼は以為らく。

誠に好くこそ我は来つれ！ なんぞ来るの甚だ遅かりし。山  
 の麗しと謂ふも、壤の堆き者のみ、川の暢しと謂ふも、水の逝く  
 に過ぎざるを、牢として抜く可からざる我が半生の痼疾は、争  
 で壤と水との医すべき者ならん、と齒牙にも掛けず侮りたりし  
 己こそ、先づ侮らるべき愚の者ならずや。

看よ、看よ、木々の緑も、浮べる雲も、秀る峰も、流るる溪  
 も、峙つ巖も、吹来る風も、日の光も、鶏の鳴く音も、空の色  
 も、皆自ら浮世の物ならで、我はここに憂を忘れ、悲を忘れ、  
 苦しみを、皆自ら忘れ、身をかの雲と軽く、心は水と淡く、希  
 はくは今より如此くして我生を了らん哉。

恋も有らず、怨うらみも有らず、金ぜ銭も有らず、権勢も有らず、名  
 譽も有らず、野心も有らず、榮達も有らず、墮落も有らず、競  
 争も有らず、執着も有らず、得意も有らず、失望も有らず、止た  
 だ天然の無垢むくにして、形骸けいがいを安きのみなるこの里、我思わがおもひを埋うづむ  
 るの里か、吾骨を埋るの里か。

性来多く山水の美に親したしまざりし貫一は、殊ことに心の往くところ  
 を知らざるばかりに愛めで悦よろこびて、清琴楼の二階座敷に案内あないされ  
 たれど、内には入いらで、始より滝に向へる欄干らんかんに倚よりて、偶たまま  
 人中を迷ひたりし子の母の親にも逢あひけんやうに、少時しばしはその  
 傍かたはらを離れ得ざるなりき。

楼前の緑は漸やうやく暗く、遠近の水音をちこち沓さえて、はや夕暮ゆふくるる山風  
 の身に沁しめば、先づ湯浴ゆあみなどせばやと、何気無く座敷に入りた  
 る彼の眼まなこを、又一個ひとつ驚かす物こそあれ。

鞆かぼんを置いたる床間とこのまに、山百合やまゆりの花のいと大きなるを唯一輪棒挿ただぼうざし  
 に活いけたるが、莖形くきなりに曲くねり傾かたきて、あたかも此方こなたに向へるなり。  
 貫一は覚えず足を踏止めて、その瞪みはれる眼まなこを花に注まぎつ。宮  
 ははやここに居たりとやうに、彼は卒爾そつじの感かんに衝つれたるなり。  
 既に幾処いくところの実景の夢と符合するさへ有るに、またその殊ことに夢  
 の夢なる一本百合ひととせもとのここに在る事、畢竟偶合ひつきように過ぎずとは謂へ、  
 さりとては余りにかの夢とこの旅との照応急てんおうきゅうに、因縁深いんえんきに似  
 て、などかくは我を驚おどかすの太甚はなはだしき！

奇きを弄ろうして益ます出でづる不思議ふしぎに、彼は益懼おそれを作なして、或あるはこの  
 裏うちに天意てんいの測はかり難がたき者有るなからんや、とさすがに惑まどひ苦くるめり。  
 やがて傍近そばちかく寄よりて、幾許いかに似にたりと眺ながむれば、打披うちひらける葩はなびらは  
 凜りんとして玉たまを割さいたる如ごとく、濃香ふんぶん芬ふん々と迸ほとしり、葉色はなばらに露ろ氣き有あり  
 て緑鮮みどりあざやかに、定さだめて今朝けさや剪きりけんおぼしと覚おぼし花いの勢いきほひなり。

「少く楽しほまさされし貫一も、これが為きに興冷めて、俄にはかに重かさき頭かしらを花の前に支へつつ、又かの愁うれひを徐々に喚起よびおこさんと為つ。

「お風呂へ御案内申しませう」

その声に彼は婢をんなを見返りて、

「ああ、姐ねえさん、この花を那裏そつちへ持つて行つておくれでないか」

「はあ、その花で御座いますか。旦那様だんなは百合の花はお嫌きらひで？」

「いや、匂におひが強くて、頭痛がして成らんから」

「さやうで御座いますか。唯今直ぢきに片付けますです。これは唯たつた

一つ早咲はやぎきで、珍めづらしう御座いましたもんですから、先程折つてまゐ

つて、徒いたづらに挿して置いたんで御座います」

「うう、成程、早咲だね」

「さやうで御座います。来月あたりに成りませんと、余り咲きませんので、これたつたが唯一つ有りましたんで、紛まぐれ咲ざきなので御座

いますね」

「うう紛れ咲、さうだね」

「御案内致しませう」

風呂場に入れば、一箇の客先在りて、未だ燈点さぬ微黯の湯槽ひたに漬りけるが、何様人の来るに駭けると覺く、甚だ忙しげに身を起しつ。貫一が入れば、直に上ると齊く洗場の片隅に寄りて、色白き背を此方に向けたり。

としのころ

年紀は二十七八なるべきか。やや孱弱なる短軀の男なり。頻

に左視右胆すれども、明々地ならぬ面貌は定かに認め難かり。

されども、自ら見識越ならぬは明なるに、何が故に人目を避る

が如き態を作すならん。華車なる形成は、ここ等辺の人にあら

ず、何人にして、何が故になど、貫一は徒に心牽れてゐたり。

やがて彼が出づれば、待ちけるやうに男は入替りて、なほ飽



床間には百合の花も在らず煌々たる燈火の下に座を設け、膳を据ゑて傍に手焙を置き、茶器食籠など取揃へて、この一日さがに旅の労を忘るべし。

先づ衣桁に在りける襦袢を被ぎ、夕冷の火も恋く引寄せて莨を吃しゐれば、天地静に石走る水の響、梢を渡る風の声、颯々淙々と鳴りて、幽なること太古の如し。

乍ちはたはたと跫音長く廊下に曳いて、先にはあらぬ小婢の夕餉を運び来れるに引添ひて、其処に出でたる宿の主は、「今日は好うこそ御越し下さいまして、さぞ御労様でゐらつしやいませうで御座ります。ええ、又唯今程は格別に御茶料を下し置れました、甚だ恐入りました儀で、難有う存じまして、厚く御礼を申し上げますので御座います。

ええ前以てお詫を申上げ置きますのは、召上り物のところ

で御座りまして一向はや御覧の通何も御座りませんで、誠に相  
 済みません儀で御座いまするが、実は、未だ些ちよつと時候もお早い  
 ので、自然お客様のお越こしも御座りませんゆゑ、何分用意等とうも致  
 し置きませんやうな次第で、然し、一両日中いちりょうにちにはお麓末そまつながら  
 何ぞ差上げまするやうに取計ひまするで御座いますで、どうぞ、  
 まあ今明日こんみょうにちのところは御勘弁を下さいまして、御寛ごゆるりと御逗留ごとうりゆう下  
 さいまするやうに。——これ、早う御味噌汁おみおつけをお易かへ申して来  
 ないか」

あるじ 主の辞し去りて後、貫一は彼の所謂いはゆる何も無き、椀わんも皿も皆黄  
たまごいつしきなる鶏子一色の膳に向へり。

「内にはお客は今幾箇いくたり有るのだね」

「こちら這箇の外ひとかたにお一方で御座りやす」

「ひとり一箇？ あのお客は单身ひとりなのか」

「はい」

「先に湯殿ゆどので些ちよつと遇あつたが、男の客だよ」

「さよで御座りやす」

「あれは病人だね」

「どうで御座りやすか。——そんな事無ねえで御座りやせう」

「さうかい。何処どこも不良わるいところは無いやうかね」

「無ねえやうで御座りやすな」

「どうも病人のやうだが、さうでないかな」

「ああ、旦那様はお医者様で御座りやすか」

貫一は覚えふんぼんず噴飯ふんぼんせんと為なつ、

「成程、好い事を言ふな。俺は医者ぢやないけれど、どうも見たところが病人のやうだから、さうぢやないかと思つたのだ。もう長く来てゐるお客か」

「いんえ、昨日お出いでになりやしたので」

「昨日来たのだ？ 東京の人か」

「はい、日本橋の方のお方で御座りやす」

「それぢや商人あきんどか」

「私能く知りやせん」

「どうだ、お前達と懇意にして話をするか」

「そりやなさりやす」

「俺どつちと那箇どつちが為る」

「旦那様とですけ？ そりや旦那様のやうにはなさりやせん」

「うむ、さうすると、俺の方がお饒舌しゃべりなのだな」

「あれ、さよぢや御座りやせんけれど、那裏あちらのお客様は黙つて

らつしやる方が多う御座りやす。さうして何でもお連様つれさまが直ぢうぎ

にいらしやる筈はずで、それを、まあ酷えらう待つてお在いでなさりやす」

「おお、伴つれが後から来るのか。いや、大きに御馳走ごちそうだつた」

「何も御座りやせんで、お麿末様そまつさまで御座りやす」

婢をんなは膳を引き起ちぬ。貫一は顛然ころりと臥ねたり。

二十間も座敷の数有る大構おほがまへの内に、唯一人の客を宿せるだに、

寂寥さびしさは既に余んぬるを、この深山幽谷の暗夜に蔽おほはれたる孤村の

片辺かたほとりに倚よれる清琴楼の間毎わたに亘る長廊下は、星の下行く町の小

路より、幾許いかにかり心細くも可恐おそろしき夜道ならんよ。戸一重外とひとへそとには、山嵐やまおろし

の絶えずおどろおどろと吹廻ふきめぐりて、早瀬の波の高鳴たかなりは、真に放

鬼の名をも懐おもふばかり。

折しも唾壺はひふき打つ音は、二間ふたまばかりを隔てて甚だ蕭索しめやかに聞えぬ。

貫一は何なにの故ゆゑとも知らで、その念頭を得放れざるかの客の身

の上をば、独り様々に案じ入りつつ、彼既に病客ならず、又我

が識しる人ならずと為せば、何を以つて人を懼おそるる態かたちを作なすならん。

抑も彼は何者なりや。又何の尤むるところ有りて、さばかり人を懼るるや。

貫一はこの秘密の鑰を獲んとして、左往右返に暗中摸索の思を費すなりき。

(二) の二

明る朝の食後、貫一は先づこの狭き畑下戸の隅々まで一遍見周りて、略ぼその状況を知るとともに、清琴楼の家格を考へなどして、磧に出づれば、浅瀬に架れる板橋の風情面白く、渡れば喜十六の山麓にて、十町ばかり登りて須巻の滝の湯有りと教へらるるままに、遂に其処まで往きて、午近き頃宿に帰りぬ。汗を流さんと風呂場に急ぐ廊下の交互に、貫一はあたかもか

の客の湯上りに出会へり。こたびも彼は面を見せじとやうに、  
 慌忙あわただしく打背うちそむきて過行くなり。

今は疑ふべくもあらず、彼は正まさしく人目を避けんと為るなり。

則すなはち人を懼るるなり。故は、自らとがむ尤るなり。彼は果して何者な

らん、と貫一は愈いよいよよ深く怪みぬ。

昨日きのふこそ誰たそがれ乎彼の黯黹くらがりにて、分明さやかに面貌かほかたちを弁わぜざりしが、今

の一日は、躬みづからも奇なりと思ふばかり奇くしくも、彼の不用意うちの間に

速写機の如き力を以てして、その映きたじ来りし形すべを総のがて脱とらさず捉

へ得たりしなり。

貫一はその相貌そうぼうの瞥見べつけんに縁よりて、直ただちに彼の性質うらなを占うらはんと

試こころむるまでに、いと善みきはく見極みめたり。されども、いかにせん、彼の

相あするところは始に疑うひしところと頗すこぶる一致せざる者有り。彼

若もし実まことに人を懼おそるると為せば、彼の人を懼おそるる所以ゆゑんと、我より彼

の人を懼るる所以と為す者とは、或は稍趣を異にせざらんや。又想ふに、彼は決して自ら尤るところなど有るに非ずして、止だその性の多差なるが故のみか、未だ知るべからず。この二者の前のをも取り難く、さすがに後のにも領きかねて、彼は又新に打惑へり。

午飯の給仕には年嵩の婢出でたれば、余所ながらかの客の事を問ひけるに、箸をも取らで今外に出で行きしと云ふ。

「はあ、飯も食はんで？ 何処へ行つたのかね」

「何でも昨日あたりお連様がお出の筈になつてをりましたので御座いませう。それを大相お待ちなすつてゐらつしやいましたところが、到頭お着が無いもんで御座いますから、今朝から御心配遊して、停車場まで様子を見がてら電報を掛けに行くとお仰います、それでお出ましに成つたので御座います」

「うむ、それは心配だらう。能く有る事だ。然し、飯も食はずに氣を揉もんでゐるとは、どう云ふ伴つれなのかな。——年寄としよりか、婦をんなでももあるか」

「如何いかがで御座いますか」

「お前知らんのか」

「私存わたくしじません」

彼は覚えず小首かたむを傾くれば、

「旦那だんなも大相御心配ぢや御座いませんか」

「さう云ふ事を聞くと、俺おれも氣になるのだ」

「ぢや旦那だんなも余程よつほど苦勞性の方ですな」

「大きにさうだ」

「それぢやお連様がいらしつて見て、お年寄か、お友達ともだちなら宜よろしう御座いますけれど、もしも、ねえ、貴方あなた、お美うつくしい方か何かだ

つた日には、それこそ旦那は大変で御座いますね」

「どう大変なのか」

「又御心配ぢや御座いませんか」

「うむ、大きにこれはさうだ」

かぜしづか  
風恬に草香りて、唯居るは惜き日和に奇痒く、貫一は又出で

て、塩釜の西南十町ばかりの山中なる塩の湯と云ふに遊びぬ。

かへ  
還れば寂く夕暮るる頃なり。例の如く湯に入りて、上れば直に

ぜん  
膳を持出で、燈も漸く耀きしに、かの客、未だ帰り来ず、

しづか  
「閑寂なものも可いけれど、外に客と云ふ者が無くて、全でかう

ひとりぼつち  
独法師も随分心細いね」

かごと  
託言がましく貫一は言出づれば、

「さやうでゐらつしやいませう、何と申したつてこの山奥で御座いますから。全体旦那がお一人でゐらつしやると云ふお心懸

が悪いので御座いますもの、それは為方が御座いません」

婢はわざとらしく高笑たかわらひしつ。

「成程、これは恐入つた。今度から善く心得て置く事だ」

「今度なんて仰有おっしゃらずに、旦那も明日あしたあたり電信でお呼寄よびよせにな

つたら如何いかがで御座います」

「五十四になる老婢ぼあやを呼んだつて、お前、始らんぢやないか」

「まあ、旦那はあんな好い事を言つてゐらつしやる。その老婢さんの方でないのをお呼びなさいましよ」

「気の毒だが、内にはそれつきりより居ないのだ」

「ですから、旦那、づつと外ほかにお在んなさるので御座いませう」

「そりや外には幾多いくちでも在るとも」

「あら、御馳走で御座いますね」

「なあに、能く聴いて見ると、それが皆人みんなの物ださうだ」

「何ですよ、旦那。貴方、本当の事を有仰るもんですよ」

「本當にも嘘にもその通だ。私なんぞはそんな意気な者が有れば、何為にこんな青臭い山の中へ遊びに来るものか」

「おや！ どうせ青臭い山の中で御座います」

「青臭いどころか、お前、天狗巖だ、七不思議だと云ふ者が有る、可恐い山の中に違無いちやないか。そこへ彷徨、閑さうな貌をして唯一箇で遣つて来るなんぞは、能々の間抜と思はなかりやならんよ」

「それぢや旦那は間抜なのぢや御座いませんか。そんな解らない事が有るものですか」

「間抜にも大間抜よ。宿帳を御覽、東京間抜一人と附けて在る」

「その傍に小さく、下女塩原間抜一人と、ぢや附けさせて戴きませう」

「面白い事を言ふなあ、おまへは」

「やつぱり少し抜けてゐる所為で御座います」

彼は食事を了りて湯浴し、少焉ありて九時を聞きけれど、かの客は未だ帰らず。寢床に入りて、程無く十時の鳴りけるにも、水声空く楼を繞りて、松の嵐の枕上に落つる有るのみなり。

始よりその人を怪まざらんにはこの咎むるに足らぬ瑣細の事も、大いなる模糊の影を作して、いよいよ彼が疑の眼を遮り来らんとするなりけり。貫一はほとほと疑ひ得らるる限疑ひて、躬も其の妄に過るの太甚きを驚けるまでに至りて、始て罷めんと為たり。

これに亜いで、彼は抑も何の故有りて、肥瘠も関せざるかの客に対して、かくばかり軽々しく思を費し、又念を懸るの固執なるや、その謂無き己をば、敢て自ら解かんと試みつ。

されども、人は往々にして自ら率<sup>つぎ</sup>るその己を識<sup>し</sup>る能はず。貫一は抑へて怪まざらんと為<sup>せ</sup>ば、理に於て怪まずしてあるべきを信ずるものから、又幻視せるが如きその大いなる影の冥想<sup>めいそう</sup>の間に纏綿<sup>てんめん</sup>して、或<sup>あるひ</sup>は理外に在る者有る無からんや、と疑はざらんと為る傍<sup>かたはら</sup>より却<sup>かへ</sup>りて惑<sup>まじは</sup>しむるなり。

おもてばしこ  
表階子の口に懸<sup>かか</sup>れる大時計は、病み憊<sup>つか</sup>れたるやうの鈍き響を作して、廊下の闇<sup>やみ</sup>に彷徨<sup>さまよ</sup>ふを、数ふれば正<sup>まさ</sup>に十一時なり。

かの客はこの深更<sup>しんこう</sup>に及べども未<sup>いま</sup>だ帰り来<sup>こ</sup>ず。

彼は帰り来らざるなるか、帰り得ざるなるか、帰らざるなるかなど、又思放<sup>おもひはな</sup>つ能はずして、貫一は寝苦<sup>ねぐるし</sup>き枕を頻回<sup>あまたたび</sup>易<sup>か</sup>へたり。今や十二時にも成りなんと心に懸けながら、その音は聞くに及ばずして遂<sup>つひ</sup>に眠<sup>ねむり</sup>を催せり。日高<sup>ひだか</sup>き朝景色の前に起出づれば、座敷の外を小婢<sup>こをんな</sup>は雑巾掛<sup>ぞうきんかけ</sup>してゐたり。

「お早う御座りやす」

「ねむ睡さうな顔をしてゐるな」

「はい、昨夜よんべ那裏のお客様がお帰かへりになるかと思つて、遅うまで

待つてをりやしたで、今朝睡うごうござりやす」

「ああ、あのお客は昨夜ゆふべは帰らずか」

「はい、お帰かへりが御座りやせん」

貫一はかの客の間の障子を開放あけはなしたるを見て、啞楊枝くはへようじのま

ま欄杆てすりづた伝おもてひに外を眺め行く態ふりして、その前を過すぐれば、床の間に

小豆革あづきがはの手靴てかばんと、浅黄あさぎキャリコの風呂敷包ならとを並べて、傍そばに二

三枚の新聞紙を引ひつつや※ね、衣桁いこうに絹物の裕あはせを懸けて、その裾すそに紺

の靴下を置置きたり。

さては少すこしく本意ほんい無きまでに、座敷の内には見出みいすべき異状だも

有らで、彼は宿帳に抛りて、洋服仕立商なるを知りたると、敢て背くところ有りとも覚えざるなりき。

拍子抜して返れる貫一は、心私にその臆測の鑿なりしを媿ぢざるにもあらざれど、又これが為に、直ちに彼の濡衣を剥去るまでに釈然たる能はずして、好し、この上はその待人の如何なる者なるかを見て、疑は決すべしと、やがてその消息を齎し来るべき彼の帰来の程を、陰ながら最更に遅しと待てり。

夜は山精木魅の出でて遊ぶを想はしむる、陰森凄幽の気を凝すに反してこの霽朗なる昼間の山容水態は、明媚争か画も如か  
ん、天色大気も殆ど塵境以外の感無くんばあらず。黄金を織作せる羅にも似たる麗き日影を蒙りて、万斛の珠を鳴す谷間の清韻を楽みつつ、欄頭の山を枕に恍惚として消ゆらんやうに覚えたりし貫一は、急遽き梵音の廊下を動し来るに駭されて、起回

りさまに頭かしらを捻ねぢ向むければ、何事とも知らず、年嵩としかさの婢をんなの駈かけ着つくるなり。

「些ちよと旦那、参りましたよ、参りましたよ！ 早くいらしつて

御覽なさいまし。些と早く」

「何が来たのだ」

「何でも可いんですから、早くいらつしやいませよ」

「何だ、何だよ」

「早く階子はしごの所へいらしつて御覽なさい」

「おお、あの客が還つたのか」

彼ははや飛ぶが如くに引返して、貫一の言ことばは五間も後に残されたり。彼が注進の模様は、見るべき待人を伴ひ帰れるならんをと、直すぐに起ちて表階子おもてはしごの辺あたりに行く時、既に晩おそし両箇ふたりの人影は欄すすりの上に顯あらはれたり。

つばひろ あみねずみ なかをればう まへのめり 冠かむれる男は、例おもての面を見せざ

らんと為れど、かの客なり。引連れたる女は、二十歳はたちを二つ三つ

も越したる可べし。銀杏返いてふがへしを引約めて、本甲蒔絵ほんこうまきゑの挿櫛根深さしぐしねぶかに、大

粒うすいろめのうの淡色瑪瑙きんあしに金脚うしろざしの後簪ついしゆぼり、堆朱彫たまねがけの玉根掛たまねがけをして、鬢びんの一髪いつぱつを

も乱みださず、極きはめて快く結なひ做したり。葡萄茶えびちやの細格子ほそごうしの縞御召しまおめし

に勝色裏かついろうらの袷あはせを着て、羽織こもんちりめんは小紋縮緬ひとつもんの一紋オランダ、阿蘭陀しつちん模様の七糸

の袱紗帯ふくさおびに金鎖子きんぐさりの織ほそきを引入れて、嬌なまめかしき友禅染じゆばんの襦袢そでの袖し

て口元くちぐを拭ぬぐひつつ、四季袋しきぶくろを紐短ひもみじかに拮さげたるが、弗ふと此方こなたを

見向ける素顔あをの色蒼あをく、口べにの紅さも点さきで、やや裏寂うらさびしくも花いろかの咲

過ぎたらんやうの蕭衰やつれを帯おびびたれど、美目へんの盼へんたる色香いろかなほこまやか尚濃

にして、漫そぞろ人に染そぞむばかりなり。

両箇ふたりは彼の見る目の顕露あらはなるに気怯きおくれせる様子きおくれにて、先を争あふ

如く足早あしはやに過行ほうちやくきぬ。貫一くわんいちもまたその逢着ほうちやくの唐突たうとつなるに打惑うちおどろひ

て、なかなか精くはしく見るべき違いとまあらざりけれど、その女は万々彼の妻などにはあらず、と独ひとり合点せり。

### 第三章

かの男女なんによは悦いとしさに堪たへざらんやうに居寄りて、手に手を交まじへつつ密々ひそやかに語れり。

「さうなの、だから私はどんなに心配したか知れやしない。なかなか貴方あなたがここで想つてゐるやうな訳に行しきは為しませんとも。そりや貴方の心配もさうでせうけれど、私の心配と云つたら、本当に無かつたの。察するが可いいつて、そりや貴方、お互ぢやありませんか。吁あゝ、私は今だに胸が悸どきどき々として、後から追掛おつかけられるやうな氣持がして、何だか落着かなくて可いけない」

「まあ何でも、かうして約束通り逢へりや上首尾なんだ」

「全くよ。一昨日をととひの晩あたりの私の心配と云つたら、こりやど  
うだかと、さう思つたくらゐ、今考へて見れば、自分ながら好  
く出られたの。やつぱり尽きない縁なのだわ」

些ちよと男の顔を盼りみやて、濡ぬるる臉まぶたを軽く拭ぬぐへり。

「その縁の尽きないのが、究竟つまりふたり彼我の身の窮迫つまりなのだ。俺おれもか  
う云ふ事に成らうとは思はなかつたが、成程、悪縁と云ふ者は  
為方しかたの無いものだ」

女は尚なほひそか窃ちかに泣きなみる面おもてを背そむけたるまま、

「貴方おきは直ちかに悪縁だ、悪縁だと言ふけれど、悪縁ならどうする  
んです！」

「悪縁だからかうなつたのぢやないか」

「かう成つたのがどうしたんですよ！」

「今更どうするものか」

「あたりまへ当然さ！ 貴方は一体水臭いんだ!!」

「おい、お静しず、水臭いとは誰の事だ」

色なを作せる男の眼まなこは、つと湧わく涙に輝けり。

「貴方の事さ！」

女の目よりは漣はらはら々と零こぼれぬ。

「俺の事だ?! お静……手前てめへはそんな事を言つて、それで済む

と思ふのか」

「済んでも済まなくても、貴方が水臭いからさ」

「未まだそんな事を言やがる！ さあ、何が水臭いか、それを言

へ」

「はあ、言ひますとも。ねえ、貴方は他の顔ひとさへ見りや、直ぢきに悪縁だと云ふのが癖ですよ。彼我ふたりの中の悪縁は、貴方がそんな

に言いはなくたつて善く知つてゐまさね。何も貴方ひとり一箇の悪縁ぢやなし、私だつてこれでも随分謂いはふに謂いはれない苦労を為てゐるんぢやありませんか。それを貴方がさもさも迷惑さうに、何ぞの端はしには悪縁だ悪縁だとお言ひなさるけれど、聞きかされる身に成つて御覧なさいな。余あんまり好いい心持は為やしません。それも不断ならともかくもですさ、この場になつてまでも、さう云ふ事を言ふのは、貴方の心が水臭いからだ——何がさうでない事が有るもんですか」

「悪縁だから悪縁だと言ふのぢやないか。何も迷惑して……」

「悪縁でも可あひそむござんすよ！」

彼等は相背あひそむきて姑しほらく語無ことばなかりしが、女は忍びやかに泣きゐたり。

「おい、お静、おい」

「貴方きつと迷惑なんでせう。貴方がそんな気ぢや、私は……  
実に……つまらない。私はどうせう。情無い！」

お静は竟つひに顔を掩おほうて泣きぬ。

「何だな、お前も考へて見るが可いぢやないか。それを迷惑と  
も何とも思はないからこそ、世間を狭くするやうな間なかにも成り  
さ、又かう云ふ……なあ……訳なのぢやないか。それを嘘うそにも  
水臭いなんて言いはれりや、俺だつて悔くやしいだらうぢやないか。余り  
悔くて俺は涙が出た。お静、俺は何も芸人ぢやなし、お前に勤  
めてゐるんぢやないのだから、さう思つてゐてくれ」

「狭山さやまさん、貴方もそんなに言はなくなつて可いぢやありませんか」

「お前が言出すからよ」

「だつて貴方がかう云ふ場になつて迷惑さうな事を言ふから、

私は情無くなつて、どうしたら可からうと思つたんでさね。ぢや私が悪かつたんだから謝ります。ねえ、狭山さん、些と

お静の顔を打矚りつつ、男は茫然たるのみなり。

「狭山さんてば、貴方何を考へてゐるのね」

「知れた事さ、彼我の身の上をよ」

「何だつてそんな事を考へてゐるの」

「……………」

「今更何も考へる事は有りはしないわ」

狭山は徐々に目を転して、太息を呷いたり。

「もうそんな溜息なんぞを呷くのはお舎しなさいつてば」

「お前二十……二だつたね」

「それがどうしたの、貴方が二十八さ」

「あの時はお前が十九の夏だつてかな」

「ああ、さう、何でも裕あはせを着てゐたから、丁度今時分でした。湖月こげつさんのあの池に好いお月が映さしてゐて、暖あつたかい晩で、貴方と一処に涼みに出たんですよ、善く覚えてゐる。あれが十九、二十、二十一、二十二と、全まる三年に成るのね」

「おお、さうさう。昨日きのふのやうに思つてゐたが、もう三年に成るなあ」

「何だか、かう全で夢のやうね」

「ああ、夢だなあ！」

「夢ねえ！」

「お静！」

「狭山さん！」

ふたり両箇所とは手を把り、ひざ膝を重ねて、なおかなし同じ思を猶悲く、

「ゆ……ゆ……夢だ！」

「夢だわ、ねえ！」

声立てじと男の胸に泣附く女。

「かう成るのも皆みんな約束事ぢやあらうけれど、那あいつ奴さへ居なかつたら、貴方だつて余計な苦勞は為はしましい。私は私で、ああもかうも思つて、末始終の事も大概考へて置いたのだから、もう少しの間時節が来るのを待つてゐられりや、曩いつか日の御神籤おみくじどほり通な事に成れるのは、もう目に見えてゐるのを、那あいつ奴が邪魔して、横紙よこがみを裂くやうな事を為やがるばかりに大事に為なけりや成らない貴方の体に、取つて返しの付かない傷まで附けさせて、私は、狭山さん、余あんなり申訳が無い！ 堪かん……忍にん……して下さい」

「そりやなあに、お互の事だ」

「いいえ、私わたしがもう少し意気地が有つたら、かうでもないんだらうけれど、胸には色々在つても、それが思切つて出来ない性

分だもんだから、ついこんな破滅はめにも成つて了つて、私は実に濟まないと、自分の身を考へるよりは、貴方の事が先に立つて、さぞ陰ぢや迷惑もしてお在いでなんだらうに、逢ふ度たんびに私の身を案じて、毎いっも優あくして下さるのは仇あだや疎おろかな事ぢやないと、私は嬉うれいより難ありがたがたいと思つてゐます。だものだから、近頃ぢや、貴方に逢ふと直ぢに涙なみが出て、何だか悲くばかりなるのが不思議だと思つてゐたら、果やっ然ぱりかう云ふ事になる讖しらせだつたんでせう。

貴方にはお気の毒だ、お気の毒だ、と始終自分が退ひけてゐるのに、悪縁だなんぞと言われると、私は体が縮るやうな心持がして、ああ、さうでもない、貴方が迷惑してゐるばかりなら未だ可いけれど、取んだ者に懸り合つた、ともしや後悔してお在いでなんぢやなからうかと思ふと、私だつて好い気持はしないもんだから、つい向者さつきはあんなに言過ぎて、私は誠に濟みませんでし

た。それはもう貴方の言ふ通り悪縁には差無いんだけれど、後生だからそんな可厭な事は考へずにもて下さい。私はこれで本望だと思つてゐる」

「生木を割いて別れるよりは、まあ愈だ」

「別れる？ 吁！ 可厭だ！ 考へても慄然とする！ 切れる

の、別れるのなんて事は、那奴が来ない前には夢にだつて見やしなかつたのを、切れる切れるぢや私もどの位内で責められたか知れやしない。さうして挙句がこんな事に成つたのも、想へば皆那奴のお蔭だ。ええ、悔い！ 私はきつと執着いても、この怨は返して遣るから、覚えてゐるが可い！」

女は身を顛せて罵るとともに、念入りて呪ふが如き血相を作せり。

不知、この恨み、罵り、呪はるる者は、何処の誰ならんよ。

「那奴も好加減な馬鹿ぢやないか！」

男は齒咬はがみしつつかしげに嗤笑ししやうせり。

「馬鹿も大馬鹿よ！ 方図の知れない馬鹿だわ。畜生！ 所歡いろ

の有る女が金で靡なびくか、靡かないか、些ちつとは考へながら遊ぶが可

い。来りや不好いやな顔を為て遣るのに、それさへ解らずに、もう慪うるさ

く附けつ廻しつして、了局しまひには人の恋中の邪魔を為やがるとは、

那奴も能よく能く能くの芸無猿げいなしざるに出来てゐるんだ。憎さも憎し、私は

もう悔くて、悔くて、狭山さん、実はね、私はこの世の置土産おきみやげ

に、那奴の額を打割ぶちわつて来たんでさね」

「ええ、どうして！」

「なあにね、貴方に別れたあの翌日あくるひから、延続のべつに来てゐやがつ

て、ちつとでも傍そばを離さないんぢやありませんか。這箇こつちは気が

つ

気ぢやないとところへ、もう悪漆膠わるしつこくて耐たまらないから、病氣だと  
 謂いつて内へ遁にげて来りや、直すぐに追懸おつかけて来て、附絡つきまとつてゐるん  
 でせう。さうすると寸法は知れてまさね、丁ちやんと渉わたりが付いてゐる  
 んだから、阿母おつかさんは傍そばから『ちやほや』して、そりや貴方、  
 真面目まじめぢや見ちやゐられないお手厚てあつき加減かへんなんだから、那奴は  
 凶に乗つて了つて、やあ、風呂を沸わかせだ事の、ビールを冷ひやせだ  
 事のと、あの狭い内へ一個ひとりで幅を為しやがつて、なかなか動いごきさ  
 うにも為なないんぢやありませんか。

私は全いけどりで生捕いけどりに成つたやうなもので、出るには出られず、這箇こつち  
 の事が有るから、さうしてゐる空そらは無し、あんな氣の揉もめた事  
 は有りはしない——本ほん当とにどうせうかと思つた。ええ、なあに、  
 あんな奴は打抛おつぽり出して措おいて、這箇こつちは搔かき巻まきを引被ひつかぶつて一心いっしんに考  
 へてゐたんですけれど、もう憤いれたくて耐たまらなくなつて来たか

ら、不如いっそかまはず飛出として了しまはうかと、余程よつほどさう念ねんつたものの、丹子たんこの事も、ねえ、考かんへて見みりや可哀かはいさうだし、あの子を始はじめめ阿母あはさんまで、私わたしばかりを頼たよりに為なてゐるものを、さぞや私の亡ない後あとには、どんなにか力ちからも落おさうし、又あの子も為なないでも好よい苦勞くるわうを為ななけりやなるまいと、そればかりに牽ひかされて、色々話わも有あるものだから、あの子の阿母あはさんにも逢あつて遣やりたし、それに、私わたしも出でるに就あいぢや、為なて置おかなけりやならない事も有あるし為なるので、到頭くつぐつ遅おくして出損でそこなつて了しまつたんです。

さうすると、どうでせう、まあ、那奴ななはその晚ゆふ二時ふたじ過すまでうで、付ついてゐて、それでも不承ふじやう々々に還かへつたのは可よい。すると翌日あくるひは半日はんじつ阿母あはさんのお談義だんぎが始はじめまつて、好加減りようけんに了しま簡かんを極ごくめろでせう。さう言いつちや濟すまないけれど、育そだてた恩おんも聞飽ききてゐるわ。それを追繰おつくりかへ返し、引繰ひつくりかへ返し、悪体あくたいまじ交まりには、散々さんざん聴きせて、了しま局ひは

口返答したと云つて足蹴あしげにする。なあに、私は足蹴あしげにされたつて、撲ぶたれたつて、それを悔いとは思やしないけれど、這箇こつちだつて貴方と云ふ者が有ると思ふから、もう一生懸命に稼かせいで、為るだけの事は丁ちゃんと為であるのに、何ぼ慾ひとにきりが無いと謂つても、自分の言条いひじょうばかり通さうとして、他ひとには些ちつとでも樂を為せない算段こきつを為る。私だつて金属かねで出来た機械こつちぢやなし、さうさう駆使こきつはれてお為にばかり成つてゐちや、這箇こつちの身が立ちはしない。

別にどうしてくれなくても、訳さへ解つてゐてくれりや、辛辛いぐらゐは私は辛抱する。所歎いろは堰せいて了ふし、旦那取だんなとりは為ると云ふ。そんな不可いやな真似まねを為なくても、立派立派に行くやうに私が稼かせいであるんぢやありませんか。それをさう云ふ無理を言つてからに、素直素直でないの、馬鹿馬鹿だのと、足蹴あしげに為るとは……何……

何事で……せう！

それぢや私も赫かつとして、もう我慢が為切れなく成つたから、物も言はずに飛出さうと為る途端に、運悪く又那奴あいつが遣つて来たんぢやありませんか。さあ、捉つかまつて了つて、其処そこの場ばつで逃にげるには逃にげられず、阿母おつかさんは得えたり賢かしこしなんでせう、一処に行け行けと聒やかましく言ふし、那奴は何でも来いと云つて放さない。私も内を出た方が都合が好いと思つたから、まあ言ふなりに成つて、例の処ひつぱへ拽ひつぱられて行つたとお思ひなさい。あの長尻ながちりだから、さあ又還らない、さうして何か所思おもほくでも有つたんでせうよ、何だか知らないけれど、その晩に限つて無闇むやみとお酒を強しひるんでさ。こつちこつち むしやくしやばら 這箇こつちも鬱勃むしやくしやばら肚で、飲めも為ないのに幾多いくちでも引受けたんだけれど、酔ひさうにも為やしない。

その内に漸々そろそろ又お極きまりの気障きざいな話を始めやがつて、這箇こつちが柳

に受けて聞いてゐて遣りや、可いかと思つて増長して、呆れたあき真似まねを為やがるから、性の付く程諤つけつけ々さう言つて遣つたら、さあ自棄やけに成つて、それから毒吐どくつき出して、やあ店番の埃被ほりかぶりだの、冷飯ひやめしくら吃くらひの雇人やとひにんがどうだのと、聞いちやゐられないやうな腹の立つ事を言やがるから、這箇こつちも思切つて随分な悪体あくたいを吐ついて遣つたわ、私は。

さうすると、了局しまひに那奴は何と言ふかと思ふと、幾許いくち七顛八倒じたばたしても金で縛しばつて置いた体だなんぞ、と利きいた風な事を言ふんぢやありませんか。だから、私はさう言つて遣つた、お気の毒だが、貴方は大方目が眩くらんで、そりやお袋を縛つたんだらうつて」

聴きゐる狭山は小気味好こきみよしとばかりに頷うなづけり。

「それで那奴あいつは全然すつかりおこ慍おこつて了つて、それからさわぎの騷擾さわぎでさ。無礼な

奴だとか何とか言つて、私は襟えりを持つて引擦りひきず仆たふされた。随分飲んでゐたから、やつぱり酔つてゐたんでせう。その時はもう全まるで夢中で、唯ただ那奴の憎らしいのが胸一杯に込上げて、這畜生こんちくしょうと思ふと、突いきなり如其処そこに在つたお皿を那奴の横面よこつづらへ叩付たたきつけて遣つた。丁度それが眉間みけんへ打着ぶつかつて血が淋漓だらだら流れて、顔が半分真赤に成つて了つた。これは居ちや面倒だと思つたから、家中大騒を遣つてゐる隙すきを見て、窃そつと飛出した事は飛出したけれど、別に往所ゆきどころも無いから、丹子の阿母おつかさんの処かへ駈込かけこんだの。

ところが、好かつた事には、今旅から帰つたと云ふところなきしやんで、時間を見ると、十時余程廻よつほどつてゐるんでせう。瀟車きしやはもう出ず、気ばかりは急せくけれど、若箇道間どつちみちに合ふんぢやなし、それに話は有るし為るもんだから、一晚厄介ちつに成る事にして、髪かみなんぞを結んでもらひながら、些ちつと訳が有つて、貴方と一処

に当分身を隠すのだと云ふやうに話を為てね、それから丹子の事も悉く言置いて遣りましたら——善い人ね、あの阿母さんは——おいおい泣出して、自分の子の事はふつつりとも言はずに、唯私の身ばかりを案じて、ああのかうのと色々言つてくれたその実意と云つたら……噫、同じ人間でありながら、内の阿母さんは、実に、あなた、鬼ですわ！ 私もあの子の阿母さんのやうな実の親が有つたらば、こんな苦勞は為やしまいし、又貴方のやうな方の有るのを、さぞかし力に念つて、喜びも為やうし、大事にも為る事だらうと思つたら、もうもう悲くなつて、悲くなつて、如何に何でも余り情無く、私はどんなに泣きましたらう。

それに、私をばあんなに頼に為てゐた阿母さんの事だから、当分でも田舎へ行つて了ふと云ふのを、それは心細がつて、力を

落したの何のと云つたら、私も別れるのが気の毒に成るくらゐで、先へ落付いたら、どうぞ一番に住所ところを知せてくれ、初中終旅しよつちゆうを出行でいてゐる体だから、直に御機嫌伺ごきげんうかがひに出ると、その事をあんなに懇々くれぐれも頼んでみましたから、後で聞いたら、さぞ吃驚びっくりして……きつと疾わづらひでも為るでせうよ。考へて見りや、丹子も可愛かほいし、あの阿母いとしさんも怜いし。吁あゝ、吁あゝ！」

すすりなき  
獻けん歎たんして彼は悶もたえつ。

「さう云ふ訳ぢや、猶更内なほさらぢや大騒おほさわらをして捜してゐる事だらう」

「大變でせうよ」

「それだと余あんまり遅々ぐづぐづしちやゐられないのだ」

「どうで、狭山さん、先は知れてゐ……」

「さうだ」

「だからねえ、もう早い方が可いござんすよ」

女は咽むせびて其そ処こに泣伏なみしぬ。狭山は涙を連しば睹たきて、

「お静、おい、お静や」

「あ……あ。狭山さん！」

憐あはれむべし、情じ極ようりて彼等あひの相擁ようするは、畢ひ竟つ尽ききせぬ哀な歎げを  
抱いだくが如ごとき者ものならんをや。

(三) の二

両ふ箇たりは此方こにかつ泣なきかつ語かたれる間、彼方あの一な箇たりは徒然つの柱はしら  
に倚よりて、やうやう傾かたく日影ひかげに照あされるたり。

その待人の如何いなる者ものなるかを見て、疑うは決かすべしと為なせし  
貫ぬ一いつも、かの伴ばんひ還かへりし女おんなを見るに迫おびて、その疑うはいよいよ  
錯さく雑ざつして、しかも新あなる怪訝あやしの添しみはるのみなり。

如何いかなればや、女の顔色も甚はなはだ勝すぐれず、その点の男といと善く似たるは、同じ憂を分つにあらざる無からんや。我聞く、犯罪の底には必ず女有りと、若もし信まことなりとせば、彼は正まさしく彼女ゆゑに如何いかなる罪をも犯せるならんよ。その罪の故ゆゑに男は苦み、その苦の故に女は憂ふると為せば、彼等は誠まことに相愛あひあいするの堅き者ならず哉や。

知らず、彼等は何なにの故に相率あひひきあてこの人目稀まれなる山中やまなかには来きたれる。その罪を追のがれんが為か、その苦と憂とを忘れんが為か、或あるひはその愛を全あきらかせんが為か、明あきらかに彼等は夫婦ならず、又は、女の芸者風なるも、決して尋常かくれあそびの隠遊おのづにあらずして、自おのづから穂あたらは露あたらはるところ有り。さては何等なならの密会ひそかにあはならん。

貫一は彼を以もて女を偷ぬすみて奔はしる者ならずや、と先推まづすいしつつ、尚なほ如何いかにやなど、飽あかず疑うたがへる間より、忽たちまち一片の反映さかは閃きらめ

きて、朧おぼろにも彼の胸くらの黯くろきを照せり。

彼はこの際熱海の旧夢を憶おもはざるを得ざりしなり。

世上貫一ほかの外ほかに愛する者無かりし宮は、その貫一と奔るを諾うべなはずして、僅わづかに一瞥べつの富の前に、百年の契を蹂躪ふみにじりて吝をしまざりき。噫ああ我が当時の恨、彼が今日こんにちの悔！ 今彼女は日夜に栄てらの銜てらひ、利の誘いざなふ間に立ち、守るに難き節を全うして、世の容いれざる愛したがに随つて奔らんと為るか。

爾思しかおもへる後の彼は、陰ひそかにかの両個ふたりの先に疑ひし如いまはしき可忌いき罪人こひねがならで、潔く愛の為に奔る者たらんを、禱いのるばかりに冀こひねがへり。若しきもあらば、彼は具こぶちに彼等の苦き身の上と切なる志とを聴かんと念おもひぬ。

心永きずつく痠きずつきて恋に敗れたる貫一は、殊更ことさらに他の成敗に就いて観みるを欲せるなり。彼は己おのれの不幸の幾許不幸に、人の幸さちの幾許

幸ならんかを想ひて、又己の失敗の幾許無残に、人の成効の幾許十分ならんかを想ひて、又己の契の幾許薄く、人の縁えにしの幾許深からんかを想ひて、又己の受けし愛の幾許浅く、人の交かはせる情なさけの幾許篤からんかを想ひて、又己の恋の障碍さまたげの幾許強く、人の容れられぬ世の幾許狭からんかを想ひて。嗟呼ああ、既に己の恋は敗れに破れたり。知るべからざる人の恋の末終つひに如何いかならんかを想ひて。

昼間の程は昴つとめて籠こもりゐしかの両個ふたりの、夜に入りて後打連うちつれて入浴せるを伺ひ知りし貫一は、例の益ますます人目を避さくるならんよと念おもへり。

還きり来て多時酒しばらくなど酌交くみかはす様子なりしが、高声一つ立つるにもあらで、唯障子を照す燈ともしのみいと瞭さやかに、内の寂しさは露をも置きけんやうにて、さてはかの吹絶えぬ松風に、彼等は竟つひに醉ゑひ

を成さざるならんと覺ゆばかりなりき。

為す事なもあらねば、貫一は疾く臥内ふしどに入りけるが、僅わづかに眠まじろむと為れば直ちきに、寤さめて、そのままに睡ねむりは失うするとともに、様々の事思ひるたり。

夜の静なるを動かして、かの男女なんによの細語ひそめきは洩もれ来きぬ。甚はなはだ么微かすかなれば聞知るべくもあらねど、媿びび々として絶えず枕まくらに打響うたきては、なかなか大いなる声にも増して耳煩みみわづらはしかり。

さなきだに寢難いねがたかりし貫一は、益ますますす氣の澄み、心の亘さえ行くに任せて、又徒いたづらにとやかくと、彼等かのうへの身上おしはかを推測おしはかり推測おしはかり思回おもひめぐらすの外はあらず。彼方あなたもその么微かすかなる声に語り語りて休やまざるは、思の丈たけの短夜たんやに余らんとするなるか。

乍たちまち有りて、迸ほとぼしれるやうにその声はつと高く揚あげり。貫一は愕然がくぜんとして枕そばだを欹そぼだてつ。女にわかは遽なきいだに泣出なせるなり。

その時男の声音は全く聞えずして、唯ひとり女の縦まに泣音を洩すのみなる。寤めたる貫一は弥が上に寤めて、自ら故を知らざる胸を轟せり。

少焉泣きたりし女の声は漸く鎮りて、又湿り勝にも語り初めしが、一たび情の為に激せし声音は、自から始よりは高く響けり。されどなほその言ふところは聞知り難くて、男の声は却りて前よりも仄なり。

貫一は咳きも遣らで耳を澄せり。

或は時に断ゆれども、又続き、又続き、彼等の物語は蚕の糸を吐きて倦まざらんやうに、限も知らず長く亘りぬ。げにこの積る話を聞きも聞せもせんが為に、彼等はここに来つるにやあらん。されども、日は明日も明後日も有るを、甚だ忙くも語るもの哉。さばかり間遠なりし逢瀬なるか、言はでは裂けぬる

胸の内か、かく有らではあきた嫌らぬ恋中か、など思ふに就けて、彼はさすがに我身のこんじやく今昔に感無き能はず、枕を引入れ、夜着よぎひきかつ引被ひかぎて、寐ねがへ返りたり。

何時いつ罷やみしとも覚えで、彼等の寐物語は漸く絶えぬ。

貫一も遂に短き夢を結びて、常よりは蚤はやかりけれど、目覚めしままに起出おきいでし朝冷あさびえを、走り行きて推啓おしあけつる湯殿の内に、人は在らじと想ひし眼まなこを驚おどろかして、かの男女なんによは浴ゆあみしるたり。  
貫一ははたと閉とぎして急ぎ返りつ。

#### 第四章

両ふたり箇がたはやや熱かりしその日も垂籠たれこめて夕ゆふべに抵いたりぬ。むづかしげに暮山ぼさんを繞めぐりし雲は、果して雨と成りて、冷々ひやひやと密下そぼふるほど

に、宵の燈火も影更けて、壁に映ふ物の形皆寂く、愁ひに起きて在るべき夜頃ならず。さては貫一も枕に就きたり。

ラムプを細めたる彼等の座敷も甚だ静に、宿の者さへ寐急ぎて後十一時は鳴りぬ。

凄き谷川の響に紛れつつ、小歇もせざる雨の音の中に、かの病懨れたるやうの柱時計は、息も絶氣に半夜を告げわたる時、両箇が闇の燈は乍ち明かに耀けるなり。

彼等は俱に起出でて火鉢の前に在り。

「膳を持つて来ないか」

「ええ」

女は么微なる声して答へけれど、打萎れて、なかなか立ちも遣らず。

遣らず。

「狭山さん、私は何だか貴方に言残した事が未だ有るやうな心

持がして……」

「ああ、もうかう成つちやお互に何も言はないが可い。言へばやつぱり未練が出る」

彼は熟じと内うち向むきて、目を閉ぢたり。

「貴方、その指環を私のと取替とりかへ事ことして下さいね」

「さうか」

おのおの

各その手に在るを抜きて、男は実印用のを女の指に、女はダイヤモンド入のを男の指に、さ擲をしはりてもなほ離れかねつつ、物は得言はでゐたり。

颯さと鳴りて雨は一時ひとしきり繁しげく灑そぎそ来きたれり。

「ああ、大相降つて来た」

「貴方は不断から雨が所好すだつたから、きつとそれで……いとま暇……  
乞ごひに降つて来たんですよ」

「好い折だ。あの雨を肴さかなに……お静、もう覚悟を為ろよ！」

「あ……あい。狭山さん、それぢや私も……覚……悟したわ」  
「酒を持つて来な」

「あい」

お静も今は心を励して、宵の程詔あつらへ置きし酒肴しゅこうの床間とこのまに上げたるもてぎを持来て、両箇ふたりが中に膳ぜんを据れば、男は手早く爛かんして、その間に各服ま おのおのを更あらたむる忙せはしさは、忽たちまち衣きぬの擦すり、帯の鳴る音高さやさやくも粹さやさや※と乱れ合ひて、転うたた雨濃こまやかなる深夜おどろを驚かせり。

「ええ、もう好すかない！」

帯おびし緊おびしめながら女はその端はしを振りて身悶みもだえせるなり。

「どうしたのだ」

「なあにね、帯がこんなに結むすばつて了つて」

「帯が結ばつた？」

「ああ！ あなた釈といて下さい、よう」

「何か吉いい事が有あるのだ」

「私はもしも遣やり損そこつて、耻はぢでも曝さらすやうな事が有あつちやと、そ

れが苦勞くろうに成なつて耐たまらなかつたんだから、これでもう可いいわ」

「それは大丈夫だから安心するが可いい。けれど、もしもだ、お

静しず、そんな事は無いとは念ねんふけれど、運うん悪あくく遅おそれたら、俺おれはき

つと後あとから往いくから——どんなにしても往いくから、恨うらまずに待

つてゐてくれ。よ、可い……可いか」

つと俯ふしたるお静しずは、男おとこの膝ひざを咬かみて泣なきぬ。

「その代かり、偶ひょとしてお前まへが後あとになるやうだつたら、俺おれは死しん

でも……魂たまはおまへの陰かげ身みを離はなれないから、必かならずず心こころ変がを……す、

するなよ、お静しず」

「そんな事を言はないで、一処に……連れて……往つて……下さいよ」

「一処に往くとも！」

「一処に！ 一処に往きますよ！」

「さあ、それぢやこ、この世の……別に一盃飲むのだ。もう泣くな、お静」

「泣、泣かない」

「さあ、那裏あすこへ行つて飲まう」

男は先づ起ちて、女の手を把とれば、女はその手に縋すがりつつ、泣く泣く火鉢の傍そばに座を移しても、なほ離難はなれがたなに寄添ひゐたり。

「猪口ちよくでなしに、その湯呑ゆのみに為やう」

「さう。ぢや半分づつ」

熱爛あつがんの酒は烈々れつれつと薰くんじて、お静が顫ふるふ手元より狭山が顫ふ湯

呑に注がれぬ。

女の最も悲かりしは、げにこの刹那せつなの思なり。彼は人の為に酒を佐るたすくに爛ならひし手も、などや今宵の恋の命も、儂はかなき夢か、うたかたの水盃みづさかづきのみづからに、酌取らんとは想の外の外なりしを、唄うたにも似たる身の上哉かなと、漫そぞろに逼る胸の内、何に譬たとへん方かたもあらず。

男は爛の過ぎたるに口を着けかねて、少時しばし手にせるままに眺ながめれば、よし今は憂くも苦くも、久ひさしく住慣れしこの世を去りて、永く返らざらんとする身には、僅わずかに一盃いつぱいの酒に対するも、又哀別離苦あいべつりくの感無き能はざるなり。

念おもへ、彼等おともの逢初あひそめし夕ゆふべ、互たがひに意有こころりて銜ぶくみしもこの酒ならずや。更に両個ふたりの影に伴ひて、人の情なさけの必こまやかず濃なれば、必かうばしず芳かうばしかりしもこの酒ならずや。その恋中の楽たのしみを添みとせへて、三歳うさの憂うさを

霽せしもこの酒ならずや。彼はその酒を取りて、吉き事積りし後の凶の凶なる今夜の末期に酬ゆるの、可哀に余り、可悲きに過るを觀じては、口にこそ言はざりけれど、玉成す涙は点々と散りて零れぬ。

「おまへの酌で飲むのも……今夜きりだ」

「狭山さん、私はこんなに苦勞を為て置きながら、到頭一日でも……貴方と一処に成れずに、芸者風情で死んで了ふのが……悔い、私は！」

聞くも苦しと、男は一息に湯呑の半を呷りて、

「さあ、お静」

女は何気無く受けながら、思へば、別の盃かと、手に取るかに胸潰れて、

「狭山さん、私は今更お札を言ふと云ふのも、異なる者だけれど、

貴方は長い月日の間、私のやうなこんな不束者ふつつかものの我儘者わがままものを、能くも愛相あいそを尽かさずに、深切に、世話をして下さつた。

私は今まで口には出さなかつたけれど、心の内ぢや、狭山さん、嬉しいなんぞと謂ふのは通り越して、実に難有ありがたいと思つてゐました。その御礼を為たいにも、知つてゐる通の阿母おつかさんが在るばかりに唯さう思ふばかりで、どうと云ふ事も出来ず、本當ほんとうに可恥はづかしいほど行届かないだらけで、これぢや余り濟まないから、一日も早く所帯でも持つやうに成つて、さうしたら一度にこの恩返しを為ませうと、私は、そればかりを樂たのしみに、出来ない辛抱も為てゐただけけれど、もう、今と成つちや何もかも水……水……水……水の……泡。

こころやすだて

つい心易立から、浸々しみじみお礼も言はずにゐたけれど、狭山さん、

私の心は、さうだつたの。もうこれぎりで、貴方も……私も……

土に成つて了へば、又とお目には掛れ、ないんだから、せめては、今改めて、狭山さん、私はお礼を申します」

男は身をも搾しぼらるるばかりに慄こらへかねたる涙を出いせり。

「もうそ、そ、そんな事……言つて……くれるな！ 冥路よみぢの障さはり

だ。両箇ふたりが一処いっしょに死なれりや、それで不足は無いとして、外ほかの事なんぞは念はずに、お静、お互たがひに喜んで死なうよ」

「私は喜んでゐますとも、嬉しいんですとも。嬉うれくなくてどうしませう。このお酒も、祝いわつて私は飲のみます」

涙諸共飲干もろともして、

「あなた、一つお酌しやくして下さいな」

注つげば又呷あふりて、その余せるを男に差せば、受けて納めて、手てを把とりて、顔見合せて、抱緊だきしめて、惜めばいよいよ尽せぬ名残なごりを、いかにせばやと思惑おもひまちへる互の心は、唯それなりに息も絶え

よと祈る可かめり。

男は抱ける女の耳のあたかも唇くちびるに触るる時、現うつともなく声誘はれて、

「お静、覚悟は可いか」

「可いわ、狭山さん」

「可けりや……」

「不如いっそもう早く」

狭山は直ちぎに枕の下なる袱紗包ふくさづつみの紙入かみいれを取上げて、内より出せいだる一包いっぽうの粉劑こそ、正まさに両個ふたりが絶命やいばの刃かに易かふる者なりけれ。

女は二つの茶碗ちやわんを置並ぶれば、玉の如き真白の粉末は封ひらを披ひらきて、男の手よりその内に頒わかたれぬ。

「さあ、その酒を取つてくれ。お前まへのには俺が酌しやくをするから、俺のにはお前まへが」

「ああ可うござんす」

雨はこの時漸く霽はれて、軒の玉水絶々たえだえに、怪禽鳴過かいきんなきすぐる者両三声さんせいにして、跡松風の音颯々さつさつたり。

狭山はやがて銚子ちやうしを取りて、一箇ひとつの茶碗に酒を澆そそげば、お静は目を閉ぢ、合掌して、聞えぬほどの忍音しのびねに、

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

代りて酌する彼の想は、吾手男わがてむなもとの胸元に刺違さしちがふる鎧きつさきを押当おしあつ

るにも似たる苦しさに、自おのづから洩出もれいづる声も打震うひて、

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無……阿弥陀……南無阿弥陀……」

陀……仏、南無……」

と両個ふたりは心も消入らんとする時、俄にはかに屋鳴震動やなりしんどうして、百雷一処おに墮おちたる響おに、男は顛たふれ、女は叫おびて、前後不覚うつつの夢か現うつつの人影は、乍たちまち顛あらはれて燈火ともしびの前に在り。

「貴方あなた方は、怪からん事を！ 可けませんぞ」

男は漸く我かへに復りて、惧おぢ愕おじろける目を瞪みひらき、

「ああ！ 貴方あなたは」

「お見覚みおぼえありません、あれに居とまりきやくる泊客とまりきやくです。無断にお座敷へ入つ

て参りまして、甚はなはだ失礼ぢや御座いますけれど、実に危い所！

貴下方きげんはどうなすつたのですか」

悄然しょうぜんとして面おもてを挙げざる男、その陰に半ば身を潜めたる女、

貫一ふたりは両個の姿を眊みまはしつつ、彼の答を待てり。

「勿論もちろんこれには深い事情がお有んなさるのでせう。ですから込入こみい

つたお話は承うけたまはらんでも宜よろしい、但何故ただなにゆゑに貴下方は活いきてをられ

んですか、それだけお聞せ下さい」

「……………」

「お二人が添そふに添れん、と云ふやうな事なのですか」

男は甚だ微に頷きつ。

「さやうですか。さうしてその添れんと云ふのは、何故に添れ  
 んのです」

彼は又黙せり。

「その次第を伺つて、私の力で及ぶ事でありましたら、随分御相  
 談合手にも成らうかと、実は考へるので。然し、お話の上で到  
 底私如きの力には及ばず、成程生きてをられんのは御尤だ、他  
 人の私でさへ外に道は無い、と考へられるやうなそれが事情で  
 ありましたら、私は決してお止め申さん。ここに居て、立派に  
 死なれるのを拝見もすれば、介錯もして上げます。

私もこの間に入つた以上は、空く手を退く訳には行か  
 ないので。貴下方を拯ふ事が出来るか、出来んか、那一箇です。幸に  
 拯ふ事が出来たら、私は命の親。又出来なかつたら、貴下方は

この世に亡ない人。この世に亡ない人なら、如何いかなる秘密をここで打明けたところが、一向差支無さしつかへなからうと私は思ふ。若もし命の親とすればです、猶更なおさらその者に裏つみ隠す事は無いぢやありませんか。私は何も洒落しやれに貴下方のお話を聴かうと云ふのぢやありません、可うございますか、顯然ちやんと聴くだけの覚悟を持つて聴くのです。さあ、お話し下さい！」

## 第五章

貫一は氣を嚴肅おごそかにして逼せまれるなり。さては男も是非無なげに声出いすべき力も有らぬ口を開きて、

「はい御深切に……難有ありがたう存じます……」

「さあ、お話し下さい」

「はい」

「今更お裏つづみなさる必要は無からう、と私は思ふ。いや、つい私は申上げんでをつたが、東京の麴町こうじまちの者で、間貫まぎま一と申して、弁護士です。かう云ふ場合にお目に掛るのは、好々よくよくこれは深い御縁なのであらうと考へるのですから、決して貴下方ふための不為ふために成るやうには取計ひません。私も出来る事なら、人間ふたり兩個の命を拯すくふのですから、どうにでもお助け申して、一生の手柄てに為て見たい。私はこれ程までに申すのです」

「はい、段々御深切に、難有う存じます」

「それぢや、お話し下さるか」

「はい、お聴に入れますで御座います」

「それは忝かたじけない」

彼は始めて心安う座を取れば、恐るおそ惶るおそ狭山まは先まづその姿を

ぬすみみ  
 偷見て、

「何からお話し申して宜よろいやら……」

「いや、その、何ですな、貴下方は添おつしやふに添れんから死ぬと有仰おつしやる——！ 何な為ぜ添れんのですか」

「はい、実は私は、恥を申しませんけれども解りませんが、主人の金を大分遣つかひ込みましたので御座います」

「はあ、御主人持もちですか」

「さやうで御座います。私は南伝馬町みなみてんまちようの幸菱こうびしと申します紙問屋

の支配人を致してをりまして、狭山元輔さやまもとすけと申します。又これ

は新橋に勤を致してをります者で、柏屋かしわやの愛子と申します」

名宣なられし女は、消えも遣やらでゐたりし人陰くらの闇くらきより僅わづかに

躡にり出でて、面伏おもぶかせにも貫一が前に会釈かいせきしつ。

「はあ、成程」

「然るところ、昨今これに身請みうけの客が附きました」

「ああ、身請の？ 成程」

「否でもその方へ参らんければ成りませんやうな次第。又私はその引負ひきおひの為に、主人から告訴致しまして、活いきてをりますれば、その筋の手に掛りますので、如何いかにとも致方いたしかたが御座いませぬゆゑ、無分別むふんべつとは知りつつも、つい突迫つきつめまして、面目次第も御座いません」

彼等はその無分別を慙はぢたりとよりは、この死失しにぞこなひし見苦しさを、天にも地にも曝さらしかねて、俯ふしも仰あぎも得うざる項うなじを竦すくめ、尚なほも為ならん方無なさの目を閉ぢたり。

「ははあ。さうするとここに金さへ有れば、どうにか成るのでせう！ 貴方つかひこみの費消つかひこみだつて、その金額を弁償よろしして、宜よろしく御主人に詫わびたら、無論内済うちずみに成る事です。婦人の方は、先方で請出

すと云ふのなら、此方こつちでも請出すまでの事。さうして、貴方の引負ひきおひは若干いくらばかりの額たかに成るのですか」

「三千円ほど」

「三千円。それから身請の金は？」

狭山は女を顧みて、二言ふたこと三言みこと小声こゑに語合かたひたりしが、

「何やかやで八百円ぐらゐは要いりますので」

「三千八百円、それだけ有つたら、貴下方は死なずに済むのですな」

打算さんし来きたれば、真に彼等の命こそ、一人前一千九百円に過ぎざるなれ。

「それぢや死ぬのはつまらんですよ！ 三千や四千の金なら、随分そこらころがに滾ころがつてゐやうと私は思ふ。就いては何とか御心配して上げたいと考へるのですが、先づとにかく貴下方の身の上を

ひとつくはし  
一番悉くお話し下さらんか」

かかる際きはには如何いばかり嬉こき人の言ことばならんよ。彼はその偽いつはりと真まことを思おもふに違いとまあらずして、遣つかる方も無なき憂う身の憂うきを、冀こひねがはくば跡あとも留とどめず語かたりて竭つくさんと、弱よりし心は雨の柳の、漸しく風かぜに揺ゆれたる勇いさみを作なして、

「はい、ついに一面識いも御座ごいません私共わたくしども、殊ことに痴情ちじやうの果はに箇か様ような不始末ぶしまつを為なしました、何なにともはや申しやうも無ない爛死蛇やくざものに、段々だんだんと御深切ごこころづかひのお心遣こころづかひ、却かえつて恥は入りまして、実まに面目次第めんもくしだいも御座ごいません。

折角おこころばの御言ごことばで御座ごいますから、思召おぼしめしに甘あまえまして、一通りお話わ致いたしますで御座ごいますが、何なにから何なにまで皆恥はで、人様ひとさまの前まへではほとほと申ま上げ兼ねかねますので御座ごいます。

実は、只今申ま上げました三千円つかひこみの費消つかひこみと申ましますのは、究竟つまり

遊蕩あそびを致いたしました為ために、店の金に手を着けましたところ、始の内  
 はどうなり融通も利ききましたので、それが病付やみつぎに成つて、段々  
 と無理を致いたしまして、長い間に憎々うかうか穴を開けましたのが、積り  
 積つて大分だいぶんに成りましたので御座います。

然しかるところ、もう八方塞ふさがつて遣繰やりくりは付きませず、いよいよ主  
 人には知れますので、苦紛くるしまぎれに相場に手を出したのが怪我けがの元  
 で、ちよろりと取られますと、さあそれだけ穴が大きく成りま  
 したものですから、愈いよいよよ為方御座いません、今度はどうか、今  
 度はどうかで、もうさう成つては私も死物狂しものぐるひで、無理の中から  
 無理を致いたして、続くだけ遣りましたところが、到頭逐倒おひたふされて  
 了しまして、三千円と申上げました費消つかひこみも、半分以上はそれに  
 注込みつこみましたので御座います。

然し、これだけの事で御座いませすれば、主人も従来これまでの勤勞つとめに

免じて、又どうにも勘弁は致してくれましたので御座います。現にこの一条が発覚致しまして、主人の前に呼付けられました節も、この度の事は格別を以つて赦し難いところも赦して遣ると、箇様に申してはくれましたので」

「成程?!」

「と申すのには、少し又仔細が御座いますので。それは、主人の家内の姪に当ります者が、内に引取つて御座いまして、これを私に妻せやうと云ふ意衷で、前々からその話は有りましたので御座いますが、どうも私は気が向きませんもので、何と就かずに段々言延して御座いましたのを、決然どうかと云ふ手詰の談に相成りましたので。究竟、費消は赦して遣るから、その者を家内に持て、と箇様に主人は申すので御座います」

「大きに」

「其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>には又<sup>いろいろ</sup>千百事情が御座いまして、私の身に致しますと、その縁談は実に辞<sup>ことわ</sup>るにも辞<sup>わがまま</sup>りかねる義理に成つてをりますので、それを不承知などと吾儘を申しては、なかなか済む訳の者ではないので御座います」

「ああ、さうなのですか」

「そこへ持つて参つて、此<sup>こんど</sup>度の不都合で御座います、それさへ大目に見てくれやうと云ふので御座いますから、全<sup>まる</sup>で仇<sup>かたき</sup>をば恩で返してくれまますやうな、申<sup>まをしふん</sup>分の無<sup>はからひ</sup>い主人の所計。それを乖<sup>もど</sup>きま<sup>ぼち</sup>しては、私は罰<sup>あた</sup>が中<sup>あ</sup>りますので御座います。さうとは存<sup>ぞん</sup>じながら、やつぱり私の手前勝手で、如何<sup>いか</sup>にともその氣に成れませんで、已<sup>や</sup>むを得<sup>え</sup>ず縁談の事は拒絶<sup>ことわり</sup>を申しましたので御座います」

「うむ、成程」

「それが為に主人は非常な立腹で、さう吾儘<sup>わがまま</sup>を言ふのなら、費消<sup>つかひこみ</sup>

を償へ、それが出来ずば告訴する。さうしては貴様の体に一生の疵きずが附く事だから、思反おもひかへして主人の指図さしずに従へと、中に人まで入れて、未だ未だ申してくれましたのを、何処どこまでも私は剛情を張通して了つたので御座います」

「ああ吁！ それは貴方が悪いな」

「はい、もう私の善いところは一つでも有るのぢや御座いません。その事に就きまして、主人に書置かきおきも致しましたやうな次第で、既に覚悟を極めきはました際きはまで、心懸こころがかりと申すのは、唯そればかりなので御座いました。

で又その最中にこれの方の身請騒みうけさわぎが起りましたので」

「成程！」

「これの母親と申すのは養母で御座いまして、私も毎々話を聞いてをりますが、随分それは非道な強慾な者で御座います。ま

あ悉くくはし申上げれば、長いお話も御座いますが、これも娘と申すのは名のみで、年季で置いた抱かかへも同様の取扱とりあつかひを致して、為て遣る事は為ないのが徳、稼かせげるだけ稼がせないのは損だと云つたやうな了簡りようけんで、長い間無理な勤を為させまして、散々に搾しぼり取つたので御座います。

で、私の有る事も知つてはをりましたが、近頃私が追々廻らなく成つて参つたところから、さあ聒やかましく言出しまして、毎日のやうに切れる切れるで責め抜いてをります際に、今の身請の客が附いたので御座います。丁度去年の正月頃から来出した客で、下谷したやに富山銀行といふのが御座います、あれの取締役で」

「え!? 何……何……何ですか!」

「御承知で御座いますか、あの富山唯繼ただつぐと云ふ……」

「富山? 唯繼!」

その面色、その声音！ 彼は言下に鼓怒して、その名に躍り  
 被らんとする勢を示せば、愛子は駭き、狭山は懼れて、何事と  
 も知らず狼狽へたり。貫一は轟く胸を推鎮めても、なほ眼色の  
 燃ゆるが如きを、両個が顔に忙く注ぎて、

「その富山唯継が身請の客ですか」

「はい、さやうで御座いますが、貴方は御存じでらつしやい  
 ますので？」

「知つてゐます！ 好く……知つてゐます！」

狭山の打惑ふ傍に、女は密に驚く声を放てり。

「那奴が身請の？」

問はるる愛子は、会釈して、

「はい、さやうなんで御座います」

「で、貴方は彼に退かされるのを嫌つたのですな」

「はい」

「さうすると、去年の始から貴方はあれの世話に成つてをつたのですか」

「私はあんな人の世話なんぞには成りは致しません！」

「はあ？ さうですか。世話に成つてゐたのぢやないのですか」  
「いいえ、貴方。唯お座敷で始終呼れますばかりで」

「ああ、さうですか！ それぢや旦那だんなに取つてをつたと云ふ訳ぢやないのですか」

女は聞くも穢けがらしと、さすが謂ふには謂れぬ尻目しりめづかひ遣して、

「私には、さう云ふ事が出来ませんので、今までついにお客なまるつきりんぞを取つた事は、全然無いんで御座います」

「ああ、さうですか！ うむ、成程……成程な……解りました、  
好く解りました」

狭山は俯きゐたり。

「それではかう云ふのですな、貴方は勤を為てをつても、外の客には出ずに、この人一個を守つて——さうですね」

「さやうです」

「さうして、余所の身請を辞つて——富山唯繼を振つたのだ！ さうですな」

「はい」

倏忽に瞳を凝せる貫一は、愛子の面を熟視して止まざりしが、やがてその眼の中に浮びて、輝くと見れば霑ひて出づるものあり。

「嗚呼……感心しました！ 実に立派な者です！ 貴方は命を

捨てても……この人と……添ひたいのですか！」

何の故とも分かず彼の男泣に泣くを見て、両個は空く呆るる

のみ。

貫一が涙なるか。彼はこの色を売るの一匹婦も、知らず誰かたれ爾なんぢに教へて、死に抵いたるまで尚なほこの頼より難がたき義がたに頼より、守かたり難がたき節を守りて、終つひに奪つひはれざる者あるに泣けるなり。

其の泣く所以ゆゑんなるか。彼はこの人の世に、さばかり清く新しく、崇たふとく優うくも、高うく麗はしくも、又または、完まくも大いなる者在るを信ぜざらんと為るばかりに、一度は目ひとたび前ま睹あたりるを得て、その倒懸うきくさの苦を寛ゆるうせん、と心や熱やくが如く望まみたりしを、今却りて浮萍うきくさの底に沈める泥中の光に値あへる卒爾そつじの歎よろこび極きはまれればなり。

「勿論さう無けりや成らん事！それが女の道と謂ふもので、さう有るべきです、さう有るべき事です。今日こんにちのこの軽薄極きはまつた世の中に、とてもそんな心掛のある人間は、私は決して在るものではないと念つてをつた。で、もし在つたらば、どのくらゐ

嬉からうと、さう念つてをつたのです。私は実に嬉しい！ 今夜のやうに感じた事は有りません。私はこの通泣いてゐる——涙が出るほど嬉しいのです。私は人事ひとこととは思はん、人事とは思はん訳が有るので、別して深く感じたのです」

かく言ひて、貫一は忙々いそがはし鼻洟打擤みつ。

「ふむ、それで富山はどうしました」

「来る度たびに何のかのと申しますのを、体てい好く辞ことわるんで御座いますけれど、もううらさ愨さく来きちや、一頻ひとつきりなんぞは毎日揚詰あげづめに為れるんで、私はふつつつ不い好やなんで御座います。それに、あの人があるれで大の男自慢で、さうして独ひとりで利巧ぶつて、可おつそつし恐おそい意い気きがりで、二言目ふたことめには金々と、金の事さへ言へば人は難有ありがたがるものかと思つて、俺おもがかうと思おもや千円出すとか、ここへ一万円積んだ

らどうするとか、始終そんな有餘るやうな事ばかり言ふのが癖だもんですから、衆みんなが『御威光』と云ふ仇名あだなを附けて了つて、何処へ行つたつて気障きざぎがられてゐる事は、そりや太甚ひどいんで御座います」

「ああ、さうですか」

「そんな風なんですから、体好く辞つたくらゐぢや、なかなか感じは為ませんので、可いけもしない事を不相変執煩あひかはらずしつくとく、何だかだ言つてをりましたけれど、這箇こつちも剛情で思ふやうに行かないもんですから、了局しまひには手を易かへて、内のお袋ちかだんへ親談をして、内々話は出来たんで御座んせう。どうもそんなやうな様子で、お袋は全で氣違のやうに成つて、さあ、私を責めて責めて、もう箸はしの上下あげおろしには言れますし、狭山と切れろ切れろの聒やかましく成りましたのも、それからなので、私は辛つらさは辛つらし、熟つくづくこんな家業は為る

者ぢやないと、何も解らずに面白可笑く暮してゐた夢も全く覚めて、考へれば考へるほど、自分の身が余りつまらなくて、もうどうしたら可いんだらう、と鬱ぎ切つてゐる矢先へ、今度は身請と来たんで御座います」

「うむ、身請——けれども、貴方を別にどう為たと云ふ事も無くて、直に身請と云ふのですか」

「さうなので」

「変な奴な！ さう云ふ身請の為方が、然し、有りますか」

「まあ御座いませんです」

「さうでせう。それで、身請をして他へ困つて置かうとでも云ふのですか」

「はい、これまで色々な事を申しても、私が聴きませんもんで、末始終気楽に暮せるやうにして遣つたら、言分は無からうと云

つたやうな訳で、まあ身請と出て来たんで。何ですか、今の妻君は、あれはどうだから、かう為るとか、ああ為るとか、好いやうな嬉うれしがらせを言つちやをりましたけれど」

眉まゆを昂あげたる貫一、なぞ彼の心の裏うちに震ふものあらざらんや。

「妻君に就いてどう云ふ話が有るのですか」

「何んですか知りませんが、あの人の言ふんでは、その妻君は、始終寐てゐるも同様の病人で、小供は無し、用には立たず、有つても無いも同然だから、その内に隠居でもさせて、私を内へ入れてやるからと、まあさう云つたやうな口氣くちがひなんで御座います」

「さうして、それは事実なのですか、妻君を隠居させるなどと云ふのは」

「随分ちやらつぽこを言ふ人なんですから、なかなか信あてにはなりは致しませんが、妻君の病身の事や、そんなこんなで余あんなまり内

の面白くないのは、どうも全くさうらしいんで御座んす」

「ははあ」

彼は遽にはかに何をや打案うちあんずらん、夢むる如き目を放ちて、

「折合せあひが悪いですか！……病身びんみですか！……隠居いんきょをさせるので  
すか！……ああ……さうですか！」

宮の悔、宮の恨、宮の歎なげき、宮の悲かなしみ、宮の苦くるしみ、宮の愁うれひ、宮が心の

疾やまひ、宮が身の不幸あま、噫あゝ、竟つひにこれ宮が一生の惨禍さんか！ 彼の思は

今將はたこの憐あはれむに堪へたる宮が薄命はくめいの影を追ひて移るなりき。

貫一はかの生ける宮よりも、この死なんと為る女の幾許いかばかり幸さいはひ

にかつ愚おろならざるかを思ひて、又躬みづからの、先には己おのれの愛する者を

拯すくふ能はずして、今却かへりて得知とちらぬ他人たにんに恵みて余有る身の、

幾許いかばかり幸無くも又愚おろなるかを思ひて、謂いふばかり無く悲めるなり。

時に愛子は話を継ぎぬ。貫一は再び耳を傾けつ。

「そんな捫憚もんぢやく最中に、狭山さんの方が騷擾さわぎに成りましたんで、私の事はまあどうでも、ここに三千円と云ふお金が無い日には、訴へられて懲役に遣られると云ふんですから、私は吃驚びつくらして、つて、唯もう途方に昧くられて、これは一処に死ぬより外は無いと、その時直すぐにさう念つたんで御座います。けれども、又考へて、背に腹は替へられないから、これは不如いっそ富山に訳を話して、それだけのお金をどうにでも借りるやうに為やうかとも思つて見まして、狭山さんに話しましたところ、俺の身はどうでも、お前の了簡ぢや、富山の処へ行くのが可いか、死ぬのが可いか、とかう申すので御座いませう」

「うむ、大きに」

「私はあるな奴に自由に為れるのはさて置いて、これまでの縁を切るくらゐなら死んだ方が愈ましだと、初中終言しよつちゆうつてをりますん

ですから、あんな奴に身を委まかせるの、不好いやは知れてゐます」

「うむ、さうとも」

「さうなんですけれど金ゆゑで両ふたり個が今死ぬのも余あんなり悔いから、三千円きつと出すか、出さないか、それは分りませんけれど、もし出したらば出さして、なあに私は那裏あつちへ行つたつて、直ぢきに逃にげて来さへすりや、切れると云ふんぢやなし、少すこしの間不好いやな夢を見たと思へば、それでも死ぬよりは愈ましだらう、と私はさう申しますと、狭山さんは、それは詐取かたりだ……」

「それは詐取かたりだ！ さうとも」

あだかも我名の出でしままに、男はこれより替りて陳のべぬ。

「詐取かたりで御座いますとも！ 情婦をんなを種に詐取を致すよりは、費消つかひこみの方が罪は復はるかに軽う御座います。そんな悪事を働いてまでも活きてゐやうとは、私わたくしは決して思ひは致しません。又これに致し

まして、あれまで振り通した客に、今と成つて金ゆゑ体を委まかせるとは、如何いかなる事にも、余あんなり意気地が無さ過ぎて、それぢや人間の皮を被かぶつてゐる効かひが御座りませんです。私は金に窮つまつて心中なんぞを為た、と人に嗤わらわれましても、情婦をんなの体を売つたお陰で、やうやう那奴等あいつは助つてゐるのだ、と一生涯言れますのは不好いやで御座います。そんな了簡が出来ます程なら、両個ふたりの命ぐらゐ助ける方は外に幾多いくらも御座いますので。

ここに生きてゐやうと云ふには、どうでもこの上の悪事を為んければ成りませんので、とても死ぬより外は無ない！ 私は死ぬと覚悟を為たが、お前の了簡はどうか、と実は私が申しましたので」

「成程。そこで貴方が？」

「私は今更富山なんぞにどうしやうと申したのも、究竟つまり私ゆゑ

にそんな訳に成つた狭山さんが、どうにでも助けたいばかりな  
んで御座いますから、その人が死ぬと言ふのに、私ひとり一箇残つて  
ゐたつて、為様が有りは致しません。貴方が死ぬなら、私も死  
ぬ——それぢや一処にと約束を致して、ここへ参つたんで御座  
います」

「いや、善く解りました！」

貫一は宛然さながら我が宮の情急じようきゆうに、誠壯まことざかんに、凜りんたるその一念ことばの言を、  
かの当時に聴くらん想して、独ひとり自ら胸中の躍々として痛快に  
堪たへざる者あるなり。

正ただにこれ、垠ほとしも知らぬ失恋の沙漠さばくは、濛々もうもうたる眼前まへに、麗うるはき  
一望のミレエジは清絶の光を放ちて、甚はなはだ饒ゆたかに、甚あきらだ明かに浮  
びたりと謂やはざらん哉。

彼は幾ほとんどこの女の宮ならざるをも忘れて、その七年の憂憤を、

今夜の今にして始して少頃しばらくも破除はじよするの間いとまを得まつ。信まことに得難とかりしこの間いとまこそ、彼が宮を失ひし以来、唯ただこれに易かへて望みに望みたりし者ならずと為せんや。

嗚呼あ麗あうるはしきミレエジ!

貫一きゆうかつが久渴きゆうかつの心は激うごく動うごされぬ。彼は声さへやや震ふるひて、

「さう申しては失礼か知らんが、貴方の商売柄ひとりで、一箇ひとりの男を熟じゆと守つて、さうしてその人の落日れきに成つたのも見棄すてず、一方には、身請みひこの客を振つてからに、後これから来花きの咲かうといふ体を、男の為には少しも惜おぼまずに死しなうとは、実に天晴あつぱれなもの！ 余り見事な貴方のその心掛こころかに感じ入つて、私は……涙なみだが……出でました。

貴方は、どうか生涯その心掛こころかを忘れずすなはにゐて下さい！ その心掛こころかは、貴方の宝たからですよ。又狭山さんの宝たから、則すなはち貴下方夫婦きみかたの

宝なのです！

今後とも、貴方は狭山さんの為には何日でも死んで下さい。何日でも死ぬと云ふ覚悟は、始終きつと持つてゐて下さい。可う御座いますか。

千万人の中から唯一人見立てて、この人はと念つた以上は、勿論もちろんその人の為には命を捨てるくらゐの了簡が無けりや成らんです。その覚悟が無いくらゐなら、始から念はん方が可いので、一旦念つたら骨が舍利しやりに成らうとも、決して志を変へんと云ふのでなければ、色でも、恋でも、何でもありません！ で、若し好いた、惚ほれたと云ふのは上辺うはべばかりで、その実は移気な、水臭い者とも知らず、這箇こつちは一心に成つて思窮おもひつめてゐる者を、いつか寝返ねがへりを打れて、突放されるやうな目に遭あつたと為たら、その棄てられた者の心の中は、どんなだと思ひますか」

彼の声音こわねは益す震へり。

「さう云ふのが有ります！ 私は世間にはさう云ふの方が多  
いと考へる。そんな徒爾いたづらな色恋は、為た者の不仕合ふしあはせ、棄てた者  
も、棄てられた者も、互たがひに好いい事は無いのです。私は現にさう  
云ふのを睹みてゐる！ 睹てゐるから今貴下方がかうして一処に  
死ぬまでも離れまいと云ふまでに思合つた、その満足はどれ程  
で、又そのお互の仕合は、実に謂ふに謂はれん程の者であらう、  
と私は思ふ。

それに就けても、貴方のその美しい心掛、立派な心掛、どうか  
その宝は一生肌身はだみに附けて、どんな事が有らうとも、決して失  
はんやうに為て下さい！——可う御座いますか。さうして、貴  
下方はお二人とも末長く、です、毎いづも今夜のやうなこの心を持  
つて、睦むつまじく暮して下さい、私はそれが見たいのです！

今は死ぬところでない、死ぬには及びません、三千円や四千元の事なら、私がどうでも為て上げます」

聞き訖ぎりしを両ふ個たが胸の中は、諸も共ろに潮うの如しきほものに襲うはれぬ。

未まだ服まさざりし毒どくの俄にはにか変へじて、この薬くすりと成なれる不思議ふしぎは、

喜よろこぶとよりは愕おどろかれ、愕おどろくとよりは打うち惑まどはれ、惑まどふとよりは怪あや

まれて、鬼おにか、神かみか、人ひとならば、如い何かなる人ひとかと、彼等かれらは覚お

ず貫ぬ一の面おもてを見据みゑて、更さらにその目めを窃ひそに合あせつ。

四あ辺たりも震ふるふばかりに八や声こゑの鶏とりは高たかく唱うたへり。

夜よすがら両ふ個たの運おほ星ほし蔽おほひし常とこ闇やみの雲くもも晴はれんとすらん、隠ほ約のぼ

と隙す洩きる曙あけの影かげは、玉たまの緒いと長ながく座ざに入りて、光ひかり薄うするる燈ともし火びの下もと

に並ならべるままの茶ちや碗わんの一ひと箇つに、小ちひき蛾ご有ありて、落おちて浮うべり。

# 新続金色夜叉

## 第一章

生かみほとけれてより神さぶらふこと仏を頼み候事とては一度も無御座候へども、此度このたびばかりはつくづく一心に祈念致し、吾命わがいのちを縮め候代さぶらふかはりに、必ず此文は御目おんめに触れ候やうにと、それをば力に病中ながら筆取りまおんひらかゐらせ候。幸さいはひに此の一念通じ候て、ともかくも御披おんひらせ被下候はくだされさば、此身は直ぐ相果あひはて候とも、つゆ憾うらみには不存申候。元より御憎悪強おんにくしみつよき私わたくしには候へども、何卒是なにとぞこれは前非を悔ないて自害いたし候ひとり一箇あはれの愍あはれなる女の、御前様おんまへさまを見懸みかけての遺言ゆいごんとも思召おぼしめし、せ

めて一通り御判読被下候はば、未来までの御情と、何より嬉うれしう嬉うれしう存上げまゐらせ候。

扱さてとや、先頃おんかほに久々とも何とも、御生別とのみ朝夕あさゆふに諦あきらめ居を

り候御顔を拝し、飛立つばかりの御懐おんなつかしさやら、言ふに謂れぬ悲

しさやらに、先立つものは涙にて、十年越し思ひに思ひまゐらせ

候事何一つも口には出ず、あれまでには様々の覚悟も致し、ま

た心苦こころぐるしき御目もじの恥をも忍び、女の身にてはやうやうの思に

て参まゐり候効さふらふかひも無く、誠に一生の無念に存じまゐらせ候。唯ただそのをり其折

の形見には、涙の隙ひまに拝しまゐらせ候御姿おんすがたのみ、今に目に付き

候て且暮あけくれわす忘れやらず、あらぬ人の顔までも御前おんまへさま様のやうに見え

候て、此頃は心も空に泣暮し居りまゐらせ候。

久ひさしう御目おんめもじ致ささず候中さからゆうちに、別の人のやうすべに総おんかはて御変なされり被成

候も、私わたくしには何なにとやら悲ことく、又殊ことに御顔やつれの羸やつれ、御血色おんかほの悪なされさも

ひとかた  
一方ならず被為居候は、如何なる御疾に候や、御見上げ申すも  
心細く存ぜられ候へば、折角御養生被遊、何は措きても御身は  
大切に御厭ひ被成候やう、くれぐれも念じ上候。そのみ心に  
懸り候余、悲き夢などをも見続け候へば、一入御案じ申上まる  
らせ候。

私事恥を恥とも思はぬ者との御さげすみを顧ず、先頃推して  
御許まで参し候胸の内は、なかなか御目もじの上の辞にも尽し  
難くと存候へば、まして廻らぬ筆には故と何も記し申さず候ま  
ま、何卒々々宜く御汲分被下度候。さやうに候へば、其節の  
御腹立も、罪ある身には元より覚悟の前とは申しながら、余と  
や本意無き御別に、いとど思は愈り候て、帰りて後は頭痛み、  
胸裂るやうにて、夜の目も合はず、明る日よりは一層心地悪く  
相成、物を見れば唯涙こぼれ、何事とも無きに胸塞り、ふとすれ

ば思迫おもひつめたる氣に相成候て、夜昼と無く劇はげしく悩み候ほどに、四  
 日目には最早ひるすぎ起き居り候事も大儀に相成、午過おんかたより蓐とこに就おもひつづき候  
 まま、今日までおぼろがらいたしさふらふ慄なつかし々致おんかた候て、唯々おもひつづ懐なつかしき御方の事のみ思おもひつづ続おもひつづけ  
 候ては、みづからのはかな儂なげき身の上をなげ慨なげき、胸はいよいよ愈いよいよよ痛いよいよみ、目  
 は見みぐるし苦はれあがく腫はれあが起はれあがり候て、今日きのふは昨日きのふよりやせおとろ瘦まをしさふらふ衰まをしさふらふへ申まをしさふらふ候。  
 かやうに思迫おもひつめ候氣にも相成候上さふらふさきに、日毎あひなりさふらふうへに闇やみの奥まことに引入まことれ  
 られ候やうに段々うたがひ心弱うたがひり候へば、疑うたがひも無く信心まことの誠まこと頭まことれ候て、此  
 の蓐とこに就つき候が元もとにて、はや永ぞんじからぬ吾身ぞんじとも存ぞんじ候まま、何卒なにとぞ  
 これまでの思出おもひだには、たとひ命いのちある内うちこそ如何いかやうの御恨おんうらみは受  
 け候とも、今はの際きはには御前おんまへ様の御膝おんひざの上うへにて心安いそひきとく息引取いきひきとり  
 度たくと存候へども、それはかな慚かなはぬ罪深なき身みに候上うへは、もはや再またび  
なつかし懐なつかしき御顔おんかたもなつかし拜なつかしし難なつかしく、猶なつかし又なつかし前非なつかしの御ゆるしも無なつかしくて、此儘このまま  
 相果あきらて候事あきらかと、諦あきらめ候あきらより外あきら無く存あきらじながら、とてあきらもとてあきらも

諦めかね候苦しさの程は、此心の外に知るものも、たと諭ふるものも無御座候。これ是のみは御憎悪の中にも少は不愆と思召被下度、かやうに認め居り候内にも、涙こぼれ候て致方無く、覚えずそそう鹿相いたし候て、かやうに紙を汚し申候。御容し被下度候。おんゆるくだされたくさふらふまで散々の責苦を受け、かくまで十分に懺悔致し、此上は唯死ぬるばかりの身の可哀を、つゆほども御前様には通じ候はで、これぎりむなし空く相成候が、余に口惜く存候故、一生に一度の神仏にもすが縫り候て、此文には私一念を巻込め、御許に差出しまゐらせ候。

返す返すも悔きくやし熱海の御別の後の思、又いつぞや田鶴見子爵の邸内にて凶らぬ御見致候而来の胸の内、其後途中にて御変りおんかはなされざらふあらをさま被成候荒尾様に御目に懸り、しみじみ御物語致候事など、

せんだつてじゆうくど

先達而中冗さしあげまをしきさふらふうも冗おんひらかうも差上申候。

毎度の文にて細こまかに申上候へ

ども、一通の御披おんひらかせも無これなき之やうに仰せられ候へば、何事も御存無

きかと、誠に御恨おんうらめしぞんじあげさふらふう存上候。

ももたびちたびくりかへ

百度千度繰返し候ても、是非に御

耳に入れまるらせ度存候へども、

今此の切なく思乱れ居候折

をりさふらふをり

から、又仮初かりそめにも此上おんたよりに味気無あぢきなき昔を偲たへがたび候事は堪難く候故、

ここには今の今心に浮うけたまび候まを書続けたくぞんじあげさふらふまるらせ候。

何卒余所なにとぞよそながらも承うけたまはり度存上候

は、長々御信おんたよりも無く居ら

せられ候御前おんまへさま様の是迄これまでい如何かに御過おんすごし被遊あそば候や、さぞかし暴あらき

憂世うきよの波ひとかたに一方ひとかたならぬ御艱難ごかんなんを遊あそし候事と、思おそふも可恐おそろきやう

に存上ぞんじあげさふらふ候を、ようもようも御おんめでたう御障おんさはりな無う居らせられ、

悲よろこびき中にも私の喜よろこびは是一つに御座候。

御前おんまへさま様の数々御苦勞被遊あそば候間に、私あそばとても始終人知あひだらぬ

憂思うきおもひを重おんまへさまね候て、此世あそばには苦あそばみに生あひだれ参り候やうに、唯ただ夢はかなき

憂思うきおもひを重おんまへさまね候て、此世あそばには苦あそばみに生あひだれ参り候やうに、唯ただ夢はかなき

儂き月日を送りまゐらせ候。吾身わがみならぬ者は、如何いかなる人も皆みな  
うらやまし可羨こせんく、朝夕すずめからすの雀鴉すずめからす、庭いとやの本草つながに至る迄まで、それぞれに幸さいはひならぬ  
 は無御座むござなく、世の光に遠き囹圄ひとやに繋つながれ候悪人さふらふあくにんにても、罪さいゆり候日ひ  
たのしみこれありさふらふの楽たのしみは有之候ものを、命有らん限いは此こゝの苦艱くげんを脱のがれ候事さふらふこと慳かなは  
 ぬ身の悲しさは、如何いたしに致候さふらふはば宜よろしきやら、御推量くだされたくさふらふ被下度候。  
 申すも異な事に候へども、抑そもそも始はより我心わたくしには何とも思はぬ  
ただつぐ唯繼ただつぐに候へば、夫婦の愛情と申候ものは、十年が間に唯の一度も  
 起り申さず、却かへつて憎あだき仇あだのやうなる思も致し、其傍そのそばに居り候  
くちをしも口惜くちをしく、倩つくづく疎うとみ果て候へば、三四年前ぜんよりは別居も同じ有  
 様に暮し居候始末みまにて、私事一旦の身の洗けがれも漸やうやく今は浄きよく相成、  
ますます益堅ますますく心の操みまを守り居りまゐらせ候。先頃荒尾様より御譴おんしかりも受  
 け、さやうな心得は、始には御前様に不実の上、今又唯繼おんしかりに不  
 貞なりと仰せられ候へども、其の始の不実を唯今思知り候ほど

の愚おろかなる私が、何とて後の不貞やら何やら弁わきまへ申すべきや。愚  
 なる者なればこそ人にも勾かど引され候て、帰かどりたき空さへ見えぬ  
 海山の果に泣倒れ居り候を、誰たれ一箇も愍あはみて救はんとは思召し  
 被くだ下候はずや。御前様にも其の愚なる者を何とも思召し被くだ下候  
 はずや。愚なる者の致あやせし過も、並々の人の過も、罪は同きも  
 のに御座候や、重きものに御座候や。

愚なる者の癖に人がましき事申上候やうにて、誠まことに御恥おんはづかしう存候  
 へども、何とも何とも心得難ごころえがたく存上候は、御前様唯今の御身  
 分に御座候ごひびきさふらふ。天地は倒さかに相成候とも、御前様おんまへさまに限りてはと、今猶いまなほ  
 私は疑ひ居り候ほど驚入おどろきまゐらせ候。世に生業なりはひも数多く候に、  
 優き優き御心根にもふさはしからぬ然さやうの道に御入おんいり被成候  
 までに、世間は鬼々おにおにしく御前様おんまへさまを苦まをめ申候か。田鶴見様方たずみさまにて  
 御姿おんすがたを拝さぶらし候後始おんうはさうて御尊承おんうはさうはり、私は幾日いくかも幾日も泣暮

し申候。これには定て深き仔細しさいも御座候はんと存候へども、玉  
 と成り、瓦かはらと成るも人の一生に候へば、何卒なにとぞ昔の御身に御立返  
あそばされり被遊、私の焦れ居りまゐらせ候やうに、多くの人にも御慕れ  
あそばされさうらふ被遊候御出世の程をば、偏ひとへに偏ひとへに願上ねがいあげまゐらせ候。世間には  
 随分賢からぬ者の好き地位を得て、時めかし居り候も少からぬ  
 を見るにつけ、何故御前様には然さやうの善よからぬ業わざを扱よりに扱より  
 て、折角の人に優すぐれし御身を塵芥ちりあくたの中に御捨おんすて被遊候や、残  
 念に残念ぞんじあげに存上こころえちがひまゐらせ候。

愚なる私の心得違ごころえちがひさへ無御座候はば、始終御側にも居り候事  
 とて、さやうの思立おもひたちも御座候節に、屹度御諫め申候事も叶かなひ候  
 ものを、返らぬ愚痴ながら私の浅あははかより、みづからの一生を  
 誤り候のみか、大事の御身までも世の廃すたり物に致させ候かと思  
 ひまゐらせ候へば、何と申候私の罪の程かと、今更御申訳おんまをしわけの致

しやうも無之これなく、唯おそろそら可恐おそろしきに消えも入度いりたく存ぞんじまゐらせ候。  
 御免おんゆるし被下度くだされたく、御免おんゆるし被下度くだされたく、御免おんゆるし被下度くだされたく候。

私は何故なにゆゑ富山に縁付き申候や、其気そのきには相成申候や、又何故

御前おんこしほ様の御辞まをさすには従まをさすひ不申候や、唯今ただいまと相成候て考へ申候へば、

覚くやしめて悔き夢の中のやうにて、全く一時の迷とも可申まをすべく、我身まをすべくな

がら訳解あし解らず存じまゐらせ候。二つ有るものの善きを捨て、悪

きを取り候て、好んで箇かよう様の悲き身の上に相成候は、よくよく

私に定り候運と、思出おもひいだし候ては諦あきらめ居り申候。

其節御前おんはらだち様の御腹立一層強ひつうちく、私をば一打ひとうちに御手に懸くだされさけ被下候

はば、なまじひに今の苦くげん艱これあるまじくは有之間敷、又またさも無く候はば、い

つそ御前おんこしほ様の手籠てしめにいづれの山奥へも御連くだされされ被下候はば、今頃

は如何さいはひなる幸を得候事かながへをやらんなど、愚おろなる者はいつまでも愚おろに、

始終愚おろなる事のみ考居かながへをり申候。

嬉くも御赦を得、御心解けて、唯一人熱海に遊び、昔の浜辺に  
昔の月を眺め、昔の哀き御物語を致し候はば、其の心の内は如  
何に御座候やらん思ふさへ胸轟き、書く手も震ひ申候。今も彼  
の熱海に人は参り候へども、そのやうなる楽を持ち候ものは一  
人も有之まじく、其代には又、私如き可憐の跡を留め候て、其  
の一夜を今だに歎き居り候ものも決して御座あるまじく候。  
世をも身をも捨て居り候者にも、猶肌身放さず大事に致候宝  
は御座候。それは御遺置の三枚の御写真にて何見ても楽み候は  
ぬ目にも、是のみは絶えず眺め候て、少しは憂さを忘れ居りま  
ゐらせ候。いつも御写真に向ひ候へば、何くれと当時の事憶出  
し候中に、うつつとも無く十年前の心に返り候て、苦き胸も暫  
は涼く相成申候。最も所好なるは御横顔の半身のに候へども、  
あれのみ色褪め、段々薄く相成候が、何より情無く存候へども、

長からぬ私の宝に致し候間は仔細も有るまじく、亡なき後には棺  
 の内に斂をさめもらひ候やう、母へは其それを遺言に致候覚悟に御座候。  
 ある女世に比たぐひな無にししき錦を所持いたし候処、夏さかの熱さかき盛さかりとて、差当  
 り用無く思ひ候不覚より、人の望むままに貸与へ候後は、いか  
 に申せども返さず、其内に秋過ぎ、冬ふゆ来り候て、一枚はれぎの曠はれぎ着さへ  
 無なき身貧みに相成候ほどに、いよいよ先の錦の事を思ひに思ひ候  
 へども、今は何いづこ処の人手に渡り候とも知れず、日頃そのみ苦  
 に病み、慨なげき暮し居り候折から、さる方にて計らず一人の美うき  
 女に逢ひ候処、彼かの錦をば華はなかに着飾り、先の持主とも知らず  
 貧ひき女の前にて散々さんざんひけらかし候上に、恥まで与へ候を、彼女かのをんな  
 は其身あやまりあきつの過あやまりと諦あきらめ候て、泣く泣く無念を忍び申候事に御座候が、  
 其錦かに深かき思かの繋かり候ほど、これ見よがしかに着たる女こそ、憎  
 くも、悔くやしくも、恨うらめしくも、謂はうやう無なき心こころの内と察せられ申候。

先達せんだつて而は御許おんもとにて御親類のやうに仰せられ候御婦人に御目に

掛りあそばされまゐらせ候。毎日おんいのやうに御出なされで被成候さくらて、御前おんせわ様の御世話

万事あそばされ被遊候さくら御方おんかたの由よしに候へば、後あそばされにて御前おんかた様さぞさぞ御大抵

ならず御迷惑あそばされ被遊候さくら御事おんことと、山々おんざつ御察し申上候へども、一向

さやうに御内合おんうちあひとも存おしつけぜず、不躑おんわびに参上まをいたし候段は幾重にも、

御詫申上まをまゐらせ候。

尚数々なほかず申上度まを存候事あげは胸一杯なほにて、此胸の内には申上度事あげ

の外なほは何も無御座候へば、書くとも書くともまを尽き申間敷あげ、殊ことに

拙つたなき筆なほに候へば、よしなき事のみくまをだくだしく相成候あげていくら

も、大切おもひの事をば書洩かきし候が思残のこりに御座候。惜あき惜なき此筆ごと止め

かね候へども、いつの限かな無く手に致し居り候事も叶がたひ難く、折

から四時あけの明ちか近ちかき油も尽あき候て、手元あ暗かく相成候まあまはやはや

恋こひき御名おんわを認め候かて、これおんまでの御別わかと致あしまゐらせ候。

唯今ただいまの此こゝの氣分きぶん苦くるく、何なにとも難堪たへがたき様子ようすにては、明日あしたは今日けふよ

りも病重びやうぢゆうき事ことと存候ぞんじさふらふ。明後日あしたは猶重あひなりまをすべくくも相成あひなり可申まをすべく、さやうには

候あひかなへども、筆取あひかなる事相叶あひかなひ候間あひかなは、臨終りんしゆうまでの胸むねの内御許うちごんごに通じ

まるらせ度たくぞんじさふら存候ぞんじさふらへば、覚束おぼつか無くも何なになりとも相認あひしため可申まをすべく候ぞんじさふら。

私事むなし空くく相成あひかな候あひかなとも、決よして余よの病びやうにては無これなく之これなく、御前おんまへ様御事ごんご

を思死おもひじに死候しにさふらふものと、何卒なにとぞ々々おんあはれ御愍くたされみ被下そのだん、其段いづはりはゆめゆめ詐いつはり

にては無御座ごごひなく、みづから堅かたく信じ居候まをすべく事に御座候ごごひなく。

明日あしたは御前おんまへ様御誕生ごんごたんじ日に当あたり申候まをすべくへば、わざと陰膳かげぜんを供まをすべくへ候ごごひなく

て、私事むなしも共に御祝ごんごいひ可申上まをすべく、嬉うれきやうにも悲かなきやうにも存候まをすべく。

猶なほくれぐれも朝夕ちやうせきの御自愛ごんご御大事ごんごに、幾い久きく御機嫌ごんご好よう明日あしたを

御迎ごんむかへ被遊あそばされ、ますます御繁榮ごんごに被為居候あいらせられさふらふやう、今は世よの望のぞも、身み

の願ねがひも、それのみに御座候ごんご。

まづはあらあらかしこ。

五月二十五日

おろかなる女より

恋こひしき恋こひしき

生いき別わかれおんかたさま  
の御方ごう様

まゐる

第二章

隣となりに養やしなへる薔ばら薇らの香かの烈はげく薰くんじて、颯さと座ざに入いる風かぜの、この  
読よ尽みつされし長ながき文ふみの上うへに落おつると見みれば、紙かみは冉せん々と舞ま延のびびて  
貫ぬ一の身みを縊めり、猶なほも跳をらんとするを、彼かれは徐しづかに敷し据づゑて、そ

の膝ひざに慵ものうげなる面杖つらづえ拄つきたり。憎にくき女の文ぶんなんど見るも穢けがらしと、前さきには皆みな焚や棄きてたりし貫い一の、如何いかにしてこたびばかりは終つひにうちひら打う折ちきけん、彼はその手にせし始はじに、又は読よ去りし後のちに、自らゆゑその故ゆゑを讓せめて、自ら知らざるを愧はづるなりき。

彼はやがて屈かめし身みを起たししが、又また直ただちに重おもきに堪たへざらんやうの頭かしらを支さへて、机こに倚よれり。

緑こ濃しまかに生お茂ひれる庭にわの木き々の軽ほ々かなる燥い氣きと、近あき辺たりに有あり  
と有ある花はなの薰かとを打う雑ちぜたる夏なつの初はつの大おほ氣きは、太はなだ慢ゆるく動うきて、  
その間まに旁ぼう午ごする玄つば鳥くらの声こゑ朗らかに、幾いく度たびか返かへしては遂つひに往ゆきける  
跡あとの垣かき穂ほの、さらぬだに燃もゆるばかりなる満み開あの石い榴ざくろに四よ時じ過す  
の西にし日の夥おびく輝たけるを、彼は煩わづしと目めを移うつして更さらに梧ご桐とうの涼すずき  
広ひろ葉はを眺のぞめたり。

文ぶんの主ぬしはかかれと祈いのるばかりに、命いのちを捧たげて神かみ仏ほとけをも驚おどかし

しと書けるにあらざや。貫一は又、自ら何の故とも知らず、独りこれのみ披くべくもあらぬ者を披き見たるにあらざや。彼を絡へる文は猶解けで、巖に浪の瀉ぐが如く懸れり。

そのままに専と思入るのみなりし貫一も、漸く悩く覚えて身動ぐとともに、この文殻の埒無き様を見て、やや慌てたりげに左肩より垂れたるを取りて二つに引裂きつ。さてその一片を手繰らんと為るに、長きこと帯の如し。好き程に裂きては累ね、累ぬれば、皆積みて一冊にも成りぬべし。

かかる間も彼は自と思に沈みて、その動す手も怠く、裂きては一々読むかとも目を凝しつ。やや有りて裂了りし後は、あだかも劇き力作に勞れたらんやうに、弱々と身を支へて、長き頂を垂れたり。

されど久きに勝へずやありけん、卒に起たんとして、かの文

殼の委おきたるを取上げ、庭の日陰あゆみに歩出ひとでて、一步ひとに一たび裂  
 き、二歩に二たび裂き、木間に入りては裂き、花壇めぐを繞りては  
 裂き、留りては裂き、行きては裂き、裂きて裂きて寸々すんずんに作な  
 けるを、又引ひき振りては歩み、歩みては引ひき振りしが、はや行くも  
くるし 苦く、後うしろ様に唯とあ有る冬青もちの樹に寄添よへり。

折いから縁いでに出来きたれる若わかき女は、結立ゆひたての円鬘まるわけ涼しげに、襷掛たすきがけの  
 惜おくも見ゆる真白ましろの濡手ぬれてを弾はじきつつ、座敷ざしきを覗のぞき、庭にわを窺うかがひ、人  
 見付みけたる会あ積まの笑えみをつと浮うべて、

「旦那様だんな、お風呂ふろ呂ろが沸わきましたが」

この姿すがた好こく、心信こころまめかなるお静しずこそ、僅わづかにも貫つら一いつがこの頃ときを慰なぐさ  
 むる一いつの唯ただ一いつの者ものなりけれ。

浴ゆあみすれば、下立おりたちて垢あかを流し、出づるを待ちて浴衣ゆかたを着せ、鏡かみを据するまで、お静しずかは等閑なほざりならず手一つに扱つかひて、数かずならぬ女業をんなわざの効かひ無くも、身みに称かなはん程ほどは貫一くわんいちが為ためにと、明暮めいぼを唯ただそのみに委ゆだぬるなり。されども、彼は別べつに奥おくの一間ひとまに己おのれの助すけくべき狭山さやまあるをも忘わするべからず。そは命いのちにも、換かふる人ひとなり。又またされども、彼かれと我われとの命いのちに換かふる大恩おほいづをここの主あるじにも負おへるなり。如此かくのごとく孰いづれ疎おろそならぬ主あるじと夫おとことを同時どうじに有もてる忙せはしきは、盆ひらと正月しょうげつとの併あはせ来きにけんやうなるべきをも、彼はなほ未いまだ覚さめやらぬ夢ゆめの中うちにて、その夢心地ゆめごころには、如何いかなる事ことも難かたしと為なるに足たらずと思おもへるならん。寔まことに彼はさも思おもへらんやうに勇いさみ、喜よろこび、誇こほり、楽たのめる色いろあり。彼の面おもては為ために謂いふばかり無く輝きらける程ほどに、常つねにも愈まして妖艶あでやかに見みえぬ。

暫し浴後を涼みみる貫一の側に、お静は習々と団扇の風を送りぬたりしが、縁柱に靠れて、物をも言はず勞れたる彼の氣色を左瞻右視て、

「貴方、大変にお顔色がお悪いぢや御座いませんか」

貫一はこの言に力をも得たらんやうに、萎え顔れたる身を始めて揺りつ。

「さうかね」

「あら、さうかねぢや御座いませんよ、どうあそばしたのです」  
「別にどうも為はせんけれど、何だかかう氣が閉ぢて、惺然せんねえ」

「惺然あそばせよ。麦酒でも召上りませんか、ねえ、さうなさいます」

「麦酒かい、余り飲みたくもないね」

「貴方そんな事を有仰らずに、まあ召上つて御覧なさいまし。  
折角私が冷して置きましたのですから」

「それは狭山君が帰つて来て飲むのだらう」

「何で御座いますつて?!」

「いや、常談ぢやない、さうなのだらう」

「狭山は、貴方、麦酒なんぞを戴ける今の身分ぢや御座いませ  
んです」

「そんなに堅く為んでも可いさ、内の人ぢやないか。もつと氣  
楽に居てくれなくては困る」

お静は些と涙含みし目を拭ひて、

「この上の氣樂が有つて耐るものぢや御座いません」

「けれども有物だから、所好なら飲んでもらはう。お前さんも  
克くのだらう」

「はあ、私もお相手を致しますから、一盃召上りましょ。氷を取りに遣りまして——夏蜜柑なつみかんでも剥むきませう——林檎りんごも御座いますよ」

「お前さん飲まんか」

「私も戴きますとも」

「いや、お前さん独ひとりで」

「貴方の前で私が独ひとりで戴くので御座いますか。さうして貴方は？」

「私は飲まん」

「ぢや見てゐらつしやるのですか。不いや好ですよ、馬鹿々々しい！ まあ何でも可いから、ともかくも一盃召上ると成なさいましょ、ね。唯今直ただいまに持もつて参まりますから、其そこ処ところにゐらつしやいまし」

気軽ろうひに走り行きしが、程ほど無く老婢ろうひと共に齎もたらせる品々を、見好

げに献立して彼の前に陳ぶれば、さすがに他の老婆子が寂き給仕に義務的吃飯を強ひらるるの比にもあらず、やや難捨き心地もして、コップを取挙げれば、お静は慣れし手元に噴溢るるばかり酌して、

「さあ、呷とそれを召上れ」

貫一はその半を尽して、先づ息へり。林檎を剥きみるお静は、手早く二片ばかり剝ぎて、

「はい、お肴を」

「まあ、一盃上げやう」

「まあ、貴方——いいえ、可けませんよ。些とお顔に出るまで二三盃続けて召上れよ。さうすると幾らかお気が霽れますから」

「そんなに飲んだら倒れて了ふ」

「お倒れなすたつて宜いぢや御座いませんか。本当に今日は不好

な御顔色でみらつしやるから、それがかう消えて了ふやうに、奮発して召上りましよ」

彼は覚えうすわらひず薄笑して、

「葉だつてさうは利きかんさ」

「どうあそばしたので御座います。何処どこぞ御体がお悪いのなら、又無理に召上るのは可う御座いせんから」

「体は始終悪いのだから、今更驚きも為んが……ぢや、もう一盃飲まうか」

「へい、お酌。ああ、余あんまりお見事ぢや御座いせんか」

「見事でも可かんのかい」

「いいえ、お見事は結構なのですけれど、余あんまり又——頂戴……

ああ恐入ります」

「いや、考へて見ると、人間と云ふものは不思議な者だ。今まで

不見不知みずしらずの、実に何の縁も無いお前さん方が、かうして内に来て、狭山君はああして実体じつていの人だし、お前さんは優やさく世話をしてくれる、私は決して他人のやうな心持は為せんね。それは如何いかなる事情が有つてかう成つたにも為よ、那裏あそこで逢あはなければ、何処どこの誰だかお互に分らずに了つた者が、急に一処いっしょに成つて、貴方がどうだとか、私わたくしがかうだとか、……や、不思議だ！ ど  
うか、まあ渝かはらず一生かうしてお附合つきあひを為たいと思ふ。けれど  
も私は高利貸だ。世間から鬼じやか蛇じやのやうに謂いはれて、この上も無  
く擯斥ひんせきされてゐる高利貸だ。お前さん方もその高利貸の世話に  
成つてゐられるのは、余り栄みえでも無く、さぞ心苦く思つてゐら  
れるだらう、と私は察さしてゐる。のみならず、人の生血しほを搾しぼつ  
てまでも、非道かな貨かを殖こしらへるのが家業の高利貸が、縁ゆかりも所因ゆかりも  
無い者に、設たとひ幾らでも、それほど大事の金をおいそれと出し

て、又体まで引取つて世話を為ると云ふには、何か可恐い下心でもあつて、それもやつぱり慾徳渾成で恩を被せるのだらうと、内心ぢやどんなにも無氣味に思つてゐられる事だらう、とそれも私は察してゐる。

さあ、コップを空けて、返して下さい」

「召上りますの？」

「飲む」

酒気は稍彼の面に上れり。

「お静さんはどう思ふね」

「私共は固より命の無いところを、貴方のお蔭ばかりで助つてをりますので御座いますから、私共の体は貴方の物も同然、御用に立ちます事なら、どんなにでも遊してお使ひ下さいまし。狭山もそんなに申してをります」

「忝かたじけない。然し、私は天引三割の三月縛みつぎしばりと云ふ躍利をどりを貸して、暴あらい稼かせぎを為てゐるのだから、何も人に恩などを被せて、それを種かねまうけに銭儲かねまうけを為るやうな、廻り迂くどい事を為る必要は、まあ無いのだ。だから、どうぞ決けしてそんな懸念けねんは為て下さるな。又私の了簡つまりでは、元々些ほんの酔興よきょうで二人の世話を為るのだから、究竟つまりそちらの身さへ立つたら、それで私の念は届いたので、その念が届いたら、もう剩錢つりを貰もらはうとは思はんだ。と言つたらば、情無じやうむい事には、私の家業が家業だから、鬼が念仏でも言ふやうに、お前まへさん方は愈いよいよよ怪あやしく思ふかも知れん——いや、きつとさう思つてゐられるには違ちが無い。残念なものだ！」

彼は長吁ちやううして、

「それも悪木あくぼくの蔭かげに居るからだ！」

「貴方あなた、決けして私共わたくしどもがそんな事を夢にだつて思ひは致いたしません。」

けれども、そんなおつしやに有仰いますなら、何か私共の致しました事  
がおさ気に障さりましたので御座いませう。かう云ふ何なんにも存じませ  
ん粗ぞんざい才者の事で御座いますから」

「いいや、……」

「いいえ、私は始終言はれてをります狭山に濟みませんですか  
ら、どうぞ行届きませんところは」

「いいや、さう云ふ意味で言つたのではない。今のは私の愚痴  
だから、さう気に懸けてくれては甚はなはだ困る」

「ついにそんな事を有仰おつしやつた事の無い貴方が、今日に限つて今  
のやうに有仰ると、日頃私共に御不足あんがお有なすつて」

「いや、悪かつた、私が悪かつた。なかなか不足どころか、お前  
さん方が陰陽かげひなたな無く実まに善く気を着けて、親身のやうに世話して  
くれるのを、私は何より嬉いっかく思つてゐる。往日話した通り、私

は身寄も友達も無いと謂つて可いくらゐの独法師ひとりぼつちの体だから、  
気分が悪くても、誰たれ一人薬を飲めと言つてくれる者は無し、何  
かに就けてそれは心細いのだ。さう云ふ私に、鬱ふさいであるから  
酒でも飲めと、無理にも勧めてくれるその深切は、枯木に花が  
咲くやうな心持が、いえ、嘘うそでも何でも無い。さあ、嘘でない  
信しるしに一献ひとつさ差すから、その積で受けてもらはう」

「はあ、是非戴かして下さいまし」

「ああ、もうこれには無い」

「無ければ嘘なので御座いませう」

「未まだ半打はんダースの上うへ有るから、あれを皆注いで了はう」

「可うございますね」

貫一が老婢を喚ぶ時、お静は逸いちはや早く起ち行けり。

話頭わとうは酒を更あらたむるとともに転じて、

「それはまあ考へて見れば、随分主人の面つらでも、友達ともだちの面でも、踏躪ふみにじつて、取る事に於ては見界みさかひなしの高利貸が、如何いかに虫の居所が善かつたからと云つて、人の難儀——には附込つまうとも——それを見かねる風ぢやないのが、何であんな格がらにも無い気前を見せたのかと、これは不審を立てられるのが当然あたりまへだ。

けれども、ねえ、いづれその訳が解る日も有らうし、又私といふ者が、どう云ふ人間であるかと云ふ事も、今に必ず解らうと思ふ。それが解りさへしたら、この上人の十人や二十人、私の有金の有たけは、助けやうが、恵まうが、少すこしも怪む事は無いのだ。かう云ふと何か酷ひどく偉ひどがるやうで、聞辛ききづらいか知らんけれ

ど、これは心易立こころやすだてに、全く奥底の無いところをお話するのだ。

いやさう考込まれては困る。陰気に成つて可かんから、話はもう罷やめに為せう。さうしてもつと飲み給へ、さあ」

「いいえ、どうぞお話をお聞せなすつて下さいまし」

「肴さかなに成るやうな話なら可いがね」

「始終狭山ともさう申してをるので御座いますけれど、且那樣は御病身と云ふ程でも無いやうにお身受申しますのに、いつもかう御元氣ごげんきが無くて、お険むづかしいお顔面かほつきばかりなすつてゐらつしやるのは、どう云ふものかしらんと、陰ながら御心配申してをるので御座いますか」

「これでお前さん方が来てくれて、内にぎやが賑にぎやかに成つただけ、私も旧もとから見ると余程元氣よつほどには成つたのだ」

「でもそれより御元氣あんがお有あなさらなかつたら、まあどんなで

せう」

「死んでゐるやうな者さ」

「どうあそばしたので御座いますね」

「やはり病気さ」

「どう云ふ御病気なので」

「鬱ぐふさのが病気で困るよ」

「どう為てさうお鬱ふさぎあそばすので御座います」

貫一は自ら嘲あざけりて苦しげに晒わらへり。

「究竟つまり病気の所せ為みなのだね」

「ですからどう云ふ御病気なですよ」

「どうも鬱ぐのだ」

「解らないぢや御座いませんか！ 鬱ぐのが病気だと有おつしや仰るから、どう為てお鬱あそばぎ遊あそすのですと申せば、病気で鬱ぐのだつて、

それぢや何処どこまで行つたつて、同じ事ぢや御座いませんか」

「うむ、さうだ」

「うむ、さうだぢやありません、緊しつりなさいましよ」

「ああ、もう酔つて来た」

「あれ、未だお酔ひに成つては可けません。お横に成ると御寐おやすみに成るから、お起きなすつてゐらつしやいまし。さあ、貴方」

お静は寄よりて、彼の肘杖ひぢづゑに横よこたはれる背後うしろより扶起たすけおこせば、為せん無なげに柱はしらに倚よりて、女の方を見返りつつ、

「ここを富山唯繼ただつぐに見せて遣りたい！」

「ああ、舍よして下さいまし！ 名を聞いても慄然ぞつとするのですから」

「名を聞いても慄然ぞつとする？ さう、大きにさうだ。けれど、又考へて見れば、あれに罪が有る訳でも無いのだから、さして憎

むにも当らんのだ」

「ええ、些ほんの太好いけすかないばかりです！」

「それぢや余り差ちがはんぢやないか」

「あんな奴は那箇どつちだつて可いんです。第一活いきてゐるのが間違つてゐる位のもんです。

本当に世間には不好いやな奴ばかり多いのですけれど、貴方、どう云ふ者でせう。三千何百万とか、四千万とか、何でも太たいした人数ひとかずが居るのぢや御座いませんか、それならもう少し氣きの利きいた、肌合はだあひの好うれしい、嬉うれしい人に撞見でつくはしさうなものだと思ひますのに、一向お目に懸りませんが、ねえ」

「さう、さう、さう！」

「さうして富山みたやうなあんな奴がまあ紛々うじやうじや然と居て、番狂ばんくるはせを為あるて行くのですから、それですから、一日だつて世の中が無事

な日と云つちや有りは致しません。どうしたらあんなにも気障きざらに、太好いけすかなく、厭味いやみたらしく生れ付くのでせう」

「おうおう、富山唯継散々だ」

「ああ。もうあんな奴の話をするのは馬鹿々々しいから、貴方、  
舍よしませうよ」

「それぢやかう云ふ話が有る」

「はあ」

「一体男と女とでは、だね、那箇どつちが情合が深い者だらうか」

「あら、何為なげで御座います」

「まあ、何為なげでも、お前さんはどう思ふ」

「それは、貴方、女の方がどんなに情が」

「深いと云ふのかね」

「はあ」

「信あてにならんね」

「へえ、信にならない証拠でも御座いますか」

「成程、お前さんは別かも知れんけれど」

「可よう御座いますよ！」

「いいえ、世間の女はさうでないやうだ。それと云ふが、女と云ふ者は、慮かんがへが浅いからして、どうしても気が移り易やすい、これから心が動く——不実を不実とも思はんやうな了簡も出るのだ」

「それはもう女は浅あさはか摺な者に極きまつてゐますけれど、気が移るの何のと云ふのは、やつぱり本当に惚ほれてゐないからです。心底から惚れてゐたら、些ちつとも氣の移るところは無いちや御座いませんか。善く女の一念と云ふ事を申しますけれど、思窮おもひつめますと、男よりは女の方が余計夢中に成つて了ひますとも」

「大きにさう云ふ事は有る。然し、本当に惚れんのは、どうだ

らう、女が非わるいのか、それとも男の方が非わるいのか」

「大変難むづかしく成りましたのね。さうですね、それは那箇どつちかが非わるい事も有りませう。又女の性分にも由りますけれど、一概に女と云つたつて、一つは齡としに在るので御座いますね」

「はあ、齡に在ると云ふと？」

「わたくしどもしようばい  
私共わたくしどもの商買しょうばいの者は善くさう申しますが、女の惚みぼれれるには、見惚みぼれに、氣惚きぼれに、底惚そこぼれと、かう三様みとほり有つて、見惚みぼれと云ふと、些ちよと見たところみで惚ぼ込んで了しまふので、これは十五六あかえりの赤襟盛あかえりに在る事で、唯奇麗事までありさへすれば可まいのですから、全まるで酸すいも甘あまいもあつた者ものぢやないのです。それから、十七八はたちから二十はそこそこのところは、少し解とつて来て、生意氣あんまに成りますから、顔かほの好よいのや、扮装なりの奇おつなのなんぞには余あまり迷まひません。氣惚きぼれと云つて、様子が好よいとか、氣合きあが嬉うれいとか、何とか、そんなと

ころに目を着けるので御座いますね。ですけれど、未だ未だやつぱり浮気なので、この人も好いが、又あの人も万更でなかつたりなんぞして、究竟お肚の中から惚れると云ふのぢやないのです。何でも二十三四からに成らなくては、心底から惚れると云ふ事は無いさうで。それからが本当の味が出るのだとか申しますが、そんなものかも知れませんよ。この齡に成れば、曲りなりにも自分の了簡も据り、世の中の事も解つてゐると云つたやうな勘定ですから、いくら洒落氣の奴でも、さうさう上調子に遣つちやゐられるものぢやありません。其処は何と無く深厚として来るのが人情ですわ。かうなれば、貴方、十人が九人までは滅多に気が移るの、心が変わると云ふやうな事は有りは致しません。あの『赤い切掛島田の中』と云ふ唄の文句の通、惚れた、好いたと云つても、若い内はどうしたつて心が一人前

に成つてゐないのですから、やつぱりそれだけで、為方の無い  
ものです。と言つて、お婆さんに成つてから、やいのやいの言  
れた日には、殿方は御難ですね」

お静は一笑してコップを挙げぬ。貫一は連に頷きて、

「誠に面白かつた。見惚みぼれに気惚とに底惚か。齡としに在ると云ふのは、  
これは大きにさうだ。齡に在る！ 確に在るやうだ！」

「大相感心なすつてゐらつしやるぢや御座いませんか」

「大きに感心した」

「ぢやきつと胸あたに中る事あんがお有なさるので御座いますね」

「ははははははは。何な為ぜ」

「でも感心あそばし方ただが凡で御座いませんもの」

「ははははははは。愈いよよ面白い」

「あら、さうなので御座いますか」

「はははははは。さうなのとはどうなの？」

「まあ、さうなのですね」

彼は故にことさら瞪みはれる眼まなこを凝こらして、貫一の酔よひて赤く、笑ひて綻ほころべ  
る面おもての上に、或者もとを索もとむらんやうに打矚うちまもれり。

「さうだつたらどうかね。はははははは」

「あら、それぢや愈いよいよよさうなので御座いますか！」

「はははははははははは」

「可かけませんよ、笑つてばかりゐらしたつて」

「はははははははは」

### 第三章

惜さくもなき命さからふは有あり候ふものにて、はそれや其なぬかより七あひなり日に相成さから候ふへ

ども、猶日毎なほひごとに心地くるし苦く相成候やうに覚え候のみにて、今以つ

て此世このよを去らず候へば、未練の程の御つおんもらせも然さぞかしと、

口惜くちをしくも御恥おんはづかしく存上ぞんじ参らせ候。御前様おんまへさまには追々おひおひ暑あつさに向ひ候へ

ば、いつも夏まけなされさにて御悩なされさみ被成候事ふこととて、此頃このごろは如何いかに御暮おんくら

し被遊あそば候やと、一入ひとしほ御案おんあんじ申上まをし参らせ候。

私事わたくしこと人々の手前これありさも有之候故ふゆゑ、儀しるしばかりに医者みなうちすにも掛り候へ

ども、もとより薬などは飲みみも致なさず、皆打捨まをして申候まをし。御存おんぞんじ

このわづらひの此疾は決して書物の中には載せて在るまじく存候を、医者いしやは

訳無くヒステリイひステリイと申候。是もヒステリイひステリイと申候外は無なきかは

不存申候へども、自分には広たぐひき世間に比無ひなき病びやうの外の病とも思

居り候ものを、さやうに有触あれたる名を附つけられ候は、身に取

りて誠まことに誠まことに無念むねんに御座候。

昼うちの中つむりは頭あたま重おもく、胸閉きつぢ、気疲かつか劇げく、何を致候も大儀たいぎにて、別わ

けて人に会ひ候が慙く、誰にも一切口を利き不申、唯独り引籠り居り候て、空く時の経ち候中に、此命の絶えず些づつ弱り候て、最期に近く相成候が自から知れ候やうにも覚え申候。夜に入り候ては又気分変り、胸の内俄に沍々と相成、なかなか眠り居り候空は無之、かかる折に人は如何やうの事を考へ候ものと思召被成候や、又其人私に候はば何と可有之候や、今更申上候迄にも御座候はねば、何卒宜く御判じ被遊度、夜一夜其事のみ思続け候て、毎夜寝もせず明しまるらせ候。

さりながら、何程思続け候とても、水を覓めて逾よ焔に燃かれ候に等き苦艱の募り候のみにて、いつ此責を免るるともなく存へ候は、孱弱き女の身には余に余に難忍き事に御座候。猶々此のやうの苦き思を致候て、惜むに足らぬ命の早く形付き不申るやうにも候はば、いつそ自害致候てなりと、潔く相果て候が、

はるかまし ぞんじつ さふら  
 迥に愈と存付き候へば、万一の場合には、然やうの事にも可致いたすべく  
 と、覚悟極めまゐらせ候。

さまざまに諦め申候へども、此の一事は迎とても思絶ち難く候へ

わたくしあひは さふらふまで

ば、私相果て候迄には是非々々一度、如何に致候ても推おして

おんめ

まをすべく

御目もじ相願ひ可申と、此頃は唯其事のみ一心に考居り申候。  
ただそのこと かんがへをまをしさふらふ

昔より信仰厚き人達は、現うつつに神仏の御姿をも拜をがみ候やうに申候

へば、私とても此の一念の力ならば、決して愜かなはぬ願にも無御座

ぞんじまゐ

と存参らせ候。

(三) の二

昨日さくじつは見舞がてらに本宅の御母様参られ候。是これは一つは唯継事ただつゞこと

近頃不機嫌ふきげんにて、とかく内を外に遊びあるき居り候処よのふらふところ、両三日

前の新聞に善からぬ噂出で候より、心配の余様子見に参られ候次第にて、其事に就き私へ懇々の意見にて、唯継の放蕩致候

は、畢竟内のおもしろからぬ故と、日頃の事一々誰が告げ候に

や、可恥き迄に皆知れ候て、此後は何分心を用ゐくれ候やうに

と被申候。私事其節一思ひに不法の事を申掛け、愛想を尽さ

れ候やうに致し、離縁の沙汰にも相成候はば、誠に此上無き幸

と存付き候へども、此姑と申候人は、評判の心掛善き御方に

て、殊に私をば娘のやうに思ひ、日頃の厚き情は海山にも喩へ

難きほどに候へば、なかなか辞を返し候段にては無之、心弱し

とは思ひながら、涙の零れ候ばかりにて、無抛身の不束をも

詫び申候次第に御座候。

此命御前様に捨て候ものに無御座候はば、外には此人の為に

捨て可申と存候。此の御方を母とし、御前様を夫と致候て暮し

候事も相叶かなひ候はば、私は土間に寐いね、蓆むしろを絡まとひ候ても、其樂そのたのしみは然さぞやと、常に及およばぬ事を恋こひしく思居しりまゐらせ候。私事相果おんかたひとりて候はば、他人にて真まことに悲あはれみくれば、此世に此の御方一人に御座あるべく、第一然さやうの人を欺なぎ、然やうの情なさけを余所よそに致いたしさふらふ候は、如何いかなる罰を受け候事かと、悲あはれしく存候に、はや浅あましき死しにやう様は知れたる事に候へば、外に私の願さほの障あひなりまをさずとも相成不申やと、始終心に懸まをり居まをり申候。

思へば、人の申候ほど死ぬる事は可おそろしきものしあはせに無御座候。私

は今が今このまま此儘ただあとに息引取り候はば、何よりの仕合しあはせと存参ぞんじまらせ候。

唯後ただあとに遺のこり候親達の歎なげを思ひ、又我身生れ効がひも無く此世の縁薄

く、かやうに今在る形も直ちに消えて、此筆このふで、此硯このすずり、此指環このあかり、此燈

も此居宅このすまひも、此夜も此夏も、此の蚊の声も、四圍あたりの者は皆永く

残り候に、私ひと独なり亡なきものに相成候て、人には草花の枯れたる

ほどにも思はれ候はぬはかな儂さなどを考へ候へば、返す返す情無く  
相成候て、心ならぬ未練も出いで申候まをしきふらふ。



底本：「金色夜叉」新潮文庫、新潮社

1969（昭和 44）年 11 月 10 日第 1 刷発行

1998（平成 10）年 1 月 15 日第 39 刷発行

入力：柴田卓治

校正：かとうかおり

※「□」は底本が用いた、伏せ字用の記号です。底本では「□」は、縦長のものが使われています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、「市《いち》ヶ|谷《や》」「児《ちご》ヶ|淵《ふち》」「竜《りゆう》ヶ|鼻《はな》」は小振りに、「一ヶ年分」は大振りに、つくっています。

2000 年 2 月 23 日公開

2005 年 9 月 29 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。